日本大辭典

言泉

ふ——を

書名發錄　第六五三三七號

ひろをり 廣折【名】安藝・長門二國より産出する紙。竪一尺六分、横一尺六寸ほどのもの。

ひわ 鶸【名】一【動】『鷏の字の原意は、雜の一種、鶸(ヒワ)なるを、我國にては、ひわひわと弱き鳥の意に取りなして、古來、この鳥の名に充用し來れり』燕雀類に屬する鳥。雀よりやや小く、全身黄綠色を呈し、頭と翅とは黑く、顏に白色・眉狀の斑あり、腰と腹とは黄色なり。秋季、我國に多數渡來し、肉味美なるより、霞網にて捕獲せらる。一種の紅(ク)鷏・川原(カハラ)鷏・蓼(タデ)鷏などに對して、普通のを眞(マ)鷏又は唐(カラ)鷏といふ。好みて稗を食ふ。「金雀・金翅雀」二ひわいろ(鷏色)の略。

ひ-わい 鄙猥・卑猥【名】いやしく猥(みだ)なること。みだりがましきこと。下卑(ゲビ)たること。

ひわ-いろ 鶸色【名】鶸の羽毛の色に似たる染色、卽ち萌黄(モエギ)の、一層黄ばみて、冴えたるもの。ひわ。

ひ-わかし ひ若し【形一】『ひはひわし(ひ弱し)のひと同じきか』いかにも若し。わかわかし。「古語」榮花「あはれに、らうたき聲どもの、ひわかく、ほそぼそと、美しげに」鶯宿合戰「ひわかき鳥ども、著も習はぬ具足の綿上(カミ)に」

ひわがのこ 鶸鹿子【名】鶸色の鹿子絞。壽の門松「淺黄鹿子・鶸鹿子・紫鹿子」

ひわさ 日和佐【名】〔地〕阿波國海部(カイフ)郡にある町。德島市より十五里餘。海に臨む。郡役所及び四國靈場二十三番の札所なる藥王寺あり。

ひわし-の-みこと 日鷲命【名】あめのひわしのみこと(天日鷲命)に同じ。「じ。

ひ-わたし 火渡【名】ひまはし(火廻)に同

ひ-わたり 火渡【名】修驗(シュゲン)者などの、祈禱のためなどに、烈火の上を踏みわたること、又その術。

ひわ-ちや 鶸茶【名】次條の略。

ひわちや-いろ 鶸茶色【名】茶色がかりたる鶸色。黄ばみの强き茶色。ひわちや。

ひわちや-りめん 鶸茶縮緬【名】鶸茶色の縮緬。婦女禁制「紫の板じめの無垢(クケ)に、鶸茶縮緬のしごき」

ひわづ 纖弱【貌】『ひはつとも書けど、よわし(弱し)と緣ある語なるべければ、わと定む』ひわやかに同じ。「古語」源氏「いとささやかなる人の、常の御惱にや、衰へ、ひわづにて」

ひわづ-もの 纖弱者【句】ひわづなる人。賀古教信七箴「殊に、初(ウ)の子、ひわづ者」

ひわぼそ 纖弱細【貌】ひわやかに細きさま。しなやか。「古語」記「ひわぼそ、たわや腕をまかむとは」

びわぼん【名】びやぼんの轉訛。

ひわ-やか 纖弱【貌】『ひはやかとも書けど、よわし(弱し)と緣ある語なるべければ、わと定む』かよわきさま。細くたをやかなるさま。ひわづ。「古語」榮花「宮、いみじう、ひわやかにめでたうて」

ひ-わり 日割【名】給金・課目などを、日數に割りあてて分つこと。

ひわり-かんぢやう 日割勘定【名】日割にてする勘定。

ひ-わりご 檜破子【名】檜物(ヒモノ)にて造りたる破子。「古語」實方集「ひわりごの蓋(フタ)に書きておこせける」「く。

ひ-わる 干割る【動下二自】かわきて裂く。

ひ-わる 日割る【動下二自】『ひはひび(皹)の義』ひび生ず。割目(ワレ)生ず。「古語」源氏「柱のひわれたるはざまに、笋の先しておし入れたまふ」「れたる處。

ひ-われ 干割【名】ひわること、又ひわれ日割【名】一柱又は木材などの、日光のために乾燥して、縱に裂くこと。二樹木が、晝夜、溫熱の變化著しきにより、樹幹の內外兩部の膨脹相伴はざるために、縱に裂け割ること。晩冬より春季にかけて、この被害多し。「われ。

ひわれ-め 干割目【名】干割れたる所。

ひ-ね 非違【名】一法則にたがふこと。非法。二けびゐし(檢非違使)の略。「古語」榮花「非違の別當」

ひ-ね 被位【名】〔佛〕『ひ(被)は單(ヒトヘ)の敷物の義』僧堂にて大衆の坐禪する座席。

ひねきよ 脾胃虛【名】小兒の胃病。當世虎の卷「わけて賴むは、この子の事。あのおまんまが過ぎいすと、脾胃虛とやらをしいすとやら」膝栗毛「たった一人の子寶は、脾胃虛して、骨ばかりに痩せこける」

ひねる 冲る【動四自】ひひる(冲る)に同じ。字鏡集「冲、ヒヒル・ヒキル」

びゑん 美園【名】草木のうつくしく生えてある園。

ひ-を 緋緒【名】緋色の緒。

ひ-を 氷魚・鰀魚【名】〔動〕小鮎(ユ)の、小くして、二三寸ほどなるもの。色白く、琵琶湖にて生長す。京都附近及び近江國大津にて、煮(ニ)として賣る。萬葉「わがせこがたふさぎにするつぶれ石の吉野の山に氷魚ぞさがれる」字治「このひをの、ことのほかに少かりければ」氷魚の使【句】古、九月より十二月まで、山城國宇治と近江國田上(タナカミ)とより氷魚を取りて、朝廷に獻りし使者。

ひを【名】しなもの(品物)を云ふ。「出雲國松江の方言」

ひを-ぐくり 緋緒括【名】緋色の緒にて、裾を括ること。「古語」著聞「ひをぐくりの直垂(ヒタタレ)・袴などもありけり」平家「ひをぐくりの袴、絲葛(イトカヅラ)の直垂、立烏帽子にて」

ひを-くにこ 日尾邦子【名】〔人〕日尾荊山の妻。和歌を荊山に學びて、その堂に升り、貞淑にして夫を助け、令名あり。明治十八年歿す。

ひを-け 火桶【名】木(多くは桐)を刳りて圓く造りたる火鉢。「古語」枕「冬は、火桶に、やをら立つる火箸の音も」

ひを-けいざん 日尾荊山【名】〔人〕儒者。名は璵。字は德光、幼名は多聞(タモン)後、宗右衞門と改む。武藏國秩父(チチブ)郡日尾村の人。江戸に住す。博覽・宏識にして、その學一家を主とせず、廣く考證辨析し、專ら實踐を先にし、又、國學に精し。安政六年歿す。年七十一。

ひ-をどし 緋縅・火縅・氷魚縅【名】鎧の縅の一。茜(アカ)にて紅色に染めたる革を用ひたるもの。これと色の同じき絲を用ひたるは、別に絲緋縅(イトヒ)の名あり。くれなゐをどし。平家「伊勢武者はみなひをどしの鎧著て宇治の網代(アジロ)にかかりけるかな」

ひをどし-てふ 緋縅蝶・鰀蝶【名】〔動〕鱗翅類に屬する昆蟲。體は長さ約七分、翅は、開けば一寸五六分に達し、表面黄赤色にして美しく、前翅に大小七箇、後翅には、黑色なる一箇の大斑紋あり。春より秋にかけて活潑に飛ぶ。幼蟲は、黑褐色にして、背に白線二條あり、且つ長き黑色の棘を有し、榎の葉を食害す。たてはてふ。

ひ-をどり 火踊【名】三河國南設樂(シタラ)郡東鄉村にて、每年七月十六日の夜、同村千人塚に於て行ふ祭事。五六十名の壯者、向鉢卷法被(ハッピ)にて、垢離(コリ)を取り、松明に點火して擔ぎ、鉦・太鼓・笛などに合はせ、塚を匝りて踊る。塚は、天正三年長篠の役に陣歿せる武田勢を葬る所と稱す。

ひを-の-やま 標山【名】〈うのやま(標山)に同じ。

ひを-むし 蛾【名】〔動〕一かげろふ(蜉蝣)に同じ。〔古語〕和名「蛾、比乎牟之。朝生暮死蟲名也」二ひさりむし(火取蟲)に同じ。〔蜚(但し和字)〕

びをん 微溫【名】一なまぬるきこと。二徹底せぬこと。にえきらぬこと。因循。

びをんたう 微溫湯【名】なまぬるき湯。ぬるまゆ。ぬるゆ。

ひをり 引折【名】『眞手番(マテツ)の日には、射手が褐(カチ)の尻を、袴より前の方に引き折りて挾むことあるより、引(ヒキ)折を略していへるなりとも、前日の荒手番(アラテバン)に試みたる所を、翌日折返して行ふによりて、日折の義にいふとも、又、當日は長き柵(ソ)を結ひて行ふによりて、引柵又は標柵(ソヒヤ)の義にいふともいふ。**ひのやま**(標山)參照』古、五月五日、左近衞の舍人(トネリ)、又その翌日に、右近衞の舍人が、大內の馬場にて、眞手番を行ひしこと、又その日。古今「右近の馬場(ババ)のひをりの日」

ふ

【發音】■は行第三の音。子音fが母音uに結び附きて發す。fは、氣息の咽喉より鼻腔へ通ずる路を閉ぢ、聲帶の振動を帶びざる氣息を、上下兩脣の間なる小間隙より、口腔外に送り出して發する音にて、摩擦音に屬す。又、發音の位置よりいへば、脣音(又、兩脣音)の一にて、歐洲諸國の語のf音が、上齒と下脣との間より生ずるものと混同せざるを要す。濁音のぶは、子音bが、又、半濁音(實は清音)のぷは、子音pが、それぞれ母音uに結び附きて發するものにて、その發音の位置・方法及びふとの關係につきては、はの條下に說ける所を見よ。■は行音の子音は、上古はpなりしものが、fに變り、近古以後、更にhに變りしに、ただふの場合の子音のみ、fのままに留まりたるものにて、その理は、母音uを發する時の開口の形狀に影響せられてなり。■長音は、ふうふうふうと書くとふーふーふーと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。■ふが、一語の中にて、他の音の直後に續く時は、通例、相合して、長音の發音をなすこと、うが他の音の直後に續く場合と相同じ。例へば、ささふ(支ふ)・たふとし(尊し)・くふ(食ふ)・ゆふべ(夕)・そふふ(揃ふ)・こふ(劫)・いふ(言ふ)・しふねん(執念)・けふ(今日)・てふ(蝶)・サソオ・トオトシ・クウ・ユウベ・ソロオ・コオ・ユウ・シュウネン・キョオ・チョオと發音する類。一語の中ならざる場合にも、上記の例に準じて、きりふ(桐生)・しばふ(芝生)・そのふ(園生)・うすべふ(薄田鳥斑)をキリユウ・シボオ・ソノオ・ウスビョオと發音する類あり。又、ふが四段活用の動詞の語尾なる場合には、口語にありては、ふをウと發音し、その直前の音と分れて、二音節をなす。例へば、かふ(買ふ)・すまふ(住ふ)・おもふ(思ふ)・そろふ(揃ふ)をカウ・スマウ・オモウ・ソロウと發音する類。又、ふが上二段活用又は下二段活用の動詞の語尾なる場合に、ふをュと發音し、その前の音と音節を分つことあり。例へば、しふ(强ふ)・もちふ(用ふ)・かかふ(抱ふ)・たふ(堪ふ)をシュ・モチュ・カカュ・タュと發音する類。又、ふが動詞の語尾ならざる場合の中、そのふをオと發音する三四の場合あり。例へば、あふぐ(仰ぐ・扇ぐ)・あふり(煽泥)・あふぶ(炙)・たふす(倒す)をアオグ・アオリ・アオイ・タオスと發音する類。■山陰道と北陸道との一部に於ては、ひをふの如く發音す。例へば、ひとり(一人)をふとり、ひっぱる(引張る)をふっぱるといふ類。

【字源】平假名ふは漢字「不」(吳音フ)の草體、變體平假名ゝは「布」(吳音フ)の草體、ぬは「婦」(漢・吳音共にフ)の草體より出で、片假名フは「不」の略體、又、萬葉假名としては、清音に、前記「不」・「布」・「婦」・「夫」の外、「否」・「普」・「市」・「輔」・「敷」・「府」・「符」・「俯」・「父」・「扶」・「赴」・「負」・「浮」・「福」・「副」・「富」等、字音に據れるもの、「經」・「歷」・「乾」・「生」等、訓を取れるものあり、濁音に、「夫」・「扶」・「步」・「父」・「務」・「鷲」・「矛」・「服」・「部」・「文」等、字音に據れるもの、「蜂音」の如く、蜂の飛ぶ時の羽音がフと聞ゆるより用ひたるもの等あり。而して、字音を取りて、清音の萬葉假名に用ひたる諸字の、支那の原音に於て、何れも、頭音にpを帶びたるは、ふの古音がpuなりし傍證とするに足るものなり。

ふ 斑【名】まだら(斑)に同じ。

ふ 節符【名】『ふし(節)の略』敷物などの編目(アミ)。ふし。【古語】「蒼葉「まをごものふのみ近くてあはなへば沖つまがもの嘆ぞあがする」袖中抄「陸奥(ムツ)の十ふの菅ども七ふには君をしなして三ふにわれ寢ん」

ふ 火【名】ひ(火)に同じ。【古語】「蒸火

ふ 夫【名】■配偶者たる男子。をとこ。■男子。をとこ。

ふ 扶【名】親王家の職員の一。家令の下にありて、家務を掌るもの。

ふ 麩【名】■小麥粉より、澱粉と滓とを洗ひ去り、麩質のみの殘るやうにして製したる食品。滋養分に富み、精進料理に必要なる材料にして、その生(ナマ)なるを生麩といひ、釜に入れて燒きたるを燒麩といふ。■やきふ(燒麩)に同じ。

ふ 府【名】■物ををさめおく所。くら。■事物のあつまる處。「衆怨の府となる」■議政の機關。つかさ。役所。太平記「將軍の御勢(ゼイ)八十萬騎、伊豆の府に居餘りて」■支那にて、唐代より清代に亙りて行はれし行政區劃の一。秦代の郡より變ぜしものにて、時代によりて沿革あれども、州又は縣を統ぶるを常としたり。■我國の現制度に於ける地方行政區劃の一。縣と共に地方自治體の最上級に位し、又、縣と同じく郡及び市を以て組織せらる。東京府・京都府・大阪府の三つあり。■こふ(國府)に同じ。【古語】太平記「無木(カセヤ)の浦より越前の府へ歸りたまふ」■このえふ(近衞府)の略。著聞「府の隨身二人」

府の內取(ウチドリ)【句】王朝時代に、相撲節會(セチヱ)の數日前より、左右近衞府にて、各相撲所を開き、その方の相撲人をして、相撲を試練せしこと。

府の沙汰人(サタニン)【句】ちやうつう(廳頭)の異稱。

ふ 符【名】■しるしの札。わりふ。■古、主務又は監督官廳より、その下級官廳に下しし公文、又その文體。■神・佛の守護札。まもりふだ。小島の口すさみ「瘧病(ワラハ)にさへ煩ひて、……、年老ひたる大德など語らひて、さるべき符作り、加持などせしかど」■しあはせ。運(ウン)。「肥前國の方言」「ふが善し」「ふが惡し」

ふ 腑【名】■內臟の一部。膽・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦の六を六腑といひ、五臟・六腑又は臟腑と連稱す。【漢方醫の語】■こころ。心裏。

腑が脫(ヌ)く【句】腑脫(ヌケ)なり。おろかなり。醒睡笑「腑のぬけたる人に、海老を振舞ひけるが」

腑に落つ【句】會得(エ)す。理會せらる。

ふ 副【名】すけ(次官)■を見よ。

ふ 普【名】【地】ぶりしや(普魯西亞)の略。

ふ 譜【名】■物を、秩序を正して記し集めたるもの。「印譜」■同じ種類の物事を順序を立てて書き並べたる文體。「百蟲の譜」■けいづ(系圖)に同じ。■音樂の曲節の順序を符號にて記したるもの。香譜。曲譜。樂譜。源氏「琴の譜二卷」

ふ 封【名】ふこ(封戶)に同じ。【古語】榮花「同じく僧供養させたまひて、御寺の封など加へさせたまひて」

ふ 步【名】『ふひやう(步兵)の略』■將棋の駒の一。縱に一格づつ進むことを得るもの。戰陣の際の步兵に擬し、成れば、金將となる。步兵(フヒヤウ)。兵(ヒヤウ)。■【文】ぬん(ぬきやく(韻脚)に同じ。

步の無い象棋は貧(ヒン)象棋【句】■步も、亦その職分ありて、大切なるものなること。【諺語】■いかに些細なる物にても、それぞれ存在の價値はあるものなる譬。【諺語】

步の餌食(エジキ)【句】「桂馬(ケイマ)の高上、步の餌食」を見よ。

ふ 賦【名】■みつぎもの。稅。■【文】支那の詩の六義(リク)の一。所感を、そのまま直敍せるもの。■【文】漢文の一體。古詩の遺體にして、對(ツイ)を取り、韻を踏むもの。漢代以後行はる。■【文】俳人の、漢文の賦に倣ひて作りし文體。或事

物に關し、故事・逸話などを取り集めて敍しゆくもの。韻を踏むことなし。膝栗毛「予、嘗て旅の賦を作る。その略に云ふ」

ふ 負【名】㊀古、官吏の考課にて、贓銅(ゾウ)などの罪名を負ひしこと。㊁【數】『英 Negative』**ふがう(負號)**又は**ふすう(負數)**の略。(正に對して)

ふ 傅【名】『附と音相通じ、その保護の下にある人を、道義に附かしむる義』㊀かしづき。もりやく。㊁東宮の職員の一。皇太子の輔導を掌りしもの。平家「皇子、東宮に立たせたまふ。傅には小松内大臣」

ふ 賻【名】ふぎ(帛儀)に同じ。

ふ 訃【名】ふいん(計音)に同じ。

ふ 姉【名】㊀配偶者たる女子。つま。妻(サイ)。㊁女子。をんな。

ふ 巫【名】みこ(巫)に同じ。

ふ 秤【名】〔植〕稻・麥など、禾本科植物の小穗に於て、鱗片狀を成して、各花を抱ける、内外二箇の小苞。

ふ 籣【名】きうしやう(九章)を見よ。

ふ 二【數】ふたつ(二つ)の略。(數へ擧ぐる場合にいふ)「一(ヒ)・二(フ)・三(ミ)」

ふ 經・歷【動下二自】㊀**すぐ(過ぐ)**㊁㊂に同じ。萬葉「白浪の濱松が枝(エ)のたむけ草幾代までにか年の經(ヘ)ぬらむ」㊁その手續濟む。㊂嘗て、その位置・境遇に在りたり。經歷す。

ふ 綜【動下二他】機の經(テ)絲を整へ作りて、機に掛けうるやうにす。へる。元眞集「青柳の絲によりてぞ年をふる浮世そむける跡もたちける」

ふ【感】ふんに同じ。和合人「ふ、隱しなさんなといふ事よ」

ふ 不【接頭】㊀下の語の意義を打ち消す意。ぶ。「不似合(ニアハ)」「不向(ムカ)」「不健全」㊁善からぬ意。劣れる意。ぶ。「不行狀」「不結果(ケックワ)」「不手際(テギハ)」

ふ 生【接尾】草木の多く生じてある處の意。「古語」「杉生(スギ)」「粟生(アハ)」「橿生(カシ)の生(フ)」「枯生(カレ)」

ぶ 分【名】板などの厚さ。「分が厚い」

ぶ 武【名】㊀をしき勢を用ふること。㊁戰の力又は術。(文に對して)徒然「おしなべて、武を好む人、多かり」㊂**ぶくわん**(武官)又は**ぶじん**(武人)の略。(文に對して)大寶令「五衞府軍團及諸帶ㇾ仗者爲ㇾ武」㊃五たび歩むだけの距離。五歩。㊄一歩の半分の長さ。

ぶ 武の舞【句】鈴・鉾などの武器を執りて舞ふ舞樂の曲。ぶぶ。(「文(ブン)の舞」に對して)

ぶ 武を接す【句】次條に同じ。

ぶ 武を繼ぐ【句】『禮記の玉藻篇に「君與ㇾ尸接ㇾ武、大夫繼ㇾ武、士中ㇾ武、徐趨皆用ㇾ是」とあり』足跡を續く。あとに續く。亞(ツ)ぐ。

ぶ 武を執る【句】武力をつかさどる。兵馬の權を總轄す。正統記「源平、久しく武をとりて仕へしかども」

ぶ 武を右にし、文を左にす【句】「文を右にし、武を左にす」を見よ。〔諺語〕

ぶ 夫【名】夫役(フヤク)の人夫。ぶまる。今昔「國の内の夫(フ)をも催して」太平記「三種の神器をば、足附けたる行器(ホカヒ)に入れて、……景繁、夫になって、これを持つ」

ぶ 部【名】物事の一方の處。部分。

ぶ 不・無【接頭】ふ(不)に同じ。「不禮」「不怜好」「無樣(ブザマ)」「無遠慮」「無沙汰」

ぶ【接尾】その狀態にある意。(上二段活用の動詞に附き變化をなす)めく。「鄙(ヒナ)ぶ」「大人(オトナ)ぶ」「荒ぶ」

ぶ 歩【助數】㊀ほ(歩)に同じ。源氏「蕨衣香(カウバシ)、……、百歩の外を多く過ぎふまで」㊁田地の面積の單位。現時のは、坪に同じく、曲尺(カネジャク)にて六尺四方、即ち三十六平方尺。大化二年、隋唐の制に倣ひて、五尺平方を歩とせしが、その後、周制によりて、六尺平方となり、大寶の制にては、又、大化の舊制に復し、和銅六年、唐制に依る尺度の改正を行ひ、六尺平方を以て歩と定む。後、又、室町時代に六尺五寸平方となり、天正の頃、六尺三寸平方となり、江戸時代に至り、再び六尺平方に復歸して今日に及ぶ。**たん(段)**㊂參照。㊂次條に同じ。

ぶ 分【助數】㊀物を十等分せる一部づつを數ふる單位。割(ワリ)。「七分・三分」㊁五分・五分」㊂物の全部を百等分せる一部づつを數ふる單位。朱の十倍。〔歩〕㊃物の長さの單位。寸の十分の一、厘の十倍。㊄昔の日方の單位。兩の四分の一、銖の六倍。㊅昔の錢高の單位。兩の四分の一、銖の四倍。㊆もん(文)を見よ。

ぶ 部【助數】一揃數册ある書籍を、一括して數ふる單位。紫式部日記「白き色紙つくりたる御草子ども、古今・後撰・拾遺抄、その部どもは、五帖に作りつつ」

ふあてるしせうたい ファアテル氏小體(獨 Vaterssches Körperchen)【名】〔醫〕觸覺神經の終端機關たる、楕圓形の輪層を成せる求心性の膜嚢。皮下の結締組織の中に多く、關節及び筋(キン)の周圍、交感神經の下腹膜等にも存す。ファアテル・パチニイ氏小體。

ふあてるーぱちにいしせうたい ファアテル・パチニイ氏小體(獨 Vater-pacini's-he Körperchen)【名】〔醫〕前條に同じ。

ぶーあい 無礙【名】ぶわい(無礙)に同じ。

ぶーあいきやう 無愛敬【名】愛敬のなきこと。ぶっきらぼう。

ぶーあいさう 無愛想【名】愛想のなきこと。すげなきこと。

ぶーあいさつ 不挨拶【名】挨拶の丁寧ならぬこと。天の網島「思ひくづをれ、うっとりと、ぶあいさつなる拆ふし」

ふあきゆりい 白紋斑光(英 Fiocula)【名】〔人〕**はくもん(白紋)**に同じ。

ぶあく 武惡【名】能(ノウ)の狂言の一。大名、冠者に命じて、武惡といふ不奉公なる下人を討たしめんとするに、冠者、あはれに思ひ、竊かに武惡を逃しやり、後、岩清水(イハシミズ)の境内にて、武惡を幽靈に裝はせて、大名を欺くといふ筋に作れるもの。

ぶーあしらひ 無あしらひ【名】あしらひの惡しきこと。不深切なる待遇。

ふあすしいずむ(英 Fascism)【名】ファスシオの本ずる主義。政治方面には、極端なる國家主義・獨裁主義を採り、經濟的には、革命的サンヂカリズムと資本主義の善良なる部分とを採り、一言を以ていへば、國家サンヂカリズムともいふべきもの。

ふあすしお(伊 Fascio)【名】『結束の義とも、羅馬帝國時代に、征討の將軍が、陳頭に押し立つるを常とせし、飾杖 Fasci より出づともいふ』歐洲大戰後、伊太利が聯合軍に參加して拂ひたる多大の犧牲に對する報償の僅少なりしを、西曆一九一九年、元社會主義者なりしムッソリイニ(Mussolini)の、ミラノ(Milano)市に組織せし團體。團員の數增加するに及び、軍隊を訓練し、遂に一九二一年羅馬に進軍し、政權を掌握す。團旗として黑旗を用ひ、團員悉く黑襯衣(シャツ)を著用せしかば、黑襯衣組とも稱せらる。

ふあすしすと(英 Fascist)【名】ファスシイズムを奉ずる人。

ふーあたり 不當【名】興行物などの、人氣の集らぬこと。風來六六部集「蒼擧樹の辨」「開帳が不當で、難儀にも及ぶならば」

**ぶーあつ 分厚【名】分(ブ)の厚きこと。厚さの多きこと。

ふーあひ 不合・不聞【名】氣の合はぬこと。仲の善からぬこと。相和合せざること。若風俗「連れ添ふ汝が、母と不合なるによって」本朝櫻陰比事「忩比(イソガ)なる方、二人御座候ふが、この四五年、不聞に罷成り」

ぶーあひ 歩合【名】㊀幾つかに分てる割合を、小數にて示せるもの。何割(ワリ)・何分(ブ)等の如く數ふるもの。ぶわり。㊁利益又は價格の何割何分かに當る手數料。

ぶあひーざん 歩合算【名】〔數〕『英 Calculation of percentage』歩合に關する算法。百分算。

ぶあひーだか 歩合高【名】〔數〕元高に對する歩合の程度、即ち元高と歩合との相乘積。「合」に同じ。

ふーあん 不安【名】心の安らかならざること。安心ならぬこと。

ふあん(英 Fan)【名】運動競技又は活動

寫眞・ラジオなどを、熱狂的に見物・聽取する人。

ふ-あん 撫安【名】■撫でおさふること。■人民を撫で愛して治むること。

ふ-あんしん 不安心【名】安心せられぬこと。心配。「と。落ちつかぬこと。

ふ-あんてい 不安定【名】安定せざること。不安定の坐(スワ)【句】〔理〕次條に同じ。(多くは物體に就きていふ)

不安定の釣合【句】〔理〕『英 Unstable equilibrium』その釣合の狀態に少しく變化を與ふれば、その變化は、次第に進行して、おのづから初の狀態より遠ざかりゆく釣合。例へば、錐體を倒立せる場合などの類。

ふ-あんない 不案内【名】案内を知らぬこと。樣子に暗きこと。不知案内。

ぶ-あんない 不案内・無案内【名】前條に同じ。甲陽軍鑑「物よみ・坊主のごとくにて、……武邊無案内なり」「ご■を見よ。

ふあんふある (佛 Fanfare)【名】ごらんぺ

ふあらっど (英 Farad)【助數】〔理〕『英國の化學者ファラデェ(M. Faraday)の名に因めるもの』電氣容量の單位。一クウロンの電量によりて、その電位が一ボルトだけ高まる時を、一ファラッドと定む。

ふあらでえ-の-ていりつ ファラデエの定律(英 Faraday's laws)【句】〔理〕電氣分解に關する定律、即ち第一、電流が電解物を分解して生ずるイオンの量は、これを通過せし電氣の總量に比例し、第二、等しき電氣量によりて分解せらるる種種のイオンの量は、それぞれの化學當量に比例すといふもの。ふあらでえの法則。

ふあらでえ-の-はふそく ファラデエの法則【句】〔理〕前條に同じ。

ふい【名】空しくなること。徒らになりて終はること。成就せぬこと。書餅。〔俚語〕

ふ-い 不意【名】思ひよらぬこと。思ひがけぬこと。突然。

不意を打つ【句】相手の思ひがけぬに、乘じて事を仕掛く。和合人「不意を打たれて、……、突き倒され」不意を食(ク)ふ【句】思ひがけなく、事を仕掛けらる。不意打(ウチ)せらる。不意を食(ク)ふ【句】前條に同じ。

ふ-い 布衣【名】■庶人の服。■官位なき人。ただびと。四夫。「布衣の士(シ)」

布衣の極【句】布衣の身としては、この上なき榮譽を受くること。「の士。

布衣の士【句】貧賤なる士。布衣韋帶

布衣の友【句】布衣の交をなす友。

布衣の交【句】平民的のまじはり。地位などの關係より離れての交際。

布衣・韋帶(イタ)の士【句】「布衣の士」に同じ。

布衣・韋佩(イタ)の士【句】前條に同じ。

ふ-い 巫醫【名】巫(フキ)と醫者と。

ふ-い 斧扆・斧依・斧展・斧依【名】支那にて、古、天子の諸侯を引見する時、南面して、背後に、柄の無き斧數箇をふがきて立てたる、高さ八尺の赤地の屏風。斧は斧鉞にて、柄の無きは、好んで、これを用ふることなき義を示すといふ。扆(イ)。

ふ-い 貢扆【名】■扆を貢ふこと。い(扆)參照。

ぶ-い (英 Buoy)【名】浮子(キ)救助袋。

ぶ-い 無意【名】むい(無意)に同じ。

ぶ-い 無異【名】かはりたる事のなきこと。平安。無事。增鏡「荒きえびすどもの心にも、いと忝き事と、なごみてぶいなるべく奏しけり」

ぶ-い 舞衣【名】舞を舞ふ時に著る衣裳。まひごろも。「を見よ。

ふいいと 吠(英 Foot)【助數】ふうと(吠)

ふいいるど (英 Yield)【名】野原・田畠・廣場。「くること。

ふ-いう 孚祐【名】ねんごろに惠みたすこと。やしなひたすくること。「ふういく。

ふ-いう 蜉蝣【名】【動】■かげろふ(蜉蝣)■に同じ。蕪村「蜉蝣一つ障子に羽打つ師走かな」■人生のはかなき譬。

蜉蝣の一期(イチ)【句】人の一生のはかなき譬。ぶよのいっとき。〔諺語〕

蜉蝣の一時【句】「仙人の千年、蜉蝣の一時」を見よ。

ふ-いう 浮游【名】■うかびおよぐこと。■所定めず浮れあるくこと。ここ・かしこ遊びあるくこと。悠遊。平家「本朝歸臣の外相(ヲサ)を以て、異國浮游の來客に見えん事」

ふ-いう 富有【名】次條に同じ。庭訓往來「御領豐饒而、甲乙人令二富有一」

ふ-いう 富祐【名】ふゆう(富裕)に同じ。太平記「富祐の輩は」

ふ-いう 府有【名】府にて所有すること。

ふいう-がき 富有柿【名】〔植〕柿の一品種。原産地は美濃國にて、御所柿と共に、風味最上に位す。御所柿の變種なるべし。

ふいう-すゐらい 浮游水雷【名】〔兵〕へうりうすゐらい(漂流水雷)に同じ。

ふいう-せいぶつ 浮游生物【名】〔生〕『英 Plankton』ぷらんくとんに同じ。

ふ-いうち 不意打・不意討【名】■不意に擊つこと。襲擊。■不意に質問・請求などをすること。〔俚語〕

ふいう-ようそく 浮游雜塞【名】〔兵〕敵の艦船の通過を阻礙するため、海峽・河口等に、舟・筏等の浮體を、鎖にてとめ、鐵鎖又は綱・繩を纏結せる副防禦物。

ふい-がう 鞴【名】『ふきがは(吹革)の音便』

ふいご(鞴)に同じ。「(鞴祭)に同じ。

ふいがう-まつり 鞴祭【名】ふいごまつり

ぶ-いき 不意氣・無意氣【名】いきならぬこと。今めかぬこと、又その人。ぶこつ。不粹。野暮(ヤボ)。無意氣(キ)。

ぶいき-もの 不意氣者・無意氣者【名】不意氣なる人。無意氣(キ)者。膝栗毛「ぶいき物ばかりだね。……、丈がつんつるてんで、袖は大層(デウ)に大きい」

ふ-いく 扶育【名】たすけそだつること。やしなひたすくること。「ふういく。

ふ-いく 翼育【名】おほひそだつること。

ふ-いく 傅育【名】かしづきて育つること。もりそだつること。

ぶ-いく 撫育【名】愛し育つること。いつくしみかしづくこと。

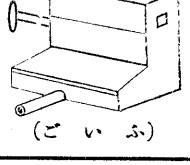
ふいく-くわん 傅育官【名】わうじふいくくわん(皇子傅育官)の略。

ふいくくわん-ちやう 傅育官長【名】わうじふいくくわんちやう(皇子傅育官長)の略。

ふ-いくさ 不軍【名】戰をなしたる事の無きこと。門出八島・貴殿達は、未だ不軍にて、この度が初ならん」

ふいく-れう 扶育料【名】〔法〕扶育するためのまかなひ料。

ふい-ご 吹子・鞴【名】『ふいがう(鞴)の訛』鍛冶(カヂ)屋にて、火力を熾ならしむるに用ふる具。密閉せる木箱の內に、毛皮を張れる塞子を施し、その把子を前後に動かして、底部の穴より空氣を爐中に送り出すやうにせる、喞筒(ポムプ)樣のもの。又、內外相通ずる孔に、內に向ひて開く瓣を取り附け、蛇腹(バラ)を伸しては、空氣をはらませおき、急にこれを縮めて、別の孔より風を出して、火中に送る洋式のものもあり。ふきがは。ふいご。



(ごいふ)

ふいご-し 吹子師・鞴師【名】鞴を製造することを職とする人。

ふいごまつり 吹子祭・鞴祭【名】陰曆十一月八日に、鍛冶屋・鑄物師など、平日鞴を用ひて業を營む者の、業を休み、鞴を淨め、注連(シメ)を飾り、守護神たる稻荷(イナリ)神に神酒・赤飯などの供物を奉り、親戚・知人を請じて、酒宴を催すこと。古、三條小鍛冶宗近、厚く稻荷神を崇信し、一刀を得るごとに、その場を淨め、鞴に神酒を供へて、神恩を感謝せしに本づく。俗に火燒(ヤキ)といふ。ふいがうまつり。

ふ-いしくわい 府醫師會【名】醫師會の一。その府內にある郡・市醫師會の全部を以て組織す。

ぶ-いち 分一【名】徳川幕府の頃、漁獵その他、商業による賣上高に對し、その何分の一と定めて、上納せしめし稅金。鯨分一・鰯分一・市場分一等の種類ありたり。

ぶいちきん 分一金・歩一金【名】徳川幕府の金座にて、金貨を鑄造するに當り、そ

の手數料として、鑄造高に應じて、幕府より下付せし金。

ぶいちぎん 分一銀・歩一銀【名】徳川幕府の銀座にて、銀貨を鑄造するに當り、その手數料として、鑄造高に應じて、幕府より下付せし金。

ふい-ちやう 吹聽【名】『風聽の字の吳音の音便かといふ』ひろく告げ知らすること。ひろう。

ふ-いつ 不乙・不一【名】『漢書の東方朔傳に「朔初上書、人主從二上方一讀レ之、止輒乙二其處一、讀三月乃盡」とあるがごとく、支那にて、書を讀みて、その止むる處を誌すを乙といふより、意の未だ盡きざる意にて、不乙といふ。又、不一は、王羲之の王右軍帖に、結尾に多くは「不具」の語を用ひ、その字體「不一」(一一せぬ意)に似たるより出でたりといふ』書翰文の結尾にしるす語。不悉。不盡。不具。不備。不宣。

ふ-いつ 不一【名】一徳行の終始一貫せざること。二**ふいつ**(不乙)に同じ。

ふ-いっち 不一致【名】一致せぬこと。

ふいーと【副】そのままにやがて。かりそめに。ちよっと。ふと。「ぽいと。

ぶいーと【貌】突然立ち去りなどするさま。

ふいーに【副】おもひがけなく。思ひもよらず。源氏「ふいに見奉りそめしも、昔のちぎりありけるにこそ」宇治「不意に事出で來(こ)ば」

ふいーふい【貌】風を受けて、輕やかに飜り、又は落ちつかず、輕く行動しなどするさま。俳諧新選(爪流)「ふいふいと日の散る野路や蔓珠沙華(マンジュ)」浮世風呂「高が一年限で、ふいふいと風まかせの奉公だものを」

ぶいーぶい【名】『次條の話の轉義』一人を罵りていふ語。〔俚語〕女殺油地獄「何さ、ぶいぶいども……奥州者の泥足食(ク)へ」二【動】**こがねむし**(黄金蟲)に同じ。

ぶいーぶい【貌】ぶうぶう(二)に同じ。浮世風呂「常にぶいぶい地口をいふ人も、點取ではいへませぬ」

ふいふいーけう 回回教【名】ふるふるけう(回回教)を見よ。

ふーいん 訃音【名】死亡のしらせ。訃報。「訃。

ふーいん 封印【名】ふういん(封印)に同じ。

ふーいん 府尹【名】ふゐん(府尹)に同じ。

ふーいん 父音【名】〔語〕『英 Consonant』母音と合すれば、子音を形成すべき聲音。例へば、ka(カ)を形成するk、そ(SO)を形成するsなどの類。子音。ふおん。

ぶーいん 無音【名】一むごん(無言)に同じ。

ふーいん 斑入【名】植物の葉又は花などの、地(ヂ)の色に、その他の色の斑の入りまじりてあること、又その物。

ふーいり 不入【名】興行場にて、入場者の數の少きこと。「るもの。

ぶーいり 歩入【名】銀位の、一割入に次ぐ。

ふいりーあすならう 斑入翌檜【名】〔植〕翌檜の一種。葉に、白斑あるもの。

ふいりーいぶきひば 斑入伊吹檜葉【名】〔植〕柏槇の一種。葉に、白斑あるもの。

ふいりーおもと 斑入萬年青【名】〔植〕萬年青の一種。葉に、白斑の入りたるもの。

ふいりーかうやまき 斑入高野槇【名】〔植〕高野槇の一種。葉に、白斑のあるもの。

ふいりーすぎ 斑入杉【名】〔植〕杉の一種。葉に、白斑の入りたるもの。

ふいりーちがひや 斑入違矢【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(やひがちりいふ)

ふいりっぴん 比律賓【名】〔地〕ひりっぴん(比律賓)に同じ。

ふいりっぴんーしよたう 比律賓諸島【名】〔地〕ひりっぴんしよたう(比律賓諸島)に同じ。

ふいりーなんてん 斑入南天【名】〔植〕なんてん(南天)三を見よ。

ふいるむ 映畫(英 Film)【名】『皮膜の義』活動寫眞の材料として撮りたる寫眞の種板を、セルロイドなどにて造れる帶狀可撓性の透明膜に燒きつけたるもの。事件の進展に連れて、少しづつ狀態の變りゆくままに、連續映寫して、長さ數千尺に達するものあり。

ふ 風【名】一ふう(風)一・二に同じ。八笑人「足下(ソク)なんぞが、親の死んだ時の事を思ひ出した位で、涙を出す風か」曾我會稽山「二人の嫁御、衣紋(エモン)、風よく著せたまへ」二【文】『詩經の關雎の序に「上以風二化下一、下以風二刺上一、主レ文而譎諫。言レ之者無レ罪、聞レ之者足レ戒。故曰レ風」とあり』支那の詩の六義(ギク)の一。主として、個人の感懷を咏じたるもの。作者も多くは、田夫・野人にて、雅と頌とに比して、當時の支那國民の思想を含む所多し。

ふ 風の松【句】まつ(松)の條下を見よ。

ふ 風を聞く【句】一様子を聞く。

ふ 風を望む【句】一様子を望見す。二評判を聞きて慕ふ。「天下その風を望む」「フウ」

ふ 符【名】ふ(符)の音便。運歩色葉集「符、「フウ」

ふ 封【名】容易に他人に開かせぬため、とぢ目にしるしをすること、又そのしるし、又そのとぢ目。ふん。

ふ 封を切る【句】封じ目を切り裂きて、中なるものを開く。八笑人「未だ封も切りませぬ文(フ)を」

ふ 封を附く【句】封のしるしを施す。宇治「櫃の蓋をおほひて、布して結びて、ふう附けて」徒然「看督長(カドヂヤウ)の負ひたる靭(ユキ)を、その家に掛けられぬれば、人出で入らず、この事絶えて後、今の世には、封を附くる事になりにけり」

ふう 楓・風香樹【名】〔植〕金縷梅(マンサク)科に屬する落葉喬木。高さ二三丈。葉は掌形にして三裂し、細鋸齒あり。楓樹(フウジユ)の似、秋季、紅色に變じて脫落す。花は單性黄褐色にして、頭狀に集まる。南支那及び臺灣に産し、材は質堅く、器具の製作に用ふ。をかつら。ふうじゆの木。

ふう【名】【動】くさかめ(椿象)に同じ。

ふう【名】『貌詞のふうの轉義』一熟き飲食物を、口にて吹きて冷すこと。〔幼兒の語〕二すみび(炭火)を云ふ。ふうふう。〔幼兒の語〕三ともしび(燈火)を云ふ。ふうふう。〔幼兒の語〕

ふう 二【數】ふ(二)の音便。(數へ擧ぐる時にいふ)「一(イチ)・二(ニ)・三(サン)」

ふう【貌】風の靜かに吹く聲、又、口にて、物を吹くさま。

ふう【感】相手の語る所を聞きて了解し、驚き、又は感動したる時などにいふ語。はあ。ふん。ふうん。和合人「この福助の靈は、……いくらだ。はい、一つが八十づつ致します。ふう、安い物だ」

ふう 封【助數】金子の包、書狀の封じたるものなどを數ふるにいふ語。「金一封」「一封の書」

ぶう 湯【名】おぶう(御ぶう)を見よ。浮世風呂「湯(ブ)が、目へ這入った」

ぶーう 舞雩【名】『論語の顏淵篇に「樊遲從遊二於舞雩之下一」とあり』古、支那にて、夏の日に、雨を天に祈りし場處。

ふう 舞雩歸詠(キエ)【句】『論語の先進篇に「暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴二乎沂一、風二乎舞雩一、詠而歸」とあるに本づく』春の日、心のどかに郊外に遊びて、歌ひ樂しむこと。

ぶう【貌】喇叭・放屁などの音。

ふうあ 風痾【名】ふうじや(風邪)に同じ。

ふうあつ 風壓【名】〔地〕『英 Wind pressure』風の壓力。風速の平方に比例し、普通、風がその方向に對して、直角に置かれたる一メエトル平方の平面上に加ふる壓力を、センチグラムの重さを單位として測定す。

ふうあつけい 風壓計【名】『獨 Winddruchmesser』風壓を計測するに用ふる器械。

ふういん 諷意【名】ほのめかしたる主意。

ふういく 胎育【名】ふいく(胞育)に同じ。

ふういん 封印【名】封じたる所に押す印。鈐印。

ふういんーつき 封印附【名】一封印を施してあるもの。二徳川時代に、兩替店にて封印したる通貨の一包。三世間に、知

れわたりたる悪者。ごくいんつき。きんばくつき。

ふういん-はき-ざい 封印破棄罪【名】〔法〕公務員が、法律の規定に依りて施したる封印又は差押の標示を破棄・損壊し、或は、其他の方法を以て侵害して、その効力を失はしむるによりて成立する犯罪。

ふういん-ぼく 封印木【名】〔植〕封印木科に屬する羊齒植物。古生代の地層より化石として産し、現時の石松(カヒカゲノ)類の祖先と見るべきもの。莖は圓柱狀にて、直立して、高さ百尺を超え、葉は細長くして尖り、下面に溝あり、莖頂に多數叢生す。

ふう-う 風雨【名】㊀かぜと、あめと。あめかぜ。㊁風まじりの雨。ふきぶり。

風雨對牀(タイシヤウ)【句】『韋應物の贈ㇾ弟詩に「余僻二郡符一去、爾爲二外事牽一、寧知風雨夜、復此對ㇾ牀眠、始話南池飲、更詠西樓篇、無下將二一會夢一、歳月坐推遷上とあるを、蘇東坡見て、「風雨對牀」の語に感じ、その弟子由に贈る詩にも、亦この語を用ひしに本づく』兄弟の、親しく相會すること。

風雨時あり【句】『漢書の鼂錯傳に「日月光、風雨時」とあり』風と雨とが、適當に吹き、また降る。五風、十雨。

ふうう-けい 風雨計【名】**せいうけい**(晴雨計)㊀に同じ。

ふうう-しん 風雨針【名】前條に同じ。

ふう-うん 風雲【名】㊀風と雲と。㊁風に散らさるる雲。風前の雲。かざぐも。㊂龍が風と雲とを得て、天に登る如く、豪傑が志を伸ぶるに好き機會。徒然「謝靈雲は、法華の筆受なりしかども、心、常に風雲の思を觀ぜしかば、慧遠(エヲン)、白蓮(ビヤクレン)の交を許さざりき」

風雲・月露【句】㊀風と雲と月と露と。㊁風前の雲と、月下の露と。㊂『隋書の李諤傳に「連篇累牘、不ㇾ出二月露之形一、積案盈箱、惟是風雲之狀」とあり』華麗・優美なる文字に富む詩文の譬。

風雲の器【句】『袁宏後漢紀に「馬援才氣智略、足二風雲之器一」とあり』風雲に乘じて、大業を遂ぐる人。

風雲の會【句】㊀『易經の文言傳に「雲從ㇾ龍、風從ㇾ虎」とあり』明主と良臣と、時を同じうすること。㊁『揚雄の答賓戲に「皆驅二風雲之會一」とあり』大功を建てて、世にあらはれ出づる好機會。「風塵(フウヂン)の會」參照。

風雲の志【句】風雲に乘じて、大業を遂げんと欲する志。

ふううん-じ 風雲兒【名】風雲に乘じて活動する男兒。

ふう-えい 諷詠【名】詩歌を、そらに諳ふること。

ふう-えふ 楓葉【名】㊀楓(カヘデ)の葉。㊁楓(カヘデ)の葉。「略。

ふうえふ-しふ 風葉集【名】〔書〕次條の勅撰集の體に倣ひて、古今の物語に見えたる歌を集めたるもの。十八卷。もと二十卷にて、歌數一千三百八十首を收めしが、今、十九・二十の兩卷を缺く。撰者未詳。元祿三年の露睡子の序と、寶永四年の野村尙房の跋とあり。

ふうえふ-わかしふ 風葉和歌集【名】〔書〕勅撰集の體に倣ひて、古今の物語に見えたる歌を集めたるもの。十八卷。もと二十卷にて、歌數一千三百八十首を收めしが、今、十九・二十の兩卷を缺く。撰者未詳。元祿三年の露睡子の序と、寶永四年の野村尙房の跋とあり。

ふう-えん 風煙【名】**たつ**(風)に同じ。

ふう-えん 風檐・風簷【名】風の吹き當る軒端。風の吹き通ふ軒。

ふう-か 富家【名】富みたる家。財産家。かねもち。ふか。

ふう-が 風雅【名】㊀〔文〕支那の詩の六義(リク)の中の風(フウ)と雅(ガ)と。㊁『文選の序に「風雅之道、粲然可ㇾ觀」とあり』詞章。文藝。㊂風趣の溫雅なること。みやび。ふうりう。典雅。風韻。風騷。

ふう-かい 風階【名】〔地〕**ふうりよくかい**(風力階)に同じ。

ふう-がい 風害【名】風災のための損害。

ふう-がい 風槪【名】**ふうかく**(風格)に同じ。

ふうかう 楓江【名】〔人〕**ふじたふうかう**(富士田楓江)を見よ。

「き。

ふう-かう 風向【名】かぜむき。かざむき。

ふう-かう 封港【名】〔法〕港を封鎖すること。港灣封鎖。**ふうさ**(封鎖)㊁參照。

ふう-かく 風格【名】ひとがら。やうす。風丰。風采。風姿。品格。風槪。風度。

ふう-がくし 卦隱【名】封の上を、別の紙にて被ひて結び附くること。

ふうがしふ 風雅集【名】〔書】**ふうがわかしふ**(風雅和歌集)の略。

ふうが-じん 風雅人【名】風雅の嗜ある人。風雅なる人。風流人。風雅者(モノ)。和合人「月にかかるる風雅人」

ふう-かぢゆう 風荷重【名】〔建〕『英 Wind load』建築物の上に加はる風壓の荷重。橋梁・家屋等の設計に當り、その地方の大風の場合に於ける風荷重を決定する必要あり。我國にては、風に曝される垂直面は、普通、一平方呎に付き、四十乃至五十ポンドとし、傾斜面は、その角度によりて變化せしむ。

ふうかてん(佛 Fricandeau の訛)【名】細かに刻みたる牛肉・豚肉などに、鷄卵及び麵包(パン)を混じ、楕圓形に丸めて、油揚にしたる西洋料理品。

ふう-がはり 風變【名】普通と變りたる姿・形、又その人、又その物。「の漢名。

ふう-かふ 風蛤【名】〔動〕**あかがへる**(赤蛙)

ぶうかぶうか-どん-どん【貌】興行物にて、人を招き寄するために行ふ樂隊の奏樂の音。〔俚語〕「ること。

ふう-かん 封緘【名】書類を封じかたむること。

ふう-かん 風寒【名】陰曆十一月の異稱。

ふう-かん 風鑑【名】風采・容貌によりて、その人となりを鑑定すること。

ふう-かん 風漢・瘋癇【名】きちがひの男。

ふう-かん 諷諫【名】遠まはしにいさむること。それとなき注告。諷規。

ふう-がん 風眼【名】〔醫〕**のうそうせいけつまくえん**(膿漏性血膜炎)に同じ。

ふう-がん 風岸【名】人となりのかどかどしく、氣骨あること。

ふうかん-はがき 封緘葉書【名】郵便葉書の一種。通信文を記載し、折り疊みて、封緘をなし、宛所名を記すやうになしたるもの。

ふうかん-はふ 風乾法【名】煮沸したる繭を、自然の通風によりて、乾燥せしむる法。乾繭器の發明以前には、專らこの法に依りしが、乾燥に長日月を要し、繭の色澤を損する等、種種の缺點あり。

ふうがもの 風雅者【名】**ふうがじん**(風雅人)に同じ。俗曲「越後獅子」「うき世をわたる風雅者」

ふう-がら 風柄【名】㊀なりふり。すがた。樣子。㊁人がら。人品。若風雲築地(ツヒヂ)の內を見れば、餘所には降らぬ時雨と眺めし主の風がら」

ふうが-わかしふ 風雅和歌集【名】〔書〕勅撰和歌集の一。二十一代集中、第十七代のもの、即ち後村上天皇の正平年中に成れるもの。二十卷。花園天皇の御撰。

ふう-き 風氣【名】㊀『漢書の律曆志に「天地風氣正、同書の地理志に「繫二水土之風氣一」とあり。風は、天候・氣象の中にて最も重大なるものなるによりていふ』氣候。風候。㊁風の吹く氣色。古事談「あな見苦しの風や……、卽刻風氣俄止」㊂**ふうじや**(風邪)に同じ。保元「春宮大夫宗能(ムネヨシ)卿は、鳥羽殿に候はれければ、風氣とて、參內せられず」㊃勝の內に、山川含二太古一風氣如ㇾ未ㇾ開」とあり』風俗と氣候と。㊄『魏書の李琰傳に「白云、猶有二關西風氣一」とあり』**ふうぞく**(風俗)に同じ。㊅『晉書の桓溫傳に「少有二豪邁風氣一」とあり』すぐれたる精神。氣象。風度。

ふう-き 風紀【名】風俗を奢侈・淫猥に流れざらしむるための紀律。

ふう-き 風鬼【名】㊀風をつかさどるといふ神。風神。風伯。太平記「風鬼は、大風を吹かせて、敵城を吹き破る」㊁〔佛〕**はちふう**(八風)に同じ。

ふう-き 諷規【名】**ふうかん**(諷諫)に同じ。

ふう-き 富貴【名】財多く、位高きこと。

富みて貴きこと。ふっき。

富貴の家をば、鬼これを睨む【句】『揚雄の解嘲に「高明之家、鬼闚二其室一」とあるに本づく』富みて驕る者は、久しくは保ちがたし。〔諺語〕太平記「さらぬだにも、富貴の家をば、鬼これを睨むといへり。…行末如何ならんずらん」

富貴の花【句】■富貴の相ある花。■

ふうきくわ(富貴花)に同じ。

富貴は浮べる雲の如し【句】「不義の富貴は浮べる雲」を見よ。

富貴は草頭の露【句】『杜甫の詩に「惜君只欲二苦死留一富貴如何草頭露」とあり』人間の富貴は、草の葉末の露のごとくはかなく頼みがたきものなり。〔諺語〕太平記「人間栄耀風前塵と白居易が作り、富貴草頭露と杜甫が作りしも、ことわりかな」

富貴は天に在り【句】『論語の顔淵篇に「子夏曰、商聞レ之矣、死生有レ命、富貴在レ天」とあり』人間の富貴は、天命なれば、人力にて強ひて求むべきにあらず。〔諺語〕

富貴は天に在り、牡丹餅(ぼたもち)は棚に在り【句】『牡丹餅云云は、棚から牡丹餅」といふ諺のあるによりて、添へていへるもの』富貴は、人力にて、如何ともするを得ず。〔諺語〕よものあか「富貴、天に在り、梯子の届く所にあらず」

富貴も淫(いん)する能はず【句】『孟子の滕文公下篇に「富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一」とあり』富貴の力は、人の欲する所なれども、大丈夫の志操は、堅実にして、決して、これがために亂さるることなし。〔諺語〕

ふうぎ 風儀【名】■『北斉書の殷孝言傳に「少警悟有二風儀一」とあり』風采と威儀と。■ならはし。風習。正統記「ありし世の東國の風儀も變りはてぬ」

ふうきかく 富貴角【名】〔地〕臺灣の最北端に突出せる、低く平かなる岬角。燈臺の設あり。

ふうきがま 富貴竈【名】便利竈の一種。銅・鐵板などにて、圓筒形に作り、上部に釜・鍋を掛けて煮炊す。ふうきかまど。

ふうきかまど 富貴竈【名】前條に同じ。

ふうぎく【名】〔植〕**ふうろさう**(風露草)に同じ。

ふうきぐさ 富貴草【名】〔植〕『次條を見よ』**ほたん**(牡丹)■の異稱。

ふうきくわ 富貴花【名】『周惇頤の愛蓮說に「牡丹、花之富貴者也」とあり』牡丹の花の異稱。

ふうきさう 富貴草【名】〔植〕**ふっきさう**「(富貴草)に同じ。

ふうきせん 風氣痌【名】〔醫〕次條の略。

ふうきせんつう 風氣痌痛【名】〔醫〕腸内に多量の瓦斯發生して、腸壁を壓迫し、腹部の膨大するによりて起る腹痛。

ふうきふ 風級【名】〔地〕**ふうりよくかいきふ**(風力階級)に同じ。

ふうきまめ 富貴豆【名】蠶豆(そらまめ)の皮をむき、砂糖にて、柔く煮たる食品。ふっきまめ。

ふうきん 風禽【名】**たこ**(凧)に同じ。

ふうきん 風琴【名】■一種の琴。■**ふうりん**(風鈴)に同じ。

ふうきん 封金【名】入れて封じたる金

ふうきんこう 封金講【名】金を預りたる者の考に任せ、金を封じ置きて取る方法の無盡講。

ふうきやう 風狂【名】きちがひ。狂氣。瘋癲。近世畸人傳、惟然(いねん)坊は、……風狂して、所定めずありく。發句も亦狂せり」

ふうきやうぶんさう 風狂文草【名】〔書〕田中友水子が、自作の狂文數十篇を集めたるもの。五卷。寶暦二年の刊行。

ふうぎよ 風魚【名】『颶風鰐魚の字面は、韓愈の潮州刺史謝上表に「颶風鰐魚、患禍不レ測」とあり、又、魚の名の風魚は、坤輿外記に「西江海産二風魚一、可二以占一風。國人晒乾、掛二于房内一、以二其身首所一向、卽爲二風起之方一」とあり』颶風と鰐魚と。一説に、一種の魚なりと。

ふうぎょ 風魚の變【句】『次條の語の意を誤解して用ひたるもの』世の中の亂るること。兵亂。日本政記「風魚之變」

ふうぎょのさい 風魚の災【句】『韓愈の送二鄭尚書一序に「嶺南帥得二其人一、則一邊盡治、不二相寇盜賊殺一、無二風魚之災一、水旱癘毒之患一」とあり』颶風の災害の意なるべしといふ。

ふうきり 封切【名】■封を切りたるばかりの物。■物事のしはじめ。浮世床「封切は價が貴き故、ずっとのあとで見る」■近松門左衛門の淨瑠璃「冥途の飛脚」の中、忠兵衛が、遊女梅川を請け出すために、受託金の封印を切る段。■新しきフイルムを活動寫眞館にて、初めて映寫すること。「樓」を見よ。

ふうきろう 富貴樓【名】**ふっきろう**(富貴樓)に同じ。

ふうきわいへい 風紀衛兵【名】軍隊の風紀を取り締る衛兵。通常は、下士を司令とし、人員は、哨所の數に應じて定め、上等兵二名、喇叭手一名を附屬せしむ。

ふうくわ 風化【名】■『詩經の序に「所下以風二化天下一而正中夫婦上也、故用二之鄉人一焉、用二之邦國一焉。風、風也。敎也、風以動之、敎以化之」とあり』敎育・政治などの力によりて、人の風儀をよく移すこと。風敎。■〔化〕『英 Efflorescence』結晶物を、永く空氣中に曝す時、その結晶水、漸次に蒸發して、表面に白色の粉末生じ、遂に一定の晶形を失ふに至る現象。洗濯曹達の如きは、この現象を呈し易し。■〔化〕『英 Efflorescence』蒸發のために、物の表面に鹽狀の華粉を殘存する現象。熱帶地の無雨季節に於ける地面などに發生す。■〔地〕『英 Weathering』岩石が、空氣中の酸素・炭素・水蒸氣などの影響によりて、その表面の次第に崩解すること。霧爛(むらん)。■生石灰を、永く空氣中に曝す時、自然に崩壞して、粉末となること。■セメントを、その龜裂・膨脹等の缺點を除く目的にて、空氣中に曝しおくこと。セメントの製造者は、樽に詰めて賣り出す前に、これを行ふ。

ふうくわ 風花【名】■風に吹かるる花。■揚愼の集に「集雲如二斑駁形一、舟人謂二之風花一」とあり』斑紋の形をなせる雲。風花雪月【句】■風と花と雪と月と。■風に吹かるる花と、雪をてらす月と。

ふうくわ 風火【名】〔佛〕四大の中の風大と火大と。

風火先づ去る【句】『往生要集の卷上に出づ』惡業(あくごう)ある人の、命絶えんとする時、身中の風と火とが先づ無くなる。葦花「臨終の折は、風火先づ去る。かるが故に、動熱(どうねつ)して、苦多かり」

ふうくわい 風懷【名】おもひ。心の中。〔俚語〕

ふうくわい 風壞【名】「風俗壞亂」の略。

ふうくわう 風光【名】■**ふうけい**(風景)■に同じ。■元槇の詩に「細膩風光我獨知」とあり』**ふうけい**(風景)■に同じ。

ふうくわう 富鑛【名】次條を見よ。

ふうくわうたい 富鑛帶【名】〔鑛〕鑛床中にて、良鑛の堆積せる部分。

ふうくわさよう 風化作用【名】**ふうくわ**(風化)■■■■に同じ。

ふうくわせきくわい 風化石灰【名】〔化〕『英 Air-slaked lime』生石灰の、空氣中より水及び炭酸瓦斯を吸收し、白色の粉末となりたるもの。成分は、水酸カルシウム・炭酸カルシウム・酸化カルシウム等。膠喰(こうじゃく)として用ふる時、固結の力弱し。**するくわせきくわい**(水化石灰)參照。「異稱。

ふうくわん 風管【名】■**ひちりき**(篳篥)の

ふうけい 風景【名】■**けいしよく**(景色)に同じ。■『晉書の劉毅傳に「能令三義士宗二其風景一」とあり』人のやうす。ひとがら。風采。

ふうけいぐわ 風景畫【名】自然の風景を描きたる繪畫。

ふうけいぐわか 風景畫家【名】主として、風景畫を描く畫家。

ふうけう 風敎【名】德を以て、自然に下民を導き敎ふること。風化。

ふうけう 楓橋【名】〔地〕支那江蘇省蘇州府の府城の西二里にある石橋。唐の張繼の楓橋夜泊の詩、卽ち「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對二愁眠一、姑蘇城外寒山寺、

夜半鐘聲到二客船一」によりて名高し。

ふうけつ 風穴【名】■『淮南子に「暮宿二風穴一」とありて、註に「風穴北方寒風、從レ地出也」と見え、述異記に「列禦寇鄭人、御レ風而行、常以二春日一歸二八荒一立秋日遊二乎風穴一。是風至、卽草木皆生、去、則草木皆落。謂二之離合風一」とあり』古、支那にて、秋の風の吹き出づといひし想像の地。■蠶種を貯藏する穴。主に山間にて、夏季冷風の吹き出づる所、又は洞穴などを利用す。人工的冷藏に比して、溫度の調節容易ならざる等の缺點あり。

ふうげつ 風月【名】■風と月と。淸風と明月と。■風に嘯き、月を眺めて樂しむこと。風流の遊。謠曲「松蟲」「風月の友に誘(サソ)はれて、春の山邊や秋の野の草葉にすだく蟲までも、聞けば、心の友ならずや」■風月を友として、詩文を作ること。十訓「風月の才に富めるのみならず、かかる心ばせども深かりけり」

風月の才【句】花鳥風月につけて、詩歌の才能。著聞「高倉院の風月の御才(ミザエ)は、昔にも恥ぢぬ御事とぞ、世の人申しける」

風月の主【句】「風月の本主」に同じ。

風月の主人【句】■『五代史の蜀の條に「歐陽彬善文辭、蜀主以レ昶、爲二嘉州太守一。彬大喜曰、青山綠水中、爲二一千石一作レ詩飮レ酒爲二風月主人一、豈不レ喜乎」とあり』風景のすぐれたる地の知事に任ぜらるること、又その知事。■次條に同じ。

風月の本主(ホンシュ)【句】『黃山谷の詩に「試問二淮南風月主一」とありて、註に「江山風月、本無二常主一、閑者便是主人」と見ゆ』風流閑雅なる人。太平記「かの天滿天神と申すは、風月の本主、文道の大祖たり」

風月の窓【句】風月を友として、詩文を作る窓。謠曲「雷電」「勸學の室に入り、僧正を賴み奉り、風月の窓に月を招き、螢を集め、夏蟲の心の內も明かに」

ふうげん 諷言【名】遠まはしにあてつけて言ふことば。諷刺のことば。

ふうご 警護【名】おほひ庇ひてまもること。ふご。庇護。

ふうこう 風候【名】■風の模樣。かざなみ。「風候險惡」■氣候。風氣。■かざみ(風見)に同じ。

ふうこおでんりう フウコオ電流(英 Foucault's current)【名】〔理〕『佛蘭西の物理學者フウコオ(J. Foucault)の發見に係るよりいふ』一塊の金屬內に於ける磁界が變化する時は、その金屬の全部に渉り、相應の閉電路を作りて、誘生せらるる渦狀の電流。發電子の鐵心又は變壓器の鐵心等にありては、この電流の發生に從ひて、それより生ずるエネルギイの損失をなるべく少からしめんがために、多くの鐵の薄片を重ね合はせて用ふ。これに反して、電流計等の測器を、その附近に於ける電磁界の變化より遮斷するために、金屬製の外器にて蔽ふがごときは、この電流を利用せるものなり。「栄。

ふうこつ 風骨【名】風采と骨格と。風采。

ふうさ 封鎖【名】■出入せしめぬやうにとざすこと。■〔兵〕『英 Blockade』敵を、或地點に壓迫して、外部との交通の出來ぬやうにすること。陸上封鎖と港灣封鎖、又、平時封鎖と戰時封鎖とあり。各條を見よ。ほうさ。「を解くこと。

封鎖解除【句】すでに設定したる封鎖

封鎖宣言【句】封鎖の設定を宣言すること、又その宣言。

封鎖違反【句】封鎖を破りて、封鎖區域に出入すること。

ふうさい 風采(風格)に同じ。

ふうさい 風災【名】■風のために受くるわざはひ。風害。風損。■〔佛〕**さんさい**(三災)を見よ。夫木「櫻花第四靜慮に咲かさばや風災なくして散らじと思へば」

ふうさい 風際【名】〔佛〕**ふうりんさい**(風輪際)の略。

ふうさい 覆載【名】■おほふことと、のすることと。ふさい。■『天は萬物を覆ひ、地はこれを載するよりいふ』あめつち。ふさい。天地。乾坤。宇宙。

ふうさいーかん 覆載間【名】天地のあひだ。よのなか。ふさいかん。

ふうさう 風箏【名】■『詢務錄に「風箏卽紙鳶、又名二風鳶一。初五代漢李鄴於二宮中一作二紙鳶一引レ線乘レ風爲レ戲。後於二鳶首一以レ竹爲レ笛、使二風入作レ聲、如二箏鳴一、俗呼二風箏一」とあり』うなりを附けたる凧(タコ)。■『李商隱の詩に「西樓一夜風箏急」とあり』**ふうりん**(風鈴)に同じ。

ふうさう 風霜【名】■寒き風に吹かるる霜。■風霜の氣。■**せいさう**(星霜)に同じ。謠曲「雨月」「久しく風霜を送る」

風霜の氣【句】■風霜の、肌に感ずるここち。■『西京雜記に「淮南王劉安撫二鴻烈二十一篇一、字中皆挾二風霜氣一」とあり』文章の森嚴・凜烈なる精神の譬。

風霜の任【句】『文獻通考に「御史臺…門二北闕一、主二陰殺一。故御史爲二風霜之任一、彈二糾不法一、百寮震恐、官之雄峻、莫二之比一焉」とあり』司法の官。

風霜を挾(サシ)む【句】文章の森嚴・凜烈なる形容。風霜の氣あり。

ふうさう 風草【名】風に吹かるる草。

風草の德【句】『論語の顏淵篇に「君子德風、小人德草、草上二之風一必偃」とあり』君子の下民を化する德。**ふうくわ**(風化)■參照。

風草の政【句】『汲家周書に「周公旦曰、嗚呼殷政總總若二風草一、有レ所レ積、有レ所レ虛、知此如何」とあり』風草の德を以てする政治。

ふうさう 風騷【名】『**さうじん**(騷人)を見よ』みやび。風雅。風流。奥の細道「白河の關にかかりて、……、この關は、三關の一にして、風騷の人、心をとどむ」

ふうさう 風操【名】風采と節操と。

ふうさーかう 封鎖港【名】封鎖をなしたる港灣。

ふうさーかんたい 封鎖艦隊【名】〔兵〕封鎖區域の附近に碇泊し、又は巡邏して警戒し、船出船入の防止に當る艦隊。

ふうさーくゐき 封鎖區域【名】〔兵〕封鎖をなせる區域。「を示す線。

ふうさーせん 封鎖線【名】〔兵〕封鎖區域

ふうさーちゐき 封鎖地域【名】〔兵〕封鎖をなしたる地域。

ふうさーはん 封鎖犯【名】〔法〕封鎖の存在を知りながら、封鎖地域に出入し、又は出入せんとするによりて成立する犯罪。

ふうさん 風餐【名】次條を見よ。

風餐雨處【句】風雨にさらされて苦しむこと。

風餐露宿【句】『陸遊の壯士吟と題する詩に「風餐露宿寧非レ苦、且試平生鐵石心」とあり』野外に起臥すること。のじゆく。露宿。

ふうざんひかく 楓山祕閣【名】**もみぢやまぶんこ**(紅葉山文庫)に同じ。

ふうし 夫子【名】『■■』は、共に、單に子(シ)とのみにても可なるべき上に、夫の字を加へたるもの』■支那にて、大夫以上の人。■長者・賢者・先生などの尊稱。■婦より夫に對する呼稱。

夫子自(カ)ら道(イ)ふ【句】『論語の憲問篇に「子曰、君子道者三、我無レ能焉。仁者不レ憂、知者不レ惑、勇者不レ懼。子貢曰、夫子自道也」とあり』自分の事を、自ら言ふ。〔諺語〕

ふうし 風姿【名】**ふうさい**(風采)に同じ。

ふうし 風飾・飄飾【名】『周禮の春官篇に「祀二飄飾一」とあり』風の神。風伯。風神。

ふうし 風枝【名】風の吹き動かす枝。「を受けて搖む枝。

ふうし 諷示・風示【名】遠まはしに、それとなく示すこと。ほのめかして知らすること。

ふうし 諷刺【名】『詩經の關雎篇の序に「上以風二化下一、下以風二刺上一」とあり』それとなく、他人の過を刺(ソ)ること。あてこすり。「詩。諷刺詩。

ふうし 諷詩【名】諷刺の意を含めたる詩。

ふうじ 封【名】■封すること。封じたること。封を附くること。■**ふうじめ**(封目)

に同じ。

ふうじ 封事【名】密封して、ぢきぢきに君主にたてまつる意見書。

ふうじ-がみ 封紙【名】封をなすに用ふる紙。封ずる紙。

ふうじ-きり 封切【名】さすが(刺刀)[一]に同じ。

ふうし-ぐわ 諷刺畫【名】諷刺の意を含みたる畫。

ふうじ-けん 風字硯【名】『硯譜に「右軍之後、持二風字硯一。大尺餘、色赤」とあり』漢字の「風」の字の形に造りたる硯。

ふうじ-こかたな 封小刀【名】ふうじきり(封切)に同じ。

ふうじ-こむ 封込む【動下二他】[一]中に入れて封ず。ふんじこむ。[二]ふうず(封ず)[二]を強めていふ語。源氏「物の怪(け)にむかひて物語したまはんもかたはらいたければ、ふうじこめて」

ふうじ-さだめ 封事定【名】古、朝廷にて、國家の大事ある時、先づ求言の詔書を降し、諸王・公卿諸司の長官諸國の受領・諸道の博士等をして、封事を獻ぜしめ、畢れば、その名を切り棄てて、朝議に付し、諸卿、宜陽殿にて、可否を定め、採るべき者には、その旨を注記し、封を加へて、奏上せし臨時の儀式。

ふうし-し 諷刺詩【名】ふうし(諷詩)に同

ふうし-つ 風疾【名】『ちゅうふう(中風)を見よ』リウマチス・神經痛・半身不隨などの症候。風病(フウビャウ)。痛風。今國姓爺風疾、骨に入って、痛堪へがたし」

ふうし-つ 風濕【名】痛風・リウマチス等の總稱。【漢方醫の語】

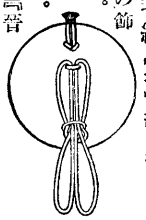
ふうじ-つ 風日【名】[一]風と日光と。[二]風の吹く日。かざだちたる日。ならはし。

ふうじ-ぶくろ 封袋【名】人に送るとき、書狀をつつむ袋。ふうづつ。ふうとう。じゃうぶくろ。書翰袋。

ふうじ-ぶみ 封文・封書【名】ふうしょ(封書)に同じ。聖徳太子繪傳記「この封じ文、誰に頼まれ、誰への文ぞ」

ふうじぶみ-ぼさつ 封文菩薩【名】手紙の封じ目に「五大力菩薩」と書くこと。ごだいりき(五大力菩薩)參照。

ふうじ-むすび 封結【名】緒の結び方の一。守袋などの飾に用ひしもの。



(びすむじうふ)

ふうじん 風神【名】[一]風の神。風師。風伯。[二]『晉書の裴楷傳に「風神高邁、容儀俊爽」とあり』形にあらはれずして、心に感ずるおもむき。「風神を傳ふ」

ふうしん 風疹【名】[一]『北史の張緟傳に「雖下年向二六十一、加之風疹、而自强二人事一、孜孜無レ怠」とあり』風氣に侵されたるための痙攣。かざほろし。[二]『醫』『獨Windpocken』ふうさう(風痘)に同じ。

ふうしん 楓宸【名】『說文に「楓木、漢宮中植之、故稱二楓宸一」とあり』天子のいます宮。朝廷。皇居。

ふうしん 封進【名】密封して進獻すること。

ふうしん 風神【名】ふうしん(風神)[一]に同じ。

ふうしん-き 風信器【名】かざみ(風見)に同じ。

ふうしんし-くわう 風信子鑛【名】『鑛』ジルコニウムの珪酸鹽類にて成る鑛石。四角柱狀の結晶を成し、硬くして脆く、無色又は淡黄・黄褐乃至赤褐にして、金屬光澤を有す。

ふうじ-め 封目・封締・封〆【名】封じたるあはせ目。封をなしたる箇所。俳諧新選(濃蛟)「封じめを蝶の尋ぬる牡丹かな」江戸生艶氣樺焼「封じ目を附けぬと、緣が切れると申しやす」

ふうしや 風車【名】『英Windmill』風を動力として廻轉せしむる車。かざぐるま。

ふうじや 風邪【名】かぜひき。かぜ。感冒。

ふうしやう 風尚【名】風節の尚(たふと)きこと。時代のこのみ。

ふうしやう 諷誦【名】調子よく聲を立てて讀むこと。

ふうしやう 風色【名】[一]『何遜の詩に「風色極天淨」とあり。風の色の義』晴れたる空模樣。[二]ふうくわう(風光)に同じ。

ふうしよく 風蝕【名】「地」『英Deflation』風が、土砂を吹きつけて、岩石を磨耗破壞すること。ふうくわ(風化)[四]參照。

ふうしよく 風燭【名】「風中の燭」の略。

ふうしよく-さよう 風蝕作用【名】「地」「同じ。

ふうしよく(風無)に同じ。

ふうじ-らふ 封蠟【名】ふうらふ(封蠟)に

ふうす 諷す【動佐變他】それとなく言ふ。

ふうす 副寺・副司【名】「佛」禪宗の寺院にて、都寺(ツウ)・監寺(スウ)を輔けて、出納を掌る役。上副寺一人、下副寺二人あり。庫司(ス)。ふうすれうあんじや。

ふうす 副使【名】ふく(副使)に同じ。運漕色葉集「副使、フウス。正使・副使遣唐使」

ふうず 封ず【動佐變他】[一]封(フ)をなすふんず。[二]閉ぢ込む。[三]神佛の通力(ツウリキ)にて、出でられぬやうにす。源氏「物の怪(け)に向ひて、物語したまはんもかたはらいたければ、ふうじこめて」[四]使用せぬやうに、堅くとどむ。「月旦。

ふうす (英Who's he)【名】人物の略傳。

ふうす-ふう (英Who's who)人物の略傳。

ふうすれう-あんじや 副寺寮行者【名】【佛】ふうす(副寺)に同じ。

ふうすゐ 風水【名】[一]風と水と。[二]陰陽家にて、墳墓の地を相する術。もと人類の生活に最も便利なる地を擇びて、都城を建て、家屋を作る意より轉じて、死者、殊に死したる父母をして、完全に天地二氣の保護を受けて、永久に、生氣を持續するに便ならしむる地を擇びて、墳墓を營む法となりしものにて、その方法宜しきを得る時は、子孫繁昌すといふ。

ふうすゐ-せつ 風水説【名】前條[二]に關する説。

ふうせい 風聲【名】[一]かぜのおと。[二]『書經の畢命篇に「旌二別淑慝一表二厥宅里一、彰二善癉一惡、樹二之風聲一」とあり』土地の風俗に從ひて、聲教の法を立つること。[三]『三國志の蜀の部、許靖傳の裴松の註に「王朗與二靖書一曰、聞二消息于風聲一、託二舊情于思想一」とあり』人の消息を聞くこと。

ふうせい 風聲鶴唳(カクレイ)【句】[一]風のおとと、鶴の鳴く聲と。[二]『支那晉の苻堅の軍が、淝水にて大敗せし時、堅、單騎遁れ還りて、風聲・鶴唳も、晉軍の追撃し來るもののごとく聞えたりといふ故事に本づく』おぢ氣づきたる人が、あらぬ物事にも驚き怖るること。「風力。

ふうせい 風勢【名】風の吹くいきほひ。

ふうせいがん 風成岩【名】「地」『英Aeo-

lian rocks』岩石の粉末が、風に吹き送られて、遠隔せる地に達し、地表に堆積して成れる岩石。黄土(クワウド)・ロオム(Loam)の類。氣成岩。(水成岩・火成岩に對して)

ふう-せつ 風雪【名】㊀かぜと、ゆきと。㊁雪まじりの風。ふぶき。「風評。批評。

ふう-せつ 風説【名】うはさ。とりざた。

ふう-せん 風船【名】㊀**けいききう**(輕氣球)に同じ。㊁**ふうせんだま**(風船玉)の略。

ふう-ぜん 風前【名】風の吹く所。風中。

風前の塵【句】㊀風の吹く所にある塵。㊁人の榮華の定なきことの譬。太平記「人間の榮耀は、風前の塵と」

風前の燈火(ともしび)【句】㊀風の吹きあたる處にある燈火。㊁「倶舍論の疏に「壽命猶二風前燈燭一」とあり』人生の危く脆きことの譬。風中の燭(しょく)。風燭(ふうしょく)。

ふうせん-かづら 風船葛【名】〔植〕無患子(むくろじ)科に屬する一年生又は多年生の草。莖は蔓狀を成し、卷鬚にて、他物に攀縁す。葉は二回三出複葉にして、各小葉は卵狀披針形を成し、粗鋸齒あり。夏季、白色の小花を著け、後、蒴果を結ぶ。原産地は印度。觀賞用として、各地に栽培せらる。

ふうせん-くらげ 風船水母【名】〔動〕櫛水母類の一種。體は球狀を成し、白色半透明、八條の長き櫛列あり、別に二本の觸手を具ふ。各地の海上に浮游す。

ふうせん-だま 風船玉【名】㊀護謨にて、球形に造り、中に瓦斯を入れて空中に飛ばす玩具。㊁心のしまらず落ちつかぬ人を嘲りていふ語。〔俚語〕

ふうせん-むし 風船蟲【名】〔動〕半翅類に屬する水蟲。體の大さ二三分、楕圓形にして扁平。常に水中に棲息すれども、夜間燈下に飛來す。肉食性にして、小魚又は昆蟲を捕食す。硝子筒などに水を滿たし、中に紙片を投じ、この蟲を入るれば、蟲は泳ぎて、底部に沈める紙片に止まり、蟲體は水よりも輕きが故に、紙片は蟲と共に水面に浮き出で、蟲は驚きて、これを放ち、紙片はまた降下す。その狀、風船に似、小兒の玩弄に供せらる。

ふうせん-も 風船藻【名】〔植〕綠色藻類に屬する藻類。體は綠色、小球狀を成せる部分と、その下部より細き根狀を成して、地中に入れる部分とより成る。各地の池沼の底の泥土などに生ず。

ふうぜる-ゆ フウゼル油(獨 Fusel oil)【名】一種の惡臭ある油狀の液體。揮發性にして、沸點高く、數種のアルコールの混合より成り、殊に、アミルアルコオル、その大部分を成せり。馬鈴薯・穀類などより酒精を製する時、普通のアルコオル以外に、その少量を生ず。穀類にて、酒を釀造する時も、また同じ。これを含める酒類を飲用する時は、頭痛・眩暈を催す。

ふう-そく 風速【名】〔地〕風の速力。空氣の流動の遲速。高さと共に增加するものにて、一秒時に於ける流動の距離をメエトルにて示す。**ふうりよく**(風力)參照。

ふう-ぞく 風俗【名】㊀『風は上の化する所、俗は下の習ふ所』ならひ。ならはし。㊁衣服の裝。なりふり。置土産「今の都の奢男(オトコ)、然も風俗すぐれて」親仁形氣「風俗を作らせ、年中連れて歩き」㊂**ふぞく**(風俗)を見よ。

ふうぞく-けいさつ 風俗警察【名】〔法〕風俗即ち淫賣・博奕などを取締るための行政警察。

ふうぞく-し 風俗史【名】風俗の變遷を書きしるせるもの。

ふうぞく-つう 風俗通【名】〔書〕次條の

ふうぞく-つうぎ 風俗通儀【名】〔書〕『流俗の過謬を通ずる目的にて著せるよりいふ』皇朝正失愆禮・禍亂・十反辭音・窮通・祀典・怪神・山澤の十篇に分ちて、物類の名を辨じたるもの。十卷、附錄一卷。支那後漢の應劭の撰。

ふうぞく-どころ 風俗所【名】**ふぞくどころ**(風俗所)を見よ。

ふうぞく-まひ 風俗舞【名】**ふぞくまひ**(風俗舞)を見よ。

ふうぞく-もんぜん 風俗文選【名】〔書〕松尾芭蕉及びその門下、合はせて二十八人の俳文百十餘篇を輯めたるもの。二十卷。森川許六の撰。一名、本朝文選。

ふうぞく-ゑ 風俗繪【名】風俗を描寫したる繪畫。風俗畫。

ふうそん 風損【名】**ふうがい**(風害)に同じ。

ふうたい 風體【名】**ふうてい**(風體)に同じ。

ふうたい 風帶【名】㊀几帳の上に垂るる細長き布帛のすそ。㊁掛軸の上端より、その書畫の上の邊まで垂るる、二條の幅狹き布帛又は紙片。通常、一文字(いちもんじ)と同一のものを用ふ。經帶。㊂旗を卷き上ぐる時、結び束ぬるために、その横上(おうじょう)に附けたる紐。

ふうたい 風袋【名】㊀秤にて物を量る時の、その品物の上包・箱・梱など。(正味(しょうみ))に對して)㊁うはべ。外觀。

ふうたい 諷體【名】諷刺の意を含みたる文體または詩體。

ふうたい 風大【名】〔佛〕四大の一。動を性とし、物を生長するといふもの。(地大・水大・火大に對して)

ふうたい-だふし 風袋倒【名】㊀目方あり袋に見えて、思の外に輕きこと、又その物。㊁うはべのみ善く見ゆること、又その物。みかけだふし。

ふうたう 風刀【名】㊀身を刺すごとき寒き風。㊁**ふうとう**(風刀)を見よ。

ふうたう 風濤【名】㊀かぜと、なみと。㊁風吹きて、濤(なみ)の立つこと、又その濤。風浪。「同じ。

ふうたう 封套【名】**ふうじぶくろ**(封袋)に同じ。

ふうたきい 【名】『利(き)いた風(ふう)』といふべきを轉倒していへるもの』なまいき。でしやばり。〔德川時代の俚語〕船頭深話「おや、まあ、あきれた。ふうたきいだ」

ふうたく 風澤【名】風の吹く澤(たく)。

ふうたく 風鐸【名】㊀塔などの軒の四隅に吊り下げたる、小き舌のある鐘。寶鐸。㊁**ふうりん**(風鈴)に同じ。

ふうたく 諷託【名】諷刺と寓意と。(主に詩文の體にいふ)

ふうだん 風談【名】風流に關する談話。雅談。俳諧水雜談「所所の吟行など物語れば、各句ごとに金玉の聲を感じ、風談やや時を移せば」

ふうち 風致【名】おもむき。あぢはひ。

ふうちく 風竹【名】風に吹かるる竹。

ふうちん 風鎭【名】掛軸の兩端に懸くるおもし。軸の風に飜るを防ぐためのもの。玉・石などにて造り、紐を貫きて懸く。

ふうぢん 風塵【名】㊀風に吹き立てらるる塵。㊁世の中の雜事。俗事。㊂俗吏の職務。官途。「風塵の志なし」㊃みだれ。兵亂。「風塵の警」「風塵の縫」風塵の會「風塵之會、履二顚沛之勢一」とあり』前條㊁に同じ。

ふうちやく 風鐸【名】**ふうたく**(風鐸)に同じ。「同じ。

ふうちゆう 風中【名】**ふうぜん**(風前)に同じ。

ふうちゆう 封中【名】封じたる物のなかに「百年未二幾時一、奄若二風中燭一」とあり』「風前の燈火(ともしび)」に同じ。

風中の燈【句】『方廣大莊嚴經の卷五に「世間轉壞、如二風中燈一」とあり』前條に同じ。

ふうち-りん 風致林【名】『獨 Landverschönerungswald』その美觀によりて、名所舊蹟・社寺・公園等の風致を助成するために仕立つる森林。

ふう-つう 風通【名】ふうつうおり(風通織)の略。

ふう-づう【名】豐前・豐後兩國の邊にて、腰に著くる長き巾著。

ふうつうおり 風通織【名】一次條に同じ。二濃き經(タテ)絲を上にし、薄き經絲を下にして、二重とし、濃き緯(ヨコ)絲にて、濃き經絲を織り、薄き緯絲を織りたる織物。紋を織る作用によりて、上下の經絲附著するがゆゑに、織り上ぐれば一枚となる。天正の頃、支那明の製法に倣ひて織り出ししものにて、現時は京都桐生(キリフ)・足利・八王子・米澤等に產す。めんふうつう(綿風通)參照。

ふうつうもおる 風通毛宇留【名】モオルの一種。金絲をも銀絲をも用ひずに織りたるもの。

ふう-つけ 封附【名】『「封を附く」を見よ』封じ目に、しるしを附くること、又これを附けたること、又その物。繙書「封附の銀箱」「同じ。

ふう-づつ 封筒【名】ふうじぶくろ(封袋)に同じ。

ふう-てい 風體【名】なりかたち。なりふり。みなり。ふうたい。

ふう-てい 風聽【名】『國語の音國の條に「風ニ聽膿言於市」とありて、韋昭の註に「風、采也、膿、傳也。采ニ傳商旅所ニ傳善惡之言ニ」と見ゆ』ふうぶん(風聞)に同じ。

ふう-てう 風調【名】おもむき。樣子。氣品。風趣。風韻。

ふう-てう 風潮【名】一風に吹き漂はさるる潮水。二世事のなりゆき。時勢の傾向。潮流。潮勢。

ふう-てう 風鳥【名】一(動)『英 Bird of ...』ごくらくてう(極樂鳥)に同じ。二(天)星座の一。南方にあり。風鳥座。

ふうてう-ざ 風鳥座【名】(天)前條二に同じ。

ふうてう-さう 風鳥草【名】(植)一白花菜(カラサウ)科に屬する一年生の草。高さ二三尺、細毛あり。葉は掌狀複葉にして、小葉は長倒卵形を成す。夏季、梢上に、白色又は淡紫色の花を著け、總狀花序を綴り、雄蕊は、花外に長く挺出す。熱帶及び溫帶に產し、觀賞用として栽培す。やうかくさう。「白花菜」二やまももさう(山桃草)に同じ。

ふうてうさう-くわ 白花菜科【名】(植)顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。風鳥草・魚木(ボク)など、これに屬す。はくくわさいくわ。

ふう-てん 風天【名】(佛)『梵 Vāyudeva』十二天の一。その形像は、白髮・白髯の老人にして、甲冑を著け、左手は膝又は腰の邊に置き、右手に獨鈷頭の槍を執り、槍上に、緋の旛ある姿に作る。

ふう-てん 瘋癲【名】きちがひ。狂氣。

ふうてん-にん 瘋癲人【名】瘋癲の病に罹れる人。瘋癲の人。狂人。

ふうてん-びやう 瘋癲病【名】ふうてん(瘋癲)に同じ。

ふうてん-びやうゐん 瘋癲病院【名】瘋癲病の患者を收容して、保護・治療する病院。氣違(キチガヒ)病院。瘋癲院。

ふうてん-りう 風傳流【名】槍術の一流。中山新左衞門の創めしもの。

ふうてん-ゐん 瘋癲院【名】ふうてんびやうゐん(瘋癲病院)に同じ。

ふうど 呎(英 Foot)【助數】英國及び米國の長さの單位の一。インチの十二倍、我國の一尺〇〇五厘八二に當る。複數はフイイト。

ふう-ど 風土【名】風氣と土地の地味と。

ふう-ど 風度【名】一ひとがら。人品。風采。風格。風氣。二風力の程度。

ぷうど 布度(露 pood)【助數】露西亞の目方の單位の一。我國の約四貫三百六十八匁一分に當る。

ふう-とう 封筒【名】一書翰を入るる箱。狀箱。二ふうじぶくろ(封袋)に同じ。

ふう-とう 風碭【名】風の吹く石階。「じ。

ふう-とう 風燈【名】「風前の燈火」に同じ。

ふう-とう 風痘【名】(醫)『獨 Windpocken』

ふうとう 風刀【名】(佛)臨終の際、體中の風大動搖して、身を支解し、その苦、利刀にて刺すがごとくなること。

ふうとう-かづら 風藤葛【名】(植)胡椒科に屬する蔓生の木。葉は互生し、卵狀披針形にて、尖頭、全緣なり。基部は心臟形をなし、辛辣なる香氣あり。夏、葉間に細き穗出でて、細小なる帶綠白色の花、穗狀花序をなして開き、後、紅色の小漿果を結ぶ。吸地に自生す。きんま。つるこせう。

ふうどき 風土記【名】ふざき(風土記)に同じ。

ふうどく 風毒【名】ふうしつ(風濕)に同じ。

ふうどく-びやう 風土病【名】地質・地形・氣候等より生ずる、その土地特種の病氣。例へば、マラリヤの如き類。

ふうとこぼおる【名】ふっとぼおるに同じ。

ふうとこぼんど 呎封度・呎磅(英 Foot-pound)【助數】(理)仕事の量の單位。重さ一ポンドの物體を、一フウト揚ぐるに要するものを、一フウトポンドとす。

ふう-なん 風難【名】風の烈しく吹くによりて起る災難。風によりて受くる災禍。

ふう-の-まつ 風の松【句】まつ(松)の條下を見よ。

ふう-は 風波【名】一風と波と。なみかぜ。二風吹きて、波あらきこと。風浪。三おだやかならぬ事柄。あらそひ。いさかひ。なみがせ。

風波の民【句】『莊子の天地篇に「若ニ夫人者、非ニ其志ニ不レ之、非ニ其心ニ不レ爲、雖ニ以ニ天下ニ譽ニ之得ニ中其所ニ謂誠然ニ不レ顧、以ニ天下ニ非レ之、失ニ其所ニ謂儻然ニ不レ受、天下之非譽無ニ益損ニ焉、是謂ニ全德之人ニ哉、我謂ニ之風波之民ニ」とあり』心の動搖し易き人。「略。

ふう-ば 風馬【名】ふうばぎう(風馬牛)の風馬の蹄も及ばず【句】「風馬牛も相及ばず」に同じ。太平記「南北境阻、風馬蹄不レ及、山川地殊、雲鳥之勢接レ誰矣」

ふう-はい 風杯【名】ふうりょくけい(風力計)に同じ。

ふう-ばい 風靈【名】風に吹上げられてふうばいくわ(風媒花)【名】(植)『英 Anemophilous flower』風の媒介により、花粉が、他の花の雌蕊に傳搬せられて、實を結ぶ性質の花。稻・麥・麻及び松杉科に屬する植物の花は、これに屬す。(水媒花・蟲媒花・鳥媒花に對して)

ふうばいしょくぶつ 風媒植物【名】(植)風媒花を有する植物。松杉科・銀杏科等、これに屬す。「に同じ。

ふう-はう 風砲【名】くうきじゅう(空氣銃)

ふう-はう 風貌【名】風采と容貌と。

ふう-ばう 風丰【名】『丰は、豐滿の義とも、美好の義ともいふ』ゆたかにうるはしき容貌。

ふう-ばぎう 風馬牛【名】『風は放逸の義。左傳の杜預の註には、風合卽ち牝牡相慕ふ義に解すれども、當らざるに似たり』一繫がれず逸走する馬と牛と。二『左傳の僖公四年の條に「春、齊侯以ニ諸侯之師ニ侵レ蔡。蔡潰。遂伐レ楚。楚子使ニ與レ使言ニ曰、君處ニ北海ニ寡人處ニ南海ニ、唯是風馬牛不ニ相及ニ也」とあり』互に遠隔の地に居ること。三事の、我に關係なきこと。

ふう-はく 風伯【名】風の神。風師。風神。

ふうはく-さい 風伯祭【名】古、風伯をまつりて祈りし神事。東雅「今日風靜。去夜風伯祭効驗之由、有ニ其沙汰ニ」

ふう-はつ 風發【名】一風の吹き起ること。二ふるひたつこと。三言葉の、勢よく口より發すること。雕瑩。「談論風發」

ふう-はん 風範【名】模範となる風格。範とすべき風調。盛衰記「三藏修練(シュジ)の芳跡を慕ひ、大唐青龍(シャウロウ)の風範を寫して、灌頂壇を立て」「その船。

ふう-はん 風帆【名】風に吹かるる帆、又

ふう-はん 封判【名】ふういん(封印)に同じ。本朝櫻陰比事「その佛に、當人の封印を致させ、三日預かりたまひ」

ふうばん 風旛【名】風に吹かるる幢旛。風旛の論【句】(佛)『傳燈錄及び無門關に出づ』旛の動くは、風のこれを動

かすか、嫌の自ら動くか、否、見る人の心の動くなりといふ議論。

ふうはん-せん 風帆船【名】ほまへせん(帆前船)に同じ。

ふうはり【貌】ふはりに同じ。百俚談「風和(フワリ)かろく浮きたる物の姿か」「は。

ふうひ 封皮【名】被ひ封じたるうはか

ふうひ 風飛【名】風に乗りて飛ぶがごとく行くこと。

ふうひ 翻被【名】おほひかぶすること。

ふうび 風靡【名】草木の風に靡くがごとく、能く服従すること、又、風の草木を吹き靡かすがごとく、威厭すること。

ふうびき 福引【名】ふくびき(福引)の音便。遷歩色葉集「福引、フウビキ」

ふうひやう 風評【名】とりざた。うはさ。評判。風聞。

ふうびやう 風病【名】[一]ふうしつ(風疾)に同じ。著聞「風病重き人にて、笛のつかにも紙を巻きてぞ使はれける」諺曲・歌占「風病の色身(シキシン)、しかも生(シヤウ)・老・病・死の次第を取れば」[二]きちがひ。風狂。

ふうふ 夫婦【名】[一]いもせ。めをと。夫妻。[二](法)婚姻によりて、配偶者となりたる一男一女の身分關係。

夫婦は一心同體【句】夫婦の間柄は極めて密接なり。〔諺語〕

夫婦は互の氣心【句】夫婦は、互の心の持具合によりて、その中、睦しくもなれば、悪しくもなる。〔諺語〕

夫婦は二世【句】夫婦は、現世と來世との緣あり。(「親子は一世」「主從は三世」に對して)〔諺語〕漢語大和故事「夫婦は二世、師は三世、親子は一世」艶妄女舞曳「夫婦は二世と申す事も候へば、未來は必ず夫婦にて候」

夫婦は二世の契(チギ)【句】前條に同じ。〔諺語〕善光寺(院本)「夫婦は二世の契とは、今、目の前に知らるれど」

夫婦二表(フタオ)なし【句】夫婦は、その間に、表裏あること無し。〔諺語〕

夫婦、別有り【句】『ごりん(五倫)を見よ』夫婦の間は、狎れすぎて、猥がはしきことあるべからず。〔諺語〕俳諧古選(田鶴樹)「夫婦別あらば七月八日かな」

ふうふあいさやう-の-まもり 夫婦愛敬守【名】あいきやうまもり(愛敬守)に同じ。

ふうふあひ 夫婦合【名】夫婦の間の情交。夫婦の伸らひ。夫婦の間柄。

ふうふいさかひ 夫婦諍【名】ふうふげんくわ(夫婦喧嘩)に同じ。若風俗「自然の夫婦いさかひに鍋釜割るにも」

ふうふいは 夫婦岩【名】ふたみがうら(二見浦)を見よ。

ふうふう【名】『次條の轉義』[一]物を、續けて吹くこと。〔幼兒の語〕[二]すみび(炭火)を云ふ。ふう。〔幼兒の語〕[三]燈火を云ふ。〔幼兒の語〕

ふうふう【貌】[一]物を續けて吹く聲、又そのさま。[二]苦しげに喘ぐ聲、又そのさま。

ぶうぶう【名】『次條[一]の轉義』酒に醉ひたる人、又は兒供などの、氣まま、難題を言ひかくること、又その者。丹波與作「じたい、八めは、ぶうぶうなり。おのが胸倉、しっかと取って」

ぶうぶう【貌】[一]不平を言ひたつるさま。[二]法螺貝を吹き鳴らす音の形容。[三]放屁の音の形容。ぶいぶい。[四]風の吹く音の形容。

ぶうぶうなかま ぶうぶう仲間【名】ぶうぶう者のなかま。御所櫻「年は四十の、肩で風、ぶうぶう仲間の立者(タテ)と」

ぶうぶうもの ぶうぶう者【名】氣まま・難題を言ひかくる癖ある無頼漢。御所櫻「ぶうぶう者は居らぬかと、こはさ紛らす高念佛」

ふうふ-がため 夫婦固【名】夫婦となるべき男女間の約束。傾城反魂香「今、ここで、夫婦がための盃して」

ふうふ-きどり 夫婦氣取【名】相思の男女の、表むきの結婚式を行はざるに、夫婦の關係を以て共棲すること。

ふうふ-ぎり 夫婦斬【名】殺意を抱きて、夫婦の者に斬り付くること。

ふうふ-ぐらし 夫婦暮【名】夫婦掛向(カケ)との生活。めをとずみ。浪華の鳳「夫婦暮にて、日雇稼などの貧窮者といへども」

ふうふ-げんくわ 夫婦喧嘩【名】夫婦の間におこりたる喧嘩。夫婦いさかひ。めをといさかひ。

夫婦喧嘩は犬も喰はず【句】夫婦の間の喧嘩は、大抵取留無きものにて、いつとなく止むものなれば、他人は、これに掛りあはず。女夫譯(メヲトワケ)は犬も喰はず。〔諺語〕

夫婦喧嘩は貧乏の種蒔【句】夫婦相爭へば、家業疎かになり、やがて貧乏の原因となる。〔諺語〕

ふうふ-ご 夫婦子【名】引續きて生れる男の子と女の子と。

ふうふざいさんけいやく 夫婦財産契約【名】〔法〕婚姻をなさんとする男女が、その婚姻中に於ける相互間の財産關係を定むることを目的として、婚姻届出前に締結する契約。

ふうふざいさんけいやく-とうきぼ 夫婦財産契約登記簿【名】登記所に備へ、夫婦財産契約を登記する帳簿。

ふうふ-ざいさん-せい 夫婦財産制【名】〔法〕『獨 Ehelichos güterrecht』夫婦間の財産上の關係を定むる制度。法定財産制と契約財産制とに分つ。各條を見よ

ふうふ-しゅんれい 夫婦順禮【名】夫婦づれの順禮。

ふうぶつ 風物【名】風景の一部を成す物、即ち花鳥風月などの類。風景。

ふうふづれ 夫婦連【名】夫婦つれだちて、道を行くこと。めをとづれ。

ふうふ-なか 夫婦仲【名】夫婦の間の愛情。めをとなか。

ふうふ-ぶん 夫婦分【名】假に夫婦たる間がらとすること。武家義理物語「この姫子を連れて、……今の都に來て憂き住(スマヒ)、世間は夫婦分に致せしも」

ふうふ-まど 夫婦窓夫婦窟【名】二つ續きてある窓。めをとまど。

ふうぶん 風聞【名】ほのかに聞くこと。うはさ。風評。千載「女をしのびて語らひはべりけるが、風聞したりければ」

ふうぶん-がき 風聞書【名】徳川時代に、諸藩の、人を江戸又は他國に派して、世上の風聞を記して報告せしめし、その文書。

ふうふ-もの 夫婦者【名】夫婦の關係ある人。夫婦なる二人の者。

ふうふ-やうし 夫婦養子【名】子の一人もなき家に、夫婦揃ひて養子となること。とりこ・とりよめ。

ふうふやく 夫婦役【名】演藝にて、二人連れ立ちて演ずる役。「時の夜著。

ふうふよぎ 夫婦夜著【名】夫婦同衾のふとん。

ふうふ-わかれ 夫婦別【名】夫婦が、家計上などの都合にて、一時家をたたみて、別れ別れになること。夫婦の離別。めをとわかれ。離婚。

ふうへう 風標【名】[一]ひとがら。やうす。標致。[二]かざみ(風見)に同じ。

ふうへん 風變【名】風の吹く方向を變ぜしむること。

ふうぼう 覆盆【名】『晉書の孔羣傳に「性嗜レ酒。導嘗戒レ之、曰卿恆飲、不レ見二酒家覆盆布、日月久靡爛邪。答曰、公不レ見二肉糟淹更堪レ久乎」とあり』ふうしやう(覆醬)に同じ。

ふうぼく 風木【名】風に吹かるる木。風木の悲(カナシミ)【句】「風樹の嘆」に同じ。鶉衣「千代もと祈りしそのかひもなく、空しく風木の悲を抱き」

ふうま 夫馬【名】徴發して、公用に使役する馬。甲陽軍鑑「夫馬になりても、重き荷物持つことならず、遠き路もならず」

ふうみ 風味【名】[一]『韓愈の答二李使君一書に「慕二仰風味一未二嘗敢忘一」とあり』風雅なる人品。人物の風韻。[二]あぢ。あぢはひ。ふうみあひ。太平記「建渓の風味濃かなり」

ふうみ-あひ 風味合【名】前條に同じ。

ふうむ 帆杠(英 Boom)【名】帆船にて、縦帆の下方を張る桁。

ふうむすび(封結)に同じ。今茸大きなる餌袋に、交(マゼ)菓子を……調へ入れて、緋の緒を以て、上を封結にして」

ふうん【感】ふうに同じ。

ふ-うん 不運【名】ふしあはせ(不仕合)に同じ。大鑑隆家は、不運なる事こそあれ、そこたちに斯うせらるべき身にもあらず」

ふ-うん 浮雲【名】一浮きただよふ雲。うきくも。二とりとめのつかぬこと。危きこと。方丈「ありとしある人は、皆、浮雲の思をなせり」

浮雲の志【句】『揚雄の答賓戯に「仲尼抗二浮雲之志一、孟軻養二浩然之氣一」とあり』不義の富貴を悪む志。

ぶ-うん 武運【名】武士の運命。戦にての勝負の運。

ふう-ゆ 諷諭・風諭【名】直接にあてつけずに、とほまはしにさとすこと。

ふう-ゆ 諷喩【名】〔文〕次條に同じ。

ふうゆ-はふ 諷喩法【名】〔文〕『英 Allegory』譬喩法の一。一の說話の中に、他の意義ある事項を寓せしむるもの。例へば、假作の敍事物語、下等動物若しくば自然界の無生物等を藉りて、人事上重要なる教訓を寓する類。

ふう-よく 覬覦【名】おほひ庇ひてたすくること。「がせ。

ふう-ら 風蘿【名】風に吹かるるさるをがせ。

ふう-らい 風來【名】一風に吹き寄せらるること。漂到。二沈重ならぬこと。おちつかぬこと。きまぐれ。三居處を失ひてさすらふること。

ふう-らい 風籟【名】風が物に吹き當りて發する聲。風のこゑ。

ふうらい-さんじん 風來山人【名】〔人〕**ひらがげんない**(平賀源内)の號。

ふうらい-しん 風來人【名】次條に同じ。

ふうらい-もの 風來物【名】用に立たず空しく捨てられてある品物。

ふうらい-ろくろくぶしふ 風來六六部集【名】〔書〕風來山人の狂文集。前篇・後篇、各二册。前篇には、放屁論・同後篇・痩虎傳・力婦傳・蛇腹青大通・於千代傳の六部、後篇には、里のをだ巻・飛んだ噂の評・天狗髑髏鑑定(ママ)・緣起・飛花落葉・菩提樹の辨・細見嗚呼・お江戸の序の六部を收む。

ふう-らう 風浪【名】一かぜと、なみと。風波。風濤。二風吹きて、浪立つこと。風波。風濤。

ふうらう-じんじゃ 風浪神社【名】筑後國三瀦(ミヅマ)郡大川町に鎭座せる縣社。祭神は綿津見(ワタツミ)神・息長帶(オキナガタラシ)姫命・住吉神・高良玉垂(コウラタレ)命。

ふうら-だう 風蘿堂【名】播磨國姫路市增位山(ゾウヰサン)の麓にある堂。俳人芭蕉の遺跡。

ふうら-ねんぶつ 風蘿念佛【名】蕉門高足の一人なる廣瀬惟然が、後年、飄浪の身となるに及び、その師芭蕉の句を綴り合はせて、和讃の體に作り、常に歌ひ歩きしもの。近世崎人傳「惟然坊は、……、師の發句どもを綴り合はせて、和讃に作りて、常に諷ひありく。これを風蘿念佛といふ」

ふうら-ばう 風蘿坊【名】〔人〕『蘿の風に破れやすきに譬へていへりとぞ』**まつをばせを**(松尾芭蕉)の別號。

ふう-らふ 封臘【名】『英 Sealing-wax』書狀の封じ目、又は壜の栓部を塗りふさぐに用ふる蠟。パラフィンと松脂(マツヤニ)又はセルラック等の樹脂を混和し、テレビンを加へて融解し、顏料を交ぜ、型に入れて、棒狀に固めたるもの。使用に臨み、火熱にて熔して用ふ。ふうじらふ。

ふう-らん 風蘭【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。深山の樹の岐などに生ず。葉はやや萬年青(オモト)のに似て、細小に、夏の末、莖出でて、小形・白色の花開く。又、一種黃花なるもありて、共に香氣あり。

ふう-りう 風流【名】一先人の遺風。餘流。流風。二風度の溫雅なること。風雅。三ふりう(風流)に同じ。四ふりうだな(風流棚)の略。東鑑「風流一脚」五應の翼の羽の一部。四たち(胤)を云ふ。〔四國の方言〕

風流は寒いもの【句】雪見・梅見など、寒き季節にする風流なる遊の形容。〔諺語〕

ふうりう-か 風流家【名】**ふうりうじん**(風流人)に同じ。和合人「風流家の遊場となり」

ふうりう-がさ 風流傘【名】傘の一種。傘鉾(ホコ)の類にて、賀茂祭などの祭禮の行粧に用ふるもの。

ふうりう-きょくじゃみせん 風流曲三味線【名】〔書〕江島其磧の作れる浮世草子。三都及び諸國の遊里の事を記したるもの。六册。八文字屋七三味線の一。

ふうりう-ぐるま 風流車【名】美しき裝飾を施して、賀茂祭などの祭禮の行粧に用ふる車。

ふうりう-したけん-でん 風流志道軒傳【名】〔書〕風流・奇矯の文辭を以て、深井志道軒の略傳を書きたるもの。五卷。平賀源内の著。

ふうりう-じん 風流人【名】風流三を好む人。風雅人。風流家。風流者。

ふうりう-じゃ 風流者【名】前條に同じ。大鑑「花山の院は、風流者にこそおはしましけれ」

ふうりう-だな 風流棚【名】風流なる意匠にて裝飾したる棚。ふうりう。著聞「南都の僧六人に、風流棚を召されたりけるに、面面に仕立てて參らすとて、棚ごとに歌を詠みて附けたりけり」

ふうりう-ひば 風流檜葉【名】〔植〕**しやもひば**(軍鷄檜葉)に同じ。

ふうりう-ぼん 風流本【名】〔文〕『風流神代記』・『風流今平家』・『風流三國志』・『風流義經記』などの如く、表題に「風流」の二字を冠らせたるもの多きよりいふ。**うきよざうし**(浮世草子)に同じ。正德五年の江島屋の口上「八文字屋方より出で候ふ評判本、その他風流本、共に、前の作者とかはり、素人の新作に御座候ふ」

ふうりう-もの 風流物【名】樣樣に風流なる意匠を凝して造り、祭禮の時に持ち行く物。

ふう-りん 風輪【名】〔佛〕三輪の一。水輪の下に位し、この世界の最下底にして、廣さ無限、厚さ十六億由旬なりといふもの。その下は、何も無き虛空(コクウ)なれども、三輪に準じて、空輪と名づけ、合はせて、四輪とす。盛衰記「風輪の上に水輪あり」正統記「光音といふ天衆、空中に金色の雲を起し、梵天に遍布す。卽ち大雨を降らす。風輪の上に積りて、水輪となる」

ふう-りん 風鈴【名】一漢字の宋音』鐘に似て、極めて小く、內に舌ある物。軒端に吊り、その舌に紙片を添へて、風にゆらせ、その音を賞玩す。饗馬。風鐸。二園碁にて、打ち初むる前に、技倆劣れる方の者が、先づ聖目の外に、更に四隅へ一石づつ添へて、石を並ぶること。〔俚語〕

ふうりん-うめもどき 風鈴落霜紅【名】〔植〕冬青(ソヨゴ)科に屬する落葉小喬木。高さ一丈餘。葉は長楕圓形にして尖り、鋸齒を有し、互生す。五六月頃、小形・白色の花を著け、後、紅色の核果を結ぶ。山地に自生す。

ふうりん-さい 風輪菜【名】〔植〕**くるまば**(車花)に同じ。

ふうりん-ざい 風輪際【名】〔佛〕風輪の際限、卽ち一世界の最下底。風際。水鏡「本尊は、……十一面觀音の靈像なり。その石座は、風輪際より生じたる、方八尺の馬腦石とぞきこえける」

ふうりん-さう 風輪草【名】〔植〕一桔梗科に屬する二年生の草。高さ四尺內外、枝多く、葉は無柄にして、互生し、卵狀披針形をなし、鈍鋸齒あり。花は大形の鐘狀にして、五淺裂をなし、紫色・碧色又は白色を呈し、總狀花序をなして、六月頃開く。觀賞用として栽培す。二さくらさう(櫻草)一に同じ。

ふうりん-そば 風鈴蕎麥【名】『それを賣り歩く者が、その荷に風鈴を著けたるより名づく』卓袱(シッポク)三に同じ。〔德川時代の語〕

ふうりん-そばきり 風鈴蕎麥切【名】前

條に同じ。〔徳川時代の語〕

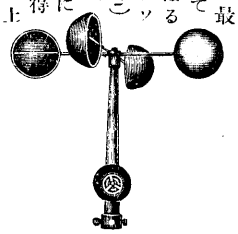
ふうりんそば-や 風鈴蕎麦屋【名】昔、風鈴蕎麦を賣りあるきし人。

ふうりん-つつじ 風鈴躑躅【名】〔植〕石南(シャクナゲ)科に屬する落葉灌木。高さ一丈に達す。葉は卵形・倒卵形又は楕圓形にして、互生し、白くして、紫紅色の條紋ある合瓣花を著く。山地に自生し、また觀賞用として栽培す。やうらくつつじ。

ふう-りょく 風力【名】㊀〔地〕『英Wind-force』風のちから。風の作用。㊁風の強さ。風速によりて定む。

ふうりょく-かい 風力階【名】〔地〕風力の強弱を區分するために設けたる階級。陸上にては、〇(靜穩。烟の直上する程度のもの。速度〇乃至一·五)・一(軟風。纔かに風ありと感ずる程度のもの。速度一·五乃至三·五)・二(和風。樹葉を動かす程度のもの。速度三·五乃至六·〇)・三(疾風。樹枝を動かす程度のもの。速度六·〇乃至一〇·〇)・四(强風。樹の大枝を動かす程度のもの。速度一〇·〇乃至一五·〇)・五(烈風。樹の大幹を動かす程度のもの。速力一五·〇乃至二九·〇)・六(颶風。樹を發き家を倒す程度のもの。速度二九·〇以上)の七階に分ち、海上にては、平穩(〇)・至輕風(一乃至二)・輕風(二乃至四)・軟風(四乃至六)・和風(六乃至八)・疾風(八乃至一〇)・雄風(一〇乃至一二)・强風(一二乃至一四)・疾强風(一四乃至一七)・大强風(一七乃至二〇)・全强風(二〇乃至二四)・暴風(二四乃至三〇)・颶風(三〇以上)の十二階に分つ。風速階。風階。風級。

ふうりょく-けい 風力計【名】『英Anemometer』風力を測度するための器械。種種あれど、最も簡便にして弘く世に行はるるは、ロビンソン(Robinson)氏のにして、その製、自由に廻轉するを得べき直立軸の上端に、十字桿を固定し、各桿の端に、風杯を取り附け、同一桿の兩端なる風杯は、一がその凹面を風に向くる時、他はその凸面を向くるやうにし、直立軸の下端は、齒車の裝置ありて、おのづから速度を示す。風速器。


(いけくよりうふ)

ぶうる 《英Pool》【名】水を湛めて、遊泳の用に供したる處。「よあ」に同じ。

ぶうるじょあ 《英Born-genis》【名】ぶるじょあじい《英Born-gentis》【名】ぶるじょあじい」に同じ。

ぶうるす-きゃっぷ 《英Foolscap》【名】長さ十五乃至十七インチ、幅十二三インチなる、印刷用又は書寫用の西洋紙。

ぶうるす 《英Bourse》【名】〔商〕『もと、佛語にて、商人會館・株式市場等の義』銀行家商人が集會して、賣買取引をなす所。

ふうるね 風涙【名】馬の旋毛(つむじ)の一。鬣の中にあるもの。「と。

ふ-うれ 不賣【名】賣行(うれゆき)よからぬこ

ふうれべつ 振別【名】〔地〕千島國九郡の一。擇捉(エトロフ)島の南部。根室支廳の所管。

ふうれん-こ 風連湖【名】〔地〕根室國根室郡にある湖。根室町の西四里。周回約十七里。鮭鱒を産す。

ふう-ろ 風露【名】㊀風と露と。㊁風に吹かるる露。

ふう-ろ 風爐【名】㊀ふろ(風爐)に同じ。㊁『英Wind(又Air) furnace』爐身短小にして、自然通風による火爐。高熱を要する場合に適し、主として、坩堝(ルツボ)溶解試金に使用す。坩堝爐。

ふうろ-さう 風露草・靴牛兒・靴牛兒苗【名】〔植〕靴牛兒科に屬する多年生の草。高さ二三尺、細く弱く、筎あり。葉は掌狀に分裂し、長き葉柄を具ふ。莖・葉共に毛茸を生ず。夏秋の候、白色又は帶紅色の五瓣花を開き、後、蒴果を結ぶ。山野に自生し、莖・葉は藥用に供す。痢病に効あり。

ふうろさう-くわ 靴牛兒科【名】〔植〕顯花植物・雙子葉門・被子類・離瓣花區の一科。草本又は半灌木。溫帶及び亞熱帶地方に産す。靴牛兒・天竺葵など、これに屬す。ぼうぎうじくわ。

ふうろさう-ゆ 風露草油【名】香料の一。歐洲産の靴牛兒(ゲラニウム)科の植物を蒸溜して得る、無色乃至類褐色の芳香ある液。げらにうむ油。

ふう-ね 風威【名】風の猛き勢。風の力。

ふう-ねん 風韻【名】風雅なるあぢはひ。風味。

ふ-え 笛【名】㊀吹きて鳴らす樂器の總名。竹・木又は金屬にて造り、數箇の孔を穿ちて、その一つを吹き、他の孔を、指にて開閉して、曲節をなすもの。管樂器。㊁よこぶえ(横笛)の略。

笛は思を口移(クチウツ)し【句】笛は、吹く人の心情を、その音にあらはす。〔諺語〕笛を吹けども踊らず【句】『新約全書の馬太傳第十章に出づ』いかに誘導と說き諭しても、少しも感ぜず。〔諺語〕

穴無き笛は、耳より外に音を聞くべし【句】無智の輩を悟れよ。隻手の音を聞け。〔諺語〕

竽(ウ)の笛【句】う(竽)に同じ。

ふえ 吭【名】『前條の語の轉義』のごぶえ(喉吭)の略。假名手本忠臣藏「切先(キッサキ)にて、ふえ刎ね切り、血刀投げ出し」

吭の鎖(クサリ)【句】喉吭の連り續きたる所。鎖のごとくなる喉吭。

吭を掻く【句】喉吭の所を掻き切る。

ふえ 鰾【名】〔動〕魚類の腹腔の背部、腸の上、肝臟の下にある膜嚢。筋肉纖維をまじへたる外層と、血管に富める內層とより成り、形は管狀・紡錘狀・卵狀・心臟狀等にして、中に氣體あり。これを弛張して、身體の浮沈を自在にし、又、呼吸・聽覺・發音・平衡等の作用を營む場合もあり。みづぶくろ。うきぶくろ。魚脬。

ふえい 浮榮【名】うきたる世上の榮華。

ふえい 浮影【名】水にうつりたる影。

ふえい 浮泳【名】浮びておよぐこと。浮泛して游述すること。「又その詩歌。

ふえい 賦咏【名】詩歌などを作ること。富み榮ゆること。

ふえい 富榮【名】富みて盛んになること。

ふ-えう 不要【名】ふよう(不用)に同じ。

ふ-えう 扶搖【名】㊀『ふ(扶)とえう(搖)との反切は、へうなるより、颻の義としていふ』あらし。はやて。暴風。㊁『莊子の在宥篇に「雲將東遊、過ニ扶搖之枝一而適遭ニ鴻蒙一」とあり』ふさう(扶桑)㊀に同じ。「同じ。

[夫搖]

ふ-えう 賦徭・賦傜【名】ふえき(賦役)に同じ。

ふえういん-さいむ 不要因債務【名】〔法〕『獨Unterlasse Obligation』不要因債權を、義務者の方面より見たるもの。(要因債務に對して)

ふえういん-しょうけん 不要因證券【名】〔法〕『獨Alsstrakes Wertpapier』ちうしやうてきしょうけん(抽象的證券)に同じ。

ふえういん-さいけん 不要因債權【名】〔法〕『獨Alsstrakte Forderung』手形上の債權のごとく、その發生原因の何たるを問はず、且つこれと關係なく成立する債權。(要因債權に對して)

ふえうしき-かうね 不要式行爲【名】〔法〕『獨Formloses Rechtsgesch-äft』その成立及び完全なる効力の發生に、一定の法式を要せぬ法律行爲。(要式行爲に對して)

ふえうしき-けいやく 不要式契約【名】〔法〕『獨Formloses Vertrag』その成立及び完全なる効力の發生に、一定の方式を要せぬ契約。(要式契約に對して)

ふえ-うり 笛賣【名】笛を賣る人。江戸職人歌合「ふえうり。笛竹のむなしき戀に日ひと日を思ひくらしのねをのみぞなく」

ふええりんぐ-えき フエエリング液(英Fellling's solution)【名】〔化〕糖類の定量分析に用ふる藥液。暗青色を呈し、放置すれば分解す。ふええりんぐ氏溶液。

ふええりんぐし-ようえき フエエリング氏溶液【名】〔化〕前條に同じ。

ふええりんぐ-そりゅうしょん (英Fellling's solution)【名】〔化〕前條に同じ。

ふえ-かた 笛方【名】能樂の囃方の內、笛を吹くことを掌る人。「ヒ。

ふえ-からみ 吭絡【名】さこう(鎖喉)に同じ。

ふえき 夫役【名】地方自治體の公課の一。特に必要なる場合、又は金錢上の收入十分ならざる場合に、單純なる勞役を課するもの。ぶやく(夫役)參照。

ふ-えき 不易【名】かはらざること。移らぬこと。正統寫平安城に移さる。……數十代不易の都となりぬる、誠に王氣相應の福地たるにや」

不易の法【句】變易すべからざる法制。【鎌倉時代の語】

不易・流行【句】〔文〕俳句の、萬代に渉りて、面白味の易(カ)らざるものと、當座の面白みのみにて、時を經ては、價値を減ずるものと。例へば、芭蕉の「山路來て何やらゆかし菫草」のごときは前者、其角の「丸腰の冶郎笠取れ星迎」のごときは後者。芭蕉の唱へ初めし名目なりと傳ふ。

ふ-えき 符益【名】『國符によりて、官の益する義』古、民部省の國符(フ)によりて、調・庸を納めしめしもの。(符損に對して)「徭。

ふ-えき 賦役【名】租稅と夫役(ブヤク)と。賦

ぶ-えき 無益【名】むえき(無益)に同じ。

ぶ-えき 無射【名】一〔音〕じょにりつ(十二律)を見よ。二陰曆九月の異稱。

ふえき-そう 不易層【名】〔地〕こうをんたい(恒溫帶)に同じ。

ふえき-のり 不易糊【名】ぼうふのり(防腐「糊」に同じ。

ふえき-ざ 笛座【名】能舞臺にて、笛方の坐する場所。ふえばしら(笛柱)參照。

ふえ-ざし 笛差【名】扇を、右方の腰に差すこと。夏山雜談「蝙蝠或は扇子を隨身するには、常に手に持つなり。懷中の時は、柄の方を懷に差入るるなり。右のかたの腰に指す時は、笛差といふ。後に指すを、矢筈指(ヤハズサシ)といふ。左の腰に指すは無き事なりと、或人云へり」

ふえすつうん (英 Hestoun)【名】通常、花・葉又は枝を絡み合はせ、束ねなどしたる形に作りたる、建築用の裝飾。

ふえ-せい 笛生【名】古、雅樂(ガ)寮の職員の一。種種の笛を吹くことを習ひし者。

ふえ-だくみ 笛工【名】笛を吹奏する人。ふえふき。

夫本「節會(セチヱ)には、そのくず人、笛工は參りて、御菜を參らするなり」

ふえ-たけ 笛竹【名】『てきちく(笛竹)の直譯か』竹にて造れる笛。たけぶえ。〔古語〕

基俊集「笛竹のあなあさましの世の中やありしや節の限なるらん」

ふえつ 傅說【名】〔人〕支那殷の武丁の賢相。初、武丁、夢に賢相を得、その名を說と云ふと見たれども、朝臣百官中に似たる者なかりしより、廣く天下に求めしに、當時、山西の地に力役して、罪人に代り、生活の資を得る者ありて、名を說と云へるを迎へて相見ゆるに、夢と合致せしかば、擧げて相となし、國政を委せ、中興の業を大成するを得たりと傳ふ。

ふ-えて 不得手【名】一得手ならぬこと。長ぜぬこと。不得意。二嗜まぬこと。

ふえ-どう 笛籐【名】弓に卷きつけたる籐を赤く塗り、その他の部分は、黑く塗りたるさま、笛の如くなるもの。盛衰記「高綱は、……笛籐の弓の眞中とり」

ふえ-とがめ 笛答【名】笛を吹く時の取扱方の誤を咎むること。盛衰記「蟬折(セミヲレ)といふ笛は、……高松中納言實年、……、すき聲のしけるを咳めんとて、普通様に思ひつつ、膝の下に押しかひて、又取り上げ吹かんとしけるに、笛咎や思ひけん、取外して、落して、蟬を打折りけり」

ふえのおる (英 Phenol)【名】〔化〕せきたんさん(石炭酸)に同じ。

ふえのおる-ふたれえん (英 Phenol phthalein)【名】〔化〕有機化合物の一。無水フタル酸と石炭酸とを、濃硫酸と共に煮して得る、淡黃色の結晶。水に溶け難けれども、酒精にはよく溶解す。酸(サン)に溶解すれば、無色の溶液を生じ、それを鹽基性になせば、鮮紅色を呈す。酸及びアルカリの定量に對する指示藥として用ふ。

ふえ-のし 笛師【名】一笛を吹きかなづることを業とする人。二古、雅樂(ガ)寮の職員の一。種種の笛を吹奏することを敎へし者。

ふえ-ばしら 笛柱【名】能舞臺の四隅にある柱の一。笛座(ブエ)の側、卽ち向ひて、右の方の奥にあるもの。鐵の鉋(カナ)を打ちて、道成寺の曲を演ずる時、釣鐘を吊る綱の一端を結ぶためにす。

ふえ-ふき 笛吹【名】一笛を吹く人。源氏「この笛ふきども、まだいとをさなげにて」二古、雅樂(ガ)寮に屬し、朝儀の時、吹奏の事に從事せし者。三〔動〕やから(矢柄)に同じ。

ふえふき-がは 笛吹川【名】〔地〕甲斐國にある川。源を同國東山梨郡の千丈ガ嶽の東に發して南流し、下流は釜無川と合して、富士川となる。長さ十五里餘。別稱、子酉(ネトリ)川。「(口火鯛)に同じ。

ふえふき-だひ 笛吹鯛【名】〔動〕くちびだひ

ふえふき-の-いけ 笛吹池【名】〔地〕大和國南葛城(カツラギ)郡忍海(オシノミ)村笛吹の北、梅室にある池。六帖「笛吹の池の堤は遠くとも近くとひなば忘れざらなん」

ふえふき-むし 笛吹蟲【名】〔動〕はたおり(機織)二に同じ。

ふえふき-やま 笛吹山【名】〔地〕一丹波國多紀郡にある山。夫本「あしびきの笛吹山の松風によろづ代の秋しらべこそすれ」二大和國南葛城(カツラギ)郡忍海(オシノミ)村にある山。

ふえ-ぶくろ 笛袋【名】笛を入れ置く袋。

ふえふ-びやう 腐葉病【名】馬鈴薯に發する、傳染性の病害。葉、次第に腐敗して、黑色に變じ、枯死するに至るもの。

ふえ-まき 笛卷【名】一刀の鞘の所所に籐を卷きて、その部分を赤く塗り、その他の部分は黑く塗りたるさま、笛の如くなるもの。來鞘と共に旗本の次男・三男など愛用す。二はでにて、上品ならず。三浦鮮のごとき製品を、尺八ほどの大いさの竹に卷きつけて、よく煮、水に冷して、竹を拔き取りて切り、次條の實とするもの。

ふえまき-じる 笛卷汁【名】笛卷二を實としたる汁物。

ふえ-まち 笛待【名】笛の音にて、鹿を誘ひ寄せて、討ち取ること。まち(待)二參照。盛衰記「春・夏はねらひ射、秋・冬は、笛待・落(オト)・くくり・押上(オシアゲ)・犬山など」

ふえん 不緣【名】嫁婿の緣遠きこと、又、緣組の破談になること。離緣。

ふ-えん 敷衍・敷演・布演【名】ひきのばすこと。ひろぐること。

ふえん 浮堰【名】うきせき(浮堰)に同じ。

ぶ-えん 無鹽・不塩【名】一魚介の、鹽に漬けず、生のままなること。平家「何をもあたらしき物をば、無鹽といふぞと心得て」二うぶ。手入らず。新鮮。膝栗毛「平(ヒラ)は何だ。卵のぶはぶはか。……。今生むのを待つてゐたと見えた。こいつは無鹽だ。奇妙、奇妙」雅鳥宅(ガ)にやあ、こんな可愛らしい不鹽の娘を引摺り込んで」

ぶえん 無鹽・無塩【名】〔人〕一支那齊の宣王の后となりし人。容貌非常に醜なりしを以て名高し。二しこめ。醜婦。

ふえりしやんくわ-かりうむ フエリシヤン化加留謨【名】〔化〕せきけつえん(赤血鹽)に同じ。

ふえりしやんくわ-ほったしうむ フエリシヤン化剝篤謨【名】〔化〕前條に同じ。

ふえりしやんさん-かり フエリシヤン酸加里【名】〔化〕前條に同じ。

ふえると (英 Helt)【名】『毛氈の義』獸毛を、石鹼液又は硫酸液に浸し、壓搾して作りたる布地。帽子・敷物・草履などの材料とす。

ふえろしやんくわ-かりうむ フエロシヤン化加留謨【名】〔化〕わうけつえん(黃血鹽)に同じ。

ふおいえるぼっ-は-の-ていり フオイエルバッハの定理【句】〔數〕『英 Feuerbach's theorem』三角形の九點圓(キウテン)は、その內接圓及び傍接圓に切するといふ定理。

ふおおく《英 Fork》【名】西洋料理に用ひる金屬製の、小きやすの如き器具。肉などを刺し取りて食するに用ふ。にくさし。ほおく。

ふおすふおる-せいどう フオスフオル青銅《英 Phosphor-bronze》【名】銅と錫と燐との合金。燐の含量は、用途に從ひて、同一ならざれど、千分の二內外を普通とし、性質强靱・堅緻、海水等の腐蝕に對する抵抗力に富む。燐青銅。

ふおつけ【名】ふじる(節汁)に同じ。

ふおん 訃音【名】ふいん(訃音)に同じ。

ふおん 父音【名】〔語〕ふいん(父音)に同じ。

ぶおん 武恩【名】武道の恩賞。太平記「この猿樂をして遊ぶことも、偏に武恩の餘慶なり」太平記「某、不肖の身なりと雖も、武恩を蒙りて、齡、已に七旬に餘れり」

ぶ-おん 部音【名】〔音〕『英 Partial tone』■ぶいおん(倍音)に同じ。■その振動數が、原音の二、三、四、五倍なると否とに關らず、常に原音に伴なひて生ずる振動、即ち結合音を形成する要素たる樂音。

ふおんじゅ-かい 不飲酒戒【名】〔佛〕五戒・八戒・十戒などの戒の一。飲酒を禁止すること。

ふおんせっと《伊 Falsetto》【名】〔音〕最高音を發するに、地聲を避けて、最も美しく發するもの。頭聲。

ふおんたんし-せいうけい フオルタン氏晴雨計(英 Fortin's barometer)【名】水銀晴雨計の一種。水銀を盛りたる器に、水銀を充たしたる直管を倒立し、器底を、螺旋にて少しく上下して、水銀面を整ふるやうに裝置せるもの。山嶽用晴雨計。

ふおんて《伊 Forte》【名】〔音〕樂曲の一部分の强聲となるべきを示す記號。樂譜上には f と略記す。「るむあるでひど」を見よ。

ふおんまりん《英 Formalin》【名】〔化〕ふおふおるまりん

ふおふおるまりん-すい フオルマリン水《羅 Aqua formalinæ》【名】傳染病消毒藥の一。日本藥局方の規定によれば、フオルマリン一分と常水三四分との比例にて混和せるもの。器具の消毒には適すれども、蛋白質とアンモニヤ等を含める糞便・排泄物の消毒には効なし。

ふおるむ-あるでひど《英 Formaldehyde》【名】〔化〕メチルアルコオルの蒸氣と空氣との混合氣を、灼熱せる白金粉の上を通過せしむる時、不全燃燒によりて生ずる、無色の氣體。一種特別の臭氣あり。殺菌性を有す。皮革又は人造絹の製造に用ひ、その水溶液はフオルマリンと稱し、無色・澁明にして、中性又は弱酸性を示し、消毒劑及びジエラチン膜製造用に供す。

ふおるむあるでひど-えき フオルムアルデヒド液(羅 Formaldehydum solutum)【名】〔化〕ふおるまりんに同じ。

ふおるもさ《英 Formosa》【名】〔地〕『西曆第十六世紀の頃、葡萄牙の航海者が、印度洋を超えて、東方に進出し來りし時、その樹木の翠鬱たるを嘆美して Ilha formosa(美島の義)と呼びしに本づく』たいわん(臺灣)に同じ。

ふか【名】魚の鰭の一部。

ふか 鱶鮫【名】〔動〕さめ(鮫)を云ふ。〔譬〕內山陽山陰西海諸國の方言〕

ふか 鱶の鰭(ヒレ)【句】せいし(精翅)に同じ。「俵物(タハラモノ)の三品」參照。

ふか 鱶のやうな鼾(イビキ)【句】はげしき鼾の形容。〔諺語〕

ふか 鱶ほど寢入る【句】鼾(イビキ)をかきて寢入る。義經千本櫻「鱶ほど寢入る佛御達の臍繰(ヘソクリ)を盜み出し」

ふか 不可【名】然あるべからぬこと。「き疾病。不快。

ふか 不佳【名】■よからぬこと。■輕

ふか 夫家【名】をっとのいへ。

ふか 富家【名】ふうか(富家)に同じ。

ふか 婦家【名】婦の生家。妻のさと。

ふか 浮家【名】ふね(船)の異稱。下家集「浮家、船之異名也」

浮家泛宅(ハンタク)【句】『新唐書の隱逸傳に「張志和自稱二烟波釣徒一。顏眞卿爲二湖洲刺史一、欲レ館レ之、以二舟敝漏一請レ更レ之。志和曰、願爲二浮家泛宅一、往二來苕霅間一」とあり』前條に同じ。

ふか 斧柯【名】■斧の柄。■〔美〕畫題の一。深山にて、仙人が圍碁をなし、傍に樵夫の立ちて眺めをるを圖す。「斧の柄(エ)朽つ」參照。

斧柯を用ふ【句】「兩葉にして去らざれば、將に斧柯を用ひんとす」を見よ。

ふか 府下【名】府のうち。府のもと。

ふか 附加【名】つけくはふること。たし。追加。

ふか 負荷【名】■かつぐこと。になふこと。■左傳の昭公七年の條に「其父折レ薪、其子弗レ克二負荷一」とあるに本づく』父の業をうけつぎて、よくその任に堪ふること。■師の學をうけつぎ、又は廣く任務を負はせられて、よくこれに堪ふること。■『英 Load』或物體の、外力の働を受くること。荷重。

ふか 深【接頭】深き意。ふけ。「ふか靴」「ふかそぎ」

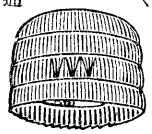
ふか 不雅【名】風雅ならぬこと。みやびならぬこと。ぶうりう。俗。

ふか 部下【名】或人の支配に屬する人。てした。てか。

ふか 舞歌【名】かぶ(歌舞)に同じ。謠曲(道明寺)「ただ今かなづる舞歌の曲、七德(シチトク)・賽調・七(シチ)拍子」

ぶか 無雅【名】ぶが(不雅)に同じ。和合人「舊跡多くあれども、無雅の者どもゆゑ、これを尋ねようとする心は無く」

ふか-あみがさ 深編笠【名】■深く造りたる編笠。面體をかくすために、浪人などの被りしもの。八笑人「牛合羽の上へ、坊主合羽・深編笠といふ拵(コシラヘ)だ」■紋所の一。普通の編笠のやや深めの形に描けるもの。



(■さがみあかふ)

ふかい-かう 不開港【名】外國との通商貿易を許さぬ港。(開港に對して)

ふかいかう-ぢやう 不開港場・不開港場【名】前條に同じ。(開港場に對して)

ふかい-いり 深入【名】■敵地に、深く入り込むこと。太平記「深入して擊たれてけり」■物事に溺るること。

ふかう 不幸【名】■ふしあはせ(不仕合)に同じ。宇治「いみじく不幸なりける侍の、夜晝まめなるが、冬なれど、かたびらをなん著たりける」■『漢書の蘇武傳に「來時大夫人已不幸、陵送葬至二陽陵一」とあり』親しき人の死にたること。

ふかう 不孝【名】■親によく仕へぬこと。孝行せぬこと。■八虐の一。祖父母・父母を告言詛罵し、祖父母・父母在すに、籍を分ち、財を異にし、若しくは供養を缺き、父母の喪に居ながら、身自ら嫁娶し、又は音樂をなし、服を釋きて、これに從はず、或は祖父母・父母の喪を聞きながら、匿して、哀を擧げず、詐りて、祖父母・父母の死を稱すること。

不孝な子が可愛い【句】親には、不孝なる我が子が、ふびんに思はれ、却りて可愛し。〔諺語〕

ふかう 不行【名】ふぎやうじやう(不行狀)に同じ。

ふかう 布告【名】ふこく(布告)に同じ。

ふかう 負項【名】〔數〕『英 Negative term』代數式に於ける項の一。負號を有するもの。(正項に對して)

ふかう 不幸【副】「不幸にして」の略。

不幸にして【句】不幸なる事には。運わるく。

ふがう 符號【名】あひじるし。記號。

ふがう 負號【名】〔數〕『英 Negative sign』減ずべき量の前に、その符號として記すもの、即ち一(マイナス)。負記號。負符號。(正號に對して)

ふがう 富豪【名】富みたる人。かねもち。

ふがう 腐毫【名】■古くなりて、用に立たぬ筆。又それにて書けるもの。禿筆。■自己の筆蹟書狀などの謙稱。禿筆。

ぶ-かう 武江【名】〔地〕『武藏國に在る江戸の義』えど(江戸)の異稱。東武。武府。

ふかう-せかい 浮香世界【名】〔佛〕しゆかうせかい(衆香世界)の誤。大平記「兩國の香爐を兩机に並べて、一斤の名香を一度に炷(た)き上げたれば、香風、四方に散じて、人、皆、浮香世界中に在るが如し」

ふかう-ていそく 符號定則【名】〔數〕『英Law of signs』代數學にて、乘法・除法の場合に、乘數と被乘數と、又、除數と被除數とが同符號なれば、積又は商は正號、異符號なれば、負號を有すといふ定則。

ふかう-でう 風香調・譜香調【名】琵琶の調子の一。(反風香調に對して)平家「譜香調の内には、花、芬馥の氣を含み、流泉曲の間には、月、清明の光を爭ふ」

ふかう-どり 不孝鳥【名】〔動〕『けうあく(梟惡)を見よ』ふくろふ(梟)の異稱。

ぶかう-ねんぺう 武江年表【名】〔書〕天正十八年より嘉永元年まで二百五十九年間に於ける江戸の年表。主に地理の沿革、坊間の風俗を載す。八卷。齋藤月岑(ツキミネ)の著。

ふかう-はん 不行犯【名】〔法〕不行爲によりて侵したる犯罪。消極行爲によりて成立するもの。(行犯に對して)

ぶかう-ひしや 武江披沙【名】〔書〕江戸の地誌。四卷。太田南畝の著。

ふかう-もの 不孝者【名】親に不孝なる者。不孝なる人。

不孝者の親呪(ノロヒ)【句】不孝なる人が、自己の非を悟らずして、却りて、親の仕向を怨むこと。〔諺語〕

ふかう-る 不孝流【名】中古の五つの流罪の一。祖父母・父母の事を告げ訴へし者の從犯を、流とせしこと。(主犯は、絞す)

ふかう-るめ 鱶潤目・鱶鰭【名】せいし(精翅)に同じ。

ふ-かうゐ 不行爲【名】〔法〕法律の命ずる行爲をなさざること。不作爲。消極行爲。(行爲に對して)

ふかうゐ-ぎむ 不行爲義務【名】〔法〕ふさくゐぎむ(不作爲義務)に同じ。(行爲義務に對して)

ふかえ 深江【名】〔地〕一 肥前國福江(フクエ)の別稱。二 攝津國東成(ヒガシナリ)郡南新開莊(シヤウ)村の大字。一代女「深江のお七ざしの加賀笠」

ふかえ-がさ 深江笠【名】前條二の地より産せし笠。箱根雲驗記攷討「大阪出てから早玉造(タマツクリ)・笠を買ふなら、深江が名所、諷ふ聲さへはんなりと。名代の深江笠、著連れて急ぐ伊勢參」

ふか-ゐ 不可解【名】解すべからざること。わからぬこと。不可思議。

ふかう-りよく 不可抗力【名】一〔法〕『佛Force majeure』天災又は意外の變に因り、何人も抗拒すべからず、又避くべからずして、その意に非ざる所爲をも敢てなさざるべからざるに至るが如き强制力。二 自己の力を以ては、抵抗することの能はざる外力。

不可抗力の危險【句】〔經〕不可抗力の災害より生ずる危險。

不可抗力の損失【句】〔經〕不可抗力の災害より生ずる損失。

ふか-かぢ 深舵【名】船を進むるに、舵を深く水に入るること。この方法に依る時は、進行鈍けれども、動搖の度少し。(淺舵に對して)

ふかがは 深川【名】〔地〕一 東京市十五區の一。二 江戸時代に深川仲町(ナカチヤウ)に在りし遊所。繁千話「一體(テイ)已(テイ)あ、吉原で育つたから、深川へ行くと、水あたりがするよ」

深川の古池(フルイケ)【句】江戸深川の芭蕉庵の庭にありて、松尾芭蕉の「古池や蛙飛込む水の音」の句を吟ぜし池。俳諧水論「古池や蛙込む水の音と吟じては、心に閑を催し、……この池、今は諸侯の邸中になりしが、昔の姿をも變へず、世に深川の古池とは申しけり」

ふかがは-よひ 深川通【名】たつみがよひ(辰巳通)に同じ。

ふかがは-けん 深川拳【名】拳(ケン)の一種。

ふかがは-こうゑん 深川公園【名】〔地〕東京市深川區にある公園。境内に八幡宮・圖書館あり。明治六年に開園す。

ふかがは-しふ 深川集【名】〔書〕松尾芭蕉及びその門人酒堂(シユタウ)・嵐蘭・貸水・杉風・曾良(ソラ)その他十數名の、深川夜遊・草庵の留守・松の中・忘年書僕などの題にて物せし連吟を記せるもの。一卷。濱田酒堂の編。

ふかがは-ずし 深川鮨【名】元祿の頃、江戸深川富吉町の柏屋にて賣りし鮨。

ふかがは-せん 深川錢【名】享保十一年より同十七年まで、及び元文元年に江戸深川十萬坪の錢座にて鑄造せし寛永銅錢。徑八分强、重量八分。

ふかがは-はちひん 深川八貧【名】松尾芭蕉の芭蕉庵に、或冬の夜、數人の者相會せしに、食ふ物なかりしより、各出でて、これを買ひ來り、服部嵐雪は殘りて、飯焚の任に當り、さて後、雪の題を探りて、各、句を作りしこと。芭蕉「深川八貧の中、來買ひにゆき(雪)の袋や投頭巾」

ふかがは-はちまんぐう 深川八幡宮【名】東京市深川區深川公園内に鎭座せる富岡(トミオカ)八幡宮の通稱。江東第一の大社にて、府社に列す。もと砂村の海岸に在り、足利氏累世崇拜せし古祠なりしを、寛文四年今の地に移す。富岡はその附近の稱呼にて、寛永中、長盛法師海濱を埋立てて、永代島と呼びしを、改稱せるなり。社邊に、伎女等多く、賑かなり。

ふかがは-めし 深川飯【名】蜆などのむき身の汁をかけて賣る一膳めし。〔東京の語〕

ふか-きかん 附加期間【名】〔法〕『獨Nachfrist』原告又は被告が、住居地と裁判所との間の道の遠隔せるために、或はその他の原因にて、訴訟上の書類の送達などに日數を要すべきによりて、法律上の期間に附加したる期間。

ふか-きず 深疵【名】手重き疵。實說奇極山「平馬之丞、頻先深疵」「種。

ふかく 不恪【名】謹まざること。敬はざること。

ふかく 不覺【名】一〔佛〕一切衆生(シユジヤウ)の自己心性の平等覺悟。一切の凡夫地。これがために、業(ゴフ)を作り、生死(シヤウジ)の果を受く。二 病氣不注意又は勇氣に乏しきなどのために、心のたしかならぬこと。不覺悟。榮花「院の御心地不覺になりて、二月八日に失せたまひぬ」榮華記「心際(キハ)不覺なしとて、身を放たず召使ひたまひけり」

不覺の涙【句】心弱くして、覺えず知らず落す涙。謠曲「大原御幸」再び龍顏にあひ奉り、不覺の涙に、袖を絞る」

ふかく 浮客【名】本籍を脫して、浮浪する者。

ふかく 負角【名】〔數〕『英Negative angle』三角法にて、角を正・負に區別したる内の、負の角。通常、その一邊が、他の邊の位置より、時計の針の進む方向と同一の方向に廻轉したるもの。(正角に對して)

ふかく 俯角【名】一〔數〕『英Angle of depression』垂直角の一邊が水平にして、他の一邊が下に向ふ時の角、即ち測角すべき物體が、測點より低位置にある場合の角。(仰角・水平角に對して)二〔理〕ふくかく(伏角)に同じ。

ふ-がく 不學【名】學ばぬこと。無學。

ふ-がく 不學・亡術【句】『漢書の霍光傳に「光不學、亡術、闇于大理」とあり』學術の素養なきこと。

ふ-がく 府學【名】古、京都の大學、諸國の國學に對して、太宰府に置かれし學校。

ふ-がく 婦學【名】女子の學問。

ふ-がく 富嶽【名】〔地〕ふじさん(富士山)に同じ。

ぶ-かく 舞鶴【名】飛びて舞ふ鶴。翼をひろげて舞ひ遊ぶ鶴。まひづる。

ぶ-かく 舞閣【名】舞を演ずる樓閣。

ぶ-がく 舞樂【名】雅樂の、舞を伴なふもの。增鏡「舞樂、さまざまの曲など、手を盡されけり」

ぶ-かく 武學【名】へいがく(兵學)に同じ。

ふかくご 不覺悟【名】ふかく(不覺)に同じ。織留「かかる不覺悟の親」

ふかくご-もの 不覺悟者【名】ふかくもの(不覺者)に同じ。天の網島「この兄をさへだます不覺悟者」

ふかくさ 深草【名】〔地〕山城國紀伊郡にある村。古の深草郷にて、稻荷神社(俗稱、伏見の稻荷)以南、大亀谷(オホカメ)に至る間にて、伏見・京都間の一條の街路に沿ひて、民家連續し、稻荷神社の外、藤森(フヂノモリ)神社・寶塔寺・瑞光寺・眞宗院・安樂行院・深草陵・後深草陵・法華堂陵などあり。古今「年を經て住みこし里を出でていなばいとどふかくさ野とやなりなん」

ふかくさうちは 深草團扇【名】『もと、山城國深草より製出せしよりいふか』團扇の一種。柄は骨と連續せず、細く裂きし竹の骨を闊く擴げて、紙を張り、これに桐の白木又は漆塗の木にて造りたる柄をはめて固定せしめ、柄には、總(ふさ)を附けて、飾とす。損じ易きより、今は廢る。

ふかくさ-がはらけ 深草土器【名】山城國深草の里にて燒き出だしし土器。著聞「正月朔日、深草がはらけ持て參りたりけるに、酒など飲ませて」

ふかくさがはらけ-し 深草土器師【名】深草土器を製造する陶工。

ふかくさ-どの 深草殿【名】古、山城國深草にありし離宮。**ふかくさほっけだう**(深草法華堂)參照。拾遺「夜に入りて、深草殿へ𛀆て渡し奉る」

ふかくさ-の-せうしやう 深草少將【名】〔人〕平安朝時代に、山城國深草に住せし人。名は義宣。時に、小野(ヲノ)庄なる小町とて、和歌を善くせし美女を見て、慇懃を通ぜんことを請ひしに、小町、百夜通ひ續けたらんにはと約したれど、遂に果さずして、弘治三年歿す。**かよひこまち**(通小町)參照。

ふかくさ-の-みかど 深草帝【名】〔人〕『御陵の所在地によりていふ』**にんみやうてんわう**(仁明天皇)の異稱。

ふかくさ-の-みささぎ 深草陵【名】仁明天皇の御陵。山城國紀伊郡深草村大字深草の東、字瓦町の南方字伊達町の畑中に在り。俗稱、東車塚。慶應年中、天皇の陵と定む。その西に西車塚といふものあり、女御藤原貞子の墓たるべしといふ。

ふかくさ-びな 深草雛【名】山城國深草の里にて製出せし土燒の雛人形。高さ五寸餘の坐雛(スヱビナ)にて、美しき彩色あり。

ふかくさほっけだう 深草法華堂【名】後深草・伏見・後伏見・後光嚴・後圓融・後小松・稱光・後土御門・後柏原・後奈良・正親町(オホギマチ)・後陽成の諸天皇の御陵。山城國紀伊郡深草村大字深草安樂行院内にあり。もと深草殿の舊地にて、塋域廣かりしに、後年退轉して、法華堂のみ殘りしを、寛文二年、空心といふ僧、今の敷地のごとくに再建す。

ふかくさほっけだう-の-みささぎ 深草法華堂陵【名】前條に同じ。

ふかくさ-まつり 深草祭【名】**ふぢのもりじんじや**(藤森神社)を見よ。狂言「見物左衛門」「今日は加茂の競馬、深草祭でござる。毎年見物に參る。今日も參らうと存ずる」

ふかくさ-やき 深草燒【名】山城國深草の里にて製造せし陶器。素燒にして、表面には押型模樣を出し、裏面には「ふかくさ」又は「深草」の印あり。

ふかくさ-やま 深草山【名】〔地〕山城國紀伊郡の東部にある山。拾遺「夏來れば深草山のほととぎす鳴く聲しげくなりまさるなり」

ふかくさ-りう 深草流【名】■德川時代の男子の髪の結ひ方の一。八代物語「髪は深草流にゆるやかに」■〔佛〕『流祖開空、山城國深草に眞宗流を創建せしよりいふ』淨土宗西山(セイザン)派の一流。開空を祖とす。

ふかくじ 舞樂寺【名】**やましなごほう**(山科五宮)を見よ。「御坊」

ふかくじつ 不確實【名】確實ならぬこと。ふたしか。

ふかくしや 不覺者【名】**ふかくもの**(不覺者)に同じ。

ふかくしや 不學者【名】不學なる人。學問したる事なき人。「(舞鶴城)に同じ。

ふかくじやう 舞鶴城【名】**まひづるじやう**

ふかくちなし 深梔子・深支子【名】梔子色の、赤み多きもの。延喜式「深支子綾」

ふかぐつ 深靴・深沓・深履【名】古、雨雪の時の料に、革にて、深く足をおほふやうに造りし沓。**ほうくわ**(半靴)參照。枕「ふかぐつ・はうくわなどのきはまで、雪の、いと白くかかりたるこそをかしけれ」

ふかくてい 不確定【名】確定せぬこと。

ふかくてい-きげん 不確定期限【名】〔法〕來るべき期限の、豫め確定せざるもの。(確定期限に對して)

ふかくてい-きじつ 不確定期日【名】豫め確定せざる期日。(確定期日に對して)

ふかくてい-けいひ 不確定經費【名】その支出及び金額が、法令によりて確定せざる國家の經費。(確定經費に對して)

ふかくてい-こうさい 不確定公債【名】〔經〕**りうどうこうさい**(流動公債)に同じ。(確定公債に對して)

ふかくてい-さいむ 不確定債務【名】〔法〕債權の目的たる給付の確定せざる債務。(確定債務に對して)

ふかくてい-しうにふ 不確定收入【名】〔商〕豫め確定せざる收入。例へば取引・周旋等による收入。(確定收入に對して)

ふかくてい-すいそく 不確定推測【名】〔法〕反證を擧げて覆すことを許す推定。

ふかくてい-てすうれう 不確定手數料【名】その額が、事件の大小等によりて、確定せざる手數料。(確定手數料に對して)

ふかくてい-めいだい 不確定命題【名】〔哲〕『英 Indefinite proposition』**ふしていめいだい**(不指定命題)に同じ。(確定命題に對して)

ふかくにん 不覺人【名】次條に同じ。

ふかくもの 不覺者【名】不覺人。かかる大事を思ひたちて、一いくさだにせずして」曾我「年頃の傍輩の討たれたまふを見捨て逃ぐる不覺人や候ふべき」

ふかくもの 不覺者【名】不覺なる人。不注意又は勇氣乏しくして失策する人。ふかくしや。ふかくにん。

ふかけ 蹈懸【名】雅樂の太平樂などにて、舞人の裝束に用ふる脛當。赤地の大和錦にて、脚絆の如くにつくり、上下に、組絲の括緒を附く。

ふかけい 附加刑【名】〔法〕主刑の効力を確實にし、再犯を豫防する目的を以て、その主刑に附加する刑。舊刑法に於ては、剝奪公權・停止公權・刑事禁治産・監視・贖金沒收の六種を認めたれども、新刑法には、ただ沒收のみを附加刑とす。

ふかけいしよぶん 附加刑處分【名】〔法〕舊刑法にて、公權剝奪の如き權利上に就きて、又監視の如き自由上に就きて、又贖金の如き財産上に就きての附加刑を科すること。

ふかさは 深澤【名】底の深き澤。和泉式部集「ふか澤の菰はかたみに刈りけれど君が涙の玉ぞかかれる」

ふかさはだ 深澤田【名】水の深き澤田。深き澤の邊にある田。和泉式部集「ふか澤田みぎはがくれの眞菰草きのふあやめに引かされにけり」

ふかざれ 深戲【名】濃かにざるること。飽くまでふざくること。こはざれ。重睡子「時の座興の深ざれも、過去の惡世の緣ならめ」

ふかし 蒸【名】■ふかすこと、又ふかしたる工合。■**ふかしいも**(蒸薯)の略。

ふかし 深志【名】〔地〕信濃國松本の古稱。

ふかし 深し【形一】■底の方とほし。奥の方はるかなり。(淺しに對して)■心・交際など、かりそめならず。淺はかならず。こまやかなり。續拾遺「胸のうちにすむ月影のほかにまた深き御法(ミノリ)の心やはある」傾城酒呑童子「花紫が深い客、長堀の粹樣」■色濃し。更(ふ)けたり。(夜又は月かげなど)續古今「秋霧の朝立つ山に妻こめてまだ夜ふかしと鹿の鳴くらん」深き窟【句】**しんさう**(深窟)に同じ。源氏「思ひやる方なき深き窟の内に」

深く取って淺く渉る【句】『淺き川をも深く思ひて渉るに譬へていふ』小き事をも輕んぜず、用心深く處す。〔諺語〕

ふかし 深し【形二】『前條の訛』程度・數など、すぐれてあり。甚し。釜好法師物見車「年寄って、深しい事は存ぜぬが」「ふかし。

ふかし-いも 蒸薯【名】ふかせし薯摩薯。

ふかし-がま 蒸釜【名】ふかすために用ふる釜。むしがま。

ふかし-ぎ 不可思議【名】思ひ議(はか)るべからざること。思慮・言議を絶したること。考へつかぬこと。異様。不思議。

ふかしぎ-そん 不可思議尊【名】〔佛〕あみだによらい(阿彌陀如來)に同じ。

ふかし-じやう 深志城【名】まつもとじやう(松本城)の舊稱。

ふかし-たて 蒸立【名】ふかしてより、未だ時を經ざること、又その物。和合人「ふかし立の野郎のやうに、天窓(アタマ)から湯氣が立つは」

ふかし-たまご 蒸玉子・蒸卵【名】ふかしたる鷄卵。野良の玉子「おとなし風(フウ)の寢物語に浮れて迷ふ傾城の夜をふかし卵」

ふかし-ぱん 蒸麪包・蒸麵包【名】メリケン粉を捏ねてふかしたる食品。

ふかし-ん 不可侵【名】侵入すべからざること。「住所の不可侵」參照。

ふかしん-けん 不可侵權【名】〔法〕國際法上、外國使臣がその身體・名譽を侵害せられざる權利。各國は、國法を以て、これを認む。「じ。

ぶ-がしら 武頭【名】ものがしら(物頭)に同

ふかし-をけ 蒸桶【名】蒸籠(セイロ)の、桶の如き形したるもの。

ふかす 深す・更す【動四他】ふけしむ。更(カ)たけしむ。ふけゆくを待つ。(夜又は月影など)遲馬「のたまひし餅、忍びて、いたう夜ふかしてもてまゐれり」俳諧新選「篇羽「借著してふかす一夜や鹿の聲」

ふかす 蒸す【動四他】湯氣をとほして熟せしむ。むす。

ふかす 化す【動四他】化(ケ)けしむ。石灰に水を灑ぎて、これを風化せしむ。生石灰(セイセキクワイ)を消石灰(セウセキクワイ)に變ぜしむ。

ふかす 【動四他】烟草を飲む。烟草を吸ふ。

ふかす 吹かす【句】ふく(吹く)の條下を見よ。

ふかずの-ごもん 不葬御門【名】とりゐ(鳥居)に同じ。

ふかぜい 附加稅【名】〔法〕『英 Additional tax』或租稅を基準とし、これに附加して、徵集する租稅。例へば、市町村が、直接國稅又は直接府縣稅に附加して、市町村の全部より、均一の標準によりて徵收するもの。

ふか-せつ 不可說【名】一言說すべからざること。二〔佛〕眞理の、智にて證すべきのみにて、言說すべきにあらざること。三一定の制に基づきてあらぬこと。禁祕抄「可ゝ然子など、內內小冠・小童等、不可說裝束、中中無二沙汰一事也」「に同じ。

ふか-せん 附加線【名】〔音〕かせん(加線)

ふか-ぜり 深芹【名】根深き芹。〔古語〕拾遺「塗も葉もみな綠なる深芹は洗ふ根のみや白く見ゆらん」

ふか-そぎ 深削・深剪・深除・深曾木【名】一かみそぎ(髮削)〔一〕に同じ。〔古語〕栄女記「御ふかそぎの時は、六本だちの御牆折うつもの參る」二江戸時代の少女の髮。五歲頃までにて止む。**びんおや**(鬢親)參照。〔奥女中の語〕

ふかそぎ-かう 深曾木考【名】〔書〕兒供の髮を切ることを考證して論じたるもの。寫本一卷。屋代弘賢の撰。

ふかぞめ-ごろも 深染衣【名】色を深く染めたる衣。夫木「けさは又露をかこちて月草の深ぞめ衣かへるつらしな」

ふかだ 深田【名】泥ぶかき田。ふけだ。「馬を深田に乘り入れて」

ぶかだこ ぶか紙鳶【名】**けんだこ**(劍紙鳶)に同じ。〔俚語〕

ふか-ち 不可知【名】『次條を見よ』知ることの出來ぬこと。知るべからざること。

ふかち-てき 不可知的【貌】『次條を見よ』經驗的智識の範圍外にあるさま。

ふかちてき-いちげんろん 不可知的一元論【名】〔哲〕『英 Agnostical monism』物及び心を、實在の異なる顯現に過ぎずとする點は、同一哲學と同じくして、ただ、その實在は、吾人の認識を超越して、不可知的なりとする哲學說。スペンサア(Spencer)の立脚地、これなり。

ふかちてき-じつざいろん 不可知的實在論【名】〔哲〕『英 Agnostical realism』前條に同じ。

ふかちろん 不可知論【名】〔哲〕『英 Agnosticism』人類の知識の及ぶ所は、相對の範圍に止まり、宇宙の本體(絕對)の如何なる物なるかの如きは、到底知り得べきにあらずといふ說。英國のヒユウム(Hume)・スペンサア(Spencer)、佛國のコムト(Comte)、獨國のカント(Kant)等の唱へしところなり。

ふかつ 深津【名】〔地〕一偏後國の舊郡の一。明治三十一年、安那(アンナ)郡と合して、深安郡となる。二明治初年設置の縣の一。ふくやま(福山)[補]參照。

ぶ-かっかう 不恰好【名】恰好のよからぬこと。形のみにくきこと。

ふかつ-しまやま 深津島山・深津嶋山【名】〔地〕古、備後國穴海(アナウ)の中央にありし島山。穴海は、近世全く埋塞して、田園となり、山の所在詳かならざれども、今の同國深安郡福山町の東にある深津村は、穴海の一部たりし地なれば、福山町の邊にある小丘は、島山の遺址ならんかといふ。萬葉「道のしり深津島山しばらくも君が目見れば苦しかりけり」

ふ-かつじやう 不割讓【名】領土の一部を他國に割讓せざること。これを割讓せば、第三國の不利益となるべき場合に、その第三國より、その土地を領有せる國家に對して、割讓せざるべき意思を文書に發表せしむる場合あり。我國より、支那に對して、遼灣の對岸なる福建省につき締結せる條約のごとき、これなり。

ふ-かって 不勝手【名】一ふよい(不如意)に同じ。狂言 唐樂「御存じのごとく手前不勝手でござるによって」二その道に心得なきこと。勝手を知らぬこと。不案內。八笑人「この方ども、如何に、在勤者で、芝居など不勝手ぢやとて」

ふかつみ 石龍芮【名】〔植〕**たがらし**(田芥)に同じ。〔古語〕字鏡「石龍芮、不加豆彌。又云、牛之比太比」「く剪み切ること。

ふか-づめ 深爪【名】爪を、皮の際まで深

ふか-て 深手【名】深き手負。重ききず。おもで。いたで。重傷。(淺手に對して)

ふかてん 不合點【名】合點せざること。承諾せざること。不承引。不承知。

ふか-とく 不可得【名】〔佛〕一諸法の、空無にして、實體なきこと。二佛の證悟は、佛知見ある者にあらざれば、到底、證悟し得べからざること。

ふか-なさけ 深情【名】情の深きこと。深く愛すること。讐惡女の深情」

ふかにふ-せい 不可入性【名】〔理〕ふとうにふせい(不透入性)に同じ。「ふけぬ。

ふか-の 深野【名】草の深くしげれる野。

ふかのう 不可能【名】できぬこと。あたはぬこと。不能。

ふかのう-はうていしき 不可能方程式【名】〔數〕『英 Impossible equation』未知數に如何なる有限値を與へても適合せざる方程式。例へば $x-1=0$ などの類。

ふか-のき ふかの木【名】〔植〕五加(ウコ)科に屬する木本。高さ丈餘に達し。葉は葉柄長くして互生し、掌狀複葉にして、小葉は全緣廣披針形、花は小形にして、九州・琉球臺灣等に產す。「下を見よ。

ふか-の-ひれ 鱶の鰭【句】**ふか**(鱶)の條

ふかは 布川【名】一〔地〕下總國北相馬郡にある町。利根川に沿ひ、陸前濱街道の支線に當り、川を隔てて、東茨城(ヒタチ)郡佐佐町と相對す。二昔、下總國布川にて捕へて、九月頃、江戸にて賞美せし生鮭。

ふかは 深川【名】〔地〕長門國大津郡にある村。萩街道に當り、郡中第一の繁華の地にて、捕鯨を以て名高く、溫泉あり、又有名なる大寧寺あり。

ふかは-やういやき 深川高麗燒【名】長門國大津郡深川村三ノ瀨より產出する陶器。文祿の役後、毛利輝元に從ひて、我國に來りし韓人李勺光、この地に住して、燒き創めしもの。〔京都の語〕

ふかは-ぢ 深鉢【名】どんぶり(丼)を云ふ。

ふかは-なだ 深縹【名】縹色の深きもの。濃き縹色。(淺縹に對して)

深縹の袍【句】大寶の制にて、八位の人の著せし袍。

ふかーばり 深張【名】蝙蝠傘を、開きたる時、骨の彎曲を深くなるやう造ること、又その造り方の蝙蝠傘。女の日傘に多し。

ふかーひ 深緋【名】緋の色の深きもの。濃き緋色。(淺緋に對して)

深緋の袍【句】大寶の制にて、四位の人の著せし袍。

ふがひーなし 腑甲斐無し【形ク】甲斐性なし。いくぢなし。ぐづなり。

ふーかふ 巫峽【名】〔地〕支那の巴峽(ハケフ)にある三峽の一。

ふかーふ 不可不【名】〔哲〕『獨 Müssen』或事が必ず起らざるべからざること。(不許不に對して)

ふーがふ 不合【名】㊀物の出合はぬこと。一致せぬこと。〔古語〕 大鏡「人のほどもやんごとなくおはしましかど、ふがふにおはすとて」 ㊁家風・時世などにあはぬこと。

ふかーふか 【貌】うかうか㊀に同じ。百日曾我「お預かりの大事の囚人、ふかふかと渡さるるは」

ふかぶか 深深【貌】いかにも深きさま。五人女「編笠、ふかぶかと傾け」 正章千句「ふかふかと引きかぶりたる皮頭巾」

ふかーふが 【貌】徹毒のために、鼻軟骨の崩れて、音聲の洩るるさま。〔俚語〕

ふーかふかく 不合格【名】合格せぬこと。

ふーがふき 不合規【名】規定に適合せぬこと。規則に合はざること。

ふかふーざん 普甲山【名】〔地〕おほえやま(大江山)㊀に同じ。

ふかふーざん 武甲山【名】〔地〕武藏國秩父(チヽブ)郡にある山。秩父山塊の主峯。秩父大宮町の南。高さ四四〇九尺。

ふかーふし 鰭節【名】鰹の肉にて、鰹節のごとくに製したるもの。

ふかぶち-の-みづやればな-の-かみ 深淵之水夜禮花神【名】『深淵は地名なるべしといふ』布波能母遲久奴須奴(フハノモヂクヌスヌ)姫。母は日河(ヒカハ)姫。「ること。

ふーかーぶん 不可分【名】分割すべからざる性質が必ず起らざること。

ふかぶん-きふふ 不可分給付【名】〔法〕給付の一。それと同一の性質を有する數箇の給付に分割すべからざるもの。(可分給付に對して)

ふかぶんぎむ 不可分義務【名】〔法〕不可分なる給付を目的とする義務。(可分義務に對して)

ふかぶんけん 不可分權【名】〔法〕『獨 Unteilbares Recht』その事物の性質上、又は當事者の意思表示によりて、不可分なる權利。

ふかぶん-さいけん 不可分債權【名】〔法〕『獨 Unteilbare Forderung』不可分債務を、債權者の方面より見たるもの。(可分債權に對して)

ふかぶんさいけん-しや 不可分債權者【名】〔法〕不可分債權を有する者。

ふかぶん-さいむ 不可分債務【名】〔法〕『獨 Unteilbare Obligation』不可分給付を目的とする債務、即ち債務の目的物が、分割しては、履行し得ざる場合の債務。當事者の意思に依りて、不可分となすものと、給付の性質が不可分なるものとの二種あり。(可分債務に對して)

ふかぶんさいむ-しや 不可分債務者【名】〔法〕不可分債務を有する者。

ふかぶん-ぶつ 不可分物【名】〔法〕『英 Indivisible things』在來の効用・性質などに變化を與ふるにあらざれば、分割すべからず、又、强ひて變化を與ふれば、在來の効用・性質は消滅する如き物。例へば、鳥獸・書籍などの類。(可分物に對して)

ふーかーぶんり 不可分離【名】分離すべからざること。

ふーがふり 不合理【名】㊀理にあはぬこと。 ㊁數『英 Absurdity』幾何學にしばしば用ひらるる證明法。一の命題を眞なりと假定し、逐次推理をなして、既知の眞理に反する結果に達し、依りて以て、その反對が却りて眞なるを證すること。

ふかーべり 深緣【名】疊・蓐・蘆、その他の物の緣(ヘリ)を深く取ること、又その物。

ふかーほけんれう 附加保險料【名】〔商〕『英 Loading』保險者が、その事業經營の費用・利益金に要する費用等のために、純保險料に附加して、保險契約者より受くる料金。

ふかーぼり 深濠・深壕【名】深きほり。

ふかぼり 深雕・深彫・深刻【名】深くほりつくること。しんこく。

ふかーま 深間【名】㊀『みが、か音の母韻に引かれて、あ列音なるまに轉じたるもの』次條の轉訛。「深間に嵌(ハ)る」 ㊁『まはまぶ(間夫)の略』切っても切れぬ情夫。春花五大力「仲間で聞き合はしたところが、そちにばかりはふかまは無い、今時の藝者に似合はぬ、甚だ堅い者ぢや」

ふかーみ 深處【名】㊀水などの、深き所。底に近き部分。 ㊁事柄の、奥深くして、容易に脫しえざる部分。

ふかーみ 深み【名】〔文・美〕作品の上に味はるる合著。

ふかみーぐさ 深見草【名】〔植〕㊀ぼたん(牡丹)㊁に同じ。〔古語〕和名「牡丹。一名、鹿韭、布加美久佐」 夫木「くれなゐの色ふかみぐさ咲きぬればをしむ心も淺からぬかな」 ㊁やまたちばな(山橘)に同じ。

ふかみ-じふざゑもん 深見十左衛門【名】〔人〕俠客。本姓は深溝。名は貞國。福島正則の侍臣深溝又左衛門の子。初、藤堂氏に仕へ、致仕し、後、江戸に住し、任俠と剛勇とを以て名高かりしが、天和の初年、捕へられて、隱岐國に流され、三十年にして、赦されて江戸に歸り、後、剃髮して、自休と號し、世に髭の自休と呼ばる。享保十五年歿す。年九十。十左衛門は、一に重左衛門とも書く。

ふかみ-ちゆうざゑもん 深見重左衛門【名】〔人〕前條を見よ。

ふかみどり 深緑【名】濃きみどり色。深綠(ヨッ)。(淺綠に對して) 類葉「深みどり松にもあらぬあさあけの衣さへにぞ沈みそめけん」

深綠の袍【句】大寶の制にて、六位の「人の著せし袍。

ふかーみる 深海松【名】海の底にある海松なりとも、海松の一種なりともいふ。〔古語〕 延喜式「深海松・長海松」

ふかみるーの 深海松の【枕】音の通へるより、**ふかめて**(深めて)にかけていふ。萬葉「ふかみるのふかめて思へどさぬる夜は幾らもあらずはふ葛の別れしくれば」

ふかむ 深む【動下二他】深くなす。古今「わたつみの沖をふかめて思ひてしおもひは今は」 平家「かやうの事を、心中に殘せば、餘る罪深むる間」

ふかーむらさき 深紫【名】紫の色の深きもの。濃き紫色。(淺紫に對して)

深紫の袍【句】大寶の制にて、親王及び一位の人の著せし袍。

ふーかん 浮桿・浮竿【名】『英 Rod-float』水中に縱に沈下せしめて、水流の縱直面に於ける全水深の平均流速を測定するに用ふる桿。

ふーかん 不堪【名】㊀堪能ならぬこと。技の未熟なること。 著聞「不堪のよし申して、吹かざりけり」 ㊁田地の、荒廢して、耕作に堪へざるに至ること。例不堪と過分不堪とに分つ。各條を見よ。

不堪の荒奏(ソウ)【句】「不堪佃田(フカンデン)の荒奏」の略。

不堪の和奏(ソウ)【句】「不堪佃田(フカンデン)の和奏」の略。

ふーかん 不刊【名】『揚雄の酈商銘に「金紫褒表、萬世不刊」とあり。版本の文字を削り除くべからざる義』書籍の、永く傳はりて、滅びざること。

ふ-かん 不感【名】盲人の、感の悪きこと。柳樽「不感なる奴(ヤツ)は都にしやがんでる」

ふ-かん 俯瞰【名】うつむきて見おろすこと。高き處より見おろすこと。

ふ-がん 鳧雁【名】かもと、かりと。謡曲「初雪」「ふがん・鴛鴦に、翼を並べ」

ぶ-かん 武鑑【名】徳川幕府の頃、將軍家以下諸大名の氏名・系圖・官位・石高・居城・邸第等の梗概を記して、時時發行せし小冊子。柳樽「龍宮武鑑板元は鱗がた」

ぶ-かん 無勘【名】ふかん(不感)に同じ。

ぶ-かん 歩艱【名】歩行の困難なること。行歩(ギヤウ)になやむこと。

ぶかん 豎十・封干【名】〔人〕支那唐の天台山國清寺の僧。髪を剪りて、肩に齊しくし、布裘を衣る。身長七尺。借問する者あれば、ただ對へて、隨時の二字を曰ふのみ。寒山・拾得(ジフトク)の二士を養ひ、世に並稱して、三賢又は三隱といふ。

ふかん-さだめ 不堪定【名】ふかんでんさだめ(不堪佃定)の略。

ふかんせいゆ 不乾性油【名】〔化〕『英Non-drying oil』空氣中に置くも乾燥せざる油。例へば、オリイブ油・落花生油・椿油・鯨油などの類。不乾油。(乾性油に對して)

ふ-かんせふ 不干渉【名】干渉せぬこと。

ふかんせふ-しゆぎ 不干渉主義【名】〔法〕民事訴訟法上、告げざれば審理せず、申立以外の事物は、原告又は被告に歸せしめず、裁判所にあらはれざる事實は、裁判の材料となさざる主義。「に同じ。

ふかん-づ 俯瞰圖【名】てうかんづ(鳥瞰圖)

ふかん-でん 不堪田【名】ふかんでんでん(不堪佃田)の略。

ふかんでん-さだめ 不堪佃定【名】古、毎年、太政官にて、國司より上れる坪附帳(ツボフヂヤウ)に就きての諸卿の勘申を上奏したる後、左大臣以下諸卿の、陣に著きて、議定せしこと。不堪定(フカンヂヤウ)。

ふかんでんし 不堪佃使【名】ふかんでんでんし(不堪佃田使)の略。

ふかんでん-そう 不堪田奏【名】「不堪佃田の奏」に同じ。名目抄「不堪田奏、フカンデンソウ」

ふかんでん-でん 不堪佃田【名】『佃(ツク)るに堪へざる田の義』古、災變などに因り、荒廢して、耕種に堪へざる田地。その損害の十分の一以内なるを、例不堪佃田、十二分以上なるを、過分不堪佃田といふ。

ふかんでんでんそう 不堪佃田の荒奏(クワサウ)【句】次條を見よ。

ふかんでんでんそう 不堪佃田の奏【句】古、毎年、太政官にて、國司より上れる坪附帳(ツボフヂヤウ)を、左大臣以下諸卿の議定して、不堪佃田の減租を奏請せし公事。その坪附帳に就きて、諸卿の勘申を上奏するを、荒奏といひ、議定したる決議を上奏するを、和奏といふ。官(クワン)の奏(ソウ)。「よ。

ふかんでんでんし 不堪佃田使【名】古、不堪佃田の實狀を檢せしむるために遣はしし使。不堪佃使。

ふかん-ふうすゐ-し 不堪風水使【名】古、不堪田・風水害などのありし時、その有樣を檢察するために、朝廷より派遣せし臨時の使。

ふかん-ゆ 不乾油【名】〔化〕ふかんせいゆ(不乾性油)に同じ。(乾油に對して)

ふ-がんりき 不眼力【名】眼力の乏しきこと。物事を見拔く力の無きこと。島原蜂合戰「作山伏を十二人まで見損ぜし不眼力」

ふかや 深谷【名】〔地〕武藏國大里郡にある町。中山道に沿ふ。享徳三年、關東管領上杉房顯の、上杉定正と戰ひし地。

ふかやす 深安【名】〔地〕備後國九郡の一。もとの深津・安那(アナ)の二郡を併せしもの。郡役所を福山町に置く。

ふかーようじん 深川心【名】深き用心。それからそれと、漏無く心を用ふること。釋迦如來誕生會「世界の土を喰ひつくさば、何を喰はんといふ、蟲同然の深用心」

ふ-かり 歩刈【名】つぼがり(坪刈)に同じ。

ふかーりやう 不可量【名】量(カ)るべからざること。室町千載集「佛力不可量、不可思議の御法(ノリ)の聲」

ふかれ-ごころ 吹かれ心【名】吹かれんとし、又は吹かるる氣もち。俳諧新選「はや風に吹かれ心の給かな」

ふかれ-のこる 吹かれ殘る【動四自】吹きあまさる。太平記「青き葉の吹かれ殘るや綿ばたけ」

ふかーね 深井【名】能(ノ)の假面(カ)の一。やや痩形にて、少し年嵩なる女と見えしむる時に用ふるもの。(淺井に對して)

ふかねしだうけん 深井志道軒【名】〔人〕しだうけん(志道軒)に同じ。

ふかねまさくに 深井政國【名】〔人〕劍客。字は得緑、通稱は主膳、秋水と號す。土佐國の人。柳生(ヤギフ)流の劍法及び寶藏院流の槍術に達し、儒學にも通ず。享保八年歿。年八十二。

ふき 蕗【名】蕈くこと、又、蕈きたる工合。

ふき 吹【名】吹くこと、又、吹きたること。後撰「山風の吹のまにまにもみぢ葉はこのもかのもに散りぬべらなり」

ふき 袘・衁【名】『ふき出でたる部分の義』衣服の裏を表に返して、裾の方に、緑の如く縫ひ附けたる部分。ふきかへし。輪(ワ)。

ふき 蕗・茎・款冬【名】〔植〕『ふふき(蕗)の約』菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉の形牛蒡に似て圓く、葉柄は青くして、紫色を帶び、食用とす。初春、地下莖より花莖生ず。おほばふふき。

ふき 蕗の姑(トメ)【句】薹(ウ)の立ちたる蕗。雪女五枚羽子板「茅花(ツバ)・杉菜にさいたづま、妻は誰が妻、老いぬれば、蕗の姑、蕗の姑」俳諧古選(道職)「中よかれ蕗の姑嫁がはぎ」

ふ-き 不歸【名】一歸らざること。二逝きて歸らざること。歸らぬ旅に赴くこと。死ぬること。不起。

ふき 不起【名】『起(タ)たずを見よ』病癒えずして、死去すること。不歸。

ふき 不羈・不覊【名】一ゆはひつけられぬこと。束縛すべからざること。二大膽にして、小事に束縛せられぬこと。

ふき 不軌【名】一國家の法を守らぬこと。二謀叛を企つること。大逆。

ふき 不器【名】一『君子は器(キ)ならずを見よ』一藝一材に達したるのみならず、常識ありて、圓滿完全なること。二それに適したる器量にあらざること。

ふき 不諱【名】一『禮記の曲禮上篇に「詩書不レ諱、臨レ文不レ諱」とあり』支那にて、父の名は諱(イ)み避くべきを、それをせぬこと。二『戰國策の魏國の條に「公叔病則不レ可レ諱、將奈二社稷一何上、又、通鑑周紀の註に「不レ可レ諱者、謂レ死也。俗語有レ之、人不レ諱レ死」と見ゆ。死は人の諱(イ)み避くること能はざる義』死ぬること。三『諱み避くることをせぬよりいふ』ちよくかん(直諫)に同じ。「がき。たしがき。

ふき 附記【名】附加して記すこと。つけ。

ふき 富貴【名】ふうき(富貴)に同じ。箱崎「蕗(キ)といふも草の名、茗荷(ミヤウガ)といふも草の名、富貴自在、德ありて、冥加(ミヤウガ)あらせたまへや」

ふき 浮蟻【名】一『張衡の南都賦に「浮蟻如レ醑」とあり』酒の上に浮べるあぶら。二さけ(酒)の異稱。

ふ-ぎ 不義【名】一義にそむくこと。平治「誠に今まで參らざる條、私ならぬとは申しながら、不義の至」二義に於てあるまじき密通。鎌倉三代記「思ひ初めたる不義の科(トガ)」

不義は御家(オイヘ)の御法度(ゴハツト)【句】徳川時代に、男女間の不義は、君主の禁ずる處なり。犯せば、放逐・手討等の制裁を加へらる。〔諺語〕

不義の富貴は浮べる雲【句】「論語の述而篇に「不義而富且貴、於レ我如二浮雲一」とあるに本づく』不義を以て得たる富貴は、はかなくして、頼とすべからず。〔諺語〕太功記「たとへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲」

ふ-ぎ 賻儀【名】かうでん(香奠)に同じ。

ぶき 武器【名】一へいき(兵器)に同じ。二〔兵〕直接に敵兵を殺傷し、又、敵物を破壊する兵器。

ぶき 舞姫【名】まひを舞ふ女。まひめ。舞妓。

ふーき 不器・無器【名】ふきよう(不器用)の略。〔俚語〕

ぶーぎ 武技【名】ぶげい(武藝)に同じ。

ぶーぎ 舞技【名】まひのわざ。をどり。

ぶーぎ 舞妓【名】まひこ。まひひめ。

舞妓の拝(ハイ)【句】「女樂(ガク)の拜」に同じ。建武年中行事「十六日踏歌節會、……舞妓庭をめぐること三度、内教坊、しりにあり、……次に、舞妓の拜あり。次に、宣命、常の如し」

ふき-あがる 吹上る・噴上る【動四自】たぎりてわきあがる。高く噴き出づ。

ふき-あぐ 吹上ぐ【動下二他】一風、上方に向けて吹く。風が、物を吹きて、上方へ移動せしむ。(吹下(フキオ)すに對して)源氏「年頃、斯かることのつゆ無かりけるを、風こそ、げに歳も吹きあげつべきものなりけれ」二笛を、聲高く吹く。吹き鳴く。吹きたつ。源氏「大篳篥(ヒチリキ)・尺八(シャクハチ)の笛などの大聲を吹き上げつつ」

ふき-あげ 吹上【名】一風の吹き上ぐること。五人女「谷中(ヤナカ)の鐘せはしく、吹上の榎(エ)の木、朝風はげしく」二水を吹きあげしむる裝置。噴泉。噴水。三次條の略。新千載「立つ波の花かあらぬか浦風の吹上にすめる秋の夜の月」

吹上の濱【句】風の吹き上ぐる濱邊。(歌に、紀伊國の濱の名に言ひかけて用ふ)新古今「浦風の吹上の濱の濱千鳥浪立ち來(ク)らし夜半に鳴くなり」

ふきあげ 吹上【名】一【地】下野國下都賀(シモツケ)郡にある村。有馬氏の舊藩地。二【地】明治初年設置の縣の一。にっくわ(日光)三參照。三【地】**ふきあげのはま**(吹上濱)の略。新古今「月ぞすむ誰かはここにきの國や吹上の千鳥ひとり鳴くなり」

四ふきあげのおにわ(吹上御庭)の略。

ふきあげ-おざしきかた 吹上御座敷方【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行に屬して、江戸城内なる吹上の御庭の茶屋の事を掌りしもの。

ふきあげ-おにはのもの-しはい 吹上御庭之者支配【名】德川幕府の職制の一。若年寄の支配の下に、江戸城内なる吹上の御庭に勤仕する者を管せしもの。

ふきあげ-おにはばん 吹上御庭番【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行に屬して、江戸城内なる吹上の御庭の番をなしゝもの。

ふきあげ-おははたけ-そへぶぎやう 吹上御花畑添奉行【名】ふきあげそへぶぎやう(吹上添奉行)に同じ。

ふきあげ-おははたけ-ぶぎやう 吹上御花畑奉行【名】ふきあげぶぎやう(吹上奉行)に同じ。

ふきあげ-ぎく 吹上菊【名】〔植〕はまぎく(濱菊)に同じ。

ふきあげ-ぎよゑん 吹上御苑【名】〔地〕東京宮城の西ノ丸の背後にある皇居の御庭。舊德川將軍の居館の後苑たりし所にして、宮城の西南より半藏門内に及べり。即ち德川幕府時代の吹上の御庭の跡。

ふきあげ-くわんおんだう 吹上觀音堂【名】『音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』武藏國北足立(アダチ)郡白子(シラコ)村下新倉なる東明寺の境内にある觀音堂。天平年間、行基の、當地赤池の畔に一宇を建立し、自作の觀音を安置せしに創まる。

ふきあげ-ごくわだんかた 吹上御花壇方【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行に屬して、江戸城内なる吹上の御庭の花壇の事を掌りしもの。

ふきあげ-ごふしんかた 吹上御普請方【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行に屬して、江戸城内なる吹上の御庭の普請に關する事を掌りしもの。

ふきあげ-ごやくゑんかた 吹上御藥園方【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行に屬して、江戸城内の吹上の御庭にありし藥園の事を掌りしもの。

ふきあげ-しらぎく 吹上白菊【名】〔植〕はまぎく(濱菊)に同じ。

ふきあげ-そへぶぎやう 吹上添奉行【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行の次席に在りて、これを輔佐せしもの。燒火間(ヒノマ)に伺候し、濱御殿添奉行の上席たりき。

ふきあげ-のーおには 吹上御庭【名】江戸城内の奥庭。本丸(ホンマル)の西、西丸(ニシマル)の南に位し、太田道灌時代には、本城以外の地にして、慶長の初には、代官・年寄・番衆等の邸宅あり。慶長・元和の頃には、尾張・紀伊・水戸三親藩の邸館あり。明曆大火の後、邸館を撤して、花木を植ゑしに創まる。ふきあげぎよゑん(吹上御苑)參照。

ふきあげ-のーぎく 吹上菊【名】はまぎく(濱菊)に同じ。

ふきあげ-のーはま 吹上濱【名】〔地〕一紀伊國和歌山市の西南部より海草(カイソウ)郡雜賀(サイカ)村に至る一帶の海岸。一名、深目(フケ)浦。枕「濱は吹上濱」二駿河國庵原(イハラ)郡蒲原(カンバラ)町より富士川の河口に至る一帶の海岸。東は田子(タゴ)浦、西は清見潟(キヨミガタ)に連なる。一說に、古の田子浦は、この邊をいへるなりと。

ふきあげ-のーみね 吹上峯・吹上峰【名】〔地〕紀伊國和歌山の別稱。

ふきあげ-はははたけぶぎやう 吹上花畑奉行【名】ふきあげぶぎやう(吹上奉行)に同じ。

ふきあげ-ばま 吹上濱【名】〔地〕薩摩國日置(ヒオキ)郡萬瀨(マンゼ)川より北の方西市來(ニシキヒ)村に至る一帶の海岸。長さ約十里。

ふきあげ-ひっとうやく 吹上筆頭役【名】德川幕府の職制の一。吹上奉行に屬して、江戸城内なる吹上の御庭に勤仕する者の筆頭たりしもの。

ふきあげ-ぶぎやう 吹上奉行【名】德川幕府の職制の一。若年寄の支配に屬して、江戸城内なる吹上の御庭の一切の事を掌りしもの。吹上御花畑奉行。吹上花畑奉行。御花畑奉行。花畑奉行。

ふきあげ-をんせん 吹揚溫泉【名】〔地〕陸前國鬼首(オニコウベ)溫泉の一部。

ふき-あし 葺足【名】〔建〕屋根に葺く瓦又は柿(コケラ)などの、外部にあらはれたる一端の長さ。他の一端は、他の葺足の下に重なる。

ふき-あつ 吹當つ【動下二他】吹きて、當つるやうにす。ふきつく。蟹野舟泉「松の木に吹きあてられな秋の蝶」

ふき-あつむ 吹集む【動下二他】ふきよす(吹寄す)に同じ。蕪村「水鳥を吹き集めたり山おろし」

ふき-あはす 吹合はす【動下二他】吹きて、音の調子を調へあはす。樂式部日記「笛の音も、鼓の音も、松風も、木深(コブ)く吹きあはせて、いとおもしろし」源氏「笛吹きあはせて、大殿におはしぬ」

ふき-あはす 葺合はす【動下二他】屋根を葺きて合はせ綴く。大鏡「檜皮(ヒハダ)葺き合はすることも」

ふき-あへ 蕗薹汞冬薹【名】蕗を茹でて、味噌にて薹へたる食品。

ふき-あます 吹餘す【動四自】勢の餘るほどに、多く吹く。俳諧新選(芝蘭)「秋風の吹きあましてや返花」

ふき-あます 葺餘す【動四他】葺きたる茅などの末を、切り揃へず。

ふき-あらし 吹嵐・吹荒【名】馬の鼻柱の尖り出でたる部分なりとも、鼻孔の異稱なりとも、又、馬の鼻全部の異稱なりともいふ。盛衰記「畠山が乘りたりける吹荒をぞ射通しける」

ふき-あらたむ 吹改む【動下二他】ふきかふ(吹替ふ)に同じ。

ふき-あらため 吹改【名】ふきかへ(吹替)に同じ。

ふき-ある 吹荒る【動下二自】風、勢あらく吹く。源氏「夜一夜、風吹きあるるに」

ふき-いた 葺板【名】屋根に葺く薄き板。やねいた。字鏡「ふき板をともして入る」方言「檜皮(ヒハダ)・葺板の類」

ふき-いだす 吹出す【動四自】一水など、外へ迸り出づ。ふきいづ。ふきだす。ふく。「噴出す」二風、吹くことはじまる。風生ず。ふきいづ。ふきだす。俳諧新選(嘯雨)「北風の吹きいだしたる紙衣(カミコ)かな」三氣息(イキ)を急に出して笑ふ。堪(コラ)へきれずに笑ひ出す。ふきだす。日本振袖始「嫁も吹き出し、畑打つ賤(シヅ)も、鍬を捨て、腹を抱へて笑ひけり」

ふき-いだす 吹出す【動四他】一風吹き

て、物を外へ出だす。ふきだす。道濟集「山がくれ残れる花を見つるかな世に吹き出だす風にたづねて」㊁笛などを吹きはじむ。ふきだす。雅筵酸狂集「尺八を吹きいだすほどをかしきは肥えふくれたる人の口つき」

ふき-いづ 吹出づ【動上二自】㊀ふきいだす(吹出す)㊁に同じ。「噴出づ」源氏「野分(ノワキ)」例の年よりもおどろおどろしく、空の色かはりて吹きいづ」㊁ふきいだす(吹出す)㊁に同じ。

ふき-いづ 吹出づ【動下二他】ふきいだす【動四自】風吹きて、内へ入り込む。ふきこむ。

ふき-いる 吹入る【動下二他】風吹きて、内へ入るやうにす。風吹きて、他の物を入らしむ。ふきこむ。源氏「風のさと吹き入るるに、花の香も、鞠人の御匂も、橘ならねど、昔思ひ出でらるるつまなり」

ふきう 不休【名】休まぬこと。

ふきう 不朽【名】㊀永く朽ち亡びぬこと。㊁死後までも、その姓名事業のすたれぬこと。

ふきう 腐朽【名】くされ朽つること。

ふき-うつ 吹棄つ【動下二他】吹き出して棄つ。吐きて棄つ。ふきすつ。〔古語〕紀「黯然咀噌而吹棄氣噴之狹霧、サカミニカミテフキウツルイブキノサギリ」

ふき-おくる 吹送る【動四他】風吹きて、物を送り遣る。ふきやる。惟然「夜嵐に尻吹き送れ峰の鹿」

ふき-おつ 吹落つ【動上二自】㊀風、急に下方に向ひて吹く。吹きおろす。謡曲「安達原」「野風山風吹き落ちて鳴神(カミナリ)、電(イナビカリ)、天地に満ちて」㊁風に吹かれて落つ。俳諧古選附録「里丸」「吹き落ちて一葉も散らぬ寒さかな」

ふき-おとす 吹落す【動四他】風吹きて、物を落ちしむ。俳諧新選「雑因」「寐ながらに吹き落さるる小蝶かな」

ふき-おろし 葺卸【名】葺きおろすこと、又、葺きおろしたる屋根。

ふきおろし-やね 葺卸屋根【名】葺きおろしたる屋根。物置などに設く。

ふき-おろす 吹下す【動四自】風、下の方に向ひて吹く。山おろしの風吹く。おろす。(吹上ぐに對して)増鏡「吹きおろす松風にたぐひて」

ふき-おろす 葺卸す【動四他】母家(オモヤ)の屋根を、下屋(ヒサシ)の上まで葺くやうに延して葺く。

ふき-がう 貢記號【名】〔數〕ふがう(貢號)に同じ。(正記號に對して)

ふき-がうしよう 武器考證【名】〔書〕我國の一切の武器を、百六十種に類別し、一一考證せるもの。二十巻。伊勢貞丈の著。巻首に引用書を列擧せり。

ふき-かく 吹掛く【動下二他】㊀勢ひよく吹きつく。玉葉「浮雲を月に嵐の吹きかけて有明の空をゆく時雨かな」保元「院の御所へ、猛火(モウクワ)夥しく吹き懸けたれば」㊁吹きて注ぎかく。「氣息(イキ)を吹きかく」㊂相手を屈せしめんとて、強く大袈裟に言ふ。ふっかける。「高値(タカカ)を吹き掛く」「喧嘩を吹き掛く」

ふきかけ-てぬぐひ 吹掛手拭【名】藍を吹きかけたる染方にて、則ち一種の捺染の如きものか。一代男「あつち縞の中幅(ナカバ)、前に結び、今はやるふき懸手拭・塗笠の内、只人とも見えず」

ふき-かたり 吹語【名】『ふく(吹く)㊂を見よ』じまんばなし(自慢話)に同じ。〔古語〕杜「かかる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり」

ふき-がは 吹皮・吹革・鞴【名】ふいご(鞴)に同じ。〔古語〕和名「鞴、漢語抄云、鞴袋、布岐加波。韋嚢ノ火也。野王案、鞴所ニ以吹ノ火令ヒ熾ノ之袋也」

ふき-かはす 吹交す【動四自】ふきかふ(吹交ふ)に同じ。新續古今「知るらめや宿の梢を吹きかはす風につけても思ふ心を」

ふきかはまつり 吹皮祭・吹革祭・鞴祭【名】ふいごまつり(鞴祭)に同じ。

ふき-かはる 吹變る【動四自】風筋變りて吹く。風向改まりて吹く。千載「秋立つと聞きつるからにわが宿の荻の葉風の吹きかはるらん」

ふき-かふ 吹交ふ【動四自】風、あなたよりも、こなたよりも吹く。ふきかはす。拾遺「冬枯のおどろの古枝(フルエ)もえつきて吹きかふ風に花ぞ散りしく」

ふき-かふ 吹變ふ【動下二自】風筋を變へて吹く。風、向(ムキ)を變へて吹く。續後撰「片岡の朝けの風も吹きかへて冬の景色に散る木の葉かな」俳諧新選「遅笑」「吹きかへて程よく野火のすさりけり」

ふき-かふ 吹替ふ【動下二他】改めて吹く。改めて鑄造す。ふきあらたむ。ふきなほす。

ふき-かふ 葺替ふ【動下二他】屋根に元より葺きてありし物を除き、新しき物を葺く。改め葺く。新千載「霜枯のこやの八重ぶき葺きかへて蔵の若葉に秋風ぞ吹く」

ふき-かへ 吹替・吹代【名】㊀吹き替ふること、又、吹き替へたること、又その貨幣・器物など。ふきあらため。ふきかへし。ふきなほし。改鑄。㊁芝居の役者の身替(ミガハリ)。上の俳優が、殺されて倒るるさまを演ずる時、下の俳優が、それと同じ服裝をなし、これに代りて、舞臺に伏す類。八笑人「與一兵衛は、吹代で、案山子(カカシ)となる」㊂芝居の小道具の一。張子にて、人の形又は斬られたる人の首・腕などに擬して作りたるもの。春花五大力「よいは、噂があれば、隠すに及ばぬと、前垂より吹替の首を出し」八笑人「燒酎火(セウチヂ)を使ってみる。……吹替の案山子(シカカシ)を出す」

ふき-かへ 葺替【名】葺き替ふること、又葺き替へたること、又その屋根。膝栗毛「屋根屋が、長局の葺替に行きやあしめえし、絹を締める事もすめえ」

ふき-かへし 吹返【名】㊀風の、前と反對の方向に吹くこと。㊁ふき(笵)に同じ。㊂吹鬘を、髪(ボン)へ掻き上げたるもの。㊃兜の眉庇(マビサシ)の左右に反(ソ)りかへりて、縦に添ひ出でたる、耳のごとき物。紋又は模様を染め出したる革にて包む。襞(ヒダ)の座。みみ。

ふき-かへす 吹返す【動四他】㊀風吹きて、裏表(ウラオモテ)にす。風吹きて飜す。萬葉「わやめの袖吹き返す飛鳥風(カゼ)都を遠みいたづらに吹く」㊁風吹きて、物を元へ戻しやる。金葉「庭の花のもとの梢に吹きかへせ散らすのみやは心なるべき」猿蓑「正秀」「ゐのししに吹き返さるる照射(シヤウ)かな」㊂ふきかふ(吹替ふ)に同じ。㊃氣息(イキ)を吹き返す。

ふき-かへる 吹返る【動四自】㊀風、前と反對の方向になりて吹く。㊁風、再び吹く。重ねて吹き来る。「の草。

ふき-がや 葺萱葺草【名】屋根を葺く料

ふき-かよふ 吹通ふ【動四自】風、吹きて通ふ。風、吹きて往来(ユキキ)す。吹きとほす。源氏「をちこちの汀の波は隔つともなほ吹きかよふ宇治の川風」

ふき-がら 吹殻【名】煙管(キセル)にて吸ひたる煙草の燃殻。八笑人「雁首をさかさに持ち振り廻す故、吹殻抜けて、寐て居し呑七が額口へ、ぽったり落ちる」

ふき-からす 吹枯す【動四自】風吹きて、草木を枯らす。新六葉ずくなに吹き枯さるる浦松の靈風寒みなほ立てるかな」

ふき-からまつ ふき唐松【名】〔植〕あきからまつ(秋唐松)に同じ。

ふき-きやす 吹消す【動四他】ふきけす(吹消す)に同じ。太平記「吹きやす胸はしり火や卵酒」

ふき-きる 吹切る【動四他】風吹きて、絶間あらしむ。俳諧新選「孤桐」「吹き切られ又啼く聲や小夜千鳥」

ふき-きる 吹切る【動四自】㊀風、吹くだけ吹きて終る。㊁塵物熟(ウ)みて、裂け破る。ふっきる。

ふき-ぐさ 葺草【名】㊀屋根を葺く料の草。㊁〔植〕「菊の一名。

りいふ』あやめ(菖蒲)の異稱。

ふき-ぐす 吹具す【動上二自】吹き連る。吹きともなふ。山家「吉野山花吹き具して峰越ゆる嵐の雲とよそに見ゆらん」

ふき-ぐち 吹口【名】㊀風の吹き起る初。風の起る時。㊁吹くやりくち。吹く仕方。吹く手ぎは。

ふき-ぐみ 蕗組【名】箏の組歌の一。「蕗といふも草の名、茗荷といふも草の名、ふき(蕗)・當賞(とうしゃう)自在德ありて、みやうが(茗荷)・冥加)あらせたまへや」といふを第一首とし、その他、春の花・月の前・長生殿・弘徽殿(こきでん)・たそやこの・七尺の屏風の六首、合はせて、七首より成る。曲家記「調子に乗らぬ三味線の天柱(テンヂウ)變へたる蕗組も、冥加に餘る御なさけ」

ぶきけいたいけうれん 武器携帯教練【名】[兵]各箇教練の一。軍刀・銃器などの武器を執るもの。「よ。

ふきけし 吹消【名】ぬけやく(抜役)を見よ。

ふきけす 吹消す【動四他】風又は氣息の力にて、火などを消す。

ふ-きけん 不機嫌【名】機嫌のわるきこと。太平「訓乞の不機嫌見せそ靈祭(タママツリ)」

ふきげん-まなこ 不機嫌眼【名】不機嫌なる様子の眼。不機嫌なる眼指(ゆびさし)。今國「瞋恚(しんい)血走る不機嫌まなこ」

ふき-こかす 吹轉す【動四他】ふきたふす(吹倒す)㊀に同じ。俳諧新選(一之)「蚊柱の吹きこかされつ初嵐」

ふき-こす 吹越す【動四自】風、物の上を吹きて通りこす。ふきこゆ。玉葉「三吉野の山のあなたに散る花を吹きこす風の便にぞ知る」

ふき-こぼる 吹溢る・噴溢る【動下二自】吹きあがりてこぼる。沸きあがりて溢る。

ふき-こみ 吹込【名】㊀ふきこむこと。㊁傾城に、見舞の品物を送ること。【京阪地方の遊廓の江戸時代の語】色道大鑑「吹込、……傾城に音物を送ることなり」

ふき-こむ 吹込む【動四自】ふきいる(吹入る)に同じ。一芥「衽(ヨク)なりに吹き込む雪や枕もと」

ふき-こむ 吹込む【動四他】㊀私かに告ぐ。智慧を附く。ふっこむ。天の網島「ここに居ると吹き込んで、連れて飛ぶなら梅田か、北野か」淀鯉出世襷合「旦那へ吹き込み、まくし出してのけたが」㊁音聲を、蓄音器に入れたくはふ。ふっこむ。

ふき-こむ 吹込む・吹籠む【動下二他】㊀風、物を内に籠めて吹く。風雅「鐘の音を一つ嵐に吹きこめて夕暮しをる軒の松風」㊁吹きて、内へ入れこむ。吹き入れて、内に籠らす。

ふき-こむ 拭込む【動四他】布巾(フキン)又は雜巾(ザフキン)にて、光澤の出づるほど、たびたび拭く。

ふき-こゆ 吹越ゆ【動下二自】ふきこす(吹越す)に同じ。續古今「旅人は袂涼しくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風」

ふき-さうぢ 拭掃除【名】室内又は調度などをぬぐひ浄むること。ざふきんがけ。(掃(サウ)除に對して) 和合人「拭掃除から、炉の火の世話を焼き」

ふき-さます 吹冷す【動四他】吹きて、冷むるやうにす。風又は氣息(イキ)の力にて、熱を去る。俳諧新選(當水)「吹きさます海の匂や夏の月」

ふき-さらし 吹曝・吹晒【名】被ひ遮る物無くして、風の吹き當るに任すること、又その場所。ふきはらし。

ふき-さらす 吹曝す・吹晒す【動四自】吹曝にてあり。和合人「物干へあがる。これは、なるほど座敷とちがって、吹きさらして、寒い、寒い」

ふきし 葺師【名】屋根を葺くことを職業とする人。やねふき。運歩色葉集「葺師、フキシ」醒睡笑「屋根ふき、いかがしたりけん、踏みはづして落ちたり。……、かの葺師、氣息(イキ)の下よりいふやう」

ふき-しく 吹頻く【動四自】風、しきりに吹く。【古語】新拾遺「志賀の浦や氷くだけて秋風の吹きしく浪に浮ぶ月影」

ふき-じに 吹死【名】笛などを吹きつつ死ぬること。狂言(樂阿彌)「樂阿彌と申す尺八吹の、久しく尺八を吹死に致され候に」

ふき-しむ 吹締む【動下二他】笛などを、力を入れて吹く。狂言(樂阿彌)「尺八を吹きしむる」

ふき-しゆ 葺主【名】ふきし(葺師)に同じ。下風集「葺主、フキシュ」「の誤讀。

ふき-しゆ 不龜手【名】ふきんしゆ(不龜手)

ふき-しよ 吹所【名】金屬を吹きて、貨幣などを造る所。鑄造をなす所。さいくじよ。「徳川時代の語」「としたる汁物。

ふき-じる 蕗汁・款冬汁【名】蕗を實(ミ)とせる汁物。

ふき-しをる 吹萎る【動四他】風吹きて、草木を萎れさす。續古今「小泊瀬(ヲバセ)や峰のとときは木吹きしをり嵐に曇る雪の山もと」

ふき-すぐ 吹過ぐ【動上二自】㊀風吹きて、經(ヘ)。風吹きて、通り過ぐ。古今「女郎花(ヲミナヘシ)吹き過ぎて來る秋風は目には見えねど香(カ)こそしるけれ」㊁風、度を超えて吹く。

ふき-すさぶ 吹荒ぶ【動四自】風吹きて、勢烈しくなる。ふきあある。

ふき-すさぶ 吹荒ぶ【動四他】笛などを、慰みに吹く。吹きなぐさむ。徒然「笛をえならず吹きすさびたる」

ふき-すすむ 吹進む【動四自】風吹きて、次第に勢増す。增鏡「思ふ方の風さへ吹きすすみて、その日の申の時に、出雲の國に著かせたまひぬ」「陽氣に移る風。

ふき-すて 吹捨【名】寒氣を吹き拂ひて、

ふき-すます 吹澄す【動四他】笛などを、音の澄みわたるやうに吹く。源氏「面白う吹きすましたまへるに掻き合はせて」

ふき-ずり 蕗摺・款冬摺【名】裱紗・女帶地などに、蕗の葉にて摺りて、模様を附くること、又その方法に依る模様の物。

ふき-そ 不起訴【名】「法」起訴せざること。起訴とならざること。

ふ-きそく 不規則【名】規律の立たぬこと。きまりのなきこと。

不規則の寄託【句】「法」せうひきたく(消費寄託)に同じ。

ふきそく-どうし 不規則動詞【名】「語」『英 irregular verb』へんかくどうし(變格動詞)に同じ。(規則動詞に對して)

ふきそく-はんしや 不規則反射【名】「理」暗體に當りたる光線が、不規則に多くの方向に反射して、散光を成すこと。

ぶき-そでかがみ 武器袖鏡【名】「書」戎衣・武器の名を掲げて、考證・圖說せるもの。三卷。栗原信充の著。

ふき-そふ 吹添ふ【動四自】風、他の物に加はりて吹く。源氏「耳かたからぬ人のためには、身にしむ風も吹きそふかし」

ふき-そふ 吹添ふ【動下二他】吹き添ふやうにす。風を、他の物に添へ加へて吹かしむ。新後撰「ひぐらしの鳴く音に風を吹きそへて夕日涼しき岡のへの松」

ふき-そふ 葺添ふ【動下二他】添へ足して葺く。葺き加ふ。式子内親王集「けふはまた葺きそへてけり莖の屋のこやの軒なるあやめひまなく」「などを吹くこと。

ふき-そめ 吹初【名】新年に、初めて、笛

ふき-そらす 吹反す【動四他】㊀風吹きあたりて、物を反りかへらす。太平記「由井濱(ユヰガ)の浦風に、濃き紅の大笠符(オホンカサジルシ)を吹きそらさせ」㊁笛などを吹きて、その音色を冴えしむ。雪女五枚羽子板「藤田太郎を笛の役、御預りの小水龍(コスヰリウ)、餘寒の風に吹きそらし」「鑄造の額。

ふき-だか 吹高【名】吹きて造りたる高。

ふき-だけ 吹竹【名】ひふきだけ(火吹竹)の略。八笑人「大家(オホヤ)様と違って、吹竹の尻の穴は、なりたけ小いがいいもんだ」

ふき-だす 吹出す【動四自】㊀ふきいだす(吹出す)㊁の略。「噴出す」㊁ふきいだす(吹出す)㊂の略。㊂ふきいだす(吹出す)㊃の略。薩摩歌「その明くる日、餘所ながら、松茸と赤貝を貰うたと語れば、おまんも吹出して、えい、好い加減な事ばかり」

ふき-だす 吹出す【動四他】ふきいだす(吹出す)に同じ。【俚諺】

ふき-たつ 吹立つ【動下二他】㊀外部へ立ちのぼらしむ。萬葉「竈にはけぶり吹き立てず」方丈「空には灰を吹き立てれ

ば」 ㊁ふたつ(立つ)は接尾語』ふく(吹く)㊁㊁を強めていふ語。「古語」源氏「四十人のかいしろ、言ひ知らず吹き立てたる物の音(ネ)どもにあひたる松風」

ふきたつ 拭立つ【動下二他】『たつ(立つ)は接尾語』ふく(拭く)を強めていふ語。さかんに拭き込む。

ふきたて 吹立【名】吹きたるばかりにて、未だ時を經ざること。吹き出して、間の無きこと。

ふきたて 葺立【名】葺きたるばかりにて、未だ時を經ざること。葺きて、間の無きこと。

ふきたて 拭立【名】㊀拭き立つること。㊁拭きたるばかりにて、未だ時を經ざること。拭きて、間の無きこと。

ふきたふす 吹倒す【動四他】㊀風吹きて、物を倒す。ふきこかす。太祖「吹き倒す起す吹かるる案山子(カカシ)かな」㊁誇大なる言を吐きて、相手を壓倒す。高慢に言ひ挫る。

ふきたふる 吹倒る【動下二自】風に吹かれて倒る。續七部集「黍の穂は殘らず風に吹きたふれ」「たる玉。

ふきだま 吹玉【名】砺子を吹きて造りたる報酬。鑄造の料金。

ふきぢ 葺地【名】[建]瓦を載する前に、その下に葺く、重ね足の大なる葺方の家根。どぶぶき。ふきのぢ。

ふきちん 吹賃【名】金屬を鎔鑄して、貨幣などを造りたる報酬。鑄造の料金。

ふきちらす 吹散す【動四他】㊀風吹きて、物を散らす。吹きて散らばらしむ。源氏「おとどの瓦さへ殘るまじう吹きちらすに」㊁頻りに言ひ觸らす。相手を擇ばず、盛んに大言を吐く。

ふきちる 吹散る【動四自】風に吹かれて散る。俳諧古選(荷兮)「木枯に二日の月の吹き散るか」

ふきつ 不吉【名】めでたからぬこと。

ふきつぎ 吹繼【名】鑄造して、加へ補ふこと、又その物。

ふきつぎいっしゆぎん 吹繼一朱銀【名】明治元年より同二年まで、大阪貨幣司にて、鑄造せし嘉永一朱銀。價額は一分銀の四分の一に當り、同七年まで通用せり。

ふきつく 吹附く【動下二他】㊀風吹きて、物をその方角に動かし寄す。吹きかく。吹きあつ。宇治「風の吹きつくるやうに、德附きて」方丈「焔を地に吹きつけたり」㊁吹きて、火の燃えつくやうにす。出觀集「埋火に松葉かきつめ吹きつけてあかしぞかぬる冬の山里」

ふきつく 吹附く【動下二自】『つく(附く)は接尾語』ふく(吹く)㊀を強めていふ語。吹きかく。俳諧新選(沙記)「吹きつける風の筋立つ氷かな」

ふきづくり 吹旁【名】『この旁を含める字の中にて、吹の字が最も普通のものなるよりいふ』漢字の旁の一。「坎」・「吹」・「欺」などの字の左にある欠の字。

ふきつけ 吹附【名】吹き附くること、又その場所。

ふきつたふ 吹傳ふ【動下二他】笛の吹き方を習ひ傳ふ。源氏「いにしへを吹き傳へたる笛竹に囀る鳥の音さへかはらぬ」「略。

ふきっちよ 不器用・無器用【名】次條のふきっちよう 不器用・無器用【名】『ひだりぎっちよ(左器用)を見よ』㊀ふきよう(不器用)㊁の訛。㊁相手をもてなすに、愛想のよからざること。「同じ。

ふきづつ 吹筒【名】ふきやづつ(吹矢筒)に同じ。

ふきづめ 吹詰【名】㊀風の、絶えず吹くこと。㊁笛などを、絶えず吹くこと。

ふきづめさう ふきづめ草【名】[植]いはうめ(岩梅)に同じ。

ふきつもの 不吉者【名】㊀不吉なる者。緣起の惡き人。㊁他人を罵りていふ語。日本擇柚始「待て、待て、不吉者」

ふきて 吹手【名】㊀笛などを吹く人、又それを巧にする人。㊁大言を吐く癖のある人。ほらふき。

ふきで 吹出【名】ふきでもの(吹出物)の略。

ふきでのはま 吹出濱【名】[地]豐前國築上(ツキアゲ)郡東古富村に屬する濱。山田川の川口。歌枕に名所たり。澤瀉草「秋風のふきでの濱の濱姫は夜寒になれや衣片敷く」

ふきでもの 吹出物【名】はれもの。できもの。ふきで。腫物。

ふきてら 富貴寺【名】豐後國西國東(ニシクニサキ)郡宇佐町の東四里の地にある古寺。創建年代詳かならず。藤原時代の美術品を藏す。

ふきでる 吹出る【動下一自】腫物發生す。ふきだす。[俚語]

ふきとうき 附記登記【名】[法]主登記に關係ある事項を表示するため、これに附記してなす登記。

ふきどき 葺時【名】屋根を葺くべき時。一代男「軒も葺時を忘れ、雨の洩る夜」

ふきとばす 吹飛ばす【動四他】㊀風吹きて、物を飛びちらす。芭蕉「吹きとばす石は淺間の野分(ノワキ)かな」㊁大言を吐きて、相手の膽を奪ふ。[俚語]

ふきとほし 吹通【名】㊀風の吹き通すこと、又その場所。ふきぬき。㊁ふきづめ(吹詰)に同じ。

ふきとほし 吹通【名】㊀風の絶えず吹くこと。㊁大言を言ひつづくること。

ふきとほす 吹通す【動四自】㊀風、吹きて、こなたよりかなたへ通る。吹きぬく。㊁風、絶えず吹く。㊂大言を言ひつづく。

ふきとほす 吹通す【動四他】笛を吹きつづく。源氏「笛を、いとをかしく吹きとほしたるかな」同「鶯のねぐらの枝も靡くまでなほ吹きとほせよとの笛竹」

ふきとる 拭取る【動四他】拭きて、濡れ・汚れなどせる部分を除く。ぬぐひて淨む。

ふきながし 吹流【名】旌の類。長き數條の帛を、半月形に撓めたる竹に附けて、高く竿の端に結びつけ、風にあへば、長く後方に靡くやうにしたる物。用法は吹貫(ノボリ)四に同じ、又、紙にて造りたるもあり。のぶすま。鬱口(ウツボ)。

ふきなす 吹成す【動四他】風吹きて、物を、或狀態ならしむ。源氏「御几帳などを、風のあらはに吹きなせば」玉藻「もろく散る花をばかろく吹きなして柳におもき春の夕風」

ふきなす 吹鳴す【動四他】ふきならす(吹鳴す)に同じ。[古語]「末べをば笛に作り吹きなすや」

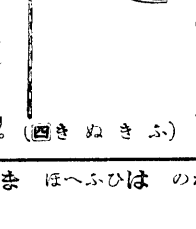
ふきなびかす 吹靡かす【動四他】吹き附けて靡き伏さしむ。源氏「山の木どもも吹き靡かして、枝ども多く折れ伏したり」

ふきなほし 吹直【名】ふきかへ(吹替)に同じ。

ふきなほす 吹直す【動四他】ふきかふ(吹替ふ)に同じ。

ふきならす 吹鳴す【動四他】笛などを吹きて鳴らす。吹きて、音(ネ)を出す。源氏「懷なりける笛取り出でて吹きならし、かげもよし、などとつづしりうたふ程に」

ふきぬき 吹抜【名】㊀ふきとほし(吹通)に同じ。㊁襠袴を著ず、ただ一枚の著物を著たること。[俚語]㊂[建]周圍の全部又は大部分を、壁・板張などにせず、開放すること、又その構造。東屋(アヅマ)の構造のごとき、これなり。あけはなし。ふきはなし。㊃「輪の中を風の吹き抜く意」旗の類。長き數條の帛を、輪形に撓めたる竹に附けて、高く竿の端に結びつけ、風にあへば、長く後方に靡くやうにしたる物。戰國時代の末頃より軍陣に用ひ、小き形なるは、指物(サシモノ)ともしたり。ふきぬきのぼり。「吹貫」今津陣物語「最上(モガミ)方に、俄かに紅の吹貫を持上げたり」



吹貫の長旗(ハタ)【句】ふきぬき(吹抜)㊃に同じ。

ふきぬきさくやらい 吹抜柵矢來【名】[建]柵子(コヅク)の間を、吹抜㊂にしてある柵矢來。

ふきぬきすがた 吹抜姿【名】吹抜㊂のふきぬきどてら 吹抜溫袍【名】肌に、ちかにどてら一枚を著ること。源氏「その方どもは、何れの御家來、吹抜溫袍に三尺帶、見れば丸腰・五分月代(カヤリ)」

ふきぬきのぼり 吹抜幟・吹貫幟【名】ふきぬき(吹貫)四に同じ。

ふきーぬく 吹抜く【動四自】■風吹きて過ぐ。吹きとほす。■徹くまで吹く。吹きに吹く。

ふきーぬく 吹抜く【動四他】吹きて抜き取る。平家「辻風、夥しう吹きて、……棟門(カドド)・平門(ヒラド)を吹き抜いて、四五町・十町吹きもて行き」

ふきーね 吹値【名】吹き掛けていふ値段。吹き掛けたる言値(イヒネ)。

ふきねーのみこと 葺根命【名】ふゆきぬのかみ(冬衣神)に同じ。「條下を見よ。

ふきーのーしうとめ 蕗の姑【句】ふき(蕗)の

ふきーのーたう 蕗薹・款冬薹【名】蕗の花。

ふきーのぢ 葺野地【名】「(蕗薹)の訛。

ふきーのーと 蕗薹・款冬薹【名】ふきのたう

ふきーば 吹場・吹塲【名】金屬などを吹きて、物を造る場所。鑄造する所。

ふきば 蕗葉・款冬葉【名】(植)へんけいさう(辨慶草)に同じ。

ふきーはなし 吹放【名】(建)ふきぬき(吹抜)に同じ。

ふきーはなつ 吹放つ【動四他】風吹き當りて、物をはなれしむ。方丈「門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き」

ふきーはらし 吹晴【名】風の自由に吹きて、遮る物なき場處。ふきさらし。和合人「お寒い、寒い、このまあ寒いふきはらしへ出る事かと、物干へ出れば」

ふきーはらふ 吹拂ふ【動四他】風吹きて、物を拂ひのく。源氏「木の下吹きはらふ風の音など、たとへん方なく」

ふきーはる 吹晴る【動下二自】風吹きて、空晴る。雲霧など、風に吹き拂はれて、晴る。玉葉「明けしらむ波路の霧は吹きはれて遠島見ゆる秋の浦風」

ふきーびん 吹鬢【名】『自動詞のふく(吹く)四とふき(笛)とを見よ』振み出づるやうに結ひたる鬢。一代男「吹鬢の京算」

ふきふ 不急【名】急に必要ならぬこと。

ふきふ 普及【名】あまねく行き渡ること。

ふきふ 賦課【名】書を負ひて、遊學すること。

ふきーぶり 吹降【名】風まじりに、雨降ること。風雨。

ふきーべ 吹部【名】古、鼓吹司(ツカサ)に屬して、鼓吹の事を學習せし役。

ふきーべり 吹減【名】金屬を鑄て、物を造る時に、その量目の減ること。

ふきーほす 吹乾す【動四他】風に吹かせてかわかす。古語」續古今「白妙の衣吹きほす木枯のやがてしぐるる天のかぐ山」

ふきーほそる 吹細る【動四自】風吹き當りて、細くなる。吹かれて細る。太平記「夜嵐に吹きほそりたる笨山子(シカカ)かな」

ふきーまがふ 吹紛ふ【動四自】風に吹かれて入り亂る。源氏「梅の香も、小簾内の匂に吹きまがひて」

ふきーまく 吹捲く【動四他】風吹きて、めぐらし亂す。新古今「秋風の袖に吹きまく嶺の雲を翼にかけて雁も鳴くなり」

ふきーまくる 吹捲る【動四他】前條に同じ。方丈「三四町をかけて吹捲るままに」

ふきーまさる 吹增る【動四自】風、增りて吹く。風勢更に加はりて吹く。玉葉「吹きまさる風のままなる葛の葉のうら珍しく秋は來にけり」

ふきーまし 吹增【名】更に鑄造して、不足を補ふこと。

ふきまし-おほばん 吹增大判【名】次條に同じ。

ふきまし-おほばんきん 吹增大判金【名】てんぽうおほばんきん(天保大判金)に同じ。

ふきーまはし 吹舞【名】ふきまはすこと。

ふきーまはす 吹舞す【動四自】ふきまよふ(吹迷ふ)に同じ。

ふきーまふ 吹舞ふ【動四自】舞ふ如くに吹く。續古今「庭の上に吹きまふ風の無かりせば散り積む花を空に見ましや」

ふきまめ 富貴豆【名】ふうきまめ(富貴豆)に同じ。

ふきーまよはす 吹迷はす【動四自】次條に同じ。源氏「暮れてゆくままに、物も見えず吹きまよはして」

ふきーまよふ 吹迷ふ【動四自】風、方向を定めずふく。ふきまはす。古今「吹きまよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の」方丈「吹きまよふ風に」

ぶーきみ 不氣味・無氣味【名】氣味わるきこと。快くあらぬこと。和合人「どういふ了簡で、このやうに御馳走があるのだ。ぶ氣味だ」

ふきーみそ 蕗味噌・款冬味噌【名】蕗の薹(ツボミ)を刻みて入れたる味噌。苦味あり。柚味噌(ユズ)の類。自隨憲名法語「屏風引き廻し、款冬味噌喰ひたる顏して、そら眠せんずる下繩(シタヅナ)なるめり」

ふきーみだす 吹亂す【動四他】風吹きて、亂れさす。鳳雛「一しきり吹きみだしつる風は止みて誘はぬ花ものどかにぞ散る」

ふきーみだる 吹亂る【動四他】前條に同じ。「古語」源氏「ほとほとしくこそ吹きみだり侍りしか」同「吹きみだりたる荊葺に附けたまへれば」

ふきーみつ 吹滿つ【動四自】風、一面に、餘す所なく吹く。普く行きわたりて、風吹く。鳳雛「庭の面に夕の風は吹きみちて高き薄の末ぞ亂るる」

ふきーむすぶ 吹結ぶ【動四他】■風吹きて、物を結び合はするやうにす。風吹きて、入りまじらす。後鬱「いかに吹く風にあればかおほしまの尾花の末を吹きむすびたる」續千載「吹きむすぶ荻の葉分に散る露を袖までさそふ秋の夕風」■風吹きて、露を生ず。詞花「荻の葉に露吹きむすぶ木枯の音ぞ夜寒になりまさるなる」

ふきーめ 布巾【名】■『周禮に「祭祀以二疏布巾一覆二八簋一」とあり』布の小きれ。■食器を拭ふ布の小きれ。「具。

ふきーめ 布衾【名】布にて仕立てたる夜具。

ふきーめ 斧斤【名】をの。まさかり。斧斤入る【句】森林などの樹木を、斧斤にて伐る。「の金。

ふーきん 賦金【名】賦課する金。わりつけ。

ふーきん 附近【名】近きほとり。あたり。

ふーぎん 諷經【名】【佛】『漢字の朱音』■音聲を調へて、經文を讀誦すること。■佛前の勤行(ゴンギャウ)。【禪家の語】

ぶーきん 夫金【名】德川時代に、諸侯・旗本等の領地知行所より、役夫を出すに代へて納めし金。ぶく(夫公事)參照。

ぶーきん 歩金・分金【名】一歩金と二歩金との總稱。ぶばんきん。

ふきん-しゆ 不筋手【名】『莊子の逍遙遊篇に「宋人有下善爲二不龜手之藥一者上也」とあり』手のひびわるるを防ぐこと。

ふきんせい-たい 不均齊體【名】【醫】『英 Asymmetry』身體中に於て、一對を成せる器官の兩者、又は身體の兩半の、尋常の程度よりも甚しく構造もしくは官能を異にせるもの。

ふーぎんみ 不吟味【名】■吟味をせざること。■吟味の十分ならざること。行屆かざる吟味。領地島原蜂合戰「富樫(トガ)が關所の不吟味は、天が下に隱なし」

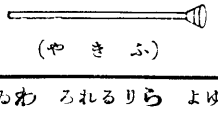
ぶきめく 【動四自】粒立ちたる感じす。ぶつぶつす。甲陽軍鑑「下手(ヘタ)に拵へたる供御(クゴ)は、柔かなるかと思へばぶきめく。こはきかと思へばぐしやつく。これ、煮えぬ飯なり」

ふーきもの 吹物【名】吹きて鳴らす樂器。卽ち笛・尺八などの總稱。管樂器。(彈物(ヒキモノ)に對して)源氏「御階(ミハシ)のもとの苔の上に樂人召して、上達部・王子たちも、みな、おのおの、ひきもの・ふきもの、とりどりにしたまふ」

ふきーもの 不義者【名】■義に背ける人。筋道に外れたる事をする人。重衡子「夫ある者を踏付(フミツケ)にする不義者」■密通をなす人。川中島合戰「不義者の男女」

ふきーもやう 袘模様・袖模様【名】衣服の袘に、模様を置くこと、又その模樣。

ふきーや 吹矢【名】串の如く削りて、紙製の羽を附けたる矢を、木又は竹の筒に入れ、一方より息を吹き込みて、物に射あつるもの。藤要毛「吹矢のいろいろ飾りつけたる小見世の親父(オヤヂ)」


(やきふ)

ふきや 吹屋【名】㊀金屬にて、物を吹き作る家、又その職の人。源氏奈良筥「銅の吹屋が樓んださうな」㊁さいくざころ(細工所)㊂に同じ。

ふきや 吹屋【名】〔地〕備中國川上郡にある町。成羽(ナリワ)町の北二里半。

ふきやう 府卿【名】ふけい(府卿)に同じ。

ふきやう 富強・富彊【名】㊀富みて、勢力の強きこと。㊁「富國・強兵」の略。

ふきやう 不況・不況【名】景況の好からぬこと。情況のわるきこと。

ふきやう 不享【名】『史記の五帝紀に「習二用干戈一以征二不享一」とあり。享は朝享の義』支那にて、諸侯の朝貢せざること。

ふきやう 諷經【名】〔佛〕ふぎん(諷經)㊀に同じ。

ふきやう 不輕【名】〔佛〕㊀他人を輕んじ賤しまざること。㊁じやうふきやう(常不輕)に同じ。源兵「不輕の靡は、いかが聞かせたまひつらん」

不輕の行(ウヤウ)【句】〔佛〕古、僧の、不輕菩薩の行跡に倣ひて、途中の人を禮拜し、「己我不二敢輕慢一、汝等當レ作レ佛」といふ法華經常不輕品の文句を唱へしこと。

ふーぎやう 俯仰・俛仰【名】下へ向くと、上へ向くと。ふすと、あふのくと。ふかう。

ぶーきやう 武強【名】武事にすぐれて強きこと。(文弱に對して)

ぶーぎやう 奉行【名】㊀命令を奉じて、その事をあづかり務むること。ほうかう。傳奏記「國務を奉行する事」玉葉「後白川院かくれさせたまひにける後の御事を、經房卿に、奉行すべき由仰せおかれたりけるを聞きて」㊁武家時代の種種なる職の長官。今の局長ほどのもの。もと奉行人と稱し、鎌倉・室町兩幕府時代には、政所(マンドコロ)・評定衆・問注所・侍所等に屬せし、常置或は臨時の職たり、綾田・豊臣兩時代にも、この名稱を用ひし職多く、殊に、豊臣時代には、大老の下に五奉行あり、徳川時代には、寺社奉行・町奉行・勘定奉行を三奉行、普請奉行・作事奉行・小普請奉行を下(クダ)三奉行と呼びし外、御目見(オメミエ)以上・御目見以下及び中央・地方を通じて、常置のにも、臨時のにも、何何奉行と稱せしもの多し。又、室町時代の末には、諸國の大名中にも、家職に、この名稱を用ひしもの尠からず。ぶぎやうにん(奉行人)㊁參照。

ぶーぎやう 舞行【名】舞ひながら行くこと。舞ひ歩くこと。庭訓往來「峙二舞行之鍾於庭上一」

ぶぎやう 輔行【名】〔書〕まかしくわんぶぎやうてんぐけつ(摩訶止觀輔行傳弘訣)の略。

ふーぎやうぎ 不行儀【名】行儀のよからぬこと。ぶさはふ。

ふぎやう-じん 不狂人【名】狂人ならぬ人。尾上梁賺機關「狂女を諫むる不狂人」

ふーぎやうじやう 不行狀【名】行狀のよからぬこと。ふみもち。不品行。不行跡。不行(フカウ)。

ぶぎやう-しよ 奉行所【名】奉行がその役目の事務を執る所。奉行の役所。

ふーぎやうせい 府行政【名】内務大臣の監督の下に行はるる、府の自治行政と、府知事が府内に行ふ國の行政と。府政。

ふーぎやうせき 不行跡【名】ふぎやうじやう(不行狀)に同じ。

ぶぎやう-てぎり-の-さいばん 奉行手限裁判【名】てぎりさいばん(手限裁判)に同じ。

ぶぎやう-にん 奉行人【名】㊀奉行の事に當る人。筆閣「事終りて、罷り出でけるを、奉行人進み寄りて」㊁鎌倉・室町兩幕府の職制の一。鎌倉時代の初には、殆ど定職なく、文筆に堪へたる京家の官人を、これに充て、家司(ケイ)として、諸文官の上に立ち、公事(クジ)奉行人とも稱せしむ。嘉祿中、評定衆を置き、建長中、引付(ヒキツケ)衆を置くに及び、奉行人に補すべき門族を、その衆に定めしかば、評定衆の内にても、政所(マンドコロ)・問注所の執事、引付頭人などを帶せざる人人は、若稱のままに奉行人と呼びたりしため、殊更、引付衆、政所・問注所の兩寄人(ヨリウド)等も、普通に奉行人と呼び、それと同時に、その他に、何何奉行と稱する、臨時並びに常置の職あり。室町幕府にても、その制、鎌倉幕府に准じ、多くは前時代に奉行人たりし者の子孫を求めて、これに補せしが、應永永享の頃よりは、大抵奉行とのみ稱することとなり、これを御前(ゴゼン)衆・御前未參衆の二階級とせり。ぶぎやう(奉行)㊁參照。

ふーぎやう-びく 不輕比丘【名】〔佛〕『形相は比丘、根性は菩薩なるより、比丘とも菩薩ともいふ』次條に同じ。

ふぎやう-ぼさつ 不輕菩薩【名】〔佛〕じやうふぎやうぼさつ(常不輕菩薩)に同じ。太平記「不輕菩薩の道を行きたまひしに、罵詈・誹謗する人をも咎めず、打擲踩蹋する者をも、却りて敬禮したまひき」

ふぎやうぼさつ-ほん 不輕菩薩品【名】〔書〕じやうふぎやうぼさつほん(常不輕菩薩品)の略。

ふぎやう-ほん 不輕品【名】〔書〕前條のぶぎやうまど 奉行窓・奉行窗【名】能舞臺の鏡の間(マ)に設けて、舞臺の樣子をうかがふための小窓。のぞきまど。

ふぎやう-ちやう 葺屋町【名】〔地〕東京市日本橋區の町。徳川時代には、初、上堺町(カミサカヤチヤウ)といひ、今の堺町を下(シモ)堺町といひしを、後改稱せるなり。和合人「何も、世間に無(ネ)えといふほど不思議な器量でもなし、隨分、堺町・葺屋町邊には、紛はしき類面(ルイメン)も見えるけれど」風來六六部集放屁論「住太夫は、葺屋町に、義太夫節の骨髓を語る」

葺屋町の芝居【句】市村座の、葺屋町に在りし時の稱。天保十三年、淺草猿若町(サルワカマチ)に移轉せし時、その二丁目に在りしより、又、二丁目の芝居、又は單に二丁目と呼ばれたり。

ふぎやう-づつ 吹矢筒【名】吹矢の矢を入れて吹き遣るに用ふる筒。竹又は木にて作る。ふきづつ。膝栗毛「吹矢の色色飾りつけたる小店……、こいつはやらかして見ようと、吹矢筒に、矢を入れ」

ふぎやーやむ 吹止む【動四自】風、吹くこと止む。風をさまる。

ふぎやーやむ 吹止む【動下二他】笛などを吹くことを止む。宇治「刀を抜きて走りかかりたる時に、そのたび、笛を吹きやみて、立ち退りて」

ふぎやーゆきのした 蕗雪下・款冬雪下【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。高さ一尺内外。葉は宿根より生じ、大形にして、蕗に似、長き葉柄を有す。夏・秋の交、小形・白色の五瓣花を開く。本州中部以北の草本帶に生ず。

ふぎよ 芙蕖【名】㊀蓮(ハス)の花。㊁〔植〕はちす(蓮)に同じ。

ふーぎよ 不許【名】許さぬこと。正統記「百川(カモ)の朝臣、この天皇に受け繼がしめ奉らんと心ざして、……、終に皇太子にすゑ奉りき。その時、暫く不許なりければ、四十日まで、殿の前に立ちて」同「平の將門……。使(シ)の宣旨を望み申しけり。不許なるによりて、憤をなし」

ふーぎよ 傅御【名】もりびと。つきそひ。

ぶーぎよ 武擧【名】支那にて、武藝に達したる者を採用するために行ひし科擧。唐の則天武后の時より始まりしといふ。

ぶーぎよ 撫御・撫馭【名】愛撫して統御すること。てなづくること。

ふーきよう 不興【名】㊀興のさむること。興味の無くなること。ぶきよう。非興。㊁機嫌の損じたること。不快に感じたること。不機嫌。立腹。重井筒「尖廓(トンガリ)にて、……といふ顔の不興なれば」㊂かんだう(勘當)㊁に同じ。諸曲巴「この旨を背かば、主從三世の契絶えはて、永く不興とのたまへば」

ぶーきよう 不器用・無器用【名】㊀器用ならぬこと。つたなきこと。ぶきっちよ。和合人「ええ、疊では無(ネ)え。煙管(キセル)がよ。何といふぶきような聞樣(キヤウ)だ」㊁道義に背きてあること。卑劣。生玉心中「いかに身が術ないとて、不器用な氣になりをった」

ぶーきよう 不興・無興【名】ふきよう(不興)㊁に同じ。廣嚢記「中將、酒三度受けて、いと無興に思はれたり」

ふきよう-がほ 不興顔 【名】不興なる顔つき。愛想氣なき顔色。ぶっちゃうづら。續膝栗毛「わが轉びたればこそ、かく賑かなれとて、不興顔するも可笑しく」

ふぎようけつ-きくわん 不凝結機關 【名】『英 None ndencing stem engine』凝結器を有せざる機關。

ふきようごゑ 不興聲 【名】不興らしき聲。不興なる聲。凱旋八島「よにも不興聲にて」

ふきようもの 不器用者・無器用者 【名】不器用なる人。甲陽軍鑑「それは無器用者にて、中中、我等が跡はなるまじきぞ」

ふきよか 不許可 【名】許可せぬこと。

ふきよく 負極 【名】〔理〕**しなんきよく**(指南極)に同じ。(正極に對して)

ふきよく 布局 【名】局面の布置。全體の配置。

ふきよく 譜曲 【名】音樂の調子。樂譜。

ぶきよく 部曲 【名】■人民又は隊伍の部わけ。くみ。■上古、臣(オミ)・連(ムラジ)伴造(トモノミヤツコ)・國造(クニノミヤツコ)・村主(スグリ)等、諸豪族の有せし私民。例へば、中臣部(ナカトミベ)・齋部(イムベ)・物部(モノノベ)・玉造部(タマツクリベ)・鏡作部(カガミツクリベ)・土師部(ハジベ)など。諸豪族は、これを擁して、勢を張りしが、大化の改進に廢止せしめらる。かきべ。かきの民。部民。「ちたる、その各部。

ぶきよく 部局 【名】物事を幾つかに分ち、各一部ひと音曲と。

ぶきよく 舞曲 【名】■まひと音曲と。「星の一。

ぶきよく-せい 武曲星 【名】〔天〕北斗七

ふきよす 吹寄す 【動下二自】風吹きて、寄せ到る。風雅「春もはやあらしの末に吹きよせて岩根の苔に花ぞ殘れる」

ふきよす 吹寄す 【動下二他】風吹きて、物を一所に寄り集まらしむ。ふきあつむ。

ふきよせ 吹寄 【名】■風の吹き寄すること。■種種の物を集め合はすること。■布帛の模様の、種種の木の葉の散り亂れたるさまを染め出せるもの。四『藤原良經の「木の本につもる木の葉をかきつめて鐙あたたむる秋の盃」といふ歌に本づく』種種の木の葉の散り亂れたるさまを模様としたる盃。五〔建〕一箇所に、二つづつ並ぶること、又その構造。

ふきよせ-しげどう 吹寄重籐 【名】吹寄籐の、普通のより一層繁く巻きたるもの。重籐にて、且つ吹寄籐なるもの。

ふきよせ-じる 吹寄汁 【名】雜多の材料を寄せ集めて作る汁物。

ふきよせ-だるき 吹寄棰 【名】〔建〕二本づつ一組として取り附けたる棰。

ふきよせ-どう 吹寄籐 【名】弓の籐の巻方の、二所づつに寄せて巻きたるもの。

ふきよせ-なべ 吹寄鍋 【名】**よせなべ**(寄鍋)に同じ。

ふきよせ-ばしら 吹寄柱 【名】〔建〕一箇所に二本づつ建てたる柱。

ふきよせ-わり 吹寄割 【名】〔建〕棰割(カヘワリ)の一法。本繁割(ホンガヘワリ)の棰を、三本目ごとに抜き取りて、殘る二本づつを、一組なると同じ間隔にするもの。

ふきよふ 不許不 【名】〔哲〕『獨 Sollen』■思惟意志の規範的・妥當的必然。當爲。(不可不に對して)■西南獨逸學派にて、認識の對象を、妥當その物、規範その物なりとすること。認識の對象を存在なりとする摸寫的見解に對する見解にして、後には、論理的に純化して、價値その物と稱せり。(存在・實在に對して)

ふきよる 吹寄る 【動四自】■風に吹かれて、一所に寄り集まる。俳諧新選(無名氏)「月浮きて吹きよる水や夕すずみ」■笛を吹きつつ近寄る。源氏「心ありて風のよぐめる花の木にとりあへぬまで吹きや寄るべき」

ふきよわる 吹弱る 【動四自】風吹きて、その勢弱る。風の吹く勢弱くなる。新拾遺「吹きよわる嵐のひまの浮雲やしばし休らふ時雨なるらん」

ふぎり 不義理 【名】義理の缺けたること。道ならぬこと。

ふきりつ 不規律・不紀律 【名】規則の立たぬこと。きまりのなきこと。

ふきりやう 不器量 【名】■器量の無きこと。才能に乏しきこと。平家「假令、この身こそ、不器量に候へば、爰にて自害を仕り候ふとも」■容貌のみにくきこと。

ふきわく 吹分く 【動下二他】■風吹きて、こなた・かなたに分ちなす。■鑛石を熔して、含有物を分析す。

ふきわく 葺分く 【動下二他】〔建〕形の異なる部分の、交互にまじはるやうに葺く。スレエト葺などの場合に、この葺き方をなす。

ふきわけ 吹分 【名】吹き分くること。式「大しほや淡路の瀬戸のふきわけにのぼりくだりの片帆かくらん」

ふきわけ 葺分 【名】葺き分くること。

ふきわけ 吹幡 【名】女の髪の結ひ方の一。昔、大名の奥方などの結ひしもの。

ふきわたす 葺渡す 【動四自】葺きつづく。暗間なく葺く。枕「ひはだ屋に、菖蒲、うるはしく葺きわたしたる」

ふきわたる 吹渡る 【動四自】風吹きて、過ぎ行く。風雅「吹きわたる春の嵐の一はらひあまぎる花にかすむ山もと」

ふきわど 吹井戸・噴井戸 【名】井戸側より溢れて、水の沸き出づる井戸。

ふきわら 吹繪 【名】地紙の上に切抜の型を置き、筆に墨汁などを含ませたる上より、氣息(イキ)を强く吹き掛け、その墨汁を散らして作る戯畫。

ふきをのかみ 吹男神 【名】**おほなほびのかみ**(大直日神)に同じ。

ふく 福 【名】■さいはひ。かうふく。■神佛の授くる品物。狂言「福渡」「御福(ゴフク)を賜(タ)ばってござる。御福は何ぢや。福は、ありのみでござりまする」■「動」『鼠は大黒天の使はしめなるよりいふ』**ねずみ**(鼠)の異稱。(主に、接頭語**お**(御)を添へていふ)〔花柳社會の語〕

福は內【句】次條の略。「內」に同じ。

福の無い聲で福は內【句】「鬼は外、福は內」の略。「內」に同じ。

福は內、鬼は外【句】「鬼は外、福は內」に同じ。

福は寢て待て【句】「果報は寢て待て」に同じ。〔諺語〕

ふく 吹く【動四他】『口をつぼめて、氣息を吐き出す時の音「ふ」に、語尾の添ひたるもの』■口・鼻などよりはき出す。(吸ふに對して)繁千葛「煙草くゆらせ、……口と鼻から煙(ケブ)をふいてゐる」■勢よく風を送(オク)る。風雅「春もはやあらしの末に吹きよせて岩根の苔に花ぞ殘れる」■樂器を口にあてて音を出す。源氏「笛吹く」■風雨の勢强くなる。風雅「吹きよわる嵐のひまの浮雲やしばし休らふ時雨なるらん」■風雨の勢弱くなる。風雅「吹きよわる嵐のひまの浮雲やしばし休らふ時雨なるらん

く大げさに言ふ。鵜飼合戦「身を吹きて山城守と慢し、他を卑しめ」 三氣息を吹き入れて、笛の類を鳴らす。 四内より外に出だす。「噴く」「火をふく」「芽をふく」 五『吹革(ふいご)』などにて、風を吹き送りしよりいふ。『金屬の鑛石を熔して、まざり物を除き去る。精錬す。 六金屬又は硝子の材料を熔して、物を造る。 七風、物を動かす。

吹けば散る【句】次條に同じ。〔諺語〕心中二つ鹿鷺「仁右衛門殿も屏風、千代が一家は吹けば散る」 狂歌咄「さながらみなし麥の、吹けば飛び散るやうに生れつきたれば」

吹けば飛ぶやう【句】身體の痩せて細く、又、身分輕く、又、身代乏しくなど、すべて微微たるさまの形容。〔諺語〕

ふく葺く【動四他】草茅などにて、屋根をおほひ造る。

ふく拭く【動四他】ぬぐふ(拭ふ)に同じ。

ふく深く【動下二自】ふかくなる。たけなはになる。たく。(四季・夜・年齢などにいふ)〔更く〕 拾玉「諸摩に千鳥鳴くなり須磨のあまのふくるわが世を思ひしれとや」 膝栗毛「あなたは、いかうふけてお出でぢやはいな」 二齢かたぶく。年寄りたることが、容貌などの上にあらはる。

ふく化く【動下二自】 一むれふるびて、形かはる。「米ふく」 二空氣にさらされ、溶けて、粉となる。風化す。

ふく振く【動四他】ふる(振る)に同じ。〔古語〕記紀(カ)、御佩(ハ)かせる十拳劍(カツルギ)を抜きて、後手(シリヘデ)にふきつつ逃げませるを」

ふく【動四他】魚の鱗を剝す。〔料理の語〕狂言「根道心」「この鯖を、鱗をふいて、おろして、魚頭をつぎ、さて膾に作るぢや」

ふく服【助數】 一茶・烟草を飲む度數を示すに用ふ。 二抹茶を立つる度數を示すに用ふ。 三藥の紙包にしたるものの數を示すに用ふ。 四藥代ほど高下のある物はなし。八十服盛りて、銀五匁取るに、三服にて、銀五枚に樽肴を取る人もあり」

ふく幅【助數】掛物の筒數。軸。

ふく副【助數】架裟(ケサ)の筒數。

ふぐ河豚・河魨・海牛・鰒鮹・鯸【名】〔動〕『ふく(河豚)の轉。鯸の字は國ぶしにて、誤用なれども、俳書などに慣用せり』 圓鰾類に屬する海産の魚。形、鯊(ハゼ)に似、背部は黝黒色に黄ばみたる筋又は斑あり、腹部は白く、皮膚に鱗無く、顎は嘴のごとき形をなし、物に觸れば空氣を吸ひて、腹部を膨れさする特性あり。肉は美味なれど、肝臟又は卵巢に劇毒あり。種類多し。ふく。ふくべ。ふぐとう。

河豚食ふ無分別(ムフンベツ)【句】中毒の危險を冒して、河豚を食ふも、又毒に恐れて、美味なる河豚を食はざるも、共に無分別なり。〔諺語〕

河豚下げて、井戸覗く子を叱りけり【句】他の過を戒めて、自己の事には、心附かざる譬。〔諺語〕

河豚にも中(ア)れば、鯛にも中る【句】時によりては、常には善き物事も害となることある譬。〔諺語〕

河豚の立泳【句】妊婦の歩む醜さの形容。〔俚語〕

河豚の横飛(ヨコビ)【句】前條に同じ。

河豚は食ひたし、命は惜しし【句】欲望はあれども、それを滿さんとすれば危險の伴ふによりて、決行しかぬる譬。〔諺語〕

ふぐ不虞【名】虞(カハ)らざること。思ひがけなきこと。不測の變。まんいち。

ふぐ不具【名】一物の調ひそろはぬこと。雖然「物を必ず一具に整へんとするは、描き者のすることなり。不具なるこそよけれ」 二身體・四肢などの或部分の成り足らはぬこと、又その人。かたは。 三『文言の足り具(ソナ)らぬ義』 ふいつ(不乙)に同じ。

ふく服【名】一もふく(喪服)に同じ。 二娘におくれて、ふく著はべると詠める」 三喪服を著て、喪にこもり居ること、又その期間。 源氏「法皇の御ふくなりける時」 源氏「御ふくなど果てて、脫ぎ捨てたまへるにつけても」

ふく伏【名】〔佛〕煩惱(ボン)を制伏して、一時起らざらしむること。

ぶく佛供【名】一ぶっく(佛供)の略。榮花「佛供・燈明までの事」 二佛供を盛る器具。榮花「佛供、同じく七寶をもて飾り奉れり」

ぶく【名】がんくび(雁首)一を云ふ。〔伊勢「國の方言」〕

ぶっぐ佛具【名】ぶつぐ(佛具)の略。〔古語〕榮花「御帳よりはじめて、よろづの佛具、めでたくせさせたまひて」

ぶーぐ武具【名】一ぶき(武器)一に同じ。 二かっちう(甲冑)に同じ。

ふくあてごま福當獨樂【名】獨樂の一。木の臺の上にブリキ製の獨樂を仕掛け、上に針を横たへ、臺の下には、繪を書きたる紙を敷き、臺の上の獨樂をまはして、その針の指したる繪に應じて、賭物を得る法。

ふくあん腹案【名】心中にかまふる考。

ふくあんごう【名】〔動〕ひき(蟾蜍)を云ふ。〔安房國の方言〕 「る幸(サチ)。福祉。

ふくいう福祐【名】天地神明より授かる幸(サチ)。福祉。

ふくいおん複イオン【名】〔化〕『英Double ion』二種以上の元素より成れるイオン。例へば、水酸イオン・硫酸イオンなどの類。(單いおん・錯いおんに對して)

ふくいおん復蝻【名】〔動〕にしざち(復蝻)の漢名。

ふくいく馥郁【形】かうばしき香の形容。芬馥。

ふくいちまんこくうざう ふく一まん虛空藏【名】『ふく一まんは、如意虛空藏陀羅尼經に「爾時虛空藏菩薩白佛言、是經名何可ゝ號。佛言、此經名二如意虛藏一。……亦名二福智圓滿一」とある「福智圓滿」の訛なるべしといふ』 こくうざう(虛空藏)に同じ。 膝栗毛「伊勢は神明天照皇太神宮、……、朝飛(アサト)が嶽ふく一まん虛空藏」

ふくいん伏陰【名】『さんぶく(三伏)を見よ』夏になりて、陰雨多く、氣候の不順なること。

ふくいん福音【名】一〔基〕『英Gospel.喜しき音信の義』キリストによりて、天國實現し、救の道の立てられたりとの音づれ。 二幸福なる教訓・道報など。

ふくいん福因【名】〔佛〕福德の果報を招く業因(ゴフイン)。卽ち布施等の善根・功德(クドク)。(福果に對して) 海道記「過去の福因をうゑずして、現在の貧果を得たるか」

福因・福果【句】〔佛〕福因によりて、現世及び來世に福果の生ずること。

ふくいんけうくわい福音教會【名】〔基〕『英Evangelical Association』プロテスタント教會の一派。亞米利加合衆國に移住せる獨逸人ヤコブ・アルブライト(Jacob Albright)が西曆一七九六年に說教を創めしに基し、我國への傳道は、明治九年なり。教會の組織は、ほぼメソヂスト派に同じ。

ふくいんしゅぎ福音主義【名】〔基〕『英Evangelical』聖書中の福音書の教義と精神とに一致するを旨とする主義。

ふくいんしょ福音書【名】〔書〕『英Gospel』主として、新約聖書中、基督の言行を記錄したる馬太(マタ)傳・馬可(マコ)傳・路加(ルカ)傳・約翰(ヨハネ)傳の四卷、卽ち四福音書をいひ、又、新約聖書に收められざる福音書も數部ありて、經外福音書(Apocryphal Gospels)と稱せらる。

ふくいんどうめいくわい福音同盟會【名】〔基〕プロテスタント教會に屬するキリスト教徒の同盟團體。協同の精神を鼓舞し、宗教の自由を保護する目的の下に組織し、我國にては、明治十七年に設立し、同三十九年、日本基督教教會同盟の組織に伴なひて解散せり。

ふくいんるーてるけうくわい福音ルッテル教會【名】〔基〕プロテスタント教會の一派。その最も古きもの。獨逸を根據とし、スカンヂナビヤ(Scandinavia)諸國に於ける國教たり。

ふくう不空【名】〔人〕『梵 Amoghavajra

(阿目佉跋折羅)の譯語』眞言密教の付法第六祖。具さには、不空金剛。北天竺の婆羅門族。年十四(一說に十五)にして、金剛智に師事し、共に支那に入り、密教の奥義を傳持す。唐の玄宗・肅宗・代宗の三帝に師とし、深く歸敬を得て、大曆九年、長安の大興善寺に寂す。年七十。

ふ-ぐう 賁嵎【名】『賁の音、正しくはふ又はぶ。又、嵎の音、正しくはぐ。「虎、嵎を負ふ」を見よ』山曲の險をたのみて、勢を張ること。

賁嵎の勢【句】㊀山を背にして立てる虎の、勢の猛くさかんなること。㊁背後の勢力を恃みて、敵に對する狀の譬。

ふ-ぐう 不遇不耦【名】『漢書の霍去病傳に「諸宿將、常留落不耦」とあり』運命つたなくして、志を遂げ得ざること。

ふ-ぐうけとりしょ 副受取書【名】[商]『英 Duplicate receipt』受取書の紛失・毀損等によりて、その用をなさざる場合の豫備として、別に同一の內容を以て作る、第二の受取書。

ふぐう-けんさく 不空羂索【名】[佛]次條の略。慶長記「本地(ホンヂ)は不空羂索、爲衆生利益(ヰシュジャウリヤク)と、この砌に垂跡し」

ふぐうけんさく-くわんおん 不空羂索觀音【名】[佛]『音は、觀の字の韻に引かれてノンと發音す』次條の略。公事根源「興福寺南圓堂の本尊不空羂索觀音の像」

ふぐうけんさく-くわんぜおん 不空羂索觀世音【名】[佛]『梵 Amoghapāśa(阿謨伽播捨)の譯語。羂索は、必ず獲る所あるによりて、不空といふ。六觀音の一。生死(シャウジ)の大海に妙法蓮華の餌を蒔き、羂索にて、人天の魚を善提(ゼヂ)の岸に釣り上ぐる姿をあらはすといふもの。羂索は、菩薩の四攝法(シセフ)に譬ふ。形像は、種種あれど、三面・四臂にして、左右の兩面青く、手に蓮華・羂索・念珠・水瓶を持ち、鹿皮を裾とせるを、普通とす。不空羂索。

ふぐうけんさく-ほふ 不空羂索法【名】[佛]密教にて、不空羂索觀世音を本尊として行ふ修法。

ふぐう-こんがう 不空金剛【名】㊀[佛]『梵 Amoghavajra の譯語』胎藏界曼荼羅の蘇悉地(ソヂ)院中に、南より第四位にある菩薩。形像、肉色にして、赤蓮華(シャク)に坐し、左右の二拳を交へて、胸を抱く。㊁[人]ふぐう(不空)に同じ。

ふぐうこんがう-さんざう 不空金剛三藏【名】[人]ふぐう-さんざう(不空三藏)に同じ。

ふぐう-さんざう 不空三藏【名】[人]ふぐう(不空)に同じ。

ふぐうじゃうじゅ 不空成就【名】[佛]「次條に同じ。

ふぐうじゃうじゅ-によらい 不空成就如來【名】[佛]『梵 Amoghasiddhi(阿目佉悉地)の譯語』金剛界曼荼羅の五智如來の中、北方に在る尊、卽ち釋迦如來。形像、金色(コンジキ)にして、左手は拳印、右手は五指を舒べて、胸に當て、業(ワザ)・護・牙(ケ)・拳の四菩薩を眷屬とす。自利・利他の事業を成(ジャウ)ずといふ。

ふぐうちきぐわい 福內鬼外【名】[人]ひらがげんない(平賀源內)の號。

ふぐうんも-くわかうがん 複雲母花崗岩【名】[鑛]じゅんくわかうがん(純花崗岩)に同じ。

ふぐうめぼし 福梅干【名】福茶に入れし梅干。一茎「福豆や福梅干や商に合はぬ」

ふぐうり 河豚賣・鰒賣【名】河豚を賣りあるく人。俳諧古選(永吟)「鰒賣の聲かけ合うてゆく命かな」

ふぐえ 福江【名】[地]㊀肥前國福江島の東岸にある村。五島列島の首邑。五島氏の舊藩地。㊁明治の初年設置の縣の一。四年七月、肥前國舊福江藩の地に設けしもの。同年十一月長崎縣に入る。㊂三河國渥美(アツミ)郡にある町。豐橋市の西方約十里。衣浦(キヌラ)深く灣入して、小船の碇泊に便なり。

ふぐえ 服衣【名】ぶく(服)㊀に同じ。經信卿集「ふく衣を脫ぐとて、藁ごろも頃も經ずして脫ぎかふる名殘もうらの日數なりけり」

ふぐえき 服役【名】役務に服すること。兵役又は徵役などをつとむること。

ふぐえき-きげん 服役期限【名】服役すべき期限。服役の期限。

ふぐえじま 福江島・福江嶋【名】[地]肥前國五島列島中の最大島。列島中の最西に位し、周圍六十餘里。南松浦郡に屬し、全島九箇村に分る。「(五島城)に同じ。

ふぐえじゃう 福江城【名】ごたうじゃう(五島城)に同じ。

ふぐえふ 複葉【名】㊀[植]『英 Compound leaf』一つの葉柄に多くの葉片の生ずる葉。羽狀複葉・掌狀複葉の別あり。(單葉に對して)㊁二枚より成ること、又その物。

ふぐえふ-ひかうき 複葉飛行機【名】『英 Biplane』翼(ツバサ)を上下二段に製作したる飛行機。

ふぐえん 復緣【名】離緣したる者が、再び緣を結びて、從前の如くになること。

ふぐ-えん 複鹽【名】[化]『英 Double salt』二種以上の中性鹽が結合して、一の結晶を形成するもの。固體に於てのみ存在し、その溶液は、單に各成分の性質を示すにとどまる。例へば、明礬は、硫酸加里と硫酸アルミニウムとの複鹽にして、その溶液は、各成分のイオンの反應をすべて示す類。複合鹽。さくえん(錯鹽)及びふくがふぶつ(複化合物)參照。

ふぐ-おん 複音【名】[語]しいん(子音)に同じ。(單音に對して)㊁[音]『英 Polyphone』相異なる發音體(合唱・合奏等に於けるが如く、すべて、相異なる樂器なることもあり、ピヤノ・オルガン・琴等に於けるが如く、同一樂器中に存する場合もあり)が、同時に振動して生じたる音。重音。(單音に對して)

ふぐ-おん 副音【名】[理]ばいおん(倍音)に同じ。

ふぐ-か 服暇【名】きふか(急服)に同じ。

ふぐ-が 副芽【名】[植]『英 Accessory bud』同一の葉腋に二箇以上の芽を生じたる時、その中の主要ならぬもの。(主芽に對して)

ふぐ-かう 復校【名】㊀一旦轉校・退校等をなし、又は放校に處せられなどせし者の、ふたたび元の學校に入ること。㊁反復校覈すること。繰り返してしらべかんがふること。[復考・覆校・覆考]

ふぐ-かう 復航【名】船舶が、出發地に向ひて航行すること。(往航に對して)

ふぐ-かう 腹稿・腹藁【名】筆を執らぬ前に、腹の中にて、趣向を作ること。腹案。

ふぐ-かう 復講・覆講【名】師の講ぜしを、弟子の更に反復して講ずること。「じ。

ふぐ-かう 副稿【名】ひかへがき(控書)に同じ。

ふぐ-かう 福幸【名】かうふく(幸福)に同じ。慶長記「嘉辰令月無極と祝へども、福幸も、さまで無し」

ふぐ-かう 偶行【名】偶(タマ)して進み行くこと。

ふぐ-かう 腹腔【名】[醫]『獨 Bauchhöhle』動物の腹部の空處。上は橫隔膜によりて、胸腔と連なり、下は連續的に、骨盤腔に通じて、その下口に達し、內に胃・腸・肝・膵・腎・大血管・淋巴管・神經等を藏し、骨盤部に於ては、直腸・膀胱の外、女子にありては、子宮・輸卵管・卵巢等を容る。

ふぐ-がう 複號【名】[數]ふくがう(複符號)に同じ。

ふぐ-かうぐわん 副睾丸【名】[醫]『獨 Nebenhoden』男子の生殖器の一要素。睾丸の後上部にありて、やや扁圓にして長く、恰も睾丸の帽の如き形をなせるもの。睾丸にて製造せる精液を、輸精管を通じて、精囊に輸送する作用をなす。

ふぐかうぐわんえん 副睾丸炎【名】[醫]『獨 Epididymitis』副睾丸に發する炎症。急性と慢性とあり。前者は痲毒より起り、後者は結核性より發す。

ふぐかう-しん 偶行疹【名】[醫]『羅 Petechiae』水疱性の皮膚疾患。神經經路に沿ひて發するものと、然らざるものとあり。

ふぐかう-しんけい 副行神經【名】[醫]ふぐしんけい(副神經)に同じ。

ふぐかう-せん 復航船【名】復航する船舶。復航の途にある船舶。(往航船に對して)

ふぐ-かき 福掻【名】山城國鞍馬寺(クラマデラ)の初寅參の日、土地の人が、福等木(フクギ)と

いふ木にて、鍵の形に作り、福徳を掻き取りて、幸を得とて賣るもの。

ふく-かく 伏角【名】〔理〕『英 Dip 又 Dip inclination』磁針の方向が、水平面即ちその地點において、地球に引ける切線と成す角。場處及び歲月により、相違あり。俯角。傾角。(偏角に對して)**ちぢき**(地磁氣)參照。

ふく-かく 複閣【名】幾階かに重なれる

ふく-かげん 服加減【名】抹茶の湯の立てかたの巧拙。生駒朝類話「駒澤が、戻り次第に振り立てて、我等が先へ服加減」

ふくかぜの 吹く風の【枕】風は音のみして、見えぬ物なるより、**めにみぬ**(目に見ぬ)にかけていふ。古今「世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も戀しかりけり」

ふくかは 福川【名】〔地〕周防國都濃(ツヾ)郡にある町。中國街道の一驛。

ふく-がふ 複合【名】重なりあふこと。二つ以上の物が、一つにあはさること。

ふくがふ-えん 複合鹽【名】〔化〕**ふくえん**(複鹽)に同じ。

ふくがふ-くわしよ 複合花序【名】〔植〕『英 Mixed inflorescences』同一の植物にありて、二種の花序の混合せるもの。混生花序。

ふくがふ-こく 複合國【名】〔法〕**ふくさうこく**(複雜國)に同じ。「條に同じ。

ふくがふ-こくか 複合國家【名】〔法〕前

ふくがふ-ぜい 複合稅【名】〔法〕人民に課する稅が、單一ならずして、複雜なるもの。現時の文明諸國は、皆、この制に依る。複合租稅。複稅。(單一稅に對して)

ふくがふ-そぜい 複合租稅【名】〔法〕前條に同じ。(單一租稅に對して)「體。

ふくがふ-たい 複合體【名】複合せる物

ふくがふ-てうおん 複合調音【名】〔理〕『英 Compound-tone』**てうおん**(調音)[二]に同じ。

ふくがふ-どうし 複合動詞【名】〔語〕動詞の上に、動詞又はその他の品詞に屬する語の重なりて生じたる動詞。例へば、「行きなやむ」「かき撫づ」「根ざす」「うつむく」「またたく」「さ迷ふ」などの類。

ふくがふ-は 複合法貨制【名】〔經〕『英 Compound legal tender system』**がふはふくわ-せい**(合本位制)に同じ。(單一法貨制に對して)

ふくがふ-ぶん 副合分【名】〔鑛〕『英 Accessory components』岩石を組織する鑛物のうち、分量少くして、その岩石に重要ならぬ合分。(主合分に對して)

ふくがふ-めいし 複合名詞【名】〔語〕二箇以上の單語の複合して生じたる名詞。例へば、「金時計」「春風(ハルかぜ)」「足弱(アシよわ)」「青竹」「嬉しさ」などの類。

ふく-がへる 【名】〔動〕**ひきがへる**(蟾蜍)を云ふ。〔西國の方言〕「に同じ。

ふく-かまり 伏屈【名】**ふしかまり**(伏屈)

ふく-かん 副監【名】總監の下に在りて、これを輔佐する職。

ふく-かん 覆勘【名】[一]反覆勘考すること。勘(カン)へなほすこと。[二]鎌倉時代に、訴訟の裁斷に對し、原告又は被告より不服等の申請ありたる時、再び審理すること。[三]御書所(ゴショ)及び內御書所(ナイゴショ)の屬官。

ふく-がん 複眼【名】〔動〕『英 Compound-eyes』數多の六角形なる眼球の互に相接著し、眼球ごとに、神經系を偏ふる眼。昆蟲類に多く、蟹、蝦なども具ふ。(單眼に對して)

ふく-から 服柄【名】衣服の色・模樣。

ふく-き 福禧【名】さいはひ。幸福。

ふく-き 福基【名】幸福を生ずる基。

ふく-き 副機【名】〔兵〕軍艦にて、直接に推進機を運轉するにあらずして、その運轉に關聯して動作する機械。即ち抽氣唧筒・主給水唧筒の類。(補機に對して)

ふく-き 復館【名】元にかへること。元にもどること。

ふく-き 複記【名】[一]重複して記載すること。同じ物事を、重ねて記すこと。[二]**ふくきしき**(複記式)の略。(單記に對して)

ふく-き 複軌【名】**ふくせんきだう**(複線軌道)の略。(單軌に對して)

ふく-き 伏義・必羲【名】〔人〕支那の古の皇帝。三皇又は五帝の一に數へらる。姓は姜。蛇身人首にして、聖德あり。書契を作りて、結繩の法に代へ、又、八卦を畫せりと傳へらる。太昊(タイカウ)伏羲氏。庖犧。

ふく-ぎ 福木【名】印度及び我沖繩諸島に產する一種の常綠樹の樹皮を煎じ出して得る、黃色の染料。

ふく-ぎ 副擬【名】正員の外、これに擬して、副員となしたるもの。類聚三代格「正員之外、更置二副擬一、無二益二公務一」

ふく-ぎ 服忌【名】**きぶく**(忌服)に同じ。

ふく-ぎ 服紀【名】服(フク)の期間。喪にこもる間。

ふく-きう 復仇【名】[一]かたきうち。しかへし。反報。復讐。報仇。報復。[二]〔法〕『英 Reprisal』反報手段の一。一國が他國又はその臣民より不法行爲を受けたる時、被害國も、また加害國又はその臣民に、同一程度の不法行爲を加ふること。平時復仇と戰時復仇とに分つ。報仇。

ふく-きう 復舊【名】もとにたちかへること。もとの如くにすること。

ふくきう-げんしやう 復舊現象【名】〔哲〕『英 Restitution』生物體の、障害を受ける時、舊に復する、すべての現象。

ふくき-ぐさ ふくき草【名】〔植〕『ふきぐさ(蕗草)の訛なるべし』**あやめ**(菖蒲)[二]に同じ。

ふく-きけい 複畸形【名】〔醫〕『獨 Doppelmissbildung』畸形の一。その二箇以上の胚種に來りて生じたるもの。

ふくきし 伏義氏・必羲氏【名】〔人〕**ふくき**(伏羲)の敬稱。

ふくきしき 複記式【名】**ふくしき**(複式)[二]に同じ。(單記式に對して)

ふくきしき-ぼき 複記式簿記【名】**ふくしきぼき**(複式簿記)に同じ。(單式簿記に對して)

ふく-きちやう 副議長【名】議長の輔佐をなし、議長事故ある時、代理をなす人。

ふくきは 福果【名】〔佛〕善業(ゼンゴウ)により獲たる福德の果報。(貧果に對して)

ふくきはふ 複記法【名】**ふくしき**(複式)に同じ。(單記法に對して)

ふく-きふ 複級【名】**たきふ**(多級)に同じ。

ふく-きふ-ちやう 副級長【名】級長の輔佐をなし、級長事故ある時、代理をなす人。

ふく-きん 腹筋【名】〔醫〕『獨 Bauchmuskeln』腹壁を構成する筋(スヂ)。

ふく-ぎよ 服御【名】天子の召す衣服・車馬など。「に同じ。

ふく-ぎよ 鰒魚【名】〔動〕**さこぶし**(常節)

ふく-ぎよく 鰒玉【名】**あはびだま**(鮑珠)に同じ。

ふくぎよく-しふ 鰒玉集【名】〔書〕編者と同時代の名歌を、題によりて、類集したるもの。八編十六册。加納諸平の編。

ふく-きよすう 複虛數【名】〔數〕『英 Complex quantity』α 及びりが實數なる時、$a+b\sqrt{-1}$ なる數。通常、$\sqrt{-1}$ を i にて表はすにより、複虛數は $a+bi$ の形となる。複素數。

ふくきれい 服忌令【名】忌服のことに關する規則。

ふく-く 腹句【名】〔文〕短歌の第四句。(發句・胸句・腰句・尾句に對して)萬葉集古義「腹句とは、今は第四の句を指せり。第一句を頭とし、第二を胸とし、第三四を腹とし、第五句を尾とする意なるべし」

ふく-くっせつ 複屈折【名】〔理〕『英 Double refraction』一條の光線が或鑛物に入る時、二條に分れて屈折すること、即ち一つの物が、或鑛物を透して見れば、二重に見ゆる現象。二條に分れたる光線のうち、一は通常の光線と同樣に、反射屈折の法則に從へども、他は然らず。この現象を示すには、最も普通に方解石を用ふれども、非結晶體及び等軸晶系に屬するものの外の鑛物は、皆、この屈折をなす。二重屈折。

ふく-くみちやう 副組長【名】組長の輔佐をなし、組長故障ある時、代理をなす者。

ふく-くわ 福果【名】〔佛〕善業(ゼンゴウ)により獲たる福德の果報。(貧果に對して)

ふく-くわ 複果【名】〔植〕『英 Collective-fruits 又 Multiple fruits』數花の密に集合して成れる果實。桑・無花果(イチジク)・パイナップル等の果實、これなり。集合果。(單果に對して)

ふく-くわ 複化【名】〔哲〕『英 Complication』多くの表象・寫象に結合して、一つの統一的全體を形成すること。複雜化。

ふく-ぐわ 伏臥【名】一うつぶすと、横になること。二臥すこと。偃臥。

ふく-くわいちやう 副會長【名】會長を輔佐し、會長故障ある時、代理をなす者。

ふく-くわう 複光【名】〔理〕『英 Compound light』種種の色の光の混合して成れる光、即ちスペクトルに分解し得る光。例へば、太陽の光線などの類。(單光に對して)

ふくくわかふ-ぶつ 複化合物【名】〔化〕『英Double compounds』二種以上の化合物の更に化合して生じたる物。例へば、複鹽・錯鹽などの類。

ふく-くわく 複郭【名】〔兵〕敵の攻撃その功を奏したる場合の要塞防禦最後の據所。要塞の内部に設け、敗兵を收容し、援護火を施して、敵の接近を妨げ、我より攻勢に轉じて、敵を驅逐するに資するもの。近世の築城には、必要とせず。

ふく-くわざん 複火山【名】〔地〕『英Composite volcanoes』火口内に火口丘を有し、又は山腹に寄生火山を有する火山。噴出作用の重なりたるによりて、複雜なる形を成すに至れるもの。火口丘の數によりて、二重火山・三重火山・四重火山及び五重火山の別あり。富士・阿蘇淺間・箱根などの諸火山、これに屬す。複成火山。複式火山。(單火山に對して)

(んざわくくふ)

ふく-くわじつけん 複化實驗【名】〔哲〕『英 Complication experiment』二種以上總合せる異種感覺の刺戟に對する同時的認識の實驗。

ふくぐわ-じやう 覆瓦狀【名】〔生〕鱗片などが、その緣邊にて、交互に相重なり連なれる形狀。

ふくくわ-せい 複貨制【名】〔經〕ふくほんわせい(複本位制)に同じ。(單貨制に對して)

ふく-くわつ 復活【名】一よみがへること。更生。蘇生。二〔基〕『英 Resurrection』基督の、十字架上に死し、埋葬せられてより三日の後、蘇りて、信徒の前に現れきといふ傳説。かくて四十日の後、昇天せりといふ。三一旦否決せられた事件の、その否決を取り消さるること。

ふくくわつ-さい 復活祭【名】〔基〕『英 Easter. 春分の節に Easter といふ神を祭りし名の轉用せしもの』基督の復活を祝ふ祭。東方教會にては、猶太(ユダヤ)の踰越(ユエツ)節と同一の日に行ひ、西方教會にては、基督の日曜日に復活せる事を重しとし、踰越の時節に當る日曜日、即ち春分後に來る滿月の次の日曜日に行ひしが、後、後者に一致するに至れり。

ふくくわつ-び 復活日【名】『英 Easter-day』基督が復活して、その信徒の前に現れたりといふ日。この日、復活祭を行ふ。

ふくくわはふ 複貨法【名】〔經〕ふくくわせい(複貨制)に同じ。(單貨法に對して)

ふくくわん 副官【名】陸軍にて、各團隊長に直屬し、その命を承けて、その團隊に關する諸般の事務の處理、諸報告の受領、諸達(シヨシ)・命令の傳達、及び庶務・文書の事を掌る職。師團副官・聯隊副官・元帥副官など、その所屬隊又は所屬上官の稱號を冠して呼ぶ。

ふく-ぐわん 服翫【名】衣服と翫物と。

ふく-ぐわん 伏願【名】伏して願ふこと。ひたすらに望み願ふこと。

ふくくわん-ぶ 副官部【名】副官がその事務を執る部局。

ふく-げ ふく毛・襯褙【名】ふくだみたる柔き毛。ふくだげ。むくげ。〔古語〕和名「襯褙、布久介」

ぶく-げ 服解【名】昔、朝廷の官吏が、重喪に逢ひて、解官せられしこと。ふくにん(復任)二參照。

ふく-けい 復啓【名】書狀の返事の文句の發端に書く語。拜復。

ふく-けい 服刑・伏刑【名】刑罰に服すること。刑に就くこと。

ふく-けい 福慶【名】けいふく(慶福)に同じ。

ふく-けい 副啓【名】つうけい(通啓)に同じ。

ふく-げふ 副業【名】主とする業務の外に營む業務。隨する業務。

ふく-げふ 復業【名】罷業したる者が、元のごとくに業務に就くこと。

ふく-げふ 服業【名】業務に服すること。業に從事すること。

ふく-けん 復權【名】一一旦喪失せし權利を回復すること。二〔法〕『英 Rehabilitation』刑事上、刑の言渡によりて、一旦喪失し、又は停止せられし資格、又、民事上、破產の宣告によりて、一旦停止せられし能力を回復すること。前者は、天皇の大權により、將來に向ひて回復せしめ、後者は、債務を辨濟せしこと、又は所在不明の債權者に對する、全額辨償の準備と資力とあることを證明し、破產裁判所の決定によりて回復せしむ。

ふく-げん 副弦【名】掛けかへの弓弦。そへづる。うさゆづる。大寶令「凡兵士每人弓一張、弓弦袋一口、副弦二條」

ふく-げん 復現【名】〔哲〕さいげん(再現)に同じ。

ふく-げんき 副原器【名】げんき(原器)を見よ。

ふく-げんけう 服元喬【名】〔人〕はつさりなんくわく(服部南郭)を見よ。

ふく-げんさくわん 副檢査官【名】會計檢査院の職員の一。各課に分屬して、課長を助け、又は院長官房もしくは各部に分屬して、審議・立案を掌る奏任官。

ふくけん-じやう 復權狀【名】復權の裁可ありたる時、司法大臣が刑の言渡をなしたる裁判所の檢事に送付して、本人に下付せしむる書狀。〔二〕に同じ。

ふく-げんすゐ 副元帥【名】しつけん(執權)

ふく-けんびきやう 複顯微鏡【名】〔理〕『英 Compound microscope』對物レンズと對眼レンズとより成る顯微鏡。通常の顯微鏡は、皆、これに屬す。複式顯微鏡。(單顯微鏡に對して)

ふくげん-ろん 複元論【名】〔哲〕たげんろん(多元論)一に同じ。

ふく-こ 復古・復故【名】昔の有樣にかへすこと、又それにかへること。「同じ。

ふく-こ 復戶【名】〔法〕ふくせき(復籍)に復戶拒絕【句】〔法〕「復籍拒絕」に同じ。

ふく-ご 複語【名】一語(語)二語以上の語の複合して、一語となれるもの。二同じ漢字二つの重なり合ひて成れる熟語。例へば、歷歷・彬彬などの類。「じ。

ふく-とう 腹候【名】ふくしん(腹診)に同じ。

ふく-とう 復興【名】一旦衰へたる物事の、元のごとくに盛りになること。興復。

ふく-とう 複講【名】〔佛〕『法華玄義の卷六に「十六王子覆講法華」とあり』師の講説を、弟子の反覆して講ずること。

ふくとう-きよく 復興局【名】大正十二年の關東大震災後、都市復興のために設けし役所。内務大臣の管理の下に整地・土木・建築・經理の四部を置き、東京及び横濱の都市計畫事業の執行・市街地建築物法の施行・都市計畫上、建築改善に關する事務を掌る所。

ふくとう-さいけん 復興債券【名】大正十二年の關東大震災後、復興の資源に充つるために發行せし債券。

ふく-とうがく 復古學【名】荻生徂徠の唱道したる學説。古文辭を修めて、古經の眞義を究めんとするもの。古文辭學。

ふく-とき-ふ 腹呼吸【名】〔醫〕ふくしきこきふ(腹式呼吸)に同じ。(胸呼吸に對して)

ふくとう-しんたう 復古神道【名】古代の神明及び列聖の御事蹟に基き、皇國固有の大道を宣布する教。荷田(カダ)・春滿(アズマ)・賀茂眞淵・本居(モトヲリ)宣長(ノリナガ)・平田篤胤等の唱導に係る。古學神道。

ふくこてきしんがく 復古的神學【名】[哲]或固定せる神學を、學術事情の變化せる時代にも、なほ保持せんとする神學。

ふくこーは 復古派【名】[經]歐洲にて、封建制度の下に發達せし經濟狀態を復興せんとする經濟學派。

ふくこん 複根【名】■[植]『英 Compound root』多數に分岐せる根(ネ)。(單根に對して) ■[化]『英 Compound radice』二又は二以上の原子より成れる根(ネ)。(單根・錯根に對して)

ふくこん 副根【名】[植]『英 Adventitious root』單子葉植物に於けるがごとく、胚の幼根の下端の直ちに根となることなく、そのやや上方より分裂して、數條の細根となるもの、及び、地上莖の諸部等より生ずる根、即ち氣生根などの總稱。(直根に對して)

ふくーさ 服紗【名]『漢字は、假借にして、語原上、ふくる(膨る)などと關係ある語なるべしといふ』■織物の、强張(コハ)らず柔かなるものなるべし。[古語]枕「狩衣は、香染(カウ)のうすき、白き、ふくさの赤色・松の葉色したる」■ちやふくさ(茶服紗)の略。[服茶] ■繻子・天鵞絨(ビロード)・縮緬の類にて、茶服紗より大形の方形に作り、紋樣を繍ひ、又は染め附けなどして、無地の裏を附け、贈物を差し出す時、これを覆ひ、又はその上に掛けて用ふるもの。 ■ふくさそで(服紗小袖)の略。 ■ふくさがみ(服紗紙)の略。

ふくーさ 福さ【名]裕福なる狀態。白石噺「簞笥長持・鏡臺の埃取まで綾錦、福さなりける有樣なり」

ふくーさ 服紗・袱紗【接頭】■紙・裝束などの柔かなる意。「服紗紙」『服紗狩衣』 ■本式にあらざる意。「服紗料理」

ふくさーあはせ 服紗袷・袱紗袷【名]袷の服紗小袖。服紗小袖の袷。

ふくーざい 服罪・伏罪【名]罪に服すること。

ふくーざい 伏在【名]ひそみかくれてあること。

ふくさいーじ 福濟寺【名]肥前國長崎市下筑後町にある黃檗宗の寺。本尊は釋迦牟尼佛。分紫山と號す。寛永五年、明僧覺悔の開基。俗に漳州(シヤウ)寺と稱す。境内の堂宇中、特別保護建造物に指定せられたるもの多し。

ふくさいはうどうぶつ 複細胞動物【名][動]『英 Multicellular animals』多數の細胞の組織的に集合して成る動物。高等動物は、すべてこれなり。多細胞動物。(單細胞動物に對して)

ふくさいはひ 福幸【名]ふくかう(福幸)に同じ。[古事記]神や佛に詣りては、命を永く、福さいはひをこそ祈るに」

ふくーさう 福相【名]福運多きやうに見ゆる人相。(貧相に對して)一茶「てもさてもても、福相の牡丹かな」

ふくーさう 服裝【名]みなり。よそほひ。

ふくーざう 伏藏【名]かくれひそむこと。

ふくざうーきゆう 福藏弓【名]八張弓(ハツチヤウ)の一。鈬(ヲ)を打ち附けたるもの。なとところどう。

ふくーさうしやう 複雙晶【名][鑛]『英 Compound twin』同一の結晶が、二つ以上の相異なる規則にて、同時に雙晶をなせるもの。長石に、この例を見る。

ふくさうーてあて 服裝手當【名][兵]士官・準士官及び候補生の初任の時、服裝の料として給與する手當。

ふくざうーなし 腹藏無し【形ク]包み隱す所なし。かくしだてなし。

ふくさうーひん 副葬品【名][美]古、遺骸を埋葬する時、添へて、共に埋め、後世古墳より出づることある、種種の物品。

ふくーざうり 福草履【名]藁にて作り、藁の注連(シメ)の如く太く綯ひ、紙にて卷きたる緒をすげたる草履。今は芝居茶屋の客の出入その他儀式の時に用ふれども、明治維新前は、武士の正式に穿ちたり。

ふくさーおび 服紗帶・袱紗帶【名]『ふくさ(服紗)は接頭語』裏・表共に羽二重・綸子・縮緬などのごとき、柔き絹布にて仕立てたる女帶を、貴婦人の禮裝に用ひたる錦・厚板織などの帶と區別していへるなるべしといふ。俗曲(淺草名所)「既にわたしが身の上をいはば語らん、きぬぎぬの身を知る雨のふくさ帶」

ふくさーかみ 服紗紙・袱紗紙【名]『ふくさ(服紗)は接頭語』礬水(ドウ)を施さず、直ちに晝を書くに用ふる紙。

ふくさーこそで 服紗小袖・袱紗小袖【名]『ふくさ(服紗)は接頭語』羽二重・綸子などのごとき柔き絹布にて仕立て、五紋(モンツキ)を附けたる小袖。

ふくさーごぼう 服紗牛蒡・袱紗牛蒡【名]米粉にて、牛蒡を包みたる食品。

ふくさーさばき 服紗捌・袱紗捌【名]茶の湯の時の服紗の取扱方。

ふくさーすひもの 服紗吸物・袱紗吸物【名]通常の吸物を、鯉の吸物と區別していふ語。

ふくーさつ 複雜【名]こみいりたること。

ふくざつーかふりよく 複雜合力【名][經]

ふくざつけふりよく(複雜協力)に同じ。

ふくざつーきふふ 複雜給付【名][法]給付の一種。內容の複雜なるもの。(單一給付に對して)

ふくざつーくわ 複雜化【名][哲]ふくくわ(複化)に同じ。

ふくざつーけふりよく 複雜協力【名][經]協力■の一。二人以上の者が、同一の仕事を成し遂ぐるために、同時と異時とに關らず、各自異なる部分を分擔すること。複雜合力。

ふくざつーげんかく 複雜幻覺【名][哲]『英 Complex hallucination』雜多の幻覺の、同時に錯綜して起るもの。

ふくざつーこく 複雜國【名][法]『英 Composite state』二つ以上の國家の、共同の君主又は政府の下に結合して、一體となれるもの。君合國・政合國・國家聯合・合衆國の四種に分つ。複合國。合成國家。連合國家。(單一國に對して)

ふくざつーこくか 複雜國家【名][法]前條に同じ。(單一國家に對して)

ふくざつーさいていかはせ 複雜裁定爲替【名][經]ちようふくさいていかはせ(重複裁定爲替)に同じ。

ふくざつーさくかく 複雜錯覺【名][哲]『英 Complex illusion』種種の錯覺の同時に錯雜して起るもの。

ふくさーづつみ 服紗包・袱紗包【名]物を服紗に包むこと、又、服紗に包みたる物。

ふくざつーぼんゐーせい 複雜本位制【名][經]『英 Complex standard』數種の貨幣を、本位貨幣と定むる制度。ふくほんゐせい(複本位制)參照。

ふくさーどり 服紗どり・袱紗どり【名]『ふくさ(服紗)は接頭語』火鉢・香爐などに、炭火を埋めて、灰を柔かに被ふこと。

ふくざはゆきち 福澤諭吉【名][人]教育家。雪池、又三十一谷人と號す。舊中津藩士百助の末子。大阪の藩邸に生れ、蘭學を長崎に學び、又、大阪に出でて、緒方洪庵に就き、又、英學に轉じ、幕府の使節に從ひて、歐米を漫遊すること再三、西洋事情を著す。慶應三年慶應義塾を起して、力を教育に傾注し、又、時事時報を創刊す。明治三十四年歿す。年六十八。

ふくさーばり 服紗張・袱紗張【名]柔かなること。(儀制令「ふくさ張は、柔かなるをいふ」

ふくさーみそ 服紗味噌・袱紗味噌【名]味噌の搗らぬものなるべしといふ。

ふくーさん 副參【名][佛]禪宗の寺院にて、參頭(サン)に從屬して、その事務を輔くる役。

ふぐーさん 河豚酸【名]藥學博士田原良純の、河豚の毒素を研究し發出して命ぜし名稱。但し、その後の研究により、酸とは、呼びがたきことを發見し、テトロドトキシン(Tetrodotoxin)と改稱したり。

ふくーさんぎ 副贊議【名]朝鮮總督府中樞院の職員の一。その議に參與するのみにて、その決議に加はることを得ざる奏任官待遇。朝鮮總督府の奏請に本づき、內閣にて任命す。

ふくさん-くわじよ 複繖花序【名][植]ふくさんけいくわじよ(複繖形花序)の略。

ふく-さんけい 複繖形【名】〔植〕繖形の重複せる形。

ふくさんけい-くわじょ 複繖形花序【名】〔植〕『英 Compound umbel』繖形花序の一種。その花枝再び分岐して、各、更に繖形花序をなすもの。芹・人參【圖】などの花序、これなり。

ふく-さんじ 副參事【名】鐵道省・製鐵所・專賣局及び朝鮮總督府鐵道局に置かれ、參事と共に、上官の命を承けて、事務を掌る職員。奏任とす。

ふく-さんせいくわん 副參政官【名】各省【一】の職員の一。大正三年設置し、大臣の命を承け、帝國議會との交涉事項に參與せし勅任官。同七年、參政官と共に廢止せられたり。

ふく-さんぱう-くわじょ 複繖房花序【名】〔植〕『英 Composition corymb』繖房花序の一種。その花枝の、再び分岐して、各、更に繖房花序をなすもの。七竈(カマ)・裏白木(ウラジロノキ)などの花序、これなり。

ふく-さんぶつ 副産物【名】『英 By-product 又 Secondary product』主産物に副伴して産出する産物。例へば、石炭瓦斯製造の際に生ずるコオルタアル及びアンモニウム化合物などの類。

ふくさ-もの 服紗物・袱紗物【名】【一】⇒ふくろもの(袋物)【一】を見よ』服紗に包みたる物。服紗包(フクサヅツ)にしたる物。無八卦柱暦「母の涙の數珠袋、服紗物取り出だし」【二】ふくさ(服紗)【一】に同じ。 昔昔物語「鬱金(ウコン)の服紗物に、細き絲に附けて、額にかぶり、その服紗物を、月代(サカヤキ)に打掛くる」【三】服紗紙に描きたる畫。

ふく-さよう 副作用【名】〔醫〕藥物の主たる作用に附隨して起る、別箴の作用。

ふくさ-れうり 服紗料理・袱紗料理【名】昔、饗應にて、本膳を引きたる後、更に供せし略式の料理。

ふく-し 副使【名】【一】正使に附き添ひ、正使故障ある場合には、その代理をなす使者。そへづかひ。【二】遣唐使の四等官の一。大使の下、判官の上に位せり。 續日本紀「もろこし船いだし立てらる。……大使・副使と召すに」【三】造神宮使廳の職員の一。內務省社寺局長を以て補し、造神宮使を佐け、又はその職務を代理す。

ふく-し 副詞【名】〔語〕『英 Advrb. 田中義廉、その小學日本文典に、初めて、この名稱を用ひたり』動詞・形容詞又他の副詞及びそれらの性質を帶びたる語句に添ひて、その意義を確むる品詞。例へば、「大いに學ぶ」「甚だ善し」「最も巧に操る」の「大いに」「甚だ」「最も」「巧に」などの類。

ふく-し 福祉【名】ふくち(福祉)の誤讀。

ふく-し 匐枝【名】〔植〕『英 Stolon』地下莖より分れて生じたる枝が、一旦地中に入りて、根を生じ、葉を出だして、新株を形づくるもの。和蘭苺(オランゴイチゴ)の枝の如き、これなり。

ふく-し 葡萄【名】〔植〕あけび(通草)の漢名。

ふく-じ 腹筒【名】『腹中にある書筒の義。楊億の詩に「談ノ經腹筒虛」とあり』學問の素養。

ふく-し 複視【名】〔醫〕『獨 Doppelsehen』眼病の一。兩眼の眼底に映ずる位置に變化起りて、物體の二重に見ゆるもの。

ふく-し 複師【名】〔佛〕華嚴(ケゴン)宗にて、講師の講述せし所を、更に講じて、義理を明かにする僧職。寢講。

ふく-し 服仕【名】服從して仕ふること。平家「被レ服二仕土民百姓等一」

ふく-じ 副貳【名】副ひ輔くること。

ふく-じ 副寺【名】ふうす(副寺)を見よ。

ふく-じ 服事【名】『左傳の昭公十二年の條に「今周與二四國一服二事君王一」とあり』服從して事(ツカ)ふること。

ふぐ-し 【名】『掘串(クシ)の義といふ』古、竹・木・金屬などにて造り、土を掘るに用ひし具。後世の箆(ヘラ)の如きものなるべしといふ。ほぐせ。〔古語〕 萬葉「こもよみこ持ちふぐしもよみふぐし持ち」

ぶ-ぐし 夫公事【名】昔、夫役(ブエキ)に代へて、米穀・金錢を以て納めし稅。卽ち夫錢・夫米・夫金などの類。

ふくしあ 【名】〔植〕ふくいやに同じ。

ふくしう 復讐・復讎【名】【一】⇒ふくきう(復仇)【一】に同じ。【二】しかへし。へんばう。あだがへし。報讎。

ふくしう 福州【名】〔地〕支那福建省の首都。我臺灣の對岸、閩江の左岸にありて、互市場たり。

ふくしう-すぎ 福州杉【名】〔植〕『支那福建省福州に多く產するよりいふ』くわうえふさん(廣葉杉)に同じ。

ふくしう-ぶね 福州船【名】ほくしうぶね(福州船)に同じ。

ふく-しき 複式【名】【一】二重の方式。【二】『英 Double entry』簿記にて、取引の生ずる時に、必ずその金額を、同一帳簿の勘定科目の下にある借方・貸方に記し分くるもの。複雜なれども、計算正確なるが故に、いかに大規模の會計にても、完全に整理するを得。複記式。(單式に對して)【三】『英 Compound expression』二項以上より成立せる式。

ふくしき-かうくわんき 複式交換機【名】『英 Multiple switch board』電話各交換機に、一箇づつの複式ジャックを具へ、交換の際、中繼を要せず、全加入者と直接に接續し得る交換機。

ふくしき-きき 複式汽機【名】次條に同じ。

ふくしき-きくわん 複式機關【名】『英 Compound steam engine』二箇以上の汽筒を有する蒸氣機關。筒內に於ける蒸氣の膨脹を容易ならしめ、機關の能率を高むる効ありて、普通一般に用ふ。

ふくしき-くわざん 複式火山【名】〔地〕ふくわざん(複火山)に同じ。

ふくしき-けんびきやう 複式顯微鏡【名】〔理〕ふくけんびきやう(複顯微鏡)に同じ。(單式顯微鏡に對して)

ふくしき-こきふ 腹式呼吸【名】〔醫〕橫隔膜を十分に働かせ、氣息を吸ひて、腹部の出張るやうにして行ふ呼吸法。男子の呼吸はこれなり。腹呼吸。橫隔膜呼吸。(胸式呼吸に對して)

ふくしき-ぼき 複式簿記【名】〔商〕『英 Double entry book keeping』複式【一】により記入する簿記。(單式簿記に對して)

ふく-しきゅう 複子宮【名】〔醫〕『羅 Uterus biforis』子宮の、その發育が初期に於て止まり、二部に分れて、畸形を呈するもの。兩部の大さは、相同じきものと、大小の差あるものとあり。

ふくしく 副詞句【名】〔語〕『英 Advorbial phrase』他の語句に對して、副詞と同じ位置に立つ句。例へば、「これがために勝てり」「去年の今夜清涼に侍りき」の「これがために」「去年の今夜」などの類。

ふくしずね 複雌蕊【名】〔植〕『英 Compound pistil』雌蕊の、一つの花に、二箇以上存するもの。例へば、櫻・蠶豆(ソラマメ)の雌蕊のごとき、これなり。(單雌蕊に對して)

ふくしぜいくわん 副司稅官【名】稅務署の職員の一たる奏任官。

ふくしせつ 副詞節【名】〔語〕『英 Advorbial clause』附屬節の一。他の語句に對して、副詞と同じ位置に立つ節。例へば、「雨降って地固まる」「天氣よくば行かん」の「雨降って」「天氣よくば」などの類。

ふくしつ 腹疾【名】腹部のやまひ。

ふくじつ 伏日【名】三伏の日。

ふくしばう 複子房【名】〔植〕『英 Compound ovary』二箇以上の葉の變形して成れる雌蕊の子房。(單子房に對して)

ふくしふ 復習【名】くりかへしてならふこと。溫習。

ふくしま 福島・福嶋【名】〔地〕【一】四十三縣の一。明治二年、岩代國に、若松・福島・白河の三縣を置き、四年、同國の二本松藩及び磐城國の湯長谷(ユガイ)・泉・三春・棚倉・中村の六藩を、縣とし、同年、福島・二本松・白河の三縣を併せて、二本松縣とし、幾もなく、福島縣と改稱し、磐城國の湯長谷以下の六縣を併せて、平(タヒラ)縣を置き、尋いで、磐前(イハサキ)縣と改めしが、九年、磐前若松の二縣は、福島縣に合し、十九年、もと若松縣に屬したりし越後國東蒲原(ヒガシカンバラ)郡を新潟縣に移して、今日に至れり。岩代國全部と磐城(イハキ)國の東白川・西白川・石川・田村・雙葉(フタバ)・石城(イハキ)・相馬(ソウマ)

の七郡とを管轄し、縣廳を岩代國福島市に置く。㊁渡島國の舊郡の一。明治十四年、津輕郡と合して、松前郡となる。㊂岩代國にある市。陸羽街道に當り、又鐵道東北本線の一驛。東方は阿武隈(アブクマ)川繞り、三方は田圃相連なる。板倉氏の舊藩地。市制施行以前は、信夫(シノブ)郡に屬したり。㊃信濃國西筑摩(ニシチクマ)郡にある町。木曾川の東岸。木曾街道の一驛。舊關所跡にて、今、郡役所あり。㊄筑後國八女(ヤメ)郡にある町。熊本・福岡・久留米諸街道の交叉點。福岡市を距る十三里半弱。㊅攝津國西成(ニシナリ)郡にありし地。大阪市堂島の西。安治(アヂ)川の東、木津川の北。上福島・下福島の二村に分れしが、明治三十年大阪市北區に編入し、後、更に此花(コノハナ)區に入る。文治中、源義經、この地に船を修治せり。

ふくしま 福島・福嶋 【名】〔地〕肥前國伊萬里(イマリ)灣にある島。北松浦(キタマツウラ)郡に屬し、全島、福島村の一村を成す。周回十里半。

ふくしまがた 福島潟 【名】〔地〕越後國北蒲原(キタカンバラ)郡にある同國第一の大湖。周回約四里。その水、西北に決して、新郷(シンガウ)川となり、阿賀野川に入る。古の越海(コシノウミ)の遺跡といふ。

ふくしまぎぬ 福島絹 【名】岩代國福島邊より産出する絹織物。二代男「福島絹を空色にして」

ふくしまじけん 福島事件 【名】明治十四年、自由黨に屬する福島縣人河野廣中・愛澤寧堅・平嶋松尾・澤田清三・田母野秀顯及び東京の人花香恭次郎の六人が、政府顚覆の盟約書を作り、翌十五年、岩代・耶摩等六郡の人民を、彈正ヶ原に嘯集し、耶摩郡の喜多方(キタカタ)警察署を襲撃せし事件。政府、これを國事犯となし、その徒五十餘人を東京に護送し、十六年高等法院を開き、河野の輕禁獄七年、以下各處罰する所あり、宮城集治監に繫ぐ。我國國事犯の最初の事件なり。

ふくしまじょう 福島城 【名】㊀岩代國の東南、阿武隈(アブクマ)川の岸にありし城。永祿中、伊達氏(一說に杉月行信)の創築に係るといふ。天文中、伊達晴宗の隱領に歸し、豐臣氏の代、木村重次ここに居り、上杉景勝の臣藤田重信・本莊繁長及びその子孫三代、又、本多政長・堀田正仲・正虎を經、元祿十三年以後、板倉氏治城となりて、明治維新に及べり。㊁越後國中頸城(クビキ)郡春日新田(カスガシンデン)の北にありし城。慶長十一年、堀秀治の、春日山城を移して居りし所。秀俊後、罪を得て除封せられ、德川忠輝代りて封ぜられたれども、地の低濕を以て、高田に轉ぜしため、廢城となれり。㊂筑後國八女(ヤメ)郡福島町にありし城。天正十五年、筑紫廣門の豐臣秀吉の命によりて築造せしもの。關ヶ原の役、西軍に屬せしため、除封せられぬ。

ふくしまひら 福島平 【名】岩代國福島邊より産出する精好平(セイコウヒラ)。

ふくしままさのり 福島正則 【名】〔人〕武將。尾張國の人。小字は市松。羽柴秀吉に仕へ、賤嶽(シヅガタケ)七本槍の一人たり。征明の軍に功あり。關ヶ原の役には、家康に屬して、大勝を得しより、安藝・備後兩國を賜はりしが、豐臣氏舊功臣の一人たる故を以て、忌まれて、元和元年、事に因り、遂に國を除かれ、信濃國河中島に徙り、薙髮して馬齋と號し、寬永元年卒す。年六十四。

ふくしまやすまさ 福島安正 【名】〔人〕陸軍大將。信濃國松本の人。慶應三年講武所に西洋兵學を修め、開成所・大學南校に學ぶ。後、陸軍省に入り、力を地理學に致す。後、官命を以て、米・淸・朝鮮・印度に航し、二十年、陸軍歩兵少佐を以て獨逸公使附となり、二十五年、滿期歸朝の序を以て、單騎西比利亞・蒙古・滿洲を經、艱苦の間に形勢を察し、翌年六月入朝し、中佐に進む。日淸戰爭・北淸事件・日露戰爭等に從ひて、功二級動一等に陞敍せられ、男爵を授けられ、參謀次長・關東都督に歷任し、大正八年薨ず。年六十八。

ふくしまりらほ 福島柳圃 【名】〔人〕畫家。武藏國の人。名は寧。通稱重次郎。柴田是眞に學び、山水畫に長ず。又、詩を善くし、その居を默神草堂といふ。明治二十二年歿す。年七十。

ふくじむしょくわん 副事務官 【名】遞信局及び僞替貯金局の職員の一。上官の命を承けて、局務を掌るもの。奏任とす。

ふくしん (英 Fuchsine) 【名】〔化〕まぜたに同じ。

ふくしん 腹診 【名】しんぶく(診腹)に同じ。

ふくしん 腹心 【名】㊀『史記の商君傳に「秦之與レ魏、譬若二人之有二腹心疾一」とあり』腹と心(ココロ)と。㊁心のそこ。心底(シンテイ)。㊂『詩經の周南兎罝篇に「趙趙武夫、公侯腹心」とあり』その人と心を同じくして、賴(タノ)とすべき友。腹心の臣【句】主君と心を同じくして、賴(タノ)とすべき臣。腹心の友【句】心を同じくして、賴(タノ)とすべき友。

腹心を布く 【句】『左傳の宣公十二年の條に「非レ所二敢望一也、敢布二腹心一」とあり』心の奥底をうちあけて告ぐ。

腹心を披く 【句】『史記の淮陰侯傳に「願披二腹心一、輸二肝膽一、効二愚計一」とあり』心の奥底をあらはし示す。

ふくしん 覆審 【名】〔法〕㊀前審に依らず、再び同一事件を取り調ぶること。㊁上訴を審理すること。

ふくしん 復申 【名】ふくめい(復命)㊁に同じ。

ふくしん 福人 【名】福運の人。福者。醒睡笑「堀池といふ福人のもとに、質を置き」

ふくじん 福神 【名】福を授くる神。ふくのかみ。狂言「蛸子大黒神」「惠比壽・大黒歸らんとせしが、なほも、所の福人とならん」

ふくしん 副腎 【名】〔醫〕『獨 Nebenniere』腎臟の上部にありて、これを掩ふ小器官。一種の內分泌腺にして、左右各一箇あり。右は鈍角三角形、左は半月狀、外層の皮質と中心の髓質とより成り、血管收縮を催進するに有効なる成分を含む。

ふくしんえきす 副腎越幾斯 【名】〔醫〕『羅 Extractum suprarenalis』牛羊等の副腎より製したる越幾斯劑。バセドウ病・糖尿病等に効ありといふ。

ふくしんけい 副神經 【名】〔醫〕『羅 Nervus accessorius』腦神經十二對中の第十一對にして、運動神經の一たるもの。延髓と脊髓の上部とより起り、頭骨の底部を出でて、一部は迷走神經に加はり、他部は頸部を下りて、胸鎖乳頭筋及び僧帽筋に分布し、その運動を司る。

ふくしんし 複振子 【名】〔理〕『英 Compound pendulum』しんし(振子)を見よ。

ふくしんせん 福神錢 【名】七福神の像をあらはしたる繪錢。

ふくしんたい 副靱帶 【名】〔醫〕『羅 Ligamentum accessorium』關節嚢の外面又は內面に添在する結締織屈。關節を固定し、運動を誘導又は抑制する作用をなすもの。

ふくじんづけ 福神漬 【名】細く切りたる大根・茄子・刀豆(タチマメ)・紫蘇・筍・大根葉・唐辛(タウガラシ)などの野菜物を鹽漬とし、水氣を去りたる後、醬油と味醂とを等分に煮詰めたるものに漬けたる食品。

ふくしんはふおん 覆審法院 【名】㊀朝鮮總督府に屬する法院。地方法院の裁判に對する控訴及び抗告を審理する所。院長(勅任)一人、部長(勅任又は奏任)六人、判事(奏任)二十三人より成る。㊁臺灣總督府に屬し、各地方法院の裁判を覆審することを掌りし法院。大正九年廢止し、高等法院に覆審部を置きて、これに代ふ。

ふくしんはふおんちゃう 覆審法院長 【名】覆審法院に置き、總督の指揮・監督を承けて、その院の行政事務を掌理し、その管轄區域內の地方法院の行政事務を指揮監督する職。勅任判事を以て補す。

ふくしんもの 服物 【名】さかな(肴)㊀に同じ。〔古語〕和名抄「肴、野王案、凡非レ穀而食謂二之肴一」和名、佐加奈、一云、布久之毛乃」

ふくしや 福者 【名】ふくじん(福人)に同じ。福者、二代無し 【句】福者は、一代に

て終を告ぐるが、世の常態なり。〔諺語〕三代男「福者二代なし。財さかりて入る者は、又さかりて出づ」「草」に同じ。

ふくしや 【名】〔植〕つりうきさう(つりうきさう)に同じ。

ふくしや 副車 【名】『史記の留侯世家に「良撃二秦皇帝博浪沙中一、誤中二副車一」とあり、事物紀原に「禮記、有二武車一、鄭康成云、副車、又有二佐車一、然則副車亦周車也」と見ゆ』古、支那の天子、諸侯の、その乗車の破損したる時、乗るために、あらかじめ備へおきし車。かへぐるま。副乗。貳車(ニシャ)。

ふくしや 覆車 【名】車のくつがへること、又その車。

覆車の戒 【句】『「前車の覆るを見て、後車の戒とせよ」を見よ』前人の失敗の跡に鑑みて、後人の戒とすること。

ふくしや 複寫 【名】一 一度寫したる書畫を、又他に寫しかふること。二『英 Copy』同一の書畫を、二つ以上寫し取ること。

「射すること。

ふくしや 伏射 【名】伏臥して、小銃を發

ふくしや 輻射 【名】一『車の輻(ヤ)の如くに射出する義』一點より、その周邊に向ひて、直線に射出すること。放射。二〔理〕『英 Radiation』發光體或は發熱體が、振動のエネルギイを四方のエエテルに傳へ、而して、エエテル以外には、中間の物質によりて傳導せらるることなくして、よく熱或は光を傳達する現象。放射。輻射のエネルギイ 【句】〔理〕『英 Energy of radiation』光線・熱線・化學線・エックス線等に於けるごとく、輻射によりて傳播するエネルギイ。

ふくしや 蝮蛇 【名】まむし。へびと。井筒業平河内通「蝮蛇、蓁蓁として、人を呑む」

ふくじや 福者 【名】ふくしや(福者)に同じ。古我「福者といひながら、三寶を崇め」

ふぐしや 不具者 【名】身體の不具なる人。かたはもの。

「服のある人。

ぶくしや 服者 【名】服(フク)にある人。忌

ふくしや-いんき 複寫インキ 【名】『英 Copying Ink』複寫版に用ふるために、濃厚に作り、砂糖又はグリセリン等の防乾劑を混和せるインキ。通常、紫色なり。

ふくしやう 副章 【名】勳章の正章に添へて賜はる、別の勳章。

「大將。

ふくしやう 副將 【名】主將を輔佐する

ふくしやう 福祥 【名】めでたきこと。さいはひ。吉祥。祥福。

「誤讀。

ふくしやう 覆醬 【名】ふしやう(覆醬)のふくしやう 輻狀 【名】『英 Radiate』一點より、その周邊に向ひて、直線に射出せる形狀。放射狀。

ふくしやうぐん 副將軍 【名】古、大將軍又は將軍に副ひて、軍隊の統御に任ぜず、臨時の官。

ふくしやう-くわ 福生果 【名】『餅は萬福の生ずる基なりとの思想より出づ。かをもち(缺餅)[一]參照』もち(餅)の異稱。〔昔の禁中の語〕

ふくじやう-くわくわん 覆狀花冠 【名】〔植〕『英 Rotate corolla』輻狀を成せる花冠。

ふくじやう-くわん 輻狀管 【名】〔動〕ほうしやうくわん(放射水管)に同じ。

ふくじやう-さうしやう 輻狀相稱 【名】〔生〕ふくしやさうしやう(輻射相稱)に同じ。

ふくじやうさうしやう-くわ 輻狀相稱花 【名】〔植〕ふくしやさうしやうくわ(輻射相稱花)に同じ。

ふくしやう-し 福祥寺 【名】すまでら(須磨寺)の第四禪天に屬する九天の中の第二。

ふくしやう-てん 福生天 【名】〔佛〕色界(シキカイ)

しぜんてん(四禪天) 參照。

ふくじやう-どうけい 輻狀同形 【名】〔生〕ふくしやさうしやう(輻射相稱)に同じ。

ふくしやうりやう 福精靈 【名】福德ある精靈。幸福なる精靈。俳諧古選附錄(我笑)「福精靈子の家多し身は一つ」

ふくしやう-えねるぎい 輻射エネルギイ 【名】〔理〕「輻射のエネルギイ」に同じ。

ふくしや-りべつ 複舍利別 【名】〔化〕單舍利別に、果實の汁、香味・藥味などを混じたるもの。例へば、花蜜舍利別・バニラ舍利別などの類。

ふくじゆ 福壽 【名】幸福と壽命と。謠曲(江島)「これ、辯財天影向(ヤウ)の地にて、福壽圓滿の靈地なれば」

福壽海無量(カイムリヤウ) 【句】〔佛〕「福聚(クワジユ)海無量」の誤。謠曲(龍祇王)「南無や大慈大悲の觀世音、福壽海無量の誓のままに」

「あつまること。

ふくじゆ 福聚 【名】〔佛〕多くの幸福の福聚海無量(カイムリヤウ) 【句】〔佛〕『法華經の普門品に「具二一切功德、慈眼視二衆生、福聚海無量、是故應二頂禮一」とあり。福德の聚まること、海のごとく廣大なる意』觀世音菩薩の福德の無量なるを讃嘆していへる語。醒睡笑「慈眼(ジゲン)示衆生(ジシユジヤウ)、福聚海無量をば、二句の偈(ゲ)といふなり」

福聚の海 【句】〔佛〕前條に同じ。醒睡笑「觀音の福聚の海は皆にする誤もかけかしあらにくの傷や」

ふくじゆ 服從 【名】命令のままに服ししたがふこと。

ふくじゆう-くわんけい 服從關係 【名】〔法〕權利者の意思に服從する關係。(命令關係に對して)

「人。服從したる人。

ふくじゆう-しや 服從者 【名】服從する

ふくじゆうせん 複縱線 【名】〔音〕『英 Double bar』じゆうせん(縱線)[三]を見よ。

ふくじゆ-さう 福壽草・側金盞花・獻歲菊 【名】〔植〕毛莨(ケンゴ)科に屬する多年生の草。高さ二三寸、葉は二回羽狀複葉にして、やや人參のに似、冬の末より、春の初にかけて、葉に先だちて、黃色・重瓣の花を著け、夜つぼみ、朝開く。培養によりては、紅・白・青・茶褐等の花をも咲かしむるを得。盆栽として、歲首の床飾に用ふ。ぐわんじつさう。しかぎく。ちやうしゆんぎく。ついたちさう。

ふくじゆ-じ 福聚寺 【名】豐前國企救(キク)郡足立(アダチ)村にある黃檗宗の寺。廣壽山と號す。本尊は釋迦牟尼佛。脇侍は迦葉

(フクセ)・阿難陀の二尊。卽非如一を開山とす。寛文五年、城主小笠原忠眞の發願にて創建し、慶應二年兵火に罹りてより、今は僅かに一二の堂宇を存するのみ。

ふくしよ 副書【名】原書のうつし。そひしよ。副本。

ふくしよ 副署【名】〔法〕天皇の御名の下に發する公文書に、輔弼の任に當る國務大臣が、御名に副へて、署名すること。

ふくしよ 復初【名】〔哲〕『莊子の繕性篇に「民始惑亂、無レ以反二其性情一而復中其初上、論語集註にも「朱子曰、……後覺者必倣二先覺之所一レ爲、乃可レ以明レ善而復二其初一也」とあり』**ふくせい**(復性)に同じ。

ふくじよ 伏勝【名】〔人〕支那秦の代の博士。名を呼ばずして、伏生ともいふ。

ふくじよ 復誦【名】■反復誦讀すること。繰返してとなふること。■〔兵〕傳令使が、口頭にて、命令及び報告を傳ふる時、その確實を保つため、出發前に、その事項を繰り返して唱ふること。又、長官より、直接に口達命令を受けたる者も、通常、これを行ふ。

ふくじよう 複稱【名】■複雜なる名稱。■二箇以上の事物を指していふこと。(單稱に對して)

ふくじよう 副乘【名】■**ふくしや**(副車)に同じ。■**ふくば**(副馬)に同じ。

ふくしよく 服色【名】衣服の色。

ふくしよく 服飾【名】衣服と、その裝飾と。きかざること。みなり。

ふくしよく 副職【名】本職の外に帶びたる職。「物」に同じ。

ふくしよく 副食【名】**ふくしよぶつ**(副食物)に同じ。

ふくしよく 復職【名】■再びもとの職に就くこと。■休職官吏の、再びもとの職に就くこと。

ふくしよく 復飾【名】俗の、髮を蓄へ、俗人にかへること。還俗(クワンゾク)。(落飾に對して)

ふくしよく-くわんけん 服飾管見【名】〔書〕服飾の事を、古今和漢の書に考證して記せるもの。寫本にて十四卷。田安宗武の撰。

ふくしよく-づかい 服色圖解【名】〔書〕衣冠以下一切の服職を圖解せるもの。二卷。本圖百里の著。挿圖は、横川重孝の筆に成る。故實叢書に收む。

ふくしよく-ぶつ 副食物【名】主たる食物に添へて食ふもの。飯の菜(サイ)の如き、これなり。

ふくじらが 福白髮【名】『若くて、白髮の生ゆるは、福運の前兆なりとの俗説によりていふ』**わかじらが**(若白髮)の美稱。

ふぐじる 河豚汁・鰒汁【名】河豚の肉を實(ジツ)としたる汁。ふぐとじる。ふぐとうじる。一代男「臺所は白雁の胴がら、鰒汁の跡」

河豚汁を食はぬたはけに、食ふたはけ【句】「河豚食ふ無分別に、河豚食はぬ無分別」に同じ。〔諺語〕

ふくす 復す【動佐變自】かへる。もどる。

ふくす 復す【動佐變他】■かへす。もどす。■くりかへす。さらふ。反復す。十訓「聖(ヒジリ)一人、止觀を取り出でて復しけり」■こたふ。復申す。■『漢書の高帝紀に「復二其身及戸一」とあり』夫役を除く。徭役を免除す。

ふくす 服す【動佐變自】■心より附き從ふ。心服す。服從す。■就く。從事す。

ふくす 服す【動佐變他】■附き從はしむ。■著る。身に附く。ぐくす。佩ぶ。■のむ。藥をのむ。ぶくす。くらふ。喫す。曾我「餌食を求め、服せんとすれば」■かくす。あらはにせず。(源平盛衰記)「おれも、氣をしづめて、腹の内に服してゐる事がならねえ」

ふくす 伏す【動佐變自】■かがみふす。■かくる。ひそむ。潛伏す。■負けてしたがふ。正統記「この勞をつのりて、參議を申しけるに、院の仰に、物書きての上の事とありければ、理にふしてやみぬ」

ふくす 伏す【動佐變他】伏せるやうにす。伏せしむ。「にこもる。

ぶくす 服す【動佐變自】服(フク)を著る。喪

ぶくす 服す【動佐變他】**ふく**(服す)■に同じ。〔古語〕源氏「風病(フウビ)重きにたへかねて、極熱(ゴクネツ)の草藥(サウヤク)をぶくして」

ふくすう 複數【名】〔數〕■『英 Compound number』二つ以上の數。(單數に對して)■〔語〕『英 Plural number 又 Plural』名詞又は代名數の示す事物の、二箇以上ある場合。(單數に對して)

ふくすう-くわんけい 複數關係【名】〔法〕或物と他の物との間に存する關係が複雜なる場合。(單數關係に對して)

ふくすう-とうへう 複數投票【名】同じ選擧人に、投票權を二箇以上與ふること。

ふくすけ 福助【名】■身の丈低くして、頭壯だ大なる人、又その形したる人形。俗に福分あるものといふ。和合人「福助の聲でござります。……むう、なるほど、額が大そうに出て、おつりきな面(ツラ)だ」■あぶら(油)屋を云ふ。〔盜賊の隱語〕

ふくずみ-まさえ 福住正兄【名】〔人〕經濟家。二宮尊德の門人。相模國の人。通稱九藏。蚶園と號す。力を經理救濟に致し、又、國學に通じ、和歌を善くす。明治二十五年歿す。年六十九。箱根草・大道論・道德格言抄・富國捷徑・二宮翁夜話等の著あり。

ふくすね 腹水【名】〔醫〕『羅 Ascites』腹腔内に漿液性滲漏液の瀦溜する病。腹部膨大・緊滿し、靜脈怒張し、呼吸促迫するに至る。原因は肝臟及び肺臟の疾患・腹膜炎等のための門脈の鬱血を主とし、その他、一般の血行障害に基く鬱血に因ること多し。古來脹滿と呼びしものも、これに屬するものなるべし。

ふくすね 覆水【名】■ひっくりかへしたる水。■『次條■を見よ』夫婦の離別。覆水、盆に返らず【句】『聽冠子の註に「太公既封二齊侯一、道遇二前妻一、再拜求レ覆水一、公取二盆水一、覆二地令レ收レ之、惟得二其泥一。公曰、誰言離更合、覆水定難レ收」とあるに本づく』■こぼれたる水は、もとの盆にかへらず。〔諺語〕■一たび離緣して、夫の家を去りたる婦は、復歸すること能はざる譬。〔諺語〕

ふくすね 覆推【名】反覆推考すること。繰返して推しはかり考ふること。「將。

ふくすね 副帥【名】將帥に副たる將。副

ふくすね 福水【名】『留青日札に「酒曰二福水一、而陶翰林名曰二福泉一」、通俗編に「晉書地理志有二福祿縣一、屬二酒泉郡一。水經注所レ謂祿水由二是縣一出也。俗呼レ酒爲二福水一、當レ因二予此一」とあり』**さけ**(酒)の異稱。「見よ。

ふくすね 複水【名】「重山(ヂウサン)複水」を(凝縮器)に同じ。

ふくすね-き 復水器【名】**ぎようしゆくき**

ふくせ 【名】■**ふくし**に同じ。〔古語〕■**ふせぼた**(伏機)に同じ。

ふくせい 復姓【名】もとの姓に復すること。前の姓にかへること。

ふくせい 復性【名】〔哲〕『孟子集註に「程子曰、性卽理也、理則堯舜、至二於衆人一一也、才稟二於氣一、氣有二清濁一、稟二其清者一爲レ賢、稟二其濁者一爲レ愚、學而知レ之、則氣無二清濁一、皆可下至二於善一而復中性之本上、湯武身レ之、是也」とあり』宋儒の說に、學問の功によりて、己が心の私慾を排して、その本然の性に復(カヘ)ること。復初。**ふくめい**(復命)■參照。

ふくせい 複姓【名】■本の姓に重ねて、後に賜はりたる姓。■支那にて、二字の姓。例へば、司馬・諸葛・歐陽などの類。(單姓に對して)〔覆姓〕

ふくせい 複星【名】〔天〕『英 Multiple star』三つ以上の星の著しく接近せるもの。その數によりて、三重星・四重星などと呼ぶ。

ふくせい 複製【名】■或物と同一の物を、二つ以上製作すること。■〔法〕著作權所有者以外の者が、同一の著作物を製作すること。

ふくせい 複成【名】あるが上に、更にできること。かさねて作ること。

ふくせい 服制【名】■衣服の制度。「を見よ。■忌服の制度。

ふくぜい 伏生【名】〔人〕**ふくじよう**(伏勝)

ふくぜい 複稅【名】〔法〕**ふくかぜい**(複合稅)に同じ。(單稅に對して)

ふくせい-くわうぶつ 複成鑛物 【名】〔鑛〕各その特徴を異にする二種以上の鑛物の集合より成れる鑛物。例へば、御影石の石英と長石と雲母とより成れる類。(單純鑛物に對して)

ふくせい-くわざん 複成火山 【名】〔地〕ふくくわざん(複火山)に同じ。(單成火山に對して)

ふくぜい-せい 複稅制 【名】〔經〕次條に同じ。(單稅制に對して)

ふくぜい-せいど 複稅制度 【名】〔經〕國家の經費を支辨するため、數種の租稅を同時に徵收する租稅制度。複稅制。(單稅制度に對して)

ふくぜい-せいぶん 副成分 【名】主成分以外の成分。副合分。「毛」に同じ。

ふくぜい-まう 複製毛 【名】はんまう(反毛)に同じ。

ふくぜい-ろん 複稅論 【名】〔經〕『英 General tax theory』一國の租稅制度として、複稅制度を主張する學說。(單稅論に對して)

ふくせう 複哨 【名】〔兵〕小哨より交代派出する哨兵。歩哨に次いで、最前線に配置し、警戒を任務とす。小哨を離るること、百メエトルを超えざるを、通常とす。

ふくせき 復籍 【名】〔法〕元の戸籍にかへること。例へば、婚姻又は養子緣組により、他家に入籍せる者が、離婚・離緣又は其等の取消によりて、その實家に復歸する類。復戸。

復籍拒絶 【句】〔法〕家族の婚姻又は養子緣組によりて、他家に入りたる者が、實家の戸主の同意を得ずして、更に他家に入りたる時、又は家族が、戸主の同意を得ずして、婚姻又は養子緣組により、他家に入りたる時、戸主が、その復籍を拒むこと。

ふくせき 復席 【名】もとの席に戻ること。前に著きたる席に反ること。

ふくせん 副船 【名】そひぶね(添船)〔二〕に同じ。

ふくせん 伏線 【名】〔文〕〔一〕修辭上、後段に書くべき事を、唐突ならしめぬために、前以てほのめかしおくこと。〔二〕斯くあらんと、豫め用意しておくこと。「再選。

ふくせん 複選 【名】二度選に當ること。

ふくせん 複線 【名】汽車・電車などの線路、又は電車の架空線の、二つ以上並行せるもの。(單線に對して)

ふくせん-かくうしき 複線架空式 【名】『英 Compound trolysystem』電氣鐵道の一方式。車輪を廻轉すべき電流を、空中に架せる二本の電線の一方を傳はりて來り、他の一線を經て、元に歸るやうにせるもの。二架空線式。(單線架空式に對して)

ふくせん-きたう 複線軌道 【名】軌道を二條並行して設け、上行車と下行車とを別別に運轉せしむるもの。複軌。(單線軌道に對して)

ふくせんきよ 複選擧 【名】〔法〕かんせつせんきよ(間接選擧)に同じ。(單選擧に對して)

ふくぜんじ 福禪寺 【名】備後國沼隈(ぬくま)郡鞆町にある眞言宗の寺。本尊は千手觀音。空也上人の開基と傳ふ。海岸に位し、眺望を以て聞ゆ。

ふくせん-しき 複線式 【名】『英 Metallic circuit system 又 Double wire system』電信又は電話の導線を二本並行せしめ、通信の往復を別別にせしむる方式。電信は、特殊の場合以外は、この方式を用ひずして、單線式に依り、電話は、その電流微弱なるため、附近の電線のために妨碍を蒙りやすきより、極めて短距離なる者の外は、この方式を用ふ。(單線式に對して)

ふくせん-はふ 複選法 【名】〔法〕かんせつせんきよはふ(間接選擧法)に同じ。(單選法に對して)

ふくそ 復祚 【名】ちようそ(重祚)に同じ。

ふくそ 福祚 【名】ふくち(福祉)に同じ。

ふくそう 覆奏・復奏 【名】繰り返し取り調べて、奏上すること。

ふくそう 福僧 【名】有福なる僧。富裕なる僧。著聞「諸國・諸山の福僧京著(デヤウ)して、御法事の後」

ふくそう 輻湊・輻輳 【名】『車の輻(こ)が穀を中心として湊(あつ)る義。輳とも書くは、湊の字が、輻の車偏に化せられて變じたるもの』諸方より、一所に寄り集まること。「すること。

ふくそう 伏奏 【名】伏して、陛下に奏聞

ふくそう-くわ 複總花 【名】〔植〕『英 Panicle』複總狀花序に屬する花。

ふくそう-さい 副總裁 【名】總裁を輔佐し、總裁事故ある時は、その代理をなす職。

ふくそうじやう-くわじよ 複總狀花序 【名】〔植〕『英 Compound racme』花序の一種。花軸より多數の側枝を出し、その側枝の、更に分岐して、總狀をなすもの。葡萄・雀麥(カラスムギ)・南天燭(ナンテン)などの花序、これなり。

ふくそうじやうてきくわじよ 複總狀的花序 【名】〔植〕『英 Compound racemoinflorescences』そうじやうてきくわじよ(總狀的花序)を見よ。

ふくそう-でんき 複送電器 【名】『英 Polechanger』繼電器の發明以前、複流式の通信に使用せし、一種の送信器。

ふくそうとう 副總統 【名】中華民國にて、總統を輔佐し、總統事故ある時は、その代理をなす職。

ふくそうり 副總理 【名】〔一〕總理の次位に在りて、これを輔佐する職。〔二〕東京大學に置かれて、總理を輔佐し、總理事故ある時、代理をなし、勅任又は奏任の職。明治十七年設置、同十九年、東京大學の東京帝國大學と改稱するに及びて、廢止せられたり。

ふくぞく 服屬 【名】〔一〕從ひて附屬すること。附き從ふこと。從屬。〔二〕支那にて、忌服のかかる親屬。

ふくそく-るゐ 腹足類 【名】〔動〕軟體動物の一綱。水にも陸地にも棲息し、無殼のも少からざれど、概ね單殼を以て、體軀を包み、螺旋狀をなし、頭に觸角を有し、體の腹面は脚にして、伸縮自在に、歩行又は游泳の用をなす。蝸牛(カタツムリ)・田螺(タニシ)等、通常螺と呼ぶ者の全部、又、鮑(アハビ)も、これに屬す。

ふくそすう 複素數 【名】〔數〕『英 Complex number』ひそすう(非素數)に同じ。

ふくそんし 覆損使 【名】古、損田を覆審せしむるために、朝廷より遣しし使。

ふくだ 【名】餅の柔かなるものなるべし。〔古語拾遺〕行家集「もちこそいたきやつなれ 皆人のふくだとのみもいふと思へば」

ふくだい 【名】古の衣の一。その制、詳かならず。〔古語拾遺〕空海「年頃のふくだいをのみ著て行ひければ」

ふくたいしやう 副大將 【名】ふくしやう(副將)に同じ。「藏かず」を見よ。

ふくたいてん 不倶戴天 【名】〔法〕『獨 Blutstellvertreter』代理人が、その代理權の範圍内に屬する事項につきて、更に他人に代理せしむること。代理の代理。

ふくだいり-にん 複代理人 【名】〔法〕『獨 Blutstellvertreter』代理人が、復代理人をなさしむるために選任したる人。委任代理人は、本人の許諾を得たる上にて、これを選任するを要し、法定代理人は、自己の責任を以て、これを選任するを得。

ふくたう 復黨 【名】一旦脫黨したる者が、また元の黨派に入ること。

ふくだう 福堂 【名】〔一〕『眞珠船に「余向繫二錦衣獄一、親レ壁上有二大書一福堂字一、甚偉。近園二吳越春秋一、大夫種祝詞有レ云、禍爲二福根一、憂爲二福堂一。因知二出處一』とあり』〔二〕〔人〕『國事犯に坐して、入獄せしより名づく』むつむねみつ(陸奥宗光)の雅號。「ひ。

ふくだう 覆堂 【名】さやだう(鞘堂)に同じ。

ふくだう 復道・複道 【名】『宇書に「複道 只レ閣、以レ木支レ架爲二道路一也」とあり』支那の建築にて、閣の上と下とを往來し得るやうにせるもの。二重廊下。

ふくたう-るゐ 複糖類 【名】〔化〕たたうるゐ(多糖類)に同じ。

ふくだ-ぎやうかい 福田行誡 【名】〔人〕淨土宗の高僧。武藏國の人。字は晉阿。建蓮社立譽と號す。東京市芝區增上寺に居り、明治十三年總本山智恩院門主となを ゐ ろれるり ら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

り、二十一年寂す。年八十三。和歌を善くす。傳記の著あり。後、行誠上人全集の刊行あり。

ふくだけ 福竹【名】「貧乏竹(ビンボウダケ)」を見よ。

ふくだけ ふくだけ手・襷徒【名】ふくげ(襷緒)に同じ。〔古語〕

ふくだはんかう 福田半香【名】〔人〕畫家。名は信、字は吉人、小字は恭三郎。遠江國見附の人。江戸根岸に住す。渡邊崋山の門に學びて、山水及び草花を巧みにす。元治元年歿す。年六十一。

ふくたふ 復答【名】こたへ。へんじ。復報。

ふくだみ 福多味【名】鮑(アワビ)又は鰒(フグ)の肉を刻みて、その腸と鹽とにてあへたる食品。ふくだめ。

ふくだむ【動四自】ほほけだつ。そそけ亂る。けばだつ。逢起す。〔古語〕枕蠶の、すこしふくだみたれば」源氏「紙屋紙(カミヤガミ)・陸奥紙(ミチノクガミ)などのふくだめるに」

ふくだむ【動下二他】ほほけだたしむ。そそけ亂らす。けばだたしむ。〔古語〕枕「ありつる文の結びたるも、たてぶみも、いとときたなげに持ちなしふくだめて」

ぶくたん 伏斷【名】〔佛〕伏と、斷と。惑を、一時制伏すると、永久に斷絶すると。

ふくだめ【名】ふくだみ(福多味)に同じ。

ふくたる【動四自】唾(ツバ)など、口より噴き出でて垂る。「さいはひ。福祥。

ふくち 福祉【名】天地神明より授かる、福徳と智慧と。菩薩の果報にして、前者は、利他の方面をいひ、後者は、自利の方面をいふ。太平記「この兩目の俄を見る者、悉く福徳二報を成就して、濟度利生の道を廣くせし事」

ふくち 福地【名】㊀福徳を生ずる地域。めでたき土地。正統記「今の平安城に移さる。……數千代不易の都と成りぬる、誠に王氣相應の福地たるにや」㊁康熙字典に「天姥山在二紹興新昌縣東一道家稱爲二第十六福地一。石壁上有二科斗字一、高不レ可レ識」とあり』仙人の棲む所。

ふくち 福地【名】〔佛〕㊀ふくち(福地)に同じ。㊁じゐん(寺院)の美稱。福地の園【句】前條㊀に同じ。源氏「尼君も、ただ福地の園に種蒔きてとやうなりし一言をうち頼みて」

ふくちあうち 福地櫻痴【名】〔人〕ふくちげんいちらう(福地源一郎)に同じ。

ふくちがは 福知川【名】〔地〕ゆらがは(由良川)に同じ。

ふくぢく 副軸【名】〔理〕『英 Secondary axis』レンズの光心を通過すれども、その多面を圍む球(キュウ)の中心を通過せざる直線。(主軸に對して)

ふくちくわんじ 副知官事【名】明治元年神祇官會計官軍務官外國官刑法官に、又同二年民部官に設置せし職員の一。知官事の次位。公卿諸侯大夫士庶人より選任せられ、勅任たりしが、同二年廢止せられたり。

ふくちげんいちらう 福地源一郎【名】〔人〕政治家、又、文學者。櫻痴・夢舍(ムシャ)主人の號あり。長崎の人。德川幕府の通辯官となりて、歐洲を巡遊し、歸りて私塾を開き、英佛語を教授す。後、日報社の社長となり、東京日日新聞を主宰し、又立憲帝政黨を組織す。晩年文藝に親しみ、歌舞伎座を組織して、その座主となり、史劇を創作す。明治三十九年歿す。年六十六。幕府衰亡論・懷往事談・大策士水野閑老・秋の夕暮・春日局・春雨傘等の著あり。

ふくぢや 福茶【名】煎じ茶の中に、黑豆・昆布・梅干・山椒の實などを入れて煮、節分又は大晦日の夜、祝ひて飲むもの。**ふくうめぼし**(福梅干)・**ふくまめ**(福豆)參照。

ふくちやう 副長【名】㊀長の次位に在りて、これを輔佐する職。㊁軍艦職員の一。艦長を輔佐し、その命令を執行し、艦内の定則を維持するもの。

ふくちやうくわん 副長官【名】長官の次位に在りて、これを輔佐する職。

ふくぢやうちん 河豚提燈・鰒提灯【名】河豚の皮を、その生ける時、膨らしたる儘の形になして、提灯に造りたるもの。

ふくぢやま 福知山【名】〔地〕㊀丹波國天田(アマタ)郡にある町。由良(ユラ)川の上流なる音無瀨(オトナセ)の左岸。國中第一の名邑。舞鶴町より約六里。俗に、丹波の京と呼ばる。郡役所・兵營等あり。朽木氏の舊藩地。舊稱、横山。㊁明治初年設置の縣の一。四年七月、丹波國舊福知山藩の地に立てしもの。同年十一月、京都府に入る。

ふくちやまじやう 福知山城【名】丹波國天田(アマタ)郡福知山町の南部にありし城。もと横山氏の居城。明智光秀當國に攻め入りし時陷落し、光秀の死後、豐臣秀吉築城し、爾後數氏を經、寛文九年朽木稙昌封ぜられて、明治維新に及ぶ。

ふくちゆう 腹中【名】㊀身體の腹のなか。鵜鷀(ウトウ)經「無茶・無酒又無飯、……腹中、けしからず透き徹り」㊁心の中。心の底。心中。意中。㊂くわいちゆう(懷中)に同じ。

ふくちゆう 腹中の書【句】『世話の誹調篇に「郝隆七月七日、見二富家皆曬二曝衣裳一、乃出二日中一仰臥、人問二其故一、曰我曝二腹中書一也」とあり』その人の覺えたる學問、腹筒。

ふくちよく 副直【名】〔兵〕ていはくちよく

ふくつ 不屈【名】相手の勢又は困苦などに屈伏せざること。へこたれぬこと。くじけざること。

ふくつう 腹痛【名】病のために、腹のいたむこと。和合人「しきりに腹痛が致して、顏色變じ、もだえる樣子」

ふくづく ふくづく草【名】〔植〕ふくじゆさう(福壽草)に同じ。

ぶくづくゑ 佛供机【名】佛前に置きて、佛供を載する机。

ふくつけかる【動四自】ふくつけく求む。貪る。〔古語〕源氏「雪まろばしせさせたまふ。……、いと多うまろばさんとふくつけがれど」

ふくつけし【形ク】貪る心あり。慾深し。〔古語〕枕「碁を打つに、さばかりと知らで、ふくつけきは又、ことところにかかぐりありくに」

ふくづさう ふくづ草【名】〔植〕ふくじゆさう(福壽草)に同じ。

ふくづし 複圖紙【名】地圖建築設計圖・機械圖等又は織物編物の意匠圖などを復寫するに用ふる製圖用紙。紙質薄く、強靱なるを選び、亞麻仁油・椰子油等を塗布して、透明ならしめたるもの。

ふくつんだま 福一玉【名】穴一(イチ)の玉として、昔小兒の玩弄せし錢。

ふくづる ふく蔓【名】〔植〕びんぼふかづら(貧乏葛)に同じ。

ふくつね 腹椎【名】〔醫〕えうつゐ(腰椎)に同じ。

ふくて 福手【名】かがみもち(鏡餅)を云ふ。〔東國の方言〕

ふくていがく 副提學【名】だいていがく(大提學)を見よ。

ふくていさく 副提督【名】ていさくふ(提督)を見よ。

ふくてう 鵬鳥【名】〔動〕『鵬鳥賦序に「誼爲二長沙王太傅一。三年有レ鵩飛入二誼舍一、止二於坐隅一。鵩似レ鴞、不祥鳥也、西京雜記に「賈誼在二長沙一、鵩鳥集二其承塵一。長沙俗、以二鵩鳥至一入家一主人死一。誼作二鵩鳥賦一、齊二死生一、等二榮辱一、以遣二憂累一焉」とあり』鴟(フクロウ)・山鴟(ミミヅク)の類なりといふ鳥。

ふくてう 伏條【名】〔農〕とりき(取木)に同じ。

ふくてつ 覆轍・覆轍【名】『「前車の覆は後車の誡」を見よ』以前に物事を爲し損じたる跡。「蹈襲す。

ふくてつ 覆轍を蹈む【句】前人の失敗せし跡をふくてふ 復牒【名】へんてふ(返牒)に同じ。

ふくてん 福天【名】ふくじん(福神)に同じ。

ふくてん 福田【名】かがみもち(鏡餅)を云ふ。〔東國の方言〕

ふくでん 福田【名】〔佛〕『福徳を發生すべき田畝の義』善業(ゼンゴウ)を施す對象となるべき物事。**さんふくでん**(三福田)・**ほふくでん**(八福田)參照。正統記「三種の神器……。この國は、三種の正體を以て眼目とし、福田とする事なれば」

ふくでんえ 福田衣【名】〔佛〕『袈裟の條相、世の田と畷に等しきよりいふ』けさ(袈裟)の總稱。

ふくでんじ 福田寺【名】三河國北設樂(キタラシ)郡田口村にある臨濟宗の寺。本尊は地藏菩薩。應永九年上杉朝公の開基。持賜芳稱省驒禪師の開山。

ふくでんち 副電池【名】〔理〕『英 Secondary battery』**ちくでんち**(蓄電池)に同じ。

ふくと 伏兎【名】馬の頸の背の中部。

ふくど 復土【名】『周禮の少司徒及び史記の秦始皇紀に見ゆ』墓の穴に棺ををさめて、上より土を覆ふこと。

ふくど【名】〔植〕**はまよもぎ**(濱艾)に同じ。

ふくと 河豚・鰒【名】〔動〕次條に同じ。

ふくど 河豚・鰒【名】〔動〕ふぐ(河豚)に同じ。

ふくとう 河豚・鰒【名】〔動〕前條に同じ。醒睡笑「夜の雨けさは北風ふくとうの汁のおとづれせぬに怪しき」膝栗毛「お身の顏(ツラ)、何(ナ)ぢや。鰒とうどもの横さるきせるやうな佛頂顏(ブツヂヤウヅラ)して」

ふぐとう 河豚・鰒【名】ふぐ(河豚)を云ふ。〔四國の方言〕

ふくとうかん 副統監【名】日露戰爭後、朝鮮が我國の保護國たりし時代に置かれ、統監と共に、韓國京城に駐在して、統監を輔佐し、又、統監不在の時は、その代理を勤めし親任官。

ふくとうきくわん 複筒機關【名】『英 Double cylinder engine』大小二箇以上の汽筒を具へ、汽罐より供給する蒸氣を、最初その小なるものに使用し、更にこれを他の大なるものに入れ、膨脹せしめて使用するもの。(單筒機關に對して)

ふくとうじる 河豚汁・鰒汁【名】次條に同じ。「(河豚汁)に同じ。

ふぐとうじる 河豚汁・鰒汁【名】**ふぐじる**

ふくとうじる 副頭取【名】頭取の次位に在りて、これを輔佐し、又、頭取事故ある時、その代理をなす職。

ふぐとうもどき 河豚擬・鰒擬【名】**ふぐもどき**(河豚擬)に同じ。

ふくとく 福德【名】〔佛〕㊀善業(ゼンゴフ)によりて得たる利益(リヤク)。織留「福德祈る商人の家に」㊁しあはせよきこと。さいはひ。㊂應仁の亂の最中に立てられきと傳ふる年號。福德の三年目【句】『應仁の亂の最中に、福德の年號を立てられたれども、堂上にのみ用ひられて、人多くこれを知らざるうちに、その三年目に、細川・山名共に死して、亂鎭まりしよりいふとぞ』急に幸運の開くること。〔諺語〕

福德の百年目【句】前條に同じ。〔諺語〕

ふくとく 伏匿【名】**せんとく**(潛匿)に同じ。

ふくどく 復讀【名】書籍を、くりかへして讀むこと。さらへよみ。きらへ。

ふくどく 服毒【名】毒をのむこと。

ふぐどく 不求得苦【名】〔佛〕八苦の一。希求する事を得る能はざるもの。

ふくとくてんわう 福德天王【名】『祭神の異綴(イルク)なるより、服織の字音を、福德と訛りしなるべしといふ』伊勢國河藝(カハ)郡白子(シラコ)町にある式内の久留神社の俗稱。膝栗毛「玉垣を打過ぎ、白子(シラコ)の町に至り、福德天王を伏拜みつつ」

ふくとくのき 【名】〔植〕**めぐすりのき**(目藥樹)に同じ。

ふくとくほん 副讀本【名】『英 Reader』主要なる教課用の讀本の補助として、並用する讀本。

ふくとじる 河豚汁・鰒汁【名】次條に同じ。町人鑑「河豚(フク)汁を喰はんとて、色色のまじなひするが如し」

ふぐとじる 河豚汁・鰒汁【名】**ふぐじる**(河豚汁)に同じ。芭蕉海の無き都はこはしふぐと汁」太祖「死ぬやうに人はいふなりふぐと汁」「よ。

ふくとみ 福富【名】**とみくじ**(富籤)を見よ。

ふくとみざうしゑまき 福富草子繪卷【名】〔美〕高向秀武と呼ぶ貧者の、道祖神を祈り、放屁の術を習ひ得て富み榮えしを、隣家なる七條の坊長福富と呼ぶ者、羨みて、その術の傳授を乞ひしに、欺き傳へられて糞ひり散らし、うち懲されて歸りし物語を畫けるもの。二卷。現存せるもの數種あれど、最古のものと思はるるは、京都妙心寺春浦院の所藏に係り、畫は土佐隆成の筆、詞書は崇光院の宸翰と傳ふ。

ふくとみをう-のゑ 福富翁繪【名】〔美〕前條に同じ。

ふくどり 布穀鳥・鵠鸏【名】〔動〕『ふふどり(布穀鳥)の轉なるべし』**くわくこう**(郭公)に同じ。

ふくなべ 福鍋【名】若水を煮るに用ふる鍋。

ふくなほし 服直【名】喪に籠りたる人が、喪服を脫ぎて、常の衣服に著かふること。ぶくぬぎ。源氏「年かはりて、宮の御はても過ぎぬれば、……、御服なほしの程にも」

ふくなんくわく 服南郭【名】〔人〕**はっとりなんくわく**(服部南郭)を見よ。

ふくにく 複肉【名】砲身・砲彈などを、內外二層に重ね合はせて製作せるもの。

ふくにくほうしん 複肉砲身【名】**さうこほうしん**(裝箍砲身)に同じ。

ふくにくりうだん 複肉榴彈【名】『英 Compound shell』爆發の效果を、抵抗力ある目標に對して有利ならしむるために、複肉の製作法を用ひたる榴彈。

ふくにち 復日【名】曆の上にて、吉・凶何れも、重日(ヂユウ)に同じといふ日。

ふくにん 複妊・複姙【名】〔醫〕**ちようふくにんしん**(重複妊娠)に同じ。

ふくにん 復任【名】㊀ふたたび以前の官職に任ぜらるること。㊁古、遭喪により官職を解かれし者が、除服になりて、原任に復せしこと。**ふくげ**(服解)參照。

ふくにん-ぢもく 復任除目【名】古、復任のために臨時に行ひし除目。「じ。

ぶくぬき 服脫【名】**ぶくなほし**(服直)に同じ。

ふくねずみ 福鼠【名】〔動〕**しろねずみ**(白鼠)㊁に同じ。

ふくの 福野【名】〔地〕越中國東礪波(トナミ)郡にある町。礪波平野の中央に位し、木綿綸の織物を產す。

ふくのかみ 福神【名】㊀人に幸福を授くといふ神。(貧乏神に對して)狂言「福の神「何とぞ富貴になして下されませ。南無福の神、福の神」㊁龍(リウ)の狂言の一。利兵衛・八兵衛といふ二人の者、年の暮に、出雲の大社に參拜し、富貴の祈願をなす事を作れるもの。

ぶくのくるま 服車【名】古、公卿が喪中に用ひし牛車(ギツシヤ)。

ふくのしま 福野綸【名】越中國東礪波(トナミ)郡福野町、及びその附近より產する木綿綸の織物。

ふくのまさかつ 福野正勝【名】〔人〕福野流柔術の祖。通稱は七郎右衛門。大阪の人。角力を好み、支那明の陳元贇に從ひて、初めて、手搏の法を傳ふ。天文弘治頃の人。

ふくのゆ 福湯【名】**だいこくゆ**(大黑湯)

ふくのりう 福野流【名】柔術の流儀の一。元祿中、福野七郎右衛門正勝の創めしもの。

ふくば 副馬【名】乘替の料として牽きゆく馬。ひきかへの馬。のりかへ。

ふくば 服馬【名】〔兵〕砲兵輜馬の中、馭者の乘馭するもの。驂馬の左方に位し、輓具と乘馬具とを裝ふ。

ふくはい 伏拜【名】平伏して拜すること。ひれふしてをがむこと。ふしをがむこと。

ふくはい 腹背【名】㊀はらと、せと。㊁前面と後方と。まへうしろ。

ふくはい 覆敗【名】くつがへりやぶること。覆沒。「に同じ。

ふくはう 復報【名】**ほうふく**(報復)㊀㊁に同じ。

ふくはう 複方【名】〔醫〕『羅(Compositus)』藥品を、單味にて用ひず、公知の處方に依りて、他の藥物を配合せる藥劑。通例、その主藥の名稱に冠せしめて呼ぶ。例へば、複方規那丁規(クイナヂン)・複方大黃散(ダイワウサン)など。(單方に對して)「幸福なるむくい。

ふくはう 福報【名】さいはひのむくい。

ふくはう 副砲【名】〔兵〕『英 Secondary gun』軍艦に備ふる重砲中にて、驅逐艦・潛航艦等の奇襲を防ぐに用ふる、速射を主とする小口徑砲。(主砲に對して)

ふくばう 覆亡【名】くつがへり滅ぶること。又、くつがへし、滅ぼすこと。覆滅。

ふくばうきくわん 複膨機關【名】『英 Double expansion engine』ばうちやうきくわん(膨脹機關)に同じ。

ふくばうぎよ 副防禦【名】〔兵〕本防禦の効力を增大ならしむるための防禦物。例へば、鐵條網・鹿砦(ロクサイ)などの類。

ふくはく 復白【名】こたふること。復答。

ふくはしやらぐん 伏波將軍【名】支那漢代の將軍の一。後漢の馬援、これに任じ、馬伏波と呼ばれて、最も有名なり。

ふくばち 覆鉢【名】〔建〕擬寶珠の上方、又は露盤の上に置く、鉢を伏せたるごとき形の物。

ふくばち 福鉢【名】きばち(木鉢)を云ふ。

ふくはふくわせい 複法貨制【名】〔經〕ふくがふはふくわせい(複合法貨制)に同じ。(單法貨制に對して)

ふくはん 副伴【名】そひともなふこと。

ふくはよしづ 福羽美靜【名】〔人〕國學者。舊津和野藩士義質の長子。通稱文三郎、硯堂と號す。大國隆正に和漢の學を承く。明治元年徵士より進んで、侍講となり、元老院議官・貴族院議員を經て、錦雞間祇候となり、正二位に敍せられ、同四十年薨ず。年七十七。

ふくはら 福原【名】〔地〕一攝津國神戸市の西部地方の舊稱。平清盛別業を營み、治承四年、更に安德天皇を奉じて、一時都を遷しし處。壽永二年、平宗盛また安德天皇を奉じて、再びここに據りしかど、一の谷の敗戰後、衰落せり。二下野國那須郡佐久山町の大字。那須久隆の居りて、福原姓を稱せしより、子孫累代の住地たりし地。子孫、小田原の北條氏に與して、豐臣氏に除封せられ、德川時代、その族人また居住して、千石を食み、明治維新に及べり。三常陸國西茨城(ニシイバラキ)郡山内村の大字。加波山の北麓。花崗石の產地。鐵道水戸線の一驛たり。

ふくはらのみやこ 福原の京(ミヤコ)【句】前條一を見よ。太平記「湊川を過ぎさせたまふ時、福原の京を御覽ぜられて」

ふくはらごがく 福原五岳【名】〔人〕文人畫家。名は元素、字は子絢。備後國の人。後、大阪に住す。池野大雅に學び、又元明の筆意に倣ひて、遂に一家を成す。寬政十一年歿す。年七十。

ふくはらのーしま 福原島・福原嶋【名】〔地〕きやうがしま(經島)に同じ。增鏡「湊川の宿に著かせたまへるに、……。福原の島より、宮は御船にたてまつる」

ふくはらもさたけ 福原元僊【名】〔人〕長門國萩藩の士。通稱は越後。黍崖と號す。福山藩主毛利廣鎭(ヒロシゲ)の子、福原氏を嗣ぐ。夙に攘夷說を抱く。元治元年攘夷親征の行幸、中止となり、長藩、罪を問はるるに方り、藩士等、越後を首領として、藩主の罪を宥し、速かに攘夷の擧あらんことを請ふ。外艦馬關を砲擊すと聞き、兵を引きて歸るに及び、藩侯、越後を幽し、書を奉りて、罪を謝す。幕府、征長の師を出だすや、越後等侯の罪を解かんと欲して自殺す。年五十。「條に同じ。

ふくはらーえちご 福原越後【名】〔人〕前

ふくひ 腹皮【名】腹のかは。

ふくひ 腹誹【名】『腹にて誹(ソシ)る義』口にはいはねど、心のうちにてそしること。

ふくひ 複比【名】〔數〕『英 Compound ratio』二つ以上の比の前項の積を前項とし、又その後項の積を後項としたる比。(單比に對して)

ふくひ 次妃【名】『曹植の洛神賦に「臣聞河洛之神、名曰宓妃」とあり』支那にて、洛水に棲むといふ神女。洛神。

ふくびき 福引【名】一『ふくじやうくわ(福生果)を見よ』年の始に、二人向ひあひて、餅を引きあひ、得分の多少によりて、その年の禍福を判ぜしこと。二國を引かせて、物を分ち與ふること。集會などの餘興、又は商店の賣出などに行ふ。賣引(バイビキ)もこの類。三こみつを(富突)に同じ。

ふくびきけん 福引券【名】商品の購買者、興業場の入場者などに、福引一をなさしむるために贈る切符。

ふくびやう 腹病・黃胖病【名】肝臟又は腎臟より起る病。黃疸(オウダン)の如く、顏その他、ふくらみて、色青くなり、容易に治せず。北窓瑣談「登坂(ノボリザカ)などは、黃胖病(ヒバウビヤウ)の如く、いきどほしく堪へがたく」

ふくびやうーやみ 腹病病・黃胖病病【名】腹病に罹ること、又それに罹りたる人。風俗文選「青ざめたる顏色も、腹病病と名づけがたし」

ふくひよう 復氷・復冰【名】〔理〕『英 Regelation』壓力の加はれるがために融けたる氷が、壓力の減ずるに從ひて、再び凍る現象。

ふくひれい 複比例【名】〔數〕『英 Compound proportion』比例をなす二つの比の一方もしくは雙方が、複比なるもの。合率比例。(單比例に對して)

ふくひれいしき 複比例式【名】〔數〕前條に同じ。(單比例式に對して)

ふくふ 腹部【名】一はらの部分。二物の中ごろの部分。中部。

ふくふがう 複符號【名】〔數〕『英 Double sign』正號と負號とを重ねて、その何れかなることを表す符號。卽ち干又は土。

ふぐーぶぎやう 武具奉行【名】德川幕府の職制の一。武具に關する事を掌りしもの。文久三年、弓矢槍奉行と具足奉行とを廢して、これに代へ、留守居役にしたものと、駿河國の駿府城と、京都の二條城城代に屬せしめたるあり。

ふくふーふく 福福【名】幸多きこと。富み足りてあること。ものもち。

ふくーふく 【貌】綿入などの、いかにも柔かにふくれたるさま。ふくよか。古事談「綿、ふくふくと入れたるを」

ふくーふく 【貌】ふくぶくしきさま。

ふくーぶく 福福【名】『次條三の轉義』水中に身を投じて死ぬること。水死。〔俚諺〕

ふくーぶく 【貌】一氣泡の出づる音。二物の水中に沈み行く音。三水分多くてふくれたるさま。「形容。

ふくーぶく 【貌】脹れてぷりぷりする音の

ふくぶくし 肺【名】はい(肺)に同じ。〔古語拾遺〕和名

ふくぶくし 福福し【形シク】いかにも幸福のある樣子なり。容貌ゆたかなり。

ふくーふくせん 複複線【名】『英 Double double line』汽車などにて、上(ノボ)・下(クダ)の各車用の兩軌道の他に、なほ貨車專用等のための軌道を並行せしめて敷設せるもの。

ふくふくーちやうじや 福福長者【名】福福なる長者。福德の滿ちたる物持。幸福なる富豪。

ふくーぶくろ 福袋【名】集會の餘興などに、袋の中に種種の物を入れ置きて、各人に撰び取らしむるもの。

ふくふじやうみやくかん 腹部靜脈幹【名】〔醫〕次條に同じ。

ふくふだいじやうみやく 腹部大靜脈【名】〔醫〕左右總腸骨靜脈の會合により成立し、腹部大動脈の右側にあり、上方に走りて、橫隔膜裂孔を經て、胸腔內に入り、輕微の屈曲をなして、終に心臟右房の後下部に開口する靜脈。腹部靜脈幹。

ふくふだいどうみやく 腹部大動脈【名】〔醫〕胸部大動脈に續き、橫隔膜裂孔より胸椎體の前面に沿ひて下行し、第四腰椎に至りて、二枝に分れ、總腸骨動脈及び中薦骨動脈に移る動脈。腹部動脈幹。

ふくーぶちやう 副部長【名】部長の次位にありて、その職掌を輔佐し、部長事故ある時、代理をなすもの。

ふくふてんおんぷ 複附點音符【名】〔音〕さいふてんおんぷ(再附點音符)に同じ。

ふくふてんきうしふ 複附點休止符【名】〔音〕さいふてんきうしふ(再附點休止符)に同じ。

ふくふーどうみやくかん 腹部動脈幹【名】〔醫〕ふくふだいどうみやく(腹部大動脈)に同じ。

ふくーぶん 福分【名】一【佛】世間的の幸福を感ずる五戒・十善の行法(ギヤウホフ)。出世間の果を感ずる菩提心の行を道分といひ、合はせて、二分と呼ぶ。二しあはせのよきこと。好運。醒睡笑「山姥は、福分の人にてあると聞くが」

ふくぶん 復文【名】■返事の文。■原文を、一旦、他の文體に改め、又は外國語にて譯したる上、更に原文になほすこと。

ふくぶん 複文【名】〔語〕『英 Complex-sentence』附屬節を含める文。例へば、「我、その解しがたきに苦しむ」「空うららかなる日、我、郊外に杖を曳く」などの類。(單文・重文に對して)

ふくぶんかい 複分解【名】〔化〕『英 Double decomposition』ふんかい(分解)■を見よ。

ふくぶんすう 複分數【名】〔數〕『英 Complex fraction』分子と分母との兩方又はその一方が、更に分數より成れる分數。例へば $\frac{\frac{2}{3}}{\frac{5}{7}}$, $\frac{5+\frac{2}{3}}{6+\frac{2}{7}}$ 又 $\frac{1}{1+\frac{2(1+x)}{1-x}}$ など。重分數。繁分數。(單分數に對して)

ふくぶんすうしき 複分數式【名】〔數〕前條を見よ。

ふくべ 瓠瓠瓢【名】〔植〕ゆうがほ(夕顔)に同じ。

ふくべ 河豚【名】〔動〕ふぐ(河豚)に同じ。〔古語〕和名「鮸鰒、布久」一云、布久閇」

ふくへい 伏兵【名】■ふせぜい(伏勢)に同じ。〔覆兵〕■九星にて、寅・午・戌の年は壬、亥・卯・未の年は庚、申・子・辰の年は丙、巳・酉・丑の年は申の方に居て、兵革・刑殺を主るとて、その方角に向ひて、出師・行軍・修造を忌むべしといふ神。

ふくへき 腹壁【名】腹腔の側壁。**ふくまく**(腹膜)參照。

ふくへき 複壁【名】二重に構へたる壁。

ふくへき 復辟【名】■『書經』の咸有一德篇に「伊尹既復二政厥辟一」とあり。政を辟(き)に復(かへ)す義』重臣の、攝政を辭することと。■『文獻通考の經籍考に「唐中宗尹申武后廢レ之、後二十二年乙巳復レ辟」とあり』君主の位に復すること。

ふくべのうを ふくべの魚【名】〔動〕**ふぐ**(河豚)に同じ。

ふくべん 複瓣【名】〔植〕花瓣の、定數よりも多きもの。(單瓣に對して)

ふくべん 伏辨【名】**たいじやう**(意狀)■に同じ。「同じ。

ふくべら 【名】〔植〕**にりんさう**(二輪草)に同じ。

ふくべら-いちげ ふくべら一華【名】〔植〕**にりんさう**(二輪草)に同じ。

ふくべら-いちご ふくべら苺【名】〔植〕**ばらいちご**(薔薇苺)に同じ。

ふくほう 福報【名】〔佛〕福德の果報。**ふくほう**(福報)參照。(資報に對して)

ふくほうだ 複峯駝【名】〔動〕**りやうほうだ**(兩峯駝)に同じ。「同じ。

ふくほし ふく乾【名】〔植〕**もくれいし**(木荔枝)に同じ。

ふくまく 腹膜【名】〔醫〕『獨 Bauchfell』腹壁の內面全部を蔽ひ、又、腹腔中の諸器官の大部をも蔽ふ薄き膜。

ふくまくえん 腹膜炎【名】〔醫〕『羅 Peritonitis』腹膜の炎症。その全部に過度の充血を來して、深紅色を呈し、こまかき隆起物を生じ、漸漸化膿性の粘液にて蔽はるるに至り、この粘液にて蔽はれたる各器官は、互に粘著して、その間に膿汁溜り、腹部膨脹して疼痛あり、發熱し、下痢・便祕交代す。原因は盲腸炎・胃又は腸の潰瘍、脫腸・產褥熱・流產後の炎症・痲病等、その他種種あり。

ふくまでん 伏魔殿【名】■惡魔のかくれゐる宮殿。ばけものやしき。■隱謀などの絕えず行はるる宮殿。

ふくまめ 福豆【名】■福茶に入れたる黑豆。**ふくちや**(福茶)參照。一茎福豆や福梅干や鹵に合はぬ」■追儺(ついな)の時に撒く豆。

ふくまもり 福守【名】幸福を與ふる神「佛の守札。

ふくまる 含まる【動四自】ふくまれてあり。ふふまる。「詰)に同じ。

ふくまわり 福參【名】**はつうまうで**(初卯詣)に同じ。

ふくみ 含【名】■含むこと、又、含みたること、又その物。■ほみ(馬銜)■に同じ。

ふくみ ふく身【名】さしみ(刺身)を云ふ。〔女の語〕

ふくみ-ぐつわ 銜轡【名】くくみぐつわ(銜轡)に同じ。㊟我「ふくみぐつわに、紺の手綱を入れて」

ふくみ-ごゑ 含聲【名】口腔のうちに籠れるが如くに聞ゆる聲。くぐもりごゑ。

ふくみつ 福光【名】〔地〕越中國西礪波(にしとなみ)郡にある町。金澤市の東七里。中越鐵道の一驛。生絲の產出多し。

ふくみみ 福耳【名】『耳たぶの大なるは、福相なりとの俗說によりていふ』福福しき形の耳。一茎「袈裟散れ袈散れ孫の福耳に」

ふくみんせき 復民籍【名】〔法〕こくせきくわいふく(國籍回復)に同じ。

ふくむ 服務【名】職務に服從すること。原相同じ』中にひそみて現れず。ふふむ。くくむ。「長月のここぬかまでにふくみたる十日の菊の花開けなん」

ふくむ 含む・銜む【動四他】『前條を見よ』■内部に包み保つ。くくむ。■日に入れて保つ。口の端にて抑ふ。くくむ。ふふむ。■心にとどむ。氣に掛く。くくむ。ふふむ。八笑人「頭武六(ぶろく)に藥などを附けさせ、皆皆も、茶番をふくみて寢(ね)みける」■その狀を帶ぶ。きざしを示す。置土產「良き所に住み馴れて、諸人の色ある男を見るさへ、戀を含みぬ」

ふくむ 含む【動下二他】■ふくましむ。內にたもたしむ。くくむ。■心にとどめしむ。心にとどまらしむ。平家「勅諚の趣仰せ含めんとすれば」

ふくむかて 福蜈蚣【名】**おふくむかて**(御福蜈蚣)を見よ。

ふくむかへ 福迎【名】■福運を迎へ取ること。■正月五日、尾張國熱田神宮の攝社上千我麻(かみやま)神社に、諸人參詣して、福を祈り、祝の物を買ひ求むること。

ふくむきそく 服務規則【名】職務に在る者が、服務上遵守すべき規則。服務規程。服務規律。

ふくむきてい 服務規程【名】前條に同じ。「じ。

ふくむきりつ 服務規律【名】前條に同

ふくん 父君【名】**ちち**(父)の敬稱。

ふくん 夫君【名】を**と**(夫)の敬稱。

ふくん 不君【名】『「君、君たらずとも、臣たるべし」を見よ』主君たる道にそむくこと。

ふくん 府君【名】■『後漢書に「廣陵太守陳登患二胸中煩懣一、華佗脈レ之曰、府君胃中有レ蟲」とあり。官府の君の義』支那漢代の郡守の異稱。■朱子語錄に「無レ俗而曰二府君夫人一、漢人碑記有レ只是尊レ神

之儀。府君如二官府之君一。今人亦謂二父曰二家府君一」とあり』亡き父に對する尊稱。㊁**たいぎんふくん**（泰山府君）に同じ。

ふ-くん 布裙【名】㊀粗末なる衣服。㊁卑賤なる者の妻。

ふ-ぐん 不群【名】**ぼつぐん**（拔群）に同じ。

ぶ-くん 武勳【名】軍事のいさを。（文勳に對して）

ふくめ【名】干鯛（ほし）・梭魚（さわら）・鮫（さめ）などを炙りて、身を筆り、揃りて作る料理。

ふく-めい 腹鳴【名】〔醫〕腸の蠕動作用により、その内容物たる瓦斯・液體が、大なる速力を以て、管内を輸送せらるるため、腹内の鳴ること。主に急性腸カタル・回結腸炎等の初期に見る症候とす。

ふくめい 復命【名】㊀『老子の第十六章に「物芸芸、各復二歸其根一。歸レ根曰レ靜、是謂二復命一。復命曰レ常」とあり』天の命ずる所の性に復ること。復性。㊁『論語の鄕黨篇に「式退必復命曰、寡不二簡矣一」とあり』命令を受けて、事を行ひたる者が、その事の次第を復答すること。かへりまうし。復申。報命。反命。正統記「四道の將軍、戎夷を平げぬる由復命す」

ふくめいすう 複名數【名】〔數〕『英Compound number』二つ以上の單位を用ひて表はしたる數。例へば、三時二十五分。十二里三町四間五尺などの類。諸等數。（單名數に對して）

ふくめ-いを ふくめ魚【名】〔動〕**ふぐ**（河豚）

ふくめ-たひ ふくめ鯛【名】干鯛（ほし）の肉をふくめにしたる食品。覆面鯛。「じ。

ふく-めつ 覆滅【名】**ふくぼう**（覆亡）に同

ふく-めん 覆面【名】『覆の字の音、正しくは**ふう**』㊀面部をおほひつつむこと、又その物。かほおほひ。㊁神佛の供物を掩ふ時、氣息のかからぬやうに、紙又は布帛にて、口と鼻とをおほふこと。

ふくめん-たひ 覆面鯛【名】『覆の字の音、正しくは**ふう**』**ふくめだひ**（ふくめ鯛）の訛。

ふくめん-つきん 覆面頭巾【名】『覆の字の音、正しくは**ふう**』錣（しころ）を附けて、その端に釦を附け、兩眼以外の顏を覆ふやうにした頭巾。元文頃行はれたり。

ふくもと 福本【名】〔地〕播磨國神崎郡粟賀（あが）村の大字。德川時代に、岡山侯の支族なる池田氏（支代寄合格、六千石）の陣屋ありし地。

ふぐ-もどき 河豚擬【名】〔動〕鯛・鮪（まぐろ）などを實（み）とし、河豚汁に似せて作る汁物。ふぐとうもどき。

ふくもと-にちなん 福本日南【名】〔人〕文士。名は誠。筑前國福岡の人。父は平田派の國學者なりしため、夙に國書に通ず。上京して、司法省の明法寮に入學し、途中退學の後、清國・南洋等に航し、企つる所、皆、成らず、陸（くが）羯南・國分青崖等、明法寮退學の諸士と日本新聞社に入り、操觚に從事す。明治三十一年佛蘭西に遊學し、滯留二年、歸朝後、二六新聞社に入り、又、九州日報の主事となり、四十一年、代議士に選ばれ、大正十年歿す。年六十五。

ふく-もん 覆間【名】『覆の字の音、正しくは**ふう**』原被告の問答一旦終りて、なほ所存ある時、重ねて論辯すること。〔鎌倉時代の語〕

ふ-くやう 普供養【名】〔佛〕無盡の供養を出して、無邊の衆衆（しゅじょう）を供養すること。

ふくやか 腹やか【貌】**ふくよか**（腹よか）に同じ。字鏡「手の、いと白く、ふくやかにて」

ふくやく 服藥【名】㊀藥を飲むこと。㊁藥を飲むこと。

ふくやく【動四他】誹り告ぐ。讒言す。欺き言ふ。しこづ。よこす。〔古語〕字鏡「讒、毀也。與二己須一。又、不久也久」同「譖、欺也。誤也。詐也。猶二錯亂一也。伊比阿也萬豆。又、惱也。又、不久也久」

ふく-やつれ 服窶【名】喪服を著て、容姿のやつれて見ゆること。衆花一品の宮の御ぶくやつれ、いと哀れに心ぐるしう」

ふくやま 福山【名】〔地〕㊀備後國にある市。鐵道山陽線の一驛。阿部氏の舊藩地。市制施行前は、深津郡に屬したり。㊁明治初年設置の縣の一。四年、備後國福山藩の地に立てしもの。藩を廢して、縣としたる鴨方・岡田・足守（あしもり）・庭瀬・親見（ちかみ）・高梁（たかはし）・成羽（なりわ）・淺尾・生坂（いくさか）の諸縣と福山縣とを、倉敷縣に合はせて、新に備後國深津に深津縣を置き備中全國六郡を管す。五年、治所を備中國小田（おだ）郡笹岡に移して、小田縣と改稱し、八年、岡山縣に併せ、九年、北條縣をも岡山縣に併するに當り、舊小田縣の備後國六郡の地を、廣島縣に移管す。㊂『もと背後にある的前（まとまえ）山の名に本づきて、松前と呼びしを、その山を、後には福山と稱へ出して、城下の名稱ともなり』渡島（わたりしま）國松前郡にある町。舊松前氏の城下。開闢古く、四百餘年の歴史を有すれども、箱館開港以來、次第に衰ふ。舊稱、松前。

ふくやま-おりもの 福山織物【名】備後縞と備後絣との併稱。

ふくやま-かすり 福山飛白・福山絣【名】**びんごかすり**（備後絣）に同じ。

ふくやま-しやう 福山城【名】備後國福山市にありし城。もと毛利氏の所領。福島正則・永野勝成及びその子孫三世・松平忠雅を經て、寛永七年阿部正邦封ぜられ、世襲して、明治維新に及べり。

ふくやま-ちぢみ 福山縮【名】**ふくやまもめん**（福山木綿）に同じ。

ふくやま-もくだう 福山默堂【名】〔人〕曹洞宗の高僧。三河國の人。曹洞宗大學林の教授となり、後、永平寺貫主に選ばれ、慧光玄照大禪師の號を賜はる。大正五年寂す。年七十六。

ふくやま-もめん 福山木綿【名】**びんごま**（備後縞）に同じ。

ふく-ゆ 福湯【名】**だいこくゆ**（大黒湯）に同じ。（普通、接頭語**お**（御）を添へていふ）

ふぐ-ゆ 河豚油【名】河豚の肝臟より搾取したる油。黄色を呈し、特異の臭氣を有す。他の魚油と混じて、燈用に供す。

ふく-ゆう 福裕【名】**ゆうふく**（裕福）に同じ。（標題「名和又太郎と申す福裕の仁」

ふく-よう 副用【名】そへて用ふること。

ふく-よう 服用【名】㊀身に着くること。㊁藥を飲むこと。

ふく-よう 服膺【名】『膺は胸（むね）にて、胸に服（ふく）けて忘れざる義』心にとめて忘れぬこと。

ふく-よか 腹よか【貌】**ふくり**（腹り）に同じ。〔古語〕榮花「ふくよかに美しうおはしまして」字鏡「綿ふくよかなる衣（きぬ）」

ふく-よし 福吉【名】㊀さいはひ。幸福。㊁『ことさらにめでたきやうに言ひなしたる語』

ふくらい 癋瘡【名】**ほくら**（瘢）に同じ。〔古語〕

ふくら 膨【名】刀身の横手筋（ふせぢ）の上下、凡そ二三寸の間に於ける刃先の丸み。

ふくら 膨【句】刀身のふくら、丸み多し。

ふくら 膨【句】刀身のふくら、薄し。

ふくら 膨枯る【句】刀身のふくら、丸み多し。

ふくら 膨附く【句】刀身のふくら、丸み多し。

ふくら【名】㊀『**ふくらはぎ**（脹脛）を見よ』㊁**むら**（脹）を云ふ。〔伊豫國の方言〕㊂〔植〕

ふくらしばこ 膨柴子【名】**ふくら**（膨）に同じきか。

ふくら 福良【名】〔地〕淡路國三原郡にある町。鳴門（なると）海峽南口の東岸。由良（ゆら）と相對し、阿波・近畿・中國を往來する船舶寄泊の地として、古來名あり。

ふくら【助數】長さの單位。弓一張の長さを示すに用ふる語。「略。

ふぐ-ら 文庫・書藏【名】**ふみぐら**（文庫）の

ふくらいびやう 福來病【名】**ふくれやまひ**（福來病）を見よ。

ふくらい-まさとも 福來正友【名】〔人〕越前國の面打。石王兵衞と稱す。一說に、石王兵衞は別人なりと。應永頃の人。

ふくら-いり 膨煮・脹煮・脹煎【名】**ふくらに**（脹煮）に同じ。一代男「生貝（なまがひ）のふくら煎（に）を」

ふく-らか 膨らか【貌】**ふくり**（脹り）に同じ。榮花「髮丈だちよき程にふくらかなる人」源氏「御腹も、すこしふくらかになりたるに」

ふくらかす 脹らかす・膨らかす【動四他】**ふくらす**（脹らす）に同じ。醒睡笑「頬をふくらかし」

ふくらぎ【名】**いなだ**（鰍）を云ふ。〔北陸の方言〕

ふく-らく 福樂【名】幸福にして、安樂なること。幸福と安樂と。盛衰記「能者を請（しょう）じて、能を顯すには、必ず酒を進（すす）

らせ、引出物をするは、習なり。……。虚口(ウソグチ)にては、福樂無し」

ふくらく 更くらく【動自】ふく(更く)の連體形「更くる」の延。【古語】萬葉、蘆枕相巻きし兒は在らばこそ夜の深(フ)くらくも吾惜みせめ」紫式部日記「いとふくらけさ過ぎて肥えたる人」

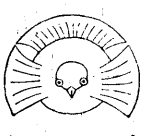
ふくら-しば ふくら柴【名】〔植〕冬青(ヒイラギ)科に屬する常綠喬木。高さ五六丈。葉は革質、廣楕圓形又は楕圓形にして尖り、互生し、五六月頃、淡黄色の小花を著け、聚繖花序を綴る。山野に自生し、材は白色、緻密にして、器物を製するに用ふ。ちぢみもち。くろがねもち。ふくらもち。

ふくらす 脹らす・膨らす【動四他】次條に同じ。八笑人「なんのをかしくも無(ネ)え事を笑ふぜと、額をふくらす」

ふくらす 脹らす・膨らす【動下二他】脹れしむ。ふくらかす。和合人「早く來(コ)ねえか、をかしくもねえと、面(ツラ)をふくらせたるを見れば、なほなほをかしく」

ふくら-すずめ 脹雀福良雀【名】■『雀の子は親よりもふくれたればいふとぞ』肥えふとりたる雀の子。共角「神無月ふくら雀ぞまづ寒き」■紋所の一。羽を延ばしたる形のふくら雀一箇を描きたるもの。■模様の一。紋所と同じ形のを、横に列ねて、幾段にも重ね、或段のが、互に上下の段のものの二箇の間に位するやうにせるもの。■女の髪の結ひ方の一。銀杏返(イチヨウガヘシ)に似て、前項の紋所の形をなし、十八九歳の者の間に行はる。■〔動〕蛾の一種。體肥大にして、前翅は黒褐色、環狀紋を有し、後翅は黒色にして、三條の鮮美なる藍色の帶を有す。幼蟲は毛蟲にして、長さ二寸餘、黄色にして、背面に黒線を有し、白毛粗生し、苧麻(カラムシ)などを食害す。

(四) 雀らくふ



(三) 雀らくふ

ふくら-すずめ-びし 脹雀菱【名】紋所の一。ふくら雀■を、二箇、上下に向ひ合せて、菱形をなすやうに描けるもの。

ふくらすずめ-むすび 脹雀結【名】緒の結び方の一。ふくら雀■の如き形に結ぶもの。

「の訛。〔東國の方言〕

ふくら-っぱき 脹脛【名】ふくらはぎ(脹脛)に同じ。

ふくらに 脹煮・福浦煮【名】鮑(アワビ)の肉を、醤にてよく揉み、弱き火にて、煮染(ニシ)め、柔くしたる食品。

ふくら-はぎ 脹脛【名】こむら(腓)に同じ。和合人「脹脛へ力を入れて、前へ屈んで」

ふくらみ 脹【名】ふくらむこと、又ふくらみたる程あひ、又その部分。

ふくらむ 脹む【動四自】ふくれあがる。ふくらかになる。ふくる。

ふくらむ 脹む【動下二他】ふくれあがらしむ。ふくらかにす。〔古語〕榮花「ほほづきなどを吹きふくらめて」

ふくら-もち ふくら冬青【名】〔植〕ふくらしば(ふくら柴)に同じ。

ふくり 複利【名】〔數〕『英Compound interest』一期間ごとに、利子を、その次の期間の元金に加算し、その全部に利率を乘じたるものを、次の期間の利子とする利息算。重利。(單利に對して)

ふくり 福利【名】幸福と利益と。利福。

ふくり 福履【名】『詩經の周南樛木篇に「樂只君子、福履綏之」とあり。履は祿の義』ふくろく(福祿)に同じ。

ふくり【貌】柔かに脹れたるさま。ふっくり。ふくらか。ふくよか。ふくやか。ふくふく。

ふくり【名】『脹(フ)れたる意。「松のふくり」參照』**いんなう**(陰嚢)に同じ。〔古語〕犬筑波「ふくりのあたりよくぞ洗はん(ニヒ)ふ句に「昔より玉磨かざれば光なし」

ふくり 錘【名】『もと、前條の語と同義』秤(ハカリ)のおもり。分銅。〔古語〕字鏡、錘、稱錘也。重也。布久利」

ふくり【名】『ぼくり(木履)の轉』**あしだ**(足駄)を云ふ。〔東國の方言〕

ぶくり【貌】ぶくぶくに同じ。「るる水。

ぶくり 伏流【名】地下をくぐりて流るる水。

ぶくりう-しき 複流式【名】『英Duplo current system』電信の通信社の一。陰陽兩方向の電流を回線に傳はらしめて行ふもの。(單流式に對して)

ぶくりう-はつでんき 複流發電機【名】『英Double current generator』直流と交流とを、同時に發生するやうに裝置したる發電機。

ぶくり-おとし 陰嚢落【名】節分に、四十二歳の男が、年の厄を拂ふ蠱(マジナヒ)として、身に著けたる犢鼻褌(フンドシ)を、故意に途上に落し、そのまま顧みずして歸ること。

ぶくり-かぜ 陰嚢風【名】**せんき**(疝氣)に同じ。遲歩色葉集「疝氣、フグリカゼ」

ぶくり-き 福力【名】福德の具はりてあること。正統記「金輪王(コンリンワウ)……。次に、銀銅鐵の轉輪王あり、福力の不同により、果報も次第に劣れるなり」醒睡笑「百姓の福力なるあり」

ぶくり-き 腹力【名】腹部の力量。はらのちから。ふくりよく。

ぶくり-づき 鬣【名】馬の腹の下の鳴ることなりといふ。〔古語〕和名「鬣、音渥、俗云布久利都岐、馬腹下靡也」

ぶくり-なし 陰嚢無【名】男らしからざる男子を嘲りていふ語

ぶくり-はふ 複利法【名】〔數〕複利の計算法。(單利法に對して)

ぶくり-ふ 腹立【名】腹を立つること。腹立ちたること。はらだち。立腹(リフク)。靈異記「鎌倉殿、やや相待ちたまへども、無音(オト)の間、腹立して」きのふはふ物語「これを聞きたまひて、御腹立なされ」

ぶくり-へう 複利表【名】〔數〕元金を1として、複利法に依る元利合計を、種種の利率及び期間に應じて表示せるもの。

ぶくり-りん 覆輪・伏輪・幅輪【名】物(主に鎧・鞍又は刀劍の鍔・鞘など)の緣(フチ)を、金・銀・銅などにて、幅狹く覆ひ飾ること。金屬の種類に應じて、金覆輪(黄覆輪)・銀覆輪(白覆輪)などの名あり。

ぶくり-りん 服輪・幅綸【名】ごろふくりん(呉絽服輪)に同じ。東海道名所記「かたびらの袖しがらのふくりんも襟裏ともにしほ垂れにけり」

ふくりん-ささゆり 覆輪笹百合【名】〔植〕笹百合の變種。葉の緣邊の白きもの。

ぶくり-やう 茯苓【名】〔植〕不完全菌類に屬する菌。松の根株の邊に自生し、拳の如き塊をなし、皮は多くは赤黒けれど、又白きもありて、皺あり。肉は黒松に生ずるものは、多くは白く、赤松のは、多くは赤し。漢方にて、水腫・利尿の藥用に供す。まつほど。まつのほや。

ぶくりやう-さい 茯苓菜【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ一尺餘。葉は箆形にして互生す。莖・葉共に細毛あり。夏季、小き球形の頭狀花序を著け、その中部は淡黄綠色の管狀花、周邊は白色の舌狀花より成る。暖地に自生し、また觀賞用として栽培す。

ぶくりやう-さう 茯苓草【名】〔植〕**つちぐり**(土栗)■に同じ。

ふくりやうじ 副領事【名】領事官の一。領事の下、領事官補の上に位し、領事の管轄地の一部を管轄區域とし、その領事の職務を輔助する奏任官。

ぶくりやう-つき 茯苓突【名】茯苓を採取するに用ふる具。長さ二尺餘の鐵の火箸のごとき形の物に、堅木にて作れる、縦

横共に、長さ七八寸の丁字形の柄をすげたるもの。土中を刺して、その手ごたへ、又はそれに附著したる臭氣によりて、有無を知るなり。

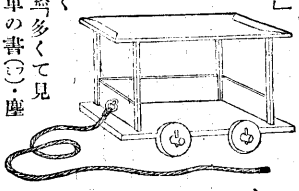
ふくりゅう 福龍【名】明治二十七八年の日清戰役に、威海衞にて捕獲せし水雷艇。長さ二十四間、幅二間四尺、噸數百二十八噸、速力二十三節(ノット)。

ふくりよく 伏龍【名】隱遁して、世に顯れざる人傑の譬。「同じ。

ふくりよく 腹力【名】**ふくりき**(腹力)に同じ。

ふくる 脹る・膨る【動下二自】■内より張り出す。もちあがる。落窪「うちふくれて、いとをこがましと、少將、つくづくとかいまみ伏したり」■不平にて、心中はれやかならぬ樣子、顏にあらはる。

ふぐるま 文車【名】■書籍を載せて、室内を運ぶに用ひし車。ふみぐるま。「古語」雜然「多くて見苦しからぬは、文車の書(フミ)・塵塚の塵」■「楨」をぐるま(小車)■に同じ。



(一 まるぐふ)

ふくれ 脹・膨【名】■ふくるること、又その部分。ふくらみ。■刀身に、鍛錬上、一段ふくれて現れたる斑。■肥えてみにくき顏の人を卑しめていふ語。「俚語」

ふくれい 複嶺【名】「重山(ヂユウザン)・複嶺」を見よ。

ふくれう 副寮【名】禪寺にて、寮主(レウ)を佐けて、寮内の掃除、道具の有無の點檢等を掌る役。

ふくれ-かへる 脹返る・膨返る【動四自】**ふくる**(脹る)■を强めていふ語。

ふくれ-がほ 脹顏・膨顏【名】■脹れたる顏。ふくれづら。ふくれっつら。■不滿なるらしき顏つき。ふくれづら。ふくれっつら。

ふくれき 伏櫪・伏歷【名】櫪に伏すこと。「老驥(キ)櫪に伏すとも、志千里に在り」參照。

ふくれ-ぐさ 脹草・膨草【名】〔植〕**べんけいさう**(辨慶草)に同じ。

ふくれ-ごゑ 脹聲・膨聲【名】ふくれ顏をして出す聲。其角「下圖(ヤシタ)や鳩根性のふくれ聲」「訛。

ふくれっ-つら 脹面・膨面【名】次條の**ふくれ-づら**脹面・膨面【名】**ふくれがほ**(脹顏)を卑しめていふ語。

ふくれんめいあんとう 複連明暗燈【名】『英(Group occulting light)』明暗燈の一種。一定の間隔を置きて、二回以上の全暗を生ずるもの。

ふくれ-やまひ 福來病【名】『福來を「ふくれ」と訓むは、高田與清(トモキヨ)の松屋筆記の說に依る』頸部の腫(ハ)れふくるる病。日本記略「二十五日乙未、荷前使。今年、人民頸腫、世號三福來病一」

ふくろ 袋・帒・嚢【名】『脹(フ)れたる物の義』■物を入れて、口を閉づるやうにせる物。多くは布・紙・革などにて作る。■**きんちやく**(巾著)に同じ。■蜜柑などのかごの、薄き膜(內果皮)にて、一つ一つに、包まれてある物。■**えな**(胞衣)に同じ。■「袋を擔ぐ」を見よ』事を爲すに、他人に後(クダ)るること。■紋所の一。

ふくろ 嚢穢(ナタ)【句】外觀に迷はされて、實質を誤認すべからざる譬。「諺語」

ふくろ-あみ 嚢網・袋網【名】適當の位置に置き、流に從ひて入りたる魚を捕ふるに用ふる、嚢狀の網。

ふくろ-あらひ 袋洗【名】攝津國伊丹(タミ)にて、新酒釀造に用ひし袋を、猪名(ヰナ)川にて洗ふこと。近鄕の賤民、この洗濯を掬して飮むに、味、うすき醴の如しといふ。奧義「伊丹の袋あらひ。賤(シヅ)の女(メ)や袋あらひの水の汁」

ふくろ-いし 袋石【名】**いはつぼ**(岩壺)■に同じ。

ふくろ-いそめ 嚢磯目・袋磯目【名】〔動〕「すごかい」に同じ。

ふくろ-いた 袋板【名】戶袋の羽目板。

ふくろ-いちご 袋苺【名】〔植〕**ごしよいちご**(御所苺)に同じ。

ふくろ-いり 袋入【名】袋の中に入りてあること、又その物。

ふくろいり-ぼん 袋入本【名】草雙紙(ザウシ)の黃表紙の中にて評判の好きものを、半紙に刷り、無地の茶表紙を附けて、袋入になしたるもの。上紙摺(ジヤウズリ)。

ふくろいれ-がさ 袋入傘【名】『差掛けさる時、袋に入れて擔ぎ行くよりいふ』**つまをりがさ**(端折傘)に同じ。

ふくろいれ-づゑ 袋入杖【名】德川幕府にて、家臣中の資格ある者に、城內を携ることを許したる杖。

ふくろ-うち 袋打【名】眞田(サナ)紐などの、中の袋となるやうにせる組方。(平打・丸打などに對して)

ふくろ-おり 袋織【名】水管などを織るに、緯(ヨコ)絲が表を組織して、直ちに裏を組織し、表と裏とを接合せずして、筒狀をなすやうに織ること、又その織方の物。

ふくろ-かんばん 嚢看板【名】昔、藥種商が、藥を盛りたる狀の嚢を店頭に揭げて、看板としたもの。

ふくろ-がらがら 嚢がらがら【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。體は圓柱狀にして、三四回叉狀に分岐し、節あり、殆ど中空にして、やや嚢に似たり。「ること。

ふくろく 福祿【名】■福運と封祿と。■**ふくろくじゆ**(福祿壽)■の略。

ふくろ-ぐさ 袋草【名】〔植〕**べんけいさう**(辨慶草)に同じ。

ふくろくぐい 副肋材【名】『英 Reverse frame 又 Reverse angle』正肋材の內方に固著して、その强度を補ふ山形の材。

ふくろくじん 福祿人【名】次條■の俗稱。

ふくろくじゆ 福祿壽【名】■福と祿と壽命と。■支那の仙人の一。南極星の化身にて、延命の神なりといふ。畫には、身の丈短く、頭長くして、髯多き老人の、人の壽命を記せる司命の一軸を結びつけたる杖を携へ、鶴を從へたるさまに描く。壽老人と同體異名なりともいへど、我國には、兩者を、共に七福神の一とす。げほう。ふくろくじん。

ふくろくじん 福祿壽の市立(タチ)【句】福の神の如くなる人の、市に立ちて見て居ること。「錢無(ナシ)の市立」に對して)「諺語」

ふくろぐも 袋蜘蛛【名】〔動〕**つちぐも**(土蜘蛛)■に同じ。

ふくろご 袋兒【名】卵膜に包まれたままにて、胎盤と共に生れたる胎兒。

ふくろごころ 袋心【名】世間の事を知らぬ、狹き心。

ふくろざうし 袋草子【名】■袋綴(トヂ)の書籍。「嚢草子」■「書」『もと、前項の綴方の册子に書きつけたりしよりの名なるべし』歌會・歌書・歌人などに關したる事を記せるもの、四卷。藤原清輔の著。その中、歌人の逸話の部分のみを抜抄したもの。參照。

るものに、清輔雑談抄(二巻)あり。又、別に和歌合次第・故人和歌等を載せたる袋草子遺編(二巻)あり。㊁〔美〕ふくろほふし

ふくろごと(袋法師綸詞)に同じ。

ふくろしだ 袋羊齒【名】〔植〕水龍骨(スギカヅラ)科に屬する多年生の羊齒植物。葉は地下葉より叢生し、高さ一尺餘に達し、一回羽狀複葉にして、裏面に球狀の子嚢を著生す。山地に自生す。きくばらしだ。

ふくろしやうじ 嚢床子【名】床子の一種。上を綿入になせるもの。古、朝廷にて、節會の時に用ひたり。つぼしやうじ。

ふくろじよれん 袋鋤簾【名】『英 Bag-and spoon dredger』浚渫器の最も簡單なるもの。革又は帆布にて作れる袋の口に、鐵の環を繞らし、長莖の端に取り付けたるもの。

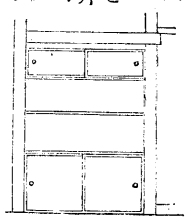
ふくろ-するめ 袋鯣【名】烏賊(イカ)の頭を去り、胴を割かずに薄皮を剝きて、袋形に製したる鯣。丹後國の特産。

ふくろ-ぜき 袋堰【名】堰の一種。袋に土砂を詰めて堰くもの。砂川などに用ふ。

ふくろ-ぜめ 袋攻【名】將棋にて、敵の駒を、三方より囲みて攻むること。

ふくろ-たたき 袋叩【名】㊀一人を袋に入れて、うちたたくこと。㊁一人を、多人數にて、散散にうちたたくこと。

ふくろ-だな 袋棚【名】床間(トコノマ)・書院などの脇に、壁の外へ張り出して、袋の如く造りたる戸ある棚。ふくろとだな。



(なだろくふ)

續狩裏(北枝)「蜂蟷や顏に飛びつく袋棚」

ふくろ-たび 袋足袋【名】親指と他の四本の指との間に、襠の縫込を設けざる足袋なりといふ。「代男」「浮齋織のふくろ足袋、中抜(ナカヌキ)の細緒をはき」

ふくろ-ち 袋地【名】〔法〕他人の所有に屬する土地、又は池沼・河川等に圍繞せられて、直接に公路に通ぜざる土地。

ふくろ-づきん 袋頭巾【名】こせうづきん(初被頭巾)に同じ。

ふくろ-づつみ 袋包【名】物を袋に包み入るること、又それに包み入れてあること、又それに包み入れてある物。

ふくろ-つなぎ 嚢蓼【名】〔植〕紅色藻類に屬する海藻。體は多數の嚢狀體の連續より成り、分岐して、長さ一尺餘に達す。

ふくろ-つの 袋角・鹿茸【名】鹿の角の、春脫け落ちて生えかはる時、その基脚となるべき部分の、一面に皮をかぶりて突起せるもの。皮あり、毛ある間は、血管あれど、生長して、角となれば、毛・皮・毛管、悉く枯れ落つ。かのわかづの。ろくじよう。

ふくろ-づめ 袋詰【名】物を袋に詰め入ること、又それに詰めてある物。

ふくろ-ど 袋戸【名】袋棚に立つる襖(フスマ)。和合人「袋戸を明けて、いや、奇妙、船橋屋、ちと宗體(ソウテイ)は違ふがと、一つしてやり」

ふくろ-どこ 袋床【名】床(トコ)の、間口の長さが、床板の壁に接せる長さより短く、その短きだけ、三方ともに壁となりて、袋の如く囲めるもの。

「棚」に同じ。

ふくろ-とだな 袋戸棚【名】ふくろだな(袋棚)に同じ。

ふくろ-とぢ 袋綴・嚢綴【名】『一枚ごとに、袋のごとき形になるよりいふ』冊子の綴方の一。紙を二つに折りて重ね、上下に表紙をあて、その折目にあらざる方の端を、絲または紙撚(コヨリ)にて綴づること。後世の和本の綴ぢ方は、普通、この方法に依る。

ふくろ-なほし 袋直【名】清酒又は醤油等の醸造操作にて、多くの袋に醪(モロミ)を入れ、壓搾器に掛けて、液と糟とを分離する時、その面に凸凹ありて、壓力均等ならざるために、翌日、槽内の袋を置換して、平均ならしむること。

ふくろ-ぬひ 袋縫【名】和服にて、縫ひあはせたる織地の、縁の方よりほつるるを防ぐために、一旦、兩片とも、表の方を外部に出したるままにて、縫代(ヌヒシロ)を淺くして縫ひあはせたる上、裏返して、普通の縫代にて、再び縫ひあはすること。

ふくろ-ねずみ 袋鼠【名】〔動〕かんがるう(更格蔗)に同じ。

ふくろ-のり 嚢海苔【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。體は球形、嚢狀をなし、直徑一二寸。他物に著生す。

ふくろ-ばかま 袋袴【名】あんざんにかま(行燈袴)に同じ。

ふくろ-ばり 袋張【名】襖(フスマ)・額(ガク)などを造るに、紙の周圍にのみ糊を附けて貼ること、又その貼方にしたる物。

ふぐろび 綻【名】ほころび(綻)の轉訛。㊀記「羽織の袖のふくろび」

ふくろ-ひじき 袋鹿尾菜【名】〔植〕ひじき(鹿尾菜)を見よ。

ふくろふ 梟・鵂・鶹・鵂鶹【名】〔動〕猛禽類に屬する鳥。木兎(ミミヅク)に似て、頭大く、頭上の毛角なし。眼大くして、夜間も物を見得るより、晝は隱れ、夜は出でて、小鳥を捕へ食ふ。鳴く聲人の呼ぶに似、世に不孝の鳥とす。保護鳥中の禁止鳥に屬す。さけ。ねこどり。はくひどり。ふくろ。和名抄「梟、不久呂布。辨色立成云、佐介。食父母一不孝鳥也」梟の宵工(ヨヒクヒ)【句】計畫は立派に立つれども、その場に臨みて實行する能はざる譬。夜鷹の宵工。〔諺語〕梟の宵鳴(ヨヒナキ)、糊掻って待て【句】梟の宵に鳴くは、明日晴天なる兆なれば、糊を掻りて、洗濯・張物の用意をせよ。〔俚語〕

(ふろくふ)

ふくろふ 綻ぶ【動上二自】ほころぶ(綻ぶ)の轉訛。きのふはけふの物語「年頃十六か十七ばかりの、未だ脇の下のふくろびたが、……言はう所もない美人なり」

ふくろ-へうぐ 袋表具【名】掛物(カケモノ)の表具法の一。縁をただ一重(ヒトヘ)だけ回らし、その左右に細縁を施したるもの。支那明(ミン)代の流行に倣へるものなるより、明朝式ともいふ。

ふくろほふし-ゑことば 袋法師綸詞【名】〔美〕僧侶と女房とを主題とせる春書的の繪巻物。徳川幕府の所藏なりし、飛驒守惟久筆の稱ありしものは、火にあひて失はれ、今、帝室博物館に模本一巻あり、原畫は足利時代のものなるべしといふ。一名、袋草子。

ふくろ-まち 袋町【名】通りぬけの出來ぬ町。入口のみありて、出口なき町。死巷。

ふくろ-まわた 袋眞綿【名】袋のごとき形に展ばしたる眞綿。岩代國伊達郡保原(ホバラ)町附近より廣く東北地方に産す。

ふくろ-みち 袋道【名】行止(ユキドマリ)になりてある道。

ふくろ-みみ 袋耳【名】㊀記憶強く、一度聞けば、いつまでも忘れざること、又その人。ぢごくみみ。㊁織物の、左右の耳の部分のみを袋織になしたるもの。

ふくろ-むすび 袋結【名】紐の結び方の一。巾著(キンチャク)㊀の如き形に結ぶもの。

ふくろ-もぐさ 袋艾【名】艾を一纏にして、袋に容れたるまま、露ぎしもの縒らず切らぬ艾。繕膝栗毛「灸(ヤイト)するたが宜(ヨ)からず。これの、そこの袋艾を持てこい」

ふくろ-もち 袋持【名】㊀主人のあとに從ひゆく從者。胸算用「袋持に、挑灯(チヤウチン)消させて」㊁爲す事の、他の人人より後るる者。

ふくろ-もの 袋物【名】㊀袋に入れたる品物。先化粧かたへに飾る黒棚より取出す錦の袋物」㊁烟草入・蝦蟇口など袋狀をなせるものの總稱。「嚢物」

ふくろもの-し 袋物師・嚢物師【名】袋物を造り、又は商ふ人。

ふくろもの-や 袋物屋・嚢物屋【名】袋物を商ふ家、又その人。

ふくろ-やまぶし 梟山伏【名】能(ノウ)の狂言の一。二人の兄弟あり、弟、山に入り、梟の巣を落して、その梟に取憑(トリツ)かれしにより、兄、山伏を賴みて、祈り落さんとせしに、己も亦取憑かれ、終に山伏も取憑かるといふ筋のもの。

ふくろ-やり 袋槍 【名】槍の一種。身の基部を中空になし、柄の先をその中に嵌め込みて、目釘を打ち貫くもの。

ふくろね 袋井 【名】〔地〕遠江國磐田(イハタ)郡にある町。舊東海道五十三次の一。南隣笠西(カサニシ)村に鐵道東海道線の袋井驛あり。北半里に可睡齋(カスイサイ)あり、又中遠鐵道の接續點、秋葉馬車鐵道の起點なり。

ふくわ 附和 【名】**ふわ(附和)**に同じ。

ふくわ 浮華 【名】心うかれて、じみならぬこと。うきたちて、實のなきこと。

ふくわ 浮誇 【名】大言を吐きなどして、落ちつかぬこと。

ふくわ 賦課 【名】金品などを、人人に割

ふくわ 不課 【名】大寶令の制にて、調・庸雜徭を課せざること。

ふくわ 孵化 【名】卵がへりて、子に化すること。卵をかへすこと。

ふくわい 不快 【名】**一**愉快ならぬこと。おもしろからぬこと。不愉快。**二ふくわい(不會)**に同じ。平家「木曾の冠者義仲・兵衞佐頼朝不快の事ありと聞えけり」太平記「天下の人皆連枝の御中に、始終いかさま御不快の御事候ひぬ」**三**『後漢書の華陀傳に「體有二不快一」とあり』わづらひ。やまひ。病氣。不勝(タヘ)。不例。

ふくわい 不會 【名】交情の違ひて、和合せざること。なかたがひ。不和。不快。運歩色葉集「不會、フクワイ。不和合之義」

ふくわい 府會 【名】地方自治團體たる府の議決機關。府會議員を以て組織し、府の財政の重要なる事項を議決するもの。

ふくわい 附會・傅會 【名】**一**『列子の湯問篇に「傅二會草木膠質・白黑丹青一之所一爲」とあり』著け合はすること。つなぎあはすること。**二**「文」『後漢書の張衡傳に「作二二京賦・精思傳會、十年乃成」、文心雕龍の附會篇に「何謂二附會一。謂下總二文理一、統二首尾一、彌二綸一篇一、使上雜而不レ越者上也」とあり』文章の、首尾一貫して、よく整へること。**三**『漢書の袁盎傳に「雖レ不レ好レ學、文善傳會」とありて、註に「因レ宜附二著會合之一こと見ゆ』正しき道を知らずして、便宜に從ひて、附和雷同すること。こじつけ。「同じ。

ぶ-くわい 部會 【名】**ぶくわいぎ(部會議)**に同じ。

ぶ-くわい 無穢 【名】**ぶわい(無穢)**に同じ。

ぶ-くわいぎ 部會議 【名】一部局にてなす會議。部の會議。部會。

ふくわいぎねん 府會議員 【名】府會を組織する議員。その資格及び選出の規程は、縣會議員のと同じ。

ふくわうさう ふくわう草 【名】〔植〕菊科に屬する草。高さ二尺餘。下部の葉は、三角形にして、大なる缺刻あり、長き葉柄を具へ、上部の葉は、披針形をなす。秋季、長き頭狀花序をなして、淡紫色の花を著く。山地に自生す。

ふくわうじ 福王寺 【名】**一**安藝國安佐(アサ)郡龜山村にある眞言宗の寺。金龜山と號す。本尊は不動尊。開山は空海と傳ふ。**二**筑後國八女(ヤメ)郡古川村大字溝口にある日蓮宗の寺。長壽山と號す。本尊は釋迦多寶如來。創建未詳、中興の開山は日源。

ふくわう-りう 福王流 【名】能樂脇方の流派の一。播磨國美嚢(ミノ)郡三木(ミキ)町なる福王神社の神官福王神右衞門盛忠を流祖とするもの。

ふくわう-ねん 普廣院 【名】〔人〕**あしかがよしのり(足利義敎)**の諡。

ふくわうをん-ねん 普光園院 【名】〔人〕**ふぢはらよしざね(藤原義實)**に同じ。

ふく-わかし 福沸 【名】**一**正月若水(ワカミヅ)を汲みて煮ること。**二**正月七日又は十五日に、神供の餅を、粥に入れ煮て食するもの。

ふくわき 孵化器 【名】鷄卵などの人工孵化を行ふに用ふる器械。種類多けれども、何れも、器内の溫度を常に四十度内外に保たしむるやうに裝置す。

ふくわきん 賦課金 【名】賦課する金。

ふく-わく 負郭 【名】『史記の蘇秦傳に「使二我有二負郭田二頃一、吾豈能佩二六國相印一乎」とあり』城下に近き土地。地味よく收穫多しとて貴ぶ。

ふく-わく 俘獲 【名】生けながら捕ふること。いけどり。生擒。

ふくわくじゆう 不擴充 【名】〔哲〕**くわくじゆう(擴充)**を見よ。

ふく-わけ 福分 【名】賀祝などに、他人より贈り來れる品物を、又他人に分ちあたふること。すそわけ。

ふく-わげ 福髷 【名】女の髪の結ひ方の一。

ふくわこ 不課戸 【名】大寶令の制にて、課口の無き戸(コ)。(課戸に對して)

ふくわ-じゆつ 腹話術 【名】『その音聲を腹より出づるものとして名づく』常の場合の如くに發聲することなく、特異の呼吸によりて、聽者に、何處よりか音聲の來るやうに感ぜしむる術。

ふくわたし 福渡 【名】**一ふく(福)二**を讓り渡すこと。狂言(福渡)「福わたしといふ事をせずば、渡すなと御意なされてござる」**二**能(ノウ)の狂言の一。大名、太郎冠者を伴なひて、鞍馬の多聞天(タモンテン)に參詣し、通夜せしに、冠者、福を授けられしを、主人欺き取らんとせしより、冠者、さんざんに主人をなぶりたる上にて、これを讓り渡すことを作れるもの。

ふくわっぱつ 不活潑 【名】活潑ならぬこと。勁作のぐづぐづとせること。

ふくわほう 無果報・不果報 【名】善き果報の無きこと。しあはせの好からざること。不運。醉睡笑「人の果報・無果報は、せん方なし」

ふくわん 府官 【名】國府(コフ)又は太宰府の官人。「古語」新勅撰「太宰府に侍りける時、府官等をひきゐて、香椎(カシヒ)の浦に遊びけるに」

ふくわん 武官 【名】**一**武事に携はる官人。(文官に對して)**二**古、禁裡の内外を守衞する官人、及び、すべての武事に携はる官人。即ち五衞府(ゴヱフ)・馬寮(メリョウ)・兵庫(ヒヤウコ)・軍團に屬せし者、また諸の帶仗者など。但し太宰府・三關國・內舍人(ウドネリ)は、この中に入ちぬものとせられたり。(文官に對して)**三**陸海軍の下士以上の軍人。(文官に對して)

ふくわん-かいねん 普關概念 【名】〔哲〕『英 Universal notion』正貨と兌換する保證を附せず、ただ强制通用力を付與して發行する紙幣。國家の財政窮乏の際に行ふ。(兌換紙幣に對して)

ふくわんせふ 不關渉 【名】**ふかんせふ(不干渉)**に同じ。

ふくわん-ぜん 不完全 【名】完全ならぬこと。ととのはぬこと。

ふくわんぜんきげふ 不完全企業 【名】〔經〕注文を受けたる上にて、生産に著手する企業。(完全企業に對して)

ふくわんぜんきねふほふ 不完全歸納法 【名】〔哲〕『英 Imperfect induction』歸納法の一。或種類に屬する事物の或ものに就きては、その或屬性有るを知れども、他のものに就きては、これを有するや否や明かならざるに、その種類に屬するすべての事物が、その屬性を有すと斷ずるもの。即ち類推と同意義に歸す。(完全歸納法に對して)

ふくわんぜん-くわ 不完全花 【名】〔植〕『英 Imperfect flower』萼・花冠・雄蘂・雌蘂の四部の何れかを缺ける花。例へば、薔薇(バラ)の花の、花冠を缺き、戴菊(タイギク)の花の、萼と花冠とを缺き、松の花の、萼・花冠の外、雄蘂又は雌蘂を缺ける類。(完全花に對して)

ふくわんぜん-へんたい 不完全變態 【名】〔動〕一定の順序を經ざる變態、即ち幼蟲が蛹(サナギ)となり、成蟲となる順序によら

ぬこと。例へば、蝗(イナ)の、幼蟲・成蟲の別著しからず、その間に、不動の期(即ち蛹たる期)なき類。(完全變態に對して)

ふくわら 福藁【名】 ■正月庭に敷く藁。一莖福藁や十ばかりなる供やっこ」 ■陰暦正月十五日、小豆粥(アヅキガユ)の中に團子を入れ、その團子の幾部分に、二三分に切りて入れたる藁。その藁の入りたる團子にあたれば、福ありと云ふ。「奥州の方言」

ふくゐ 復位【名】 以前の位置、又は位階にもとること。

ふくゐ 福井【名】「地」■明治初年の縣の一。初「福井・丸岡・大野・勝山・敦賀・鯖江(以上、越前國)・小濱(若狹國)の六藩を、すべて縣とし、別に、越前國丹生(ニフ)郡に本保(ホンボ)縣を置き、尋いで、福井縣を足羽(アスハ)縣と改め、六年、これを廢し、敦賀縣に合し、九年、又これを廢して、越前國七郡を石川縣に、同國敦賀郡と若狹國とを滋賀縣に屬せしめしが、十四年、又これを合して、福井縣を立つ。 ■四十三縣の一。越前國と若狹國との全部を管轄し、縣廳を越前國福井市に置く。 ■越前の國にある市。北陸道第二の都會。足羽(アスハ)川、市内を貫流す。松平氏の舊藩地。舊稱、北莊(キタノシヤウ)。

ふくゐぎり 福井桐【名】「植」**あんぺら(■)**に同じ。

ふくゐじやう 福井城【名】 越前國福井市にありし城。慶長年中、結城秀康の、舊北庄(キタノシヤウ)城の北に築造せしものにて、子孫相傳へて、明治維新に及べり。

ふくゐさくゑもん 福井作右衛門【名】「人」**ますざ(升座)**を見よ。

ふくゐぶんれい 復員令【名】 復員するための救令。

ふくゐようてい 福井榕亭【名】「人」醫家。名は需、字は光亭、又、終吉といふ。京都の人。楓亭の長子。皇室の御醫となり、醫博士兼丹波守に任ぜらる。弘化元年歿す。年九十二。當時、加茂季鷹・岸駒と共に、平安の三大老人と稱せらる。

ふくゐりやうてい 福井良平【名】「人」神道無念流劍術の祖。平右衛門と稱す。下野國の人。一圓流の劍法を學び、後、遂に一家を成す。

ふくゐ 服穢【名】 忌服にあたれるけがれ。

ふくゐ 復圓【名】「天」日蝕又は月蝕の經過したる後に、太陽又は太陰が、再びもとの圓き形となること。(初虧(ショキ)に對して)

ふくゐ 幅員・幅隕【名】ふくゑん(復員)

ふくをか 福岡【名】「地」■筑前國と筑後國との全部及び豐前國の門司(モジ)・小倉(コクラ)の二市と企救(キク)・田川・京都(ミヤコ)・筑城(チクジヤウ)の四郡とを管轄する縣。縣廳を筑前國福岡市に置く。初、明治四年筑前國の福岡・秋月、豐前國の豐津・千束(カツク)・中津、筑後國柳川(ヤナガハ)・三池(ミイケ)・久留米(クルメ)の諸藩を廢して、各、縣とし、その十一月、秋月・福岡二縣を廢して、新に福岡縣を置き、筑前全國を管せしめ、豐津・千束・中津三縣を廢して、小倉(コクラ)縣を置き、豐前全國を管せしめ、又、柳川・三池・久留米三縣を廢して、三潴(ミヅマ)縣を置き、筑後全國を管せしめしが、九年、小倉縣を福岡縣に併せ、福岡縣の宇佐・下毛二郡を大分縣に移し、三潴縣を福岡縣に併せ、以て今日に及べり。 ■筑前國にある市。九州第二の都會。北は福岡灣に臨み、那珂川と薬川と市内を貫流し、那珂川によりて、東部(博多)と西部(福岡)とに分たる。後者は黒田氏城下の地にて、縣廳・市役所・兵營等存在すれども、繁華は前者に及ばず。 ■下總國匝瑳(ソウサ)郡にある町。郡役所區裁判所、又、鐵道總武線の停車場あり。舊稱、八日市場(ヨウカイチバ)。 ■陸奥國二戸(ニノヘ)郡にある町。奥州街道に沿ひ、生絲・縮緬を産す。 ■三河國額田(ヌカタ)郡にある町。岡崎市の南一里半。舊稱、土呂(ドロ)。 ■越中國西礪波(ニシトナミ)郡にある町。高岡市より約二里半。菅笠を産す。

ふくをか-いちもんじ 福岡一文字【名】 備前國福岡の刀工則宗・助宗等の一門の鍛へたる業物。中心(ナカゴ)の銘に、一文字を切りたるよりいふ。

ふくをか-じやう 福岡城【名】 ■陸奥國二戸(ニノヘ)郡福岡町の東方にありし城。白鳥城又は九戸(クノヘ)城と稱し、天正十九年、九戸政實、これに據る。豐臣秀吉の諸將攻むるに及びて敗死し、南部信直、三戸(サンノヘ)より移り住して、福岡城と改稱し、その孫重直の時、盛岡城に移るに及び、城代これを鎮せしが、遂に廢す。 ■筑前國福岡市の西南隅にありし城。慶長五年黒田長政築造し、爾來、子孫相傳へて、明治維新に及ぶ。本丸は、今、兵營たり。

ふくをか-たかちか 福岡孝弟【名】「人」政治家。舊高知藩士孝順の子。通稱は藤次。明治維新の際、小松帶刀(タテハキ)、後藤象次郎と共に將軍慶喜に二條城に謁して、大政奉還を勸告し、明治政府に仕へて、參與となり、五條の御誓文を起草すといふ。諸官を經、明治十四年參議兼文部卿に任じ、十六年參事院議長に轉じ、十七年子爵に叙せられ、二十一年以來樞密顧問たり。大正八年薨ず。年八十五。

ふくをか-わん 福岡灣【名】「地」**はかたわん(博多灣)**に同じ。

ふけ 雲脂・頭垢・頭花【名】 頭髪の根に生ずる白き垢。いろこ。うろこ。**ひからしん(粃糠疹)・ひしろう(皮脂漏)**參照。

ふけ 深【名】 ■物事の深くなること。「古語」千載「はかなくもわが世のふけを知らずしていざよふ月を待ちわたるかな」 ■**ふけだ(深田)**の略。「古語」

ふけ 普化【名】「人」支那唐代の禪僧。鄉貫詳かならず。盤山の寶積(ホウシヤク)に事へて、眞訣を受け、鎭州(今の直隸省正定府)に居り、佯狂して、言行常軌なく、唯一鈴を振ひて行化(ギヤウケ)し、懿宗の感通の初、自ら棺に入りて、寂を示すに、衆人、その全身を見ず、鈴聲の漸く遠きを聞くのみといふ。我國の普化宗は、これを開祖とす。

ふけ 深「接頭」ふか(深)に同じ。「深田(フカタ)」「深野(フカヌ)」

ぶけ 武家【名】 ■武士の家すぢ。 ■武人、即ち將軍・大小名、及びその家人(ケニン)。(公家(クゲ)に對して)「鎌倉時代以後の語」太平記「天下久しく武家の一統となりて」

武家四門【句】「武藝四門」に同じ。

武家の長者(チヤウジヤ)【句】 次條に同じ。

武家の棟梁【句】 武家の頭たる人、即ち、鎌倉時代以後の征夷大將軍。梅松論「天下の將軍、武家の棟梁にて」

ふけい 父兄【名】 ■父と兄と。 ■年長者。(子弟に對して)

ふけい 父型【名】じふ(字母)に同じ。

ふけい 父系【名】『獨 Vaterfolge』子が、父方の姓氏を追ふこと。(母系に對して)

ふけい 婿兄【名】 妻の實兄。和名「婿兄。辨色立成云、婿兄婿之兄也」

ふけい 符契【名】わりふ(割符)に同じ。符契を合はす【句】次條の略。正統記

「高時を始として、多くの一族、皆自滅してければ、鎌倉、又平ぎぬ。符契を合はするが如し【句】「符節(フセツ)る合はするが如し」に同じ。

ふけい 浮磬【名】うちならし(磬)に同じ。

ふけい 楚花「梵鐘・浮磬・賓蓋」

ふけい 腐刑【名】『腐臭なる故とも、生殖の道を絶つこと、腐木の實を結ばざるがごとくすとの義ともいふ』をゆういい(宮刑)に同じ。

ふけい 鳧脛【名】鴨のはぎ。「鴨の脛(モ)」参照。

ふけい 不敬【名】敬はぬこと。失禮。無禮。

ふけい 不穡【名】『穡(カラ)へぬ義』むけい(無穡)に同じ。「荒唐不穡」

ふけい 不經【名】常道を用ひざること。正しき道を外ること。「じ。

ふけい 府卿【名】たいふけい(大府卿)に同

ふけい 負荊【名】『史記の廉頗藺相如傳に「廉頗肉袒負レ荊、至二門謝一レ罪」とあり。悔いて、自ら身を撃ち責むる意を示すために、背に鞭を負ふ義』罪を謝すること。太平記「臣罪雖二誠重一、天恩不レ過レ往、負荊下被レ免二其咎一」

ふけい 譜系【名】けいふ(系譜)に同じ。

ぶげい 武藝【名】武道に關する藝術、即ち弓・槍・馬・劍・拳法・銃砲等の術。盛衰記「成親、させる武藝の器(ウツワ)に非ず」

武藝十四事【句】武藝の十四種、射(ユミ)・騎(ウマ)・棒(ボウ)・刀(カタナ)・抜刀(ヌキガタナ)・撃劍(ケンジュツ)・眉尖刀(ナギナタ)・鎌(カマ)・槍(ヤリ)・鳥銃(テッポウ)・發煙(ノロシ)・火箭(ヤ)・捕縛(トリテ)・拳(ハダカ)の總稱。

武藝四門【句】武藝の四種、弓・鐵炮・兵法(劍・槍)・馬の總稱。武家四門。

ふけいき 不景氣【名】一景氣のよからぬこと。繁昌せぬこと。さびれ。八笑人「ああ、うるせえぞ。氣儘にしておけば、あんまり不景氣な酒呑ばかり並べ立てる」二心の浮き立たぬこと。淋しく無氣味(ブキミ)なること。和合人「不景氣な、をかしな家(ウチ)だぜ」同「あんまりきよろきよろしなさんな。ふけいきな」

ふけいきかぜ 不景氣風【名】一般に亙りて、不景氣になりゆくを、風の吹くに譬へていふ語。「不景氣風が吹きすさぶ」

ふけいきしらず 不景氣不知【名】一世の中の不景氣を感ぜずに、生活すること。二常によく實れゆくこと。

ふけいくわい 父兄會【名】次條に同じ。

ふけいこんわくわい 父兄懇話會【名】小學校にて、學校と家庭との連絡を圖るために、時時、生徒の父兄を呼び集めて催す會合。

ふけいざい 不經濟【名】理財の道にそむくこと。節儉ならざること。

ふけいざい 不敬罪【名】〔法〕皇室(即ち天皇・三皇・皇太子・皇族及び神宮・皇陵)に對して、不敬の行爲をなしたる罪。

ぶげいしちしよ 武經七書【名】〔書〕しちしよ(七書)に同じ。

ぶげいしや 武藝者【名】武藝修業の人、又は武藝に秀でたる人。

ふけいぞく 不繼續【名】繼續せざること。つづけざること。

ふけいぞくちえき 不繼續地役【名】〔法〕『英 Discontinuous servitude』それを行使する都度、地役權者の行爲を要する地役。例へば、汲水權・通行權などの類。不繼續地役權。(繼續地役に對して)

ふけいぞくちえきけん 不繼續地役權【名】〔法〕前條に同じ。(繼續地役權に對して)

ふけいやく 賦形藥【名】〔醫〕『獨 Gestaltgebendes Mittel』調劑せる藥劑中に含めて、これに形態を賦與するに用ふる藥品。例へば、水藥に於ける水、坐藥に於けるカカオ、軟膏に於ける豚脂の類。成形藥。

ふけう 不孝【名】一ふかう(不孝)に同じ。【古語】空穗「汝ふけうの子ならば、親に長き歎あらせよ」二不孝者として勘當すること。一說に、ふきよう(不興)に同じ。【古語】保元「身に添へて都に置きなば、惡しかりなんとて、父不孝して」

ふけう 布敎【名】敎法を流布(ルフ)せしむること。敎をひろむること。「じ。

ふけう 浮橋【名】うきはし(浮橋)二に同

ぶけう 武敎【名】武士のしつけ。

ぶけうかうろく 武敎講錄【名】〔書〕武敎小學を講義せるもの。二卷。吉田松陰の著。

ぶけうくわん 奉敎官【名】〔佛〕たいざんわう(泰山王)に同じ。「僧侶。

ふけうし 布敎師【名】布敎に從事する

ふけうしや 布敎者【名】布敎をなす人。

ぶけうせうがく 武敎小學【名】〔書〕武士の日常遵守すべき所を、夙起夜寐・無居・言語應對・行住坐臥・衣食居・財寶器物・飲食色欲・放鷹狩獵・與受・子孫敎戒の十章に分ちて說けるもの。一卷。山鹿素行の著。

ぶけうぜんしよ 武敎全書【名】〔書〕山鹿素行の、自家の兵法を論述せるもの。十卷。もと十一卷、その第十卷、逸して傳はらず。

ふけうる 不孝流【名】ふかうる(不孝流)に同じ。

ぶけえぼし 武家烏帽子【名】一さぶらひえぼし(侍烏帽子)に同じ。二紋所の一。侍烏帽子の如き形に描けるもの。

ぶけかた 武家方【名】武家の人人。武家。(公家(クゲ)方に對して)八笑人「人は武士なぜ傾城にいやがられと川柳があるけれど、女は武家方の事だ。どうもさっぱりしていい」

ふけき 普化忌【名】普化宗にて、六月十

ふけき 巫覡【名】女のかんなぎと、男のかんなぎと。みこ。太平記「巫覡祈れども驗なし、醫師治すれども癒えず」

ぶけぎりものがたり 武家義理物語【名】〔書〕武道傳來記と同樣に、武士の道義的觀念を中心としたる小話二十六篇を記せるもの。六卷。井原西鶴の著。

ぶけこじつ 武家故實【名】武家に關する故實。(公家故實に對して)

ふけし 鳳至【名】〔地〕能登國四郡の一。郡役所を輪島町に置く。

ぶけし 武家史【名】武家時代の歷史。(王政史に對して)

ふけしさんみやく 鳳至山脈【名】〔地〕のさんみやく(能登山脈)に同じ。

ぶけじだい 武家時代【名】後鳥羽天皇の建久三年源賴朝の征夷大將軍となりて、天下の政權を握りしより、足利綾昭・豐臣などの諸氏を經て、德川氏の慶應三年大政を返上せしまで、すべて、武の家政權を執りたる時代。(王朝時代に對して)

ふけしゆう 普化宗【名】〔佛〕禪家の分派。具さには、普化禪宗。文明の頃、普化禪師朗誦の弘めしもの。達磨和尙と支那唐代の普化禪師とを祖師と仰ぎ、殊に後者の鈴鐸に倣ひ、常に尺八を吹きて、四方を巡行し、その門徒を虛無僧(コムソ)といふ。德川時代には、罪を犯せる武人、この宗門に投ずれば、身を全うすることを許さる。明治四年朝廷これが廢止を令し、後、虛無僧の舊儀のみを殘して、臨濟宗東福寺派に隸せしむ。ふけ(普化)・こむそう(虛無僧)參照。

ふけしゆうもん 普化宗門【名】〔佛〕前條に同じ。

ぶけしよはっと 武家諸法度【名】德川幕府が諸侯に下したる制令。文武・弓馬の道を勵み、群飮・佚遊を禁じ、居城・修繕の場合にも許可を受くるを要し、又、新築は禁止し、命を待たずして、兵を隣國に出し、私に婚姻すべからず、參覲の作法を守るべきこと等を定む。慶長二十年、二代將軍秀忠の時の制定に係り、家康の裁可を經て發布し、後、數回の補修を經て、二十四條に達せしこともあり。

ふけぜんじ 普化禪師【名】〔人〕一ふけ(普化)を見よ。二ふけしゆう(普化宗)を見よ。

ふけぜんしゆう 普化禪宗【名】〔佛〕ふけしゆう(普化宗)に同じ。

ふけそう 普化僧【名】『普化宗の僧侶の義』こむそう(虛無僧)に同じ。

ぶけそだち 武家育【名】武家に生れて、生長したること。八笑人「まづ武家育に、こっちが武士の忍出立(デタチ)」

ふけだ 深田【名】ふかだ(深田)に同じ。〔古語〕太平記「唐崎の濱と申すは、……西は深田にて、馬の足も立たず」

ふけつ 不潔【名】清潔ならぬこと。きたなくして、穢らはしきこと。

ふーげつ 風月【名】『ふは風の字の呉音』ふうげつ(風月)に同じ。謡曲(籠祇王)「風月・延年の遊樂(ガク)も」

ふけつ-おん 不蝎音【名】〔佛〕八音の一。語義の盡きざること。

ぶけづくり 武家造【名】〔建〕住宅建築の一様式。鎌倉時代以後、寢殿造に次いで、武家の邸宅に用ひしもの。外構を鰭板(ヒタタレ)又は築地(ツイヂ)にて圍み、上土門(ツチミカド)又は棟門(ムナカド)を設け、門を入りて、右に遠侍、正面に玄關あり、左に廣き緣を取り、緣の後を主殿となし、直角形の廣間を四室に分ち、その左奥の一室に床棚を設け、書院を附け、建具には、寢殿造の蔀(シトミ)戸・唐戸に代ふるに、舞良戸(マヒラド)・明(アカ)り障子等を用ひ、屋根も、板葺又は草葺とし、室町・桃山の兩時代にも、書院造と併用せしが如し。主殿造。「こと。

(ふけとり)

ふけっくわ 不結果【名】結果のわるきこと。

ぶけ-づとめ 武家勤【名】ぶけほうこう(武家奉公)に同じ。

ぶけ-でんそう 武家傳奏【名】室町時代及び江戸時代の職制の一。武家の奏請を傳奏せしもの。室町時代には、公卿中より選定し、江戸時代にも、これに倣ひ、納言・參議の中より、辯舌・文筆に達せる者二人を、幕府の命によりて補任し、兩傳奏と稱したり。武傳。

ふけ-どの 富家殿【名】〔人〕ふぢはらただざね(藤原忠實)に同じ。

ふけ-とり 雲脂取・頭垢取・頭花取【名】頭髪(主に男子)の根に生ずる頭垢(フケ)を取り落すに用ふる具。多くは竹材にて作る。

ふけ-ぬ 深野【名】ふかの(深野)に同じ。〔古語〕萬葉「たまきはるうちの大野に馬並(ナラ)めて朝踏ますらんその草ふけぬ」

ふけ-ばひ 化灰【名】〔化〕『ふく(化く)』を見よ。

ふけひ-がた 吹飯潟【名】〔地〕次條に同じ。雅保百首「いたづらにわがよの秋もふけひがた袖なる月もかたぶきにけり」

ふけひ-の-うら 吹飯浦・深日浦・深井浦【名】〔地〕ふきあげのはま(吹上濱)に同じ。

ぶけ-ふう 武家風【名】武家の風習。やしきふう。やかたふう。

ふけふぎくわい 府協議會【名】朝鮮の各道の府に置き、府の事務に關して協議する機關。府尹及び協議會員を以て組織す。

ふけふぎくわい-いん 府協議會員【名】府尹と共に府協議會を組織する會員。府の住民中より任命する名譽職。

ぶけ-ほうこう 武家奉公【名】武家屋敷に奉公すること。ぶけづとめ。やかた奉公。やしき奉公。やしきづとめ。

ぶけ-ほうこうがまへ 武家奉公構【名】德川幕府時代に、武家に奉公せる者に課し、その再び奉公するを許さざりし刑罰。

ふけまち 更待・深待【名】寢待(ネマチ)の次の夜、卽ち陰曆二十日の夜。

ふけまち-づき 更待月・深待月【名】更待の夜の月。陰曆二十日の夜の月。

ぶけまど 武家窓・武家窻【名】むしやまど(武者窓)に同じ。

ぶけ-みやうもく-せう 武家名目抄【名】〔書〕鎌倉時代以來の武家に關する官職・裝束・制度等のあらゆる名目を、古書舊記より類聚せるもの。幕命によりて、塙保己一の史料蒐集編纂の序に、編纂す。卷數凡そ七百なりし由なれど、現今、故實叢書に收めたるは、三百八十一册を四十卷に分てり。

ふけん 夫權【名】〔法〕夫が、妻に對して、その夫たる身分上より有する權利。許可權・同居請求權等の總稱。

ふけん 府縣【名】府と縣と。

ふけん 符驗【名】きめ。しるし。

ふけん 負暄【名】ひなたぼっこ(日向ぼっこ)に同じ。

ふけん 普建【名】〔人〕ふだいし(傅大士)を見よ。『せうせきくわい(消石灰)に同じ。

ふげん 富源【名】富の生ずるもと。生産の根源。鑛山・森林・農牧・漁獵など。

ふげん 附言【名】つけたしの言。つけくはへの語。附語。

ふげん 浮言【名】無根の流言。根のなきうはさ。浮說。流言。浮辭。

ふげん 婦言【名】婦女子の言語。

ふげん 誣言【名】事實を矯めたることば。ねなしごと。讒誣。諢說。

ふげん 不言【名】口に出していはぬこと。ものいはぬこと。

不言の花【句】『支那の古諺「桃李不言、下自成蹊」(史記の李廣傳に出づ)に本づく』桃の花の異稱。

不言の敎【句】『老子の第二章及び第四十三章に見ゆ。無爲自然を、その敎旨とするよりいふ』老莊の敎。

ふげん 普賢【名】〔佛〕**ふげんぼさつ**(普賢菩薩)を見よ。

普賢の願海【句】〔佛〕『華嚴經の卷一に「恆以二所得普賢願海一、令二一切衆生智身具足一」とあり』「普賢の十願」に同じ。衆花「萬德の尊容を守り、一實の道を聞きて、普堅の願海に入る」

普賢の色身(シキシン)【句】〔佛〕**ふげんしきしん**(普賢色身)を見よ。

普賢の十願【句】〔佛〕『四十華嚴經の普賢行願品に出づ』普賢菩薩の具したる十種の大願。一に諸佛を敬禮すること、二に如來を稱讚すること、三に廣く供養を修すること、四に業障(ゴフシヤウ)を懺悔すること、五に功能を隨喜すること、六に法輪を轉ぜんことを請ふこと、七に佛の世に住(ヂウ)まらんことを請ふこと、八に常に佛に隨ひて學ぶこと、九に恆に衆生に順ふこと、十に普く皆廻向(エカウ)すること。

ふーげん 普現【名】〔佛〕**ふげんしきしん**(普現色身)の略。盛衰記「大悲・普現の觀自在」

ふーげん 不限【名】〔佛〕修行する閻暇の有らざる境界。(閻(ゲン)に對して)

ふーげん 分間【名】地圖の畫き方の一。都邑・社寺などの各要所と、その間の里程とを記入したるもの。「俳諧の言語。

ぶげん 侮言【名】あなどりていふ言葉。

ぶげん 分限【名】一ぶんげん(分限)[三]に同じ。二かねもち。有德(ウトク)。富豪。醒睡笑「不辨・分限をまで、いかにして知られたるぞ」

ふげん-えんみやう 普賢延命【名】〔佛〕次條の略。盛衰記「大法・秘法、數を盡されけり。五大虛空藏・六觀音・一字金輪(ロン)・五壇の法・六字訶梨帝(カリテイ)・八字文殊(モンジュ)・普賢延命・大熾盛光(ウクワウ)等に至るまで、殘る所なし」

普賢延命の護摩【句】〔佛〕次條に同じ。

ふげんえんみやう-ほふ 普賢延命法【名】〔佛〕普賢菩薩に延命の德ありとて、これを本尊として、延命を祈禱する法。增鏡「大法・祕法、殘なく行はる。七佛藥師・五壇の御修法(ミヅホフ)・普賢延命・金剛童子・如法愛染など、すべて數知らず」

ふげん-か 普賢蹦【名】〔佛〕**ふげんざ**(普賢坐)に同じ。

ふーげんかう 不健康【名】健康ならざること、又、健康に有害なること。

ふげんかう-じやう 不健康狀【名】『英Foul bill』船舶の入港地が疫癘等により、不健康の狀態にある時、その地に於ける領事又は港長等より、その旨を記して、船長に交付する書狀。

ふげんきやう 普賢經【名】〔書〕ふっせつくわんふげんぼさつぎやうほふきやう(佛說觀普賢菩薩行法經)の略。衆花「無量壽經よりはじめて、普賢經に至るまで」

ふげん-ぎやう 普賢行【名】〔佛〕普賢の十願を修行すること。

ふげんぎやうせい 府縣行政【名】府行政と縣行政との併稱。

ふげん-くわい 府縣會【名】府會と縣會

ふげん-ぐわんかい 普賢願海【名】〔佛〕「普賢の願海」に同じ。

ふげんくわんぎやう 普賢觀經【名】〔書〕

ふげんきやう(普賢經)に同じ。

ふげん-こう 普賢講【名】〔佛〕普賢經を讀誦(トクジュ)して、普賢菩薩の功德を讃する法會。法華經の普賢菩薩勸發品(ソクゲンボサツホンサツホンク)に、法華三昧の道場に普賢菩薩の示現する由見えたるにより、法華三昧堂にて行ふを常とす。榮花「今日は十四日なれば、三昧堂には、普賢講行はせたまふを」

ふげん-ざ 普賢坐【名】〔佛〕**はんかふざ**(半跏趺坐)に同じ。一說に、半跏趺坐より一層簡略なるものと。「の併稱。

ふげん-さい 府縣債【名】府債と縣債と

ふげん-さいばんしよ 府縣裁判所【名】明治五年、各府縣に一箇所づつ置かれ、その府縣に於ける區裁判所の判決に對する上訴、及び區裁判所に屬せざる事件を審判せし司法裁判所。同九年廢せられたり。

ふげんさいばんしよちやう 府縣裁判所長【名】府縣裁判所の長。司法卿の指揮を承け、府縣裁判所一切の事務を便宜處分し、聽訟・斷獄を總提し、各課の判事・解部(トキ)に各事件を課付せし職。

ふげんざう 普賢象【名】〔植〕普賢薩埵菩乘れる白き象。

ふげんざう-ざくら 普賢象櫻【名】〔植〕次條の略。

ふげんざくら 普賢櫻【名】〔植〕『普賢菩薩の乘れる象に譬へていふ。卽ち鼻(花)より蘂(葉)出づといふ義』櫻の一品種。花梗長く垂れ、五六の花一處に密著し、瓣は縮みたるが如く、蕊は變化して、葉となりて生ずるもの。ふげんざう。普賢象櫻。

ふげん-さった 普賢薩陀【名】〔佛〕**ふげんぼさつ**(普賢菩薩)に同じ。

ふげん-さんじくわい 府縣參事會【名】府參事會と縣參事會と。

ふげん-じ 普賢寺【名】朝鮮慶安北道寧邊郡妙高山麓にある古寺。高麗の末期に建てたる塔あり。

ふげん-しき 不見識【名】見識の低きこと。

ふげん-しきしん 普賢色身【名】〔佛〕次條の誤。榮花「普賢色身無邊にして、六道自在無量にして」

ふげん-しきしん 普現色身【名】〔佛〕佛・菩薩が、衆生を濟度せんがために、普く種種の身を示現すること。例へば、觀音菩薩が三十三身を現ずる類。

ふげん-じふぐわん 普賢十願【名】〔佛〕「普賢の十願」に同じ。

ふげんじ-もとみち 普賢寺基通【名】〔人〕**ふぢはらもとみち**(藤原基通)に同じ。

ふげん-しや 府縣社【名】府社と縣社と。

ふげん-じや 分限者【名】富みたる人。ぶげんもの。**よいしゆ**(好衆)參照。

ふげん-すゐさんかうしふじよ 府縣水產講習所【名】府縣にて、一箇所を設立し、水產物の漁撈・製造・蕃殖等に必要なる講習をなさしむる所。

ふげん-すゐさんしけんぢやう 府縣水產試驗場【名】府縣にて一箇所を設立し、水產物の漁撈・製造・養殖等に關する事項に就きて試驗を行ふ所。

ふげん-せい 府縣制【名】府縣の行政、卽ち府縣會と府縣參事會との組織・權限等に關する事項を規定したるもの。

ふげん-ぜい 府縣稅【名】府稅と縣稅との併稱。

ふげん-だいし 普賢大士【名】〔佛〕**ふげんぼさつ**(普賢菩薩)に同じ。

ふげん-ぢじ 府縣知事【名】府知事と縣知事との併稱。「との併稱。

ふげん-ちやう 府縣廳【名】府廳と縣廳

ふげん-てん 不還天【名】〔佛〕**じやうごてん**(淨居天)に同じ。

ふげん-のうくわい 府縣農會【名】農會の一。府縣の區域内に於ける、郡農會及び市農會を以て組織するもの。

ふげん-のうじかうしふじよ 府縣農事講習所【名】明治四十一年まで、府縣に設立し、農事に關する講習をなせし所。

ふげん-のうじしけんぢやう 府縣農事試驗場【名】明治四十一年まで、府縣にて設立し、農產の增殖・改良に關する事項に就きて、試驗を行ひし所。

ふげん-べつ 府縣別【名】全國を、府と縣との區劃に從ひて別つこと。

ふげん-ぼさつ 普賢菩薩【名】〔佛〕次條に同じ。源氏「うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢ぼさつの乘物と覺ゆ」

ふげん-ぼさつ 普賢菩薩【名】〔佛〕『梵Samantabhadra(三曼多跋陀羅・三曼多跋娜羅)の譯語。三曼多は普、跋陀羅は賢の義。衆生に應じて、敎化(ケウケ)するより、普といひ、その德、聖人(シヤウニン)に亞ぐとて、賢といふ』菩薩の一。阿彌陀如來因位の時の第八子にて、その第三子文殊(モンジユ)菩薩と共に、理と智、行(ギヤウ)と證と、又三昧と般若(ハンニヤ)との一雙一類の代表者たりといふ。又、釋迦如來の脇士として、この菩薩は白象に乘じて、右方に、文殊は獅子に駕して、左方に侍し、兩者の德の相卽完備せるもの、卽ち毘盧舍那(ビルシヤナ)法身佛なりといふ。その白象に乘ぜる姿に表現するも、三昧の力の能く諸行(シヨギヤウ)を攝取すること、まさに白象の柔軟(ニウナン)にして、しかもよく事に耐ふるがごとくなるべき意を寓せるなり。

(つさぼんげふ)

ふげんぼさつ-ぎやうぐわんさん 普賢菩薩行願讃【名】〔書〕**ふげんきやう**(普賢經)に同じ。

ふげんめんきよじやう 府縣免許狀【名】大正二年七月十五日以前、小學校敎員の免許狀の、府縣知事より授與せられて、その府縣内にてのみ任用せらるることを得しもの。(普通免許狀に對して)

ぶげん-もの 分限者【名】**ぶげんじや**(分限者)に同じ。「に同じ。

ふげん-らく 不言樂【名】**さりのまひ**(鳥舞)

ふげん-れい 府縣令【名】府令と縣令との併稱。

ふげん-ねん 府縣委員【名】府縣にて、府縣會の議決を經、內務大臣の許可を受けて設置し、府・縣知事の指揮・監督の下に、府縣の財產若しくは營造物を管理し、その他の行政事務の一部を調査し、又はその委託事務を處辨せしむる委員。名譽職とす。

ぶげん-もんぜき 武家門跡【名】武家の出家して、門主となれる門跡。

ぶげやく 武家役【名】室町幕府にて、每年、地頭・家人(ケニン)の所領に、その石高に應じて課せし稅。ぶやく。太平記「近年、日本國の地頭・御家人の領に、五十分の一の武家役を每年懸けられけるを」

ぶげ-やしき 武家屋敷【名】昔、武士の、主君より賜はりて住みし屋敷。やしき。

ふげらかす 【動四他】自慢がほに示す。てらふ。ひけらかす。「古語」保憲女集「しをるらん草木にたぐふ魂の心を風やふけらかしつる」

ふけり 分計【名】指物(サシモノ)の一。

ふける 耽る【動四自】深入す。たのしみにおぼる。はまる。

ふける 【動四自】逃げて深く隱る。春花五大力「もうし三五兵衞さん。ここにゐられませぬ。早くふけった」娼妓絹籬「おれをせき、手前に氣を揉ませたかはり、あいつがおちどになるやうに、釵(カンザシ)からふけるがいい」

ぶけ-わらい 武家往來【名】〔書〕往來物の一。源平盛衰記・太平記の中より詔勅・神佛への願文・武士の奏表・檄文等を抜きあつめたるもの。三卷。寬文十年菱眞子の序を附して刊行す。

ふこ 封戶【名】古、親王・內親王・諸王・諸臣に、その位階・官職・勳功に應じ、等級を定めて賜ひし戶口。但し、その戶口より納むる田租の半と調・庸の全部とを給せられしものにて、その制、太上天皇は二千戶、三宮は千五百戶、親王一品は八百戶、以下次第に減じて、無品は百十五戶、內親

王はその半、正一位二百二十五戸より従三位七十五戸、又、太政大臣左右大臣千五百戸、内大臣八百戸より参議六十戸に至る。食封(ジキ)。御封(ゴ)。

ふーこ 府庫 【名】財物を藏めおくくら。

ふーこ 巫蠱 【名】巫(ミコ)と、まじなひ師と。

ふーこ 不辜 【名】罪のなきこと、又その人。無辜。

ふーこ 浮誇 【名】**ふくわ**(浮誇)の誤讀。

ふーご 畚 【名】『深(カ)籠(ゴ)の略といふ』竹・藁又は繩にて、小く深く造り、四隅に繩の紐を附け、農家などにて、物を入れて運ぶに用ふる籠。形、種種あり。もっこ。拾玉「さわらびのをりにしなれば賤の女がふご手にかくる野べの夕ぐれ」

(ふご)

ふご 封戸 【名】【地】淀川の渡口中の一。一口(イモアイ)・大渡(オホワタリ)と共に、最も史上に名あり。今の山城國久世郡佐山村字津屋にあたる。

ふーご 不語 【名】ものいはぬこと。默して居ること。不言・不語」

ふーご 附語 【名】**ふげん**(附言)に同じ。

ふーご 誣語 【名】**ぶげん**(誣言)に同じ。

ふーご 覆護 【名】**ふうご**(覆護)に同じ。

ぶーこ 武庫 【名】一**むこ**(兵庫)に同じ。二『晉書の杜預傳に「杜預爲二荊書一、撰二益・萬機一、不レ可二勝數一。朝野稱美、號曰二杜武庫一。言二其無一所レ不レ有」とあり』博學なる人の異稱。

ぶご 豐後 【名】【地】**ぶんご**(豐後)の古稱。

ぶご 豐穣「ぶごの介(スケ)」のまな娘」

ぶーご 部伍 【名】隊列を組に分くること。

ふーこう 婦功 【名】女子の仕事。女功。

ふーこう 賦貢 【名】**こうふ**(貢賦)に同じ。

ふーこう 武功 【名】武事の功績。いくさの手柄。 勢衣「武功の人に出あはすれば、思の外のあやまちを蒙る」

ぶーこう 無功・不功 【名】物事に經驗を積みてあらざること。習熟せざること。

ぶーこう 武后 【名】【人】**そくてんぶこう**(則天武后)に同じ。

ふーこうへい 不公平 【名】公平ならざること。かたておち。偏頗。

ぶごーおん 不誤音 【名】【佛】佛の入音の一。明らかにして、誤なきもの。

ふご-おろし 畚卸 【名】山城國の鞍馬の初寅參(ハツトラ)の日に、參詣者のために、その土地の者の行ふわざ。谷を挾みて、一方の崖より對岸へ綱を引き渡し、その綱に畚を吊して、參詣の者、錢を畚に入るれば、此方へ引き寄せて、價に相當せる燧石を畚に入れて、彼方へ戻すこと。 其角「初寅。花咲かば告げよ尾の上の畚卸」

ふーこく 布告 【名】一あまねく告ぐること。公布。【普告】二【法】政府より、國民に、あまねく命令を傳ふること。例へば、法律・命令は、官報を以て布告する類。三【法】明治十九年勅令第一號公文式の制定以前に、國家が發せし命令。例へば、太政官布告の類。**ふたつ**(布達)三參照。

ふーこく 腐刻 【名】『英 Etching』藥劑を用ひて、金屬・硝子などに彫刻を施すこと。例へば、弗化水素を以て、硝子管などに度盛を刻む類。

ふーこく 富國 【名】國を富ましむること。富國强兵 【句】國の財を富まし、兵の力を强くすること。富强。

ふーこく 普國 【名】【地】**ぷろしや**(普魯西亞)に同じ。 「同じ。

ふーこく 布穀 【名】【動】**くわっこう**(郭公)に

ふーこく 訃告 【名】訃を告ぐること。死去せることを告げ知らすること。

ふーこく 不告 【名】告げざること。

不告不理 【句】【法】告訴・告發無ければ、罪を審理せざること。

ふーこく 不穀 【代】『穀は善の義。自己を不善なりとしていふ』古、支那の諸侯の第一人稱の謙稱。

ぶーこく 誣告 【名】一無き惡事を、有るがごとくに、他に告ぐること。二【法】他人の犯罪に關して、不實の告訴又は告發をなすこと。

ぶこくーざい 誣告罪 【名】【法】『獨 Falsche Anschuldigung. 誣の字の音、正しくはぶ』人に刑事又は懲戒の處分を受けさせんため、虛僞の事實を檢事又は司法警察官に申告するによりて成立する犯罪。

ぶこくーしゃ 誣告者 【名】誣告する人。誣告したる人。

ぶこくーはんにん 誣告犯人 【名】誣告罪を犯したる人。誣告罪の犯人。

ふーこころえ 不心得 【名】心得のよからぬこと。たしなみの惡きこと。

ふーこころがけ 不心懸・不心掛 【名】心懸の善からざること。不斷の用意の足らざること。ふたしなみ。

ぶこーし 武庫司 【名】兵部(ヒヤウブ)省の管下に在りて、兵器の保存・出納を掌りし司。明治二年設置せられ、初、正・權の正(カミ)・佑(ジョウ)・令史(サクワン)・使部の職員あり。後、佑及び令史を大・少に分ちて、使部を廢し、同四年權正及び佑を廢して、令史を正・權の大・中・少に分つ。同五年兵部省廢せられて、陸軍省及び海軍省の置かるるに及び、陸軍省にては、その管下に、武庫司を置き、海軍省にては、造船局に、武庫掛を置きて、その事務を掌らしめ、後、廢して、武庫司を置き、同八年、何れも廢止せり。

ぶこーしょ 布護署 【名】**はやさのつかさ**(隼人司)の唐名。

ぶこーしょ 武庫署 【名】一支那唐代の役所、令・丞・監事の職員ありて、天下の兵杖・器械を藏し、その名數を辨じ、以て國用に備ふる事を掌りき。二**ひやうごれう**(兵庫寮)の唐名。

ふごーじり 畚臀 【名】畚の如き形したる臀。 日本振袖始「畚臀に鰐足、步振(アルキ)は家鴨(アヒ)の所知入(イリヨサ)」 「異稱。

ふごーせん 不語仙 【名】**れんげ**(蓮華)三の

ふこつ 腐骨 【名】一腐りたる骨。二【醫】腐骨疽に罹りて壞死し、他部より分離したる骨片。腐骨片。

ふこつ 跗骨 【名】【醫】下腿の前下端に接して、足根を構成する骨。距骨・跟骨・舟狀骨、第一より第三に至る楔骨及び骰子(ソク)骨の七箇より成り、距骨と下腿骨との間は、足關節を作り、楔骨と骰子骨とは、蹠骨に連なりて、跗骨蹠骨關節を作る。

ぶーこつ 無骨・武骨 【名】一『ごちなし(骨無し)を無骨と記して、晉讀せるもの』禮儀を知らぬこと。ぶさはふ。ぶいき。不風流。平治「その興をさましまゐらせんも無骨なれば」 平家「立居の振舞の無骨さ」二都合よからぬこと。場合の惡きこと。 鹿蓑記「御前の無骨なりとはいかでか知るべきなれば、聞し召し入れざるにこそと心得て」 同「告げたまはぬも様(ヤウ)あらん。六波羅近き家なれば、無骨なり」

ふこつ-そ 腐骨疽 【名】【醫】『獨 Nekrose (or Knochle』骨の腐る病。原因の、炎症に在ると外傷に在るとあり。骨壞疽(エソ)。骨疽。

ぶこつ-にん 無骨人・武骨人 【名】性行の無骨なる人。 貫古紋信七葉集「汝們(ナンヂ)ごとき武骨人に、この首は惜しけれど」

ふこつ-へん 腐骨片 【名】【醫】**ふこつ**(腐骨)三に同じ。

ぶこつ-もの 無骨者・武骨者 【名】**ぶこつにん**(無骨人)に同じ。

ふこ-でん 封戸田 【名】太上天皇又は神社などの封戸に當てられし田地。

ぶこーのーかみ 武庫正 【名】武庫司の長官。正一權あり。共に勅任にして、明治二年設置せられ、權官は同四年廢せられ、正官は、同八年武庫司と共に廢せられたり。

ぶこーのーごんのかみ 武庫權正 【名】武庫正の權官。前條參照。

ふこのーのーいけ 深野池 【名】【地】河内國中河内郡住道(スミノダウ)村の北より北河内郡寢屋川(ネヤガハ)村の邊に渉りて存せし池。大和川の、もと大阪城の北にて、淀川と合して、大阪灣に注ぎし頃、河口雍塞のため、北河内の諸水の集まりて生ぜしものにて、元祿年間、大和川の、攝津・和泉の境界方面に疏通せらるるに及び、池址、すべて良田と化したり。 「事」を見よ。

ふーごんちじ 府權知事 【名】**ふちじ**(府知事)を見よ。

ふーごんてんじ 府權典事 【名】**ふてんじ**(府典事)を見よ。

の、麻穀を播殖せしため、好麻を生ぜし地なるによりていふ』上總國と下總國との、未だ上下に分れざりし時の名稱。

ふさ 普茶【名】ふちや(普茶)に同じ。

ふさ 輔佐【名】一ほさ(輔佐)に同じ。二**くわんぱく**(關白)三の異稱。下學集「關白、クワンバク。執柄、又、輔佐」

ふさ 布佐【名】〔地〕下總國東葛飾(ツヒガシカ)郡にある町。利根(ネ)川の南岸。成田鐵道の一驛。

ふさ 多【副】**ふさに**(多)にに同じ。〔古語〕萬葉「いめたててとみの岡邊のなでしこの花ふさたをりわれはもていなむ奈良人のため」

ふーざ 趺坐【名】〔佛〕あぐらをかくこと。

ぶーさ 奉射歩射【名】**ぶしや**(奉射)の約。

ぶさ【名】次條を見よ。

ぶさを打つ【句】『ぶさは不作法の略なりといふ』不義理の借金をなす。金金先生榮花夢「物前にぶさを打たぬやうに精出したがよいぞや」新版歌祭文「久しう行かぬ馬場前の田中屋へ行からか。あ、いやいや、彼奴(キヤツ)の所は、ぶさ打ってある」

ぶーざ 武左【名】**ぶざゑもん**(武左衛門)の略。**ぶざをやく**(武左爺)參照。〔江戸の遊里の語〕

ふーさい 夫妻【名】**ふうふ**(夫婦)に同じ。平家「中にも、夫妻は、一夜の枕を並ぶるも、五百生の宿緣と承れば」【句】「夫婦は二世の契(チギ)に同じ。〔諺語〕曾我「夫妻は二世の契とは申せども、今、佐殿(スケ)の妹背の中こそ、ぬしを替へずして、二世の契と申すべし」

ふさ 府債【名】地方債の一。府が、その資債の償還、その他必要ある場合に、府會の議決を經て起すもの。

ふーさい 祓祭【名】**がふし**(合祀)に同じ。

ふーさい 傅彩【名】〔美〕色彩を著くること。彩色を施すこと。

ふーざい 不在【名】一家に居らぬこと。るす。二〔法〕從來の住所又は居所に住居せず、所在不明なること。

ぶーざい 無菜【名】菜(サイ)の無きこと。菜の添へてあらぬこと。醒睡笑「明日はわが親の日なり。無菜の齋(トキ)を參らせんや」

ふさい-いちらんへう 負債一覽表【名】個人又は會社にて、その負債の額・返濟期等を一見して知り得るやうに作る表。

ふーさいか 不裁可【名】裁可せざること。裁可にならざること。

ふさい-かんぢやう 負債勘定【名】簿記にて、信用金の如き、金錢に見積り得る義務を總括する勘定。(資產勘定に對して)

ぶーさいく 不細工【名】一細工の拙きこと。へた。非細工。二容貌の見にくきこと。〔俚語〕

ふさい-じ 普濟寺【名】一遠江國濱松市にある曹洞宗の寺。廣澤山と號す。正長元年華藏義臺の創立。元龜三年、三方(ミカタ)ケ原の役に、徳川家康の陣所となり、兵火に燒かれ、天正十年、家康再建す。境内に寒巖和尚の廟あり。二武藏國北豐多摩郡立川村に在る臨濟宗の寺。境内に存する六面の石幢は國寶に指定せらる。その他鎌倉末期の板碑多く存す。

ふさい-しや 不在者【名】一その居住せる所に、その時在らざる人。二〔法〕從來を證明して、負債務者より債權者に交付する書。

ふさい-てうくわ 負債超過【名】〔法〕『獨Überschuldung』債務者の資產の額が負債の額に達せざる場合。**しはらひふのう**(支拂不能)參照。

ふさい-とうへう 不在投票【名】〔法〕議員選擧の時、比較的長期の間、又は選擧の當日、不在の餘儀なき艦船乘組員・鐵道列車乘務員・海陸軍軍人等が、所屬官署長又は業務主等より、不在の證明を受けたる上、所屬投票區の投票管理者より、投票用紙と投票用封筒との交附を受け、特別投票管理者管理するの投票所にて投票すること。**ふつうせんきよほふ**(普通選擧法)參照。

ふさい-べんしやうぎむ 負債辨償義務【名】〔法〕負債を辨償する義務。

ふさい-りう 普齋流【名】茶道の流派の一。千宗旦の門人杉本普齋の創めしもの。

ふーさう 扶桑【名】一『離騷・呂氏春秋・淮南子・山海經及び東方朔の十洲三島記に見ゆ』古、支那にて、東海の中、日の出づる處にあり、二樹根を同じくして、相扶けて生ずと信ぜし神木。扶桑木。扶木。扶搖。二前項の神木の生ずる地。三〔地〕『王維の送秘書晁監還日本詩に「鄉國扶桑外、主人孤島中」とあり』**ふさうこく**(扶桑國)三の略。四〔植〕**ぶーさうげ**(佛桑花)に同じ。一說に、佛桑花に似たれども、別種にて、支那の南方の地なる粵中(エツチウ)に產し、葉は桑のに似てやや小く、花は、紅・淺紅・黃の三色ありて、大なるは、芍藥の如しといふ。

扶桑の域(キヤ)【句】〔地〕**ふさうこく**(扶桑國)に同じ。元慶六年日本紀竟宴歌橘直幹序

ふさ 府葬【名】府葬に功勞ありし人を、その府の費用にて葬ること。

ふーさう 斧藻【名】『揚子法言の學行篇に「吾未ゞ見下好ゞ斧二藻其德一、若ゞ斧二藻其室一者上也」とあり。斧にて刻み、藻飾を施す義』德行及び文章を飾ること。修飾。

ふーざう【名】〔植〕**こんぶ**(昆布)に同じ。

ふーざう 不淨【名】**ふじやう**(不淨)の約。〔古語〕蜻蛉「行(ユキ)もせばやと思ふを、こよひよりふざうなる事あるべし」

ぶーさう 武裝【名】戰鬪の準備。戰時のよそほひ。

ぶーさう 無雙・無双【名】たぐひなきこと。ならびなきこと。二つとなきこと。不二。むさう。盧生夢記「洛中無雙の舞なりけり」

ぶーさう 撫箏【名】琴をひくこと。

ぶーさう 蕪草【名】一しげれる草。雜草。二亡が草稿を謙遜していふ語。

ふさう-いんいつでん 扶桑隱逸傳【名】〔地〕文武天皇より後土御門天皇の大永年中までの間の隱逸の士、役小角(エンノヅヌ)以下牡丹花肖柏まで、七十五人の傳を、漢文にて記し、所所に畫を插めるもの。三卷。僧元政の著。なほ僧義堂の續扶桑隱逸傳、三卷あり。

ふーさうおう 不相應【名】相應せぬこと。

ぶさう-きやうそう 武裝競走【名】學校競走の一。一同驅け出して、途中にて、草鞋をはき、劍を帶び、背嚢を負ひ、銃を取りなどしつつ走り、決勝點に到著するまでの間に、完全に武裝し終るやうにすること。

ふさう-ぐは 扶桑桑【名】〔植〕**ふさう**(扶桑)四に同じ。

ふさう-けう 扶桑敎【名】神道の一派。造化三神の大德を尊敬し、惟神(カムナ)の大道

を行ふ。鑑眞和尚の傳へ給へるなり」

ぶざつ 蕪雜【名】繁雜にして、條理の無きこと。まぜこぜ。ごたまぜ。

ふさつかいほんでん 布薩戒本田【名】**かいほんしてん**(戒本師田)に同じ。

ふさ-つき 總附・房附【名】總を附けて飾りてあること、又その物。一代男「房附の念珠(ジユズ)など入れおきて」

ふさ-ふ 相應ふ【動四自】かれと、これと、よく釣り合ふ。〔古語〕記「ぬば玉の黑き御衣(キヌ)をまつぶさに取り裝(ヨソ)ひ……はたたぎもこれはふさはず邊(ヘ)つ浪磯(ソ)に脫ぎ棄(ウ)て」きのふはけふの物語「この貝は、目の藥にて候ふが、……我等がまなこには、口からさしたるがふさうたるとて、皆仕舞うた」

ふさ-ふさ 多多・總總・房房【貌】**ふさり**(多り)に同じ。源氏「髮は、つやつやとかかりて、末のふさやかに梳りつけられたるほど」

ふさ-やか 多やか・總やか・房やか【貌】**ふさり**(多り)に同じ。源氏「髮は、つやつやとかかりて、末のふさやかに梳りつけられたるほど」

渠等に自在す。俗に、金魚藻と稱す。(金魚藻科の金魚藻とは別なり)

ふさ-やうじ 總楊枝・房楊枝【名】一端をうちひしぎて、總のごとくにし、一端を次第に細く削りたる楊枝。うちやうじ。

れさがるさま。ふっさり。ふさやか。ふさふさ。

ふさる 臥さる伏さる【動四自】一器物など、さかさまになりて、底裏が上を向くやうになる。二いぬ。臥す。ふせる。和合人「あんまりよくふさって居やがるから、灸でもすゑてくれべい」

ぶさゑもん 武左衛門【名】『當時、田舎武士の名に、武左衛門と呼ぶもの多かりしよりいへるならん』鈍頭にして、心至らぬ武士。ぬなかざらひ。武左。新五左。〔江戸の遊里の語〕

ぶざを 歩竿【名】げんざを(間竿)に同じ。

ふし 節【名】一竹・葦などの莖の處處にありて、上下の隔をなす處。二草木の枝の出づる處又、枝の出でたる痕。三動物の骨のつがひ目。四絲などの處處にある、瘤の如きもの。五干したる芋がら。〔女の語〕六魚の身を竪に四つに割きたるものの一つ。浮世風呂「ぶりぶりする鰹が、一ふし九文さ」七鰹節又はこれと同様の製法に依れる鮪節・鯖節・鯨節など。八くぎり。段落。九歌の調子の高底。旋律。曲節。十一かどとして見るべき物事。箇條。條件。源氏「すこし心にたがふふしあるにも、いかがはせん」十をり。をりふし。十一苦情。紛紜。柳樽「杖となる嫁で親子に節は無し」膝栗毛「脇差の抜身は竹と見ゆれども喧嘩にふしは無くてめでたし」

節の間【句】一莖の節と節との間。節(セツ)。二少しの間。僅かの時。つかのま。萬葉「朝霧(アサギリ)に滿ち來る潮の八隅浪(ヤスミナミ)に磨く珠藻の節間(フシマ)も惜しき命を露霜の過ぎましにけれ」

節を附ける【句】一發聲に、長短揚抑を記せるもの。十巻。歸化僧にして、黄檗山の第五世たりし高泉の著。

ふ-さうぢ 不掃除【名】掃除をせざること。掃除のいきとどかぬこと。

ふさ-うちは 總團扇・房團扇【名】ふさうちは(總附團扇)に同じ。

ぶさう-ちゆうりつごうめい 武装中立同盟【名】『英Armed neutrality』局外中立に關する一定の原則を立て、その規定を

ど、晩秋の頃には、瘤狀となり、黄色を經て、紫赤色を呈するに至り、中なる蚜蟲の未だ翅を生じて飛散するに至らざる間に、採集して、單寧(タンニン)材として使用す。我國にては、古來、これを臼にて搗きて、粉末とし、五倍子の粉と呼びて、齒ぐろめ、又は布帛の染料に用ひ、近來は、そのまま日光に乾かし、又は熱湯に投じて、殺蟲したる後、日光に乾かし、工業に用ふ。

ふし 鹽膚木・鹽麩木・膚木【名】〔植〕**ふしのき**(鹽膚木)に同じ。

ふし【名】〔植〕**あふさかさう**(逢坂草)に同じ。

ふ-し 父子【名】ちちと、こと。おやこ。父子親(シン)あり【句】**ごりん**(五倫)を見よ。

父子の間は善を責めず【句】『孟子の離婁上篇に「古者易子而教之。父子之間不責善。責善則離。離則不祥莫大焉」又、同書離婁下篇に「責善朋友之道也。父子責善、賊恩之大者」とあり』父子相責むるに善道を以てするは、親愛の情を傷るに至るが故に、却つて避けざるべからず。〔諺語〕

ふ-し 不死【名】一死なぬこと。二〔佛〕**ねはん**(涅槃)に同じ。

ふ-し 不死の藥【句】**ふしやく**(不死藥)に同じ。萬葉「不老の藥は實り切れたり。不死の藥ばかりあり」

ふ-し 不脂【名】脂を塗らぬこと。不脂の戸【句】『淮南子の說山訓篇に「人有多言者、猶百舌之聲、人有少言者、猶不脂之戸也」とあり。脂を塗らぬ戸は、開閉自由ならずとの意にていふ』寡言なることの譬。「るもの。

ふ-し 賦尉【名】馬の旋毛の一。鞍下にあり。

ふ-し 麩師【名】麩を製造するを業とする人。

ふ-し 婦寺【名】婦女子と寺人(即ち宦婦寺の忠【句】姑息なる忠義。

ふ-じ 父事【名】他の人に、父のごとく敬ひつかふること。

ふ-じ 不二【名】ふさう(無雙)に同じ。

ふ-じ 不時【名】一時ならぬこと。臨時。二時ならぬ出來事。思ひがけぬ變事。笑人「かやうな不時もあらうかと、……、我詰め合ひをるは」

不時の茶會(チャクワイ)【句】朝晝夜の三時の外なる時に催す茶會。

不時の會(エ)【句】前條に同じ。

ふ-じ 不次【名】次第に拘らぬこと。正統記「德行・才用によりて不次に用ひらるべき心なり」

ふ-じ 符璽【名】いんじ(印璽)に同じ。

ふ-じ 附磁【名】〔理〕『英Magnetisation』鐵片を磁石にて摩擦し、又はこれに電流を作用せしめなどして、磁力を與ふること。(受磁に對して)

ふ-じ 富士【名】一〔地〕駿河國五郡の一。郡役所を富士町に置く。二〔地〕**ふじさん**(富士山)一に同じ。〔不二〕萬葉「田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞふじの高根に雪は降りける」三**ふじさん**(富士山)二に同じ。四香(カ)の一。實は伽羅(キャラ)にて、新しく氣高き薫を發するもの。五〔佛〕**ふじは**(富士派)の略。

富士五山【句】〔佛〕日蓮宗富士派の八本山の内、富士山麓なる富士郡にある北山村の本門寺、上野(カウノ)村の大石(オホイシ)寺・妙蓮寺、富士根(フジネ)村の久遠(クヲン)寺、芝富(シバトミ)村の本門寺。

富士に行かぬも馬鹿、二度行くも馬鹿【句】富士山は、一度は登るべきなれど、二度は登るべきものにあらずとの意。

ふ-じ 不二【名】ふさう(無雙)に同じ。

ふ-じ 不時【名】一時ならぬこと。臨時。二時ならぬ出來事。思ひがけぬ變事。笑人「かやうな不時もあらうかと、……、我詰め合ひをるは」

不時の茶會(チャクワイ)【句】朝晝夜の三時の外なる時に催す茶會。

不時の會(エ)【句】前條に同じ。

ふ-じ 不次【名】次第に拘らぬこと。正統記「德行・才用によりて不次に用ひらるべき心なり」

ふ-じ 符璽【名】いんじ(印璽)に同じ。

ふ-じ 附磁【名】〔理〕『英Magnetisation』鐵片を磁石にて摩擦し、又はこれに電流を作用せしめなどして、磁力を與ふること。(受磁に對して)

ふ-じ 富士【名】一〔地〕駿河國五郡の一。郡役所を富士町に置く。二〔地〕**ふじさん**(富士山)一に同じ。〔不二〕萬葉「田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞふじの高根に雪は降りける」三**ふじさん**(富士山)二に同じ。四香(カ)の一。實は伽羅(キャラ)にて、新しく氣高き薫を發するもの。五〔佛〕**ふじは**(富士派)の略。

富士五山【句】〔佛〕日蓮宗富士派の八本山の内、富士山麓なる富士郡にある北山村の本門寺、上野(カウノ)村の大石(オホイシ)寺・妙蓮寺、富士根(フジネ)村の久遠(クヲン)寺、芝富(シバトミ)村の本門寺。

富士に行かぬも馬鹿、二度行くも馬鹿【句】富士山は、一度は登るべきなれど、二度は登るべきものにあらずとの意。

ふ-じ 武士【名】武事にたづさはる人。いくさにん。さむらひ。ものの ふ。武人。武者。〔文士に對して〕

武士が立つ【句】武士たる面目を保ちて探險せしめしことあり。今日にては深さ約二十間。もと熔岩の、外部は冷却し、内部のもの流出して生じたる空所に外ならず。

富士の峯(ネ)と丈比(タケクラ)べ【句】實力に餘りたる大望をおこす譬。〔諺語〕盛衰記「佐殿(スケ)の當時の寸法を以て、平家の世を取らんとしたまはん事は、いざいざ富士の峯と長並(タケクラ)べ、猫の額の物を鼠の伺ふ喩にや」

富士の卷狩(マキガリ)【句】源頼朝及び頼家の時、練武の目的にて、富士の裾野に部下の將卒を會し、狩獵を行ひしこと。

富士の山程【句】物事の澤山なる形容。鷹筑波「痴話ぶみや富士の山ほど書きぬらん(こいふ句に)戀に心は浮島が原」

富士の綿【句】駿河國富士郡より產出する綿。平家「ふじのわた二千兩」

一(チ)富士、二鷹(カ)、三茄子(ナスビ)【句】夢に見る物の中にて、古來最もよき物といひ傳へたる物の順序を示す語。勢源「節分の夜の寶船に、一年の幸を待つより、一富士、二鷹、三茄子の品定も、これらは、和歌のならはしにて」

與の富士【句】〔地〕陸中國岩手山(イハテ)の別稱。

駿河の富士と一里塚【句】『富士山と一里塚とは、高さの差甚しきよりいふ』非常に懸隔あることの譬。〔諺語〕

都の富士【句】〔地〕**みやこふじ**(都富士)に同じ。若風俗「都の富士に横雲の立ち白み、黒石の鐘も告げて」

ぶ-し 武士【名】武事にたづさはる人。いくさにん。さむらひ。ものの ふ。武人。武者。〔文士に對して〕

武士が立つ【句】武士たる面目を保ち

ふ-し 父子【名】ちちと、こと。おやこ。父子親(シン)あり【句】**ごりん**(五倫)を見よ。

父子の間は善を責めず【句】『孟子の離婁上篇に「古者易子而教之。父子之間不責善。責善則離。離則不祥莫大焉」又、同書離婁下篇に「責善朋友之道也。父子責善、賊恩之大者」とあり』父子相責むるに善道を以てするは、親愛の情を傷るに至るが故に、却つて避けざるべからず。〔諺語〕

ふ-し 不死【名】一死なぬこと。二〔佛〕**ねはん**(涅槃)に同じ。

ふ-し 不死の藥【句】**ふしやく**(不死藥)に同じ。萬葉「不老の藥は實り切れたり。不死の藥ばかりあり」

ふ-し 不脂【名】脂を塗らぬこと。不脂の戸【句】『淮南子の說山訓篇に「人有多言者、猶百舌之聲、人有少言者、猶不脂之戸也」とあり。脂を塗らぬ戸は、開閉自由ならずとの意にていふ』寡言なることの譬。「るもの。

ふ-し 賦尉【名】馬の旋毛の一。鞍下にあり。

ふ-し 麩師【名】麩を製造するを業とする人。

ふ-し 婦寺【名】婦女子と寺人(即ち宦婦寺の忠【句】姑息なる忠義。

ふ-じ 父事【名】他の人に、父のごとく敬ひつかふること。

ふ-じ 不二【名】ふさう(無雙)に同じ。

ふ-じ 不時【名】一時ならぬこと。臨時。二時ならぬ出來事。思ひがけぬ變事。笑人「かやうな不時もあらうかと、……、我詰め合ひをるは」

不時の茶會(チャクワイ)【句】朝晝夜の三時の外なる時に催す茶會。

不時の會(エ)【句】前條に同じ。

ふ-じ 不次【名】次第に拘らぬこと。正統記「德行・才用によりて不次に用ひらるべき心なり」

ふ-じ 符璽【名】いんじ(印璽)に同じ。

ふ-じ 附磁【名】〔理〕『英Magnetisation』鐵片を磁石にて摩擦し、又はこれに電流を作用せしめなどして、磁力を與ふること。(受磁に對して)

ふ-じ 富士【名】一〔地〕駿河國五郡の一。郡役所を富士町に置く。二〔地〕**ふじさん**(富士山)一に同じ。〔不二〕萬葉「田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞふじの高根に雪は降りける」三**ふじさん**(富士山)二に同じ。四香(カ)の一。實は伽羅(キャラ)にて、新しく氣高き薫を發するもの。五〔佛〕**ふじは**(富士派)の略。

富士五山【句】〔佛〕日蓮宗富士派の八本山の内、富士山麓なる富士郡にある北山村の本門寺、上野(カウノ)村の大石(オホイシ)寺・妙蓮寺、富士根(フジネ)村の久遠(クヲン)寺、芝富(シバトミ)村の本門寺。

富士に行かぬも馬鹿、二度行くも馬鹿【句】富士山は、一度は登るべきなれど、二度は登るべきものにあらずとの意。

ふ-じ 武士【名】武事にたづさはる人。いくさにん。さむらひ。ものの ふ。武人。武者。〔文士に對して〕

武士が立つ【句】武士たる面目を保ち

ふ-さ 塞の國【名】前髪落して、總(フサ)を變へ、二陰陽家にて、年によりて、大將軍・太白神・天一神などの在りといふ方角。この方角に向ひて事を爲せば、禍を得て、忌み避く。**ほっぽうふさがり**(八方塞)參照。(吉方(エホウ)に對して)

ふさがる 塞がる【動四自】一通らず。かよはず。進まれず。つまる。ふたがる。二他の事に用ひられず。さはる。「手がふさがる」三明家に、住人定まりて、來

ふ-さく 部柵【名】手分(テワケ)をして、搜索すること。

ふさく-ほけん 不作保險【名】損害保險の一。不作に因りて生ずべき損害の塡補を目的とするもの。

ふ-ざくら【名】〔植〕**こぶし**(辛夷)に同じ。

ふ-さくね 不作爲【名】一或事を爲さざること。二〔法〕或事につきて、作爲の能力はありながら、これを行はぬこと。(作爲に對して)

ふさ-しりがい 總鞦・房鞦【名】大總厚絲に屬す。山車料。

ふさ-しだ 文夾【名】**ふみばさみ**(文夾)を見よ。

ふさ-じし 總羊齒【名】〔植〕羊齒類に屬する多年生の草。葉柄は褐色にして、長く、上方に向ひて、次第に廣く、遂に葉面となる。葉面は扁平にして、先端に穗を附く。穗は六本乃至十五本に分れ、裏面は平滑にして、子嚢群は、四列をなし、且つ邊緣は、兩方へ屈曲す。小笠原島に產す。

得。武士道が立つ。(多く打消の形にて用ふ)春花九大力「これまで、さまざまと言ひよっても、取り合はぬこそ道理、くさりあうてをる兩人、どうも、身ども、武士が立たぬ」「よ。

武士の魂【句】「大小は武士の魂」を見よ。

武士は食はねど高楊枝(タカヨウジ)【句】武士の、いかに貧窮しても、體面を重んずる形容。〔諺語〕

武士を立つ【句】武士の立つやうにす。武士道を立つ。

心掛ある武士は、轡の音に目を醒(サ)す【句】用心深き武士は、少しも油斷せず。〔諺語〕

心掛ある武士は、地を這ふ蟲にも氣を許さぬ【句】前條に同じ。〔諺語〕

ぶっし 佛師【名】ぶっし(佛師)の略。落窪「はつきほどにせんとて、經佛書かせ、ぶし呼ばせて、佛きよらなるべくと、男君・女君、心にいれたまへり」

ぶっし 附子【名】ぶす(附子)Ⅱに同じ。遥

ぶし 芳色藥集「附子、ブシ。毒藥也」

ぶし 奉仕【名】ほうし(奉仕)に同じ。太平記「鬼神、手を束ねて奉仕しける間」

ぶじ 武事【名】武人のなすべき仕事又は技術。(文事に對して)

ぶじ 奉事【名】ほうじ(奉事)に同じ。

ぶじ 奉侍【名】ほうじ(奉侍)に同じ。太平記「叡慮ありて、禁門の警固に奉侍せられけり」

ぶじ 無事【名】Ⅰつつがなきこと。かはりなきこと。平穩。(有事に對して)Ⅱ仕事の無きこと。ひま。無事、日月長し【句】『白居易の詩に「無事日月長、不羈天地閑」とあり』閑(ヒマ)なる身には、日月長きが如く感ず。〔諺語〕

ぶじ 無二【名】ぶさう(無雙)に同じ。

ぶじ 無似【名】『禮記の哀公問篇に「公曰、寡人雖二無似一也、願聞下所三以行二三言一之道上とあり』ふさう(不肖)に同じ。

ふじあさまじんじや 富士淺間神社【名】甲斐國南都留(ツル)郡福地村大字上吉田にある縣社。祭神は木之花開耶姫(コノハナサクヤヒメ)命・瓊瓊杵(ニニギ)尊・大山祇(オホヤマツミ)命。日本武尊を配祀す。景行天皇五十年の創祀。

ふじあざみ 富士薊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。概形大薊に類し、莖は紫色を呈し、横に枝を出す。花は八九月頃開き、形大にして、總苞は分裂せる帶紫色の鱗片より成り、舌狀花を有せず。富士山中須走(スバシリ)に最も多く生ず。里人は須走牛蒡と稱し、食用に供す。

ふじあづけ 武士預【名】鎌倉時代及び室町時代に、罪人を、臣下の武士に託して、その邸に禁錮せしめしこと。**だいみやうあづけ**(大名預)參照。

ふじあな 節孔・節穴【名】Ⅰ板などの節目の孔。きのふはけふの物語「戸の節穴より、……によっと出す」Ⅱ女の陰部の形容。娼妓絹鼇「昔、混沌未分の時、耳か鼻からか子を産ませ、社稷宗廟を繼がせ、こんな節穴をあけぬ相談にきはめたら、かういふ惑もあるまいもの」「きこと。不遜。

ふじあはせ 不仕合【名】しあはせの惡

ふじあへ 富士和【名】炒(イ)りたる白胡麻を擂りて、白味醂と酢とを加へ、味噌を入れて、よく擂り混ぜ、煠でたる葱の白根を搾(ア)へたる食品。

ふじいう 不自由【名】自由ならぬこと。便利のわるきこと。

ふじいうしよどく 不自由所得【名】〔經〕『獨 Gebundenes Einkommen』辛うじて日常の生計費を支辨するに足る所得。(自由所得に對して)

ふじいと 節絲【名】Ⅰたまいと(玉絲)に同じ。Ⅱ次條の略。

ふじいとおり 節絲織【名】節絲にて、平織に織りたる織物。經(タテ)・緯(ヨコ)共に節絲なるも、又、經には、普通の絹絲を用ひたるもあり。長く著用に堪へて、價高からず。ふしいと。ふしおり。たまいとおり。「地。

ふじいとひら 節絲平【名】節絲織の袴。ただをさ「古語」鱗蟲「冬になりぬ。ふしおきは、ただをさな主人をもて遊びて」

Ⅱ古蝦夷の、王化に服し、我國人と同化するに至れる者、卽ち上代の熟蝦夷(ニギエミシ)。我國人と同樣の姓を有し、內地に移されて、農耕に從ひ、海岸の防衞、盜賊の追捕等に使役せられし者も多く、前九年・後三年の役に於ける安倍・清原、又、平泉に清衡・基衡・秀衡三代の榮華を極めし藤原氏の如きも、その首領たりしなり。**いふ**(夷俘)參照。

ふじう 俘囚【名】化外の民のとりこ。

ぶじう 武周【名】支那の古樂の一。周の武王の治をたたへて作れるもの。「じ。

ぶじう 武州【名】〔地〕むさし(武藏)に同

ふじうがくどう 不就學童【名】學齡に達しながら就學せざる兒童。

ぶじうぎ 不祝儀【名】めでたからぬ事。例へば、人の死去などの類。凶事。不祝言。不祝儀は取越(トリ)す【句】不祝儀の期日は、場合によりては繰り上ぐることあり。祝儀は、祝延(イハヒノ)ばとて、期日を延ばすことあるに對していふ。〔諺語〕

ぶじうげん 不祝言【名】ぶじうぎ(不祝儀)に同じ。醒睡笑「祝言・不祝言」

ぶじうぜんもん 武州禪門【名】〔人〕ほうでうやすとき(北條泰時)の異稱。太平記「承久の亂の後、故武州禪門、ひそかにこの事を悲しみ」

ふじうでん 俘囚田【名】王朝時代に、諸國に配置したる俘囚の糧食を給するために設けし田領。

ふじうりやう 俘囚料【名】王朝時代に、俘囚の內地に移されたる者に、二代の間給せし料。

ふじうろくれうたう 俘囚祿料稻【名】王朝時代に、俘囚料として給せし稻。

ふしおき 臥起【名】おきふし(起伏)に同じ。〔古語〕

ふしおき 臥起【副】次條に同じ。保元集「風吹けば浪のしめたまふ流鏑のふしおき戀に沈む頃かな」

臥起は【句】おきふしに(起臥に)に同じ。〔古語〕鱗蟲「冬になりぬ。ふしおきは、ただをさな主人をもて遊びて」

ふしおよぎ 臥泳【名】體を立てずに、横たへて泳ぐこと、又その泳ぎ方。東海道名所記「立泳・臥泳して」「に同じ。

ふしおり 節織【名】ふしいとおり(節絲織)

ふしおろし 富士颪【名】Ⅰ富士山より吹きおろす風。謠曲(小袖曾我)「胸のけむりを富士おろしに晴らして、月を清見が關に」野坡「富士おろし十三州の柳かな」Ⅱ昔の編笠の一。形、富士山に似たるものなるべし。若鳳爺年の頃二十四五と見えたる人、富士おろしといふ大編笠をぬげば、紫の手絹(テギヌ)にて頬かぶりして」

ふしか 不二價【名】かけねのなき價。

ふしがき 柴垣【名】柴(シバ)にて結ひたる垣根。しばかき。「古語」起「柴籬(フシガキ)」

ふしがく 府視學【名】府に置く地方官の一。上官の命を承けて、府の學事の視察、その他學事に關する庶務に從事する判任官。

ふしかげ 節陰【名】矢の箆(ノ)の、枝をかき取りたる痕なる、凹き所。矢は、その部分より干割れ易きものなるより、竊めその所に、漆を溜めて塗りおく。太平記「白箆に、節陰ばかり少し殘りて」

ふしがた 富士形【名】富士山の如きかたち、卽ち上狹くして、下の次第に廣がれるもの。富士山形。

ふしがたぎ 武士氣質【名】さぶらひかたぎ(侍氣質)に同じ。今國粹篇「職人ながら武士氣質」

ふしかねぞめ 柴金染【名】ふしぞめ(柴染)に同じ。五人女「女は、ふしかね染の縞を織りならひ」

ふじーかは 富士川【名】〔地〕甲斐國の笛吹・釜無(カマナシ)の二川の合流より成り、身延(ミノブ)山の麓を過ぎ、駿河國に入りて、富士・庵原(イハラ)二郡の境を流れ、清原(キヨハラ)町の東に至りて、太平洋に注ぐ川。長さ、約四十一里。最上(モガミ)川・球磨(クマ)川と合はせて、日本三急流の稱あり。續古今「舟よばふふじの川戸に日は暮れぬ夜半にやゆかん浮島が原」

ざる宇左衛門は、心の如く、乘馬(ノリウマ)に十文字を持たせ」

ふし-がまり 伏屈【名】昔時の兵法にて、數人又は十數人にて、草叢などの中に潜み伏して、敵の斥候・使者などの來るを候(サカ)ひし伏兵。ふくがまり。ふせがまり。

ふじ-がん 富士岩【名】〔鑛〕あんざんがん(安山岩)に同じ。

ふしき 節木【名】㊀節の、穴をなして、中空なる木。一說に、臥木なりと。㊁節の多き惡き木。七一戰人歌合「くれごとにひとりふし木のあらづくりいつてをのめのあはんとすらん」

ふーしぎ 不識【名】知らざること。氣が附かざること。

ふしき 伏木【名】〔地〕越中國射水(イミヅ)郡にある町。富山灣に臨む開港場。敦賀・新潟と併稱せらる。

ふしぎ 臥木・伏木【名】倒れ臥したる木。〔古語〕萬代「心して駒はやめに日を經つつ野原のふしぎ草がくれゆく」

「乘ったる馬を、思はぬ伏木に乘りかけて」

臥木の橋【句】臥木を架け渡したる橋。

ふーしぎ 不思議【名】『ふかしぎ(不可思議)の略』思ひはかられぬほど怪しきこと。不審。奇怪。

「これは、般若の不思議なり」

「ありとも無しとも手のさされぬ、不思議、不可得の妙理」

不思議が立つ【句】「不審が立つ」に同じ。

「不思議立ったを、似つこらしう嘘ついて」

ふしぎ-あん 不識庵・不識菴【名】〔人〕うへすぎけんしん(上杉謙信)に同じ。

ふしぎ-かい 不思議界【名】〔佛〕『思慮・言議を絶したる法界』しんによ(眞如)に同じ。

ふしぎ-がほ 不思議顏【名】不思議なりと思へる顏つき。物怪(モノ)がほ。

ふしぎ-じょう 不思議乘【名】〔佛〕ぶつじょう(佛乘)に同じ。

ふじ-ぎぬ 富士絹【名】『富士瓦斯紡績會社にて製するより名づく』經(タテ)絲(ヌキ)共に單撚の紡績絲を用ひて、普通の平織に製し、羽二重の如くに、柔軟に仕上げたるもの。

ふじ-ぎやうじや 富士行者【名】富士講の信徒の行者。

ふしくぬぎ 節櫟【名】節多きくぬぎ。新六「霜がれの原野にまじるふしくぬぎよにかじけゆくわが身なりけり」

ぶし-くん 武士訓【名】〔書〕武士の心得べき要項を說明したるもの。五卷。井澤長秀の著。

ふしくる【動四自】 ふしこるに同じ。

ふしくれ 節樓【名】節多き材木。

ふしくれ-だつ 節樓立つ【動四自】ふしくれの如く、節多くして平かならず。了俊歌要抄「句を詠じ比べて、事柄のそぞろかず、節樓だたざらん歌を用ひるべきなり」

ふしくれ-ぼく 節樓木【名】〔植〕くぬぎ(櫟)に同じ。

ふじ-ぐろ 節黑【名】㊀矢幹(ヤガラ)の、節の下を、漆にて、黑く塗り込めたるもの。㊁〔植〕石竹科に屬する多年生の草。高さ二三尺、節は黑みを帶ぶ。葉は披針形、全緣にして」

ふしくろ-いもちびやう 節黑稻熱病【名】稻に生ずる病の一。節黑稻熱病菌と稱する一種の黴菌が、節部を侵して、黑變せしめ、終には、枯死せしむるもの。原因は、陰濕・冷涼なる氣候の連續、窒素肥料の過多等にして、陸稻に多し。

ふしくろいもちびやうきん 節黑稻熱病菌【名】前條を見よ。

ふしぐろ-せんをう 節黑仙翁【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。高さ二三尺、節は帶紫黑色を呈す。葉は卵狀披針形、全緣、葉柄を缺く。夏季、黃赤色又は白色・紫色等の花を開く。山地に自生し、又、觀賞用として栽培す。ふしぐろ。

ふじ-くわざんたい 富士火山帶【名】〔地〕我國本州を南北二部に分つ一大火山列。北方越後の妙高山を起點とし、八嶽(ヤツ)・富士山・愛鷹(アシタカ)山・箱根山・天城(アマギ)山と列なり、海を越えて、伊豆七島・硫黃島を經、遠く南洋マリアナ列島に及ぶ。

ふじ-くわざんみやく 富士火山脈【名】〔地〕前條に同じ。

ふじ-ぐわとう 富士瓦燈【名】富士山の如き形せる瓦燈形。

ふしけづり 節削【名】『ふし(節)㊦を見よ』

ふし-こ 節蠶【名】節高病に罹りたる蠶兒。ふしたか。

ふじ-こ 富士籠【名】ふせご(伏籠)の訛。下學集「富士籠、フジコ。或作二以籠一、蕪籠也」

ふじ-こう 富士講【名】富士山を崇拜する人人の組織せる講社。各講社に先達(サキ)

ふじ-ごほり 富士氷・富士冰【名】富士山より持ち來れる氷。夏日、駿河國御殿場(ゴテンバ)の停車場内などにて賣る。

ふしこめ-しげどう 節籠重籐【名】節の上を卷きたる重籐。

ふじ-ごり 富士垢離【名】富士講の行者の、陰曆五月二十五日より六月二日までの間、毎日、河邊に出でて、垢離を取り、富士權現を遙拜すること。

手阿「富士ごりや山は日頃の薄煙」

ふしこる【動四自】 澀りて、人の言を容れず。貫め恨む。すねる。ふしくる。ふづくむ。

文德實錄「大神ふしこり賜へりと申せり」

ふじ-ころぶ 臥轉ぶ【動四自】あなたこなたにころぶ如く伏す。ふしまろぶ。

ふしーさう 不死草【名】〔植〕ぱくもんぢう(麥門冬)に同じ。

ふしーさうげい 父子相迎【名】〔書〕三部假名鈔の一。淨土宗鎭西派に相傳せる淨土念佛の法義を、國文にて記したるもの。二卷。僧向阿の著。

ふじ-さん 富士山【名】㊀〔地〕駿河國と甲斐國とに跨れる山。高さ一二四六七尺。我國內地に於ける第一の高山。山容の整正なること類無きを以て、その名世界に高く、頂上は、四時白雪の絕ゆることなし。ふじ。富嶽(フガク)。芙蓉峰。〔不二山・不盡山〕㊁謠曲の一。唐土の官人、往昔、方士の仙藥を求め得たりし遺蹟を尋ねんとて、日本に渡りて、富士の裾野に至りしに、山神現れて、富士の故事より靈山の由來を說き、不老不死の仙藥を授くることを作りたるもの。一名、富士。

ふじさんがた 富士山形【名】ふじがた(富士形)に同じ。

ふじしだ 富士羊齒【名】〔植〕水龍骨(ミヅヒキ)科に屬する多年生の羊齒植物。葉は根莖より叢生し、細き一回羽狀複葉にして、その先端、地に著きて、根を生ずる性あり。山地に自生す。

ふしーしづむ 伏沈む【動四自】心はれずして、うつむきがちになる。思に沈む。源氏「闇(ヤミ)にくれてふししづみたまへるほどに、草も高くなり」

ふしーしば 伏柴【名】『伏は假借の字。實はふし(柴)としば(柴)との重言』しば(柴)に同じ。「古語」夫木「きぎす鳴く狩場の雪に假寢せん宇陀の伏柴しばし宿貸せ」

伏柴の加賀【句】「人」待賢門院の侍女なる加賀(父詳かならず、母は齋院の新肥前といへり)の綽號。嘗て「かねてより思ひしことよふししばのこるばかりなる嘆せんとは」(千載和歌集に出づ)といふ歌を思ひ構へて、自ら秀吟なりと信じながら、人に示さず、時を待ちて出だせんとせしが、花園左大臣源有仁(アリヒト)と契り、暫くして、漸く疎んぜらるるに當り、贈るに、この歌を以てせしかば、有仁大に歎賞せりといふ。

ふしーしば 【名】〔植〕**まこも**(眞菰)に同じ。「古語」篠目抄「水隱(ミガクレ)のふししばなればいつとなくかりそめ待ちし六月(ミナヅキ)の雨」

ふしーじゃくーしんみやう 不自惜身命【句】〔佛〕『法華經の壽量品に「一心欲レ見レ佛、不二自惜一身命」。時我及衆僧、俱出二靈鷲山一ことあり』法のために、自己の身命を惜しまぬこと。不惜(フジャク)身命。

ふしーじる 節汁・不死汁【名】『ふし(節)』(國)を見よ。不死は假借の文字』芋がらと赤小豆(アヅキ)とを入れて作りたる汁物。風俗文選(撰擇兄賦)「赤小豆殿の能には、……從弟煮(コニ)不死汁の名は、何れの御時に始まりたる由緒を知らず」

ふーしすう 負指數【名】〔數〕負數の指數。例へば、a^{-3}の−3などの類。

ふしーぜん 不自然【名】自然ならぬこと。わざとらしきこと。

ふしーぜんぢやう 富士禪定【名】富士山にのぼりて、信者の行(ギヤウ)を修むること。加波禪定・立山禪定・白山禪定の類。狂言(富士松)「富士禪定致してござる」

ふーしーぜんーふーしあく 不思善不思惡【句】〔佛〕『無門關の第二十三則に「祖云、不思善不思惡、正與麼時、那箇是明上座本來面目。明當下大悟、遍體汗流」とあり』善惡邪正の思量を絶つこと。釋迦如來誕生會「不思善、不思惡、邪正一如と、鞭を上げ、乘り出だしまひける」

ふしーぞめ 柴染・椹染【名】くろもじの木にて製したる染料にて染めたる色。ふしかねぞめ。

ふじたいーくわざんみやく 富士帶火山脈【名】〔地〕**ふじくわざんみやく**(富士火山脈)に同じ。

ふじーたいこ 富士太鼓・富士太皷【名】謠曲の一。富士といふ樂人の妻、夫の、內裏の管絃に上京し、同役なる淺間に殺されしを知らで、その跡を尋ね行き、形見の裝束を見て狂氣し、夫の敵よとて、太鼓を打ち、舞を舞ひて歸る事を作れるもの。

うめがえ(梅枝)參照。

ぶしーだう 武士道【名】武士たる者の守るべき道。遠く日本固有の尙武の氣象に本づけども、武家時代以後、殊に顯著なるに至れり。祖先崇拜の觀念に基づける氏族的名譽心に動機を發して、忠孝・節義・勇武・廉恥・決斷等の諸德を重んじ、死を惜しまざる覺悟を有したり。

武士道が立つ【句】「武士が立つ」に同じ。春花五大力「源五兵衞は、女房の薩で、立身致した、などと申されては、武士道が立ちませぬ」

武士道を立つ【句】「武士を立つ」に同じ。平假名盛衰記「又、その上に、私が武士道を立てて下されば」

ふじーだうしや 富士道者【名】富士參す る道者。

ふしーたか 節高【名】ふしこ(節瘤)に同じ。

ふしーだか 節高【名】〔植〕**あのこつち**(牛漆)に同じ。

ふしたかーびやう 節高病【名】瘤兒の病の一。環節膨脹し、皮膚白色となるもの。

ふしーたけ 臥長・伏長【名】臥したる時の體の長さ。平家「臥長は五六尺、跡枕邊は十五六丈もあらんと覺ゆる大蛇にて」太平記「さしも厳(イカ)しかりつる女房、忽に伏長二十丈ばかりの大蛇となりて」

ふじたけーしんじや 富士嶽神社【名】甲斐國南都留(ツルノ)郡福地村上吉田に鎭座せる神社。祭神は木花開耶(サクヤハナ)姫。延曆七年の創立。

ふしーだつ 節立つ【動四自】莖高く延びて、節現はる。「古語」萬代「いそげ田子あきあひの苗も節だつにますかゞごろも水澁(シブ)附くまで」

ふしたにーしげあや 富士谷成章【名】〔人〕國學者。京都の人。皆川淇園の弟、富士谷尹數の養子。字は仲達、通稱は專右衞門。初は層城、後、北邊(キタベ)と號す。國史より諸令式に至るまで通ぜざるなく、特に言語・音韻の學に精し。安永八年歿す。年四十二。插頭(カザシ)抄・脚結(アシユヒ)抄・六運圖略・北邊集・國字淵源考等の著あり。

ふしたにーみつね 富士谷御杖【名】〔人〕國學者。初名成實、又成元、源吾、又、專右衞門と稱し、北野と號す。成章の子。國典に精しく、歌文に長ず。文政六年歿す。年五十六。古事記燈・萬葉集燈・土佐日記燈・歌袋・いれひも・北邊隨筆・北野文集等の著あり。

ふしたふうかう 富士田楓江【名】〔人〕音曲家。めりやすの名人。初、佐野川萬菊の門に入り、千歲と名乘りて、女方の役者なりしが、豐後節と三味線とを學び、後、都一中に一中節を學びて、二代目和中とも稱せり。めりやすは、斯道の祖羽屋三右衞門の高弟松島庄五郎に學べりといふ。寬保の頃、富士田吉次楓江と改め、長唄とめりやすとを專門として、古今獨歩の名を得。明和八年歿す。年五十八。

ふーしだら 不仕鱈・不檢束【名】一しだらなきこと。しまりなきこと。二品行の亂れたること。

ふしーぢか 節近【名】節と節との間の短きこと。保元「一つ給はらん、受けて見よ……とて、三年竹の節近なるを、……暫し保つて、ひようと射る」

ふしーぢち 父執【名】『執の字の音、正しくはしふ。禮記の曲禮篇に「見二父之執一」とあり』父の朋友。

ふしーぢち 斧質・斧鑕【名】『質は、首を斬る臺の義』支那に於ける古の極刑の一。罪人を、臺の上に載せ、斧にて斬りしこと。

ふしーぢち 賦質【名】天賦の性質。うまれつき。うまれだち。

ふしーぢち 浮室【名】魚形水雷の機械室の後方に、水雷に、浮力を與ふるため、設くる、中空の一室。

ふしーぢち 麩質【名】ぐるてんに同じ。

ふしーぢち 不悉【名】『言ひ悉(ツ)さぬ義』ふいつ(不乙)(一)に同じ。「無きこと。無情。

ふーじつ 不實【名】まことなき心。深切のなきこと。

ふーじつ 不日【副】『不二一日一、即ち一日間も經ずしての義』日ならずして。近日の中に。やがて。ふじつに。

ぶーしつ 部室【名】幾つにか區分したる內の一部の室。

ふしーづく 柴漬く・粽く【動下二自】ふしづけをなす。「古語」夫木「ふしづけしおどろが下にすむはえの心をさなき身をいかにせん」

ふしーづけ 柴漬・粽【名】一冬、柴を束ねて、川などにつけおき、魚の、寒さを避けんとて、その中に集まり潛めるを、春に至りて捕ふること。しのづけ。しばづけ。つけしば。「古語」和名「布之都介、郭璞曰、積二柴於水中一、魚寒入二其裏一、因以簿圍、捕取也」二「そのさま、前項のに似たるよりいふ』罪人を、簀卷(スマキ)にして、水に投じて殺すこと。盛衰記「唐崎に八附(ハツケ)にせん、粽にせんなど、訴へ申しければ」三魚物(モカツノ)などに、曲節を附くること。四ことさらに、聲に高低を設けて言ふこと。八笑人「無駄な言草が馬鹿長いに、をかあしく節附をして言ふもんだから」

ぶしつけ 不仕附・不躾・無躾【名】仕付のわるきこと。行儀わるきこと。無作法。狂言「二千石」「茶碗を投げてござれば、さてもぶしつけの奴ぢゃとあって」

不仕附ながら【句】失禮なる言事（イヒ）なれども。八笑人「無禮（ブシツケ）ながら、それは、大きにお眼鏡違でござります」和合人「ぶしつけながら、まだ歌になりません。もう少しだ、もう少しだ」

ぶしつけ-もの 不仕附者・不躾者・無躾者【名】不仕附なる者。無作法なる人。

ふし-つむぎ 節紬【名】節絲織の紬。心中刃は氷の朔旦「はや、人魂も飛びさやぬいて、共に刃の諸羽二重の同じ枕にふし紬」

ふじつ-もの 不實者【名】不實なる人。信實ならざる人。

ふしていーめいだい 不指定命題【名】〔哲〕『英 Indefinite proposition』主辭の表はす事物の範圍を明かに指定せざる命題。概稱命題・特稱命題など、これに屬す。不確定命題。（指定命題に對して）

ふし-ど 臥所【名】夜臥す所。ねどころ。ねどこ。ふしどころ。山家「みまくさに原の小薄しがふとてふしどあせぬとしか思ふらん」

ふしどころ 臥所【名】前條に同じ。〔古語〕元輔集「津の國の難波のあしのうたた寢はふしどころこそなほりなけれ」

ふしどめ 節止【名】建築用などの木材の節より、樹脂（ヤニ）の出づるを防ぐために、ペンキを塗る前に、節にのみ、油樣の物を塗ること。

ふしなが-ぎぬ 節長絹【名】越中國東礪波（トナミ）郡の井波（ヰナミ）町・城端（ジヤウハナ）町、婦負（ネヒ）郡の八尾（ヤツ）町、下新川（シモニヒカハ）郡の魚津（ウヲツ）町等の地より織り出す、一種の節絲織。生絲を經（タテ）に、節絲を緯（ヨコ）にせし平織。衣服の裏地に用ふ。

ふしなし 節無【名】用材などの、節の無きこと、又その物。「檜（ヒノキ）の節無」

ふしなはめ 伏繩目・節繩目・捕繩目・捕索目・附子繩目【名】『伏繩目の繩といふべきを略したるにて、言葉長きに過ぐるためなるべしといふ』鎧又は腹卷の繩し方の一。白と淺葱（アサギ）と紺との三筋の手綱染に似て、つづら折に相並べるさまに、染革を用ひたるもの。盛衰記「大夫坊覺明は、首丁頭巾、伏繩目の鎧を著る」

ふしなまこ ふじ海鼠【名】〔動〕普通のよりは大なる、一種の海鼠。食用とす。

ふし-なまり 節訛【名】助辭の發音のなまり。世子申樂談儀「てには の字の訛りたるが節なまりなり。文字の訛りたるが文字なまりなり」

ふし-なむ 伏並む【動四自】伏して並び列なる。埋立部（ウメタテベ）「すいがいなどの伏しなみたる」

ふじなやき 布志名燒・富士名燒【名】**いつもやき**（出雲燒）を見よ。

ふしに【名】〔植〕**ほほのき**（厚朴）に同じ。

ふし-にんじん 節人參・節參【名】〔植〕**ちぼにんじん**（七葉樹葉人參）に同じ。

ふじ-ぬま 富士沼【名】〔地〕駿河國浮島（ウキシマ）沼の異稱。

ふし-の-き 鹽膚木・鹽麩木・膚木【名】〔植〕**ぬるで**（鹽膚木）に同じ。

ふじ-の-けぶり 富士烟・富士煙【名】名香の一。花筐（ハナガタ）に似たるもの。

ふし-の-こ 五倍子粉【名】**ふし**（五倍子）を見よ。「銘の一。」

ふじ-の-しろざけ 富士白酒【名】白酒の一。新古今「時知らぬ山はふじのねいつとてか鹿子（カコ）まだらに雪の降るらん」

ふじ-の-ね 富士嶺【名】〔地〕**ふじさん**（富士山）■に同じ。

ふし-の-むし 五倍子蟲【名】〔動〕**ふしむし**

ふじ-の-やま 富士山【名】〔地〕■**ふじさん**（富士山）■に同じ。伊勢「ふじの山を見れば、五月のつもごりに、雪いと白う降れり」■紋所の一。腰高なる富士山の下部に、雲影を描き添へたるもの。

ふじ-のり 富士海苔【名】〔植〕『駿河國富士川に多く產するよりいふ』**かはあをのり**（川青海苔）を云ふ。〔駿河國の方言〕

ふし-ば 伏葉【名】伏したる葉。新千載「穗に出でし菜の伏葉の下みだれ入江の浪に朽ちは果つとも」「に同じ。

ふじ-は 富士派【名】**こうもんは**（興門派）

ふし-はかせ 節博士・節拍・墨譜【名】『もと音博士の施ししものなるより博士と名づくとぞ』諸物（クダモノ）の文の傍に、節づけのために、墨にて施したる點。はかせ。ごま。鳳來六部集（放屁論）「序破急・開合・節はかせの鹽梅（アンバイ）を知らざれば、新淨瑠の文句を殺し」「て造れるもの。

ふし-はず 節筈【名】矢の筈の、竹の節に

ふじ-はたを 富士旗竿【名】〔植〕『富士山に多く生ずるよりいふ』十字花科に屬する草。高さ四五寸、根葉は篦形にして尖り、深き鋸齒あり。莖葉は披針形にして、粗鋸齒あり。莖葉共に毛茸を有す。夏季、大形・白色の花を著け、總狀花序を綴る。中部以北の高山に生ず。

ふし-ばち 沒食子蜂【名】〔動〕『五倍子（ブシ）蜂の義』蜂類の一。植物の莖・葉などを刺して、その組織中に產卵し、五倍子（ブシ）と同樣に、單室（ニツ）を含む林檎狀の物を生ず。原產地は小亞細亞。體長、僅かに一二分、體は肥大にして、十數節より成り、翅は弱くして、腹部に產卵管を有す。幼蟲は、產みつけられた植物の組織を食し、後、羽化して脫出す。

ふじ-はっこ 富士八湖【名】〔地〕富士山の麓に散在せる八つの湖、卽ち駿河國の浮島沼、相模國箱根山中の蘆ノ湖（アシ）、甲斐國の川口湖・山中湖・西湖・本栖湖（モトスコ）・精進湖（シヤウジ）・四尾連湖（シビ）。又、蘆湖の代りに、信濃國の諏訪湖を數ふることあり。

ふし-はら 柴原【名】柴の一面に生えてある原。〔古語〕金葉「しながどり猪名（ヰナ）のふし原風さえて昆野（ヰヌ）の池水こほりしにけり」

ふし-はらひ 節拂【名】蒔繪製作の工程中、錆塗を施して、その乾きたる後、表面の小凸起などを、炭にて研ぎ去ること。

ふじ-びたひ 富士額【名】額の生際（ハエギハ）の、富士山の頂に似たるもの。女子にありては、愛らしく見えて、世俗喜ぶ。

ふし-ぶし 父執【名】**ふしつ**（父執）を見よ。

ふし-ぶし 節節【名】■かの節、この節。毎節。■〔商〕**まいせつ**（毎節）に同じ。

ふじふぶん 不十分【名】十分ならぬこと。不充分。

ふしべ 贅【名】**ふすべ**（贅）に同じ。〔古語〕

ぶしほ【名】**ぶしやう**（不精）の訛。落葉千句「身にしむは子持が母のぶしほさよ」

ふし-ぼね 節骨【名】骨のふしをなせる所。關節の骨。

ふじまうで 富士詣【名】**ふじまゐり**（富士參）に同じ。俳諧新選千重「かぐや姫の素顏を見ばや富士詣」

ふし-まき 節卷【名】弓の、箆（ノ）の節節を、籐にて卷きたるもの。節節を漆塗にしたるをも擬へていひ、又、丸木弓にありては、所所に籐を卷きて、その形に擬す。平治「黑羽の矢負ひ、節卷の弓持ちて」

ふし-まち 臥待【名】次條の略。康資王母集「竹のよ中に出づる月かな……更けにけりこやふし待の程ならん」

臥待の月【句】■「寢待（ネマ）の月」に同じ。源氏「ふし待の月、はつかにさし出でたる、心もとなしや」■陰曆二十日以後の月。平治「未だ夜半のことなれば、臥待の月もさし出でず」

ふし-まつ 臥松【名】臥したる松。橫になりて、地を這へる如きさましたる松。晉書「岸なだれ岩にもたるるふし松のこれより後は風さわぐとも」

ふし-まつ 不始末【名】始末のよからぬこと。不體裁。

ぶし-まつ 不始末【名】前條に同じ。八笑人「いやはや、不始末な事だぞ。……なぜ、さう氣が利かねえなう」

ふじ-まつ 富士松【名】〔植〕■**からまつ**（唐松）■に同じ。■**ふじまつぶし**（富士松節）の略。「次條の略。

ふじまつ-さつま 富士松薩摩【名】〔人〕

ふじまつ-さつまのじょう 富士松薩摩掾【名】〔人〕音曲家。宮古路（ミヤコヂ）豐後掾の

門人。初、宮古路加賀太夫といへり。遂に一派の曲節を出だし、世に富士松節といふ。享保頃の人。

ふじまつ-ぶし 富士松節【名】淨瑠璃の一派。享保の頃、富士松薩摩掾の始めたるもの。鶴賀節、新内節は、皆、この支流なり。ふじまつ。

「桃」に同じ。

ふじ-まめ 富士豆【名】〔植〕**こけもも**（苔桃）

ふし-まろぶ 臥轉ぶ【動四自】あなた・こなたに轉ぶが如く伏す。ふしころぶ。 宗穂

「涙を流してふしまろびたまふ」

ふじ-まゐり 富士參【名】富士山を神として、これに參詣すること。これを終へて歸途に就くを、富士戻（フジモ）といふ。ふじまうで。 鷹筑波「足よわき人のいらざる富士參」

ふしみ 伏見【名】〔地〕大和國生駒（イコマ）郡にある村。もと添下（ソフノ）郡に屬し、菅原の一部なりしに、今、菅原は却つて、その大字となりて存す。古今「いざここにわが世は經なん菅原や伏見の里の荒れまくもをし」 ㊁〔地〕山城國紀伊郡にある町。京都の南二里十八町。淀川舟運の要衝に當り、兵營、郡役所等あり。古は、伏水とも書きたり。 萬葉「おほくらの入江とよむなり射目人（イビト）の伏見の田居に雁渡るらし」 ㊂謠曲の一。伏見の翁と伏見稻荷の神德との事を作れるもの。

ふしみ 臥見【名】古、宮中祕藏の箏の銘。 拾芥抄「名物、箏、臥見」 增鏡「攝政殿箏（ふしみといふ名物）、右大將公顯琵琶（玄上）」

ふし-み 不仁身・不死身【名】打たれても痛まず、切られても血出でずといふ、殆ど感覺の無き身體。

ふしみ 富士見【名】〔地〕信濃國諏訪郡にある村。鐵道中央線の一驛。海拔三一三五尺。東南に、甲府盆地を隔てて、富士山を展望し、近時暑を避け、來遊する者多し。

ふしみ-いなり 伏見稻荷【名】**いなりじんじゃ**（稻荷神社）に同じ。

ふしみ-いなりじんじゃ 伏見稻荷神社【名】〔地〕信濃國諏訪郡にある村。鐵道中央線の一驛。海拔三一三五尺。東南に、甲府盆地を隔てて、富士山を展望し、近時暑を避け、來遊する者多し。

ふしみ-がくかう 伏見學校【名】德川家康の、僧俗の入學を勸めんがために、下野國足利學校の住職三要を呼びて、山城國伏見に建てし學校。圓光寺といひ、後、愛宕（アタゴ）郡一乘寺村に移す。

ふしみ-がは 伏見川【名】〔地〕山城國宇治川の下流を伏見の邊にて呼ぶ稱。

ふしみ-ぐさ 伏見草【名】山城國伏見にて刈りたる草。七二職人歌合「草かり。伏見草とて、世にもてなさるるみまぐさよ」

ふしみ-さいぎやう 富士見西行【名】西行法師の行脚の姿に擬したる後、むきの僧が、富士山を眺めゐる姿を描ける畫。

ふしみ-ざけ 富士見酒【名】昔、攝津國の池田・伊丹（イタミ）にて釀造したる酒を、樽に詰め、船に載せて、富士山の見ゆる邊まで漕ぎ來り、それより漕ぎ戻して、上方（カミガタ）に鬻（ヒサ）ぎたる酒。

ふしみ-さんけい 富士見三景【名】〔地〕甲斐國に於ける富士山眺望の勝地なる北巨摩（キタコマ）郡日野春（ヒノカセ）村の花水坂と、南都留（ツル）郡・東八代（ヒガシヤツシロ）二郡の堺にある御坂（ミサカ）峠と、南巨摩郡萬澤（マンザハ）村の西行坂との總稱。花水坂は、別に新道開けしため、今は通行者稀なり。

ふしみ-さんすん 伏見三寸【名】葛籠（ツヅラ）の、小くして、經緯共に藤蔓を用ひて丈夫に編み、德川時代に、主に婦女の婚嫁に必要なる衣類を納るるに用ひしもの。五人女「伏見三寸の葛籠（ツヅラ）一荷（カツ）、糊地の挾箱一つ」

ふしみ-さんねんばん 伏見三年番【名】德川幕府の職制の一。慶長十二年より元和二年まで、伏見城に、六組を以て、三年づつ輪次に勤番せし大番組。

ふしみ-じふさんしう 富士見十三州【名】富士山を中心として、これを展望し得る、十三箇國。じふさんしう（十三州）參照。

ふしみ-じやう 伏見城【名】豐臣秀吉の山城國伏見の伏見山に築きし城。文祿二年に工を起し、四年に落成し、慶長元年には、秀吉、牙營を移ししが、四年城中に薨ぜしより、秀頼は大阪城に徙り、家康、ここにありて、かりに國事を視、關ヶ原の役後、修造を加へ、子秀康を置きて、京畿を鎭壓す。豐臣氏亡びし後、元和六年毀たる。内郭は、中央即ち伏見山の頂にあり、城毀たれて後、その跡に、多く桃樹を植ゑしより、桃山と稱す。一名、桃山城。

ふしみ-じやうだい 伏見城代【名】德川幕府の職制の一。慶長十二年より元和五年まで、伏見城にありて、その守護に任ぜしもの。

ふしみじやうるすゐ 伏見城留守居【名】德川幕府の職制の一。元和九年伏見城にありて、その留守に任ぜしもの。

ふしみ-しろざけ 富士見白酒【名】『ふじみざけ（富士見酒）を見よ』 伊賀越道中雙六「東路に此處も名高き沼津の里、富士見白酒、名物を、一つ召せ、召せ」

ふしみ-せん 伏見錢【名】元文元年山城國伏見にて鑄造せし寛永銅錢。銅質白色。徑八分、重量八分。

ふしみ-だ 伏見田【名】山城國伏見の町。 謠曲（飛鳥川）「伏見田・鳥羽田（トバダ）の、これは都に近きたやめの」

ふし-みづ 伏水【名】流れぬ水。 夫木「ふし水や川添うつぎ花咲きて浪は垣根のものとこそ見れ」 謠曲（飛鳥川）「さすや潮もまじる早苗は住吉の岸田、入江にまかせし難波田の伏水」

ふしみてっせん 伏見鐵錢【名】明和四年より同六年まで、山城國伏見にて鑄造せし寛永鐵錢。徑八分五厘弱、重量一匁。

ふしみてんわう 伏見天皇【名】〔人〕第九十二代の天皇。御名は熙仁（ヒロヒト）。後深草天皇第二の皇子。御母は玄輝門院藤原愔子（ヨシコ）。在位十一年（紀元一九四八―一九五八）。文保元年崩ず。壽五十三。世に持明院殿といふ。

ふしみ-どの 伏見殿【名】㊀古、山城國伏見にありし離宮。南は宇治川に臨み、眺望絕佳の地を占め、上（カミ）の御所と下（シモ）の御所とに分れたり。上の御所は、今、月橋（ツキハシ）院と大光明寺との存する處、その址にして、もと藤原俊綱（頼通の子）の山莊たりしが、後、長講堂の傳領となり、下の御所は、船戸（フナト）御所ともいひ、今の材木濱町松林院のある邊、その址にて、もと持明院に屬せしを、共に後嵯峨天皇の領したまふ所となり、兩統分裂の後は、持明院流の皇統に相傳するに至り、伏見・後伏見二院も、ここに住したまへり。 增鏡「兩院、一つ御車にて伏見殿へ御幸なる」 太平記「荒れて久しき伏見殿」 ㊁京都舊御所の北邊、一條・東洞院（ヒガシノトウイン）の東南の角にありし殿邸。嘉吉より康正に渉りて、花園天皇の皇居たりき。長講堂に附隨して、後世、伏見宮に傳領せしなるべしといふ。 ㊂京都舊御所の南邊、土御門・高倉の西南角にありし殿邸。もと三條公光の邸なりしを、前項の伏見殿、皇居となりしため、その舊名を移ししもの。 **ふしみのみや**（伏見宮）參照。

ふじみなみ 富士南【名】『富士山の方より吹き來るとの意にていふ』 西南の風。

ふしみ-にんぎやう 伏見人形【名】**ふしみやき**（伏見燒）を見よ。

ふしみ-の 伏見野【名】〔地〕山城國伏見にある野。 謠曲（融）「伏見野・竹田・淀・鳥羽も見えたりや」

ふしみ-のおきな 伏見翁【名】古、大和國の伏見にありきといふ一人の翁。 神社考「伏見の翁は、未だそのいづくの人たるを詳かにせず、常に大和國平城（ナラ）菅原の傍の岡に臥して、三年まで起きず、また言はず、人、以て唖者となす。時時首を揚げて、東を觀る。一旦起きて、舞歌して曰く、時なるかな、時なるかなと。人、その故を識らず、その後、また翁の行く所を知らず。世に、その臥したる所を號して、伏見の岡といふ。いはゆる菅原や伏見の里、これなり。或はいふ、天平八年、伏見の老翁、行基菩薩と菅原寺に入つて相語る。二人立つて舞ふ、舊友の如し。その頭を擧げて、東方を見るものは、蓋し東大寺を指すなり」と。とにかく大和國にての事なるを、謠曲「伏見」には、山城國伏見の翁の意に取りなして作れり。

同じ。

ふじみ-の-ちん 富士見亭【名】ふじみはうざう(富士見寶藏)に同じ。

ふじみ-の-みや 伏見宮【名】『榮仁親王は、伏見天皇・後伏見天皇の裔にて、伏見殿㊀に居られしよりいふ』崇光天皇の皇子榮仁(ヨシヒト)親王より出でたる宮家。舊四親王家の一。初、親王、宮號を有栖川と賜はりしが、後、現稱に改む。皇室の宗家及び有栖川宮以外の宮家は、すべて、この宮の分家なり。

ふじみ-の-ももやま-の-ひがし-の-みささぎ 伏見桃山東陵【名】明治天皇の皇后昭憲皇太后の陵。京都府紀伊郡堀内(ホリノ)村大字堀内字古城山に在り。伏見桃山陵の東に位す。

ふじみ-の-ももやま-の-みささぎ 伏見桃山陵【名】明治天皇の陵。京都府紀伊郡堀内(ホリノ)村大字堀内字古城山に在り。伏見桃山東陵と相列び、縦は十五間、横七十間、正面に華表あり。この地、伏見城の故址に屬し、天皇生前に選みおかせたまひし所といふ。

ふじみ-の-をか 伏見岡【名】〔地〕ふじみのおきな(伏見翁)を見よ。

ふじみ-の-をの 伏見小野【名】〔地〕ふじみ(伏見野)に同じ。夫木「深草の里の夕月かよひ來て伏見の小野に鶉鳴くなり」

ふじみ-はうざう 富士見寶藏【名】『その地、太田道灌の望士樓・慕景樓などありし址に當り、富士山を展望し得しよりいふ』江戸城中、紅葉山の下に在りて、徳川氏累代の文書・珍寶を藏めし藏。寛永十六年(一説に十七年)の築設に係る。

ふじみはうざう-したばん-くみがしら 富士見寶藏下番組頭【名】次條を見よ。

ふじみはうざうしたばん 富士見寶藏下番【名】ふじみはうざうばん(富士見寶藏番)を見よ。

ふじみはうざうばん 富士見寶藏番【名】前條に同じ。

ふじみはうざうばん-がしら 富士見寶藏番頭【名】前條に同じ。

ふじみはうざうばん-の-かしら 富伏見寶藏番頭【名】前條に同じ。

ふじみばん 富士見番【名】徳川幕府の職制の一。天正十八年、徳川家康の關東入國に隨從して、三河國より江戸に下り、江戸城内樋之間・虎之間の二箇所に在番し、慶長十九年、秀忠の大阪出馬の際、埋口富士見樓下に番所を設けて、勤番せしもの。後、元祿十五年、寶藏番と合して、富士見寶藏番となる。

ふじみばん-がしら 富士見番頭【名】ふじみはうざうばん(伏見寶藏番)を見よ。

ふじみ-ぶぎやう 伏見奉行【名】徳川幕府の職制にて、遠國奉行の一。老中支配の下に、山城國伏見の政務を行ひ、宇治・伏見・木津等の川筋の船舶を管轄し、又京都町奉行と共に、近江・丹波兩國に在る幕府直轄地の民政に當りしもの。大名これに任ぜられ、與力・同心・牢番、その下に屬したり。慶長五年設置せられ、元祿九年、廢せられて、京都町奉行の兼職となり、同十一年舊に復して、慶應三年に及べり。

ふじみ-ぶね 伏見船・伏見舟【名】山城國伏見を起點として發著する淀川がよひの船。季鳥「初雪に人ものぼるか伏見船」

ふじみ-ます 伏見枡・伏見升【名】慶長年間に製せし一種の枡。徑五寸、深さ二寸五分弱。その一升は、京枡の九合六勺八才一二五に相當したり。

ふじみ-まめ 伏見豆【名】〔植〕いんげんまめ(隱元豆)を云ふ。〔大阪の語〕

ふじみ-やき 伏見燒【名】山城國紀伊郡

呼びて、人形屋幸右衛門といひ、他の工人も、その技を傳へて、今に至れり。造る所、玩弄用の人形・禽獸、祭器に供する壺・壺の類に過ぎざれど、その製、古雅なり。

ふじみ-やき 不二見燒【名】明治の初、村瀬八郎右衛門が名古屋にて燒きし陶器。質やや硬くして、光澤あり。

ふじみ-やぐら 富士見櫓【名】ふじみはうざう(富士見寶藏)に同じ。

ふじみ-やま 伏見山【名】〔地〕山城國伏見町の東方にある山。東は木幡(コハタ)山に連なり、南は巨椋(オグラ)池に臨み、北は大龜谷(オホカメ)を限とし、その最高處を桃山といふ。明治天皇及び昭憲皇太后の御陵あり。補遺「伏見山いくよろづ代も枝添へて榮えん松の末ぞ久しき」「行に屬せし牢番。

ふじみ-らうばん 伏見牢番【名】伏見奉行に屬せし牢番。

ふじむくわん 府事務官【名】朝鮮の各道の府に置くを得る地方官。府尹の命を承けて、府務を掌るもの。奏任とす。

ふじむし 五倍子蟲【名】〔動〕蚜蟲(アブラムシ)の中、鹽膚木(ヌルデ)の葉又は枝端に寄生して、五倍子を造る種類。ふしのむし。ごばいしちゅう。

ふしん 普請【名】『普請の字の宋音』㊀〔佛〕『敕修清規送亡に「白二大衆、弼龍、普請送亡」とあり』禪寺にて、大衆を集むること。㊁〔佛〕『僧史略の上卷に「共作者、謂二之普請一、傳燈錄禪門規式に「行二普請之法一、上下均レ力也」とあり』禪寺にて、普く大衆を請來して、採草・採薪・掃地・耕作等を爲すこと。㊂寺にて、檀家に寄付を請ひて、基塔を建つること。㊃建築。土木。作事。㊄城壁・堤防・墻垣などの修築。(殿舍・堂塔などを造作するは、作事といひて區別せり)〔武家時代の語〕㊅(つく度ごとに汁はじくじく(ごふ句に)日よりわるき堤の普請出來かねて」

ふしん 普請鳴物(ナリモノ)停止(チヤウジ)【句】徳川幕府時代に、國家の重大なる喪ある時、一

忠實ならぬこと。㊁〔佛〕信心の無きこと。不信仰。徒然「强ひて、不信といふべからず、仰ぎて、これを尊むべし」海道記「不信の雲に蔽はれて、感應の月顯れざるか」

ふしん 不臣【名】臣たる道を守らぬこと。いぶかしきこと。疑しきこと。ふしぎ。曾我「和殿は、何を不審して、この程はるかに見えたまはぬぞ」㊁嫌疑を受くること。和合人「そばへ行き、よくよく見れど、艾(モグサ)は殘らず立ちてある故、いよいよ不審晴れず」㊂相手の起居を尋ね問ふこと。〔書簡文などに用ふる語〕

ふしん 不審【名】㊀つまびらかならぬこと。疑しきこと。ふしぎ。㊁嫌疑を受くること。㊂相手の起居を尋ね問ふこと。〔書簡文などに用ふる語〕

不審が立つ【句】不審に思ふ心起る。疑念生ず。不思議が立つ。倉根崎心中「阿呆口を叩いて、人が聞いても、不審が立つ」

不審を立つ【句】不審に思ふ。疑問を起す。不思議を立つ。太平記「大衆の立てつる所の不審、一一に……答へける」

ふしん 不振【名】振ひ起らざること。勢の盛んにならざること。振興せざること。「綱紀不振」「事業不振」

ふしん 腐心【名】くしん(苦心)に同じ。

ふしん 負薪【名】たきぎを背おふこと。負薪の憂【句】『禮記の曲禮下篇に「君使二士射一、不レ能則辭以レ病、言曰、某有二負薪之憂一」とあり。薪を負ふは、賤者の務にて、これを爲すに堪へぬ意なりとも、これを爲したるため、疲勞して、病む意なりともいふ』おのが病の謙稱。

ふしん 負薪之憂【句】太平記「病氣身を侵して、負薪の憂未だ休まざるに」

負薪の資【句】『後漢書の袁紹傳に「臣以二負薪之資一、抜二于陪隷之中一」とあり』わが天賦の性質の謙稱。

ふじん 婦人【名】をんな。をうな。女子。

婦人解放【句】『英 Emancipation of woman』在來の道德習慣に依れば、婦

人は男子に對して、主從もしくは奴隷的關係に在りしが、斯かる因襲的羈絆を脫し、一箇の人間として、その地位を男子と同等に向上せしむるため、新しき道德を主張すること。

婦人參政【句】『英 Woman suffrage』男女同權の立場より、婦人の、その地位を向上せしめ、男子と等しく國政に參與すること。

婦人の仁【句】『史記の淮陰侯傳に「韓信曰、項王……、人有二疾病一、涕泣分二食飲一。至下使レ人有レ功、當二封爵一者上、則刓弊忍不レ能レ予。此所謂婦人之仁也」とあり』一小き慈悲。姑息なるめぐみ。二女子は、僅かなる事に感動して、他に慈惠を施せども、大事につきては、目の屆かぬこと。「の手に死せず」を見よ。

婦人の手に死せず【句】「男子は婦人の手に死せず」を見よ。

ふじん 夫人【名】一『史記の刺客傳に「進二百金一者、將下爲二夫人一麗靡之費上、得下以交二足下之歡一也」、後漢書の廉恭傳の註に「汝南記云、元義謂レ人曰、此我婦非レ有二他過一、家夫人、遇レ之實酷」と見ゆ』古、支那にて、他人又は自己の母の敬稱。二『周禮の考工記に「夫人以勞二諸侯一」、曲禮に「天子之妃曰二后一、諸侯曰二夫人一」とあり。夫は扶にて、夫(ソフ)を扶くる義』古、支那にて、天子の妃(后の次位)、又は諸侯の正妻。三我國大寶令の制に於ける後宮の稱號の一。妃に次ぎしもの。卽ち後世の女御に當る。日本書紀反正天皇の卷に皇夫人の名見え、敏達・欽明兩天皇の卷にも、夫人の名見えたれど、未だ定まれる名稱にてはあらざりしに、大寶令にては、定員三人、位は三位以上と定まり、その天皇の御生母たるものは、皇大夫人と稱したり。淳和天皇以後、この稱號、廢絕せしものの如し、ただ、藤原不比等(フヒト)の室縣犬養(アガタイ)橘三千代(ミチヨ)に對し、光明皇后の御生母たるによりて、この稱號を用ひし特例あるのみ。四支那及び我國にて、貴人の妻。おくがた。

ふ-じん 富人【名】ふしや(富者)に同じ。

ふ-じん 不仁【名】一なさけの心なきこと。慈愛の心なきこと。二『後漢書の班超傳に「兄年七十、兩手不仁」とあり』手足などの麻痺して、無感覺となること。

ふじん(不仁身)參照。

ふ-じん 不盡【名】一つきぬこと。たえぬこと。「不盡の妙味」二『言ひ盡さぬ義』

ふいつ(不乙)一に同じ。「草草不盡」

ふ-じん 武臣【名】武事を以て仕ふる臣。(文臣に對して)

武臣、死を惜しまず【句】「文臣錢を愛せず、武臣死を惜しまざれば、天下平なり」を見よ。

ふ-じん 武神【名】いくさがみ(軍神)に同じ。

ぶ-じん 武人【名】武事にたづさはる人。さぶらひ。もののふ。軍人。武士。(文人に對して)

ふしんあん 不審庵【名】京都市上京區小川頭なる茶道表流の宗匠千宗左の邸内にありし茶室。天明の火災に燒失し、その後再興したれど、近年又燒けたり。

ふじん-いしや 婦人醫者【名】一婦人病の醫者。婦人科の醫師。二婦人にて、醫師たる者。女醫。

ふじん-かいはう 婦人解放【句】ふじん(婦人)の條下を見よ。

ふしんかう 不信仰【名】ふしんじん(不信心)に同じ。

ふしんかた 普請方【名】一室町幕府及び德川幕府の職制にて、普請奉行の屬僚の一。德川幕府の職制にては、寬政元年の創置に係り、二十俵高、役料三人扶持、燒火間(タキビ)詰、同心百人、これに隷屬したり。二普請に從事する職人、卽ち大工・左官など。家職人(ヤシキ)。〔京都・大阪の語〕

ふしんかた-あらためやく 普請方改役【名】德川幕府の職制にて、普請奉行の屬僚の一。定員四人。百俵高、役料七人扶持、明和五年の創置。

ふしん-がまし 不審がまし【形ニ】不審に思ふ樣なり。不審らし。

ふしん-がみ 不審紙【名】讀書中の不審なる所に貼りつけて、標とする紙。多くは、紅唐紙(カウカラ)を用ふ。きのふはけふの物語「これは不審とて、合點のゆかぬ所に附けて、後に師匠に問ふために附ける。それによりて、不審紙といふ」

ふじん-きしや 婦人記者【名】女にて、新聞・雜誌の記者を職業とせるもの。

ふじん-くわ 婦人科【名】婦人病の治療に關する醫術。

ふじん-くわい 婦人會【名】婦人のみにて組織する團體、又は會合。

ふじん-けうふうくわい 婦人矯風會【名】明治十九年、木村鐙子・鬼頭(キトウ)ます子・矢島楫(カヂ)子等の、米國人レビット女史の來朝勸說に動かされ、我國婦女子の弊風矯正を目的として設立せし會。

ふじん-こどもふく 婦人子供服【名】婦人服と子供服と。

ふじんこん-すう 不盡根數【名】『數』『英 Surd number』その數、零以下盡くることなきよりいふ』無理數の一種。正の有理數のn乘根が、他の有理數に等しからざる時の、そのn乘根。例へば$\sqrt{2}$、$\sqrt[3]{5}$などの類。整數のn乘根は、整數又は不盡根數にして、分數に等しきことなし。

ふしん-ごや 普請小屋【名】建築の準備として、その材木の切組をなすために設けたる小屋。

ふしんざっし 婦人雜誌【名】女の讀むために發行する雜誌。

ふしんさんせい 婦人參政【句】ふじん(婦人)の條下を見よ。

ふしんさんせい-うんどう 婦人參政運動【名】『英 movement for woman suffrage』婦人參政の權利を得んとする社會運動。この目的貫徹の運動は、英國に於て最も盛なり。

ふしん-したふぎやう 普請下奉行【名】室町幕府繼田家及び德川幕府の職制にて、普請奉行の屬僚の一。室町幕府と繼田家とのは、臨時の職、德川幕府のは、明和五年以來常置し、定員二人、百俵高、役料十人扶持、手當金八兩。

ふ-しんじつ 不眞實【名】眞實ならぬこと。

ふしん-しゆう 普請衆【名】昔時、土砂の運搬、地ならしなどの人夫を出すことを取り扱ひし大名御家人。

ぶ-しんじん 不信心【名】信心せざること。信心の足らざること。不信仰。無信心。太祇『達磨忌や宗旨代代不信心』

ふしん-すう 不盡數【名】『數』『英 Incommensurable number』むりすう(無理數)に同じ。

ふしんせい-ふさくねはん 不眞正不作爲犯【名】『法』不作爲に依る作爲犯、卽ち不作爲に依る禁令違反の罪。例へば、母が、幼兒に乳を與へずして、これを殺したる罪などの類。(眞正不作爲犯に對して)(不作法)に同じ。著聞『この兒(チゴ)は無進退の人にて」

ぶ-しんぢゆう 不心中【名】心の底をうちあけぬこと。うちとけぬこと。ぶしんてい。(男女の間又は男色の上にいふ)天の綱島『不心中か、心中か、誠の心は、女房の一筆の奥深く』同『小春どのに、不心中、けしほどもなけれども」

ぶしんぢゆう-もの 不心中者【名】心の底をうちあけぬ者。いつはりもの。天の綱島『あの不心中者、なんの死なう」

ぶ-しんてい 不心底【名】ぶしんぢゆう(不心中)に同じ。櫻鷗『恨鮫鯛』あいつばかりは、ああした不心底があらうとは、微塵(ミヂン)聊か思はねども」「信任なきこと。

ふしん-にん 不信任【名】信用せぬこと。

ふしん-ば 普請場・普請塲【名】建築するにつきて構へたる所。建築場。

ふじん-びやう 婦人病【名】しきゆうびやう(子宮病)に同じ。

ふしん-ぶぎやう 普請奉行【名】武家時代の職制の一。土木その他の工事を管せしもの。鎌倉幕府にては、土工等の事あるに當り、臨時に奉行人を定めて管掌せしが、室町幕府にては、職名定まり、作事奉行と並びて土木・建築等の事を分掌し、配下に普請下奉行・普請方等を置けり。

徳川幕府の時は、初は工事ある度ごとに、臨時使番等その他より兼帯して、人員も定まらず、單に總普請奉行と稱するにとどまりしに、承應元年より常置の職となり、定員二人にて、作事奉行・小普請奉行と併せて、下(ノ)三奉行と稱し、老中支配の下に、溝渠の疏鑿、その他、主に土工に關する、上水道・武家屋敷等の事をも掌り、普請方下奉行・普請改役・普請方・同心・地割役等、これに屬したり。堀川狂歌集「名字をば乃の字とやいはん杖突きて橋かけさする普請奉行を」

ふじんふく 婦人服【名】婦人の著用する洋服。

ふじんふく 婦人服【名】婦人の著用す

ふじんもの 不仁者【名】不仁なる人。なさけ心の無き人。會我會稽山「小舅をしとめんとする程の不仁者」

ふじんもんだい 婦人問題【名】㊀『英 Woman's problem』婦人の、個人として、又は社會の一員としての、精神上・物質上の要求に關する問題。㊁婦人との情交に關する評判。

ふじんやく 普請役【名】武家時代に、普請のため、大名・諸士等に課せし夫役(ブヤク)。

ふじんやく 婦人藥【名】婦人病の藥。

ふじんやしなひぐさ 婦人養草【名】〔書〕婦人の訓となるべき事、貞女・義婦の例などを說きたるもの。五卷。荻野元亮の著。

ふしんよう 不信用【名】信用の無きこと。あてにせられぬこと。

ふしめ 節目【名】節のある所。轍本「岸の上をさよなど見ればあぢきなく竹のふし目に泣かれぬるかな」

ふしめ 伏目【名】㊀うつむきて、物を見ること。俯視。字鏡「低視、邪見逆見也、不志目」發心集「誠には捨てがたき命なれば、おのおの色を作りて、伏目になりつつ、獨として、われ代らんと思へるけしきなし」㊁ややうつむく加減。

ふじもどり 富士戻【名】ふじまゐり(富士參)を見よ。柳樽「清姫をひっさげて來る富士もどり」

ふしもの 賦物【名】〔文〕連歌・俳諧にて、或種類の語を、各句に隱し含めて用ふべしと定めて作ること。和歌の「物の名」より脫化せしものにて、畢竟一種の言語上の戲に過ぎず。例へば「契りしのみや變らざるらん(爲氏)」は、山城國の名所を賦する連歌の中に「四宮河原(シノミヤガハラ)」を賦せしもの、又上賦・下賦として「何路」「山何」などの賦物を定め、その「何」といふ字に代るべき字、即ち「路」「山」等の字と連續して、熟字をなすべき字を、句中に詠み込みて、「あふち咲く野は紫の梢かな(救濟)」「身にしむは花の香なれや春の風(龍忠)」などいふもあり、又三字中略として「ちどり」(鴾)を「ちり」(塵)と取り、二字反音として「たつ」(龍)を「つた」(蔦)に取り、一字露顯として「ね」(寢)を「ね」(音)に取る等あり、又三字上略・三字下略・四字上下略などもあり、後には、一字重轉(「詩」を「しし」、「矢」を「やや」の類)・二字除偏(「鱈」を「雪」、「松」を「公」の類)・除冠(「灰」を「火」の類)・加冠(「舜」を「蕣」の類)の如き奇怪なるものも生じたり。七一雜人歌合「戀ひわびて神に手向のつらね歌逢坂山をふし物にせん。」山を賦物にて、會坂(アフサカ)の手向よき連歌のよりあひ、神明納受の法樂なるべし」慶長本節用集「賦物、ふしもの」

ふしもの 賦物を取る【句】賦物の題に上りて、適當なる語を選む。

ふしもんど 富士門徒【名】日蓮宗の富士派の門徒。

ふしや 富者【名】富める人。財ゆたかなる人。富人。

ふしや 府社【名】神社の格式の一。國幣社の次、鄉社の上に列し、縣社と同等にて、社司・社掌の職員を置き、府より幣帛を供進するもの。

ふしや 布灑【名】㊀北方を司るといふ星。㊁ふしやにち(布灑日)の略。

ふしや 不捨【名】〔佛〕佛が、慈悲を以て、信心者を救ひて捨てざること。海道記「願海不捨の舟に掉さして彼岸に至り」不捨の誓約【句】〔佛〕阿彌陀如來の四十八願中の第十八願に、他力信心の念佛者を攝取して捨てずとある誓。

ふしや 歩射【名】㊀かちゆみ(徒弓)に同じ。(騎射に對して)「武射」**いつつもの**(五物)參照。㊁次條に同じ。

ぶしや 奉射【名】『神に射を捧げ奉る義とも、又、歩射と書くが元にて、前條のと同義なれど、神事に關する場合なるより、奉射と書くに至れるなりともいふ』神事祈禱のために、社頭に於て、歩立(カチダチ)にて、大的を射ること。射手は、五人を規定とす。

ぶしや 附子矢【名】ぶすや(附子矢)に同じ。

ふしやう 副將【名】ふくしやう(副將)に同じ。

ふしやう 富商【名】財ゆたかなる商人。富裕なる商賈。

ふしやう 府生【名】六衞府及び檢非違使(ケビヰシ)廳などの下官。供奉の官にて、隨身又は衞府の記錄などを司りたり。今物語「口をしきことのたまひけるかな。府生殿を思ひかけて言ひけるにこそ」

ふしやう 府掌【名】㊀古、近衞府・衞門府・鎭守府・太宰府等に屬して、雜事を務めしもの。㊁明治四年府に置かれ、候人を通じ、書疏を達し、使部を檢することを掌りし判任官。同十年廢せられたり。

ふしやう 赴請【名】〔佛〕僧侶が、施主の請を受けて、その齋食(サイジキ)に赴くこと。

ふしやう 負傷【名】きずを受くること。けが。ておひ。

ふしやう 負商【名】はうふしやう(棹負商)を見よ。

ふしやう 覆醬【名】ふうしやう(覆醬)に同じ。

ふしやう 不祥【名】さがなきこと。不吉。

ふしやう 不詳【名】㊀つまびらかならざること。精しく知られぬこと。不審。㊁『易の大壯の象傳に「不ン能ハ遂、不詳也」とあり』前條に同じ。

ふしやう 不正【名】ふせい(不正)に同じ。

ふしやう 不生【名】〔佛〕㊀三界の生(シヤウ)を受けぬこと。無生(ムシヤウ)。**あじほんぶしやう**(阿字本不生)參照。㊁によらい(如來)に同じ。

ふしやう 不生・不滅【句】〔佛〕『涅槃經に「涅曰二不生一、槃言二不滅一、不生不滅名二大涅槃一」とあり』本體論より宇宙を觀察すれば、諸法・萬有は、生滅・流轉(ルテン)の差別を超絕せること。眞如實相の存在。常住。又、小乘にては、涅槃(ネハン)の理に就きてのみこれを觀じ、大乘にては、有爲(ウヰ)の事相の上に於て、直ちにこれを觀ず。衆苦不生・不滅の佛すら、なほ、愛別離苦、有無・去來(コラ)を離れ給はず」

ふしやう 不請【名】〔佛〕㊀他の請求を待たずして、進みて爲すこと。㊁『己が心に請ひ求めざる義といふ。**ふしよう**(不承)㊁參照』心の進まざること。氣の向かぬに、いやいやすること。不精不精(ブシヤウブシヤウ)。方丈「舌根を屈ひて、不請の念佛兩三遍を申して止みぬ」一代女「町衆(チヤウシユウ)は、ふしやうの袴・肩衣を著て、數珠は手に持ちながら、掛目安(カケメヤス)の談合」

不請の友【句】〔佛〕『無量壽經に「爲二諸庶類一作二不請之友一、荷二負群生一、勝鬘經に「普爲二衆生一、爲二不請之友一、大悲安二慰哀愍衆生一」とあり』菩薩の、衆生の請求を待たず、大悲を以て、その友となりて、利益(リヤク)を與ふること。

不請の法【句】〔佛〕『無量壽經の卷上に「以二不請之法一、施二諸黎庶一」とあり』他の請求を待たずして、その機を鑑みて、利益(リヤク)の法を說くこと。

ふしやう 不淨【名】㊀清淨ならぬこと。よごれ。けがれ。ふさう。禁秘抄「雜物中越ン他、以二不淨手一、不レ可レ取」㊁大・小便。㊂ふじやうぼ(不淨場)㊁の略。㊃(種不淨)に同じ。五種の不淨【句】〔佛〕ごしゆふじやう(五種の不淨)を見よ。

ふしやう 不淨【名】〔佛〕五種の不淨に、胎内喰食の不淨、出生場處の不淨を加へていふもの。

ふじやう 不情【名】むじやう(無情)に同じ。玉がつま「かへりて、孔丘が不情をあらはせり」

ふしやう 不上【名】上番せぬこと。

ふしやう 普成【名】〔人〕ふだいし(傳大士)を見よ。諸曲輪藏「南無や、傳大士普建・普成、現受無比樂、後生清淨土」

ぶーしやう 武将【名】㊀いくさの大将。㊁武道に長けたる大将。武将の四天王【句】「人」古の武将の中にて、平維衡(コレヒラ)・源頼信・平致頼(ムネヨリ)・藤原保昌(ヤスマサ)の四人。

ぶーしやう 部将【名】一部隊の大将。

ぶーしやう 不精・無精・不性・無性【名】精を出してせざること。怠りて、なほざりにすること、又その性分。ぶせい。不出精(アンセイ)。芭蕉「不性さやかき起されし春の雨」

ぶーじやう 無状・亡状【名】㊀ぶれい(無禮)に同じ。「亡状を責む」㊁『史記の夏本紀に「視二鯀之治レ水無レ状」とあり』功状の無きこと。特別のすぐれたる所の無きこと。

ぶしやうーかんじやうき 武将感状記【名】「書」武将の得失・優劣・興亡・勝敗等の事蹟を纂めたるもの。十巻。熊澤正興の著。栗原信充の續武将感状記、五巻あり。

ふじやうーぎやう 不浄行【名】「佛」ひぼんぎやう(非梵行)に同じ。

ふじやうーぐち 不浄口【名】下肥(シモゴエ)を汲み取るために、便所の外側下部に設けたる口。

ふーしやうぐん 副将軍【名】ふくしやうぐん(切支丹屋敷)を見よ。

ぶしやうーごま 不精獨樂・無精獨樂【名】心(シン)なく、胴長くして、底尖り、絲にて、胴を打ちてまはす獨樂。尤の草子「めぐる物の品品」たたけばめぐるぶしやうごま」慶筑波「思ひまはせばみな同じ事(こといふ句に)うちたたけ幾つ有っても無性獨樂」

ぶーしやうじ 不精進・無精進【名】精進(シンジン)㊂ならぬこと。犬筑波「精進(ウジン)の汁にまじる不精進(こといふ句に)雉子燒をよくよく見れば豆腐にて」

ふしやうーしふ 習醤集【名】「書」ふうしやうしふ(獲醤集)に同じ。

ふしやうーしや 負傷者【名】負傷したる人。手負の者。けがにん。

ふーしやうしやう 扶省掌【名】古、中務(ナカツカサ)省・治部省・民部省・兵部省・大藏省に置きて、儀式を習ひ、省掌に闕ある時、これを補ひし官職。

ふじやうじゆ 不成就【名】事の成就せざること。

ふじやうじゆーにち 不成就日【名】昔の暦にて、物事の成就せぬといふ日。一月と七月とは三日・十一日・十九日・二十七日、二月と八月とは二日・十日・十八日・二十六日、三月と九月とは一日・九日・十七日・二十五日、四月と十月とは四日・十二日・二十日・二十八日、五月と十一月とは五日・十三日・二十一日・二十九日、六月と十二月とは六日・十二日・十四日・晦日。不就日。

ふじやうーせっぽふ 不浄説法【名】「佛」名聞(ミヤウモン)利益(リヤク)を求めて、不浄なる心にて説法すること。宇治「こはいかに、不浄説法する法師、平茸(ヒラタケ)に生るといふことのあるものを」

ぶしやうーたいへいらく 武将太平樂・武昌太平樂【名】雅樂の一。大食(タイシキ)調に屬する唐樂。鴻門の會の故事に摸したるもの。武将破陣樂。武昌樂。太平樂。

ふーしやうぢき 不正直【名】正直ならざること。いつはり多きこと。

ふじやうーながし 不浄流【名】城内に設け、漆の水を引き入れて、船を浮べ置き、密かに人衆を城外に出すに用ひ、又、城中の不浄物を流し去るに用ふる所。

ふじやうーば 不浄場・不浄塲【名】㊀けがらはしき場所。㊁べんじよ(便所)に同じ。

ぶしやうーはちんらく 武将破陣樂【名】ぶしやうたいへいらく(武将太平樂)に同じ。

ぶしやうーひげ 不精髭・無精髭【名】剃らずに、生え延ぶるままにしてある髭。

ふしやうーぶしやう 不性無性・不精無精【貌】ふしようぶしよう(不承不承)の誤。

ふしやうーふめつ 不生不滅【句】ふしやう(不生)の條下を見よ。

ふしやう-へい 負傷兵【名】負傷したる兵士。手負(テオヒ)の兵。傷兵。

ふしやうほけん 負傷保險【名】しやうがいほけん(傷害保險)に同じ。

ぶしやうーもの 不精者・無精者・不性者・無性者【名】不精なる人。ものぐさ。不精者の一時働(イチジバタラキ)(ヒトヅケ)の節供働」に同じ。「諺語」

ふじやうーもん 不浄門【名】下肥(シモゴエ)汲取人の出入し、又は死者・罪人などを送り出すための門。徳川時代の武家の邸に設けたり。

ふじやうーやくにん 不浄役人【名】罪人を捕ふる役人。例へば、をかっぴき・同心などの類。「徳川時代の語」

ぶしやうーらく 武昌樂【名】ぶしやうたいへいらく(武昌太平樂)に同じ。

ふじやーかぶ ふじや株【名】『ひざかぶ(膝株)の訛』ひざがしら(膝頭)を云ふ。「越後國の方言」

ふしーやく 不死藥【名】「不老・不死の藥」を見よ。空蟬「さりともと、蓬來山へ不死藥取りにわたらん事は」

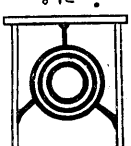
ふしやく 不借【名】『草履は輕微にして、得やすき品なれば、何人も所持して、他に借らざる義』ざうり(草履)の異稱。

ふしやくーしんみやう 不惜身命【句】「佛」『法華經の譬喩品に「若大精進常修二慈念一、不レ惜二身命一、乃可二爲說一」とあり』ふしやくしんみやう(不自惜身命)に同じ。醒睡笑「いかなる不惜身命の行者なれば、この佛閣には住める」

ふし-やなぎ 伏柳【名】伏したる柳。柳の伏木。風雅「よしの川岩波はらふ伏柳はやくぞ春の色は見えける」

ふしやーにち 布灑日【名】星宿の布灑に當る日。その月の中の大吉日なりといふ。ふしや。

ぶしやーまと 奉射的・歩射的【名】奉射に用ふる的。大的なり。


(とまやしぶ)

ぶしやれ 不洒落【名】不氣味なるいたづら事。ざまの悪き洒落。娼妓誹觀「ぶじやれな文句だ。さあ讀めねえ」和合人「下手(ヘタ)地口の鉢あはせ、不洒落の握(カ)みあひ等にて、座中、頻りに浮れ立ちしが」

ぶじやれる 不洒落る【動下一自】ぶじやれなる振舞をなす。八笑人「ええ、ぶじやれるなえ。きたねえ笈(オヒ)から出すのだから、奇麗事でなくっては、いけねえから、折角骨を折って詰めさせたに」

ふーしゆ 不輸【名】ふゆ(不輸)を見よ。

ふーしゆ 浮腫【名】「醫」『羅 Anasarca』血行の障碍又は腎臓の疾患により、皮下組織に漿液瀦溜して、皮膚膨隆するもの。

ふーじゆ 腐儒【名】變通を知らぬ學者。頑固なる儒者。くされ儒者。「ひ。

ふーじゆ 符呪【名】まじなふ術。まじなひ(ユヒ)を、聲を揚げて誦(ジユ)むこと。㊁ふじゆもん(諷誦文)の略。十訓「七條寺にて、諷誦を修(シユ)せられけり」盛衰記「修行者を招請(セウジヤウ)して、唱導を勤めけるに、色色の捧物に、思思に、志を載せたり。その中に、一紙の諷誦あり」

ふーじゆ 不受【名】受けぬこと。受け收めぬこと。「不受不施(セ)」

ぶーしゆ 部首【名】字典にて、索引の頭字。例へば、「仁」「佛」等の字は、部首「人」に屬し、「草」「蓬」等の字は、部首「艸」に屬する類。

ぶーしゆ 部衆【名】部屬の者。ほちぶしゆ(八十分)に同じ。

ふーじゆふぶん 不充分【名】ふじふぶん(不十分)に同じ。

ぶしゆ-かん 佛手柑【名】〔植〕芸香(カンラ)科に屬する常綠亞喬木。高さ一丈餘に達し、幹は柚に似て、枝に刺あり。葉は互生し、楕圓形にして、鋸齒あり、葉片と葉柄との間に、關節なく、葉柄には翼なく、葉腋に、白色大形の花簇り開き、蕾の時は、赤色を帶ぶ。香氣强く、果實は冬季熟して、橙黃色を呈し、長形にして、先端の十餘片に分裂せるさま、指を連ねたるが如く、果皮は芳香あり。嫩きものを砂糖漬として、食用に供す。暖地に產す。てぶしゆかん。はなかんじ。

ぶしゆかん-づけ 佛手柑漬【名】佛手柑の實の砂糖漬。

ふ-しゆく 不淑【名】『淑(ヨ)からざる義』㊀善良ならぬこと。賢からざること。貞淑ならぬこと。㊁『詩經の玉風中谷有蘀篇に「遇二人之不淑一矣」、禮記に「如何不淑」とあり』古、支那にて、人の生き別れ、又は死ぬること。㊂『周逸書に「玉乃升二汾之阜一、以望二商邑一、曰、嗚呼不淑」となり』國の亡ぶること。

ふ-しゆく 巫祝【名】神に仕へて、神事を掌る者。みこ。はふりこ。

ふ-じゆく 不熟【名】㊀果物の成熟せぬこと。㊁睦しからぬこと。不和。「家内不熟」

ふじゆく-でん 不熟田【名】荒損田の一。水旱・蟲霜等に依りて成熟せざるもの。

ふ-じゆくれん 不熟練【名】**みじゆく**(未熟)に同じ。

ふじゆ-しんぱう 富壽神寶【名】次條の

ふじゆしんぱう-せん 富壽神寶錢【名】嵯峨天皇の弘仁九年より仁明天皇の承和元年まで鑄造せし銅錢。徑七分五厘餘、重量一匁のもの、徑七分五厘餘、重量八分五厘のもの等、數種あり。富壽神寶。富壽錢。

ふしゆ-しやうがく 不取正覺【名】〔佛〕阿彌陀如來の四十八願の終ごとにありて、立つる所の大願成就せずば、我、正覺の果位に入らざるべし(即ち成佛せざるべし)との誓を示せる語。諸曲(謠曲)に「或は不取正覺の盧(ロ)の玉」不取正覺の輿(シ)【白】〔佛〕衆生が、それに乘じて、安養界に到る不取正覺の大願を、安全なる輿に譬へていふ語。寶古敎信七葉抄「提灯に不取正覺の輿を照して、中山寺へと送りしは」

ふ-しやうがく 不就正覺【名】〔佛〕**ふしゆしやうがく**(不取正覺)の誤。諸曲(盧久)「それ、不就正覺の御誓、今以て始ならず、過去久遠(ヲン)の大悲の光、何處(イヅク)不到の所ならん」「(富壽神寶錢)の略。

ふしゆ-せん 富壽錢【名】**ふじゆしんぱうせん**

ふしゆそ-でん 不輸租田【名】**ふゆそでん**(不輸租田)を見よ。

ふ-しゆつ 不出【名】外へ出でざること。外へ出さざること。「門外不出の書」

ふじゆつ 武術【名】**ぶげい**(武藝)に同じ。

ぶ-じゆつ 撫恤【名】いつくしみめぐむこと。あはれみめぐむこと。

ぶじゆつ-しゆぎやう 武術修行【名】**むしやしゆぎやう**(武者修行)に同じ。

ふ-しゆっせい 不出精【名】精を出さぬこと。不精(ブセイ)。風來六六部集(放屁論)「自暴自棄・未熟・不出精の人人の睡を寤さんため」「(不成就日)に同じ。

ふじゆ-にち 不就日【名】**ふじやうじゆにち**

ふじゆ-にちれんしゆう 不受日蓮宗【名】〔佛〕**ふじゆふせは**(不受不世派)同じ。

ふ-しゆび 不首尾・無首尾【名】㊀首尾の悪しきこと。都合の悪くなること。他の氣受の悪しくなること。一代女「後には、訪ふ人稀に、無首尾次第に悲し」㊁事の成りゆきの悪しきこと。結果のよからぬこと。不結果。胸算用「忠六、不首尾、詮方も無く」

ふじゆ-ふせ-にちれんしゆう 不受不施日蓮宗【名】〔佛〕**ふじゆふせは**(不受不施派)に同じ。

ふじゆ-ふせ-こうもんは 不受不施講門派【名】〔佛〕日蓮宗八派の一。不受不施派の開祖日奥の弟子なる日習の、寛文六年唱へ出だしたもの。一致派に屬す。德川時代に一旦禁ぜられ、明治十五年、派名再興の許可を得たり。本山は備前國御津(ミツ)郡金川(カナガハ)村の本覺寺。

ふじゆふせ-は 不受不施派【名】〔佛〕日蓮宗の一派。文祿の頃、京都妙覺寺の住僧日奥の創唱に係り、一致派に屬す。信者の敎練嚴格を極め、物資の受授を信者の間に限り、自他信徒を擇ばず、寄付を强要するが如きを避く。德川時代に、一旦禁ぜられ、明治元年、派名再興を許可せらる。本山は備前國御津(ミツ)郡金川(カナガハ)村の妙覺寺。又、寛文五年、この派の變身に恩田派を生じ、元祿の初、また悲田派を生したれども、皆禁ぜられたり。

ふ-じゆん 不順【名】㊀柔順ならぬこと。主治者又は長上などの命を奉ぜぬこと。正統記「吉備の武彦をば越(コシ)の國に遣して、不順の者を平げしめたまふ」㊁秦常の秩序によらぬこと。順序にたがへること。㊂氣候の和せざること。

ふ-じゆん 拇循【名】次條に同じ。

ぶ-じゆん 撫順【名】〔地〕支那滿洲奉天省にある縣。奉天の東方八十清里。背後に山を負ひ、前に渾河を控へ、街はもと寂寥たりしが、撫順炭の產出によりて、近時小都會の觀を呈し、鐵道撫順線によりて、南滿洲鐵道の本線に聯絡す。

ぶじゆん-たん 撫順炭【名】支那奉天省撫順にある炭坑より產出する石炭。南滿洲鐵道會社の手によりて採掘す。「同じ。

ぶじゆめん(英 Bushman)【名】**ぶっしゆめん**

ぶじゆ-もん 諷誦文【名】〔佛〕亡者(ムシヤ)に追善するため、その志の程を記し、三寶に施物を供へて、僧に誦經を請ふ文。法會の導師、これを讀みあぐ。諷誦。

ふ-しよ 符書【名】符呪(フジユ)の書。

ふ-しよ 補處【名】〔佛〕菩薩が、佛の滅したる時、成佛して、その地位を補ふこと、又その菩薩。例へば、彌勒(ミロク)が釋迦如來に對する補處の菩薩なる類。**いっしやうふしよ**(一生補處)及び「等覺補處」參照。

ふ-しよ 扶助【名】たすくること。力を添ふること。

ぶ-しよ 部署【名】人を各部分・各方面にくばり署(ショ)くこと。てわけ。てくばり。

ふ-しよう 皃鐘【名】㊀『周禮の考工記に「皃氏爲レ鼏、栗氏爲レ量」、又「皃氏爲レ鐘、兩樂謂二之銑一」とあり。皃(ゲイ)は、水に入りても溺れねば、虛浮の義に取りて、鐘を鑄る者を皃氏と名づくるよりいふ』**つりがね**(釣鐘)に同じ。諸曲(高野物狂)「或は、念佛稱名の聲聲、或は皃鐘鈴(レイ)の聲、耳にしみ、心すみて」㊁**じふにりつ**(十二律)を見よ。㊂陰曆五月の異稱。

ふ-しよう 不承【名】㊀**ふしようち**(不承知)の略。㊁不承知ながら、餘儀なく從ひてすること。**ふしやう**(不請)・**ふせう**參照。俗曲(奥話情浮名横櫛)「懷より百錢(ゼニヤク)一枚取り出だし、……さあ、少いが、不承して、笑うて去(イ)んで下はれや」㊂止むを得ざる、不幸の出來事。箱根靈驗躾仇討「あんな奴(ヤツ)にして、何を不足の不承面」

ふしよう-てう 皃鐘調【名】**ふしよう**(皃鐘)㊁に同じ。

ふしよう-ぶしよう 不承不承【名】『**ふしよう**(不承)㊂を見よ』不承知ながら、餘儀なく從ふこと。**ふしやうぶしやう**(不精無性)參照。「德樂」に同じ。

ぶしよう-らく 武頌樂【名】**ぶとうらく**(武那人には、不如歸(現時の北京官話の音にては pu⁴ ju² kuei¹)即ち「歸るに如かず」の意に聞きなさるといふ。旅中、この聲を聞きて、鄕愁を催す意を述べたる詩多し』**ほととぎす**(時鳥)の漢名。

ふしよう-づら 不承面【名】**ふしようがほ**(不承顏)に同じ。國姓爺後日合戰「某を舅(シウト)にして、何を不足の不承面」

ふしよう-がほ 不承顏【名】不承知らしき顏つき。ふしようづら。心中刃は氷の朔日「弟子どもは不承顏」

ふ-しようち 不承知【名】承知せぬこと。うけがはぬこと。不承。

ふしよう-ぢ 不如歸【名】〔動〕『その聲、支

ふじよ-きん 扶助金【名】一 生活を扶くるために給與する金。扶助料。二 いちじふじよきん(一時扶助金)の略。三 明治三十七年以前、現役中の海軍志願兵にて、家族ある者に限りて、その家族に給與せし金。

ふ-じよく 付囑・付屬【名】渡したのむこと。囑託。付託。

ふ-しよく 扶植【名】うゑつくること。

ふ-しよく 不食【名】食物をくはぬこと。字治「この三箇年、食物のくはれぬこと。不食の病になりて」沙石集「それより、不食の病附きて、たのみなき由聞いて」

不食の地【句】『禮記の檀弓上篇に「成子高曰、我死則擇二不食之地一而葬レ我焉」とあり』開墾せざる地。不毛の地。あれち。

ふ-しよく 不職【名】職務に當り得ざること。任に堪へざること。

ふ-しよく 腐蝕【名】くさりて、形のそこなはるること。

ぶ-じよく 侮辱【名】あなどりはづかしむること。

ふしよく-ざい 腐蝕劑【名】『獨 Ätzungsmittel』銅板・硝子板、その他の物體の表面を腐蝕せしむるに用ふる藥劑。

ぶじよく-ざい 侮辱罪【名】〔法〕事實を摘示せずして、公然人を侮辱したるにより成立する犯罪。但し親告罪に屬す。陸・海軍刑法にては、上官・哨守兵をその面前にて侮辱し、又は文書・圖畫・偶像の公示、演說、その他、公然の方法によりて成立す。めいよざい(名譽罪)參照。

ふしよく-さん 腐植酸【名】〔化〕『英 Humic acid』植物質の腐敗によりて生ずる、黑色又は褐色の物質。泥炭質の土壤中より得べし。

ふしよく-しつ 腐植質【名】〔化〕『英 Corrosiveness』有機物の分解によりて生ずる、暗色・粉狀の物質。性質は、分解の程度により、一樣ならず。「一條に同じ。

ふしよくしつ-ど 腐植質土【名】〔農〕次

ふしよく-ど 腐植土【名】〔農〕『英 Humus 又 Humine』腐植質を多く含める土壤。木の葉・根などの腐化して成れるもの。黑

褐色にして、質膨軟、乾燥すれば、粉狀をなして飛散し、水に會へば、膨脹して、泥狀をなす。乾燥地に存し、且つ砂・粗土・石灰分に富めるは、生產力大なれども、濕潤地に存し、且つ鑛物質に乏しきは、酸性を呈し、生產力小なり。くろつち。くろぼか。くろぼこ。のつち。ほけつち。壚土。

ふしよく-どうばん 腐蝕銅版【名】『英 Etching』銅版の上に、アスファルト・樹脂・蠟等を調合して、熔融したる防蝕劑を塗布し、その上より、針にて、版模樣となるべき部分を描寫して、針頭の動きたる形だけ、銅面を露出せしめたる後、腐蝕用の液を作用せしめ、後、腐蝕液を去りて製する、一種の凹版。雅致に富める印刷物を生ずれども、磨損しやすきため、多數の印刷には適せず。

ふしよく-やく 腐蝕藥【名】〔醫〕『獨 Ätzmittel』皮膚を腐蝕せしむるために塗布する藥劑。酸類・苛性アルカリ・沃度などを用ふ。

ふ-しよん 不所存【名】所存の宜しからざること。存念の正しからぬこと。

ふしよぞん-にん 不所存人【名】次條に同じ。會我會稽山「京の小四郎の不所存人さへ、ひっ添うて看病」

ふしよぞん-もの 不所存者【名】不所存なる人。心掛の善からぬ人。不所存人。浮世風呂「不所存者だ。おれが利害を說いて聞かせる」

「との併稱。

ぶ-しよ-ちやう 部所長【名】部長と所長

ぶしよっ-たらし 不精ったらし・無精ったらし不性ったらし・無性ったらし【形二】さも不精らし。〔俚語〕

ふし-よねざは 節米澤【名】羽前國米澤紬の、節絲織なるもの。

ふじよまい 扶助米【名】德川幕府にて、家名斷絕者の遺族に給せし扶持米。元高に應じて、五人扶持・三人扶持・二人扶持の三等に區分し、親・妻には終身、子女・厄介者には、婚嫁するまで給せり。

ふじよ-れう 扶助料【名】一 生活を扶くるために給與する金錢。扶助金。二〔法〕

ゐぞくふじよれう-しやうしよ 扶助料證書【名】扶助料(二)を受くる權利ある者に、內閣にて、その請求を許可して下付する證書。

ふ-じるし 不印【名】不景氣。不首尾。不調。

ふじ-わた 富士綿【名】「富士の綿」に同じ。

ふじ-をか 富士岡【名】淨瑠璃常磐津節の一派。常磐津文字太夫の門人富士岡若太夫の語り出だしもの。

ふし-をがみ 伏拜【名】一 伏し拜むこと。二 神社の入口に木を横たへ、不淨・觸穢(ショク)の者などの內へ入るを防ぎて、遙拜せしむる所。〔古語〕吳竹集「はるかに神社を拜すべき所を設けたるを、ふしをがみといふ」

ふし-をがむ 伏拜む【動四他】一 伏して拜む。ひれふして拜む。拜伏す。枕「數珠(ジュ)おしもみなどして、ふしをがみたるを」二 遙拜す。

ふし-をれぎ 柴析木【名】柴の折木。折れたる柴。新六「捨てられしきのふの山のふし折木さてもかひなく世にや朽ちなん」

ふす 伏す【動四自】一 體を下へ向く。うつむく。うつぶす。二 身を橫たへて寢ぬ。倒る。橫たはる。〔臥す〕源氏「みな人人、簀子(スノコ)にふしつつしづまりぬ」三 下に潛み隱る。記「御吉野(ミヨシノ)の小牟漏岳(ヲムロガタケ)に猪鹿(シヽ)伏すと誰ぞ大前にまをす」

ふす 伏す【動下二他】一 下を向かしむ。うつむく。二 橫たはり寢ねしむ。〔臥す〕源氏「夜も、あたり近うふせたまふ」三 下におしつく。倒す。記「斫二仆喪屋一、モヤヲキリフセテ」著聞「偷盜……ふせて搦めてけり」四 潛み隱れしむ。かくしおく。見えぬやうにす。古今「かの道に、夜ごとに、人をふせてまもらすれば」紫式部日記「裳の繼目に、銀(シロガネ)の絲をふせて、組のやうにし」五 捕へんとて、物にておほひかぶす。狂言「對馬祭」「子供が集まって、千鳥をふせるが」

ふす 付す【動佐變他】一 あづく。わたす。托す。交付す。付與す。二 託す。委(カヅ)す。依らしむ。「一切、省略に付す」『不問に付す』

ふす 附す【動佐變自】つく。したがふ。附屬す。「驥尾に附す」

ふす 附す【動佐變他】つかしむ。したがはしむ。附屬せしむ。

ふす 補す【動佐變他】ほす(補す)に同じ。平家「近藤判官師經を、加賀の目代に補せらる」

ふす 賦す【動佐變他】一 年貢などを割り付く。二 詩賦を作る。「通知す。

ふす 訃す【動佐變他】訃を告ぐ。死去を

ぶす 【名】よき事。〔若狹國の方言〕

ぶす 附子【名】一 うづ(烏頭)(一)を見よ。

二 ざくや(毒藥)に同じ。三 口數をきかず、無愛想なること、又その人。〔俚語〕

ぶす-いも 附子芋【名】〔植〕とりかぶと(烏頭)に同じ。

ふ-すう 負數【名】〔數〕『英 Negative number』零より少き數。減數が被減數より大なる時の如き減法の不能を避けんがために、代數學にて、便利上、數の內に加へたるもの。これを表はすには、負號即ち「一」を附す。(正數に對して)

ぶ-すう 部數【名】一部にまとまりてある書册の數。「殘本、部數に限あり」

ぶ-すき 不好【名】好(キ)にてあらぬこと。好まざること。三代男「その方には、蕎麥切(キリ)はぶすきか」

ふ-ずく 粉熟・粉粥【名】米又は麥を蜜煎(ミツセン)にて練り、竹筒に入れて押し出だせる食品。饂飩(ウドン)の類。古、切りて、點心に用ひたり。ふんずく。〔古語〕源氏「淺香(センカウ)折敷(ヲシキ)・高坏(タカツキ)どもにて、ふずく參らせたまへり」

ふすさに 多に【副】ふさに(多に)に同じ。〔古語〕萬葉「廐をらを桶にふすさに積まずとも明日著せざめやいさせ小床に一理にはづれたること。

ぶすーづら 附子面【名】『ぶす(附子)㊂を見よ』口數をきかず、無愛想なる顔つき。ぶっちやうづら。〔俚語〕

ふすぶ 燻ぶ【動下二他】㊀けぶるのみにて、燃え上らぬやうにす。いぶす。くすぶ。くすむ。源氏「うしろの山に、柴といふ物ふすぶるなりけり」㊁火葬に付す。〔古語拾〕蜻蛉「西の山べのけぶりには、ふすぶる事の絶えもせず」㊂器物などを、烟に觸れさせて、黒ずましむ。すすけさす。くすぶ。碧妄「明暮、茶釜にふすべられ」㊃烟を立てて苦します。けむたき目に合はす。㊄ねたむ。怨(ウラ)ず。やく。悋氣す。後鑑「こと女にものいふと聞きて、もとの女の内侍のふすべはべりければ」

ふすーふす 【貌】打ちたたく音。義經記「とりさゆる者なければ、ふすふす打たれて臥しにけり」

ふすぶる 燻る【動四自】ふすぼる(燻る)の轉訛。〔越後國の方言〕「と。

ふすべ 燻【名】燻ぶること。燻べたること。

ふすべ 贅【名】こぶ(瘤)に同じ。〔古語〕和名「贅、布須倍。……贅疣、佐賀利布須倍」

ふすべーいろ 燻色【名】ふすべたる如き染色。煤(スス)の如く黒ずみたる色。

ふすべーうめ 燻梅・烏梅【名】普通の梅干の、核を槌にて去りて、肉のみを少し炒りて、黒くふすべたるもの。

ふすべーかき 燻柿・烏柿【名】皮を去り、竈の上などに吊しおきて、黒くふすべたる澁柿。あまぼし。

ふすべーがは 燻革【名】松葉の烟にて、地(ヂ)を黒くふすべ、模様の部分のみを白く殘したる革。太平記「ふすべ革の鎧」

ふすべがは-をどし 燻革縅【名】鎧の縅の一。燻革にて縅したるもの。

ふすべーがほ 燻顔【名】ふすぶる顔つき。妬ましさのあらはれたる顔つき。〔古語〕源氏「若若しき習のやうに、ふすべがほにてものしたまひけるかな」

ふすべーぎん 燻銀【名】硫黄の烟にて、黒くふすべたる銀。「縅したる匂縅。

ふすべーにほひ 燻匂・薫【名】燻革にて縅したるもの。

ふすべーまり 燻鞠【名】燻革にて製したる鞠。東鑑「下野前司泰綱、付二燻鞠於鷲冠(カンムリ)一木枝一進レ之」

ふすぼりーがほ 燻顔【名】烟に觸れて、黒ずみたる顔。ふすもりがほ。

ふすぼる 燻る【動四自】㊀くすぶる(燻る)㊁に同じ。平家「以ての外にふすぼったる持佛堂に立て籠り」盛衰記「明(アカ)障子も、護摩の煙に燻って」㊂湯氣など鬱して、立ちのぼらず。名義抄「氳、フスボル」

ふすま 衾・被【名】『臥す裳の義なるべしといふ』布帛などにて仕立て、寢ぬる時、身におほふ物。かいまき。夜具。源氏「御ふすまをひきやりたまへば」

衾の宣旨(センジ)【句】古、罪人を追捕せしむる時に下しし宣旨。〔古語〕盛衰記「白井法橋幸明といふ僧あり。三塔第一の惡者、衾の宣旨を蒙りて、山門には安堵しがたくて」

ふすま 衾【名】〔地〕大和國山邊(ヤマベ)郡に在りし地。今の朝和(アサ)村邊の汎稱なるべしといふ。

ふすま 襖【名】『ふすましやうじ(襖障子)の略』木製の格子の兩面より、紙・布などを張りて製したる建具。ふすましやうじ。からかみしやうじ。からかみ。

襖を張る【句】海面など、一面に白く光りわたる譬。源氏「海のおもては、ふすまを張りたらんやうに光り滿ちて、神鳴りひらめく」

ふすま 麩・麸【名】小麥より、小麥粉を製したる後の皮の屑。洗粉などに用ひ、又、牛・豚などの食料に供す。むぎかす。もみぢ。からこ。

ふすまーうつぎ ふすま空木・ふすま溲疏【名】〔植〕ばいかうつぎ(梅花空木)に同じ。

ふすまーおほひ 衾覆【名】古、娉取の時に行ひし儀式の一。中右記「今夕件中將、成二女二位聟一……衾覆事、右兵衞督實行」

ふすまーかうぢ 麩麹・麸麹【名】麹の一種。酒精又はヂヤスタアゼを製造するに用ふ。

ふすまーがはら 衾瓦【名】〔建〕棟の最上に用ひたる瓦。

ふすまーがみ 襖紙【名】特に襖を貼るに用ふるために製したる紙。

ふすまーしやうじ 襖障子【名】『襖は、藤原時代より、紙又は絹布にて張り、異色の紙・絹にて緣を取り、後世の鏡縮圖の形に似たりしより、衾(フスマ)障子の意にて名づけしもの』ふすま(襖)に同じ。下學集「襖障子、フスマシャウジ」五人女「西に銀の間(マ)枕繪の襖障子」

ふすまたーのーはか 衾田墓【名】手白髪(タシラガ)皇女の墓。大和國山邊(ヤマベ)郡朝和(アサ)村にあり。

ふすまぢ 衾路【名】〔地〕大和國山邊(ヤマベ)郡衾の通路。和州旧跡幽考「衾道(フスマヂ)歌枕に、或は越中國、先達、大和國といふ。八雲御抄・もしほ草、大和國とあり。只、衾田の墓の名によりて、一往あらはす。衾道引手山(所知らず)」

ふすまぢーを 衾道を【枕】衾は、組紐を渡し附け、それにて引きひろげて覆ひ、その組紐を、衾手の引手といふより、**ひきて**(引手)にかけていふならんかとも、又、衾道は、大和國山邊(ヤマベ)郡衾の邊といふ意(を)は感嘆の助辭にて、その附近の山の名なるひきて(引手)にかけたるなりともいふ。萬葉「衾道を引手の山に妹をおきて山路を行けば生けりともなし」

ふすまゆき 衾雪・襖雪【名】一面に厚く物を蔽ひ包みたる雪を、衾に譬へていふ語。〔古語〕道成寺「女院の御前にて、雪のひろう降りて侍りしに、……、年ごとに冬降るものと知りながらとこめづらしきふすま雪かな」

ふすまゑ 襖繪【名】襖に書きたる繪。

ふすみーしんしや 夫須美神社【名】くまのふすみしんじや(熊野夫須美神社)を見よ。

ふすむ 燻む【動下二他】ふすぶ(燻ぶ)に同じ。字鏡「熏、熅、烟氣也。布須牟留」

ふーすん 膚寸【名】『左傳の僖公三十一年の條に「觸レ石而出、膚寸而合、不レ崇二朝而徧雨一乎天下一者、惟太山爾」とありて、註に「側レ手爲レ膚、按指爲レ寸」と見ゆ。即ち膚は手の指四本の義、寸は指一本の義』わづかなること。うすく小きこと。「膚寸の雲」

ふすもりーがほ 燻顔【名】ふすぼりがほ(燻顔)に同じ。根南志具佐「色眞黒にふすもり顔」

ふすもる 燻る【動四自】ふすぼる(燻る)のよりいふ』「烏蓼(キ)の矢」に同じ。袖中抄「奥のえびすは、鳥の羽の莖に、附子といふ毒を塗りて、鎧のあきまを計りて射るといへり。附子矢といふは、これなり」

ぶすーや 附子矢【名】『附子㊂を塗りたる

ふすーね 臥猪【名】臥したる猪。〔古語〕夫木「奥山のふすゐの床や荒れぬらんかもめたえぬ雪の下葉は」

臥猪の床(コ)【句】猪の、枯草(モカル)を集め敷きて臥したる所。徒然「恐ろしき猪のししも、ふすゐの床といへば、やさしくなりぬ」

ふすゐ 符瑞【名】めでたきしるし。吉兆。瑞相。

ふすゐ 附隨【名】つきしたがふこと。

ふすゐ 不隨【名】思ふにまかせぬこと。自由に動かぬこと。「半身不隨」

ふすゐ 無粹・不粹【名】粋ならぬこと。通人ならぬこと。無骨。無風流。

ふすゐ 撫綏【名】**するぶ**(綏撫)に同じ。

ふすゐい 不隨意【名】心のままならぬこと。意にまかせざること。

ふすゐいーうんどう 不隨意運動【名】〔醫〕『英 Involuntary motion』運動神經の刺戟に因りて、不隨意に起る運動。痙攣・震顫などの際に發す。

ふすゐいーきん 不隨意筋【名】〔醫〕『英 Involuntary muscle』意志に從ひて、收縮運動を生ぜしむること能はざる筋。主に內臟諸器官又は血管等の壁(ヘキ)を造り、伸縮によりて、能くこれらの器官の作用を全からしめ、心臟に於けるものの外は、すべて平滑筋に屬す。(隨意筋に對して)

ふすゐいーてき 不隨意的【貌】〔哲〕**むいてき**(無意的)に同じ。(隨意的に對して)

ふすゐいてきーかうどう 不隨意的行動

【名】〔哲〕次條に同じ。(隨意的行動に對して)

ふずおいてき-どうさ 不隨意的動作【名】〔哲〕**むいてきどうさ**(無意的動作)に同じ。(隨意的動作に對して)

ふずおーしや 不隨者【名】『妻子・珍寶の偶(ぐう)」を見よ』妻子・珍寶・富貴・功名などの如き、煩惱(ぼんのう)の緣となる物事。〔戰軍記〕「その時は、この熊谷、浮世を捨てて、不隨者と、源平兩家にゆかりはなし」

ふずおーしや 附隨者【名】電車にて、電動機を裝置せずして、電動車に附隨する客車。

ふずおーしやう 不隨症【名】〔醫〕神經の末稍又は中樞に於ける麻痺により、筋肉に運動障礙を起す病症。原因は、感冒、外傷中毒等に因る。

ぶすおれん 不水練・無水練【名】水練を知らざること。游泳の出來ること。〔平家〕「河岸に淵のある所へ轉び入りぬ。倉光(くらう)は無水練なり。瀨尾(せのを)は、水練の上手にありければ」

ふせ 伏【名】**ふくい**(伏兵)に同じ。伏の場(ば)【句】伏兵又は忍物見(しのびみ)を置きたる場所。〔椀井日記〕「日下部(くさかべ)石見は、伏の場を去りて」

ふせ 布施【名】一〔佛〕『梵Dāna(檀那)の譯語。布は己が財物を他に與ふる義、施は己を慳めて、人を惠む義』清淨の心を以て、福利を人に施して悋しまざること。施の本義は、財物を施し與ふるにあれども、これを精神上の方面に擴張して、財施と法施とに分ち、出世の正法(しやうぼふ)を說きて、他を開悟得道せしむるを法施と呼び、又は財施・法施・無畏施の三に分ち、合はせて、三施と呼ぶことあり。二〔讀經料などとして、僧に與ふる金錢又は品物。ふせもつ。源氏「布施など、おほやけざまにかはらず」

布施なき經に袈裟を遣(つか)す【句】『龍(りう)の狂言の「布施ない」の筋に本づく』貧僧、檀家へ棚經に行きて、勤を修したれども、主人忘れて、布施をくれざるより、歸るに臨み、ことさらに袈裟を置き忘れ、途中より返し來りて、主人をして、布施を忘れしことを思ひ出させんとする昔話。

ふせ 布施【名】〔地〕下總國東葛飾(ひがしかつしか)郡當勢(たうせ)村に屬する大字。鐵道常磐(じやうばん)線の柏驛より三十八町、我孫子(あびこ)驛より約八町。

布施の辨天【句】前條の地に在る辨天堂。關東三辨天の一。

ふせ 伏【助數】矢の長さを度る單位。大指以外の四本の指を並べたる幅。〔平家〕「白箆(しらの)に、鶴の本白(もとじろ)、鵠(くぐひ)の羽割り合はせて矧ぎたる矢の、十三束三伏(みつぶせ)ありけるに」

ふせ-あみがさ 伏編笠【名】編笠を被るに、顏の見えぬやうに、前さがりにすること。ふせがさ。

ふせい 浮世【名】定なき世。はかなきこの世。うきよ。「人の生涯。

ふせい 浮生【名】定なき人生。はかなき

ふせい 府制【名】府の制度。

ふせい 府政【名】**ふぎやうせい**(府行政)に同じ。

ふせい 賦性【名】うまれつき。天性。資性。

ふせい 夫婦・夫妻【名】をつと。良人。

ふせい 不世【名】『世(よ)ならぬ義』**ふせいしゆつ**(不世出)に同じ。「不世の才」

ふせい 不正【名】心又は行の正しからぬこと。「法行篇」に同じ。

不正の損害【句】〔法〕**ふはふかうむ**(不法不公無)に同じ。

ふせい 不精【名】くはしからぬこと。

ふせい 布政・敷政【名】政を天下に布きおこなふこと、又その政。

ふせい 腐生【名】〔植〕植物が、生物の死體又はその排泄物の腐敗したるものに養生すること、又その植物。例へば、青黴(あをかび)・水晶閣などの類。

ふせい 風情【名】一おもむき。あぢはひ。樣子(やうす)。風情(ふぜい)。盛衰記「この僧が高座より下りん時、各はやせ。いかなる風情・才覺をか振舞ふ」二その樣をしたる物。それらしき物。徒然「破籠(わりご)樣の物、懇に營み出でて、箱風情の物に認(したた)め入れて」鎌田兵田名所盡「おのれら風情に、長田(ながた)の何の知人、ねだれ言(ごと)いうて叩かれな」

風情を廻らす【句】物の趣を味ひて、歌などに言ひあらはす。東關紀行「後京極攝政殿の「荒れにし後はただ秋の風」と詠ませたまへる歌思ひ出でられて、この上は、風情もめぐらしがたければ」

ふせい 夫稅【名】『周禮の載師篇の註に「夫稅百畝稅」と見ゆ』古、支那にて、百畝の田に課せし稅。

ふせい 府稅【名】府の割り當てたる租稅。「稅。

ふせい 賦稅【名】稅を割りあつること。

ふせい 貢稅【名】一未だ上納せざる租稅。續紀「勿收二貢稅一」二租稅を貢擔すること。

ふせい 附贅【名】一こぶ。ふすべ。二有りて益なき物。餘計の物。贅物。

ぶせい 不精・無精【名】ぶしやう(不精)に同じ。浮世風呂「とかく無精でござります」

ぶせい 武勢【名】武勇の勢力。軍兵の威勢。盛衰記「依二清盛武勢一下知」

ぶせい 無勢・不勢【名】一軍勢の少きこと。〔平家〕「所は廣し、勢(せ)は少し、踈(まば)にこそ見えたりけれ。大衆不勢たるによって」二人數の少きこと。こぜい。「多勢(たぜい)に無勢」

ふせいかふ 不整合【名】一くひあはぬこと。あてはまらぬこと。二〔地〕『英Unconformity』地變又は斷層などのために、新しき土が沈澱し、舊層の周圍に新層を形成して、層と層とが、相並行して重なることなきこと。(整合に對して)

ふせいきーへい 不正規兵【名】**せんさうゐん**(戰鬪員)を見よ。

ふせいきーきん 不成斤【名】古、租稅を計るに用ひし量目。成斤より小にして、今の二升九勺强に當るもの。

ふせいこう 不成功【名】成功せぬこと。できあがらぬこと。

ふせいさんてきーせうひ 不生產的消費【名】〔經〕『英Unproductive consumption』生產的結果を來さざる消費。例へば、奢侈・逸樂のためにする消費の類。(生產的消費に對して)

ふせいさんてきーちよちく 不生產的貯蓄【名】財貨を、ただ死藏して、その効用を生ぜしめざること。

ふせいさんてきーしほん 不生產的資本【名】〔經〕『英Unproductive capital』利益を生ぜざる資本。例へば、埋藏せられる金錢などの類。(生產的資本に對して)

ふせいさんてきーせうひ 不生產的消費【名】〔經〕『英Unproductive consumption』生產的結果を來さざる消費。例へば、奢侈・逸樂のためにする消費の類。(生產的消費に對して)

ふせいさんてきーちよちく 不生產的貯蓄【名】財貨を、ただ死藏して、その効用を生ぜしめざること。

ふせいさんてきーざいくわ 不生產的財貨【名】〔經〕『英Unproductive goods』生產の結果を生ずることなき財貨。例へば、指環・膽飾などの類。消費的貨物。(生產的財貨に對して)

ふせいさんてきーざいさん 不生產的財產【名】〔經〕**きやういうてきざいさん**(享有的財產)に同じ。

ふせいさんてきーしほん 不生產的資本【名】〔經〕『英Unproductive capital』利益を生ぜざる資本。例へば、埋藏せられる金錢などの類。(生產的資本に對して)

ふせいさんてきーくわぶつ 不生產的貨物【名】〔經〕次條に同じ。(生產的貨物に對して)

ふせいさんてきひよう 不生産的費用【名】〔経〕『ふせいさんてきせうひ(不生産的消費)』に同じ。(生産的費用に對して)

ふせいさんてきろうどう 不生産的労働【名】〔経〕『英 Unproductive labour』生産に直接の關係あらざる労働。例へば、軍人の勤務の類。(生産的労働に對して)

ふせいさんひよう 不生産費用【名】〔経〕『ふせいさんてきひよう(不生産的費用)』に同じ。(生産費用に對して)

ふせいさん-らうどう 不生産労働【名】〔経〕『ふせいさんてきらうどう(不生産的労働)』に同じ。(生産労働に對して)

ふせいし 布政使【名】支那明・清時代に、各省に置かれて、民政殊に租稅の事を管掌せし長官。普通、藩司と呼ばれたり。後、總督・巡撫の官設けられて、省の長官たるに及び、その配下に屬することとなり、民國に至りて、民政長と改稱せらる。

ふせいじつ 不誠實【名】誠實ならぬこと。まことなからざること。

ふせいじん 不成人【名】『禮記の禮器篇に「禮也者、猶ㇾ體也。體不ㇾ備、君子謂二之不成人一」とあり』㊀無禮なる人の譬。(主に罵りていふ) ㊁不具なる人。かたは。

ふせいしや 負稅者【名】〔経〕直接と間接とに關せず、實際に租稅を負擔する者。

ふせいしゆつ 不世出【名】『不二世(ニ)出一』の義』ただ稀にのみ世に出づるほどに秀でてあること。不世。

ふせいしよくぶつ 腐生植物【名】〔植〕『英 Saprophyte』空氣中の炭酸瓦斯を炭素の營養源とすること能はずして、動植物の屍體、又はそれより生じたる有機化合物をこれに充つる植物。例へば、バクテリヤ・菌類の大部分などの類。

ふせいせいくわ-くわん 不整齊花【名】〔植〕『英 Irregular flower』**さいううしようくわ**(左右相稱花)に同じ。(整齊花に對して)

ふせいせいくわ-くわん 不整齊花冠【名】〔植〕『英 Irregular corolla』不整齊花の花冠。離瓣花(蝶形花冠など)にありては、形狀・大小不同の花瓣をなし、合瓣花(脣形花冠・舌狀花冠など)にありては、周圍不同にて、一方に遍せる形花冠をなす。(整齊花冠に對して)

ふせいでん 不稅田【名】**ふゆそでん**(不輸租田)に同じ。

ふせいとん 不整頓【名】整頓せぬこと。「そろはぬこと。

ふせいひん 不正品【名】不正なる方法によりて、取得又は製造せる物品。

ふせいぶん 不成文【名】文字に書きあらはしてあらぬこと。

ふせいぶん-はふ 不成文法【名】〔法〕『英 Unwritten law』文書によりて公布することなき法律。慣習法のごとき、これなり。不成文律。不成分律法。不文法。不文律。(成文法に對して)

ふせいぶん-りつ 不成文律【名】〔法〕前條に同じ。(成文律に對して)

ふせいぶん-りつりつ 不成文律律【名】〔法〕前條に同じ。(成文律法に對して)

ふせいほ 伏廂・伏菴【名】小くしてきたなき菴。ふせや。まげいほ。〔古語〕萬葉「ふせいほのまげいほの内にひたつちに藁解きしきて」

ふせいもん 敷政門【名】平安城の大内裏に於ける宜陽殿の北に在りし門。

ふせいもんゐん 敷政門院【名】〔人〕後崇光院太上天皇の妃。後花園天皇の御母。源少將經有の女。文安元年准三宮、同五年院號宣下、同年崩ず。年五十九。

ふせいりつ 不成立【名】成立せぬこと。

ふせう 不肖【名】『漢書の刑法志に「人肖二天地之貌一」とありて、註に「唐妄之人謂二之不肖一言二其狀貌無一ㇾ所二象似一也」、列子の楊朱篇に「人肖二天地之類一、懷二五常之性一」とありて、註に「肖似也。類同」險陽・性稟二五性一也」と見ゆ。人は天の生ずる所なるより、天に肖(ニ)ざる義にていふ』才能の劣れること、又その人。無似(ニ)。「不肖の子」『不肖の父』

ふせう 普照【名】〔人〕法相宗の學僧。奈良興福寺の住職。生國・俗姓共に詳かならず。天平の頃、支那に渡り、唐の玄宗皇帝に謁し、道璿・鑑眞に就きて性相の學を修め、後、鑑眞を伴なひて歸朝し、大に戒律を傳ふ。入寂の年月詳かならず。

ふーせう 【名】**ふしよう**(不承)㊁の誤。浮世風呂「生醉だからふせうすらあえ。さもなけれやあ、とっくに張りくじくんだあ」

ふーせう 不肖【代】じこ(自己)の謙稱。

ふーぜう 富饒【名】富みて、物の多くあること。ゆたかなること。

ふーせうくわ 不消化【名】よく消化せぬこと。こなれぬこと。「なる食物。

ふせうくわ-ぶつ 不消化物【名】不消化

ふせう-こくし 普照國師【名】〔人〕**いんげん**(隱元)に同じ。「かなる人。愚者。

ふせう-しや 不肖者【名】不肖なる人。愚

ふせうひ-ぶつ 不消費物【名】〔経〕『獨 Unverbrauchte Sache』普通の用ひ方に從ひて使用する時は、長く從來の形體を存するか、又は久しく本來の用途に堪へ得る物。例へば、家屋・器械・器具などの類。非消費物。(消費物に對して)

ふーせうこし 伏起【名】伏することと、起することと。或は伏せ、或は起して、世話すること。狂言「文相撲」「弓・鞠・庖丁・碁・雙六、馬の伏起、やっと參ったを覺えました」

ふーせおとし 伏落【名】伏兵を、策略にて、窮地に陷しいること。「所。

ふーせかくし 伏隱【名】伏兵を隱し置く

ふーせがさ 伏笠【名】笠をかぶるに、顏の見えぬやうに、前さがりにすること。伊勢踊「伏笠や逢うてうるさき人しぐれ」行脚文集「酒田女(クサ)も下戸時鳥は得ぞとめぬ(ク)順、世を伏笠に青嵐吹く(三千風)」

ふせがし 防し【形二】ふせぎ拒む樣なり。〔古語〕枕「大御門は閉(サ)しつやなど問はすれば、まだ人のおはすればなど、なまふせがしげに思ひて答ふるに」

ふーせがね 伏金【名】㊀扁き金具。〔鐸〕 ㊁**たたきがね**(敲鉦)に同じ。〔敲鉦・鉦〕

ふーせがまり 伏屈【名】**ふしがまり**(伏屈)に同じ。

ふせき 浮石【名】**かるいし**(輕石)に同じ。

ふせき 斧石【名】〔鑛〕『英 Axinite』灰色又は黑褐色等を呈し、三斜晶系に屬する、複雜なる硅酸鑛物。大抵、稜角銳利なり。

ふーせき 布石【名】圍碁に於ける府局の初期。配置に、一定の法式・典型あり。(寄(七)九に對して)

ふーせき 附籍【名】㊀古、戶(コ)を、新たに籍帳に附けしこと。 ㊁その戶籍が、他の戶籍に附屬すること、又その戶籍。

ふせぎ 防禦【名】ふせぐこと、又その目的に用ふる物。好忠集「繁かりし逢の垣の防にもさはらぬものは冬にぞありける」

ぶーせき 武石【名】〔鑛〕『産地の村名を音讀して、名稱とせしもの』信濃國小縣(サガタ)郡武石(タケ)村より産する石。黃鐵鑛の、結晶の酸化して、表部又は全部、褐鐵鑛に變じたるもの。「北。

ふせーぎく 伏菊【名】**ふせんぎく**(浮線菊)のこと。

ふせぎーしや 附籍者【名】附籍したる人。

ふせぎーぜい 防勢【名】敵の攻むるを防ぎ支ふるための軍勢。

ふせぎーば 防場・防塲【名】敵の襲撃を防ぎ支ふべき場所。太平記「一人當千と憑まれたりければ、詮度の合戰に向はんとて、未だ口口の防場へは向けられず」

ふせぎや 防矢【名】矢を射て、攻め寄する敵を防ぐこと。太平記「御方(ミカタ)の勢(セイ)を落さんと、防矢を射たりける」太功記「わが君には、おそれながら、防矢の御用意あって然るべし」

ふせぐ 防ぐ・禦ぐ・拒ぐ【動四他】犯させじと守る。こばむ。さへぎる。防止す。拒斥す。源氏「あらき風ふせぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞしづ心なき」

ふせーぐみ 伏組【名】**じやばらぶせ**(蛇腹伏)に同じ。葉花「ぬひ物・螺鈿など、袖口におきぐちをし、白がねの左右の絲してふせぐみし」

ふせーご 伏籠・臥籠【名】火取の上にかぶせ、その上に衣を掛けて、乾かし、又は薰物(クン)の香を焚き染(シ)むるに用ふる、籠の如き物。竹・金屬などにて造る。ひとりかご。にほひかけ。宇治「とのゐ物とおぼしき衣、ふせごにかけて、たきものしめたるにほひ、なべてならず」

ふせ-こし 伏越【名】河川・渓谷・運河等の水路、又は鐵道線路等の底下に伏せて、通じたる箱樋(ハコヒ)。

ふせ-ごのみ 布施好【名】布施[二]を貰ふことを好むこと。譏「貪食(ドンジキ)坊主の布施好」

ふせ-ごもり 布施籠【名】下總國東葛飾(シモフサカシカ)郡布施の辨天堂にこもること。其角「玉椿昔と見えてや布施ごもり」

ふせ-さがし 伏探【名】伏兵を探し出すこと。

ふせ-じ 伏字【名】活版にて、所用の活字なき時、その文字を植ゑ得るまで、假に活字を顛倒して、その位置を埋め置くこと。めごま。

ふせ-しようをう 布施松翁【名】〔人〕心學者。名は矩道、通稱伊右衞門。京都松原の邊に住す。性理の學に詳しく、道話を以て、諸人を敎化す。歿年詳かならず。文化十一年、浪華の人八宮齋、松翁道話三卷を編す。

ふせ-ぜい 伏勢【名】伏しかくれて、敵を待ちかくる軍勢。伏兵。

ふせ-ぞなへ 伏備【名】伏兵の陣立。

ふせ-だけ 伏竹【名】眞卷弓(マキ)に、竹を伏せたるものなりといふ。〔古語〕夫木「あづさ弓末までとほすふせ竹のはなれがたくも契るなかかな」

ふせ-だま 伏玉【名】遊女が、己の家に客を迎ふること。〔江戸の語〕

ふせ-つ 符節【名】『釋名に「符付也、付使傳二行之一也。節赴也、執以赴二君命一也」とあり』**わりふ**(割符)に同じ。符節を合はするが如し【句】『孟子の離婁下篇に「地之相去也、千有餘里。世之相後也、千有餘載。得二志行一於中國一者、若二合二符節一」とあるに本づく』兩者、少しも違ふ所無し。雙方全く一致す。符合す。符契を合はする如し。

ふ-せつ 浮說【名】**ふげん**(浮言)に同じ。

ふ-せつ 誣說【名】『誣の字の音、正しくはぶ』**ふげん**(誣言)に同じ。

ふ-せつ 不折【名】一折れざること。二ふたう(不撓)[二]に同じ。

ふせつ 不說【名】〔佛〕口舌を以て辨ぜざること。**いちじふせつ**(一字不說)參照。新拾遺「世尊不說之說、迦葉(カセフ)不聞之聞、さまざまに說けども、說かぬ言の葉を聞かずして聞く人ぞすくなき」

ふせつ 普說【名】〔佛〕『普く正法(シヤウ)を說きて、衆に開示する義』禪家の說法。陞座(シン)。

ふせつ 布設・敷設【名】一地にしきまうくること。二〔兵〕『英 Mooring』海中適宜の深さに、水雷を沈めおく作業。「じ。

ふ-せつ 伏圖【名】**へいめんづ**(平面圖)に同じ。

ふせつ-すゐらい 布設水雷・敷設水雷【名】〔兵〕『英 Submarine mine』**ばうぎよすゐらい**(防禦水雷)に同じ。

ふせつ-たい 布設隊・敷設隊【名】〔兵〕要港部又は水雷團に置かれ、水雷防禦の事を掌る部隊。

ふせつ-てい 布設艇・敷設艇【名】〔兵〕『英 Mine laying boat』水雷の布設に用ふる端艇。

ふせ-づる 布勢弦【名】古、越中國氷見(ヒミ)郡布勢村の地より出だしし弓の弦。七一職人歌合「つるうり。召し候へ。布勢づるもさふらふ。關づるもさふらふ」

ふせ-てふ 伏蝶【名】**ふせんてふ**(浮線蝶)の訛。

ふせ-どひ 伏樋【名】地中に伏せ埋めて設くる桶。うづみひ。したび。暗渠。

ふせ-どり 伏鳥【名】『叢に隱るる鳥の義』雉(キヂ)・鶉(ウヅラ)などの鳥。(駈鳥(カケドリ))に對して)〔射藝の語〕

ふせ-ない 布施無い【名】能(ノウ)の狂言の一。檀家へ常齋(ジヤウサイ)に赴きし僧の、歸るに臨みて、先方の者、失念して布施をくれぬより、再三辭柄を設けて諷し、遂に貰ひて歸る由を作れるもの。「布施なき經に袈裟を遣す」參照。

ふせないきやう 布施無い經【名】前條に同じ。

ふせ-ぬひ 伏縫【名】縫目の見えぬやうに縫ふこと。

ふせ-ぬひ 伏繡【名】一本又は二本の絲を伏せ置き、同じ色の絲にて綴ぢつくるが如くになす繡方。金絲・蛇腹絲の如き、太くして、運針を施す能はざる絲を使用す。饅頭伏(マンヂウ)。

ふせの-うみ 布勢海【名】〔地〕『古、水面廣大なりし時は、布勢村の地に接せしより其名なれど、今は漸次埋沒して、やや離る』越中國十二町潟(ヤウガタ)の古稱。萬葉「布勢の海に舟泛(ウ)け据ゑて」

ふせ-のり 伏糊【名】染物の時、模樣の著色濟み、地色を染め出さんとする時、その模樣の部分を塗り被ふ糊。

ふせ-ば 伏場・伏塲【名】所領の、表高以外の餘地。**ふそく**(不足)[三]參照。

ふせ-はた 伏機【名】綜絖(ソウカウ)の一種。彈條(ゼンマイ)又は弓にて、常時引き上げおき、經絲(タテイト)は、その番口の下端に通じ、常時上昇の位置に在る經絲を下降せしめて、開口せしむるもの。ふぐせ。

ふせ-はら 伏原【名】姓氏の一。本姓は清原。舟橋賢忠を祖とす。賢忠、藏人より身を起して、大藏卿に至る。初、東高倉といひ、後、伏原と改む。子孫相繼ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

ふせ-はらみつ 布施波羅蜜【名】〔佛〕**だんはらみつ**(檀波羅蜜)に同じ。

ふせ-ぶ 父錢【名】昔時、將軍家の誕生などの祝儀に鑄造せし厭勝錢。

ふせ-ぶみ 符線【名】〔音〕音符の符頭に附け加ふる縦線。

ふせ-ぶん 普選【名】**ふつうせんきよ**(普通選擧)の略。

ふせ-ぶん 婦選【名】婦人の選擧權。

ふせ-ぶん 膚淺【名】『膚のごとく淺き義、卽ち皮膚にとどまりて、深く骨に達せざる義』あさはか。淺薄。膚薄。

ふせ-ぶん 富贍【名】『贍は足る義』富みてゆたかなること。たっぷりしてあること。

ふ-せん 艀船【名】はしけ。はしけぶね。

ふ-せん 附箋【名】本紙に貼附して、疑問・不審等の所要の事項を記したる小き紙片。さげふだ。つけふだ。さげがみ。

ふせん 不染【名】一そまざること。二うつらぬこと。なじまぬこと。かぶれぬこと。三〔佛〕染著せざること。けがれぬこと。よごれぬこと。

ふせん 不宣【名】『宣べ盡さぬ義』**ふいつ**(不乙)[二]に同じ。「早早不宣」

ふ-ぜん 不善【名】よからぬこと。道德にそむくこと。太平記「義時・泰時、下として不善の主を流す例あり」「同じ。

ふぜん 不染【名】〔佛〕**ふせん**(不染)[二]に同じ。

ふぜん 夫錢【名】武家時代に、夫役(ブヤク)に代へて、錢貨を輸納せしもの。

ふ-ぜん 奉膳【名】『御膳に奉仕する義』內膳司の長。安曇(アヅミ)・高橋兩氏の世職たりき。

ぶぜん 豐前【名】〔地〕西海道十二國の一。門司(モジ)・小倉(コクラ)の二市、及び企救(キク)・田川・京都(ミヤコ)・築上(ツキアゲ)・下毛(シモツケ)・宇佐の六郡に分れ、下毛・宇佐の二郡は大分(オホイタ)縣、その他は、福岡縣の管轄に屬す。

ぶ-ぜん 憮然【貌】失意又は驚愕のさま。

ふせん-おもだか 浮線澤瀉【名】紋所の一。澤瀉の葉三枚と蕾二つ、花一つとを組み合はせて、略圓形に描けるもの。

ふせん-おり 浮線織【名】斜紋の一種を地合とし、紋の線を浮かせて織りたる、綾地の紋織物。

ふ-ぜんかん 不善感【名】種痘の、效果を生ぜざること。(善感に對して)

ふせん-ぎく 浮線菊【名】一模樣又紋所の一。菊の花を配合して、浮線綾の丸とせるもの。浮線綾菊。「菊」に同じ。

ふ-せんきよ 浮船渠【名】**うきざっ**(浮船塢)

ふせん-ぎり 浮線桐【名】紋所の一。桐の花三つを中心として、五枚の葉を以て圍み、略圓形に描けるもの。

ぶ-せんさく 不穿鑿・無穿鑿・不詮索・無詮索【名】穿鑿せざること。穿鑿の十分ならざること。甲陽軍鑑「この書物、假名遣、萬事無穿鑿にて、物知の御覽候は、一つとしてよき事なくて」

ふせんざくら 浮線櫻【名】紋所の一。圓形の櫻の内へ、一つの櫻花を中心とし、その花瓣の四隅に、四つの蕾を添へ、更に半戻したる花瓣四つを、上下左右に配りたるもの。

ふせんしん 不善人【名】不善なる人。小不善人と居るは、鮑魚の市に入るが如し【句】『孔子家語に「與二不善人一居、如レ入二鮑魚之肆一。久而レ不聞二其臭一、亦與レ之化矣」とあり』悪しき人と交はれば、知らず識らず悪き感化を受く。「善人と居るは、芝蘭の室に居るが如し」に對して)〔諺語〕

ふせんたかのは 浮線鷹羽【名】紋所の一。一枚鷹の羽を中心とし、左右より、二枚の鷹の羽にて覆ひ圍みて、圓形に作りたるもの。

ふせんつき 附箋附【名】附箋の貼り附けてあること、又その文書。

ふせんつた 浮線蔦【名】紋所の一。蔦の葉三枚にて、略圓形に描けるもの。

ふせんてふ 浮線蝶【名】模様、又は紋所の一。蝶の羽を擴げたるを、上方より見たる形に作りたるもの。**ふせんりょうのまる**(浮線綾の丸)參照。

ふせんはいたつ 艀船配達【名】**ほしけはいたつ**(艀船配達)に同じ。

ふせんはいたつでんぱう 艀船配達電報【名】**ほしけはいたつでんぱう**(艀船配達電報)に同じ。

ふせんはなびし 浮線花菱【名】紋所の一。浮線綾の花菱。

ふせんはふ 普選法【名】**ふつうせんきょほふ**(普通選擧法)の略。

ぶぜんゆみ 豐前弓【名】昔、豐前國にて作りし弓なるべし。只素往古「豐前弓者、屋形住人之所レ作、自二鎭西一到來候了」

ふせんよつめ 浮線四目【名】紋所の一。浮線綾の四目。

ふせん-りょう 浮線綾【名】㊀織紋の線を、浮織(ウキオリ)にしたる綾。源氏「この袋を見たまへば、唐(カラ)の浮線綾を縫ひ

(ふせんりょう㊀)

て、上といふ文字を上に書きたり」㊁**ふせんりょうのまる**(浮線綾丸)に同じ。

ふせんりょう-ぎく 浮線綾菊【名】**ふせんぎく**(浮線菊)に同じ。

ふせんりょう-の-まる 浮線綾丸【名】『後世、浮線綾には、多くこの紋を織り出だしに依る』紋所の一。浮線綾を圓形に描けるもの。ふせんりょう。

ふせんりょう-はなびし 浮線綾花菱【名】**ふせんはなびし**(浮線花菱)に同じ。

ふせんりょう-まる 浮線綾丸【名】**ふせんりょうのまる**(浮線綾丸)に同じ。

ふせんりょう-よつめ 浮線綾四目【名】**ふせんよつめ**(浮線四目)に同じ。

ふせん-もつ 布施物【名】布施㊁の財物。僧侶に贈る品物。ふせ。狂言(どぢはぐれ)「十疋の布施物を引かせらるると有って」同(布施ない)「これへ參れば、定めて、目鳥十疋づつの布施物を下さるる」

ふせんもつ-ぶぎょう 布施物奉行【名】鎌倉幕府及び室町幕府の職制の一。法會供養などの時、僧侶に布施物を與ふることを掌りしもの。

ふせ-や 伏屋【名】『伏せたるがごとくに低き家の義』低く小き家。賤しき家。ふせいほ。〔古語〕蕪雜(ブゾウ)賤機(ハタ)の帶解きかへて廬屋(フセ)立て妻どひしけん」

ふせ-や 布施屋【名】古、官にて、驛路の諸處に設けて、旅人を宿らしめし家。〔古語〕新古今「園原や布施屋におふる箒木(ハヽキ)のありとは見えてあはぬ君かな」

ふせやたき 伏屋燒【枕】伏屋にて、火をたくといふ意にて、その火には、煤の生ずるものなるより、**すす**(煤)にかけていふ。萬葉「ふせやたきすすしきほひてあひよばひしける時に」

ふせる 臥る【動四自】**ふす**(臥す)に同じ。伊勢「月の傾くまでふせりて」

ふせ-わ 伏輪【名】插櫛のむねなどに、銀を附けて、飾となしたるもの。ぎんむね。

ふそ 扶踈・扶疏【貌】『韓非子の揚權篇に「木枝扶疏、將レ寒公悶」とあり』枝の四方に分布するさま。茂れる狀。

ふそ 封租【名】封戸(フコ)より納め入るる田租。

ふそ 父祖【名】㊀父と祖父と。㊁先祖

ふそ 父祖の國【句】「父母の國」に同じ。

ふそ 麩素【名】〔化〕**ぐるてん**に同じ。

ふそう 釜甑【名】かまと、こしきと。太平記「楚の項羽、船筏を沈め、釜甑を燒いて」「敵奏以レ言」とあり』**そうもん**(奏聞)に同じ。

ふそう 敷奏【名】『書經の舜典に「敷奏以レ言」とあり』**そうもん**(奏聞)に同じ。

ふそうげん 不增減【名】次條に同じ。

ふそう-ふげん 不增不減【句】㊀增しもせず、減りもせざること。㊁〔佛〕諸法の、增減無きこと。諸法の實相は、眞空なるが故に、と說くのと、諸法は、無盡なるが故に、と說くのとの二門あり。譬喩(ヒユ)「車僧「いかに汝妨ぐるとも、それには寄じ、爭はじ、我は、もとより不增不減」

ふそく 附則【名】或法則に附加して、これを補充する法則。

ふそく 不測【名】豫知しがたきこと。はかりがたきこと。正續記「斯く神威を顯したまひける、不測の御事なるべし」不測の淵(フチ)【句】『戰國策の魏國の部に「入二不測之淵一而必出」とあり』危險なる地、又は時事柄などの譬。

ふそく 不足【名】㊀たらぬこと。缺けること。不十分。㊁**ふまんぞく**(不滿足)に同じ。㊂所領の實際は、表高より少きこと。**ふせぼ**(伏場)・**むそく**(無足)㊂參照。不足を言ふ【句】不滿足の意を、口に出して言ふ。

ふぞく 俘賊【名】俘囚の叛したるもの。

ふぞく 風俗【名】**ふぞくうた**(風俗歌)に同じ。〔古語〕其歌は、今樣は長くてせづきたる、ふぞくようたひたる」

ふぞく 附屬【名】㊀つきそふこと。つき從ふこと。㊁**ふぞくちゅうがっこう**(附屬中學校)又は**ふぞくせうがっこう**(附屬小學校)の略。〔俚語〕

ふぞく 付屬・付囑【名】**ふしょく**(付屬)に同じ。(多くは、佛教に關する文章に用ふ)著聞「この歌合は、愚詠を集めたれども、祕藏のものなり。末代に、貴殿ばかりの歌よみはあるまじきなり。思ふ所侍れば、付屬し奉るなりといひて、二卷の歌合を授けけり」太平記「彼は、緣によって、今生に命を助かり、是は逆緣によって、來生の値遇(ヂグ)を得ること、誠に如來付屬の金言、相違せず」

ふぞく 負俗【名】俗流に反對すること。「誇。

ふぞく 負俗の累(ルヰ)【句】俗流より受くる誹

ぶぞく 部族【名】㊀その部の族類。部下に在るともがら。㊁『英 Phratry』氏族の繁衍して、複雜になりたるもの。

ぶぞく 部屬【名】或一部に附屬せること、又その者。

ふぞく-いうびん 不足郵便【名】特殊取扱郵便の一。郵稅の不足なる郵便物。その不足額の二倍を徵收せらる。

ふぞく-うた 風俗歌【名】平安朝時代の一種の歌謠。催馬樂(サイバラ)に似て、特に地方の俗謠より取りたるもの。普通、風俗歌譜といふ書に傳存せる二十五曲の歌のみを稱す。ふぞく。ふうぞくうた。

ふぞく-がく 不足額【名】不足せる額。不足なる金額。不足高。

ふぞく-がほ 不足顏【名】不滿足らしき

ふぞく-くわへい 附屬貨幣【名】〔經〕**ほじょくわへい**(補助貨幣)に同じ。

ふぞく-しょき 附屬書記【名】明治の初、大藏省・土部省・敎部省等に置かれ、常に卿・輔の左右に侍して、その指令に從ひて、一切の文書草案・記錄及び往答書牘等の事を掌り、寮・司等より、卿・輔の決判を乞ふ廻册を簿記して、これを受け付けし職。正・權の大・中錄を以て、これに補せり。「略。

ふぞく-せうがく 附屬小學【名】次條の

ふぞく-せうがくかう 附屬小學校【名】師範學校又は高等師範學校に附屬せる小學校。その師範學校又は高等師範學校の生徒・學生の實地敎授のために設く。

ふぞく-せつ 附屬節【名】〔語〕『英 Dependent clause』複文中の一部を形づくる節、即ち名詞節・形詞容節・副詞節の總稱。(獨立節に對して)

ふぞく-だいげんにん 附屬代言人【名】明治十年司法省中に置かれ、臨時司法卿の命を受け、裁判所に出張して、通常代言の職務を行ひ、或は官廳に關涉する訴訟に就きて、官のために、代言をなし、又、時宜により、人民の囑託を受けて、代言をなしし代言人。同十四年廢せられたり。

ふそく-だか 不足高【名】ふそくがく(不足額)の略。

ふぞく-ちゆうがく 附屬中學【名】次條に同じ。

ふぞく-ちゆうがくかう 附屬中學校【名】高等師範學校に附屬せる中學校。高等師範學校の學生の實地教授のために設く。

ふぞくてき-しやうかうね 附屬的商行爲【名】〔法〕商行爲の一。商人が、その營業のためになす適當の行爲、及びその補助行爲。

ふぞく-どころ 風俗所【名】古、大嘗會に、風俗舞を奏せし所。ふうぞくどころ。

ふぞく-はふりつ 附屬法律【名】〔法〕主たる法律に對して、附屬の關係を有する法律。例へば、民法施行法・刑法施行法・商法施行法などの類。

ふぞく-ひん 附屬品【名】或品物を使用するに際し、それに附屬して用ふる品。例へば、洋服に於けるカラア・カフス・ネクタイなどの類。附屬物。

ふぞく-ぶつ 附屬物【名】前條に同じ。

ふそく-ふり 不即不離【句】〔佛〕一卽(ソク)かず離れぬこと。例へば、水と波との、相(サウ)に於て、異なるは不卽にして、その性に於て、同じきは不離なる類。二同意なるにも非ず、不同意なるにも非ず、曖昧なる位置に立つこと。

ふそく-ほけん 不足保險【名】〔法〕いちぶほけん(一部保險)に同じ。

ふぞく-まひ 風俗舞【名】大嘗會の時、卯の日に悠紀(キ)・辰の日に主基(ス)の國司が、歌人を率ゐて、その國の風俗の歌舞を奏すること。ふうぞくまひ。

ふそくるね 斧足類【名】〔動〕べんさいるね(瓣鰓類)に同じ。

ぶそつ 部卒【名】部下の兵卒。

ふそん 符損【名】『蠲符によりて、官の損する義』古、民部省の蠲符(ケンプ)により、調庸を免ぜしこと。(符益に對して)

ふそん 不遜・不孫【名】謙遜せぬこと。尊大。

ぶそん 蕪村【名】〔人〕よさぶそん(與謝蕪村)を見よ。

ぶそん-くしふ 蕪村句集【名】〔書〕谷口蕪村の俳句を集めたるもの。二卷。蕪村の歿後、その弟子高井几董の編。

ぶそん-しちぶしふ 蕪村七部集【名】〔書〕『ほいかいしちぶしふ(俳諧七部集)を見よ』谷口蕪村及びその門人に關係ある其面影・一夜四吟・俗四歌仙・明鴉(及び續明鴉)・桃李・飛鳥篇・五車反古の七部の俳書。もと各部單行なりしが、文化六年相合して出版せり。

ふそり-かぜ ふそり風【名】梅毒より起りたる、疝氣又は寸白などの病。古今本節用集「疝氣、ふそりかぜ」

ふ-ぞろひ 不揃【名】そろはぬこと。數の足らぬこと。大さ・高さなどの一樣ならぬこと。不完。不齊。

ふた 蓋・盍【名】一『ふたぐ(塞ぐ)を見よ』物の口を被ひふさぐ物。二螺類の殼に附屬して、その口のおほひとなる物。【譬】和名「玉蓋、之太太美乃布多」三患部に貼りたる膏藥。一代女「後(ノチ)にまはりて、灸の蓋を仕替へ、鬚のそそけを撫でつけ」四〔動〕すっぽん(鼈)一に同じ。浮世風呂「江戸ぢやあね、鼈をしやれて、蓋といひやすよ」

蓋が明く【句】一『古の芝居は、庇六尺ほどを差出して、その日の狂言終れば、これを閉ぢしこと、物に蓋をするやうなりしより云ふ』芝居にて、その日の狂言始まる。二事始まる。

蓋を明ける【句】『前條を見よ』一芝居にて、その日の狂言を演じはじむ。二物事の實際を、初めてあらはし示す。事を始む。開始す。

蓋を切る【句】煮物又は湯の沸騰する時、その蓋を片寄せて、吹きこぼれぬやうにす。

ふた 礑【貌】ほた(礑)に同じ。今昔「男の尻を、ふたと蹴たりければ」

ふた 二【數】ふたつ(二)に同じ。(他の語に冠らせて、熟語として用ふ)「ふた子」『ふたくだり』「記み谷ふた渡らす」

ふだ 札【名】一『ふみだ(札)の略』事を記すに用ふる、小き板。ふみだ。ふんだ。【簡】二『まもりふだ(守札)の略。三巡禮が、參拜したる寺の柱・壁・扉などに、その記念として、打ち附くる札。普通、紙又は朱にて造り、又、眞鍮・銅などにても造る。巡禮札。四「日給(ニツキフ)の簡(カン)」の略。【禁祕抄】「簡、有袋」五通行又は入場等の許可を得るための札。鑑札。入場券。

札が落つ【句】一入札の結果が定まる。落札(ラクサツ)す。二多くの人の中の或人の所屬に歸す。白石『一人のお方は器量よし、今一人は鼻むっちや、目の大きい、熊か人かといふやうな、どちらへ札が落ちやら、いやな事ではないかいなと、何國(ドコ)の浦も爭噂』

簡に附く【句】日給簡(ニツキフカン)に名を注せらる。昇殿を許さる。【古語】『榮花』さるべき人人は、皆、宮のみふだにつきたれども、疊東なからず參りまかづめり』續世繼「殿上して、人のよそひなど借りてぞふだにもつきける」

簡を削る【句】日給簡(ニツキフカン)より、その名を除く。昇殿を停む。除籍す。宇治拾遺「くら人、御返持(モ)て參らずば、ふだ削らんと仰せられつるものを」榮花「暫しも滯るをば、御簡を削らせたまふ」

札を開く【句】入札の箱を開きて、調査を始む。胸算用「寛家十八間口、……寛り申し候、來る正月十九日に、この町の會所にて、札を開くと沙汰せられ」

ふだ 布田【名】〔地〕一武藏國北多摩郡調布町の大字。二上總國山武(サムヅ)郡源(ミナモト)村の大字なる上(カミ)布田・下(シモ)布田の併稱。上布田に、名高き藥王寺あり。

布田の目藥【句】上總國山武(サムヅ)郡源村大字上布田の藥王寺より出す點眼藥。

ふだ 夫駄【名】おもにかふだ(面高夫駄)を見よ。

ぶた 豚・豕・家猪【名】〔動〕偶蹄類中の不反芻類に屬する家畜。野猪の變種。野猪よりは少し小く、身體肥え、鼻も尾も短く、繁殖速かにして、肉は食料に供す。野猪を飼ふこと三代なれば、これに類し、七代に及べば、これと同樣のものとなるといふ。

豚に念佛【句】『馬の耳に念佛』に同じ。〔諺語〕

豚の輕業【句】『豚は、身體肥えたるが故に、輕業などは爲しえられぬよりいふ』揶揄して、不格好なる、極めて珍しき事の譬。〔諺語〕早替胸機關清人に見せたい。さぞ恐をなすであらう。なかなか、唐以來の毛唐人共が、豚の輕業で、どうして、どうして」三國傳來無句線香「豚の輕業より珍しきとて」「語」

豚の木登(キノボ)り【句】前條に同じ。〔諺語〕

豚の前に眞珠を投げ與ふる勿れ【句】〔基〕『新約聖書の馬太(マタ)傳第七章第六節に見ゆ。豚に眞珠を投げ與ふれば、食慾以外に欲する所なき豚は、これを食物と誤認し、その食すべからざるを知るに及びて、これを投げ與へし者に對ひて、怒るに譬へていふ』物質的な造者に對しては、いかに貴き神の教理を說明しても、徒に嘲笑に付し去るのみにて、何の效果も無し。〔諺語〕

豚を盜んで、骨を施す【句】大なる惡事をなす一方に於て、小なる善事をなす譬。〔諺語〕

ぶだ 夫駄【名】夫役(ブヤク)と駄馬と。夫役を課し、駄馬を徵發すること。東鑑「諸國御家人、悉二令賦貢一之夫駄、充二宛多用途於貧民等、致二訴法證賣於諸庄一之間」

ふた-あき 蓋明・盍明【名】『蓋が明く』を見よ』芝居にて、狂言の開始すること。

ふた-あせ 二汗【名】責馬(セメバ)の時、馬の汗の、耳の毛に、露のやうに溜ること。(一汗(ヒトアセ)・三汗(ミアセ)に對して)

ふたあや 二綾【名】二色の綾なるべし。【古語】萬葉「屋所(ヤド)に經る稻置丁女(イナギヲミナ)が妻問ふと我にぞ來たる彼方(カヲチ)の二綾裏沓(シタグツ)」

ふたあらため 札改【名】關所の手形などを糺し調ぶること。

ふたあら-やま 二荒山【名】〔地〕ふたらやま(二荒山)に同じ。

ふたあらやまじんじゃ 二荒山神社【名】ふたらやまじんじゃ(二荒山神社)を見よ。

ふたあゐ 二藍【名】㊀『赤花は、一名吳藍(クレノアヰ)といひ、青花は又韓藍(カラアヰ)の名もあるによりていふ』赤花と青花とにて染めたる色、又、經(タテ)は紅、緯(ヨコ)は藍なる織色。杜『青朽葉二藍などの物ども押卷きつつ、細櫃の蓋に入れ』㊁襲(カサネ)の色目の一。表は濃き縹の赤ばみたるもの、裏は縹(ハナダ)。「ろ。

ふ-たい 布袋【名】布にて作りたるふくろ。

ふ-たい 浮體【名】浮泛する物體。

ふ-たい 附帶【名】伴なふこと。

ふ-たい 負戴【名】荷を背に負ひ、又頭にいただくこと。「道路に負戴す」

ふ-たい 不退【名】〔佛〕**ふたいてん**(不退轉)の略。著聞「多寶塔一基を建てて、……。禪侶を置きて、不退の勤を致さる」淨土和讃「佛の御名を聞く人は、永く不退にかなふなり」

不退の淨土【句】〔佛〕次條に同じ。

不退の土(ド)【句】〔佛〕『住生拾因に「出三輪廻之鄕、至不退之土」とあり』五種不退(フシュ)の土、即ち極樂淨土。不退の所。不退の淨土。不退土(イド)。

不退の所【句】〔佛〕前條に同じ。實盛「極樂世界に行きぬれば、……。所は不退の所、命は無量壽佛とのう」

不退の友【句】不退の土に於ての友。極樂淨土にての友。釋迦如來誕生會「我、成道(ジャウダウ)して、主從の緣盡きず、不退の友となるべきぞ」「不退」に同じ。

五種の不退【句】〔佛〕ごしゅふたい(五種不退)の略。

ふ-だい 輔代【名】式部省又は兵部省の大輔(タイフ)・少輔(セウフ)の名代。節會(セチヱ)の時は、正官を用ひずして、これを用ふる習なりき。江次第「省輔代」

ふ-だい 譜第【名】㊀古、氏族相承の次第を記したるもの。世統。系譜。「諸家の譜第」㊁次條㊀に同じ。

ふ-だい 譜代【名】㊀數代、君の家に仕ふること、又その臣下。世臣。重代。〔譜第〕正統記「左相は、譜代の器なりければ、捨てられがたし」㊁德川幕府の制にて、目見(メミエ)以下の者の内、家康より四代の間に、留守居・與力・同心等の職に居りし者の子孫。㊂**ふだいだいみやう**(譜代大名)の略。譜代恩顧【句】代代臣屬して、君恩を受け來ること。太平記「譜代恩顧の若黨三百餘騎の外は、相順ふ勢(イキホヒ)も無かりけり」

譜代相傳(デンヅ)【句】代代受け繼ぎて傳へ來れること。重代。庭訓往來「譜代相傳之重書」

ぶ-たい 部隊【名】㊀一部分の團隊。㊁〔兵〕陸軍の軍隊・官衙・學校・特務機關及び戰時に於ける陸軍の特設機關。聯隊以下を小部隊といひ、旅團以上を大部隊といふ。

ぶ-たい 舞臺【名】㊀舞樂・能樂・芝居などにて、その技を行ふ所。場の正面に設けて、一段高く造る。芝居のには、本舞臺・二重舞臺・半(ハナ)舞臺・置舞臺などの種類あり。雲雀「御前に、ぶたいゆひ、あげばり打ちたり」㊁伎倆を試むる場所。

ぶ-たい 舞臺から飛下(トビオ)りる【句】「清水(キヨミヅ)の舞臺から飛下りる」の略。〔諺語〕雅筵醉狂集「舞臺よりとんだと思ひきりがやつ一枝くれよ清水の花」

舞臺を退く【句】俳優廢業す。

舞臺を勤む【句】舞臺に上りて、藝を演ず。一代男「口すぎと思はれて、舞臺を勤めたまへ」

ぶ-たい 舞態【名】舞ふ姿。舞の姿態。まが舞臺に上りて、藝を演ずる時の衣裳。若鳳俗「伊藤小太夫に、舞臺衣裳を著せて」

ぶたい-いしやう 舞臺衣裝【名】俳優が、舞臺にて、藝を演ずる時に著る衣裳。若鳳俗「はや初芝居も程なく、舞臺衣裝の物好(ものずき)、色色の美を盡し」

ぶたい-いんしやう 舞臺印象【名】俳優の、舞臺にて藝を演ずる時に、觀客の受くる印象。

ぶたい-うら 舞臺裏【名】舞臺のうしろ、即ち樂屋の在る所。若鳳俗「いよう、いよう、千樣(センザマ)、千之助樣、萬人(マンニン)の中にもまたとござるまい、……と、舞臺裏まで譽きわたり」

ぶたい-がほ 舞臺顏【名】舞臺に出でて、藝を演ずる折の、化粧したる顏。(地顏(ヂガホ)に對して)

ぶたい-がまち 舞臺框【名】昔、芝居にて、舞臺の前面、二段下りたる所の、人の通行せし路。

ぶたい-かんとく 舞臺監督【名】芝居にて、脚本の選擇を司り、演劇全般に亙る事務を取締る役。

ぶたい-げいこ 舞臺稽古【名】芝居の狂言を、舞臺にて豫習すること。

ぶたい-げいじゅつ 舞臺藝術【名】『英 Theatre』戲曲を舞臺上に具象化する藝術的手段の總稱。

ぶたい-けうれん 部隊敎練【名】〔兵〕一部隊にて行ふ敎練。

ぶたい-こ 舞臺子【名】**いろこ**(色子)に同じ。若鳳俗「惣じて、舞臺子は、人に言葉を掛け、あとの減らぬ手などは、誰にも握らすべし」

ふたい-こうそ 附帶控訴【名】〔法〕訴訟當事者の一方の控訴に附帶して、相手方が提起する控訴。刑事訴訟にては、控訴裁判所の檢事にも、これを認許せり。

ぶたい-さうち 舞臺裝置【名】芝居にて、藝を演ずる時の、舞臺上の一切の裝置。

ぶたい-さかづき 舞臺盃【名】大阪の芝居にて、他の土地より新に乘り込みたる俳優を迎へて、舞臺にて催す酒宴。

ふたい-じ 不退寺【名】**ふたいてんほふりんじ**(不退轉法輪寺)の略。

ふ-だいし 傅大士【名】〔人〕支那南齊の有髮の道士。東陽郡烏傷縣、今の浙江省の人。父は宣慈、母は王氏。留氏名は妙光を娶りて、子普建・普成(フジョウ)を生む。厚く佛敎を信じ、自ら稱して善慧といひ、まづ妻子を敎化し、田宅を捨つ。又、輪藏を創む。陳の大建元年入寂す。年七十二。嘗て梁の武帝に謁せし時、納衣を著け、冠を戴き、履を穿ちしより、後世、道士の冠、儒者の履、佛者の袈裟を著けたる狀の像に造る。後世、寺院にて、輪藏の中に、その二子を脇侍(ワキヂ)とし、一人は手を拍ちて笑ひ、他は父を指して笑へる姿の像を置き、世に笑佛(ワラヒボトケ)と稱す。一名、東陽大士。謠曲「輪藏」「傳大士・童子顯れたり」

ふたい-しそ 附帶私訴【名】〔法〕公訴に附帶して、被害者が、犯罪より生ぜる損害の賠償、又は贓物の返還などを請求する訴訟。性質は、純然たる民事なれども、公訴との關係上、裁判の一途に出づる便宜あるより、その犯罪を處斷する刑事裁判所に提起するを許せり。

ふ-だいしやう 扶臺掌【名】古、彈正臺に置き、臺掌に闕ある時、これに補したる雜任。

ふたい-じやうこく 附帶上告【名】〔法〕被上告人が上告せられたる判決に對して、提起する上告。即ち上告裁判所になす、不服申立の法。

ふたい-じやうそ 附帶上訴【名】〔法〕附帶控訴と附帶上告との總稱。

ふたい-しゆ 譜代衆【名】譜代の臣下たち。甲陽軍鑑「信長、譜代衆をも、この伊豫守が下知に附けとて、信長自筆の手形を賜はる」

ふたい-しようしよ 附帶證書【名】負債の支拂に關して、或條件の附帶する證書。例へば、抵當借用證書などの類。

ぶたいすがた 舞臺姿【名】俳優の、舞臺にて、藝を演ずる時の姿。若鳳俗「舞臺姿そのままにて參れ」

ふたい-すぢ 譜代筋【名】譜代たる家筋、

又その家の者。甲陽軍鑑「美濃國土岐殿譜代筋稻葉伊豫守といふ侍」

ふたい-せいきう 附帶請求【名】〔法〕前になしたる請求事件に附帶して生ぜる、後の請求。例へば、貸金の請求を裁判所に提起したる後、又その金員の利子を請求する類。

ふたい-せいくわつ 舞臺生活【名】俳優「としての生活。

ふたいせき-てつき 譜代席手附【名】てつき(手附)を見よ。

ふたいたい-ぶつ 不代替物【名】〔法〕『獨 Unvertretbare Sache』特別に定まりゐて、他の同種・同質・同量・同積の物を以て代替すること能はざる物、即ち土地・家屋などの類。特定物。(代替物に對して)

ふだいだいみやう 譜代大名【名】徳川時代の大名中、家康以前より徳川氏に臣禮を取りたるもの。譜代。(外樣(トザ)大名に對して)

ふたいぢ 不退地【名】〔佛〕㊀不退の行位(ギヤウヰ)。不退轉位。㊁菩薩の初地(シヨヂ)、即ち常に向上の精神を持し、必ず進みて、無上正覺(シヤウガク)を得るに決したる地位。㊂「不退の淨土」に同じ。百日曾我「清風に乘じて、不退地の雲に遊ぶ」

ぶたいにち 豚一【名】〔人〕『若かりし頃、豚肉を好み、常に一斤づつ取り寄せて食したりとていふ』さくがはよしのぶ(徳川慶喜)の綽號。

ふ-たいてん 不退轉【名】〔佛〕『梵 Avinivartya 又 Aviparitika(阿毘跋致)の譯語』退轉せぬこと、即ち所修の德・善根功ますます增進して、決して退失・變轉せざること。不退。心出萬年草「未世・末代不退轉の御回向(エカウ)頼み存じ候」

ふたいてん-ほふりん 不退轉法輪【名】〔佛〕佛・菩薩の、不退轉なる法輪。不退輪。

ふたいてん-ほふりん-じ 不退轉法輪寺【名】ありはらでら(在原寺)に同じ。

ふたいてん-ね 不退轉位【名】〔佛〕ふたいぢ(不退地)㊀に同じ。

ふたい-ど 不退土【名】〔佛〕「不退の土」(ト)に同じ。

ふたい-さこ 二從兄弟・再從兄弟【名】またいさこ(又從兄弟)に同じ。

ふたいさこ 父の二從兄弟【句】次條に同じ。

ふたいさこ-をぢ 族父【名】父のふたいとこ。おほおほぢをぢ。ぞくふ。

ふたいさこをぢ-よめ 族祖母【名】族父の妻。

ふたいさこ-をば 族姑【名】父の從祖姉「妹。ぞくこ。

ふたい-なみ 譜代並【名】譜代大名と同列に取り扱はるる家格。

ふたい-にっちよく 部隊日直【名】〔兵〕軍隊の野外に宿營する場合に、各種の大隊にありては、中・少尉の內一名、獨立中隊又は獨立部隊にありては下士一名、舍衞日直將校又は露營日直將校より、必要の命令を受け、營地の靜謐と軍紀とに注意し、且つ、その隊長と舍營司令官又は露營司令官とより出でたる命令を實施する勤務。營地の兵員寡少にして、舍營日直將校を置かざる時は、部隊日直將校兼任す。

ふたいにっちよく-しやうかう 部隊日直將校【名】〔兵〕前條を見よ。

ふたいはん 附帶犯【名】〔法〕或犯罪に附帶せる犯罪。例へば、同一の場處にて、同時に、一人又は數人にて、數罪を犯したる場合、數人共謀して、日時又は場處を異にして、數罪を犯したる場合、及び自己又は他人の犯罪を容易ならしむるがため、又は罪を免れんがために、他の罪を犯したる場合の類。この犯罪の發見せられし時は、裁判所は、檢事の起訴なくして、併せて、これを裁判することを得。

ぶたいばん 舞臺番【名】昔の芝居にて、留場(トメバ)の者の內より、一二人づつ、舞臺の傍に居て、見物人の雜沓・口論、又、演技中に、舞臺へ駈け上らんとする者の防止、又、急病人の介抱等の事を掌りし者。

ぶたい-びらき 舞臺開【名】新築の舞臺にて、初めて藝を演ずること。こけらおとし。

ぶたい-めん 舞臺面【名】舞臺の上の情「景。ぱめん。

ふたい-りん 不退輪【名】〔佛〕ふたいてんほふりん(不退轉法輪)の略。

ふ-たう 不當【名】㊀道理にかなはぬこと。正當ならざること。戾道。無法。沙石集「不當のわざをし、佛物(ブツ)を犯す」御伽草子「鉢かづき」「ふたうの者の心やな」㊁向ひ當ることを得ざること。敵對し得ざること。盛衰記「不當の大虛言の御房(ホウ)なり。あの不當の心にて勳功を家り」鎌倉三代記「おお、萬夫不當の大丈夫」

ふたう 仆倒【名】たふるること。ひっくりかへること。「れざること。

ふたう 不倒【名】立ちたるままにて、倒

ふたう 不撓【名】㊀たわまざること。㊁次條に同じ。

ふたう 不撓不屈(ツク)【句】志の堅固にして、艱難のために沮喪せざること。

ふたう 不黨【名】黨せざること。くみせざること。「不偏・不黨」

ふたう 父黨【名】『後漢書の張楷傳に「賓客慕之、自二父黨宿儒一偕造二門焉一」とあり』父の黨類。父のなかまの人たち。

ふたう 浮宕【名】ふらう(浮浪)に同じ。

ふたう 婦道【名】婦女の守るべき道。女の踐み行ふべき道。

ふだう 不道【名】㊀道理に外れたること。道ならぬこと。ぶだう。むだう。無法。非道。㊁八虐の一。一家死罪に非ざる三人を殺し、人を支解し、蠱毒を造著し、厭魅して殺さんことを謀り、疾病にせんことを謀り、愛媚を求めんとし、伯叔父・姑・兄・姉・外祖父母・夫・夫の父母を毆打・告訴し、殺さんことを謀り、四等以上の尊長、並びに妻を殺せる罪。

ぶ-たう 舞蹈【名】㊀舞ひ踊ること。㊁はいぶ(拜舞)に同じ。〔古語〕源氏「御祿の物、うへの命婦取りて賜ふ。……、長階(キザハシ)よりおりて、舞蹈したまふ」㊂『英 Dance』夜會などにて、男女相携へて行ふ、西洋風の踊。だんす。

ぶ-たう 武道【名】㊀武士のみち。武藝。(文道に對して)㊁ぶだうかた(武道方)の略。「同じ。

ぶ-たう 不道・無道【名】ふだう(不道)㊀に同じ。

ぶだう 葡萄(希 Botrus の訛なるべしといふ)【名】㊀〔植〕葡萄科に屬する蔓生の植物。葉は五尖をなし、花は春の末、黃白色の小花、穗をなして簇り開き、秋、球狀にして、暗紫色又は淡綠色を呈する漿果、房をなして垂る。果實の暗紫色なるは赤葡萄、淡綠色なるは白葡萄といふ。竹を縱橫に亙したる高き棚を造り、蔓をからます。原產地は露西亞のカウカス(Caucasus)・カスピヤ(Caspian)海の南部等なるべしといふ。食用とし、又は葡萄酒の原料とす。えびかづら。〔蒲萄・蒲陶〕㊁紋所の一。葡萄の葉と實とに象(カタド)りたるもの。「葡萄桐」・「葡萄の丸」などの種類あり。

ぶだういろ 葡萄色【名】熟したる赤葡萄の實の色に似たる染色、即ち紫色の黑ばめるもの。ぶだうむらさき。ぶだう。

ぶだうえき 葡萄液【名】『英 Grape juice』葡萄酒と同じく葡萄を原料として製し、アルコホルは含有せずして、主に婦人・小兒の飲料に適せしめたる液汁。

ぶだう-がき 葡萄柿【名】〔植〕やまがき(山柿)に同じ。

ぶだう-かた 武道方【名】芝居にて、武道に達して、忠義なる武士に扮する役。

ぶだう-ぎり 葡萄桐【名】紋所の一。一枚の葡萄の葉の上方に、その實三房を添へ、桐の紋の如き形に描けるもの。

ぶだう-くわ 葡萄科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門、離瓣花區に屬する一科。灌木又は草本。熱帶地方及び溫帶地方に產す。葡萄・野葡萄(ノブダウ)・蘡枯(エビヅル)など、これに屬す。

ぶだう-くわい 舞蹈會【名】舞蹈㊁を行ふ。

ぶ-たうけ 不道化【名】道に外れて、橫著なること。不埒なる所作。橫道。領城反魂香「葬禮の戾に祝言の家へ立ち寄るは、なめ過ぎたふだうけ……と、にがにがしく叱られ」

ぶだう-じやう 葡萄狀【名】葡萄の實の集まりて、房(サ)をなせるに似たる形狀。

ぶだうじやう-きうきん 葡萄狀球菌【名】〔植〕葡萄狀に集合せる球菌の總稱。病原性を有するものは、膿腫・化膿性炎症。

敗血症等の原因となり、又、非病原性にして、無害なるもあり。

ぶだうじやう-せん 葡萄狀腺【名】〔醫〕『獨 Acinöse Drüse』外形、葡萄の房のごとくなる腺。唾液腺のごとき、これなり。但し腺の研究の進歩に伴なひて、この名稱は用ひられざるに至り、今の集合性胞狀腺と呼ぶものに適合す。

ぶだうしゆ 葡萄酒【名】葡萄の汁を原料として釀したる酒。赤葡萄の實より製したるは、血紅色を呈し、白葡萄より製したるは、淡黃色を呈す。

ふたう-しよぶん 不當處分【名】間違ひたるさばき。正當ならざる行政處分。

ふだう-たい 不導體【名】〔理〕『英 Non-conductors』熱又は電氣を傳導せざる性質の物體。熱の不導體は、同時に又、電氣の不導體なるを常とす。不良導體。(導體に對して)

ぶだう-たう 葡萄糖【名】〔化〕『英 Grape sugar 又 Dextrose. 西曆一七九二年、ロオウイッツ(Lowitz)氏の、葡萄を搾りたる液中より發見したるによりて名づく』葡萄その他、無花果(イチヂク)・柿などのごとき甘き果實及び蜂蜜の中に、果糖と共に含有せる、一種の砂糖。白色又は無色・透明の結晶物にして、水に溶け易く、甘味の程度は、蔗糖に及ばざれども、菓子の製造等に多く用ひ、又、藥用にも供す。

ぶだう-だな 葡萄棚・葡萄架【名】葡萄の蔓をからませて、蔕延を扶くる棚。

ふだ-うち 札打【名】三十三箇所・八十八箇所の巡禮又は百社參などする人が、生國・氏名・年月日を書きたる札を、參詣したる寺社の戸・柱などに打ち附くること。

ぶだう-でんらいき 武道傳來記【名】〔書〕武家義理物語と同樣に、武士の道義的觀念を中心としたる小話三十二篇を記したるもの。八卷。井原西鶴の著。

ぶだう-どん 豚饂飩【名】わんたん(雲呑)に同じ。

ふだう-にん 不當人【名】道理にかなはぬ人。理にくらき人。不法もの。〔古語〕保元「頼みて來りたまふをだに斬る程の不當人の、まして、我我を助けたまふ事あらじ」平家「謀叛の時、同心しながら、返忠(カヘヂウ)したる不當人にて候へば」

ぶだう-にん 不道人・無道人【名】不道なる行をなす人。道に外れて、亂暴なる事をする人。ぶどうもの。太平記「日本一の不道人に忻(カタ)られつる事よ」平假名盛衰記「無道人を誅罰せよとの御意を受け」

ぶだう-ねず 葡萄鼠【名】次條の略。

ぶだう-ねずみ 葡萄鼠【名】赤ばみたる鼠色。ぶだうねず。

ぶだう-の-まる 葡萄丸【名】紋所の一。葡萄の蔓にて、丸を描き、葉・果實の房を添へたるもの。

ぶだう-びやう 舞蹈病【名】〔醫〕『英 Chorea 又 St. Vitus's dance』一種の神經病。知覺を失はずして、筋肉が痙攣の運動をなし、額は皺縮し、口角斜となり、不隨意に、手腕を前後に振りまはして、指を屈伸し、或は放歌・舞蹈し、或は笑ひ、或は跳りなどす。一般に婦人、殊に小女に多し。舞蹈病。

ふたう-べんさい 不當辨濟【名】〔法〕辨濟をなすべき債務の存せざる場合に、誤りて、債務辨濟の名義を以て、給付をなしたること。

不當辨濟の取戻【句】〔法〕不當辨濟の給付者が、不當利得の原則によりて、その給付を取戻すこと。

ぶだう-ほほづき 葡萄酸漿【名】〔植〕茄(ナス)科に屬する一年生の草。莖は直立し、高さ三四尺に達す。葉は心臟形にして尖り、全緣と鋸齒とあり。夏季白色の花を著く。果實は帶紫色の漿果なり。南亞米利加の原産、觀賞用として、廣く各地に栽培す。おほせんなり。しまほほづき。

ぶだう-まく 葡萄膜【名】〔醫〕『獨 Traubenhaut』外觀、熟したる葡萄の實に似たるよりいふ』眼球の虹彩の最後にありて、この色素を含める層。「(葡萄色)に同じ。

ぶだう-むらさき 葡萄紫【名】ぶだういろに同じ。

ぶだう-もの 不道者・無道者【名】ふだうにん(不道人)に同じ。太平記「日本一の不道者」

ぶだう-らふせき 葡萄蠟石【名】〔鑛〕じやもんせき(蛇紋石)に同じ。

ふだ-うり 札賣【名】木戸札・入場券などを賣ること、又その人。

ふたう-りさく 不當利得【名】〔法〕『獨 Bereicherung』法律上の原因に基づかず、他人の財産又は勞務により、利益を受け、これに由りて、他人に損害を及ぼすこと。受益者は、被損者に對して、その利得を返還すべき義務を負ふ。

ぶだう-ゑん 葡萄園【名】主として、果實を得る目的にて、葡萄を栽培する園。

ふたう-を 不倒翁【名】おきあがりこぼし(置上小法師)に同じ。

ふた-おき 蓋置・蓋置【名】茶の湯の時、釜の蓋又は柄杓(ヒシャク)を載せおくに用ふる、竹又は陶器の、小き筒。

ふたおも 二面・兩面【名】次條に同じ。〔古語〕萬葉「奈良山の兒手柏(コテガシハ)の兩面かにもかくにも佞人(ネヂケヒト)の友」

ふたおもて 二面・兩面【名】■表面と裏面と。おもてとうらと。うらおもて。りやうめん。新千載「時雨降るこのて柏のふたおもてとにもかくにも濡るる袖かな」■表裏の二面。〔二表〕夫婦、二表なし」■ふたごころ(二心)に同じ。

ふた-おや 二親【名】父と母と。兩親。雙親。二親(フタシン)。

ふた-かしら 二頭【名】世人の頭たる、二つのもの。油糟「公家と武家とは二かしらなり(さいふ句に)國司へも守護へも瓜を參らせて」

ふだ-がしら 札頭・票頭【名】投票に依る、得數又は價格の最も多きもの。

ふた-かた 二方【名】二つの方面。ふたみち。兩樣。兩方。落葉「親・はらからに、二かたに恥を見せたまはんとや」

ふたかた 二方【名】〔地〕但馬國の舊郡の一。明治二十九年、七美(シチミ)郡と合はせて、美方(ミカタ)郡とす。

ふたがため 蓋固・蓋固【名】死人を棺にをさめて、蓋を固むること。〔古語〕榮花「ひつぎに入れたてまつりて、ふたがためなどし奉る程に」

ふたかた-やま 二方山【名】〔地〕陸前國桃生(モヽフ)郡にある山。名苑「みちのくにふたかた山の白雲はこなたかなたに立ちぞわづらふ」

ふた-かは 二皮【名】ふたかはめ(二皮眼)の略。

ふたがは 二川【名】〔地〕三河國渥美(アツミ)郡にある町。豐橋市の東方一里、大字二川は、舊東海道の五十三次の一。一時、大川町と呼びしが、明治三十九年、谷川(タニガハ)・細谷(ホソヤ)・小澤(コサハ)の三村を合はせて、今の名に改む。鐵道東海道線の停車場あり。夫木「流れてはいづれの世にかとまるべき涙を分くる二川の關」「重賢」に同じ。

ふたかはめ 二皮眼【名】ふたへまぶた(二重瞼)に同じ。

ふたがみ 二上【名】〔地〕ふたがみやま(二上山)■の略。萬葉「大阪を吾が越え來れば二上にもみぢ葉流る時雨降りつつ」

ふだ-がみ 札紙【名】その品物の名などを記して添へたる紙の札。書名を記して、その書籍の表紙に貼り附けたる紙片など。和合人「金龍山の皮包札紙をそっと見せれば、ははあ、淺草餅か」

ふたがみ-ごんげん 二上權現【名】ふたがみやまごんげん(二上山權現)に同じ。

ふたがみ-さん 二上山【名】〔地〕ふたがみやま(二上山)■に同じ。

ふたがみ-じま 二神島・二神嶋【名】〔地〕■肥前國北松浦(キタマツラ)郡小豆大島(アヅキオホ)の北方六海里にある岩嶼。方五六町。壹岐海峽西口の目標たり。■伊豫國溫泉(ヲン)郡の海上にある島。周回二里半弱。忽那(クツ)七島の一。怒和(ヌワ)・津和地(ツワヂ)諸島と合して、神和(ニキワ)村を成す。

ふたがみ-じやう 二上城【名】もりやまじやう(守山城)に同じ。

ふたがみみやうじん 二上明神【名】次條■を見よ。

ふたがみ-やま 二上山【名】〔地〕『頂上の二峯に分れをるによりていふ』■越中國射水(イミヅ)郡伏木(フシキ)町の西方にある山。別稱、越中富士。〔二神山・二守山〕萬葉

「いみづ川いゆきめぐれる玉くしげ二上山は」 ㊁**にじやうざん**(二上山)に同じ。 語曲(當麻)「二上山の麓なる當麻(タイ)の寺に著きにけり」 「次條に同じ。

ふたがみやまーごんげん 二上山權現【名】 **ふたがみーのーかみ** 二上神【名】越中國高岡市國幣中社射水(イミ)神社の祭神。舊說、瓊瓊杵尊(ニニギ)とあれども、實は建内宿禰(タケシウチ)なるべしといふ。 續紀「越中國射水郡二上神敍二從五位下一」

ふたがる 塞がる【動四自】『ふたぐ(塞ぐ)を見よ』 **ふさがる**(塞がる)に同じ。「古語」 源氏「胸ふたがりて明すらんとは」 同「なか神ふたがりて、例住みたまふ方は忌むべかりければ」

ふたきーがは 布當川【名】「地」山城國相樂(サウラク)郡にある川。湯船(ユフネ)山中に發源し、瓶原(ミカノハラ)村に至りて、木津川に合す。一名、和束(ワヅカ)川。

ふたきーぐさ 二季草【名】「植」 **ふぢ**(藤) ㊀の異稱。藏玉集「二季草。藤。春秋にかかる草なれば、二季草といへり。ときはなる花とも見ばや二季草松にのみただかかる名なれば」

ふたきーどり 二季鳥【名】「動」『秋來りて、春歸るよりいふ』 **がん**(雁)の異稱。「古語」 忠岑集「いづ方を故郷とてか二季どり年に二たび行きかへるらん」

ふたきーのーみや 布當宮【名】**くにのみや**(恭仁宮)に同じ。 叢集「山城の鹿背(カセ)山の際(ホト)に宮柱太敷(フトシ)き奉(マツ)り高知らす布當の宮は」

ふーたく 附託【名】たのむこと。まかせあづくること。 「委員附託」

ふたぐ 塞ぐ【動四他】『**ふた**(蓋)に語尾の添ひたる語』 **ふさぐ**(塞ぐ)に同じ。「古語」 源氏「御耳ふたぎたまひつ」 同「うるさうも、はづかしうもおぼえて、顏をふたぎたまへり」

ふたぐ 塞ぐ【動下二他】前條に同じ。「古語」 源氏「寢顏はふたげたまはず」

ふたくちや 二口屋【名】昔、京都にあり、菓子屋。一代男「日本一の饅頭……二口屋能登に申しつけて、夜中に拵へさせ」 雍州府志「一條虎屋饅頭祖三官、亦中華投化人也。如ㇾ今製ㇾ之家、所所有ㇾ之。松屋・二口屋・賣來屋等互爭競造二饅頭一。……。饅飩所所在ㇾ之。其内御門通丸山並長濱屋一條虎屋二口屋之所ㇾ造爲ㇾ宜」

ふたーくばり 札配【名】神社などにて、守札の類を、氏子の家家にくばり與ふること、又その人。 はいさつ。

ふたけ 二毛【名】㊀鹿の毛の、夏は赤ばみ、秋は黑ばむ等、地の色の上に、更に他の色の加はれるもの、又その毛皮。 にけ。ふたへけ。 夫木「落ちかはるふた毛の鹿のくもり星ややあらはるる夏は來にけり」 ㊁**にまう**(二毛)に同じ。

ふたけいし 蓋擊子【名】**かいけいし**(蓋擊子)に同じ。 「作」に同じ。

ふたげーさく 二毛作【名】**にまうさく**(二毛作)に同じ。

ふたげーだ 二毛田【名】**にまうでん**(二毛田)に同じ。

ふたーご 二子・雙子・双子【名】㊀**ふたこいと**(二子絲)の略。 **もろより**(諸撚)參照。 ㊁**ふたこおり**(二子織)の略。

ふたーご 二子・雙子・双子・孖子・孖【名】一度に二人の子の生ること、又その子。雙生兒。雙胎。孿子。 記「ふたごの島を生みたまふ」

ふたご 二子【名】「地」武藏國橘樹(タチバナ)郡高津村の大字。他の大字溝口(ミゾノクチ)を經て相模國大山に達す。東京市日本橋より約五里。多摩川に沿ひ、もと渡船なかりしが、大正十四年架橋竣功せり。

ふーたご 夫田子【名】身だしなみ惡しき者を罵りていふ語。

ふたーご 【數】**ふたつ**(二)に同じ。「手鞠・造羽子などを突く時の語」

ふたーご 【名】單(ヒトヘ)及び下袴などを著ざる、略式の裝束。

ふたこーいと 二子絲・雙子絲・双子絲【名】二筋縒りあはせて、一本としたる木綿絲。ふたこ。 ふたっこ。

ふたこーおり 二子織・雙子織・双子織【名】經(タテ)絲又は經絲・緯(ヨコ)絲共に、二子絲に用ひたる平織。 縞格子・飛白(カスリ)又はこれらを合はせる柄合(ガラ)に織る。ふたこ。

ふたごーぐり 二子栗【名】穀斗の中に果實の二箇ある栗。

ふたごーくわざん 雙子火山【名】「地」『英 Twin volcano』火山の活動の中心移動して、更に一の火山を生ずるに至り、しかも兩者の大さ及び噴出時代の殆ど同じきもの。例へば、相模國箱根の二子山、下野國なる鬱原火山と釋迦ヶ嶽とより成る高原(タカラ)火山などの類。

ふたごーごころ 二心・貳心【名】㊀一むきに定まらぬ心。あだし心。二心(ニシン)。 源氏「あだなる男、色このみ、ふたごころある人にかかづらひたる女」 ㊁不忠なる心。謀叛(ムホン)の心。二心(ニシン)。 金槐集「山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心わがあらめやも」

ふたごし 二腰【名】㊀腰に差してある大小の刀。 ㊁さむらひ。武士。二本差(ニホンザシ)。 心中宵庚申「さすが二腰のお心掛は格別、柔術(ヤハラ)の稽古遊ばすな」

ふたごーじま 二子縞・雙子縞・双子縞【名】二子織の縞物。

ふたことば 二言【名】二つの言葉。二言と無く【句】二度までも言ふ必要なく。一言にて、直ちに。 大鏡「大武の闕いできて、……二言となくならせたまひてしぞかし」 二言目には【句】話の序ごとに、口癖のやうに。「二言目には自慢をいふ」

ふたごーぶね 二子船・二子舟【名】船二艘を並べて繋ぎ合はせ、一つになしたるもの。 字鏡集「舫、フタゴブネ・ハシフネ」

ふたごもり 二籠【名】**ふたつまゆ**(二繭)に同じ。「古語」 後撰「ひき蘭のかくふたごもりせまほしみ桑こき垂れて泣くを見せばや」

ふたごや 豚小屋【名】㊀豚を入れ置きて飼ふ小屋。 ㊁小くむさくろしき家屋などの譬。

ふたごーやま 二子山【名】「地」㊀下野國足尾町の西南裾裝丸(マルサン)火山中にあり、上野國に跨りたる火山。圓錐形の雙峰より成り、高さほぼ相等しく、五一三六尺あり。上野國にては、大裾裝山・小裾裝山と呼ぶ。六蜻下野やふたごの山の二心ありける人をたのみけるかな ㊁相模國足柄下(アシガラシモ)郡にある山。箱根火山の火口丘にして、その最南に位し、雙子狀をなし、北なるを上二子といひ、高さ三五九七尺、南なるを下二子といひ、高さ三五一一尺、各、頂上に噴火口あり。 ㊂能登國鳳至(フゲ)郡にある山。七尾(ナヽヲ)北灣大口瀨戶の北。その頂、富士山に似たるより、能登小富士の稱あり。内海を航する者の目標たり。 ㊃**にじやうさん**(二上山)に同じ。 ㊄美作(ミマサカ)國苫玉山の異稱。

ふたごーやま 兩子山【名】「地」豐後國國東(クニサキ)半島の中央にある山。阿蘇火山脈に屬する休火山の一。東・西國東郡の境界を劃して、高さ二三七九尺、東・西二峰に分れ、山腹に兩子寺(總持院)あり。

ふたこゑどり 二聲鳥【名】「動」**ほと**(鳩)の異稱。「古語」 篠目抄「そことしも知らぬ立木にしばしばとふたこゑ鳥のひとりすげなき」

ふださし 札差【名】『請取手形の渡るや、その人名を紙に記し、割竹に挾みて、藏役所の藁苞に插みしより、名を得たりといふ』德川時代に、旗本・御家人の代理となりて、幕府より祿米を受け取り、又それを賣買することを掌りし商人。すべて、今の東京市淺草區藏前(クラマヘ)通なる幕府の年貢米を貯藏せし倉庫に從屬したり。慶安の頃より存し、大岡忠相の町奉行たりし時、定員九十六名に限られ、後、百一名となりて、明治維新に及び、仲間の承諾を得て、家督相續し、又は他人に讓與することをも得たり。その他、甲府及び三卿中の田安・一橋(ヒトツバシ)の二家、加賀の金澤藩の如きは、幕府のこの制度に倣ひたり。くらやど。 ふださしやど。 やど。

ふださしーくみあひ 札差組合【名】札差にて組織したる組合。天王寺組・片町組・森田町組の三組あり。各、六番に分れ、一番は六概六家より成れり。組合中には、月

行事・玉場行事・場所行事・日行事等あり。

ふださし-やど 札差宿【名】**ふださし**(札差)に同じ。

ふださし-れう 札差料【名】札差の受くる手數料。錄高百俵に付き、金一分の割とし、百俵以下にて、月月扶持方あるものは、金一分を限度として、相對にて定めたり。

ふた-さんぼん 二三本【名】花合(クワアハセ)[三]の手役(テヤク)の一。三本、二組ありて、これに、他の物一枚加はれるもの。

ふたさや-の 二鞘の【枕】上古、刀二腰を、一つの鞘に、掛子(カケ)のごとく隔ててさしおくことありしより、へだつ(隔つ)にかけていふ。萬葉「人事を繁みや君を二鞘の家を隔てて戀ひつつをらむ」

ふたしか 不確【名】たしかならぬこと。不確實(シカク)。

ふたしず-ゑ 蓋擎子【名】**かいけいし**(蓋擎子)に同じ。

ふたしな-の-くらゐ 二品位【名】**にほん**(二位)に同じ。〔古語〕勅撰「かは竹のよにつかうまつりて、ななそぢのよはひに過ぎ、二しなの位をきはめて」

ふたしなみ 不嗜・無嗜【名】嗜の悪しきこと。用意の足らざること。甲陽軍鑑「男道無嗜にて、武邊無案内なり」狂言(六人僧)「不嗜な人ぢや。自然髪を剃らうと思うて、茱は剃刀をたしなうだ」

ふたし-へ 二重【名】『しは助辭』**ふたへ**(二重)[四]に同じ。〔古語〕伊勢集「いかでかく心一つを二しへにうくもつらくもなして見すらん」

ふたじま 豚島・豚嶋【名】〔地〕小笠原列島の一なる弟島の別稱。

ふたしよ 札所【名】巡禮などの、參詣のしるしに、札[三]を納むる靈場。卽ち三十三所の觀音堂、八十八箇所の大師堂など。

ふたじらみ 豚虱【名】〔動〕豚の皮膚に居る、一種の虱。

ふたしりずゑ 蓋擎子【名】**かいけいし**(蓋擎子)に同じ。

ふたじる 豚汁【名】豚の肉を入れてつくりたる汁物。

ふたすぢ-みち 二筋道【名】**ふたみち**(二道)に同じ。

ふた-せ 二瀬【名】一人の女の、下女の仕事と妾の勤とを兼ぬること。一代女「御隱居の禪門樣……女一人、猫一疋、これへ二瀬の約束して」

ふたせ-たんくわう 二瀬炭鑛【名】〔地〕筑前國嘉穗(カホ)郡二瀬村外一町・三村に跨れる炭鑛。今は農商務省製鐵所に屬す。

ふた-せん 札錢【名】[一]**せいさつせん**(制札錢)に同じ。[二]德川時代に、振賣の者の、鑑札に對して納付せし金錢。[三]興行物の入場料。

ふたせ-をんな 二瀬女【名】二瀬をする女。一代女「飯炊(メシタキ)下女も、見るを見眞似に色作りて、大爺の折節は、次の間に行きて、御機嫌を取る、これを二瀬女とはいふなり」

ふたそ-ぢ 二十【數】にじふ。はたち。〔古語〕榮花「百首『小車の錦のことのはをかけてふたそぢ經てもあふと聞かばや」

ふただいし 普陀大士【名】〔佛〕『普陀は、普陀落の略、大士は菩薩の義』**くわんぜおんぼさつ**(觀世音菩薩)に同じ。

ふたたき 二炊【名】一度炊きたる飯を、更に炊きて、粥と通常の飯との中間の程度に柔かにすること、又その飯。多くは、仝快刺に近き病人に食せしむ。にどだき。

ふたたて-め 二立目・二建目【名】昔の芝居にて、一日の狂言を三段に分てる、その第二段に當るもの。卽ち序開(ジヨビラキ)に次ぎて、中通(チユウドホ)の役者の勤めし一幕物。中通の役者の出世の階梯となりしより、各、力を盡して勤むるを、頭取(トウドリ)を始め、立役者(タテヤク)も見物して、その技のすぐれたる者を、次の年より昇級せしむる等の事ありきといふ。ふたつめ。

ふたたび 二度【名】うまれかはり。再生。〔雜〕「早三歳にて、習はずして、花鳥風月の大文字書けば、大師の二度と、これをおろそかにせざりしに」

ふたたび 二度・再復【名】かさねて。くりかへして。兩度。再度(サイド)。

ふたたび-めし 二度飯・再飯【名】湯取飯(ユドリメシ)を再びよく煮て、熟せしめしもの。

ふたたび-もち 二度餅・再餅【名】餅の古びて固くなりたるを、水に浸し、更に湯を十分にして煮くたしたるもの。味あはく、老人など、齒を用ひずして食ふに適す。

ぶだち 武太刀【名】軍陣に用ふる太刀の總稱。(飾太刀・蒔繪太刀等に對して)

ふた-ぢやわん 蓋茶碗・蓋茶碗【名】蓋の附きたる茶碗。著聞集「桂川の柳魚に松葉をあしらひて、蓋茶碗にて輕う出せ」一代女「蓋茶碗に、煮しめ豆絕えず」

ふたつ 布達【名】[一]一般にしきおよぼすこと。[二]布告し達すること。あまねきぶれ。[三]〔法〕明治十九年二月勅令第一號公文式の制定以前に、行政官が、その職權内にて發せし行政命令。現今の省令・府縣令などに相當す。

ふたつ 不達【名】到達せざること。不著。

ふたつ 二【名】二つの物事。兩者。雙方。「對(ツイ)。

ふたつ 二つ【數】一つに一つを加へたる數。ふた。二(ニ)。兩(リヤウ)。

【句】「二度有る事は、三つ有る二つ有る事は三度有る」に同じ。〔諺語〕二つと無し【句】次條に同じ。竹馬「天竺に二つとなき鉢を、百千萬里のほど行(ユ)きたりとも、いかでか取るべき」

二つ無し【句】[一]ならぶもの無し。又と無し。無雙なり。二(ニ)なし。萬葉「二つ無き戀をしすれば常の帶を三重結ぶべく我が身は成りぬ」落窪「めでたくあはれなること二つなくて」[二]ただ一つのみあり。又と無し。かけがへ無し。甘藍「私にいくさをし、二つなき命を失ひ、何の詮か候ふべき」

二つになる【句】身體を斬り放さる。眞二(マツ)つになる。太平記「兜の鉢を菱縫の板まで破り著けたりければ、重眞、二つになりて失せにけり」

二つに一つ【句】二つの物事の中、何れかの一方。のるか、反(ソ)るか。一(イチ)か、八(ハチ)か。「相手を殺すか、自分が殺さるるか、二つに一つの勝負」

二つの海【句】「生死(シヤウジ)の二つの海」を見よ。

二つの星【句】にせい(二星)に同じ。新葉「今年より君にし契れ雲の上に二つの星のゆきあひの空」

二つの道【句】[一]忠と孝との道。續後拾遺「とにかくに二つの道を思ふこそ世につかふるも苦しかりけれ」[二]〔白居易の秦中吟に「主人會二良媒一、置レ酒滿二玉壺一、四座且勿レ飮、聽二我歌一兩途、富家女易レ嫁、嫁早輕二其夫一、貧家女難レ嫁、嫁晩孝二於姑一」とあり〕富家の女は、たやすく婿の道を得れども、夫を輕んずる弊あり、貧家の女は、緣遠く晩婚なれども、姑に事へて孝を盡すこと。源氏「あるじの女(ムスメ)ども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、盃持て出でて、我が二つの道謠ふを聞けとなん聞えごちはべりしかど」

二つ一つ【句】「二つに一つ」に同じ。梅暦「彼奴(アイツ)を出すか、私(ワツチ)が出るか、二つ一つ方(カタ)を附けなくっちやあ、悔しうざんす」

二つも無く、三つも無し【句】〔佛〕[一]『法華經の方便品に「十方佛土中、惟有二一乘法一、無レ二亦無レ三」あり。「無二(ニ)・無三」參照』如來の敎法は、ただ成佛すべき一乘法のみありて、二乘法も三乘法も無し。(濁惡(ジヨク)・愚鈍の衆生のために二乘・三乘等を說くは、方便の言說にて、眞實に非ざるによりて、これを除外していふ)二(ニ)も無く三(サン)も無し。謠曲「鵜飼」「二つもなく、三つもなく、ただ一乘の德によりて、那落に沈みはてて浮びがたき惡人の佛果を得ん事は、この經の力ならずや」寶物集「二つなく三つなき法(ノリ)と聞きつれど、五つの障(サハリ)あらじとぞ思ふ」[二]非常に貴し。新後撰「春はただ花をぞ思ふ二つなく三つなき物は心なりけり」

二つ好い事は無い【句】一つ好ければ、他に惡き事あるが、世の常なり。〔諺語〕

ふたつ-いかり 二錨【名】紋所の一。錨二箇を上下に配して、圓形に描けるもの。

ふたつ-いし 二石【名】二つ並びてある石。丹波與作「二見の浦のふたつ石」

ふたつ-いたらがひ 二伊多良貝【名】紋所の一。伊多良貝を、二箇、左右に並べて、圓形に描けるもの。

ふたつ-いね 二稲【名】紋所の一。穂の附きたる稲を、二束、上下に丸く向ひあはせて、圓形に描けるもの。

ふたつ-いろ 二色【名】襲(かさね)の色目の一。表は薄色、裏は山吹色。榮花「女房は、ふたつ色の濃き、うすき」「に同じ。

ふたつ-うち 二打【名】**にちやう**(二挺)〔一〕**ふたつ-えり** 二襟【名】二枚の小袖を、別別にせず、一つに重ねて著ること。三襟(みつえり)などと同類の語。

ふたつ-かきつばたのまる 二杜若丸【名】紋所の一。葉と花との著きたる杜若を、二本、上下に向ひあはせて、圓形に描けるもの。

ふたつ-かけご 二掛子・二懸子【名】掛子の、二つ附きてあるもの。枕「ふたつ掛子の硯、いとつきづきしう、蒔繪の様もわざとならねど」

ふたつ-がさ 二笠【名】紋所の一。笠を、二箇、左右に並べて描けるもの。大和國舊柳生(やぎう)藩主柳生家の定紋。一に柳生笠の名あり。

ふたつ-かさねびし 二重菱【名】紋所の一。一つの菱形の下に、半覆はれたる菱を描きたるもの。

ふたつ-がしは 二柏【名】紋所の一。二枚柏の葉を、左右に向ひあはせて、圓形に描けるもの。

ふたつ-がしら 二頭【名】紋所の一。曾我扇八景「庵(いほ)の内に、二つ頭の提燈は」

ふたつ-がはら 二航・二龍骨【名】船の、間切骨(まぎりぼね)を二本用ひて造れるもの。平家「二瓦・三棟(むね)造ったる船に乗り」

ふたつ-がひ 二番【名】左右各二曲づつ奏する番舞(つがひ)。

ふたつ-かひ 簡便【名】書簡を持ちて到る使者。ふみづかひ。〔古語〕

ふたつ-かり 二雁【名】次條に同じ。太平記「地黒の直垂(ひたたれ)に、銀箔にて、二雁を押し」

ふたつ-かりがね 二雁金【名】**にほどかりがね**(二羽飛雁金)に同じ。「坏。

ふたつ-きず 蓋坏・蓋坏【名】蓋の附きたる

ふたつ-きず 蓋附・蓋附【名】蓋の附きてあること、又その物。

ふだ-つき 札附【名】〔一〕札の附きてあること、又その物。〔二〕**しやうふだつき**(正札附)の略。

ふたつ-ぎぬ 二衣【名】袖(そで)を二つ重ねて著たるもの。この種類に、五衣(いつつぎぬ)・三衣(みつぎぬ)などあり。増鏡「紅の二衣、同じ單(ひとへ)、紫の指貫(さしぬき)」

ふだつきもの 札附者【名】『正札(しやうふだ)附の人の義』その罪悪の世に知られてある人。

ふたつ-ぐし 二櫛【名】**にまいぐし**(二枚櫛)に同じ。榎坂反魂香「屋形の姫君銀杏(ういふ)の前、かもじ入れずの二櫛」俗曲、八重霞浪花濱荻「合鏡(かがみ)二櫛」

ふたつ-ぐり 二繰【名】履物の、鼻緒の二本附きてあるもの。

ふたつ-けんかたばみ 二劍酸漿草【名】紋所の一。複線の圓形の内へ、かたばみの花瓣二枚を二重書にして、上下に向はせ、その接合點へ、二本の劍尖を添へたるもの。

ふたっ-と 二子【名】**ふたご**(二子)〔一〕の音便。

ふたつ-ご 二子【名】二歳の子。續猿蓑「支考「二つ子も草鞋を出すや今日の雪」

ふたつ-こそで 二小袖【名】小袖を二枚重ねて著ること。磯鷹記「唐綾の二子袖に、練貫(ねりぬき)の二小袖を打纏ひて」曾我「生張(きはり)の二小袖を著たまふが」

ふたっしや 不達者【名】達者ならざること、又その人。

ふたつ-すぢかひ 二筋違【名】模様の一。線を、二本づつ、筋違になるやうに、斜にひきたるものなるべし。太平記「地香(ぢかう)の直垂(ひたたれ)に、二筋違の中に、銀箔にて、瞿麥(なでしこ)を押したるを著」

ふたつ-だいみやう 二大名【名】大名縞の一種。縞の二本づつ並行せるもの。

ふたつ-だうぐ 二道具【名】**にほんだうぐ**(二本道具)に同じ。丹波與作「以前は御家中の物頭、采配まで殘され、二つ道具を突かせし身が」

ふたつ-だま 二玉【名】續けざまに發射する、二つの彈丸。義經腰越狀「鐵砲……、ぼんといはする二つ玉、やはか仕損じ申すべき」假名手本忠臣藏「山越す猪(しし)に出て合ひ、二つ玉にて打留め」

ふたつ-つむじ 二旋毛【名】**になひつむじ**(擔旋毛)に同じ。

ふたつ-つるいてふ 二蔓銀杏【名】紋所の一。銀杏の葉を、二つ、基部にて、上下に向ひあはせ、その間より、柄の端の、蔓の如くに見ゆるやうに描けるもの。

ふたつ-つるいてふびし 二蔓銀杏菱【名】**つるいてふびし**(蔓銀杏菱)に同じ。

ふたつてふてふ-くるわにっき 雙蝶蝶廓日記【名】竹田出雲・三好松洛・並木千柳等の合作せる淨瑠璃。難波の人山崎與五郎と西國の侍平岡郷右衛門との兩人の間に藤屋抱(かか)への遊女吾妻身受の身より起れる確執を仕組みしもの。全篇、九段より成る。

ふたつ-どもゑ 二巴【名】紋所の一。巴をこれに二つ描けるもの。右巻左巻の二種あり。

ふたつ-どり 二取【名】二つの中、何れか一つを擇び取ること。若鳳傳「鼻は人の面(おもて)の山なりと、古き詞に申し傳へし……二つどりには、低きより高いに德の有るべし」

ふたつ-なし 二無し【句】**ふたつ**(二)の條下を見よ。

ふたつ-なは 二繩【名】綱渡(つなわたり)の、二筋の綱を渡して行ふもの。若鳳傳「梁川林之助が乘り初めし二つ繩を、一筋にして渡り、都人の目をも覺ましける」

ふたつ-はうぎん 二寶銀【名】**にほうぎん**(二寶銀)に同じ。

ふたつ-はうじぎん 二寶字銀【名】**えいじぎん**(永字銀)に同じ。

ふたつ-はうちは 二羽團扇【名】紋所の一。羽團扇を二つに割き上下相向はせて、圓形に描きたるもの。

ふたつ-ばぐさ 二葉草【名】〔植〕**ふたばぐさ**(二葉草)に同じ。

ふたつ-はん 二半【名】米の四斗俵。**ふたつもの**(二物)〔二〕參照。〔大阪堂島の米相場の語〕

ふたつ-はん 二半【名】火事の告知に、半鐘を二つづつ打ち鳴らすこと。(一半(はん)・三半(さんぱん)・擦半(すりはん)に對して)

ふたつ-び 二火【名】**ひとつび**(一火)〔一〕を見よ。

ふたつ-ひき 二引【名】次條の略。

ふたつ-ひきりやう 二引兩【名】**ひきりやう**(引兩)を見よ。平家「緋縅の鎧著て、二引兩の母衣(ほろ)を掛け」太平記「神殿をうち破りて、重寶どもを披見したまふに、錦の袋に入りたる二引兩の旗あり」

ふたつ-ひとつ 二つ一つ【名】**ほんぎよく**(半玉)を云ふ。〔遊里の語〕

ふたつ-ひとつ 二つ一つ【句】**ふたつ**(二つ)の條下を見よ。

ふたつ-ぶとん 二蒲團【名】蒲團を、二枚重ねて敷くこと。**みつぶとん**(三蒲團)・**ななつぶとん**(七蒲團)參照。一代男「更(ふ)け過ぎて、床取るにも、二蒲團春夜著、枕も常ならず」

ふたつ-べっつひ 二竈【名】火床(ほど)を二つ並べて造りたる竈。伊賀越道中雙六「道具諸式を値(あたひ)にして取ってくれといふ事なれど、……二つ竈、鍋釜掛けて、百二十と入れい」

ふたつ-へんじ 二返事・二返辭【名】一も二もなく、卽座に承諾すること。

ふたつ-ぼし 二星【名】〔一〕**にせい**(二星)に同じ。〔二〕二つの點。吉原細見にて、妻三(さんぴん)の太夫の名の上には、これを施す習なりしなり。柳樽「三星(さんぴん)の氣かひはなし二星」

ふたつ-づま 二妻【名】二人の妻。ふたりづま。〔古語〕紳樂(神樂)「われをきてふた

づま取るや取るやてふ」

ふたつ-まくら 二枕【名】㊀さしまくら(指枕)㊁に同じ。㊂夫婦の同衾する枕。

ふたつ-まげ 二髷【名】髻に元結を多く巻き、髷を二つになしたる髪。昔時、若衆の結ひしもの。

ふたつ-まめざう-びし 二豆蔵菱【名】紋所の一。豆蔵菱を二つ、裾にて、上下に向ひあはせ、菱形に描けるもの。

ふたつ-まゆ 二繭・雙繭・孖繭【名】二匹の蠶にて、一つを造りたる繭。ふたごもり。(一繭(ヒトツ)に對して)

ふたつ-み 二身【名】衣服の裁方の一。一身(ヒトヘ)に似て、衿(ヒラ)に脊縫あり。

ふたつ-むかで 二蜈蚣【名】紋所の一。蜈松二匹を上下に向ひ合はせて、圓形に描きたるもの。「同じ。

ふたつ-め 二目【名】ふたため(二立目)に

ふたつ-もくかう 二木瓜【名】紋所の一。木瓜の形二つを、左右に並べて描けるもの。 曾我「二木瓜の幕打ちたる館」若風俗

「二木瓜袖岡今政之助、重柏(カサネ)に巴、鈴木平七」

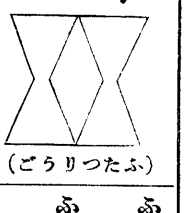
ふたつ-もじ 二文字【名】『徒然草に見えたる「ふたつ文字牛の角文字直(ヒタ)な文字ゆがみ文字とぞ君はおぼゆる」といふ歌によりていふ』平假名のこの字の異稱。

ふたつ-もの 二物【名】㊀田樂にて、鼓・笛などの同種の鳴物を、二つ揃へて用ふること。今言「様様の田樂を、二物・三物(ミツ)に儲けて」㊁米の五斗俵。「大阪堂島の米相場の語」大阪繁昌詩「米市……有二三物(三斗苞)・二物(五斗苞)・二半之稱(四斗苞)一」

ふたつ-もん 二紋【名】ひよくもん(比翼紋)に同じ。一代女「いづれも並べて二紋といへる惡口、見るにをかしげなる顏つき」松の葉「さんや節」「二紋のちてちり綿のべんべを著せて」「矢」に同じ。

ふたつ-やはず 二矢筈【名】にほんや(二本矢)【名】やまわけ(山分)㊁に同じ。新版歌祭文「あんばいようかかったら、二山ぢや。合點か」

ふたつ-りうご 二輪鼓【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(どうりつたふ)

ふたつ-わり 二割【名】㊀半分に分割すること。八笑人「八里半だと、二つ割に致さうと申す角を、二本揃へてはやし」㊁『四斗樽の酒を基準として、二つに割り分てたるものの稱』二斗入の酒樽。㊂はんはばおび(半幅帶)に同じ。一代男「かちん染の布子、島縮子の二つ割、左に結び」一代女「龍門の二つ割を、後(ウシ)に結び」

ふたつわり-かぶ 二割蕪【名】紋所の一。縦に二つに割りたる蕪を並べたるさまに描けるもの。

ふたつわり-もくかう 二割木瓜【名】紋所の一。左右相向はせたる木瓜を、圓周にて截切したる形に描けるもの。

ふたつゐ 二井【名】〔地〕羽後國山本郡にある町。阿仁(ニ)川沿岸に於ける貨物の集散地。

ふたつ-をり 二折【名】髪の結ひ方の一。若風俗「當世の若衆……、二折の髪の結振(フリ)」

ふたつをり-はせう 二折芭蕉【名】紋所の一。二つ折の芭蕉の葉を、上下に配して、圓形に描けるもの。

ふ-だて 蹈立【名】和船の、船首又は船尾にて、板を臺の上に互して棚となし、舟人が、その上にて、舵を取り、櫓を押しなどするに用ふるもの。ふみたて。

ぶ-だて 部立【名】部門を立つること。部類を分け定むること。例へば、歌集の内容を春・夏・秋・冬・戀・雜などに分つ類。御傘「犬なんどに譬ふることを、紀貫之、古今の部立に入れたまふべきか」松風村雨 東鑑「歌書の部立をかたどりて、四季の獨樂を始とし、神祇・釋教・戀・無常」

ふだて-いた 蹈立板【名】和船の蹈立の臺の上に互したる板。船尾にあるを艫板(ヘイ)、船首にあるを舳板(ヘイ)といふ。ふみたていた。

ふたて-さき-ぐみ 二手先組【名】〔建〕大斗(マス)の上に、肘木を二重に出だしたる枓栱(マス)の組織。

ふたて-んよこばひ 二點横這【名】〔動〕浮塵子(ウンカ)の一種。體は長さ一分、黄緑色を呈し、頭上に二箇の黒斑あり。瀬部に四對の黒線を具ふ。毎年三四回發生し、稻・麥等を害す。

ふたところ-どう 二所籐【名】弓に、籐を、一定の距離ごとに、一箇所づつ寄せて卷きたるもの。**ところざう**(所籐)參照。保元「二所籐の弓持ち」盛衰記「二所籐の塗り籠めたる弓の眞中取り」

ふたところ-もの 二所物【名】みところもの(三所物)を見よ。

ふたとや 二鳥屋【名】鷹の、鳥屋に居りたること、二年間なるもの。「略。「古語」

ふ-だな 文棚・書棚【名】ふみだな(文棚)の

ふたなし 蓋無・蓋無【名】㊀蓋の附屬してあらざること、又その物。㊁蓋の無くなりてあること、又その物。

ふたなえだ 二七枝【名】歳旦の祝に、松を、男は七枝、女は二枝折ること。「古語」夫木「こよひ寢て逆るあしたやわがせこがふたなな枝の松も折るべき」

ふたなぬか 二七日【名】人の死にてより十四日目の日。ふたなのか。

ふたなのか 二七日【名】前條に同じ。

ふたなみ 二並【名】二つ並びてあること。「古語」萬葉「衣手の常陸の國のふたなみの筑波の山を見まくほり」

ふたなり 二形【名】㊀二つの形狀を具へたるもの。㊁ほにわり(半月)に同じ。「古語」㊂和船の、表に、船首の形二つあるもの。「二成」㊃『船首の形二つあるよりいふ』いせぶね(伊勢船)の別稱。「二成」

ふたにく 豚肉【名】さんにく(豚肉)に同じ。

ふたの 二幅・二布【名】㊀『多く、二幅にて作るよりいふ』女の下帶。ふたのもの。醒睡笑「夕顏の棚の下なる夕すずみ男はてら妻(ツマ)はふたのして、……。ふたのとは、湯具(ユ)の短きをいふとや」㊁じやぶくろ(蛇袋)㊂に同じ。一代女「丸裸になって、くれなゐの二布ばかりになし」

ふたのき 二軒【名】〔建〕地棰(ヂスヰ)と飛簷棰(ヒエンスヰ)とを有する軒。

ふだ-のつじ 札辻【名】昔時、高札を立てたる辻。膝栗毛「札の辻の太郎左衞門さんの紋所だあよ」

ふたのはん 二幅半・二布半【名】布の二幅と一幅の半分と。風呂敷また蒲團の大さにいふ。

ふたのもの 二幅物・二布物【名】ふたの(二幅)㊀に同じ。一代男「茶繻子の幅廣、はさむすびにして、朝鮮さやの二布物を、ほのかに」一代女「帶は唐織の大幅に、緋縮緬のふたの物」「蓋」に同じ。

ふたのもの 蓋物・蓋物【名】ひろぶた(廣ぶた)二葉【名】㊀草木の萌えはじめの、二片の子葉(ヒラ)を附けたるもの。拾遺「春の色とぶひの野守たづぬれば二葉の若菜雪も消えあへず」㊁物事の未だ成りととのはぬ程の譬。源氏「二葉の程もうしろめたう」拾遺「二葉よりたのもしきかな春日山木だかき松の種ぞと思へば」㊂名香の一。

ふたば 二葉【名】㊀草木の萌えはじめの、二片の子葉(ヒラ)を附けたるもの。拾遺「春の色とぶひの野守たづぬれば二葉の若菜雪も消えあへず」㊁物事の未だ成りととのはぬ程の譬。源氏「二葉の程もうしろめたう」拾遺「二葉よりたのもしきかな春日山木だかき松の種ぞと思へば」㊂名香の一。

二葉にて絶たざれば、斧を用ふるに至る【句】「兩葉(フタバ)にして去らざれば、將に斧柯を用ひんとす」に同じ。「諺語」

ふたば-あふひ 二葉葵【名】〔植〕㊀馬兜鈴(ウマノスヅ)科に屬する多年生の草。莖は地上を匍匐し、各節に短枝を生じ、短枝の頂に通常二葉を著く。葉は心臟形にして全緣。花梗は二葉柄の間に生じ、帶紅紫色の鐘狀の花を下垂す。山地に自生す。山城國加茂神社の神事に用ふるを例とす。かもあふひ。ひかげぐさ。「一葉より香し【句】「栴檀(センダン)は二葉より香し」を見よ。

ふたば-いたがひ 二葉伊多良貝【名】紋所の一。二箇の伊多良貝に、各一本の柄を附け、その本は、一所より出でたる樣に描けるもの。

ふたばーぐさ 二葉草【名】〔植〕■ふたばのあふひ(二葉葵)に同じ。新後撰「神山にその名をかけよ二葉草三つの位のあとを尋ねて」■すみれ(菫)の異稱。〔古語〕藏玉集「二葉草。菫。二葉ぐさ今も眺むる人やあらん月を宮居の花のたよりに」

ふたばーぐんぎ 嫩軍記【名】いちのたにふたばぐんき(一谷嫩軍記)の略。

ふたばーさう 二葉草【名】〔植〕たうぢさ(唐萵苣)に同じ。

ふたばしら 二柱【名】■二本の柱。謡曲(野宮)「黒木の鳥居の二柱に」謡曲(蟻通)「蟻通の神の鳥居の二柱」■『助數詞のはしら(柱)を見よ』神佛又は極めて高貴なる人の數二つ。「二柱の神」

ふたばしらーがみ 二柱神【名】伊弉諾(イザナギ)尊と伊弉册(イザナミ)尊との二神。眞宮伊勢物語「二柱神に立願かけたまひ」

ふたばしらーどりゐ 二柱鳥居【名】鳥居の一種。神明鳥居なるべし。

ふたばちやのみ 二葉茶實【名】紋所の一。二箇の茶の實に、各、一本の柄を附け、一本より出でたる樣に描けるもの。

ふたばてい-しめい 二葉亭四迷【名】〔人〕ほせがはふたばてい(長谷川二葉亭)に同じ。

ふたばてい-ぜんしふ 二葉亭全集【名】〔書〕長谷川二葉亭の創作・論說等を網羅したるもの。三卷。

ふたばのき 二葉木【名】〔植〕ひとつばたご(一葉たご)に同じ。

ふたばの-もみぢ 二葉紅葉【名】〔植〕いたどり(虎杖)に同じ。「(南天萩)に同じ。

ふたばはぎ 二葉萩【名】〔植〕なんてんはぎ

ふたばはぎ-ちりめん 二幅縮緬【名】じゃうしうふたのちりめん(上洲二幅縮緬)を見よ。

ふたばはなあふひ 二葉花葵【名】紋所の一。花一箇の左右に、葉二枚を添へ、その下に側面より見たる一葉と、莟とを配りたる狀に描く。

ふたばーむぐら 二葉葎【名】〔植〕茜草(アカネ)科に屬する一年生の草。高さ六七寸。葉は線形、全緣にして尖り、對生し、夏季、葉腋より短き花梗を抽きて、白色・鐘狀の小花を著く。各地の田野に自生す。ふたばもぐら。「同じ。

ふたばーもぐら 二葉葎【名】〔植〕前條に同じ。

ふたばーもみぢ 二葉紅葉【名】〔植〕いたどり(虎杖)に同じ。「燒」を見よ。

ふたばーやき 札場燒【名】みくにやき(三國宿(シュク))郡の西部にある山。夫木「神垣に懸くる葵の二葉山幾とせ袖の露拂ふらん」

ふたばーやま 二葉山【名】〔地〕山城國愛

ふたばーらん 二葉蘭【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。高さ五寸餘、葉は莖の中部以上に於て對生し、卵形にして全緣、葉柄を缺く。花は六七月頃開き、黃色にして、長楕圓形をなし、脣瓣は長く突出し、基部の兩側に鐘狀突起を有し、總狀花序に排列す。樺太・千島・本州等、各地の高山に自生す。ふたつばぐさ。

ぶーだひ 歩鯛【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。體は長さ二尺内外、高くして厚く、頭部短小、全體橄欖褐色にして、大形の鱗に被はる。我國東海・西海に產す。いがみだひ。かなべら。和合人「勘鰊(ボウダラ)にも歩鯛(フダヒ)の誤だ」「布。

ふーたふ 布答【名】小弓の的の後に張るふたーふた【貌】『ふためくを見よ』翅などをうち振る音の形容。ばたばた。枕「扇ひきひろげて、ふたふたと打使ひて」宇治「雉子を、生けながら毛をむしらせければ、しばしばふたふたとするをおさへて」

ぶたーぶた 【貌】柔かく肥滿して搖ぐばかりなるさま。

ふたーへ 二重【名】■二つ重なれること。ふたしへ。■あはせ(袷)に同じ。(一重(ヒトヘ)に對して)■二つに折れ曲れること。萬葉「若菜摘む腰はふたへにありながら野邊の小松をたのみてぞ引く」四ふたへごし(二重腰)の略。大和「いといたう老いて、ふたへにて居たり」五襲(ネ)の色目の一。表も裏も同じ色(多くは、紫・朽黃など)なるもの。

二重の帶が三重(ミヘ)に廻(マハ)る【句】常の帶を三重結ぶべくわが身は痩せぬ」とあり』戀の病に、身の痩せ細りたる形容。艷道通鑑「一重の帶が、三重にまはり、次第の戀痩(コヒヤセ)」

ふたへーあかうるし 二重赤漆【名】的弓の、幹(ユガ)の竹を、濃き赤漆にて塗り、木を、薄き赤漆にて塗りたるもの。

ふたへーおり 二重織・二倍織【名】『ふたへもん(二重紋)を見よ』綾織の地紋の上に、更に、別の絲にて、上紋(モヨウ)を織り出し、又は繡(ヌヒ)ひ出したるものなるべし。

ふたへーおりもの 二重織物・二倍織物【名】二重織の織物。〔古語〕榮花「藏人(クロウド)なれば、むら菊を織りたるふたへ織物のうへの袴」「に同じ。

ふたへーがき 二重書【名】かごうつし(籠寫)

ふたへーがは 二重皮【名】獸の腹部の皮。曾我「馬と鹿とおし並べて、あくまでよっぴき、……、ふたへ皮の下まで射入れけり」

ふたへーがみ 二重髮【名】まへがみ(前髮)を云ふ。〔備後國の方言〕

ふたへーかりぎぬ 二重狩衣【名】二重織物にて作りたる狩衣。二重織の狩衣。太平記「二重狩衣にて、御調度の役に候ず」

ふたへーごし 二重腰【名】老人などの、腰の折れ屈みてあること。ふたへ。「じ。

ふたへーじ 二重字【名】かごじ(籠字)に同ぶだべすと(英 Budapest)【名】〔地〕洪牙利(ハンガリー)國の首府。もと、ダニユウブ川の兩岸なるブダとペストとの二市を合はせたるもの。

ふたへーぞめ 二重染【名】二重物(モノ)の染めかたなるべし。小町踏「今日たつはふたへ染なり春の色」

ふたへーびし 二重菱【名】模樣の一。菱形を、二重に描けるもの。若鳳翁「帶は、二重菱の柿地を、つい引廻し、結びもせず」

ふたへーまはり 二重廻【名】帶の、身體を二重に卷くだけ、即ち普通の長さのもの。天の網島「そのかかへ帶……この世、あの世のふたへまはり」

ふたへーまぶた 二重瞼【名】次條に同じ。

ふたへーまぶち 二重瞼【名】瞼の皮の皺みて、二重になりたるもの。はざめ。ふたへまぶた。重瞼。當世虎の卷「佩城瀨川、ふたへ眼(マ)ぶちも泣きはらし」

ふたへーまかけ 二重前掛【名】前掛の一種。雲齋又は木綿・帆木綿或はズックの長さ四尺ほどなるを、半ばより斜に折りて、端を左右に開くやうにし、折目の方に紐を附けたるもの。商家の倉庫に出入する雇人、又は仲仕(ナカ)など用ふ。なかしまへだれ。

ふたへーみどり 二重綠【名】こん(紺)に同じ。〔古語〕字鏡「紺、フタヘミドリ・アヲシ」

ふたへーもじ 二重文字【名】かごじ(籠字)に同じ。浮世床「鉤(カギ)とかいふ雙劍(ツルギ)に、薄墨をさした油障子」

ふたへーもの 二重物【名】一旦或色に染めたる布帛に、別の色にて、紋・唐草などを染め出したるもの。宗五大草紙「公家の召し候ふ一重直垂(ヒタタレ)は、黑くも、ふたへ物もよく候ふ」

ふたへーもん 二重紋【名】『ふたへおりもの(二重織物)を見よ』織紋のある上に、刺繡などを加へたるものなるべし。〔古語〕榮花「さまざまの浮織綾・ふたへ紋など、ころごころにいどみたり」

ふたほかみ 【名】『ほかみ(小腹)を見よ』

ふたは 太(ト)の轉音にて、下腹の太くして、情ごころ無きこと。一說に、ふたは二にて、兩股の上なりと。〔古語〕萬葉「ふたほがみ惡しけ人なり痼病(オコリ)吾がする時に防人(サキモリ)にさす」

ふたーぼふし 二法師【名】二人の法師。榮花「竹溪法師、丹後へ下るに。立つ鳴にとまる鳴ありふた法師」

ふたーま 二間【名】■殿舍の、柱間(ハシラマ)の數二つある一室。枕「登華殿のひんがしの二間に、御しつらひはしたり」太平記「二間なる處に、燈火の影を見せ」■古、禁中以下、相當の身分の家にて、臨時に宅神を祭り、又は佛像を掛けなどするために、特に清めおきし、柱間(ハシラマ)の數二つある一室。禁中のは、清涼殿の廣廂にあり、

上御局(ツボネ)の南、夜御殿(ヨルノオトド)の東に位して、佛・菩薩の像を掛け、護持僧などの修法(ホフ)・加持を行ひたりき。枕「五月(サツ)の御精進(ミシヤウジン)の程、職(シキ)におはしますに、滝籠(タキコモリ)の前、二間なる所を、殊にしつらひしたれば」「音供(おとく)」に同じ。

二間の供(ク)【句】〔佛〕**くわんおんぐ**(観音供)

二間の本尊【句】古、清涼殿の二間に、本尊として安置せられし如意輪観音。太平記「三種の神器、並びに玄象・下濃(ゲノ)御(ゴ)、二間の御本尊に至るまで」

ふたまかみ 杜衡【名】〔植〕**かんあふひ**(寒葵)に同じ。〔古語〕和名抄「杜衡、一名馬蹄香、布太末加美、一云、豆不禰久佐」

ふたまた 二俣・二股【名】■股の二つあるもの。本は一つにて、末の二つに岐れたるもの。若風俗「二俣の竹」和合人「窟なかばにて、両股(フタク)に分れ、奥へ至りて、また一つになる」■事を両様に構ふること、又その人。りやうてんびん。

ふたまた 二俣【名】〔地〕■遠江國磐田(イハタ)郡にある町。天龍川の左岸、河口より約六里。濱松市より約二里。今川氏の一門二俣氏の城址あり。■肥後國玉名郡山北村の大字。田原(タバル)坂の右方にあり。明治十年の役に、官軍の苦戦せし處。

ふたまた-いちげ 二俣一華・二股一華【名】〔植〕**あうしきな**(草玉梅)に同じ。

ふたまた-がうやく 二股膏薬【名】**うちまたがうやく**(内股膏薬)に同じ。

ふたまた-じやう 二俣城【名】遠江國磐田(イハタ)郡二俣町の西方にありし城。懸崖上に在りて、河水その下を流る。文龜年中二俣昌長の創築に係り、久しく今川氏に屬す。後、武田氏・徳川氏に轉屬し、天正七年家康の子信康據守し、織田信長の嫉疑を受けて、城中に自殺し、翌年遂に廢す。

ふたまた-すぎ 二俣杉・二股杉【名】幹の本は一つにて、中部以上の、二股になりてある杉。記「尾張の相津(アヒツ)なる二俣楹(フタスヂ)を、二俣小舟(フタマヲブネ)に作りて」

ふたまた-だいこん 二俣大根・二股大根【名】■大根の、根の中ごろより、二股に分れたるもの。■紋所の一。葉を有する大根の根部の半より二つに分れたるを、圓形に描きしもの。

ふたまただけ 二俣竹・二股竹【名】本は一つにて、末の二本になりて生ひたる竹。

ふたまた-づゑ 二俣杖・二股杖【名】二俣になりたる杖。

ふたまたぶし 二股武士【名】二心を抱ける武士。二股膏薬の武士。太閤記「源氏がたの二股武士が頼みしにちがひは有るまい」

ふたまた-ぶね 二俣船・二股船【名】舳(ヘ)は一つにて、艫(トモ)の二つに分れたる丸木船。二股杉などにて造りたる丸木船。ふたまたをぶね。めをとぶね。記「両枝船、フタマタブネ」

ふたまた-みち 二俣道・二股道【名】一つ路筋の、途中より二方に分れたるもの。わかれみち。ふたすぢみち。おひわけみち。ふたみち。岐路。

ふたまたを 二俣尾【名】〔地〕武藏國西多摩(ニタマ)郡三田(ミタ)村の大字。青梅(オウメ)町の西一里。梅樹多し。

ふたまた-をぶね 二俣小舟・二股小舟【名】**ふたまたぶね**(二俣船)に同じ。〔古語〕記「二俣楹(フタマヲ)を、二俣小舟に作りて」

ふたまへ 二前【名】二人の分(ブン)。二人前。醒睡笑「恪氣講ならば、我も二まへ交(マ)らうぞ」

ふたまへ 札前【名】その正札(シヤウサツ)の前に並べてある商品。「札前二十錢」

ふたま-やしろ 二間社【名】■「二間を合はせて造るよりいふ」相殿造(アヒドノヅクリ)の神殿。

ふたみ 二見【名】〔地〕**ふたみがうら**(二見浦)の略。續猿蓑(支考)「二見まで庵地尋ぬる月見かな」

ふたみ 雙見【名】〔地〕備後國九郡の一。郡役所を三次(ミヨシ)町に置く。

ふたみ-がうら 二見浦【名】〔地〕伊勢國度會(ワタラヒ)郡二見町一帯の海濱。宇治山田市の東北約二里。岸に近く雙岩あり、俗に夫婦岩といふ。相距ること三間餘、北方のは高さ二丈九尺、南方のは一丈二尺、その間より、旭日を拝する習俗あり。

ふたみち 二道【名】■**ふたまたみち**(二俣道)に同じ。■事の、あちらこちらに分れてあること。ふたかた。ふたすぢみち。二途。両様。狭衣「一方になりなば、さてもやむべきをなど、二みちに思ひ惱ます」

ふたみの-うら 二見浦【名】〔地〕■**ふたみがうら**(二見浦)に同じ。■但馬國城崎(キ)川の末、内川村の流。古今「但馬の湯へまかりける時、二見の浦といふ所にとまりて、……夕月夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそ見め」

ふたみ-やま 二見山【名】〔地〕伊勢國度會(ワタラヒ)郡二見ゲ浦に臨める丘陵。金葉「玉くしげ二見の山の木(コ)の間より出づれば明くる夏の夜の月」「野灣」に同じ。

ふたみ-わん 二見灣【名】〔地〕**まのわん**(眞灣)

ふたむね 二棟【名】本屋(ヤ)より横に棟を突き出だし、即ち棟が丁字形をなすやうに造りたる建物なるべしといふ。東鑑「出二棟南面妻戸一、對二蹴廊根妻戸間一、向二若公一告召之由一」

ふたむね-らう 二棟廊【名】二棟の建物に附きたる廊なるべし。東鑑脫漏「經」御車戸寄棟幷二棟廊一入御寢殿階間」

ふたむら-やま 二村山【名】〔地〕■三河國額田(ヌカタ)郡にありて、尾張國愛知郡沓掛(クツカケ)村に跨れる山。東海道の古の驛路通ず。夫木「三河なる二むら山をわかれてはこの世もわれもあらじとぞ思ふ」■丹波國にありといふ山。「る毯代。

ふたん 布毯・布單【名】布にてつくりたる毯代。

ふたん 負擔【名】■物を背負ふと擔(カ)ふと。■事を、我が身に引き受くることと、又その事。うけもち。義務。

ふだん 腐談【名】陳腐なるはなし。

ふだん 不斷【名】■『漢書の劉向傳に「持二不斷之意一者、開二群枉之門一」とあり』たえまなきこと。日日たえず行ふこと。源氏「正月朔日より、御修法(ミヅホ)、不斷にせさせたまふ」同「法華經を、不斷によませたまふ」■〔佛〕**じやうぢゆう**(常住)に同じ。■つねの時。平日。平生。〔普斷〕■決斷心の無きこと。無斷。「優遊不斷」

ふだんかう 不斷香【名】「不斷の香」に同じ。東國紀行「御堂へ參りたれば、不斷香の煙、風にさそはれ、打ち薫り」

ふだん-き 不斷著【名】平日著て居る衣服。けき。褻衣。(晴著に對して)

ふだん-ぎやう 不斷經【名】追善などのために、一七日・二七日・三七日など日數を定めて、晝夜間斷なく讀經すること。經典は法華經・最勝王經・大般若經等に限られ、僧十二人、一晝夜一時ごとに交替して行ふを普通とし、平安朝時代以後、宮中にて屢ば行はれたり。枕「法華經は不斷經」源氏「不斷經の、曉がたの居かはりたる聲の、いとたふとき」

ふだん-おび 不斷帶【名】不斷に用ふる帶。平常締むる帶。五人女「龍門の不斷帶……よきほどに絎けなほして」

ふだん-うめ 不斷梅【名】〔植〕梅の一品種。果實の成熟の後も、色青くして、久しく落ちざるもの。とこうめ。

ふだん-いしや 不斷醫者【名】醫療をなさず、常に寵愛にすがりて、左右に居る醫者。おたいこいしや。若風俗「御心易き出入の者、不斷醫者、樂(タノ)み出家まじりに」

ふだん-いしや 不斷醫者【名】醫療をなすこと。■勢よく斷行すること。

ぶだん 武斷【名】■武威を以て事を裁斷すること。

ふだん-くわう 不斷光【名】〔佛〕阿彌陀佛の十二光の一。光明の、三世・十方に亙り、恆常に照益して、斷滅せざること。

ふだんくわう-ぶつ 不斷光佛【名】〔佛〕十二光佛の一。不斷光の德用あるもの。

ふだん-さう 不斷草【名】〔植〕たうぢさ(唐萱)に同じ。

ふだん-ざくら 不斷櫻【名】〔植〕櫻の一品種。山櫻より出でしものにて、花は色白く、彼岸櫻又は姥櫻に似、春の初より殆ど四季に亙りて開くもの。

ふだん-ざし 不斷插【名】平常插し用ふること、又その物。浮世風呂「御新造さんの不斷插になさるる櫛」

ふたん-しやうきやく-ざいさん 負擔償却財產【名】〔法〕『英Asset』負擔せる債務の償却に充つる財產。

ふたん-しよ 不斷所【名】平常居る所。常の居間。

ぶたん-せいぢ 武斷政治【名】武威・武力を後援として、壓制・處斷する政治。

ふだん-だるま 不斷達磨【名】ふんだんだるま(不斷達磨)に同じ。浄瑠璃「頭巾をだにも今はかづかず(ミいふ句に)夜も晝も不斷達磨を禮拜し」

ふたん-つき 負擔附【名】〔法〕雙務契約に於て、一方の債務履行に對し、その對價として、他の一方より給付をなすべき事を保留すること。

ふたんつき-ぞうよ 負擔附贈與【名】〔法〕『英Gift with obligation』受贈者に或特定の義務を負擔せしめてなす贈與。

ふたんつき-おくり 負擔附遺贈【名】〔法〕『英Legacy with obligation』受遺者に、或特定の義務を負擔せしめてなす遺贈。

ふだん-な 不斷菜【名】〔植〕たうぢさ(唐萱)に同じ。

ふだん-ねんぶつ 不斷念佛【名】〔佛〕日間斷なく續けて勤むる念佛。不斷念佛。東海道名所記「左の方に彌陀・地藏の堂あり、不斷念佛の所なり」

ふだんねんぶつ-だう 不斷念佛堂【名】ねんぶつだう(念佛堂)に同じ。

ふだんの-み 不斷飲【名】平常の飲用に供すること、又その飲物。

ぶだん-は 武斷派【名】武斷政治の主義又は傾向ある政派。(交涉派に對して)

ふたんれん 不鍛鍊【名】鍛鍊の足らぬこと。物事に慣れざること。拙きこと。ふなれ。慶長見聞集「不鍛鍊の人あまたにて」

ふたゝめ 二目【名】ふたたび見ること。再見。(下に打消の語を伴なふ) 櫻鍔恨鯨鯖「わしも死にたい、死にたいと、取附き歎く親子の顏、二目とも見も遣らず」

二目と見られず【句】慘狀・醜態などの、見るに堪へぬ形容。〔諺語〕

ふたゝめ 不爲【名】ためにならぬこと。不利益。

ふたゝめかす【動四他】ふたふたとせしむ。〔古語〕字遣羽をふためかしてまどふほどに」

ふたゝめく【動四自】ふたふたと音を立つ。ばたばたと騷ぐ。著聞「驚きまどひて、倒れふためきて逃げにけり」發心集「鯉……いまだ生きてふためきけるを」

ふたゝめ-ぐるひ 二女狂【名】二人の女に溺るること。醒睡笑「わかめ得てみるめを內に置くならばふためぐるひと人や言はまし」

ふたゝもじ 二文字【名】〔植〕にら(韮)を云ふ。〔女の語、又、上總國の方言〕

ふたゝもと 札元【名】入札にて、物を賣る時、その元締を爲す人。

ふたゝもの 蓋物・盖物【名】一蓋ありて、多くは、食物を入るるに用ふる器物。二蓋のある陶製の器物。和合人「ふた物は大層並んでゐるが、これは、何を入れるためにおくのだ」

ふだ-もの 札物【名】大小刀の價の、金一枚より三枚五兩までの極札(ごくふだ)あるもの。きりかみもの(折紙物)一參照。

ふだ-やま 二山【名】賭物にする時の六錢。〔楊弓又は大弓の隱語〕

ふだ-やま 札山【名】德川時代に、秋田藩・岡山藩などにて、禁札を立てて、盜伐・火災等を防ぎ、その保護をなしたる森林。

藩有と、民有とあり。

ふたゝゆく 二行く【動四自】一二すぢの道を行く。同一の所を、再び經て行く。〔古語〕萬葉「うつせみの世やもふたゆく何すとか妹にあはずてわがひとりねむ」二兩方へ心を通はす。萬葉「沼二つ通(ヨカ)は鳥が巢我が心二行くなもとな思はりそね」

ふたゝゆく 二行く【動四自】一二すぢの道を行く。同一の所を、再び經て行く。〔古語〕萬葉「うつせみの世やもふたゆく何すとか妹にあはずてわがひとりねむ」二兩方へ心を通はす。萬葉「沼二つ通(ヨカ)は鳥が巢我が心二行くなもとな思はりそね」

ふたゝゆみ 二弓【名】弓の作法にて、二人にて的に向ふこと。

ふたゝよ 二夜【名】二度の夜。

ふたゝよ 二夜【句】十五夜と十三夜との月。「二度(たび)の月見」參照。

ふたゝよ 二代【名】この世と、あの世と。前の世と、今の世と。

二代往く【句】生れかはりて、再び現世に生活す。〔古語〕萬葉「世のなかはまことと二代はゆかざらしすぎにし妹に逢はぬ思へば」

ふたよぐさ 二夜草【名】〔植〕すみれ(菫)一の異稱。〔古語〕萬葉抄「この後の神の惠に叶ふべし二夜草にも花の咲きつつ」

ふたら 二荒【名】〔地〕ふたらやま(二荒山)の略。蜻蛉「下野や桶のふたらをあぢきなき影もうかばぬ鏡とぞ見る」

ふだらか 補怛洛迦・布叱洛迦【名】〔佛〕次條に同じ。

ふだらく 補陀落・補陀洛・寶陀洛伽(梵Potalaka)【名】〔地〕『光明山・海島山・小花樹山など譯す』印度の南端、西岸より尖角へ連亙せるマラヤ(Malaya)山系の南端なる地。觀音菩薩、その頂上を本居として、諸方に出現すべしと傳へられ、華嚴經には、善財童子、妙法を尋ねて、この山に至り、觀音菩薩に謁せし時、一心專念に、この菩薩の名を稱ふれば、一切の諸苦を脫離するを得べしと敎へられたりと記せり。又この山の形八角にして、興福寺の南圓堂の形はこれに本づくといふ。補陀落世界。補陀落山(ラクセン)。れうがごやう(楞伽城)參照。新古今「ふだらくの南の岸に堂立てて今ぞ榮えん北の藤なみ」一茶「ふだらくや赤い袷の小巡禮」

ふだらく-せん 補陀落山・補陀洛山【名】補陀落渡海(トカイ)【句】昔、紀伊國那智の補陀落寺の住僧の、觀音の靈場たる印度の補陀落に至ると稱し、數日間の食物を貯へ、新造の船に乘り、風浪に任せて、南方に航せしこと。

ふだらく-せかい 補陀洛世界【名】〔佛〕ふだらく(補陀落)に同じ。宇津「遙かに補陀落世界の方へ向ひて、諸共に聲を揚げて、觀音を念じけるに」

ふだらく-せん 補陀落山・補陀洛山【名】〔佛〕ふだらく(補陀落)に同じ。盛衰記「補陀落山と申すは、觀音の淨土にて、八角の山なり。彼の山には、藤なみ、ときはに有りとか」太平記「各、所居(ショ)の淨土を表はせば、これ、併しながら補陀洛山とも申しつべし」

ふだらく-さん 補陀落山【名】〔地〕駿河國久能(クノ)山の別稱。

ふだらくさん-じ 補陀落山寺【名】次條一に同じ。

ふだらく-じ 補陀落寺【名】一紀伊國東牟婁(ムロ)郡那智村にある天台宗の寺。白華(ビヤク)山と號す。本尊は千手觀音。西國順禮第一番の札所。熊野夫須美(フスミ)神社の舊地濱ノ宮の舊供僧坊(ボウ)。二相模國鎌倉郡鎌倉町大字亂橋(ミダレバシ)材木座にある眞言宗高野派の寺。本尊は不動明王。養和元年源賴朝の建立、開山は文覺上人。南向山(ナムカウザン)靈命院と號す。明治元年火災に罹りてより、未だ舊觀に復せず。

ふだらく-ぜん 補陀洛山【名】ふだらくせん(補陀落山)に同じ。

ふだらく-ぢ 補陀洛寺【名】一紀伊國東牟婁(ムロ)郡那智村にある天台宗の寺。白華(ビヤク)山と號す。本尊は千手觀音。西國順禮第一番の札所。熊野夫須美(フスミ)神社の舊地濱ノ宮の舊供僧坊(ボウ)。二相模國鎌倉郡鎌倉町大字亂橋(ミダレバシ)材木座にある眞言宗高野派の寺。本尊は不動明王。養和元年源賴朝の建立、開山は文覺上人。南向山(ナムカウザン)靈命院と號す。明治元年火災に罹りてより、未だ舊觀に復せず。

ふだらくさん-じ 補陀落山寺【名】次條一に同じ。

ふだらく-じ 補陀落寺【名】一紀伊國東牟婁(ムロ)郡那智村にある天台宗の寺。白華(ビヤク)山と號す。本尊は千手觀音。西國順禮第一番の札所。熊野夫須美(フスミ)神社の舊地濱ノ宮の舊供僧坊(ボウ)。二相模國鎌倉郡鎌倉町大字亂橋(ミダレバシ)材木座にある眞言宗高野派の寺。本尊は不動明王。養和元年源賴朝の建立、開山は文覺上人。南向山(ナムカウザン)靈命院と號す。明治元年火災に罹りてより、未だ舊觀に復せず

ふたらやまじんじや 二荒山神社【名】㊀下野國上都賀(カミツケ)郡日光町に鎮座せる國幣中社。社殿數箇所にあり。本社は、祭神田心姫(タゴリ)命・大巳貴(オホナムチ)命・味耜高彦根(アヂスキタカヒコネ)命にして、新宮といひ、同町東照宮の西方にあり。別宮本宮は、祭神味耜高彦根神にして、神橋の對岸の上にあり。別宮瀧尾神社は、祭神田心姫命にして、本社の北方なる山中にあり。以上、合はせて、日光三所大權現ともいひ、又、幸(サキ)の湖北岸に、三社を一祠に合祀せる、中宮祠と呼ぶ社殿あり。男體(ナンタイ)山の上にも奥社、太郎山・大眞名子(オホマゴ)・小眞名子諸山にも末社あり。延曆中、僧勝道、その傍に、神宮寺を立てて、中禪寺と號し、元和三年、當社の境内に東照宮の建立ありしが、明治維新後、二社一寺に分離す。舊稱、日光權現・滿願權現。㊁下野國宇都宮市宇都宮馬場町に鎮座せる國幣中社。祭神は豐城入彦(トヨキイ)命・大物主命・事代主(コトシロヌシ)命・三穗津姫命。式内社に、この名の神社ありて、河内郡に屬せる由記し、宇都宮は、もと河内郡に屬したれど、古は芳賀郡の内にして、日光は河内郡に屬せし事實に徵し、日光なるを、式社なりしものと定むるに至れり。舊稱、宇都宮大明神。

ふたり 二人【名】人の數二つ。二箇の人。兩人。ににん。記「我が女(ムスメ)二(フタリ)竝べて奉れる由(ヨシ)は」

ふたり 礒【貌】ふた(礒)に同じ。宇治「鼻もたげの木ゆるぎて、鼻はづれて、弱の中へ、ふたりとうち入れつ」

ふたりがかり 二人掛【名】**ににんがかり**(二人掛)に同じ。

ふたりぐち 二人口【名】次條を見よ。

二人口は食へる【句】「一人口は喰へぬが、二人口は喰へる」を見よ。

ふたりしづか 二人靜【名】㊀謠曲の一。源義經の妾なる靜の亡魂、大和國菜摘(ナツミ)の女に乘りうつりて、昔を語り、亡魂も形を現じて、二人にて舞ふ事を作れるもの。其角「二人靜の掛物に、菜摘かな扇二つを飛ぶ胡蝶」㊁【植】金粟蘭(チヤラン)科に屬する多年生の草。高さ一尺ばかりに達し、明瞭なる節を有す。葉は對生、楕圓形にして、鋸齒を有し、銳頂、莖頂に三四層をなす。夏季、頂上より二花梗を抽出し、白色の細花を點綴す。多く山野の陰地に生ず。さをとめばな。つきねぐさ。つつねぐさ。[及已]

(㊁ かづしりたふ)

ふたりしづか-たいないさぐり 靜胎内捜【名】近松門左衞門の作れる淨瑠璃。謠曲の「二人靜」に基き、源頼朝・義經兄弟不和の事件に本づき、義經の妾靜を中心として脚色せるもの。「靜靜」は「さんにんしづか」と訓むべしとの説もあり。

ふたれうり 豚料理【名】豚肉を材料としたる料理。

ふだ-をさめ 札納【名】なふさつ(納札)に同じ。平假名盛衰記「運ぶ歩みの順禮姿、……三井寺へ札をさめ」

ふち 淵・潭【名】㊀川水などの淀みて、深くなれる所。(瀬に對して) 和名抄「潭、唐韻云、深水也。布知。又用二淵字一」㊁容易に脫出することを得ざる苦痛の譬。若鳳「大分の金銀取りながら、つまる所は、借錢の淵」

淵に雨【句】『淵に雨が降りても、さして、水量を增さざるが如くなる義』少しの物事の加はりても、何等效果の無き譬。[諺語]

淵に鹽【句】前條に同じ。[諺語]

淵に臨みて魚を羨むは、退いて網を結ぶに如かず【句】『漢書の董仲舒傳に「古人有レ言、曰、臨レ淵羨レ魚、不如二退而結一レ網」とあり』徒らに幸福を望みて思ひ煩ふよりは、それを得べき方法を講ぜよ。[諺語]

淵の上の雨【句】「淵に雨」に同じ。[諺語]

淵は瀬となる【句】『古今和歌集の眞名序に「淵變作レ瀬」、又、同雜下にも「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵は今日の瀬となる」とあり』世間・人事の變遷推移して常なき譬。[諺語]盛衰記「世の中の淵は瀬となる喩あり。今こそ孤子(ミナシゴ)にておはしますとも、知らず、世の末には、日本國の武家の主(シウ)ともなりやしたまはん」同「二十一年を一昔とし、それ過ぎぬれば、淵は瀬となり、瀬は淵となる」

淵へ鹽を投げ込むやう【句】「淵に鹽に同じ。[諺語] 鳩翁道話「淵へ鹽を投げ込むやうにて、何程入れ足しても、役に立たず」

ふち 緣【名】㊀へり。まはり。緣(エン)。山家「檻おくあかの折敷(オリシキ)にふちなくば何に綴の玉とならまし」㊁刀・鍔差の柄(カツ)の切羽際(キリハバ)を包む金物。長町女腹切「つかまはりふち・かしら、鞘の塗(ヌリ)」

ふち 駁斑【名】ぶち(駁)に同じ。[古語]

ふち 扶持【名】㊀たすくること。はぐくむこと。新千載「山里にただかりそめのすすき垣ふちする人もなきわが身かな」㊁ふちまい(扶持米)の略。㊂扶持米を與へて召し使ふこと。

「離」に同じ。

扶持の食上(クヒアゲ)【句】ふちばなれ(扶持不知)【名】㊀知らぬこと。㊁ふち(不智)に同じ。

ふち 不知【名】㊀知らぬこと。㊁ふち(不智)に同じ。

不知の陳述【句】[法]裁判所に於ける審問に對して、自己の知らざる旨を陳述すること。

ふち 不智【名】おろか。愚鈍。

ふち 不治【名】病の癒えぬこと。治癒せぬこと。

ふち 府治【名】府の統治。府の行政。

ふち 布置【名】㊀ならべおくこと。くばりまうくること。㊁ふちほふ(布置法)に同じ。「文章の布置結構」「附說。

ふち 附置【名】附屬して設置すること。

ふち 敷智【名】[地]遠江國の舊郡の一。明治二十九年廢せられ、西濱松・東濱松の二郡は引佐(イナサ)郡に、その他は、濱松郡に入る。

ふぢ 藤【名】㊀ふぢかづら(藤蔓)に同じ。[古語] ㊁【植】豆(マメ)科に屬する蔓生植物。葉は長卵形・全緣の奇數羽狀複葉にして、十數箇の小葉より成り、葉柄短くして、總葉柄と列なる。花は紫色、蝶形をなして後、長形の莢果を結ぶ。樹皮の纖維は、織物の料とし、種子及び若葉を食用に供す。白藤(フヂ)は、その變種なり。さのかた。まつくさ。まつなぐさ。まつみぐさ。むらさきぐさ。むらさきふぢ。やまふぢ。[紫藤] ㊂前項㊁の花。紫式部日記藤かざして、いと物しくおとなびたまへるを」㊃ふぢごろも(藤衣)の略。[古語] 源氏「かけきやは河瀬の波も立ち返り君が御禊(ミソギ)のふぢのやつれを」㊄ふぢいろ(藤色)の略。紫花藤の裾濃の織物の御几帳」六襲(カサネ)の色目の一。表は海紫、裏は青。一說に、表は經(タテ)青、緯(ヨコ)黃、裏は萌黃。女房の五衣(イツツギ)には、上は薄色を匂はせて三つ、次ぎの二つは、表白、裏青とし、單(ヒトヘ)は、白又は紅の生絹(スヾシ)なり。三四月頃用ふ。ふぢがさね。[女房、櫻の唐衣(カラギヌ)ども、……藤山吹など、色色に好もしく]同「狩衣は、……青き藤」七紋所の一。藤㊁の花と葉とを、種種の形に組み合はせて畫けるもの。最も普通なるは、藤の丸にて、「上(ウヘ)藤」「下(シタ)藤」などあり。八模樣の一。紫花藤をぞ紫に濃く薄く織り重ねさせたまへる」九謠曲の一。古歌に詠まれたる藤の名所、越中國多胡の浦の藤の精あらはれて、舞ひ遊ぶ事を作れるもの。十[人]烈女。飯田俣の吏山口俊平の女。俣の、妾豐浦に迷ひて、政紊るるや、憂へて、天保十三年豐浦を刺殺し、斬に處せらる。年二十二。

藤の御衣(ゴイ)【句】ふぢごろも(藤衣)㊁の敬語。源氏「ふぢの御ぞにやつれたまへるにつけても、限なく清らに心苦しげなり」

藤の門(カド)【句】藤原氏の一門。謠曲(采女)「紫の花を垂れたる藤の門、明くるを春の景色かな」

藤の衣(モロ)【句】ふぢごろも(藤衣)に同じ。源氏「かの人はつつみきこえたまひしふぢの衣も、あらためたまへつらん」方丈「藤の衣、麻のふすま、得るに従ひて、膚を隠し」

藤の棚【句】ふぢだな(藤棚)に同じ。芭蕉「氏もよし生立(オヒタ)もよしや藤の棚」

藤の袂【句】「藤の衣」に同じ。〔古語〕源氏「黒き御車の内にて、藤の袂にやつれたまはんは」

藤の花の小山(マヤ)【句】ふぢむすめ(藤娘)に同じ。平假名盛衰記「梯子さいて月代(サカ)剃る大津繪、藤の花の小山も買うたは」

藤を以て錦に績(ツ)ぐ【句】『藤は藤衣の義』美しき物に、醜き物を續ぎたす譬。〔諺語〕萬葉「俗語云、以ノ藤續錦、聊擬二談咲一耳」

ふぢ 籐【名】〔植〕『藤(ウト)の字を、藤の字と誤りて、訓讀せるもの』とう(藤)に同じ。

ふぢ 桴・枹【名】むち(鞭)に同じ。顯季集「もろともにぶちはあげねど慕はるる心は君におくれざりけり」

ふぢ 駁・斑【名】■各種の色の、ところどころにまざれるもの。ぶち。まだら。■ぶちいぬ(斑犬)の略。和合人「日頃馴れたる斑犬、最前より尻尾を振って……。斑や、斑や、ここに居てくれ」

ぶち 打【接頭】うち(打)に同じ。

ぶち-あかす 打明す【動四他】『ぶち(打)は接頭語』あかす(明す)四を強めていふ語。東海道名所記「夢に……ぶちあかしたまふべいよな」

ぶち-あく 打明く【動下二他】『ぶち(打)は接頭語』うちあく(打明く)■に同じ。八笑人「さあ、さあ、酒にしよう、酒にしよう。その、まあ宮戸川をぶちあけよう」

ぶち-あぐ 打上ぐ【動下二他】『ぶち(打)は接頭語』■あぐ(上ぐ)■を強めていふ語。白石噺「二階さあぶち上げて。こりや、まあ何たる所だ」■あぐ(上ぐ)四を卑しめ強めていふ語。天の網島「海道筋の五器の實(ミ)をぶちあげ、薦かせて見せうず」

いふ(言ふ)■を強めていふ語。抜かす。浮世床「ぬけぬけと……ぶち上げるぜ」

ぶち-あひ 打合・撲合【名】【名】うちあひ(打合)に同じ。

ぶち-あふ 打合ふ・撲合ふ【動四自】うちあふ(打合ふ)■に同じ。

ぶち-あんない 不知案内【名】案内を知らぬこと。勝手のわからぬこと。不案内。

ぶち-いけ-りう 藤池流【名】箏曲の流派の一。藤池撿挍の創めしもの。八橋(ヤツ)流より出づ。

ぶち-いぬ 駁犬・斑犬【名】毛色のまだらなる犬。ぶちの犬。和合人「日頃馴れたる斑犬、最前より尻尾を振ってついてゐれど」

ぶち-いろ 藤色【名】紫の藤の花の色に似たる染色、即ち薄紫なるもの。ふぢ。

ぶち-うつぎ 藤空木・藤溲疏・醉魚草【名】〔植〕馬錢(マチ)科に屬する落葉灌木。高さ三四尺。莖は節間に縦行せる翅を具へ、葉は廣披針形にして、對生し、鋸牙を有す。花は帶紫色、不整齊なる合瓣花冠を有し、穂狀の總狀花序に排列す。山野に自生し、恐るべき毒を有し、その枝葉を石灰に和して、水中に投ずれば、魚は皆醉ひて、水上に浮ぶ。にくわううつぎ。

ぶち-うま 駁馬・斑馬【名】毛色のまだらなる馬。ぶちの馬。ふちごま。ふちむま。〔古語〕空穂「さまざまのふちうま、たけ八寸(キ)ばかり、年六つばかりなる」

ぶち-うま 駁馬・斑馬【名】前條に同じ。

ぶち-うる 打賣る【動四他】『ぶち(打)は接頭語』うる(賣)るを強めていふ語。義士銘銘傳「小豆(アヅキ)長光(ナガ)の刀を、こっそりとぶち賣って、借金は拂うた」

ぶちえだ 藤枝【名】〔地〕駿河國志太(シダ)郡にある町。瀬戸川の北岸。靜岡市の西南約五里。郡役所あり。昔の東海道五十三驛の一。

ぶちえの-うら 藤江浦【名】〔地〕播磨國明石郡にある浦。萬葉「しろたへの藤江の浦にいさりする海人(ア)とや見らむ旅行くわれを」

ぶち-えばうし 緣烏帽子【名】烏帽子の一種。緣を取りて、それを漆にて塗りたるもの。兜の下に著用せり。

ぶち-おり 藤織【名】藤の皮の纖維にて織りたる織物。絳(ホ)に綿絲を用ひたるもあり。若狹國三方・小濱(オバマ)地方及び大和國に産し、帷子地(カタビラ)とするに適す。

ぶち-がうり 藤行李【名】ふぢごり(藤行李)に同じ。蜀山千本槍「内改むれば、覺なき、而もこれは張皮籠(ハリカゴ)、こちは衣類の藤行李」

ぶち-がき 藤垣【名】藤蔓にてからめたる垣。ひさご珍碩「ふぢ垣の窓に紙燭を挾みおき」

ぶちがきつ-ねう 藤垣内翁【名】〔人〕もとをりおほひ(本居大平)の雅號。

ぶち-かけ 【名】ひび(罅)を云ふ。〔常陸國水戸の方言〕

ぶち-がさ 藤笠【名】藤蔓にて編みたる笠。昔、武士・醫者などの用ひしもの。

ぶち-がさね 藤重・藤襲【名】ふぢ(藤)七に同じ。著聞「藤がさねの衣」

ぶち-かしら 緣頭【名】刀鍔差の緣(フチ)と柄頭(ツカガ)と。

ぶち-かた 扶持方【名】■扶持米を受けて、君主に仕へしこと。■扶持米の配給を取り扱ひし役人。

ぶちかた-ぶぎやう 扶持方奉行【名】豐臣家にて、扶持方の事を奉行せしもの。

ぶちかた-わたしぶぎやう 扶持方渡奉行【名】前條に同じ。

ぶち-かづら 藤葛【名】■葛・藤などやうの纏繞植物の莖。ふち。かづら。つる。夫木「折らすなよ垣ほに咲ける藤かづら來る山人の歸るかざしに」■藤葛にて作り、倚盧(イロ)殿の繩代に用ひたるもの。

ぶちかづら-ばなし 藤葛放【名】ふぢばなし(藤放)に同じ。

ぶち-かは 淵河【名】淵と河と。淵又は河。太平記「淵河に沈ませて」

淵河に蓋(フタ)は成らぬ【句】人の入水するは、防ぎ止め難し。〔諺語〕

ぶぢ-かは 藤川【名】〔地〕美濃國不破郡關ケ原村大字藤下(フヂシタ)の東にある藤子(フヂコ)川の舊稱。源を伊吹山の麓なる近江國阪田郡春照(スルガ)村大字藤川に發し、南流して養老郡に入り、多良(タラ)川に合して、杭瀬(クヒセ)川に入る。關ケ原の附近を流るるによりて、古來、關の藤川といへり。

ぶちかは 藤川【名】〔地〕三河國額田(ヌカタ)郡にある村。岡崎市の東南二里。昔の東海道五十三驛の一。

ぶちかはのき 藤川記【名】〔書〕一條兼良の、應仁の亂を避けて、奈良に住みし時、美濃國に遊びし道の記。一卷。一名、美濃の紀行。後成恩寺藤川の記。

ぶちかはひやくしゆ 藤川百首【名】〔書〕藤原定家が、老後に、內務大臣基家の請に應じて、詠みたる百首の歌。一卷。

ぶち-かへす 打反す【動四他】『ぶち(打)は接頭語』かへす(反す)■を強めていふ語。ひっくりかへす。くつがへす。倒す。

ぶち-かへる 打反る【動四自】『ぶち(打)は接頭語』かへる(反る)■を強めていふ語。ひっくりかへる。倒る。和合人「思ひがけなき不意を打たれ、同じくわあとぶちかへる」

ぶちがみ-りう 淵上流【名】弓術の流派の一。淵上河內守の創めしもの。日置(ヘキ)流より出づ。

ぶち-かんざう 藤甘草【名】〔植〕莢(マメ)科に屬する多年生の草。高さ四五尺に達す。葉は奇數羽狀複葉にして、五箇又は七箇の小葉より成り、小葉は長卵形、全緣にして光り、八月頃、淡紫紅色の小花を著け、後、著しく凹める筋ある莢果を結ぶ。各地の山野に自生す。

ぶちがやつ 藤谷【名】姓氏の一。上冷泉(イカゐづ)の支流。爲家の第十一世爲滿の二男爲賢を祖とす。子孫相繼ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

ぶぢ-き 藤木・白槐【名】〔植〕莢(マメ)科に屬する落葉喬木。高さ五丈に達す。葉は概形藤のに似、奇數羽狀複葉にして、十一

筒の小葉より成り、小葉は長卵形にして光り、初夏、帯黄白色の花、穂總狀花序を成して開き、後、線狀の莢果を結ぶ。各地の山地に自生す。やまるんじゅ。

ふぢき-あつなほ 藤木敦直【名】〔人〕京都の加茂神社の祠官。十九歳にして、始めて書に志し、三蹟及び空海の筆意を學びて、遂に一家を成し、世に加茂流と稱し、又その甲斐守たりしより、甲斐流とも稱す。後水尾天皇召して、書博士とし、公事の書記に當らしむ。慶安二年歿す。年六十八。

ふぢ-ぎぬ 藤衣【名】ふぢごろも(藤衣)㊀に同じ。

ふぢ-きふ 扶持給【名】㊀扶持を給すること。扶持の給與。㊁ふちまい(扶持米)に同じ。〔甲陽軍鑑〕「奉公もせずして、……扶持給をも取らんと思ふ故」

ふぢ-きん 縁金【名】洋綴(ヤウゼツ)の書籍の側面の一方に、裝飾のため、一面に金粉を施したるもの。その上方の側面なるは、天金(テンキン)といふ。

ふぢ-きりまひ 扶持切米【名】扶持を、切米にて給するもの。扶持の切米。

ぶぢ-きる 打斬る【動四他】『ぶち(打)は接頭語』きる(斬る)を強めていふ語。

ふぢ-ぐさ 藤草【名】〔植〕ぬすびとはぎ(盗人萩)に同じ。

ふぢ-ぐさ 藤倉【名】㊀次條の略。㊁あさうらぞうり(麻裏草履)を云ふ。〔伊勢國富田(トミダ)の方言〕

ぶぢくら-ざうり 藤倉草履【名】草履の一種。麻裏草履に似て、麻裏を用ひず、鼻緒は白木綿を專用すれど、稀には、茶色などの色木綿なるもあり、前緒は、麻の心(シン)に紙を捻り卷き、多くは上草履として用ふ。ふぢくら。〔澤胡桃〕に同じ。

ふぢ-ぐるみ 藤胡桃【名】〔植〕さはぐるみ

ぶぢ-げ 駁毛・斑毛【名】馬の毛色の一。體の一部に、大形の白斑あるもの。

ぶぢ-けへす 打反す【動四他】ぶちかへす(打反す)の訛。和合人「は、は、花生(ハナ)をぶちけへしたのだ。おれも冷(ヒヤ)え」

ぶぢ-けへる 打反る【動四他】ぶちかへる(打反る)の訛。八笑人「これやあ、びっくりするは道(ミチ)へねえ。氣の弱い者はぶちけへるだらう」

ふぢ-こ 藤海鼠【名】〔動〕海鼠(ナマコ)の一種。體長大にして、一尺餘に達し、刺長く且つ黠點密集するもの。南海に產し、海參(コイリ)に製して、支那に輸出す。

ふぢこ-がは 藤子川【名】〔地〕ふぢかは(藤川)を見よ。

ぶぢ-こはし 打毀【名】ぶちこはすこと。ぶっこはし。うちこはし。

ぶぢ-こはす 打毀す【動四他】『ぶち(打)は接頭語』㊁うちこぼす(打毀す)の轉訛。㊁事の成立を害す。

ふぢ-こぶ 藤瘤【名】藤の莖に、節の如くまるく膨れて存する部分。鷹筑波「藤瘤のすひ骨藥か松のやに」犬筑波「藤瘤は花見る人の茶の子かな」

ふぢ-ごま 駁駒・斑駒【名】ふぢうま(駁馬)に同じ。〔古語〕「天(アメ)の斑駒を逆剝(サカ)ぎておとしいるる時に」

ぶぢ-こみ 打込【名】ぶち込むこと。うちこむ。

ぶぢ-こむ 打込む【動四他】『ぶち(打)は接頭語』はふりこむ。なげいる。

ふぢ-ごり 藤行李【名】ふぢかづらを編みて造りたる行李。ふぢがうり。

ぶぢ-ころす 打殺す・撲殺す【動四他】㊀撲ちて殺す。なぐりころす。㊁ぶち(打)は接頭語』ころす(殺す)㊀を強めていふ語。うちころす。

ふぢ-ごろも 藤衣【名】㊀葛布(クズ)にて仕立てたる衣服。上古、庶人の平生著用せしもの。ふぢのころも。古今「ほにもいでぬ山田をもるとふぢごろも稻葉の露にぬれぬ日ぞなき」㊁『衣服を窶して、前項の葛布(クズ)製のを著るとて、中古以來、この意に用ふるに至れり』もふく(喪服)に同じ。和名「縗衣、不知古路毛、喪衣也」古今「思ふどちひとりひとりが戀ひ死なば誰によそへてふぢごろも著ん」

ふぢ-ざいく 籐細工【名】ふぢかづらを材料としたる細工、又その細工物。

ふぢさき-せんたん 藤唉仙潭【名】〔人〕儒者。水戸藩士。名は正方、字は叔通、通稱小右衛門。江戸に生れ、享保年中彰考館に入りて、書庫を管し、後、郡奉行となり、治績を擧ぐ。寶曆十二年歿す。年七十四。有職備考の著あり。

ふぢさき-はちまんぐう 藤崎八幡宮【名】肥後國熊本市に鎭座せる國幣小社。祭神は應神天皇・住吉大神・神功皇后。承平五年、平將門追討の勅願として、山城國の石清水(イハシミズ)八幡宮を勸請せしもの。もと同國飽田(アキタ)郡宮崎莊茶臼山にありしが、明治十年、西南の役に、兵燹に罹りしため、翌年現在の地に遷座す。

ふぢさき-まつり 藤崎祭【名】藤崎八幡宮の祭禮。每年九月十五日に行はれ、神輿の行粧莊嚴にして、隨兵は神功皇后の三韓征伐凱旋の故事に因めりと稱す。

ふぢ-さし 藤差【名】扇を腰に插すに、眞直にして插すこと。笏差(シャクザシ)に對して

ふぢさは 藤澤【名】〔地〕相模國高座(タカクラ)郡にある町。舊東海道の一驛。鐵道東海道線の停車場あり。時宗(ジシウ)の總本山遊行(ユギヤウ)寺あり。

ふぢさは-いも 藤澤諸【名】相模國藤澤町の近在に產する甘藷(イモ)。京濱地方に需要多し。

ふぢさは-ぎく 藤澤菊・狗古草【名】〔植〕さはぎくぐるま(澤小車)に同じ。

ふぢさは-しやうにん 藤澤上人【名】〔人〕ゆぎやうしやうにん(遊行上人)に同じ。

ふぢさは-せん 藤澤錢【名】元文二年相模國藤澤にて鑄造せし寬永銅錢。銅色紫褐。徑八分强、重量八分。

ふぢさは-てら 藤澤寺【名】ゆぎやうじ(遊行寺)に同じ。〔藁村「寄らで過ぐる藤澤寺の紅葉かな」〕

ふぢし 府知事【名】府の行政事務を處理する地方官、兼ねて府會と府參事會との議決を執行し、府を代表する自治機官。地方官としては、一般的に、內務大臣の指揮・監督を承け、又各省の主務に關して、各省大臣の指揮・監督を承く。(縣知事に對して)

ふぢしま 藤島・藤嶋【名】〔地〕㊀越前國吉田郡の一部。今、東・中・西の藤島村あり。古の藤島は、その中藤島村の大字の地。福井市の北約一里。㊁羽前國東田川郡にある村。酒田町の東南七里半餘、鶴岡町の東北二里十町。郡役所あり。越後街道及び秋田街道通過す。

ふぢしま-じんじや 藤島神社【名】越前國福井市足羽(アスハ)山に鎭座せる別格官幣社。祭神は新田義貞。年代は詳かならざれど、里民の、小祠を同國吉田郡西藤島村三屋(ミツヤ)に營みしものゝ、その基をなし、明治十四年、三屋の南牧野島に遷り、同三十一年、更に現在の地に遷る。

ふぢしま-じやう 藤島城【名】㊀越前國吉田郡藤島にありし城。福井市の北方約一里。延元三年、足利義詮(ヨシアキ)の、新田義貞に對抗せんがために築きし七城砦の一。義貞の包圍を受けたれど、陷落せずして、義貞は却つて戰死せり。㊁羽前國東田川郡藤島にありし城。戰國時代に、武藤氏居守し、後、上杉氏に歸し、天正十八年、武藤氏の遺臣、この城に據りき。

ふぢしろ 藤代・藤白【名】〔地〕ぶぢしろたうげ(藤代峠)を見よ。萬葉「藤代のみさかを越ゆと自妙の我が衣手はぬれにけるかな」太平記「紀伊路の遠山渺渺と、藤代の松にかかれる磯の浪」

ふぢしろ-すみ 藤代墨【名】昔、紀伊國海草(カイサウ)郡藤代村より產出せし墨。

ふぢしろ-たうげ 藤代峠・藤白峠【名】〔地〕紀伊國海草(カイサウ)郡の南部、舊名草(ナグサ)・海部(アマ)の二郡の境界にある藤白山脈の峠。今、海草郡內海(ウツミ)村の字に藤白の名あり。和歌山市を距る約三里、坂路は、北に和歌浦を望み、熊野街道第一の佳景といふ。

ふぢしろ-ていすけ 藤代禎輔【名】〔人〕獨逸文學者。下總國檢見川(ケミガハ)町の人。明治二十四年、東京帝國大學卒業後、東京高等師範學校第一高等學校の教授を經て、東京帝國大學の講師となる。獨逸留學後、京都帝國大學教授に任ぜられ、文學博士を授けらる。大正五年、同大學文科大學

ず。葉は心臓状長卵形にして尖り、鈍鋸歯あり、長き葉柄を具へ、葉質薄くして、白斑散在し、初夏、淡紫色の花を開く。山地に自生す。

ふちせ 淵瀬【名】㊀ふちと、せと。大和「この世にはかくてもやみぬわかれぢの淵瀬をたれに問ひて渡らん」㊁人世の浮沈・悲喜の譬。伊勢集「定なき世を聞く頃の涙こそ袖の上なる淵瀬なりけれ」

ぶ-ちそう 不馳走・無馳走【名】饗應の粗末なること。鶉衣「けふの無馳走は、紫隠里の掟にして」

ふ-ちそく 不知足【名】足ることを知らざること。財に對して滿足を感ぜざること。沙石集「不知足とは、財にあきたらぬ事なり」

ふ-ちたい 附遅滯【名】〔法〕債務者が、債務の辨濟を怠りたる場合、又は債權者が、辨濟期に辨濟を受くるを拒み、若しくは受くる能はざる場合に、その遲滯の責に任ぜしむること。

ふぢたーいうこく 藤田幽谷【名】〔人〕儒者。水戸藩士。名は一正、字は子定、通稱は次郎左衛門。東湖の父。商家に生れて、幼より經史に通じ、正學を主とし、老莊の學を惡む。彰考館總裁となり、大日本史を校訂して、功勞頗る多し。又、心を海防に注ぎて、畫策する所あり。文政九年歿す。年五十三。

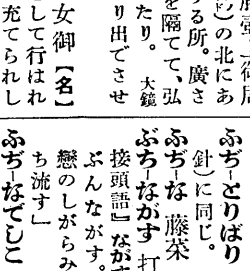
ふぢたーいっせい 藤田一正【名】〔人〕前條を見よ。

ふぢたーいっせき 藤田一折【名】㊀折敷(ヲシキ)の、緣高く造りたるもの。足の附きたると附かざるとあり。

ふぢたーこうあん 藤田公穆【名】〔人〕水戸藩士。東湖の第三子。名は信、變名を小野斌男と稱す。常に皇室の式微を嘆き、尊攘の大義を唱へ、元治元年、同志と共に、兵を日光山及び筑波山に擧げて、大に幕兵を破り、十月天關に至りて、衷情を訴へんと、西上して、十二月越前國に至る。加賀藩の兵に遮られて降り、幕命により、敦賀に囚はれ、慶應元年同志武田耕雲齋と共に斬に處せらる。年二十四。

ふぢたーてんざぶらう 藤田傳三郎【名】〔人〕實業家。長門國萩の酒造家に生る。幕末、勤王の義を唱へて、高杉晉作に從ひ、國事に力を盡ししが、明治二年、大阪に出でて、實業界に入り、藤田組を組織して、土木・鑛山その他の事業を經營す。明治四十四年、男爵を授けられ、翌年歿す。年七十二。

ふぢたーとうこ 藤田東湖【名】〔人〕『東湖は、仙波(センバ)湖の西に家居せしよりいふ』水戸藩士。幽谷の子。名は彪、字は斌卿、通稱は、初は武次郎、後、虎之助と改む。十四歳にして江戸に出で、藩主齊昭(ナリアキ)の知遇を得て、輔佐に勤む。弘化六年烈公と共に江戸駒込の邸に幽せられ、三年にして許さる。安政二年十月、江戸大地震の時、小石



(こうとたぢふ)

一里余もなく、ぶち打擲しても、疲労を打ち殺したやうにやあ濟むめえ」

ふぢつ 藤津【名】〔地〕肥前國十四郡の一。郡役所を鹿島(カシマ)町に置く。

ふぢづかまき 藤巻【名】刀の欄を、藤蔓にて巻くこと、又その欄。

ふぢづな 藤綱【名】藤蔓にて作れる綱。藁綱・麻綱などに用ふ。ふぢなは。

ふぢつぼ 藤壺【名】㊀『庭に藤を植ゑてありしよりいふ』ひぎやうしや(飛香舍)に同じ。枕「藤壺の塀のもとより、登華殿の前まで居なみたるに」㊁〔動〕甲殻類に屬する節足動物。殻は數片より成りて、花雷のごとく集合し、上端の孔の内に、更に爪状の二三片の殻、相合して蓋をなす。海濱の岩石・杭又は貝殻に附著し、干潮の時に口を閉ぢ、潮來れば開き、蔓状・多節の脚を出して、食物を捕食す。數種あり。せいがき。

ふぢつぼーのうへのみつぼね 藤壺上御局【名】古、清涼殿中、夜御殿(ヨルノオトド)の北にありし一室。女御・更衣の上直する所。廣さ二間に一間。東方、萩戸(ハギド)を隔てて、弘徽殿(コキデン)の上の御局と相對したり。大鏡「藤壺の上の御局の小戸(ヲド)より出でさせたまひけるに」

ふぢつぼーのにようご 藤壺女御【名】『藤壺は、女御入内の儀の主として行はれし所、又、歴代、女御の居所に充てられし所なるによりていふ』王朝時代に、弘徽殿の女御と同樣、屢ば女御の稱呼として用ひられし語。

ふぢつぼーのみこ 藤壺皇后【名】〔人〕

ふぢつぼーのみや 藤壺宮【名】〔人〕

ふぢつぼーのやすどころ 藤壺安宿【名】〔人〕

ふぢつぼーのよしこ 藤壺良子【名】〔人〕

ふぢつぼーのよしこないしんのう 藤壺良子内親王【名】〔人〕

ふぢつぼーのよしこないしんのうのみや 藤壺良子内親王宮【名】〔人〕

ふぢつぼーのよしこないしんのうのみやのだいぶのきみ 藤壺良子内親王宮大夫君【名】〔人〕

ふぢつぼーのよしこないしんのうのみやのだいぶのきみのはは 藤壺良子内親王宮大夫君母

泉天皇の后。太政大臣伊尹(コレマサ)の女。華山天皇及び菊子内親王・尊子内親王の御生母。天延三年崩ず。年三十一。

ふぢはらーかねざね 藤原兼實【名】〔人〕 朝臣。關白忠通の第二子。家を九條と號し、世に月輪(ツキノワ)關白と稱す。右近衞中將より累進して、遂に從一位・關白に進む。源頼朝と親しくし、又、兄基實の子基房と權を爭ひ、後白河法皇の寵妃丹後局と相協はずして、建久七年職を辭し、承元元年薨ず。年六十。日記あり、玉葉といふ。

ふぢはらーかねすけ 藤原兼輔【名】〔人〕 朝臣。勸修寺家の祖良門の孫、利基の第六子。從三位・中納言兼右衞門督に至る。承平三年薨ず。年五十七。世に堤中納言といひ、堤中納言物語は、その作なりと傳ふ。

ふぢはらーかねすゑ 藤原兼季【名】〔人〕 朝臣。菊亭家の祖。太政大臣兼實の第三子。元亨二年右大臣となり、京の今出川(イマデガハ)に居りて、今出川と稱し、家を菊亭といふ。世に菊亭右大臣といふ。歿年詳かならず。

ふぢはらーかねたか 藤原兼孝【名】〔人〕 朝臣。植通の子。天正中關白となり、後出家して、圓性といふ。寛永十四年薨ず。後の月輪の關白といふ。

ふぢはらーかねひら 藤原兼平【名】〔人〕 **たかつかさかねひら**(鷹司兼平)に同じ。

ふぢはらーかねみち 藤原兼通【名】〔人〕 朝臣。右大臣師輔の第二子。弟兼家と攝政・關白を爭ひ、冷泉天皇に奏して、兄伊尹(コレマサ)に代りて、關白となる。貞元二年薨

(ナムヒ)。小德冠御食子(ミケ)の子。皇極天皇の四年中大兄(ナカノオホエ)皇子と謀り、蘇我入鹿を大極殿に誅す。孝德・天智兩天皇の輔弼に任じ、大織冠を賜はり、內大臣の位を授けられ、藤原の姓を賜はる。天智天皇の二年薨ず。年五十(一說に五十三)。

ふぢはらーかりう 藤原家隆【名】〔人〕 **ふぢはらいへたか**(藤原家隆)を見よ。

ふぢはらきっし 藤原佶子【名】〔人〕 龜山天皇の皇后。山階(ヤマシナ)左大臣實雄の女。文永九年崩ず。年二十八。世に京極院といふ。

ふぢはらーきんえだ 藤原公條【名】〔人〕 **さんてうにしきんえだ**(三條西公條)に同じ。

ふぢはらーきんし 藤原忻子【名】〔人〕 **ちやうらくもんゐん**(長樂門院)に同じ。

ふぢはらーきんすゑ 藤原公季【名】〔人〕 朝臣。閑院家の祖。左大臣師輔の子。幼にして孤なりしより、姉安子(村上天皇の中宮)に宮中に養はれ、服食、一に皇子に擬したりといふ。治安元年從一位・太政大臣となり、牛車(ギッシャ)を聽さる。長元二年薨ず。年七十三。仁義公と諡し、正一位を贈らる。

ふぢはらーきんたふ 藤原公任【名】〔人〕 朝臣。關白頼忠の長子。累進して、正二位・大納言に至り、按察使を兼ぬ。博學にして、禮典に精しく、詩文和歌を善くし、傍ら音樂を巧みにす。長久二年薨ず。年七十六。藤原行成・同齊信(ナリノブ)・源俊賢と共に四納言の稱ありき。北山鈔・和漢朗詠集等の著あり。

朝臣。太政大臣實兼の子。公經の玄孫。官、左大臣に至り、正和四年薨ず。年五十二。和歌を善くし、又その日記公衡公記は、鎌倉時代に於ける兩皇統逃立、及び公武の關係等を調ぶるに重要の史料たり。竹林院と稱し、又、西園寺公衡ともいふ。

ふぢはらーきんむね 藤原公宗【名】〔人〕 朝臣。實衡の子。後醍醐天皇の中宮の生家たるより、天皇屢ばその北山の邸に行幸ありたれど、西園寺家は、公經以來、幕府と親密の關係あり、天皇の捕へられたまふや、幕府の請によりて、その信僞を見奉り、北條氏滅ぶるや、高時の弟時興を隱し、宴遊に託して、行幸を請ひ、浴室に弑し奉らんとせしより、建久二年出雲國に配流せられんとし、發するに臨みて、名和長年の手に誅せらる。年二十六。官、兵部卿に至り、琵琶を善くす。

ふぢはらーぎやうせい 藤原行成【名】〔人〕 **ふぢはらゆきなり**(藤原行成)を見よ。

ふぢはらーきよがは 藤原清河【名】〔人〕 朝臣。贈太政大臣房前(フササキ)の第四子。天平勝寶元年參議に任ぜられ、翌年遣唐使となり、玄宗に見ゆ。阿部仲麻呂と船を同じくして、歸途に就きしが、風に遭ひて、安南に漂泊し、再び長安に赴きて、唐朝に仕へ、名を河西と改め、祕書監となりて、彼の地に歿す。年七十三。

ふぢはらーきよすけ 藤原清輔【名】〔人〕 朝臣。中納言顯輔の子。皇太后宮大進兼長門守に至る。歌を善くし、二條天皇の勅を奉じて、續詞花和歌集を撰ぶ。書成るに及び、天皇既に崩じ、奏覽を經ざりし

(ナムヒ)郡豐田より岩井郡平泉に移り、大治元年卒す。中尊寺は、その經營する所なり。

ふぢはらーくすこ 藤原藥子【名】〔人〕 中納言種繼の女、藤原繩主の寡婦。平城天皇の寵を得て、尙侍となり、正三位に敍せられ、威權を弄し、兄仲成また勢を恃みて專橫なり。平城天皇位を嵯峨天皇に讓りたまふにあたり、上皇をして重祚せしめ、自ら后位に登らんとせしより、嵯峨天皇大に怒り給ひ、仲成を獄に下し、藥子の官位を奪ひたまふ。藥子上皇と遁れて、東國に趣かんとしたれども、道通ぜず、宮に還り、毒を飮みて死す。

ふぢはらーくにみつ 藤原邦光【名】〔人〕 **ひのくにみつ**(日野邦光)に同じ。

ふぢはらーこれかた 藤原惟方【名】〔人〕 朝臣。權中納言顯頼の子。平治の亂に、藤原信頼、その外甥たるを以て、これに黨せしが、兄光頼にその不忠を詰責せられ、悔悟して、藤原經宗と謀り、二條天皇を奉じて、內裡を脫し、六波羅に至る。亂後、經宗と共に朝權を弄し、後白河上皇の怒に觸れて、長門國に流され、仁安元年召し還さる。歿年詳かならず。世に小別當・中小別當また粟田別當といふ。惟方、或は「これまさ」と訓むべしといふ。

ふぢはらーこれきみ 藤原是公【名】〔人〕 朝臣。贈太政大臣武智麻呂(ムチマロ)の子。初名黑麻呂。從二位・右大臣に至る。天應八年薨ず。年六十三。

ふぢはらーこれただ 藤原伊尹【名】〔人〕 朝臣。右大臣師輔の子。兼通・兼家の兄。叔父實賴薨ずるや、その後を承けて、攝政

る神道。

ふぢなみの 藤波の【枕】 ㊀藤は物にまつはるものなるより、**まつはす**(纏はす)にかけていふ。萬葉「藤波の思ひまつはし若草の思ひつきにし」 ㊁その意味は明かならねど、**ただひとめのみ**(只一目のみ)にかけていふ。萬葉「かくしてぞ人の死ぬちふ藤波のただ一目のみ見し人ゆゑに」

ふぢーなんてん 藤南天【名】〔植〕 **なんてん**(南天)㊂を見よ。

ふぢーにん 扶持人【名】 扶持の給與を受くる人。倭城反魂香「某(ソレガシ)事は、……代代の御扶持人」

ふぢのまるーにだいもんじ 藤丸大文字【名】 **おほぐほぶぢ**(大久保藤)に同じ。

ふぢのめしーて 打ちのめして 打ちのめし手・撲ちのめし人【名】 ぶちのめす人。ぶちのめしたる人。八笑人「その色男を……擒(トラ)くぶちのめすもんだから、……お前達がぶちのめし人(テ)で」

ぶちーのめす 打ちのめす・撲ちのめす【動四他】 打ちてのめす。打ちて、前へ倒す。たたきのめす。八笑人「ぶちのめすより痛(テイ)えから」 和合人「二三人にて、張吉をぶちのめさんとするを」

部筒狀花冠より成る頭狀花序をなして、花梗の末ごとに簇り開き、香氣高し。山野に自生す。秋の七草の一。しらん。らに。らんさう。〔蘭草〕 ㊁襲(カサネ)の色目の一。表も裏も紫。秋用ふ。

ふぢーはぎ 藤矧【名】 矢幹(ノガ)を、羽の上・下の所、鏃の根の邊にて、藤の蔓の皮を細くしたるものにて卷くこと。

ふぢーはし 藤橋【名】 藤蔓を材料として架けわたせる橋。

ふぢーはとばーいろ 藤鳩羽色【名】 染色の一。鳩羽色に、藤色の加はりたるもの。

ふぢーばなし 藤放【名】 弓の未製品にて、

らる。不比等の後は南家・北家・式家・京家の四家に分れ、北家最も榮え、その基經の後に、近衞・鷹司・九條・二條・一條の五攝家及び閑院家あり、北家の一派に、四條家ありて、各、幾多の支流あり。武家となりし者にも、北家の後に、大村・有馬・井伊・伊達・山內・鍋島・鳥居・九鬼及び奥州の藤原等あり、南家の後に、工藤・狩野・伊東等あり。

ふぢはらの四家【句】しけ(四家)㊁ を見よ。

ふぢはらのみや(藤原宮)を見よ。 **ふぢはらの寧樂**(ナラ)の御代【句】 持統・天武兩天皇の時代と奈良朝時代との併稱。 「自ら詠み出でたまへる歌を見るに、…… 萃後集

し、氏の長者となり、遂に正二位・太政大臣に至る。天祿三年薨ず。年四十九。世に一條攝政と稱し、正一位を贈られ、謙徳公と諡せらる。

ふぢはら-これちか 藤原伊周【名】〔人〕 朝臣。關白道隆の第二子。二十一歳にして、叔父道長等を超えて、内大臣となる。正暦四年道隆薨ずるにあたり、叔父道兼を呪詛し、道兼關白となりて七日にして薨ぜしが、次ぎて、道長關白となりしかば、再び失望す。藤原爲光に二女あり、伊周はその姉に通ぜんとし、華山法皇はその妹に通ぜんとしたまひしを、伊周、法皇の、その姉に好すと疑ひ、弟隆家と謀りて、道に要して劾し奉り、又道長を厭めたる東三條の太后を詛ひ、太宰權帥に貶せらる。明年召し還されて、大臣に準ぜられ、正二位に進み、六年又敦成親王呪詛の事に坐して、朝參を停められ、又赦されて、七年薨ず。年三十七。世に帥内大臣と稱す。

ふぢはら-これなり 藤原惟成【名】〔人〕 朝臣。左大臣魚名の裔、雅材の子。初名は惟賢。藏人・左中辨に至る。華山天皇の朝、藤原義懐(ヨシ)と共に時弊を匡救する所多く、後、出家して、寂室と號し、悟妙と更め、永延元年卒す。年三十七。

ふぢはら-これのぶ 藤原伊信【名】〔人〕 朝臣。書家。鎌倉時代書界の名手信實の孫。建治二年北條時宗の結構に成る、現存三十六人詩歌の屏風に於ける、畫の筆者なりといふ。歿年詳かならざれども、弘長年間の人なるべしと傳ふ。

ふぢはら-これまさ 藤原惟方【名】〔人〕

ふぢはらこれかた(藤原惟方)を見よ。

ふぢはら-これみち 藤原伊通【名】〔人〕 朝臣。右大臣俊家の孫、大納言宗通の子。太政大臣に至る。綱紀の弛廢を慨して、意見一箇を上る。世に大宮大相國また九條相國と稱す。永萬元年薨ず。年七十三。槐秘鈔・無名鈔・人記除目鈔の著あり。

ふぢはら-さいくわう 藥原西光【名】〔人〕

ふぢはらもろみつ(藤原師光)に同じ。

ふぢはら-さきこ 藤原嬉子【名】〔人〕 後醍醐帝の中宮。實兼の三女。謙子内親王を生む。帝隱岐に遷幸するに及び、剃髪して尼となる。元弘三年帝の宮に還るや、髪を蓄へ、また中宮となる。此年崩ず。後京極院と稱す。

ふぢはら-さきこ ちゆうわもんゐん(中和門院)に同じ。

ふぢはら-さだいへ 藤原定家【名】〔人〕 歌人。俊成の子、爲家の父。治承・壽永の間、正五位に敍せられ、遂に正二位・權中納言に累進す。後鳥羽上皇の親寵を得、元久の初年、勅を奉じて、藤原家隆等と新古今和歌集を撰み、貞永年間、後堀河天皇の詔を奉じて、新勅撰和歌集を撰む。仁和二年薨ず。年八十。家集を拾遺愚艸・拾遺員外・日記を明月記といひ、歌學の書に、詠歌大概・秀歌大體・顯註密勘・毎月鈔等あり。音讀して「ていかともいふ。

ふぢはら-さだこ 藤原定子【名】〔人〕

一條天皇の中宮。關白道隆の女、伊周(コレチカ)の妹。長徳二年孕みて、二條の邸に居りしが、たまたま伊周及び隆家配流せられしより、深く憂へ、髪を截りて、尼となり、後、又、宮に入る。長保二年崩ず。年二十五。

ふぢはら-さだこ 後西(ゴサイ)天皇の宮人。僧正堯胤の女とも、光源寺智秀の女ともいふ。權大納言定矩の養女。宮に入りて、六條局と稱し、四親王・三女王を生む。法號を眞松院蓮生といふ。

ふぢはら-さだこ 藤原貞子【名】〔人〕 仁明天皇の女御。成康親王・親子内親王・平子内親王を生む。資性温良、徳望、宮中に高し。仁壽二年尼となり、貞觀六年薨ず。從一位を贈らる。

ふぢはら-さだとし 藤原貞敏【名】〔人〕 朝臣。琵琶の名手。繼彦の子。遣唐使准判官となりて入唐し、琵琶を劉二郎といふ者に學ぶ。歸朝後、雅樂頭(カミ)となり、後、掃部頭(カモン)に拜す。貞觀九年卒す。

ふぢはら-さだなが 藤原定長【名】〔人〕 歌人。藤原俊成の養子。定家生るるに及び、避けて僧となり、寂蓮と稱す。建仁二年歿す。

ふぢはら-さだふさ 藤原定房【名】〔人〕 朝臣。經長の子。家を吉田と號す。建治・弘長年間の人なるべしと傳ふ。

ふぢはら-さねひら 藤原實衡【名】〔人〕 朝臣。公衡の子、實後の兄、公宗の父。嘉暦元年薨ず。和歌を善くす。世に今出川(イマデガハ)前右大臣といふ。

ふぢはら-さねゆき 藤原實行【名】〔人〕 公實の第二子。太政大臣に至り、保元二年致仕し、薙髪して、蓮覺と稱す。應保二年薨ず。世に八條太政大臣、又、三條殿といひ、その日記を八條相國記といふ。

ふぢはら-さねよ 藤原實世【名】〔人〕 朝臣。左大臣公實の子。後醍醐天皇に仕へ、新田義貞と共に皇太子を奉じて、越前に赴き、後村上天皇の朝、隆資と機務を參決す。左大臣に任ぜられ、從一位に敍せらる。正平十三年薨ず。年五十一。

ふぢはら-さねよし 藤原實能【名】〔人〕 朝臣。徳大寺家の始祖。權大納言公實の第三子、徳大寺實定の祖父。久安六年累進して、左近衛大將兼東宮傳となる。保元元年、崇徳上皇復位を謀りたまひ、人心惶惶たるに當りて、密かに鳥羽法皇に上疏し、法皇崩御せらるるや、上皇を諫めて、聽かれず、遂に保元の亂起り、亂後、從一位・左大臣に陞りしが、二年落飾して、法名を眞理と改む。六十二歳にして薨ず。

ふぢはら-さねより 藤原實頼【名】〔人〕 朝臣。關白忠平の長子。醍醐・朱雀・村上の三朝に歴仕して、左大臣・從一位に進み、冷泉天皇の朝關白・太政大臣に任ぜられ、圓融天皇の朝、攝政たり。天祿元年薨ず。年七十一。正一位を贈られ、清慎公と諡せらる。世に小野宮殿と稱し、その日記を水心記といふ。

ふぢはら-さり 藤原佐理【名】〔人〕 **ふぢはらすけまさ**(藤原佐理)を見よ。

ふぢはら-しげいへ 藤原重家【名】〔人〕 朝臣。左大臣顯光の子。一條天皇に仕へて、右近衛少將となる。左近衛中將源成信と親しく、二人共に容姿端麗にして、能く朝儀に習ひしより、世に並べ稱して、輝く中將、光る少將と稱す。嘗て、二人、四納言の議事の明辨なるを見て、才ここに至らずして、榮進を冀望するを恥とし、共に園城寺に入りて、髪を削り、舜源と號す。年二十餘。

ふぢはら-しげのり 藤原成範【名】〔人〕 二位・左京大夫となる。 歌人。顯輔の子。從朝臣。少納言信西の子、小督局(コゴウノツボネ)の

父。累進して、權中納言兼民部卿に至る。平治の亂後、讒によりて、下野國に流され、幾もなく召されて任に復す。性櫻花を愛し、邸内に吉野山の櫻を移植し、その間に屋を建てて住みしより、時人櫻町中納言と稱す。文治三年薨ず。年五十三。

ふぢはら-じだい 藤原時代【名】美術史上の一時代。平安朝時代を前・後二期に分てる内の後期。醍醐天皇の朝より鎌倉開府に至る約三百年間。更に初期・中期・末期の三時代に分つ。

ふぢはら-しづこ 藤原穩子【名】〔人〕醍醐天皇の后。太政大臣基經の第四女。延喜元年女御となりて、朱雀・村上の兩天皇及び諸親王を生み、延長元年皇后となり、承平元年皇太后となり、天曆八年崩ず。年七十。

ふぢはら-しへい 藤原時平【名】〔人〕**ふぢはらときひら**(藤原時平)に同じ。

ふぢはら-しんぜい 藤原信西【名】〔人〕**ふぢはらみちのり**(藤原道憲)を見よ。

ふぢはら-しゅんぜい 藤原俊成【名】〔人〕**ふぢはらとしなり**(藤原俊成)に同じ。

ふぢはら-すがね 藤原菅根【名】〔人〕朝臣。良尚(ヨシサヒ)の子。博く經史子集に通じ、文章博士となり、侍讀・參議に進む。延喜格式の撰に與る。延喜八年卒す。年五十三。從三位を贈らる。

ふぢはら-すけあき 藤原資明【名】〔人〕朝臣。權大納言俊光の子。資名の弟。後醍醐天皇の朝、正二位・權大納言に累進す。後、兄資名と共に光嚴院に仕へ、足利尊氏の京師を犯すに及び、また資名と共に持明院を奉じ、潛かに逃れて、尊氏の軍に入り、終に北朝に仕へて、正平八年薨ず。年五十七。

ふぢはら-すけこ 藤原輔子【名】〔人〕平重衡の妻。權大納言邦綱の女。安德天皇の乳母となり、從三位・典侍となり、大納言典侍と號す。平氏滅亡の後、山城國日野村に隱遁し、重衡の斬らるるや、その屍を請うて、高野山に葬り、一生念佛門に入りて、往生を遂ぐ。

ふぢはら-すけとも 藤原資朝【名】〔人〕**ひのすけとも**(日野資朝)に同じ。

ふぢはら-すけつぎ 藤原佐世【名】〔人〕**ふぢはらすけよ**(藤原佐世)に同じ。

ふぢはら-すけな 藤原資名【名】〔人〕朝臣、權大納言俊光の子、資明の兄。後醍醐天皇の時、正二位・權大納言に累進す。天下の義軍京師に進入するや、弟資明と共に、院を六波羅に奉じ、更に北條仲時等の院及び兩上皇を奉じて、東に奔るに從ひしが、途中より遁れ、後、足利尊氏の請により、持明院の宣旨を請ひて與へ、尊氏の東上入京の後、資明と共に、院を奉じて、尊氏に歸す。南北兩朝に分るるや、實に此に胚胎す。

ふぢはら-すけひめ 藤原祐姬【名】〔人〕村上天皇の更衣。大納言元方の女。廣平親王及び緋子内親王を生み、帝崩ずるに及びて、尼となる。

ふぢはら-すけひら 藤原資平【名】〔人〕朝臣。右大臣實資の子。正二位・大納言に累進し、治曆三年薨ず。年八十二。水眞餘流記・決戸記の著あり。

ふぢはら-すけまさ 藤原佐理【名】〔人〕朝臣。關白實賴の孫、敦敏の子。天德・天元の間參議に進み、遂に正三位・太宰大貳となり、兵部卿に進む。書を善くし、小野道風・藤原行成と共に、世に三蹟と稱せらる。長德四年薨ず。年五十五。

ふぢはら-すけよ 藤原佐世【名】〔人〕朝臣。儒者。式部卿宇合(ウマカヒ)第六世の裔、菅雄の子。從四位下・右大辨に至る。貞泰元年卒す。著書に、日本見在書目錄あり。世世、儒を業とし、式家といふ。「佐世」一に「すけつぎ」と訓む。

ふぢはら-すみとも 藤原純友【名】〔人〕武人。筑前守・太宰大貳良範の子。殘忍・暴戾にして黠智あり。伊豫掾となり、任滿ちても歸らず、日振島(ヒフリ)に據る。時に、平將門、下總國猿島に據りて、亂をなしに應じ、潛かに京師を犯さんと謀りて、勢振ひしが、遂に官軍に征討せられて、伊豫國に逃れ、捕へられて斬らる。

ふぢはら-すゑふさ 藤原季房【名】〔人〕朝臣。宣房の子、藤房の弟。參議に任ぜられ、右大臣・中宮亮を兼ぬ。元弘の初、後醍醐天皇笠置に幸するに及び、遁れ匿れしが、後、北條高時の手に捕へられて、下野國に遷され、配所に卒す。

ふぢはら-せいくわ 藤原惺窩【名】〔人〕『窩の字の音、正しくはわ』儒者。播磨國の人。參議爲純の子、定家の後裔。名は肅、字は斂夫。別に紫立子・北肉山人・竹居・廣胖窩などの號あり。初、僧となりて、舜と稱し、妙壽院と號せしが、後、京師に出でて、專ら儒學を勉め、朱子學を提唱す。紀・記・萬葉に通じ、和歌を善くす。元和五年歿す。年五十九。文集十七卷・歌集四卷あり。

(わくいせらはぢふ)

ふぢはら-そのんど 藤原國人【名】〔人〕朝臣。大藏卿楓(カヘ)麻呂の長子、房前(フササキ)の孫。安藝・豐後・大和等の守となりて、治績あり、又、萬多親王と共に、姓氏錄を撰す。終に右大臣・從三位に進み、弘仁九年薨ず。年六十三。正一位・左大臣を贈らる。世に山科大臣と稱す。

ふぢはら-たかいへ 藤原隆家【名】〔人〕朝臣。内大臣伊周(コレチカ)の弟。一條天皇の時、累進して、從二位・兵部卿となる。伊周の計に與りて、花山法皇を劫かしたため、出雲權守に貶せられ、疾によりて、但馬國に留まりしが、伊周と共に赦されて歸る。常に敦康親王をして、東宮たらしめんと欲し、天皇また親王を愛すれども、遣長を憚りて、册立する能はず、遂に快快として樂しまず、請ひて太宰權帥となり、正二位に進む。寬仁三年、刀伊(イ)賊を討ちて、功勞多し。寬德元年薨ず。年六十六。

ふぢはら-たかかね 藤原隆兼【名】〔人〕大和繪の名家。姓は高階(タカシナ)、春日(一說に土佐)と號す。四位に敍せられ、繪所預に補せらる。父は隆親とも經隆とも邦隆ともいひ、明かならず。延慶頃の人。歿年詳かならず。春日權現驗記は、その心血を濺ぎし作にして、今、帝室の御物たり。

ふぢはら-たかこ 藤原高子【名】〔人〕清和天皇の后。長良の第二女、基經の妹。陽成天皇及び二皇子を生む。陽成天皇位に卽きたまふに及び、尊びて、皇太夫人となし、元慶六年皇太后となり、延喜十年崩ず。年六十九。世に二條后と稱す。

ふぢはら-たかこ 藤原位子【名】〔人〕**しんやうめいもんゐん**(新陽明門院)に同じ。

ふぢはら-たかこ 藤原隆子【名】〔人〕後水尾天皇の宮女。藤原隆致の女。後西(ゴサイ)天皇及び諸皇子を生み、後、逢春門院と號す。

ふぢはら-たかざね 藤原隆實【名】〔人〕**ふぢはらのぶざね**(藤原信實)を見よ。

ふぢはら-たかすけ 藤原隆資【名】〔人〕**してうたかすけ**(四條隆資)に同じ。

ふぢはら-たかちか 藤原隆親【名】〔人〕平安朝末期の大和繪の大家。隆能の子。父に學びて、頗る名聲あり。備前守・伊豫守を經て、中務少輔に任ぜらる。又、大和國春日神社の繪所預となりて、大和國に住し、自ら春日と稱せしより、春日派の名生ず。歿年詳かならず。經隆・邦隆の二子あり。經隆は、土佐派の祖たり。

ふぢはら-たかのぶ 藤原隆信【名】〔人〕朝臣。大和繪の大家。皇后宮少進爲隆の子、信實の父。法性寺と稱し、正四位下・右京大夫に至る。和歌をも能くし、歌仙の稱あり。晝は春日光長に學ぶ。建仁元年法然に隨ひて出家し、法名を戒心といふ。元久二年歿す。年六十四。

ふぢはら-たかふぢ 藤原高藤【名】〔人〕朝臣。太政大臣良門の子、寬平・昌泰の間、顯要に累歷して、内大臣に至る。世に勸修寺内大臣また小一條と稱す。薨ずる年六十三。

ふぢはら-たかよし 藤原隆能【名】〔人〕朝臣。中納言清隆の子とも、正五位下・左

衛門清綱の子ともいふ、正五位下・主殿頭(トノモ)に任ぜられ、綺所預となる。土佐派の畫は、この人に至りて、始めて精巧の域に入る。承保頃の人。その遺作と稱するもの、世間に存すれども、信ずるに足らず。

ふぢはら-たけこ 藤原威子【名】〔人〕後一條天皇の中宮。道長の第三女。章子。肇子の兩内親王を生む。長元九年崩ず。年三十八。大中宮と稱す。

ふぢはら-たきよ 藤原忠清【名】〔人〕武將。伊勢國古市の人。初、伊藤五と稱す。平清盛に仕へて、右衞門尉に任ぜられ、上總介となる。以仁王の、兵を擧げて、園城寺に入るや、策を立て、延曆寺をして、園城寺と絕ちて、平家に屬するに至らしめ、弟景家等と、以仁王を追擊して功あり、尋いで平維盛に屬して、その先鋒となり、富士川に敗れ、又、子忠綱と源義仲を北國に討つや、忠綱戰死せしより、剃髮逃亡す。後、平家繼に屬し、家繼敗死するや、又逃亡し、後、志摩に匿れ、遂に捕へられて、京師六條河原に斬らる。

ふぢはら-ただざね 藤原忠實【名】〔人〕朝臣。關白師通の長子。從一位・關白・攝政・太政大臣に至る。保延六年三宮に准ぜらる。薙髮して、名を圓理と更む。洛北知足院に閑居せしより、世に知足院關白と稱し、また富家(フケ)殿と稱す。應保二年薨ず。年八十五。乾鈔十卷を撰す。その日錄を知足院關白記といふ。

ふぢはら-ただちか 藤原忠親【名】〔人〕朝臣。花山院權中納言忠宗の次子。家を中山と稱す。右中將より累進して、正二位・内大臣に至り、後、建久五年薙髮し、庵室を洛東の中山に結びて、中山堂と號し、翌年薨ず。年六十五。世に中山内大臣といひ、日記を山槐記といふ。水鏡もその手に成ると稱せらる。

ふぢはら-ただのぶ 藤原齊信【名】〔人〕朝臣。太政大臣爲光の次子。正二位・大納言に累進し、典故に通じ、辭藻に長じ、源俊賢・藤原公任(キミ)・藤原行成と共に四納言と稱せらる。長元八年薨ず。年六十九。

ふぢはら-ただひら 藤原忠平【名】〔人〕朝臣。關白基經の第四子。寬平中、正五位・侍從兼肥後守となり、累進して、從一位・關白・太政大臣に進む。兄時平、延喜式を撰み、成るに及ばずして薨じたるを補足して、格十二卷・式五十卷を上る。時平・仲平と共に、世に三平と稱す。天曆三年薨ず。年七十。小一條太政大臣と稱し、貞信公と諡す。

ふぢはら-ただふみ 藤原忠文【名】〔人〕朝臣。左大臣緒嗣の曾孫、參議枝良の子。天慶中參議に至る。平將門の亂に、征東大將軍に拜せられ、途に將門の誅伏を聞きて還る。尋いで征西將軍となりて、藤原純友を討たんとし、また廢せざるに亂平ぐ。天曆元年民部卿・紀伊權守を兼ねて卒す。年七十五。中納言・正三位を贈らる。別業を宇治に營みしより、世に宇治民部卿と稱す。

ふぢはら-ただみち 藤原忠通【名】〔人〕朝臣。關白忠實の長子、賴長の兄。嘉承・天永の間、正二位・權中納言に進み、鳥羽・崇德・近衞・後白河の四朝に歷仕し、遂に攝政・關白・太政大臣たり。朝廷の故典に明かに、文藝に達し、傍ら佛教を好み、台教・眞言に精し。長寬二年薨ず。年六十八。別業を法性寺の側に營みしより、世に法性寺關白といひ、日記を、法性寺關白記といふ。書法の、法性寺樣の祖たり。

ふぢはら-たつこ 藤原立子【名】〔人〕順德天皇の中宮。攝政良經の女。九條天皇及び明義門院を生む。承久の亂後、山莊に屛居す。東一條院と號す。嘉祿二年、尼となり、清淨觀と稱し、寬治元年崩ず。

ふぢはら-たねこ 藤原胤子【名】〔人〕宇多天皇の女御。内大臣高藤の長女。醍醐天皇及び諸皇子を生み、寬正八年薨ず。醍醐天皇位に即きたまふに及び、追尊して、皇太后となしたまふ。

ふぢはら-たねつぐ 藤原種繼【名】〔人〕朝臣。良繼の弟、淨成の子。累進して、正三位・中納言に至る。桓武天皇の信任を得、長岡遷都に際して、工事を督せしに、暗中より射られて薨ず。年四十九。嘗て皇太弟早良(サワラ)親王の、天皇の遊幸中に佐伯(サヘキ)今毛人(イマヘミシ)を參議に任ぜんとせしを不可とせしため、怨を得たるに因る。天皇、悼惜して、正一位・左大臣を贈られ、太弟の鴆與を誅罰し、太弟を廢す。後、大同四年に至り、更に太政大臣を贈る。世に弘福院大臣といふ。

ふぢはら-たひこ 藤原旅子【名】〔人〕桓武天皇の后。百川(モヽカハ)の女。淳和天皇を生み、延曆七年崩ず。年三十。淳和天皇位に即きたまふに及び、追尊して、皇太后となしたまふ。

ふぢはら-たまこ 藤原璋子【名】〔人〕鳥羽天皇の中宮。大納言公實の女。元永元年正月中宮となり、崇德天皇・後白河天皇及び諸皇子を生み、崇德天皇位に即きたまふに及び、待賢門院の號を上る。初、白河天皇に私し、中宮となりて、なほ醜聲あり、白河天皇崩ずるに及び、寵途に衰へ、美福門院大に寵を得しより、これを嫉み、人をして呪詛せしむ。後、薙髮して、崇德天皇と共に、三條高倉殿に居る。久安元年崩ず。年四十五。

ふぢはら-たまこ 藤原頊子【名】〔人〕後二條天皇の尙侍。關白實經の女。萬秋門院と號す。和歌を善くす。建武五年卒す。

ふぢはら-ためあき 藤原爲明【名】〔人〕朝臣。爲藤の子、爲兼の養子。從五位下・侍從となり、左近衞中將に進み、南北朝一統の時に及びて、正三位・權中納言兼侍從に至る。和歌を善くし、後醍醐天皇の親寵を得。北條氏を討たんとして捕へられしが、和歌を詠じて赦さる。貞治二年、後光嚴院を奉じて、新拾遺和歌集を撰み、業半ばにして薨ず。

ふぢはら-ためいへ 藤原爲家【名】〔人〕歌人。定家の長子。晩に薙髮して、名を融覺と改め、世に民部卿入道また中院(ナカノヰン)禪門と稱す。嘉祿年間、藏人頭に補せられ、遂に權大納言に進む。寶治年中、後嵯峨上皇の敕を奉じて、續後撰和歌集を撰み、正元年中、又、續古今和歌集を撰む。晩に專ら連歌を作る。建治元年薨ず。年七十九。

ふぢはら-ためうぢ 藤原爲氏【名】〔人〕歌人。爲家の子、爲相の兄。晩に薙髮して、名を覺阿と改む。家を二條と稱し、正二位・權大納言に累進す。和歌を巧みにし、龜山天皇の勅を奉じて、續拾遺和歌集を撰む。弘安九年薨ず。年六十五。

ふぢはら-ためかね 藤原爲兼【名】〔人〕歌人。爲敎の子。薙髮して、蓮覺(一說に靜覺)と稱す。永仁年間、事に坐して、佐渡國に流され、尋いで赦され、權大納言に累進す。應長の初、伏見上皇の勅を奉じて、玉葉和歌集を撰む。元弘二年薨ず。

ふぢはら-ためさだ 藤原爲定【名】〔人〕朝臣。歌人。爲道の子。叔父爲藤に養はれて、その後を承け、續後拾遺集を完成し、後、又、後光嚴院の命を奉じて、新千載集を撰す。薙髮の後、釋空と號し、延文五年薨ず。

ふぢはら-ためすけ 藤原爲相【名】〔人〕歌人。爲家の第三子、爲氏の弟。家を冷泉(レイゼイ)と稱し、兄爲氏と名聲を等しくす。正二位・權中納言に累進す。爲家嘗て、和歌所の邑二所を爲氏に與へ、後、更に爲相に與へしより、爲家の歿後、兄その邑を爭ひ、母阿佛尼鎌倉に訴へて、遂に爲相の有となる。嘉曆三年鎌倉に薨ず。年六十六。

ふぢはら-ためざね 藤原爲時【名】〔人〕朝臣。堤中納言兼輔の孫、紫式部の父。和歌を善くし、越前守を經て、越後守となり、長和年間薙髮して、園城寺に入る。

ふぢはら-ためざほ 藤原爲遠【名】〔人〕朝臣。爲定の子。從二位・權大納言に至る。和歌を善くし、圓融天皇の勅を奉じて、新後拾遺集を撰し、業半ばにして永德元年薨ず。

ふぢはら-ためなり 藤原爲業【名】〔人〕朝臣。歌人。爲忠の子、賴業(ヨリナリ)の兄。崇德天皇の朝、藏人より皇太后宮大進に進み、晩に薙髮して、寂念と稱す。和歌を善くし、彌世繼(ツイギ)を著す。大鏡もその筆に爲れりと稱せらる。二弟壹岐守賴業・長門守爲隆も出家して寂念・寂超と號し、三人、洛北大原に隱れしより、世に大原の三寂と稱せられ、吟詠を事として、世を終ふ。

ふぢはら-ためのり 藤原爲敎【名】〔人〕

歌人。爲家の第二子。父祖の業を繼ぎ、和歌を以て、朝廷に仕へ、二條・冷泉(れいぜい)の二家と並び稱せられ、京極家又は毘沙門堂家と稱す。後年薙髪して、明心と號す。弘安二年歿す。年五十四。

ふぢはらのためふぢ 藤原爲藤【名】〔人〕 朝臣。歌人。爲世の子。正二位・權中納言に至る。後醍醐天皇の勅を奉じて、續後拾遺和歌集を撰し、業半ばにして、正中元年薨ず。ふぢはらのためさだ(藤原爲定)參照。

ふぢはらのためみつ 藤原爲光【名】〔人〕 朝臣。右大臣師輔の子。從一位・太政大臣に累進す。その子祇子、花山天皇の女御となり、妊娠八箇月にして病歿せしより、世を厭ひて、佛に歸し、法住寺を建てて居り、正暦三年薨ず。年五十一。正一位を贈られ、恒德公と諡せらる。世に後一條太政大臣又は法住寺相國と稱し、その日記を法住寺相國記といふ。

ふぢはらのためよ 藤原爲世【名】〔人〕 歌人。爲氏の子。正二位・大納言に進み、晩に薙髪して、明釋と稱す。父祖の家業を繼承して、後宇多天皇の師範となり、天皇遜位の後、その敕を奉じて、新後撰和歌集及び續千載和歌集を撰み、又、二條家の嫡流として、爲敎の子爲兼と相反目す。延元三年薨ず。年八十九。

ふぢはらのつぎなは 藤原繼繩【名】〔人〕 朝臣。右大臣豐成の第二子。寶龜中、陸奥の夷俘の按察使紀廣純を殺すや、征夷大使となりて、これを討ち、正二位・右大臣に累進す。延曆十五年薨ず。年七十。從一位を贈られ、世に桃園右大臣と稱す。

ふぢはらのつねたか 藤原常隆【名】〔人〕 ⇒さつねたか(土佐經隆)に同じ。

ふぢはらのつねつぐ 藤原常嗣【名】〔人〕 朝臣。葛野麿(かどの)の子。嵯峨・淳和・仁明の三朝に歷仕し、從三位・太宰權帥に進み、遣唐使となること二度。書史に精しく、文章・隷書をよくす。承和七年薨ず。年四十五。

ふぢはらのつねひら 藤原經衡【名】〔人〕 歌人。參議有國の孫、公業の子。初の名は景能。長德の頃、正五位下・大和守となる。藤原範永・平棟仲・源兼長・源賴家・源賴實と併せて、和歌の六黨と稱せらる。延久四年歿す。

ふぢはらのつねむね 藤原經宗【名】〔人〕 朝臣。關白師實の孫、經實の第四子。保元中、權大納言・正二位に至る。朝權を私し、後白河法皇の怒に觸れて、阿波國に流され、後、召還せられて、右大臣に任ぜらる。時人呼んで、阿波大臣といふ。後、從一位・左大臣兼皇太子傅に進む。文治五年薨ず。年七十一。世に大炊御門左大臣と稱す。

ふぢはらのていか 藤原定家【名】〔人〕 ふぢはらさだいへ(藤原定家)に同じ。

ふぢはらのてら 藤原寺【名】 なかとみのてら(中臣寺)を見よ。

ふぢはらのときなが 藤原時長【名】〔人〕 はぢろときなが(葉室時長)に同じ。

ふぢはらのときひら 藤原時平【名】〔人〕 朝臣。關白基經の長子。累進して、右近衞大將・左大臣に至りしかど、年若くして、氣鋭く情に任せて事を行ひしより、失政多く、德望ありし右大臣菅原道眞を讒し、太宰權帥に貶せしむ。延喜の朝、勅を奉じて、延喜式・三代實錄を撰む。常に本院の第に在りしより、世に本院大臣と稱し、又、中御門といひ、二弟忠平・仲平と共に三平と稱せらる。延喜九年薨ず。年三十九。正一位・太政大臣を贈らる。

ふぢはらのとくこ 藤原得子【名】〔人〕 鳥羽天皇の后。贈太政大臣長實の女。近衞天皇及び諸皇子を生み、三宮に准ぜられ、美福門院と稱す。皇儲の事よりして、遂に保元の亂の起るに至れるは、この后に胚胎す。永曆元年崩ず。年四十四。

ふぢはらのとしなり 藤原俊成【名】〔人〕 歌人。定家の父。初の名は顯廣。晩に薙髪して、釋阿と號す。後鳥羽天皇の朝正三位・皇太后宮大夫に進み、後白河天皇の勅を奉じて千載和歌集を撰み、元久元年薨ず。年九十一。その邸、京都五條に在りしより、世に五位三位と稱し、歌集を長秋詠藻といひ、又、古來風體抄の著あり。

ふぢはらのとしひと 藤原利仁【名】〔人〕 武將。民部卿兼鎭守府將軍時長の子。母は越前の人秦豐國の女。越前國敦賀の富豪有仁の女婿となり、延喜中上野介・上總介・武藏守を經て、鎭守府將軍に任ぜられ、從四位下に至る。勅に依り、奇計を以て、下野國高座(くらゐ)山の賊を平ぐ。歿年詳かならず。

ふぢはらのとしもと 藤原俊基【名】〔人〕 朝臣。種範の子。家を日野と稱し、世世儒を業とし、藏人頭に補せらる。中納言藤原資朝と共に、武家討伐の謀を運らし、事泄れて捕へられ、幾もなく赦されしが、再び捕へられて、元弘二年鎌倉に害せらる。官右中辨に累進し、明治十七年從三位を贈らる。

ふぢはらのとしゆき 藤原敏行【名】〔人〕 歌人。三十六歌仙の一人。陸奥・出羽・按察使富士麿の子。從四位・右兵衞督に至り、和歌・筆蹟を以て名あり。延喜七年(一說に昌泰四年)歿す。家集を敏行朝臣集といふ。

ふぢはらのとよなり 藤原豐成【名】〔人〕 朝臣。右大臣武智麿(むちまろ)の長子。左大臣に至る。弟仲麻呂に讓せられて、難波の別業に居り、仲麻呂誅せらるるに及びて、本官に復し、從一位に進む。天平神護元年薨ず。年六十二。世に難波大臣又は橫佩(よこはき)大臣と稱す。

ふぢはらのないだいじん 藤原內大臣【名】〔人〕 ふぢはらかまたり(藤原鎌足)に同じ。

ふぢはらのながかた 藤原長方【名】〔人〕 朝臣。權中納言顯長の長子。權中納言に至る。性剛直にして、權貴に屈せず。平清盛の都を福原に遷すに當り、その不便を極言し、爲に舊都に復するに至る。又、平宗盛の安德天皇を奉じて、西海に奔り、源義仲京に入るや、後白河法皇戰功を論じ、諸卿みな義仲を首賞となすに、長方獨り源賴朝を推し、又、賴朝の總追捕使たらんことを奏請するや、また固くその不可を陳ず。剃髪して、中印と稱す。右大臣兼實、常に長方を推して、一代の名士となす。建久二年薨ず。年五十三。世に梅小路中納言と稱し、又、八條と稱す。詩歌に巧にして、新撰秀句の著あり。

ふぢはらのながたか 藤原長隆【名】〔人〕 書家。經隆の二男。從五位下・越前守となり、薙髪後、姉小路快閑といひ、法眼に敍せらる。後宇多天皇の御代の人といふ。

ふぢはらのながて 藤原永手【名】〔人〕 朝臣。贈太政大臣房前(ふささき)の第二子。左大臣・正一位に至る。孝謙天皇崩じて後、僧道鏡の非望を排し、光仁天皇を擁立するに與りて力あり。寶龜二年薨ず。年五十八。太政大臣を贈らる。その邸、山城國長岡に在りしによりて、世に長岡大臣と稱す。

ふぢはらのなかなり 藤原仲成【名】〔人〕 朝臣。式家の祖宇合(うまかひ)の曾孫、種繼の子。桓武・平城の兩朝に仕へ、累進して、右近衞督・參議に至る。弘仁元年妹藥子と共に亂を起して誅せらる。

ふぢはらのなかひら 藤原仲平【名】〔人〕 朝臣。關白基經の第三子。晩に薙髪して、名を靜觀(じやうくわん)と改む。世に枇杷大臣と稱す。正二位・左大臣に進み、東宮傳を兼ぬ。溫雅清秀の評、時人の間に高く、時平・忠平と共に、三平と稱せらる。七十一歲にして薨ず。

ふぢはらのなかまろ 藤原仲麿【名】〔人〕 朝臣。南家の祖武智麿(むちまろ)の次子。書史に通じ、算數の術に精しく、內舍人(うどねり)より累進して、正一位・大納言に至る。孝謙天皇の寵を得て、常に左右に侍し、姓を惠美(ゑみ)、名を押勝(おしかつ)と賜はりしが、後、寵衰へて、僧道鏡これに代りしより、憤懣の餘、天平寶字八年兵を擧げて叛し、遂に近江國にて誅に服す。

ふぢはらのながよし 藤原長能【名】〔人〕 歌人。長良(ながら)の玄孫、倫寧(ともやす)の子。圓融・華山・一條の三朝に歷仕し、從五位上・伊賀守となる。三月小盡の夜、「心憂き年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる」の歌を詠みて、藤原公任(きんたふ)に難ぜられ、爲に病を發して卒す。家集を藤原長能集といふ。

ふぢはらのながよし 藤原長良【名】〔人〕 朝臣。左大臣冬嗣の子。性寬容、仁明天皇

の殊遇を受く。文徳天皇の朝、權中納言に至り、齊衡三年、從二位に進みて薨ず。年五十五。陽成天皇即位の後、外祖を以て、左大臣正一位を贈られ、元慶三年太政大臣を贈らる。

ふぢはら-なりちか 藤原成親【名】〔人〕 朝臣。中納言家成の子。近衛・後白河の二朝に仕へ、殊に後白河上皇の寵を得て、機務に與る。平治の亂に、藤原信頼に與し、捕はれて、死罪に當りしが、姻戚の緣を以て、重盛の救護によりて免る。治承元年左近衛大將たらんことを欲して得ず。重盛・宗盛等左右大將に拜せらるるに及び、深くこれを怨み、遂に僧俊寛等と圖る所ありしが、事洩れ、捕へられて、備前國兒島に流され、遂に殺さる。年四十。

ふぢはら-なりつね 藤原成經【名】〔人〕 朝臣。成親の子。後白河法皇の寵を受け、右近衛少將兼丹波守たり。因りて、丹波の少將と稱す。治承元年父の事に坐して、鬼界島に流され、明年赦されて還り、參議・正三位に至る。建仁二年薨ず。

ふぢはら-なりのり 藤原成範【名】〔人〕 ふぢはらしげのり(藤原成範)を見よ。

ふぢはら-にちか 藤原日迦【名】〔人〕 高僧。大阪の人。十三歳にして得度し、明治二十五年片瀬龍口寺に住し、同四十五年權大僧正に任じ、尋いで池上本門寺の住職となり、大僧正日蓮宗管長に擧げらる。大正五年寂す。年八十。

ふぢはら-のぶこ 藤原順子【名】〔人〕 仁明天皇の皇后。左大臣冬嗣の女。世に五條后といふ。仁明天皇未だ太子たりし時、宮に入りて寵せられ、文徳天皇を生む。文徳天皇位に卽くに及びて、皇太夫人となり、清和天皇位に卽くに及びて、太皇太后となり、貞觀十三年崩ず。

ふぢはら-のぶこ 藤原遵子【名】〔人〕 圓融天皇の皇后。關白賴忠の女。天元元年入內、同五年中宮となり、正曆元年皇后となる。子なきを以て、世に素腹(スバラ)の后といふ。又、四條宮ともいふ。寛仁元年崩ず。年六十一。

ふぢはら-のぶこ 藤原陳子【名】〔人〕 後高倉院の妃。中納言基家の女。後堀河天皇の生母。嘉禎四年薨ず。年六十六。

ふぢはら-のぶこ 藤原信子【名】〔人〕二 後花園天皇の妃。孝長の女。內大臣信宗の猶子。後土御門天皇の生母。嘉樂門院と號す。二徳川綱吉の室。關白房輔の女。寶永六年薨ず。淨光院といふ。

ふぢはら-のぶざね 藤原信實【名】〔人〕 朝臣。隆信の第五子(一說には第二子)。後鳥羽・順徳の二朝に歷任して正四位下・右京大夫に進む。畫を父隆信に學びて、殊に肖像畫を巧みにし、又和歌をも善くす。入道して、寂西といひ、文永二年、八十九歳にして卒すと傳ふれど、確かならず。

ふぢはら-のふじん 藤原夫人【名】〔人〕 天武天皇の寵妃。藤原鎌足の女。名は五百重(イホ)姫。萬葉「飛鳥淨見原(アスカノキヨミハラ)に御宇天皇 天皇賜二藤原夫人一御歌一首」

ふぢはら-のふただ 藤原信尹【名】〔人〕 **このゑのふただ**(近衛信尹)に同じ。

ふぢはら-のぶふさ 藤原宣房【名】〔人〕 朝臣。資通の子、藤房の父。家を萬里小路(ヰマデノコウヂ)また吉田と號す。後醍醐天皇の信任を得て、權大納言となる。北條氏討滅の計泄るるにあたりて、告文を作り、宣房辯明最も力め、事解くるを得たり。數朝に歷仕して、朝典に精しく、源親房・藤原定房と共に、世に後の三房と稱せらる。その日記を萬一記といふ。

ふぢはら-のぶより 藤原信賴【名】〔人〕 朝臣。關白道隆の後、忠隆の第三子。後白河上皇に嬖せられて、正三位・權中納言に進み、寵を恃みて驕傲を極め、近衛大將たらんことを望みたれども、藤原直憲に拒まれ、遂に平治元年藤原成親・源義朝等の同志と兵を擧げ、事敗れて捕へられ、同年六條河原に斬らる。年二十七。

ふぢはら-のみや 藤原宮【名】 持統天皇の五年より、文武天皇を經て、元明天皇の和銅三年奈良に遷都ありしまで、十六年間の皇居。大和國高市郡飛鳥(アスカ)村大字小原(ヲバラ)にありしもの。小原もと大原ともいへるによりて、大原の藤原と稱し、中臣(ナカトミ)鎌足の姓を藤原と賜はりしも、父祖累代この地に住居せしに因る。

ふぢはら-のりなが 藤原範永【名】〔人〕 歌人。尾張守仲清の子。永延・長保の間尾張・但馬・阿波・攝津・伯耆等の守を經て、正四位下・藏人に進む。世に平棟仲・藤原經衡・源兼長・源賴家・源賴實等と共に、和歌の六黨と稱せられ、筥永その首領たり。

ふぢはら-のりみち 藤原敎通【名】〔人〕 朝臣。攝政道長の第三子。累進して從一位・左大臣に至り、兄、賴通に代りて、氏長者となり、後冷泉・後三條・白河の三朝の關白たり。大二條殿と稱す。承保二年薨ず。年八十。正一位を贈らる。澄池記二東記の著あり。

ふぢはら-はまなり 藤原濱成【名】〔人〕 朝臣。京家の祖參議麻呂の子。初の名は濱足。光仁・桓武の朝に歷仕して、從三位太宰帥となる。吏務擧らず、延曆の初、その女增永上(マスカミ)川繼(カハツギ)の叛を謀るに及び、坐して官を削らる。和歌を善くし、嘗て和歌の式を定め、世に濱成式と稱せらる。延曆九年卒す。年六十七。

ふぢはら-はるこ 藤原晴子【名】〔人〕 **しんじゃうごうもんゐん**(新上東門院)に同じ。

ふぢはら-ひさこ 藤原尙子【名】〔人〕 中御門天皇の后。攝政家熙(イヘヒロ)の女。本名は熙子。正德三年女御となる。享保元年櫻町天皇を生み、三宮に准ぜらる。享保五年崩ず。年九十。

ふぢはら-ひでこ 藤原秀子【名】〔人〕 **しんじゃうごうもんゐん**(新上東門院)に同じ。

ふぢはら-ひでさと 藤原秀鄕【名】〔人〕 武人。村雄の子。左大臣魚名の裔といふ。田原藤太と稱し、下野掾同押領使となる。天慶二年平將門叛するにあたり、平貞盛と謀を協せて討伐し、將門の矢に中りて、馬より墜つるや、秀鄕その首を斬る。功を以て、下野・武藏の國守、鎭守府將軍に拜せられ、子孫關東に繁衍す。歿年詳かならず。明治十六年正三位を贈らる。

ふぢはら-ひでたふ 藤原秀能【名】〔人〕 朝臣。歌人。秀鄕の後胤、河內守秀宗の次子。新古今集を撰む時、和歌所寄人に加へられ、建保中、出羽守・正五位上に進む。承久の亂、追手大將に任じ、亂後熊野に出家し、法名を如願といふ。仁治元年卒す。年五十七。

ふぢはら-ひでひら 藤原秀衡【名】〔人〕 陸奥の藤原氏第三代の主。基衡の子。鎭守府將軍陸奥守となり、平泉に居りて、威を東北に振ふ。源義經を衣川(コロモガハ)に居らしめて、これを遇すること甚だ篤し。文治三年卒す。享年詳かならず。

ふぢはら-ひろこ 藤原寛子【名】〔人〕 後冷泉天皇の皇后。關白賴通の女。大治二年崩ず。壽九十二。四條宮と稱す。

ふぢはら-ひろつぐ 藤原廣嗣【名】〔人〕 朝臣。式家の祖宇合(ウマカヒ)の長子、百川(モヽカハ)の兄。博く典籍に涉り、又、佛敎に精しく、天平中從五位下・大和守となりしが、親族讒誣の罪により、太宰少貳に遷さる。僧玄昉と吉備眞備の宮中に勢を張れるに對して、心平かならず、二人を斥けんと請へども、聽されず。遂に兵を擧げて叛せしが、遂に肥前國松浦(マツラ)に誅せらる。

ふぢはら-ふさき 藤原房前【名】〔人〕 朝臣。不比等(フヒト)の第二子。藤原氏四家の一なる北家の始祖。大寶三年東海道に使し、累進して參議となり、聖武天皇の朝に近江・若狹の按察使となり、中衞(ナカエ)大將に任ぜらるも、次いで、東山・東海二道の節度使となる。天平九年、疫病に罹りて薨ず。年五十七。太政大臣を贈らる。

ふぢはら-ふぢこ 藤原藤子【名】〔人〕 後柏原天皇の大典侍。後奈良天皇の御生母。左大臣敎秀の女。豐樂(ブラク)門院と號す。歿年詳ならず。

ふぢはら-ふぢふさ 藤原藤房【名】〔人〕 朝臣。宣房の長子。家を萬里小路(ヰマデノコウヂ)といふ。後醍醐天皇に仕へて、正二位・中納言に至る。元弘の亂に、天皇を輔けて、夜潛かに宮を遁れ、具さに辛苦を嘗め、捕へられて、常陸國に流さる。高時の誅に伏するに及び、天皇やや政治に倦み、論功行賞當を失する者多きより、苦諫再三に及びて、皆聽かれず、遂に官を棄て、北山の岩藏(イハクラ)に入りて、僧となる。時に年

四十。終る所を知らず。

ふぢはらのふひと 藤原不比等【名】〔人〕『不比等は文人(ブンジン)の義にて、日記には、史と書けり』朝臣。内大臣鎌足の第二子。持統の朝に判事となり、文武の朝に律令の撰定に與り、中納言となり、後、正二位・右大臣となり、養老二年太政大臣に拜せられたれども、固辭して受けず。四年疾篤きに及び、天皇大赦を行ひ、佛に祈らしめ給ひしが、遂に薨ず。年六十二。淡海公と諡す。四男二女あり。男は武智麿(ムチマロ)・房前(フササキ)・宇合(ウマカヒ)・麻呂といひ、各一家を立て、女宮子媛は、文武天皇の夫人、光明子は、聖武天皇の皇后となる。しけ(四家)■参照。

ふぢはらのふゆつぐ 藤原冬嗣【名】〔人〕朝臣。右大臣内麿の次子。累進して、從二位・左大臣となる。施藥院を置きて、貧民を救療し、又勸學院を建てて、子弟を教授し、嘗て詔を奉じて、弘仁格及び内裏式を撰む。天長二年薨ず。年五十二。世に閑院大臣と稱し、正一位太政大臣を贈らる。

ふぢはらのまさこ 藤原聖子【名】〔人〕崇徳天皇の中宮。關白忠通の女。皇嘉門院と號す。子なきを以て、近衛天皇を鞠養す。天皇位に卽くに及び、尊びて皇太后となす。崇徳天皇讃岐に遷るに及び、痛嘆のあまり薙髪して、清淨尼と稱し、養和元年崩ず。年六十一。

ふぢはらのまさこ 藤原雅子【名】〔人〕**いちのつぼね(一位局)**を見よ。

ふぢはらのまさつね 藤原雅經【名】〔人〕歌人また蹴鞠家。刑部卿宗長の弟。家を飛鳥井(アスカヰ)と稱す。累進して從三位參議に至る。和歌を藤原俊成に學び、定家等と共に、新古今和歌集を撰む。承久三年薨ず。年六十二。

ふぢはらのますこ 藤原多子【名】〔人〕近衛天皇の后。右大臣公能(キンヨシ)の女、左大臣頼長の養女。琵琶及び箏を巧みにし、傍ら書畫を善くす。久安六年女御となり、天皇崩じ、後白河天皇立ち給ふに及び、太皇太后となる。二條天皇その美を聞き、召して宮に入らしむ。世に二代后(ニダイノキサキ)と

いふ。建仁元年崩ず。年六十二。

ふぢはらのますこ 藤原殖子【名】〔人〕高倉天皇の典侍。修理大夫信隆の女。七條院と號す。初、建禮門院に仕へしが、後、天皇の寵を得るに至り、後高倉天皇・後鳥羽天皇を生み、建久三年三宮に准ぜられ、安貞二年薨ず。年七十二。

ふぢはらのまたて 藤原眞楯【名】〔人〕朝臣。房前(フササキ)の第三子。天平中、春宮大進に任じ、累進して治部卿に至る。資性寛虐・清廉にして、聖武天皇の寵遇厚く、從足仲麿に嫉まる。後、大和守に任じ、神護二年大納言兼式部卿に拜し、遂に薨ず。年五十二。

ふぢはらのまろ 藤原麻呂【名】〔人〕朝臣。不比等(フヒト)の第四子。後、萬里と改む。天平の初、山陰道鎮撫使となり、同九年持節大使となりて、陸奥に至り、鎮守府將軍大野東人(アヅマ)と協力して、蝦夷を鎮定し、この年薨ず。年四十三。官、久しく左京大夫を兼ねたりしより、京家(キヤウケ)と稱す。卽ち藤原氏四家の一なり。

ふぢはらのみちいへ 藤原道家【名】〔人〕朝臣。攝政良經の長子。母は中納言藤原能保(ヨシヤス)の女、源頼朝の外姪。左大臣に進み、皇太子傅を兼ね、仲恭天皇の代、攝政となり、從一位に敍せられ、後堀河天皇の代、關白となり、四條天皇の代、また攝政となる。後、法性寺別業に祝髪して、名を行恵といひ、建長四年薨ず。年六十。世に光明峯寺殿また峰殿・東山入道と稱す。鎌倉將軍頼經はその子、京都の東福寺は、その經營する所なり。

ふぢはらのみちかね 藤原道兼【名】〔人〕朝臣。關白兼家の第三子、道隆の弟、道長の兄。家を粟田口二條また町尻と稱す。華山天皇位に卽き給ふや、父兼家の、その女詮(アキラ)子の生める皇太子を位に卽け、朝政に干預せんと欲せるを悟り、遂に天皇を欺きて、寛和二年、潛かに花山(クワザン)の元慶寺に導き、祝髪せしめ奉る。太子位に卽く(一條天皇)に及び、右大臣に累進し、遂に關白となりしが、在職僅かに七日にして薨ず。世に七日關白といふ。年三十五。

ふぢはらのみちのり 藤原通憲【名】〔人〕朝臣。南家武智麿(ムチマロ)第十二世の孫、實兼の子。高階(タカシナ)經敏の養子。鳥羽・崇徳近衛・後白河の四朝に仕へて、少納言となり、薙髪して、圓空と稱し、後、信西(シンゼイ)と更む。平治の亂の初、大和國に逃れ、遂に捕へられて、京師に梟せらる。本朝世紀・法曹類林・日本紀註の著あり。

ふぢはらのみちまさ 藤原道雅【名】〔人〕朝臣。定雅の子。建治元年太政大臣に任ぜられ、同二年薨ず。世に、花山院太政大臣と稱せらる。

ふぢはらのみつおき 藤原光起【名】〔人〕**ときみつおき(土佐光起)**に同じ。

ふぢはらのみつなが 藤原光長【名】〔人〕**ときみつなが(土佐光長)**に同じ。

ふぢはらのみつのぶ 藤原光信【名】〔人〕**ときみつのぶ(土佐光信)**に同じ。

ふぢはらのみつより 藤原光頼【名】〔人〕朝臣。顯頼の長子。保元中、權中納言となり、平治元年檢非違使別當を兼ぬ。甥信頼の叛するや、これを面折す。權大納言・正二位に進み、薙髪して、光然と稱す。承安三年薨ず。年五十。世に桂大納言と稱し、家を葉室(ハムロ)また六條と稱す。亞記・月中記の著あり。

ふぢはらのみやこ 藤原宮子【名】〔人〕文武天皇の后。不比等(フヒト)の女。聖武天皇を生み、天皇位に卽くに及び、尊びて皇太夫人とし、孝謙天皇卽位の後、太皇太后と稱す。正一位に至り、天平勝寶六年崩ず。

ふぢはらのむちまろ 藤原武智麿【名】〔人〕朝臣。不比等(フヒト)の長子。藤原氏四家の一なる南家(ナンケ)の始祖。和銅五年近江守を拜し、大に治績を擧ぐ。神龜元年難波造營の事に當り、天平元年大納言に進み、後、太宰帥を兼ね、六年右大臣に陞る。當時、三弟房前(フササキ)・宇合(ウマカヒ)・麻呂(マロ)、皆、參議に任じ、一門顯榮を極む。九年疱瘡に罹り、正一位を授けられて薨ず。年五十八。太政大臣を贈らる。

ふぢはらのむねこ 藤原宗子【名】〔人〕靈元天皇の典侍。内大臣宗條の女。敬法門院と號す。初、上﨟ノ局と稱し、後、大典侍と改む。東山天皇及び諸皇子を生み、元祿二年三宮に准ぜられ、享保十七年薨ず。年七十五。

ふぢはらのもとつね 藤原基經【名】〔人〕朝臣。冬嗣の孫、良房の養嗣子。世に堀河大臣また堀河殿と稱す。陽成天皇のなほ幼年なるに當り、政を攝し、從一位・太政大臣に進む。天皇やや長じて、亂行日に甚しきにより、群臣と謀り、廢して、光孝天皇を立つ。基經舊の如く萬機を攝す。天皇病みたまふに及び、奏して皇太子を

定め、崩後これを立つ。字多天皇これなり。天皇詔して、萬機皆基經に關(カン)り白(マウ)して後に奏せしむ。關白の稱ここに始まる。元慶年中、敕を奉じて、文德實錄を撰む。寬平三年薨ず。年五十六。正一位を贈られ、昭宣公と諡せらる。

ふぢはら-もとつね 藤原基俊【名】〔人〕歌人。右大臣俊家の子。源俊頼と相並びて、歌名を馳せたれども、性簡傲、當世を蔑視せしため、世の譏を得、門地名望の高きに拘らず、官位は從五位下・右兵衛佐に達せしのみ。晩に薙髪して、覺舜と號す。保延年間の人。新三十六歌仙・新撰朗詠集の撰あり。悦目抄もその手に成れりといへども、現在のものは僞作なり。

ふぢはら-もとひら 藤原基衡【名】〔人〕陸奥の藤原氏第二代の主。清衡の子。父に嗣ぎて、陸奥・出羽の押領使となり、平泉(ヒライヅミ)の館に居る。富强にして、勢國衙を凌ぐ。保元二年卒す。

ふぢはら-もとふさ 藤原基房【名】〔人〕朝臣。關白忠通の子。六條・高倉兩天皇の朝に攝政・關白たり。松殿又は成菩提(ジャウボダイ)院といふ。仁安元年兄基實薨じ、その後を承けて、攝政・氏長者となる。後、平清盛に嫉まれ、治承三年太宰權帥に遷され、髪を削りて、名を善覺と改む。源義仲、京都に入り、狼籍を極め、强ひて基房の女を娶り、ために、その忠言に聽き、反省する所ありき。寬喜二年薨ず。年八十七。

ふぢはら-もとみち 藤原基通【名】〔人〕朝臣。基實の子。近衛家の祖。後白河法皇の寵を受け、治承三年右近衛中將より內大臣に任ぜられ、關白となる。蓋し前例なき昇進なり。安德天皇位に卽くや、政を攝し、從一位に進む。土御門天皇の朝、再び攝政となる。祝髪して、行理又は普賢寺と稱す。天福六年薨ず。年七十四。

ふぢはら-もとみつ 藤原基光【名】〔人〕書家。土佐家の祖。初名盛光。東大寺に住し、春日を氏とす。書所預に任ぜられ、越前守と稱す。佛書を能くす。寬弘中の人。

ふぢはら-ももかは 藤原百川【名】〔人〕朝臣。宇合(ウマカヒ)の第八子、廣嗣の弟。天平寶字年中、式部少輔に補せられ、累進して、從三位・式部卿兼中衛大將となる。孝謙天皇崩じたまふや、同志と謀り、遺詔を矯めて、光仁天皇を立て、天皇の皇太子を廢したまふや、堅く請ひて、山部親王を立つ。寶龜十年薨ず。年四十八。從二位を贈られ、更に右大臣を贈られ。その女旅子は、淳和天皇の生母なるにより、天皇更に太政大臣・正一位を贈りたまへり。

ふぢはら-もろかた 藤原師賢【名】〔人〕一朝臣。內大臣師信の子。家を花山院と號す。花園天皇に仕へて、樞中納言に拜せられ、後醍醐天皇の御代に正二位・權大納言に陞る。元弘元年北條高時兵を遣して、天皇を遷さんとするや、藤房と共に、天皇を奉じ、夜に乘じて、宮を出で、自ら御衣を著、御輿に乘り、詐りて天皇と稱し、叡山に登り、後、笠置に從ふ。笠置陷るや、また天皇を扶けて遁れ、路を失して捕はれ、三年夏下總國名古屋に流され、その冬薨ず。年三十三。文貞公と諡す。別格官幣社小御門(コミカド)神社は、その靈を祀れる處なり。二朝臣。歌人。實泰の子。正二位大納言に至る。その歌、續千載・續後拾遺・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今等の諸集に散見す。

ふぢはら-もろざね 藤原師實【名】〔人〕朝臣。關白賴通の子。後冷泉・後三條・白河・堀河の四朝に仕へ、太政大臣・攝政・關白たり。歌を善くし、康和三年薙髪して、法覺と稱し、同年薨ず。年六十。世に、後(ノチ)宇治入道、また京極關白と稱す。その日記を京極關白日記といふ。

ふぢはら-もろすけ 藤原師輔【名】〔人〕朝臣。關白忠平の第二子。朱雀・村上の二朝に仕へ、天曆元年正二位・右大臣に至る。天德四年薙髪し、尋いで薨ず。年五十三。世に九條殿、また坊城と稱す。新撰年中行事・除目抄の撰あり。その日記を九曆と稱す。また遺誡一篇あり。

ふぢはら-もろなが 藤原師長【名】〔人〕朝臣。賴長の子。仁平中、從二位・右近衛權中將兼參議となり、保元の初、父の事に坐して土佐國畑(ハタ)に流されしが赦され、仁安中大納言兼左近衛大將に進む。世に土佐大將と稱す。治承元年太政大臣に進み、從一位に至る。三年、平清盛に忌まれて、尾張國に流され、髪を削り、名を理覺と改め、翌年赦され、建久三年薨ず。年五十六。琵琶の名手なりしより、妙音院と稱す。三五腰錄・仁智要錄・白馬節會鈔の著あり。

ふぢはら-もろみち 藤原師通【名】〔人〕朝臣。師實の子。聰明・豁達・博學にして諸藝に通じ、參議・內大臣を經て、遂に從一位・關白に進み、康和元年薨ず。年三十八。世に後二條殿と稱す。

ふぢはら-もろみつ 藤原師光【名】〔人〕一阿波國の人。信西(シンゼイ)に事ふ。平治の亂、信西の大和國に奔るに從ひ、その死なんとする際、薙髪して、西光(サイクワウ)と稱す。後白河法皇に寵せらる。鹿谷(シシノタニ)の密議に加はりて捕へられ、平清盛に殺さる。享年詳かならず。二歌人。五位に敍せらる。その作歌、續千載集にあり。

ふぢはら-もろもと 藤原師基【名】〔人〕朝臣。道平の弟。南朝のために兵を率ゐて、屢ば京師を防ぎしが、京師、敵手に落つるや、吉野に至りて、左大臣となり、正平六年關白に進む。同十五年陸良親王の叛を平定し、翌年足利義詮(ヨシアキ)を京都に攻めて、これを走らす。二十年薨ず。享年詳かならず。家を二條といふ。

ふぢはら-やすこ 藤原康子【名】〔人〕きたやまゐん(北山院)に同じ。

ふぢはら-やすこ 藤原寧子【名】〔人〕後伏見天皇の后。左大臣公平の長女。廣義門院と號す。德治元年宮に入り、延慶二年女御となり、三宮に准ぜられ、光嚴天皇・光明天皇及び二皇子を生む。延元元年出家す。正平十二年崩ず。年六十六。

ふぢはら-やすこ 藤原安子【名】〔人〕村上天皇の后。右大臣師輔の女。天皇の親王たりし日より妃たりしが、御卽位の後、女御となり、次いで皇后となる。冷泉・圓融の兩天皇及び諸皇子を生み、康保元年崩ず。年三十八。

ふぢはら-やすのり 藤原保則【名】〔人〕朝臣。繼繩(ツギナハ)の曾孫、左兵衛佐貞雄の子。貞觀中、備中權介及び備前權守に任ぜられて、治績あり。元慶二年小野春風と共に出羽の諸夷を鎭撫し、後、讃岐・伊豫の國守を經て、太宰大貳より參議兼近江權守に進み、兼民部卿に遷る。寬平七年卒す。年七十一。

ふぢはら-やすひら 藤原泰衡【名】〔人〕陸奥の藤原氏第四代の主。秀衡の子。陸奥押領使となり、出羽を兼管す。文治五年源賴朝の命によりて、義經を衣川(コロモ)に襲ひて、これを殺し、尋いで賴朝に征せられ、部將河田次郎に襲殺せらる。年三十五。

ふぢはら-やすまさ 藤原保昌【名】〔人〕朝臣。大納言之方の孫、致忠の子。沈勇果斷にして、武藝に達し、兼ねて、和歌を善くす。左馬頭となり、從四位に進む。一夜笛を吹きて微行せしに、袴垂(ハカマダレ)といふ巨盜ありて、その衣を奪はんとす。保昌顧眄したるのみにて、意に介せざるものの如く、刀を抜きて襲撃するに及び、叱して伴なひ歸り、物を與へて、後日を戒む。長元九年卒す。年七十九。歌を善くす。

ふぢはら-ゆきこ 藤原超子【名】〔人〕冷泉天皇の后。關白兼家の女。三條天皇、爲尊親王、光子內親王を生む。天元五年崩ず。

ふぢはら-ゆきなり 藤原行成【名】〔人〕朝臣。義孝の長子、祖父伊尹(コレマサ)に業はる。花山・一條・三條後一條の數朝に歷仕し、侍從より正二位・權大納言に進み、按察使を兼ぬ。世尊寺流書法の祖。小野道風・藤原佐理(スケマサ)と共に三蹟の稱あり。嘗て藤原實方と事を論ぜし時、實方怒に堪へず、行成の冠を地に擲ちしかど、敢て抗せず、見る者、その宏量に服す。又、藤原公任(キンタフ)・同齋信(タダノブ)・源俊賢と共に、三納言の稱ありき。萬壽四年薨ず。年五十六。

ふぢはら-よしこ 藤原芳子【名】〔人〕村上天皇の女御。左大臣師尹(モロマサ)の女。昌平親王及び永平親王を生む。容貌艷麗、歌及び琴を巧みにす。世に宣耀殿女御といふ。康保四年薨ず。

ふぢはら-よしこ 藤原歓子【名】〔人〕後冷泉天皇の后。永承二年宮に入り、三年女御となる。關白頼通の女の宮に入るに及び、憚りて宮を出で、兄なる僧靜圓の小野の山房に寓して、佛に歸す。治暦四年皇后となり、承保元年皇太后となり、小野宮皇太后と稱す。康和四年崩ず。年八十二。

ふぢはら-よしこ 藤原姞子【名】〔人〕後嵯峨天皇の中宮。前太政大臣冷泉實氏の長女。後深草・龜山の兩天皇の御生母。世に大宮院といふ。正應五年崩ず。年六十八。

ふぢはら-よしこ 藤原賀子【名】〔人〕東山天皇の宮人。内大臣隆賀の女。初、勾當内侍と稱し、後、權典侍又は新大典侍と改む。中御門天皇を生む。天皇遜位の後、一條局又は四條局と改稱す。實永六年薨ず。年二十五。新崇賢門院と號す。

ふぢはら-よしこ 藤原悦子【名】〔人〕**げんきもんゐん**(玄輝門院)に同じ。

ふぢはら-よしこ 藤原祺子【名】〔人〕**しんさくゐもんゐん**(新朔平門院)に同じ。

ふぢはら-よしざね 藤原良實【名】〔人〕朝臣。道家の子。左大臣關白に至る。文永七年薨奏して行空と稱し、尋いで薨ず。世に普光園(ゐ)院と稱し、家を二條といふ。新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新續古今諸集の作家。

ふぢはら-よしすけ 藤原良相【名】〔人〕朝臣。冬嗣の子。仁惠にして學を好む。崇親院を創め、宗族子女の自存する能はざる者を收養す。正二位・右大臣に陞り、貞觀九年薨ず。世に西三條大臣と稱す。新勅撰集の作家。

ふぢはら-よしちか 藤原義懐【名】〔人〕朝臣。伊尹(これ)の第五子。華山天皇の朝、外舅を以て、政權を執り、從二位・權中納言に至る。天皇出家せらるるや、從ひて僧となり、悟眞と號し、後、寂眞と改む。寛弘五年飯室(いひ)の安樂寺に薨ず。年五十二。

ふぢはら-よしつね 藤原良經【名】〔人〕朝臣。兼實の第二子。世に中御門又は後京極と稱す。内大臣・左大臣を經て、太政大臣・從一位に進む。博く衆藝に通じ、和歌を藤原定家に、詩文を藤原親經に學び、共に出藍の才あり、書畫に巧みに、書は後京極流の祖たり。建永元年暴かに薨ず。盜に刺されしなりとも、又、藤原賴實の殺す所ともいふ。年三十八。歌集を月清集といひ、又日記を殿記といふ。

ふぢはら-よしふさ 藤原良房【名】〔人〕朝臣。冬嗣の第二子。世に染殿大臣又は白河殿と稱す。淳和・仁明・文徳・清和の四朝に歴仕し、その女明子は、文徳の后、清和の生母にして、從五位下・藏人より、累進して太政大臣・從一位に進む。人臣にして、太政大臣、攝政となる緒を開き、藤氏繁榮の因を作す。又貞觀十一年續日本後記を撰ぶ。同十四年薨ず。年六十九。正一位を贈られ、忠仁公と諡せらる。

ふぢはら-よりただ 藤原賴忠【名】〔人〕朝臣。實賴の第二子。攝政伊尹(これ)薨じて、その後を承け、又、氏の長者となる。關白・太政大臣に至り、從一位に敍せらる。永祚元年薨ず。年六十六。正一位を贈られ、廉義公と諡せらる。世に三條大臣と稱す。

ふぢはら-よりつぐ 藤原賴嗣【名】〔人〕鎌倉幕府第五代の將軍。賴經の子。母は内大臣家能の女。寛元二年、六歲にして、執權北條經時に擁せられて、鎌倉の主となり、從五位下・右近衞少將に拜し、征夷大將軍を兼ぬ。建長元年左近衞中將となり、三年從三位に進み、建長四年、僧了行の事によりて、將軍職を廢されて、京都に送られ、康元元年薨ず。年僅かに十八。

ふぢはら-よりつね 藤原賴經【名】〔人〕鎌倉幕府第四代の將軍。攝政道家の第三子。母は西園寺公經の女(賴朝の妹の一條能保に嫁して生みし所)。實朝の猶せらるるや、二歲にして、鎌倉の主となり、七歲にして、將軍となり、寛元二年、二十七歲にして、不平の餘、職を子賴嗣に讓り、翌年薨奏す。時に、北條朝時の子越後守光時、賴經に寵あり、潛かに執權時賴と圖り、賴經もその謀に與りしため、京都に送還せらる。世にこれを宮騒動といふ。康元元年薨ず。年三十九。

ふぢはら-よりなが 藤原賴長【名】〔人〕朝臣。忠實の次子。長承年中正二位・權大納言となり、從一位・左大臣に累進す。世に宇治左大臣といひ、又、殘忍にして横逆を極めしより、惡左府の稱あり。されど、博學にして台記・治相記等を著す。保元の亂に、崇徳上皇を扶け、敗走の際、流矢に中り、父忠實の奈良に在りしより、これに赴かんとして、忠實に拒絶せられ、憂憤舌を嚙みて、奈良坂に薨ず。年三十七。後、正一位・太政大臣を贈らる。

ふぢはら-よりなり 藤原賴業【名】〔人〕朝臣。歌人。爲忠の子、壹岐守たり。祝髮して、寂然と號し、兄寂念・弟寂起と共に、大原山に隱れ、三寂と稱せらる。

ふぢはら-よりみち 藤原賴通【名】〔人〕朝臣。關白道長の子、敦通(のりみち)の兄。世に宇治殿と稱す。十二歲にして正五位下に敍せられ、遂に氏長者・關白・太政大臣に進む。父祖の餘烈を受けて、驕奢專横至らざるなく、永承年中、宇治の別業を捨てて、寺となし、平等院といふ。承保元年薨ず。年八十三。

ふぢはら-りふし 藤原立子【名】〔人〕**ひがしいちでうゐん**(東一條院)を見よ。

ふぢはら-をぐろまろ 藤原小黒麿【名】〔人〕朝臣。房前(ふさ)の孫、鳥養(とりかひ)の子。寶龜十年參議に拜す。翌年蝦夷の叛するや、持節征東大使となり平定の功を以て、正三位に敍せられ、後、累進して、大納言に至り、十三年薨ず。年六十二。從二位を贈らる。

ふぢはら-をつぐ 藤原緒嗣【名】〔人〕朝臣。百川(ももかは)の長子。天長九年太政大臣・正二位に進む。姓氏錄及び日本後紀の撰に與る。承和十年薨ず。年七十。從一位を贈られ、世に山本大臣と稱す。

ふぢ-ふ 藤斑・藤生【名】鷹の胸にある斑の、咲ける藤の花に似たる形のもの。

ふぢ-ぶくろ 藤袋【名】藤布の袋。

ふぢぶくろざうし-えまき 藤袋草子畫卷【名】〔美〕『猿・姫君と山中に同棲し、他行せんとする時は、姫君を藤袋に入れて、高樹の枝に懸けおきたる由記せるにより、この名あり』繪卷物の一。近江國の一老翁、途上に赤子を拾ひ、長じて美しき姫君となりしが、一日、畑打ちて困ぜし時、助力しくれたる者は婿にせんと云ひしに、一匹の猿これを聞きて、終に婿となれりといふ御伽話を畫きたるもの。足利時代のものなるべしといふ。

ふぢふの 藤生野【名】『ふぢふ(藤生)はフヂユウのごとく發音す』㊀古、山城國にありし野。相樂(さがらか)郡なりとも、葛野(かづの)郡松尾社の北、法輪寺の南約三町にて藤の社といふ森ありて、今も藤多き所、その地なるべしもといふ。催樂馬「藤生野」「藤生野のかたち、かたちが原にしめはやし」顯昭「ちはやぶる君が千とせをまつの尾のかかりて咲けるふぢふのの神」㊁催馬樂の曲の一。

ふぢ-べに 緣紅【名】緣の、紅色なること。緣に染著せる紅色。

ふぢべに-さざげ 緣紅豆【名】〔植〕豇豆(ささげ)の一品種。莢の緣紅色なるもの。

ふぢ-ぼたん 藤牡丹【名】〔植〕**けまんさう**(華鬘草)に同じ。

ふぢ-ぼふ 佛法【名】**ぶっぽふ**(佛法)に同じ。御文章「佛法(ぶつぽふ)の信心の心得は、いかやうなるらん」

ふぢま 藤間【名】振附師(ふりつけし)又踊の師匠の家柄の一。初代藤間勘兵衞に始まり、現代勘右衞門の九代目國十郎に用ひらるるに及びて、俄かに、その勢力を加へたり。**ほやなぎ**(花柳)參照。

ふぢ-まい 扶持米【名】一人一日の食料を標準として、米を以て、毎月給與する祿。徳川幕府の制にては、一人一籌月の分を玄米一斗五升と定めたり。扶持。俸米。

ふぢ-まかなひ 扶持賄【名】徳川幕府の下級の役の一。

ふぢま-かんじふらう 藤間勘十郎【名】〔人〕踊の師匠。藤間派の別家。植木店(うゑきだな)

なゝ)藤間といふ。一(初代)ふぢまかんべゑ(藤間勘兵衛)三に同じ。二(二代)三代目勘兵衛の子。振附を兼ぬ。後、藤間大助といひ、大阪の振附師世家眞(なほ)氏を繼ぎて、世家眞大助と稱す。天保十一年屠腹して歿す。年四十五。三(三代)二代目勘兵衛の養女。本名よし。夫は大丸(だいまる)の衣裳方菊兵衛。明治十四年歿す。この人より、女性の襲名に歸し、且つ師の師匠のみを業とし、振附を廢業す。四(四代)前代の一女。本名ふぢ。明治二十一年歿す。五(五代)前代の義伯母。本名かね。初、世家眞を姓とし、前代の歿後、藤間を襲ぎ、明治二十五年歿す。

ふぢまーかんべゑ 藤間勘兵衛【名】〔人〕師の師匠。藤間派の別家。一(初代)藤間派の本家。一(初代)七代目市川團十郎の門弟なる市川金太郎の子。初の名は勘右衛門。芝居の振附師となり、嘉永四年歿す。年三十九。二(二代)初代の實子。芝居の振附師となり、初は金太郎と稱す。俳優松本幸四郎はその養子。

ふぢーまき 藤巻【名】藤にて巻きてある藤巻の弓【句】ふぢまきゆみ(藤巻弓)に同じ。

ふぢまきーむち 藤巻鞭【名】藤にて巻きたる鞭。

ふぢまきーゆみ 藤巻弓【名】藤にて所所を巻きたる弓。平治「藤巻弓持ちて」

ふぢまくーくらげ 縁膜水母【名】〔動〕縁膜水母類に屬する水母。

ふぢまくくらげーるゐ 縁膜水母類【名】〔動〕ひどろちゆうるゐ(ヒドロ蟲類)に同じ。

ふぢーまける【動下一他】『ふちまく(打蒔く)』とうちあける(打開ける)と混錯して生じたる語』一液體をこぼし蒔く。ぶんまける。〔俚語〕柳橋「破(や)れた甲へ賣の水をぶちまける」二思ふ所を、憚なく言ふ。うちく。〔俚語〕

ふぢまは 藤間派【名】師の流派の一。賣永の頃、初代藤間勘兵衛の創めしもの。

ふぢーまふ 藤麻布【名】藤の纖維にて製したる絲を經(たて)とし、麻絲を緯(よこ)として織りたる織物。若狹國三方・小濱地方に産し、主として山間・僻地にて、勞働服に用ふ。**ふぢぬの**(藤布)參照。

ふぢーまめ 藤豆【名】〔植〕一豆(まめ)科に屬する一年生の草。莖は蔓生にして、長く、他物に卷絡し、葉は互生し、三小葉より成れる複葉にして、形、葛(くず)のに酷似す。花は白色又は淡紫色の蝶形花冠を有し、總狀花序をなして開き、花後、扁平・無毛にして、形鎌に似たる莢を結び、種子は扁圓形をなし、莢のまま煮て食ふ。花の色白きは、軟く、淡紫色なるは、硬く、味前者より劣れり。あぢまめ。かきまめ。せんごくまめ。たうまめ。てうせんささげ。てんぢくまめ。ひらまめ。〔蠶豆〕二いんげんささげ(隱元豇豆)に同じ。

ふぢまるせん 藤丸錢【名】藤の丸の模様をあらはしたる繪錢。

ふぢーみ 藤見【名】藤の花の多く咲けるを見て樂しむこと。盧土產「藤見がへりに、……わづかの春雨にあひて」

ふぢーむすめ 藤娘【名】一大津繪の一。爪折笠(つまおりがさ)を被れる娘が、藤の花房をかざせる容を描けるもの。二舞踊の一。

ふぢーむち 藤鞭【名】藤にて造りたる鞭。盧蟹記「宇治川・藤鞭・桐火桶・賴政と四つの題を下させたまふ」

ふぢーむま 駁馬・斑馬【名】ふぢうま(駁馬)に同じ。〔古語拾遺〕和名「駁馬、布知无萬」

ふぢん 布陣・敷陣【名】しきつらぬること。鋪陳(ふちん)。

ふぢん 浮沈【名】一うくと、しづむと。うきしづみ。二さかえとおとろへと。榮枯。盛衰。昇沈。三世俗の推移に從ひて行動すること。〔浮滿〕「時と浮沈す」

ふぢん浮塵【名】一空中に浮動せる塵埃。二〔佛〕『虛假(こけ)・不實にして、眞性を汚染するによりて、譬へていふ』一切有爲(うゐ)の法の譬。〔歩色葉集〕「夫貧、プチン」

ふぢん 夫賃【名】人夫に與ふる賃錢。運

ふぢんし 浮塵子【名】〔動〕一うんか(浮塵子)の漢名。二ぬかか(糠蚊)の漢名。

ふぢーめし 藤飯【名】黑豆を柔かに煮て、米に入れて炊ぎたる飯。藤色にして美し。

ふぢーもどき 藤擬・莞花【名】〔植〕ちやうじざくら(丁字櫻)に同じ。

ふぢもとーてっせき 藤本鐵石【名】〔人〕備前國の藩士。名は眞金(まかね)。通稱は津之助。都門寶茶翁また鐵寒士と號す。博く經史に通じ、書畫を巧みにし、又武技に達す。夙に勤王の大義を抱き、文久三年夷狄親征の議を聞き、同士の士と中山忠光を奉じ、義兵を大和國に擧げ、津藩の隊將藤堂高猷の軍に討たれて戰死す。年四十八。

ふぢもとーまかね 藤本眞金【名】〔人〕前條に同じ。

ふぢもりーとうあん 藤森弘菴【名】〔人〕儒者。名は大雅、字は淳風、通稱は恭助。晩に號を、天山と改む。長野豐山・柴野碧海等に學びて、博覽强記、詩文・書に巧みなり。父義正の後を承けて、播州小野の領主一柳(ひとつやなぎ)侯に仕へ、後、土浦侯の賓師となりしが、俗士に喜ばれずして辭し、弘化四年江戸に移住す。慷慨憂國の情に富み、幕府の忌諱に觸れて江戸を逐はれしが、後、許され、文久二年歿す。年六十四。

ふぢもりーてんざん 藤森天山【名】〔人〕前條に同じ。

ふーちや 普茶【名】一〔佛〕『黃檗清規の住持章第四に「當晩小參、常住設二普茶一」とあり』黃檗(わうばく)宗にて、茶を、一般の大衆に供すること。二ふちやれうり(普茶料理)の略。

ふぢーや 藤屋【名】伊勢國山田の妙見町にありて、德川時代より有名なりし旅籠屋。大正の初頃、取り壞し、今日にては、停車場前に改築し、宇仁館の經營に屬す。膝栗毛「伊勢の山田……その妙見町に、何屋とか云った、道づれの上方(かみがた)者が泊ると云ったは、ああ、それよと、色色考へても、藤屋といふを忘れて」

ふーちやう 府廳【名】府知事がその權限に屬する事務を處理する處。

ふーちやう 符帳・符丁【名】一商家にて、物の價を、隱語にて記しつけたるもの。符牒(ふてふ)。二かくしことば。あひことば。隱語。

ふーちやう 腐腸・腐腹【名】一腐りたるはらわた。二心の墮落して、正しからざること。

腐腸の藥【句】一『枚乘の七發に「甘脆肥濃、命曰二腐腸之藥一」とあり』はらわたを腐らしむる毒藥。二酒を、その人を害するにつきていふ稱。

ふーぢやう 不定【名】定まらぬこと。確かならぬこと。不定(ふぢやう)。源兵「いと不定なる世のさだめなりや」

不定の雲【句】〔佛〕悟の心の、迷のために妨げらるるを、月の光の雲に隱さるるに譬へていふ語。講曲「隅田川」「人間憂の花ざかり、無常の嵐おとなひ、生死(しやうじ)長夜の月影、不定の雲おほへり」

不定の娑婆(しやば)【句】〔佛〕ふぢやうせかい(不定世界)に同じ。曾我虎が磨「不定の娑婆、無常の人間」

ぶーちやう 部長【名】何何部と呼ぶ一團の人人の長。

「らざること。

ふーぢやうごふ 不定業【名】〔佛〕定業なふぢやう-しやう 不定性【名】〔佛〕さんじようふぢやう(三乘不定性)に同じ。

ふぢやう-しゆしやう 不定種性【名】〔佛〕前條に同じ。

ふぢやう-しやうしやう 不定乘性【名】〔佛〕不定なる世界。定めなきこの世。無常の世。

ふぢやう-すしやう 不定種性【名】〔佛〕ふぢやうしゆしやう(不定種性)の約。

ふぢやう-せかい 不定世界【名】〔佛〕不定なる世界。定めなきこの世。無常の世。川中島合戰「いかに不定世界とて、斯くも定なきものよ」

ふちやうーねだん 符帳直段・符帳値段【名】符帳によりて示す値段。

ふーぢやうぶ 不丈夫【名】『だいぢやうぶ(大丈夫)といふ語あるにつきて、その意を打ち消さんとしていへる語』たしかならぬこと。八笑人「なに、なに、それやあ大丈夫だ。いや、それが不丈夫だよ」

ふちやーきやうおう 普茶饗應【名】ふちやれうり(普茶料理)に同じ。

ふーちやく 附著【名】ひたとつくこと。つきて離れざること。「せぬこと。

ふーちやく 不著【名】とどかぬこと。到著

ふちやくーりよく 附著力【名】〔理〕『英 Adhesion』分子力の一。異物質の分子間に行はるるもの。水滴の物に附著するがごとき、これなり。

ふちやーたくし 普茶卓子【名】ふちやれうり(普茶料理)に同じ。

ふちやーぶね 普茶船【名】普茶會(クワイ)に行く人を乘せ行く船かなるべし。千紅萬紫「霜月のとりのまちがよひ羅漢寺の鷲の御山へ參る普茶船」

ふぢやま 藤山【名】〔地〕『新古今集の「春日(カス)山都の南しかぞ思ふ北の藤波春にあふとは」などに本づきていへるかといふ』かすがやま(春日山)の異稱なるべし。謠曲「佐保山」「影さす月の三笠山、薄雲かかる藤山の」

ふぢやまきぬ 藤山絹【名】上野國高崎市及びその附近より産する、一種の生絹(スギ)。小繭絲を經(タテ)とし、精選せる玉絲を緯(ヨコ)として、平地に織りたるもの。

ふちやりん (英 ptyalin)【名】唾液中に存する糖化醱酵素。澱粉を加水分解して、可溶性なるマルトオゼとデストリンとになす。

ふちやーれうり 普茶料理【名】支那式の精進(シヤウジン)料理。我國にても、黃檗(ワウバク)宗の寺院にて、古より行はれ、酒に代へて、茶を用ふ。(卓袱(シツポク)料理に對して)

ふちやゑ 普茶會【名】禪宗の寺院にて、法會の濟みたる後、普茶料理を供すること。千紅萬紫「十一月七日、酉の市の日、舟にて、羅漢寺の普茶會に行くとて」

ふーちゆう 不忠【名】君に仕へて、臣たる道を盡さぬこと。忠義ならぬこと。

ふーちゆう 釜中【名】かまのなか。

釜中、魚を生ず【句】『後漢書の獨行傳に「郿中生ル塵范史雲、釜中生ル魚范萊蕪」とあるに本づく。范冉(字ハ史雲、萊蕪ノ長)の貧窮なりし故事』食無くして、炊がざること久し。(極貧の形容にいふ)〔諺語〕

釜中の魚【句】『通鑑の漢の順帝紀に「相聚偷ル生、若シ魚遊ニ釜中一、知ニ其不ル可ル久」とあるに本づく』程なく、死期の到るべき者の譬。〔諺語〕

ふーちゆう 府中【名】一府のうち。府下。二政府のうち。「宮中・府中の別」三こふ(國府)に同じ。

ふちゆう 府中【名】〔地〕『もと、國府(フ)の所在地なりしよりいふ』一駿河國靜岡の舊稱。二常陸國石岡の舊稱。三甲斐國甲府の舊稱。四明治の初年設置の縣の一。やまなし(山梨)一參照。五長門國豐浦の舊稱。六豐後國府内の別稱。七對馬國嚴原(イヅ)の舊稱。八武藏國北多摩郡にある町。もと甲州街道の一驛。武藏國の國府(フ)の所在地にして、鎌倉街道の大路に當りし處。東京の西八里。京王電車通じ、官幣小社大國魂(オホクニタマ)神社あり。九備後國蘆品(アシ)郡にある町。蘆田川中流の左岸。兩備輕便鐵道によりて、福山市に通ず。「附記したる註。

ふーちゆう 附註【名】註を附くること、又

ふぢゆう 不住【名】一住居せぬこと。いつしよふぢゆう(一所不住)參照。二むぢゆう(無住)に同じ。「不住の寺」

ふーちゆうい 不注意【名】心にとめぬこと。油斷。

ふーちゆうぎ 不忠義【名】ふちゆう(不忠)に同じ。

ふちゆうじやう 府中城【名】一長門國長府町の南端にありし城。新舊の兩所ありて、舊所は、大内氏の時、内藤氏の代代守護代として在城せし所、一に櫛崎城と稱し、新地は、毛利秀元の、國を輝元の子秀就に讓りて退居せし所。二常陸國新治(ニヒバリ)郡石岡町の西方にありし城。戰國時代、大掾(ダイジヤウ)佐竹等諸氏の手に轉轉し、德川氏の代に至りて、松平信吉・六鄕政乘・吉川廣照等を經、元祿十三年水戸侯賴房の子松平賴隆封ぜられてより、子孫世襲して、明治維新に及ぶ。一名、石岡城。

ふーぢよ 巫女【名】一神に仕ふる女。みこ。二巫山の神女。ふぢよべう(巫女廟)參照。

ふーぢよ 婦女【名】をんな。女子。婦人。

ぶぢよ 舞女【名】舞を舞ふ女。舞姫。謠曲「檜垣」「我、古は、舞女の譽(ホマレ)、世にすぐれ」

ふーちよう 符徴【名】しるし。めじるし。

ふーちよく 不直【名】直ならざること。正直ならぬこと。太平記「不直の奉公」

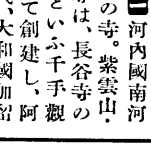
ふぢよし 婦女子【名】ふぢよ(婦女)に同じ。

ふちよーでん 府儲田【名】古、太宰府にて、筑前國の公田の一部を割きて設置し、その租稻を官に納めて、地子にて、府の儲料を補ひ、使の粮・水脚の賃及び厨家の雜用に供せし田地。

ふぢよーべう 巫女廟【名】支那楚の襄王の夢にあらはれたる神女を祀れる所。ふざん(巫山)又は「巫山の雲雨」參照。太平記「巫女廟の花は、夢の中に殘り、昭君村の柳は、雨の外に疏(マバ)なる心地して」

ふぢよーよもぎ 藤蓬【名】〔植〕いぬよもぎ(犬蓬)に同じ。

ふぢーわ 藤輪【名】紋所の一。下圖を見よ。


(わぢふ)

ふぢね 藤井【名】姓氏の一。本姓は卜部(ウラベ)。年麻呂第三十一世の孫民部權大輔兼充を祖とす。子孫相繼ぎ、明治維新後、子爵を授けらる。

ふぢねーしやうざゑもん 藤井庄左衞門【名】〔人〕堺段通織の發明者。和泉國堺市の人。天保二年、相良(サガ)段通支那製敷物等に倣ひて製織し、更に自己の考案を加へて、同市の織工泉利兵衞に織らしめ、遂に堺段通として販賣するに至れり。嘉永五年歿す。

ふぢねーせんしやう 藤井宣正【名】〔人〕佛教學者。越後國の人。光西寺の住職宣界の次男。東京帝國大學卒業後、本願寺文學寮教授となり、三十三年歐洲に遊びて宗教の視察に從事し、三十五年、本願寺光瑞上人の印度佛蹟探險の壯擧に參與し、再び英國へ回航の途次、病漸く重きを加へ、三十六年、佛國マルセイユに上陸して歿す。年四十五。佛教小史・現存日本大藏經冠字目錄・佛教辭林の著あり。

ふぢねーたかなほ 藤井高尚【名】〔人〕和學者。通稱は忠之丞、後、小膳と改む。松屋(マツヤ)又は松齋と號す。備中國の人。吉備津宮の祠官となり、正五位に敍し、長門守に任ぜらる。本居宣長の門に學びて、物語に精しく、最も源氏風の文章を巧みにす。天保十一年歿す。年七十七。

ふぢねーちくぐわい 藤井竹外【名】〔人〕詩人。名は啓、字は士開。別に雨香仙史と號す。攝津國高槻(タカツキ)藩の名族。賴山陽に學び、最も絕句を巧みにし、絕句竹外の名あり。慶應二年沒す。年六十。竹外詩鈔・竹外亭百絕・竹外二十八字詩等の著あり。

ふぢねーていかん 藤井貞幹【名】〔人〕和學者。京師の人。又の名は好古、字は子冬、通稱は叔藏。無佛齋と號す。最も考證に精し。寛政九年歿す。年六十八。

ふぢねーてら 藤井寺【名】一河内國南河内郡藤井寺村にある眞言宗の寺。紫雲山剛琳寺・三寶院と號す。本尊は、長谷寺の本尊のと同木にて刻めりといふ千手觀音。聖武天皇の勅願によりて創建し、阿保親王中興し、堀河天皇の代、大和國加留里の人藤井安基、更に修營を加ふ。後に、明應二年の兵火と永正七年の地震とによりて、舊觀を損せり。西國巡禮第五番の札所。〔若井寺〕二阿波國麻植(ヲエ)郡西尾村にある臨濟宗妙心寺派の寺。空海の草創といふ。金剛山と號す。本尊は藥師如來にして、國寶に指定せらる。四國八十八箇所札所の第十一番。天正の頃の兵

火と天保三年の炎上とによりて、舊觀を失へり。

ふぢゐなかとのかみ 藤井長門守【名】〔人〕ふぢゐなかとのかみ(藤井高尚)を見よ。

ふぢゐらんさい 藤井蘭齋【名】〔人〕儒者。筑後國の人。名は緘、字は季廉、別に伊藤子と號す。初、醫を以て久留米侯に仕へ、眞名部忠菴と稱す。後、致仕して、京に出で、儒を山崎闇齋に學び、洛西鳴瀧(メイセキ)村に閑居す。歿年詳かならず。國朝諫諍錄・本朝孝子傳・睡餘錄・徒然草摘義等の著あり。自ら姓を修して藤(トウ)といひ、且つ草冠を省きて滕と書きたり。

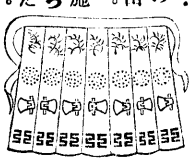
ふぢをか 藤岡【名】〔地〕一 上野國多野(タノ)郡にある町。高崎市の東南約三里。松平康貞の居城の址あり。二 下野國下都賀(シモツケシモツガ)郡にある町。栃木町の西南四里餘。

ふぢをかさくたらう 藤岡作太郎【名】〔人〕文學博士。加賀藩士通學の子。東圃と號す。文科大學を卒業し、第三高等學校教授を經て、東京帝國大學助教授となり、明治四十三年歿す。年四十一。國文學全史・中の平安朝篇・異本山家集・國文學史講話・東圃遺稿等の著あり。

ふぢをかーさうほ 藤岡東圃【名】〔人〕前條に同じ。

ふぢーをどし 藤縅【名】鎧の縅の一。藤色の絲にてどしたるもの。東鑑「大須賀太郎道信、甲藤威」

ふつ 縅【名】一 支那の古昔、禮服に施したる一種の繡文。半青・半黑に彩り、己の字の相背ける形を繡ひ出せるもの。あやぬひ。二 前項(一)の繡文を施したる禮服。**きうしやう(九章)**參照。三 まひだれ。ひざかけ。韋韤。



(二 つ ふ)

ふつ 佛【名】〔地〕**ふらんす(佛蘭西)**の略。

ふつ 棄つ【動下二他】すつ(棄つ)に同じ。〔古語〕大和「この水、あつ湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入る」

ふつ【貌】ふつつりに同じ。水滸「……と問へども、ふつといらふる事もなし」三部抄「ふつに思ひすてけるは、羨しき心もちもなり」

ふつ 朏【貌】ふつぜん(朏然)に同じ。

ふつ 附圖【名】附錄として添へたる圖畫又は地圖。「外國地誌附圖」

ふつ 譜圖【名】系圖。系譜。譜系。

ふつ 佛【名】一 ぶっだ(佛陀)の略。二 **ふっけう(佛敎)**の略。「佛に歸す」

佛とも法とも知らず【句】佛法を、少しも辨へず。菩提心なし。狐媚叢談「ぶつともほふとも知らぬ人」

佛とも法とも辨(ワキマ)へなし【句】前條に同じ。本朝櫻陰比事「御長(ミタケ)九寸ばかりの金佛(カナブツ)、此方(コナタ)の御寢間の下なる土中に埋もれまします、……と云へば、この家主(イヘアルジ)、佛とも法とも辨なく、手を拍つて笑ひ」

ぶつ【名】『ぶつぶつなる物の義』澱粉などを水に溶かす時、溶けずに固まりて殘れるもの。だま。〔俚語〕

ぶつ 打つ・撃つ・撲つ【動四他】うつ(打つ)の轉訛。和合人格別「どこもぶちは致しませぬが」雙蝶蝶曲輪日記「たとひ相撲取(スマフ)でござらうが、見つけ次第に繩ぶつて、お渡し申さん」

ぶっ 打つ【接頭】ぶち(打)の訛。「ぶっ通す」「ぶっちがへ」

ぶつーい 佛意【名】佛の御意。ほとけの御心。

ぶつーいん 佛因【名】〔佛〕佛果を得る因、卽ち一切の善根・功德。平家「聚砂爲佛塔(シュシャクヲモッテブットウヲナス)の功德、忽ちに佛因を感ず。況や一紙・半錢の寶財に於てをや」

ぶつーいん 佛印【名】〔佛〕一 『印は、世間の印章に譬へたるものにて、決定(ケツヂヤウ)・不變の義。諸法の實相は、諸佛の大道にして、決定・不變なるよりいふ』諸法の實相。二 **ぶっしんいん(佛心印)**の略。

ふーつう 普通【名】一 あまねく一般に通ずること。二 つねなみ。世の常。通常。普通の寄託【句】〔法〕寄託の一。受寄物その物を返還すべき義務を生ずるもの。(不規則の寄託)に對して)

ふーつう 不通【名】一 とほらぬこと。かよはぬこと。とどかぬこと。「音信(インシン)不通」二 わからぬこと。理解せられぬこと。不通の說」三 交際せぬこと。(地狩劍本地「譜代の郎等・小者まで、皆、侮りて逃げ走る。一門・一家は不通なり」

ぶつーう 佛宇【名】てら。佛寺。佛閣。

ふつーういうびん 普通郵便【名】ふつうさりあつかいういうびん(普通取扱郵便)の略。

ふつうさりあつかいういうびんぶつ 普通郵便物【名】ふつうさりあつかいういうびんぶつ(普通取扱郵便物)の略。

ふつーうらがき 普通裏書【名】〔商〕『英General endorsement』**むきめいしきうらがき(無記名式裏書)**に同じ。

ふつーうおんぷ 普通音符【名】〔音〕附點音符ならぬ、普通の音符。單純音符。普通觀念。

ふつーがいねん 普通概念【名】〔哲〕『英General conseptr』若干の事物を總括して代表する概念。例へば、人・聖人・犬・山などの類。一般概念。普關概念。普遍概念。

ふつーかう 普通項【名】〔數〕『英General term』級數の一般の項。例へば、$(a+b)^n$の二項展開式に於ての普通項は$\frac{n!}{r!(n-r)!}a^{n-r}b^r$なる類。

ふつーがく 普通學【名】常識を養成する諸種の學問。(專門學に對して)

ふつーがくむきよく 普通學務局【名】文部省中の一局。師範敎育・中學校・小學校・幼稚園・高等女學校・盲啞學校・聾學校及びこれらに準ずべき各種學校に關する事項、通俗敎育・敎育會・圖書館・博物館・學齡兒童の就學に關する事項、圖書の編輯・發行・檢定に關する事項を取扱ふ所。

ふつーかしつけ 普通貸附【名】〔法・商〕**たんぽかしつけ(擔保貸附)**に同じ。

ふつーかにふくゐき 普通加入區域【名】電話加入區域の一。一般に、その電話取扱局所の所在地の行政區域と相等しく、その內に居住する者が、電話交換に加入するには、一定の加入料を支拂ふのみにて、他に料金を要せざるもの。

ふつーかはせ 普通爲替【名】〔商〕**なみかはせ(並爲替)**に同じ。

ふつーかぶ 普通株【名】〔經〕**つうじやうかぶ(通常株)**に同じ。

ふつーかぶぬし 普通株主【名】〔經〕**つうじやうかぶぬし(通常株主)**に同じ。

ふつうかぶぬしそうくわい 普通株主總會【名】〔經〕つうじやうかぶぬしそうくわい(通常株主總會)に同じ。

ふつーかんかく 普通感覺【名】〔哲〕『英Common sensation.』一 のはCoenaesthesis』分化せられざる有機感覺の全體。一般の感情の感覺的基礎となるもの。一般感覺。二 すべての感覺機關に共通せる感覺。例へば、壓力の感覺、苦痛の感覺などの類。一般感覺。三 今日に至るまで、未だ分明に分析せられざる複雜なる感覺。例へば、こそばゆき感覺、むずがゆき感覺などの類。一般感覺。

ふつーかんごく 普通監獄【名】普通一般の人の犯罪人、又は刑事被告人を拘禁する監獄。(特別監獄に對して)

ふつーぎむ 普通義務【名】いっぱんぎむ(一般義務)に同じ。

ふつーぎんかう 普通銀行【名】一般の銀行法規によりて設立したる銀行。(貯蓄銀行・特別銀行に對して)

ふつーぎやうせいくわんちやう 普通行政官廳【名】その職權が、一般の行政事務に渉る行政官廳。例へば、各省・府縣廳の類。(特別行政官廳に對して)

ふつーくわんしふ 普通慣習【名】〔法〕普通一般の人民の間に行はるる慣習。(特別慣習に對して)

ふつーくわんちやう 普通官廳【名】その職務權限が、一般の事務に渉る官廳。卽ち各省大臣・府縣知事・北海道廳長官・臺灣總督などの類。(特別官廳に對して)

ふつーくわんねん 普通觀念【名】〔哲〕『英General idea』**ふつうがいねん(普通概念)**に同じ。

ふつう-くわんぷ 普通官府【名】ふつうくわんちやう(普通官廳)に同じ。(特別官府に對して)

ふつう-けいさつ 普通警察【名】〔法〕『英Common police』各人の生命・身體・名譽及び自由等の安固を計りて、一般社會の秩序を維持するを目的とする警察事務。尋常警察。通常警察。(高等警察に對して)

ふつう-けいはふ 普通刑法【名】普通の犯罪に關する刑法。一般刑法。(特別刑法に對して)

ふつう-けういく 普通教育【名】專門に偏せず、常識ある個人もしくは國民として、世に立ち得るやうに養成する教育。中等教育と初等教育との二階級に分つ。國民教育。(專門教育に對して)

ふつう-ご 普通語【名】日常一般に使用することば。標準語。

ふつう-こうり 普通公理【名】〔數〕『英General axiom』普通の數量に關する公理。數學上、推理の根本とするものにして、例へば、「等しき量に等しき量を加ふれば、その和は相等し」の類。(幾何公理に對して)

ふつう-こぎって 普通小切手【名】〔商〕『英Open cheque』小切手の一。橫線を用ひざるもの。(橫線小切手に對して)

ふつう-とづつみいうびんぶつ 普通小包郵便物【名】つうじやうこづつみいうびんぶつ(通常小包郵便物)に同じ。

ふつう-ごれう 普通御料【名】御料の內、世傳御料にあらざるもの。

ふつう-さいばんしよ 普通裁判所【名】つうじやうさいばんしよ(通常裁判所)に同じ。

ふつう-さいばんせき 普通裁判籍【名】〔法〕『獨Allgemeine Gerichtsstand』法律が特定の裁判所の管轄に屬せしめざる場合の裁判籍。原則として、訴訟人の住所によりて定まる。(特別裁判籍に對して)

ふつう-さくもつ 普通作物【名】〔農〕人類の平常の食料、又は家畜の飼料に供する目的にて栽培する作物。(特用作物・園藝作物に對して)

ふつう-ざま 普通樣【名】普通のさま。なみの形。(慶安記)七箇日加持して後、彫りたりける御笛……、普通樣に思ひつつ」

ふつう-し 普通辭【名】電報に用ふる語辭の一。和文電報にては、日本語(假名又は羅馬字)、歐文電報にては、羅典語又は歐洲國語にして、その意味の通解し易きもの。電報新書又は電報新編によりて記載したる數字の聯集、及び商標又は記號として用ひたる文字もしくは數字は、これに準ぜらる。(祕辭・隱語に對して)

ふつう-しうきん 普通囚禁【名】〔法〕いっぱんしうきん(一般囚禁)に同じ。

ふつう-しき 普通式【名】〔數〕いっぱんしき(一般式)に同じ。

ふつう-しけん 普通試驗【名】一ぶんくわんふつうしけん(文官普通試驗)の略。二ぶんくわんふつうしけんおん普通試驗委員【名】一ぶんくわんふつうしけんおん(文官普通試驗委員)の舊稱。二ぶんくわんふつうしけんおん(文官普通試驗委員)の改稱。

ふつう-しはふさいばんしよ 普通司法裁判所【名】〔法〕つうじやうしほふさいばんしよ(通常司法裁判所)に同じ。

ふつう-じん 普通人【名】普通一般の人。尋常一樣の人。常の人。なみの人。

ふつう-しよくむはんざい 普通職務犯罪【名】〔法〕一般の公務員の犯すことある職務犯罪。(特別職務犯罪に對して)

ふつう-すうがく 普通數學【名】〔數〕普通なる數學。卽ち算術・代數・幾何・初等數學。(高等數學に對して)

ふつう-すぢひきこぎって 普通筋引小切手【名】〔商〕ふつうわうせんこぎって(普通橫線小切手)に同じ。

ふつう-すゐりくみあひ 普通水利組合【名】普通の水利組合、卽ち用水・惡水など、專ら土地の保護のために設くる、積極的目的を有する水利組合(水利組合といへば、消極的目的を有する水害豫防組合を含めど、俗には、この普通水利組合のみを指して、ただ水利組合といふ)。通常、これがために利益を受くる土地を區域として、その區域內の土地所有者を組合員とし、組合員たる資格ある者五名以上の請願、もしくは關係地の市町村長の具狀によりて、府縣知事の、公益上必要と認めたる時、設置す。(一般稅)に同じ。

ふつう-ぜい 普通稅【名】〔法〕いっぱんぜい

ふつう-せんきよ 普通選擧【名】〔法〕『英Popular election 又 General suffrage 又 Universal suffrage』一定の年齡に達せざる者・禁治產者・準禁治產者・婦女子、又、政府の救助を受けてより、一定の年限を經ざる者、一定の住居を有せざる者、その他、特定の理由に基きて、選擧人たることを禁止せられたる者(例へば、選擧に立ち會ふ吏員、又、刑事上の犯罪によりて、公權を停止せられたる者など)の如き少數者を除く外、一般國民に、平等に選擧權を有せしむる制度、卽ち學識・稅額・階級などの諸制限を、選擧資格の要件とせざる選擧制度。我國にては、年齡二十五歲以上の男子にして、前揭の特別なる事情ある者の外は、すべて選擧權を有することとなり、衆議院議員の總選擧に於て、始めて實施し、地方議會議員のは、これより先、大正十五年九月三日、濱松市にて始めて實施せり。普選。(制限選擧・等級選擧に對して)

ふつう-せんきよほふ 普通選擧法【名】大正十四年の改正公布に係る衆議院議員選擧法の俗稱。百五十條より成り、普通選擧の採用を最も重要なる特色とする外、中選擧區制、選擧運動の制限、その他、不在者投票・點字投票・候補者屆出制度、及び、これに伴ふ供託金呈出等の新制度を設定せり。普選法。

ふつう-たいさう 普通體操【名】徒手にて行ふ體操と、啞鈴・球竿などの器械を用ひて行ふ體操との總稱。(兵式體操に對して)

ふつう-ちはうくわんちやう 普通地方官廳【名】〔法〕一定の地域に於ける、一般の事務を行ふ地方官廳。普通地方官廳。(特別地方官廳に對して)

ふつう-ちはうくわんぷ 普通地方官府【名】〔法〕前條に同じ。(特別地方官府に對して)

ふつう-ちはうだんたい 普通地方團體【名】〔法〕一定の地域に於ける、政治上の一般の目的のために存在する地方團體。卽ち府・縣・市・町・村などの類。(特別地方團體に對して)

ふつう-ちやうきよりでんわ 普通長距離電話【名】長距離電話中、大正十五年の改正以前に於て、通話區域の二百里以內なりしもの。その區域の及ぶ所は、遞信省の公示に依り、電話使用料以外に、特別長距離電話の場合の半額、卽ち電話機一箇ごとに、年額金六圓の附加使用料を納付するを要し、普通長距離の外、一般通話區域の通話は爲し得れども、特別長距離の通話は、爲す事を得ざる定なりき。

ふつう-てつだう 普通鐵道【名】軍事・鑛山・開拓など、特定の目的のためならぬ、一般の旅客及び貨物の輸送をなす鐵道。

ふつう-とりあつかひ 普通取扱【名】二普通の取扱。二次條の略。(特殊取扱に對して)

ふつう-とりあつかひ-いうびん 普通取扱郵便【名】特殊取扱郵便に非ざる郵便。普通郵便。(特殊取扱郵便に對して)

ふつう-とりあつかひ-いうびんぶつ 普通取扱郵便物【名】普通取扱郵便として取り扱ふ郵便物。普通郵便物。(特殊取扱郵便物に對して)

ふつう-とんすう 普通噸數【名】〔商〕くうぶつせきさいとんすう(貨物積載噸數)に同じ。

ふつう-にじしき 普通二次式【名】〔數〕『英General quadratic expression』すべての項の完備せる二次式。例へば、xの二次式に於ける ax^2+bx+c、又、xとyとの二次式に於ける $ax^2+bxy+cy^2+dx+ey+f$ などの類。

ふつう-にんよう 普通任用【名】文官任用令に依る、通常の任用。(特別任用に對して)

ふつう-ばいばい 普通賣買【名】〔商〕委

託賣買以外の賣買の總稱。卽ち商人と商人にあらざる者との間に行はるる賣買などの類。(委託賣買に對して)

ふつう-はうしき 普通方式【名】普通の場合に據る方式。(特別方式に對して)

ふつう-はふ 普通法【名】〔法〕いっぱんほふ(一般法)に同じ。

ふつう-びやうし 普通拍子【名】〔音〕ひやうざうびやうし(平等拍子)に同じ。

ふつう-ふうたい 普通風袋【名】〔商〕風袋の一種。特種の商業にて、慣習により、控除するを普通とするもの。

ふつう-ぶん 普通文【名】現代普通に使用する文體の文章。現代文。(擬古文などに對して)

ふつう-ぶんくわん 普通文官【名】一外交官・裁判官・技術官などの如き、特殊の文官以外の、すべての文官。二ほんにんくわん(判任官)の俗稱。

ふつう-ほけん 普通保險【名】〔商〕一火災保險の一。期間の一箇年又はそれ以上なるもの。(特別保險に對して)二再保險・重複保險及び共同保險にあらざる保險。(特殊保險に對して)

ふつう-みん 普通民【名】普通一般の人民。庶民。

ふつう-めい 普通名【名】〔生〕『英 Common name』動・植物の名稱の、各國・各地方にて行はるる、通俗のもの。俗名。(學名に對して)

ふつう-めいし 普通名詞【名】〔語〕『英 Common noun』同じ種類の事物にあてはめて用ふる名詞。例へば、「人」・「犬」・「紙」・「筆」などの類。(固有名詞に對して)

ふつう-めいじ 普通名辭【名】〔語〕いっぱんめいじ(一般名辭)に同じ。

ふつう-めんきよじやう 普通免許狀【名】大正二年七月十二日以前に於て、小學教員免許狀の、文部大臣より交付せられて、日本全國の小學校に任用せられ得る資格を表明せしもの。(府縣免許狀に對して)

ふつう-やく 普通藥【名】〔醫〕劇藥にも毒藥にもあらぬ藥品。

ふつうよう 不通用【名】通用せぬこと。

ふつう-わうせんこぎって 普通横線小切手【名】〔商〕つうじやうわうせんこぎって(通常横線小切手)に同じ。

ふつう-わりびき 普通割引【名】〔商〕ぎんかうわりびき(銀行割引)に同じ。

ぶつえん 佛緣【名】佛のゆかり。成佛(ジヤウブツ)の緣。「佛緣深し」

ぶつえん 佛薗【名】〔植〕菴(ア)の一種。天南星(テンナンセウ)のに於けるが如く、大にして、花の全部を被ふものの特稱。

ぶつおん 佛恩【名】佛の衆生(シユジヤウ)に施す慈悲の恩。御佛(ミホトケ)の慈恩。

ふつか 二日【名】一一日を、二つ合はせたるもの。二日間。二その月の第二の日。

ぶつか 物價【名】一物のあたひ。ねだん。二〔經〕『英 Price』本來は、交換に於て、或財貨に對して與へらるる他の財貨の分量。現今、貨幣交換の時代にては、貨物と貨幣との交換比價、卽ち代價。

ぶつか 佛家【名】ぶっけ(佛家)に同じ。

ぶつが 物我【名】物と我と。

ぶつかい 物界【名】ぶっしつかい(物質界)に同じ。(心界に對して)

ぶつかい 佛界【名】〔佛〕一『梵網經の卷上に「能轉二魔界一入二佛界一、佛界入二魔界一」とあり』十界の一。諸佛の境界。二佛の住む世界。淨土。極樂。佛國。

ぶつかい 佛戒【名】佛(ブツ)の戒(カイ)。ほとけのいましめ。

ぶつかい 佛海【名】〔佛〕佛界の廣大・無邊なるを海に譬へていふ語。「一」に同じ。

ぶつがい 佛蓋・佛蓋【名】てんがい(天蓋)

ぶつかい-がく 物界學【名】しぜんくわがく(自然科學)に同じ。(心界學に對して)

ふつかいち 二日市【名】〔地〕筑前國筑紫郡にある町。大分街道に當り、福岡市の東南約四里。武藏溫泉あり。

ぶっかき 打缺【名】ぶっかきたるかけら、又はその物。〔俚語〕「ぶっかき飴」「氷のぶっかき」

ぶっかき-あめ 打缺飴【名】不規則なる形の高低に關する歷史。

ふつか-ぎう 二日灸【名】昔、陰曆の二月二日と八月二日とは、鍼灸を施すによき日ならりとて、男女各灸をすゑしこと。きさらぎの灸。ふつかやいと。ほつかぎう(二十日灸)參照。狂歌百人一首(栗栗廉窩麿)「二日灸すゑし後にもまた一度はつ雷に臍をおさへつ」

ぶつ-がく 佛學【名】佛蘭西語を修得する學問。

ぶっ-かく 佛閣【名】てらの建物。佛堂。

ぶっ-かく 物格【名】〔法〕『英 Object』かくたい(客體)一に同じ。

ぶっ-かく 打缺く【動四他】たたきて割る。粗雜なる形に割る。〔俚語〕

ぶつ-がく 佛學【名】佛道に於ける學問。佛教の學問。古道大意「儒學と佛學との上で申さば」

ふつか-ぐさ 二日草【名】〔植〕さくら(櫻)の異稱。

ぶつがく-しや 佛學者【名】佛教の學者。「佛教學者。」

ぶっ-かけ 打掛【名】一ぶっ掛けること、又ぶっ掛けたる物。二饂飩・蕎麥切(キリ)などに、汁を注ぎ掛けたるもの。かけ。

ぶっかけ-そば 打掛蕎麥【名】前條一の、蕎麥切の場合なるもの。「條に同じ。

ぶっかけ-そばきり 打掛蕎麥切【名】前條ぶっかけそばに同じ。

ぶっ-かける 吹掛ける【動下一他】一ふきかく(吹掛く)一の訛。二喧嘩を仕掛く。和合人「何さ、夕(ユフ)あ、土手下で喧嘩をふっかけられた咄よ。なに、吹掛けられた。へん、おつな言葉(コトバ)を覺えたな」

ぶっ-かける 打缺ける【動下一自】ぶっ缺きたるやうになる。〔俚語〕

ぶっ-かける 打掛ける【動下一他】『ぶっ(打)は接頭語』一かく(掛く)四を强めていふ語。和合人「水でもぶっかけようか」二仕向く。和合人「全體(テイ)和事師(ワゴト)の本役では無(ネ)えが、どうも、先からぶっかけられては、仕方が無(ネ)え」

ふつか-ごころ 二日心【名】二日醉の心持。曾我會稽山「酒の意趣ある中、二日心か、公用か、醉うてはならぬ首尾もある」

ぶっか-し 物價史【名】〔經〕『英 History of price』物價の高低に關する歷史。

ぶっか-しすう 物價指數【名】〔經〕一定の場所、一定の時期もしくは期間に於ける一定の商品(重要品數十種を選定す)の價格を標準として、百と定め、その後の或時期もしくは期間に於ける、同種の商品の、いかなる程度に變動せるかを、百に對する比例數に換算して示すもの。

ふつか-づき 二日月【名】陰曆にて、その月の第二日の月、卽ち三日月の前日の月。蕪村「八朔やさて明日よりは二日月」

ふつか-のり 二日糊【名】月の第二日に、衣類に糊を附くること。(昔は、これを忌み避くる習慣ありしより、特にいふ)

ふつ-がふ 不都合【名】一都合のわるきこと。不便。二ふとどき。不當。不埒。

ぶつがふ-とく 物合國【名】〔法〕せいがふとく(政合國)に同じ。「(岩蓮華)の漢名。

ぶっかふ-さう 佛甲草【名】〔植〕いほれんげ

ぶっ-かぶせる 打被せる【動下一他】『ぶっ(打)は接頭語』一かぶす(被す)を强めていふ語。二頭上よりぶっ掛く。和合人「手桶に水を一ぱい持って行(イ)って、だしぬけにぶっかぶせようか」

ふつか-ぶり 二日降【名】二日間續きて、雨の降ること。

ぶっか-へう 物價表【名】〔商〕『英 Price list』諸物品の價を記載して、表(ヒヨウ)になしたるもの。「卽ち廚子(ヅシ)。

ぶつ-がん 佛龕【名】佛像を安置する櫃、

ふつか-やいと 二日灸【名】ふつかぎう(二日灸)に同じ。

ふつか-よひ 二日醉【名】ふつかゑひ(二日醉)の訛。

ぶっ-かる 打附かる【動四自】『ぶっつかる(打附かる)の略』一ぶつけたるやうになる。觸る。當る。衝突す。ぶっつかる。二物事に實際に接觸す。直接に、內部の消息、又は先方の意向を探り試む。當る。ぶっつかる。

ふつか-ゑひ 二日醉【名】甚しく酒に醉ひて、翌日も醒めぬこと。宿醉。醒睡笑「友どちなれば、盃の傾く數も時移り、去りかねて、夜をふかし、明(アク)の日も、なほ寢てゐる。これをいふかや、二日ゑひと」

ふっき 富貴【名】ふうき(富貴)の音便。

ふづき 文月【名】ふみづき(文月)の略。〔古語〕秘蔵抄「棚機の心もいかに騒ぐらん稀にあふべきふづき立つなり」

ふっき 佛器【名】一佛事に用ふる一切の器物。佛具。法具。二佛前に据ゑて、供物を盛るに用ふる、皿のごとき器。多くは轆轤細工なり。

ふっき 佛記【名】〔佛〕一佛が未來の事を豫言したる懸記。二佛が、弟子の身上に就きて、未來の果報を分別せる記別。

ふっき 物忌【名】もっき(物忌)に同じ。

ふつ-ぎ 物議【名】世人の議論。世上のうはさ。物論。

ふつ-ぎ 佛儀【名】佛事に關する儀式。

ふつぎあひ 不附合【名】附合をせぬこと。交際せぬこと。續場翁道話「親類の中たがひ、兄弟いさかひ、女夫(メウト)喧嘩、村方(ムラカタ)・町内の不附合」

ふっきぐん-えことば 佛鬼軍繪詞【名】佛教の教説を、軍記に擬して説きたる繪詞。京都市上京區鶴山町なる十念寺所藏の紙本著色の一巻本(但し巻首缺けたり)最も古く、足利時代の中期よりは前のものなるべしといひ、現に國寶たり。

ふっき-さう 富貴草【名】〔植〕黃楊(ツゲ)科に屬する常綠多年生の草。高さ一尺内外、葉は互生し、楕圓形又は倒卵形にして、鋸齒あり、質厚く、冬季、淡黃綠色の小花を著け、穗狀花序を綴る。深山の陰地に自生し、又、觀賞用として栽培す。きちじさう。ふっきさう。まんじさう。

ふっきつ-さう 佛吉草【名】〔植〕ききやう(桔梗)一の異稱。

ふっき-まめ 富貴豆【名】ふうきまめ(富貴豆)「豆」に同じ。

ふっきやう 佛經【名】佛教の經典(キヤウテン)。佛典。釋典。內典。經文(キヤウモン)。經(キヤウ)。

ふっきやう 物狂【名】ものぐるひ(物狂)の漢字を音讀したる語。盛衰記「物狂とは、いかにおはしますらん」

ふっきらぼう 打切棒【名】愛敬なきこと。御世辭(オセヂ)のなきこと。質朴。〔俚語〕

ふっきり 打切【名】一ぶっきりたる物。二ぶっきりあめ(打切飴)の略。

ふっきり 打切【名】『ぶつぶつに切る義』厚く無造作(ムザウ)に切り刻むこと、又かく刻みたる物。「鮪(マグロ)のぶつ切」

ふっきり-あめ 打切飴【名】固飴を引き延ばして、七八分づつの長さに切りたるもの。ぶっきり。

ふっきり-ぼう 打切棒【名】飴に饅飩粉を混ぜ、固めて棒狀に切りたる菓子。

ふっきる 吹切る【動四自】ふききる(吹切る)一の音便。

ふっきる 打切る【動四他】一うちきる(打斬る)一に同じ。甲陽軍鑑「人と口論とはりあひには、……成敗、いづれも甲乙なきものにて、後は、ぶっきるより外の儀は無し」二刃物ならぬ物に強く打ちつけて傷く。たたきて切る。ぶったぎる。〔俚語〕

ふっきれる 打切れる【動下一自】刃物ならぬ物に強く打ちつけて傷く。〔俚語〕

ふっきろう 富貴樓【名】明治維新前後、横濱市神奈川にありし待合。當時の顯官・名士の出入多かりしより名高し。

ふづく 憤く・恚く【動四自】いきどほる。ふづくむ。〔古語〕記「恚恨、フヅク」

ぶっく (英 Book)【名】紙を綴ぢ合はせる物、即ち帳簿・書籍などの類。「寫眞ブック」「繪葉書ブック」

ぶっく 佛供【名】ぶつぐ(佛供)の音便。

ぶっく 佛吼【名】〔佛〕佛の獅子吼(シシク)。

ぶつ-ぐ 物具【名】だうぐ。器具。

ぶつ-ぐ 佛具【名】ぶっき(佛器)一に同じ。

ぶつ-ぐ 佛供【名】佛前にささぐる供物(クモツ)。ぶっく。佛餉。「そのぶつぐのおろし、侍りなん」

ふつ-くさ 【名】〔植〕一おきなぐさ(翁草)一に同じ。字鏡「白頭公、布豆久佐」二たうぢさ(唐萵)に同じ。三せんにちこう(千日紅)に同じ。

ぶつ-くさ 【貌】ぶつぶつ二に同じ。和合人「何か、三人ぶつくさすれど、外の者は、一向分らず」

ふつく-に 悉に【副】殘らず。皆。ことごとく。悉皆。〔古語〕記「悉、フックニ」

ふっく-の-ていりつ フックの定律(英 Hook's law)【句】〔理〕彈性體に、外力を加へて變形せしむる場合の、歪力(ワイリヨク)と歪(ヒズミ)との關係を示す法則。即ち彈性の際限以内にありては、歪力と正比例するといふもの。英國の物理學者(R. Hooke)の名に因めるなり。同氏は、絲の引き張られて、延ぶる場合につきて、張力は延(ノビ)に比例するといひしものなるを、彈性體の法則の名として用ふるに至りしなり。

ふっく-の-はふそく フックの法則【句】〔理〕前條に同じ。

ふづくむ 憤む・恚む【動四自】ふづく(憤く)に同じ。〔古語〕記「哭恚、ネナキフヅクミテ」

ふつ-ぐん 佛軍【名】佛蘭西の軍隊。

ぶっく-めえかあ (英 Book-maker)【名】一著述家。著作者。二獨自の思想も主張もなく、ただ職業的に書籍を編纂して、世に出だすこと。

ぶつ-ぐや 佛具屋【名】佛具を賣る家。

ぶつ-くやう 佛供養【名】〔佛〕佛に物を供へ、喜捨をなし、或は續經などをすること。宇治拾遺「伯の母、佛供養しけり」

ぶっくら 【貌】ふっくりに同じ。

ぶっくら-ふ 【動四自】殆ど水に溺れんとす。〔東京の俚語〕

ふっくり 【貌】ふくり(脹り)に同じ。

ふ-づくり 文作【名】ふづくること。

ぶっくり 【貌】ぶくりに同じ。

ぶっくり 【副】ふっくりに同じ。

ふづくり-かく 文作掛く【動下二他】ふづくり事を仕掛く。だましかく。手習鑑「この梅王を見知らぬ馬鹿者、ふづくりかけて、様子を問へば」

ふづくり-ごと 文作事【名】辻褄を合はせて、巧に説く事柄。たくらみ。綺語抄「寶僧(ホウイ)かたり・陰陽師(オンヤウジ)のたぐひ、大かたの文作事にては、合點せぬ時世(ジセ)」

ふ-づくる 文作る【動四他】一物事をとのふ。まとむ。〔徳川時代の語〕色道大鑑「尋常のふづくりは、物を整ふる事にいふ。譬へば、緣邊をふづくる、養子をふづくるなどいへり。又、障子張るに、紙をふづくるともいふ。これも、よくととのふる心なるべし」二辻褄を合はせて、巧に説く。たくらむ。たぶらかす。〔徳川時代の語〕色道大鑑「當道のふづくりは、謀ってもって人をたぶらかすことをいふ」一代男「後室模樣の著物、大錦帽子、房附の念珠(ネンジユ)など入れておきて、苻作(フヅク)り、女よりも先へ男を廻し、かの衣類を著せて寢させおき、さるかみさまと申しなして、下下に油斷させて逢はする手もあり」

ふっ-くわ 弗化【名】〔化〕『英 fluoring』生石灰(セイセキクワイ)等、アルカリ屬上金屬の無水酸化物に水を加ふる時、一種の反應により、消石灰、即ち酸化カルシウムを生じ、且つ著しき發熱現象を呈して、體積を增加する現象。ふく(化く)參照。

ぶっくわ 佛果【名】〔佛〕過去の業(ゴフ)の報によりて、成佛(ジヤウブツ)の果を得ること。

ぶついん (佛因)-ぶっしゅ(佛種)參照。

ぶっくわ 物化【名】一天年を終へて死ぬること。物故。二物質的になること。

ぶつ-ぐわい 物外【名】有形物のほか。形而下の範圍の外。物質以外。世外。象外。「物外に超然たり」

ぶっ-くわう 佛光【名】〔佛〕佛の光明。

ぶつくわう-じ 佛光寺【名】一京都市下京區高倉通佛光寺下る所にある眞宗の寺。佛光寺派の本山。建曆二年、親鸞上人の草創。澁谷(シブタニ)山と號す。もと興正寺と稱し、山科(ヤマシナ)にありしを、天正十四年今の地に移せり。二〔佛〕次條の略。

ぶっくわう-じ-は 佛光寺派【名】〔佛〕眞宗十派の一。京都の佛光寺を本山とし、親鸞の弟子英佛を第一祖とす。

ぶっくわう-じ-ふぢ 佛光寺藤【名】紋所の一。佛光寺の定紋たる下(サガ)り藤。

ぶっくわう-じ-もんと 佛光寺門徒【名】〔佛〕むがくは(無學派)に同じ。

ぶっくわうぜんじ 佛光禪師【名】〔人〕**そげん**(祖元)を見よ。

ふっくわかるしうむ 弗化伽留斐母【名】〔化〕『英 Calcium flouride』カルシウムの弗素と化合せるもの。螢石として、多量に産し、又、酸・骨も、その微量を含有す。工業上には熔剤となし、或は弗化水素の製造等に用ふ。

ふっくわくろむ 弗化格魯謨【名】〔化〕『英 Chromium flouride』クロムの弗素と化合せるの。綠色の結晶又は粉末狀を呈し、水に溶けやすく、羊毛の媒染劑及び染料固著劑として使用す。

ふっくわすねそ 弗化水素【名】〔化〕『英 Hydrogen flouride』水素の弗素と化合せるもの。劇しき毒性を有し、臭氣ある無色・發煙性の液體。純粹なるものを吸入すれば死すべく、その一滴を皮膚に滴下するのみにても、全身戰慄して、猛烈なる苦痛を起す。よく水に溶解し、その水溶液は、弗化水素酸又は弗酸と呼び、たやすく珪酸鹽に作用して、弗化珪素を生ずるにより、寒暖計・晴雨計の度盛等、すべて、硝子器・磁器などを融刻するに用ふ。螢石の粉末を鉛製のレトルトに入れ、濃硫酸を加へて、徐に熱して製す。

ふっくわすねそーさん 弗化水素酸【名】〔化〕『英 Hydrofluoric acid』前條を見よ。

ふっくわーせきくわい 弗化石灰【名】〔化〕**ふっくわかるしうむ**(弗化加留斐母)に同じ。

ふっくわつーせつ 物活說【名】〔哲〕次條に同じ。

ふっくわつーろん 物活論【名】〔哲〕『英 Hylozoism』物質を、單に無生命の機械的なるものとせず、物質そのものに、本來生命あり、靈魂ありて、生活作用・精神生活を現すと考ふる說。物活說。

ふっくわーぶつ 弗化物【名】〔化〕『英 Fluoride』弗素と化合する物質。

ぶっくわーぼだい 佛果菩提【名】〔佛〕**だいぼだい**(大菩提)に同じ。

ぶつーぐゎん 佛願【名】■〔佛〕佛の誓願。彌陀の本願。■佛への願掛(ガケ)。五人女「我、そもそも出家せる時、女色の道は、ふつと思ひ切りし佛願なり」

ふーづくゑ 文机【名】**ふみづくゑ**(文机)の略。〔古語〕玉藻「紀の國高島と申す所の石を取りて、ふづくゑのあたりに置きて侍りけるに」

ぶっーけ 佛家【名】〔佛〕■『觀無量壽經』に「當下坐二道場一生中諸佛家上」、觀經散善義に「卽入二諸佛之家一、卽淨土是也」とあり』佛の淨土。■『觀經慧遠疏』に「不思議佛法是佛住處、名爲二佛家一、初地已上入二佛家中一、依レ之趣レ行、名レ生二佛家一」とあり』初地(ヂ)以上の人。■僧侶。釋家。

ぶっーけ 佛化【名】〔佛〕佛の敎化。

ぶつーげ 佛牙【名】釋迦の齒。釋迦の滅後、茶毘(ダビ)に付せし時、全身悉く細粒の舍利となりたれども、牙のみ、現形を損ぜずして、灰燼の中にあり。捷疾鬼これを盜み去り、その後、毘沙門天の那吒(タ)太子、又これを南山の道宣律師に授けたりと傳ふ。萬葉千載「鎌倉圓覺寺の什物、佛牙の舍利」

ぶっーけい 物詣【名】**ものまうで**(物詣)に同じ。狂言・六人僧「物詣致さうと存ずる」盛衰記「いかなる人の御物詣ぞと問へば」

ふっーけう 拂曉【名】次條に同じ。

ふつーげう 拂曉【名】朝早きこと。夜のひきあけ。あかつき。黎明。拂日。拂明。拂旦。

ぶっーけう 佛敎【名】『佛陀卽ち釋迦を敎主と仰ぐ敎の義とも、衆生(シュジョウ)をして、敎主と同じく、佛陀卽ち覺者たらしむる敎の義ともいふ』紀元前第五世紀の初、中部印度に於て、釋迦の開きし宗敎。轉迷開悟・成佛(ジョウブツ)得脫を旨とす。もと婆羅門敎に對する革命運動として起りしものにて、漸次中央亞細亞・東印度諸島支那・朝鮮・日本等に傳播し、全亞細亞の信仰・文明・美術に大勢力を及ぼし、宗派多く、信者の數、諸宗敎中の第一位を占むれども、今日にては、發源地の印度は、却つて、その痕跡を絕つに至れり。釋氏の敎。のりのみち。佛法。佛道。釋敎。

ぶっけう-えんぜつ 佛敎演說【名】佛敎に關する演說。

ぶっけう-か 佛敎家【名】佛敎を修むる人。佛敎を信仰する人。「會。

ぶっけう-かい 佛敎界【名】佛敎徒の社

ぶっけう-がくしや 佛敎學者【名】**ぶつがくしや**(佛學者)に同じ。「同じ。

ぶっけう-ご 佛敎語【名】**ぶつご**(佛語)に

ぶっけう-こく 佛敎國【名】佛敎の廣く行はるる國。卽ち日本・支那など。

ぶっけう-ざっし 佛敎雜誌【名】佛敎を研究し、布敎するために發行する雜誌。

ぶっけう-し 佛敎史【名】佛敎の歷史。

ぶっけう-じ 佛敎寺【名】美作國久米郡龍川村にある眞言宗の寺。本尊は、藥師如來・文殊菩薩・五智如來。和銅三年喜惠上人の開山。醫王山と號す。

ぶっけうじしよ 佛敎辭書【名】佛敎に關する辭書。佛敎辭典。「じ。

ぶっけうじてん 佛敎辭典【名】前條に同

ぶっけうしんじや 佛敎信者【名】佛敎を信ずる人。「有する主義。

ぶっけうーしゅぎ 佛敎主義【名】佛敎の

ぶっけうしよじ 佛敎書肆【名】佛敎の書籍を出版し、又は賣り捌く書肆。

ぶっけうーと 佛敎徒【名】佛敎を信ずる人。佛徒。

ぶっけうびじゅつ 佛敎美術【名】〔美〕佛敎に關する美術。印度・支那古來の美術は、多くは、これに屬す。

ぶっけうーぶんがく 佛敎文學【名】佛敎の趣旨を含める文學。

ぶっーけん 物件【名】■もの。しな。■〔法〕『獨 Sache』權利の目的となる物。

ぶっーけん 物權【名】〔法〕『獨 Sachenrecht 又 Dingliches Recht』直接に、有體物を目的とする財產權。現行民法は、占有權・所有權・地上權・永小作(サヒヤク)權・地役權・留置權・先取得權・質權・抵當權・入會(イリアヒ)權の十種を認め、その他、永代借地權法に於て認めたる永代借地權、鑛業法に於ける鑛業權、漁業法に於ける漁業權・入漁權などあり。

ぶっーけん 佛見【名】〔佛〕佛の見て知ること。佛の知見。鵜飼合戰「佛見・法見、共に、是妄見なり、誰か正見(シャウ)を知らん」

ぶつーげん 佛眼【名】〔佛〕■『無量壽經』に「佛眼具足、學二了法性一」とあり』五眼(ゴゲン)の一。佛の、諸法實相を照す眼。他の四眼の用を具す。■**ぶつげんそん**(佛眼尊)に同じ。

佛眼の法【句】〔佛〕**ぶつげんほふ**(佛眼法)に同じ。太平記・梶井宮は、……禁裏に壇を立てて、佛眼の法を行はせたまふ」「供養法。

ぶつげんぐ 佛眼供【名】〔佛〕佛眼尊の

ぶっげん-けいやく 物權契約【名】〔法〕直接に、物權上の變動を目的とする契約。物權變動の一原因をなす。その變動を以て、第三者に對抗するには、動產物權にありては、目的物の引渡、不動產物權にありては、登記を必要とす。

ぶっけんさしおさへ 物件差押【名】〔法〕檢事又は司法警察官が、搜査によりて、發見したる證據物件を差し押ふること。

ぶつげん-しんごん 佛眼眞言【名】〔佛〕佛眼尊の陀羅尼。佛眼呪。「同じ。

ぶつげん-しゅ 佛眼呪【名】〔佛〕前條に

ぶっけん-しゅうけん 物權證券【名】〔法〕特定の物を代表する證券にして、その處分が、その物の處分となるもの。例へば、倉荷證券・船荷證券などの類。

ぶつげん-そん 佛眼尊【名】〔佛〕大日如來の變化身(ヘンゲ)。五眼(ゴゲン)を具し、佛部の功德を生ずる尊體。佛眼。

ぶつげんぶつもそん 佛眼佛母尊【名】〔佛〕『ぶつも(佛母)を見よ』前條に同じ。

ぶつげん-ほふ 佛眼法【名】〔佛〕佛眼尊を本尊として行ふ修法(シュホフ)。

ぶつげん-ゑ 佛眼會【名】〔佛〕**かいげんゑ**(開眼會)に同じ。

ぶーつける 【動下一他】『ぶつける(打附ける)の略』■投げて、目あての物に當らしむ。ぶつつける。■打ちたたく。

ぶっーこ 【名】〔動〕鱸(キス)の幼魚。大さ一二寸の頃のもの。

ふつ-ご 佛語【名】佛蘭西國の國語。

ぶっ-と 物故【名】『その鬼(靈魂)、物に同じくして、故(モト)くなる義とも、直接に、死を斥(サ)さず、その人の服用せし物、皆、已に故くなる義とも、又、物は、沒の古字なる歟の轉訛にて、沒して、故くなる義とも、又、一説には、物は勿、故は事にて、死にし者は、この世に事なきに至れる義ともいひ、定説なし。ぶっくわ(物化)參照』人の死ぬること。もっこ。

ぶつ-ご 佛語【名】■佛陀のことば。佛經にある言語。佛言(ブツゴン)。三代男「手には珠物(ズヨ)、口には佛語」■佛法に關せる數事に用ふる語。佛教語。

ぶつ-ご 佛後【名】〔佛〕前佛(釋迦)の入滅以後の世。佛滅の後。(佛前に對して)

ぶっ-とう 佛工【名】ぶっし(佛師)に同じ。

ぶっ-とう 佛口【名】佛語■を口にとなふること。「蛇心佛口」

ぶっ-とく 佛國【名】〔佛〕■『梵 Buddha-kṣetra の譯語』佛の所住又は所化(ケウゲ)の國。淨土も、その一なること言ふまでもなけれど、娑婆(シヤバ)世界も、釋迦如來所化(ケウゲ)の土地なれば、同じく佛國なり。佛界。佛所。佛土。佛刹。■〔地〕ぶっしやうこく(佛生國)に同じ。「(法顯傳)」に同じ。

ぶっこくき 佛國記【名】〔書〕ほっけんでん

ぶっこくじ 佛國寺【名】■山城國紀伊郡深草村大字大龜谷(オホカメ)にある黃檗宗の寺。天玉山と號す。本尊は釋迦如來、協侍は文殊・普賢の二菩薩。開山は支那明の歸化僧高泉性激。■朝鮮慶尚北道慶州の南方四里にある寺。建築・彫刻の推賞に値するもの多し。

ぶつごじ 佛護寺【名】安藝國廣島市寺町にある眞宗本派の別院。もとは天台宗。長祿の頃、甲斐國の僧正信の開山。

ぶっとつ 佛骨【名】佛の遺骨。五色に光るといふ。舍利。佛舍利。(譬曲「舍利」)「佛法流布(ル)の印として、佛骨を納め奉り」

ぶっとつ-へう 佛骨表【名】〔文〕支那唐の憲宗帝が元和十三年、鳳翔の法門寺の佛骨を迎へて、禁中に入れし翌年、韓退之の其の非を諫めし表。(風俗文選「嘲二佛骨表一」)

ぶっとう 佛頭【名】佛像の頭部。

ぶっとう 佛塔【名】佛舍利を納めたる塔。

ぶっとう 佛道【名】佛教。佛法。

ぶっとく 佛德【名】佛の德。

ぶっとく 佛毒【名】佛の害毒。

ぶっとく 佛督【名】佛の監督。

ぶっとく 佛篤【名】佛を篤く信ずること。

ぶっとく 佛獨【名】佛一人。

ぶっとく 佛德【名】佛の德。

ぶっとく 佛禿【名】佛の禿げたる頭。

ぶっとく 佛瀆【名】佛を瀆すこと。

ぶっとく 佛讀【名】佛經を讀むこと

ぶっしえる（英 Bushel. 略號 Bu.）【助數】英・米兩國に於ける穀類容積の單位。英國のは、ガロンの八倍、約我國の二斗一合餘、米國のは、一斗九升五合餘。

ぶっしき 佛式【名】佛教の方式。佛儀。

ぶっしたい 物自體【名】〔哲〕『獨 Ding-an-sich』ほんたい（本體）〔四〕に同じ。

ぶっしつ 物質【名】〔一〕物のたち。物體の形質。〔二〕〔理〕『英 Matter』空間に場所を占め、五官によりて、その存在を認め得る、すべての物。（精神に對して）ぶったい（物體）〔二〕參照。

物質の恆存【句】〔理・化〕次條に同じ。

物質の不滅【句】〔理・化〕『英 Conservation of matter』物質は、種種の原因によりて變形し、又變質すれども、その總質量は、少しも增減せず、又いかなる方法を以てするも、新に生ずることなく、滅することもなしといふ、自然の原則。エネルギイの不滅と共に、科學の二大原則なり。

物質の保存【句】〔理・化〕前條に同じ。

物質不生不滅の定律【句】〔理・化〕次條に同じ。

物質不滅の原理【句】〔理・化〕次條に同じ。

物質不滅の定律【句】〔理・化〕『英 Law of conservation of matter』物質の不滅なる事を敍したる定律。質量不變の定律。物質不滅則。

物質不滅の法則【句】〔理・化〕前條に同じ。

ぶつ-じつ 佛日【名】**ぶつにち**（佛日）に同じ。

ぶつ-しつ-かい 物質界【名】物質上の現象の範圍。（精神界に對して）

ぶつ-しつ-くわがく 物質科學【名】ぶつりくわがく（物理科學）に同じ。

ぶっしつ-だいしや 物質代謝【名】〔醫〕人類その他の動物が、食物を攝取し、消化し、これを體内に吸收して、營養を取り、その用を終へし者は、分解して體外に排泄し、此の如くにして、新しき物は、古き物に代りて、生活を營むこと。

ぶっしつ-てき 物質的【貌】『英 Material』金錢などの如き有形上の利益を目的とするさま。物的。（精神的に對して）

ぶっしつ-ふめつ-そく 物質不滅則【名】〔理・化〕「物質不滅の定律」に同じ。

ぶっしつ-べうしや 物質描寫【名】〔美〕物の固有の性質を描寫すること。例へば、同じく石の中にも、大理石は大理石らしく、御影石は御影石らしく見ゆるやうに描く類。

ぶっしつ-へんだつ 物質變脫【名】〔理〕『英 Disintegration』放射性物質が、種種の放射線を放射したる後、別種の物質に變化すること。

ぶっしつ-めいし 物質名詞【名】〔語〕『英 Material noun』箇箇に分割して數ふることの不可能なる物を示す名詞。例へば、英語の Water, snow, stone, tea などの類。

ぶつじ-ぶぎやう 佛事奉行【名】鎌倉幕府及び室町幕府の職制の一。追善などの佛事ある時、その事を執り扱ひしもの。

ふつ-じん 佛人【名】佛國の人。佛蘭西人。

ぶっ-しん 佛身【名】〔佛〕によらいしん（如來身）に同じ。

ぶっ-しん 佛心【名】〔佛〕〔一〕衆生（シュジョウ）本具の、大覺の妙體。佛性（ブッショウ）。〔二〕佛の如き慈悲の心。

ぶっ-しん 佛神【名】佛と神と。しんぶつ。大體「年頃、佛神にいみじくつかうまつりつれば」

佛神掛けて【句】佛神に誓を立てて。領城反魂香「佛神かけての女夫（フウフ）ぞや」

佛神水波（ベツモ）【句】次條の略。〔諺語〕

佛神水波（ベツモ）**の隔**（ヘダタ）【句】佛は本地（ホンヂ）、神は垂跡（スイジャク）にして、その關係は、水と波との如くなりといふこと。神佛水波の隔。〔諺語〕

ぶっしん-いん 佛心印【句】〔佛〕佛心の決定（ケツジャウ）・不變なるを、世間の印章に譬へていふ語。これを禪の對象として窮明するは、達磨の禪宗にして、謂はゆる直指人心（ヂキシニンシン）・見性成佛（ケンシャウジャウブツ）、これなり。心印。佛印。

ぶっしんじ-もんと 佛心寺門徒【名】〔佛〕ほふかいは（法海派）に同じ。

ぶっしん-しゆう 佛心宗【名】〔佛〕『經文の言語に依らず、直ちに衆生本具の佛心を覺悟するを旨趣とするよりいふ』ぜんしゆう（禪宗）に同じ。「ん（普門）」を見よ。

ぶっしん-ぜんじ 佛心禪師【名】〔人〕ふぉぶっ-しめる 打締める【動下一他】ぶっちめる（打締める）を見よ。

ぶっ-しや 佛舍【名】ぶつだう（佛堂）に同じ。記「每家作二佛舍一、乃置二佛像及經一」

ぶっ-しや 佛者【名】佛道を信行する者。僧。僧侶。佛家。

ぶっ-しや 佛師屋【名】佛師のみせ。狂言（六地藏）「佛師屋はござらぬか。佛師屋はをりないか。地藏を調へたう御座る」

ぶっ-しやう 佛生【名】〔佛〕釋迦如來の誕生。佛誕生。降誕（ガウタン）。（佛滅に對して）

ぶっ-しやう 佛性【名】〔佛〕成佛すべき靈。ほとけの本性。一切の衆生（シュジョウ）は悉くこれを有すれども、煩惱（ボンナウ）に妨げられてあらはれぬなりと說く。佛心。謠「狗子（クシ）にも佛性あり」榮花「佛性の煩惱（ボンナウ）におほひ隱されつるも」

佛性・眞如の月影【句】〔佛〕佛性と眞如との明朗・透徹なるを、月に譬へていふ語。盛衰記「佛性・眞如の月影に、生死（シャウヂ）の闇も晴れぬらん」

佛性同體【句】〔佛〕佛性を備へたる點よりいへば、一切の衆生（シュジョウ）は、恰も一身同體の如くなり。〔諺語〕謠曲「玉鼓」「佛性同體の人間、この生（シャウ）に、この身を浮べずば」

佛性の水【名】〔佛〕佛性の清きを、水に譬へていふ語。遊遊記「佛性の水、煩惱（ボンナウ）の風に氷れども」

一念の佛性【句】〔佛〕自己に佛性の存することを、一度心に自覺すること。大織冠「一念の佛性、三世十方に通達す」

ぶっ-しやう 佛聖【名】〔一〕佛と菩薩と。〔二〕ぶっしやうれう（佛聖料）の略。〔佛飯〕保元「佛聖に寄せらる」

ぶっ-しやう 佛飯【名】前條〔二〕に同じ。盛衰記「佛飯作二聖清一非也」醒睡笑「小法師が、兒（チゴ）を呼びて、このお佛飯をお大師へ參らせたまへと敎ふる時」

ぶつ-じやう 物情【名】〔一〕物の情態。物の性情。〔二〕世間の狀態。世人の心情。「物情惘惘」

ぶっしやう-こく 佛生國【名】〔地〕いんど（印度）の異稱。佛國。盛衰記「佛法興隆のために、玄奘三藏、流沙・葱嶺を凌ぎて、佛生國へ渡り」

ぶっしやうざん 佛生山【名】〔地〕讃岐國香川郡にある町。高松市の南二里半。琴平道及び阿波街道に當る。索麵（サクメン）を產す。一名、百相（ヒヤク）。

ぶっしやう-じゆ 佛生樹【名】〔佛〕ぼだいじゆ（菩提樹）〔一〕に同じ。

ぶっしやう-しよ 佛掌薯【名】〔植〕つくねいも（佛掌薯）の漢名。

ぶつじやう-せいきうけん 物上請求權【名】〔法〕『獨 Dinglicher anspruch』物權の權利者が、他人のために、物の直接の支配を妨げられたる時、その支配を回復するために、物の引渡又は妨害の除去を請求する權利。

ぶつじやう-だいね 物上代位【名】〔法〕擔保物權の目的物が、法律上又は事實上の變更を受け、對價又は賠償金に變じたる場合に、その變じたる物が、代りて擔保の內容となること。

ぶっ-しやうだう-ゑ 佛成道會【名】〔佛〕ぶつじやうだうゑ（成道會）に同じ。

ぶつじやう-たんぼ 物上擔保【名】〔法〕いぶつたんぼ（對物擔保）に同じ。

ぶっしやう-でん 佛聖田・佛飯田【名】佛聖料（ブッショウレウ）に供したる田。東鑑「二季彼岸佛聖田」

ぶっしやう-にち 佛生日【名】〔佛〕釋迦の生れたりといふ日、卽ち陰曆の四月八日。太平記「四月八日の卯の刻に……。今、本日は、佛生日とて、心あるも、心なきも、潅佛の水に心をすまし」

ぶっしやう-ばち 佛飯鉢【名】佛飯を盛るための鉢。古寫本節用集「佛飯鉢、ブシャウバチ」

ぶっしやう-ぶくろ 佛餉袋 【名】佛餉を入るる袋。膝栗毛「旦那寺の佛餉袋を和尚(ヲシヤウ)さまに詰めたれば」 怪口返答「佛餉袋でも、施餓鬼でも、坊主の事には、錢金は惜しません」

ぶつじやう-ほしよう 物上保證 【名】〔法〕第三者が、保證人として、債權者に對し、自己の所有に係る物件を以て、債務者の債務を保證すること。

ぶつじやうほしよう-にん 物上保證人 【名】〔法〕物上保證をなす人。主たる債務者が、債務を履行せざる場合に、その提供せる物を以て、債權者に債務を辨濟する義務を負ふ人。

ぶっしやう-まい 佛餉米 【名】佛餉に供ふる米。

ぶっしやう-ます 佛餉枡 【名】佛餉の飯米を量るに用ふる枡。

ぶっしやう-れう 佛聖料 【名】『續谷響集』の卷十に「俗語佛供稱二佛餉一。或謂延喜式有二佛聖料目一。蓋以二音近一誤耶。主税式云、金剛寺料、五千六百十六束。燈分幷佛聖料二千八百束」とあり』佛聖(ヒジリ)に供する飯米。佛前に奉る米飯。佛餉。

ぶつじやう-れんがふ-こく 物上連合國 【名】〔法〕**せいがふこく**(政合國)に同じ。

ぶっしやう-ろん 佛性論 【名】〔書〕『梵 Buddhagotra-śāstra の譯語』佛性の義を詳論せるもの。四卷。世親の著。支那陳の眞諦の譯。

ぶっしやう-ゑ 佛生會 【名】〔佛〕**くわんぶつゑ**(灌佛會)に同じ。幣(ぶく)ろ「藤に躑躅(ツヽジ)に折りかけて、軒のかざしとなしおける、ためしある事にや、と里人に問ひはべれど、けふは佛生會の花摘(ハナツミ)にありと答ふる」

ぶっしやく 佛跡 【名】(一)釋迦の足跡。(二)釋迦の遺跡。謡曲「春日龍神」「入唐・渡天の志も、佛跡を拜まんためなれば」

ぶっしやく-ごふ 拂石劫 【名】〔佛〕**ばんじやくごふ**(磐石劫)に同じ。

ぶっしやく-せき 佛跡石 【名】**ぶそくせき**(佛足石)に同じ。

ぶっしやり 佛舍利 【名】**ぶっこつ**(佛骨)に同じ。 蓼花「銀の多寶の塔おはします。それに、佛舍利おはすべし」 著聞「七寶の塔を造りて、佛舍利二粒を安置して」

ぶっしやり-ゑ 佛舍利會 【名】佛舍利を供養する法會。

ぶっしゅ 佛手 【名】佛の手。

ぶっしゅ 佛種 【名】〔佛〕成佛のたね。佛果を生ずる種子、即ち菩薩の所行(ショギヤウ)。ぶっし(佛子)參照。 平家「牟尼の悲法千萬軸、軸に佛種の因をあかし」 著聞「汝、九品(クボン)の教主を見奉らんと思はば、百駄の蓮花を設くべし。佛種、緣より生ずる故なり」

ぶっしゅ-かく 物主格 【名】〔語〕**りやうかく**(領格)に同じ。

ぶっしゅ-かん 拂手柑 【名】〔植〕**ぶしゅかん**(佛手柑)に同じ。

ぶっしゅ-だな 佛守棚 【名】床脇棚の一種。佛壇に用ふ。

ぶっしゅ-まん(英 Bushman) 【名】『翻 Bodhisman(叢林中の人の義)の轉訛』亞弗利加南部の喜望州及びカラハリ(Kalahari)砂漠に住する未開の人種。亞弗利加人種中、小ネグロ(Negro)派に屬し、ホッテントットに類似する所多し。「同じ。

ぶっしゅめん(英 Bushman) 【名】前條に

ふつ-しよ 佛書 【名】佛敎に關西語の書物。

「佛敎上の書物。

ぶっ-しよ 佛書 【名】佛經、その他、すべて佛所【名】(一)〔佛〕**ぶっこ**(佛國)に同じ。 謡曲「鵜飼」「無間(ムゲン)の底に墮罪すべかりしを、一僧一宿の功力(クリキ)に引かれ、急ぎ佛所に送らんと、惡鬼心を和げて」 (二)佛像を安置する室。佛間(ブツ)。平家「佛所の法印に仰せて」 同「御庵室を結んで、一間をは佛所に定め」

ぶつ-じよう 佛乘 【名】〔佛〕『じよう(乘)(三)を見よ』 (一)『三藏法數に「如來以二一乘實相之法一運二諸衆生一到二涅槃彼岸一故名二佛乘一」とあり』一切衆生(シユジヤウ)の成佛すべき道を說ける敎法。この法は、二乘・三乘等を分たず、唯一成佛の法のみありと說くによりて、又、一佛乘とも、一乘ともいふ。華嚴(ケゴン)・法華等に說ける圓敎、即ちこれなり。 鷄鷺合戰「佛乘の妙(ミヤウ)なる道に至るべきものなり」 沙石集「狂言・綺語あだなる戲を緣として、佛乘の妙(ミヤウ)なる道に入れ」 (二)『法華經の譬喩品に「當說二三乘聲聞辟支佛佛乘、乃至此三乘法、皆是聖所二稱嘆一」とあり』**ぼさつじよう**(菩薩乘)に同じ。

ふっ-しよく 拂拭 【名】はらひぬぐふこと。

ぶっ-しよく 物色 【名】(一)物のいろ。風物のさま。景色。 朗詠「物色自堪二傷客意一」 (二)人相書をまはして、人の行くへをさがし求むること。 (三)適當なる人物を選擇すること。

ぶっしよ-ばこ 無性箱 【名】**ぶしやうばこ**(無性箱)を云ふ。〔讃岐の方言〕

ぶっすわる 打坐る 【動四自】**ぶっつわる**(打坐る)を見よ。

ぶっすゑ-もち 打据餅 【名】小兒の、誕生前に立ちあるくを、不吉なりとし、その腰に打ち附けて、これを坐らする餅。

ぶっすゑる 打据ゑる 【動下一他】**ぶっつゑる**(打据ゑる)を見よ。

ぶっ-せ 佛世 【名】**ぶつざいせ**(佛在世)に同じ。 正統記「三寶を敬ひ、正法(ショウホフ)を弘めたまふこと、佛世に異ならず」

ぶっ-せい 物性 【名】〔理〕物の性質。通有性と偏有性とに大別す。

ふっ-せい 沸聲 【名】(一)わきたつ音。沸騰する音。 (二)『戰國策に「屠二四千餘萬之衆一流血成レ川、沸聲如レ雷」とあり』立ちのぼる聲。倒れて叫ぶ聲。

ぶっ-せい 佛睛 【名】佛像のひとみ。

佛睛を點ず【句】『てんせい(點睛)を見よ』開眼(カイゲン)を行ふ。

ぶつ-ぜい 物稅 【名】〔經〕物を納稅の目的とする租稅、即ち通常、收益稅の大部分と財產稅と。

ぶっせい-ろん 物性論 【名】〔理〕『英 Properties of matter』物理學の一科。諸物質が、變質せざる範圍内に有する諸性質を論ずるもの。

ふっ-せき 沸石 【名】〔鑛〕『英 Zeolite. 原語は、煮沸の義にて命名せるもの』長石の分解より生じたる一種の石。無色又は淡色にて、玻璃樣又は眞珠樣の光澤を具へ、常に、火山岩の空隙をみたす。水を含める故に、熱すれば膨脹沸騰し、空氣中にて、自然に水を失ひて、粉末に破壞するもあり。曹達沸石・方沸石・魚眼石・輝沸石・東沸石・濁沸石・斜方沸石等の種類ありて、形狀と性質とに差異あり。

ぶっ-せき 佛跡 【名】**ぶっしやく**(佛跡)に同じ。

ぶっ-せつ 佛說 【名】佛の說きたることば。

「やうせつ(淨刹)に同じ。

ぶっ-せつ 佛刹 (梵 Buddhakṣetra) 【名】〔じ。

ぶっせつ-あみだきやう 佛說阿彌陀經 【名】〔書〕**あみだきやう**(阿彌陀經)に同じ。

ぶっせつ-いんぐわきやう 佛說因果經 【名】〔書〕**いんぐわきやう**(因果經)(二)を見よ。

ぶっせつ-くわんぢやう-ほつぢよくわざい-とくだつ-きやう 佛說灌頂拔除過罪得脫經 【名】〔書〕**やくしきやう**(藥師經)を見よ。

ぶっせつ-くわんふげんぼさつぎやうほふきやう 佛說觀普賢菩薩行法經 【名】〔書〕**くわんふげんぼさつぎやうほふきやう**(觀普賢菩薩行法經)を見よ。

ぶっせつ-じじふにしやうぎやう 佛說四十二章經 【名】〔書〕支那漢の明帝の時、中天竺の傳導者渡來して、譯述せるもの。すべて四十二章あり。漢譯佛敎の最も古きものにて、諸佛經中より拔き出でたる語句を、論語の體裁に倣ひて排列し、各章の始に「佛曰く」の語を冠らせたるも、「子曰く」に擬したるなりといふ。

ぶっせつ-じぞうぼさつほつしんいんえんじふわうきやう 佛說地藏菩薩發心因緣十王經 【名】〔書〕預修(ヨシユ)十王生七經に基き、なほ種種の記事を增加したるもの。預修十王七經と同じく、支那の藏川の撰と傳ふれど、文勢著しく和習を帶び、邦人の撰なること疑ふべからず。死天(シテン)の山・葬頭(シヤウヅ)河・奪衣婆(ダツエバ)等の說話は、皆、この書より出でしものなり。略して、地藏十王經とも、十王經ともいふ。

ぶっせつ-にんわう-はんにやはらみつ-きやう 佛說仁王般若波羅蜜經【名】〔書〕『王は、仁の字の韻に引かれて、ナウと發音す』**にんわうごこくほんにやはらみったきやう**(仁王護國般若波羅蜜多經)を見よ。

ぶっせつ-ぶつみやうきやう 佛說佛名經【名】〔書〕**ぶつみやうきやう**(佛名經)[一][二]を見よ。

ぶっせつ-むりやうじゆきやう 佛說無量壽經【名】〔書〕**だいむりやうじゆきやう**(大無量壽經)に同じ。

ぶっせつ-やくしほんぐわん-きやう 佛說藥師本願經【名】〔書〕**やくしきやう**(藥師經)を見よ。

ふつ-ぜん 艴然【貌】腹立ちて、顏色を變ずるさま。ふつ。佛色(ハツセキ)。

ぶつ-ぜん 佛前【名】[一]ほとけの前。位牌の前。[二]〔佛〕後佛(彌勒)の出世以前の代。(佛後に對して)

佛前佛後【句】〔佛〕「二佛の中間(チユウカン)」に同じ。太平記「佛前佛後の尊師、大慈大悲の薩埵(サツタ)に値遇し奉らば」

ぶつぜん-さう 佛前草【名】〔植〕**しきみ**(樒)の異稱。

ふっ-そ 弗素【名】〔化〕『英 Fluorine』非金屬元素の一。微綠黃色の氣體にして、鹽素よりやや淡く、又鹽素と同じく、造鹽元素の一なれども、化學性一層强烈にして、殆どすべての化合物を分解し、弗化物を生ず。但し酸素とは化合せず。又、攝氏零下百八十七度に於て、黃色の液體に化し、零下二二三度に降れば、白色の固體となる。これを得るには、弗化カリウムを、無水の液體弗化水素に滲解し、これに傳導性を附して電解すれば、陰極に水素を得ると同時に、陽極にこの元素を得。ふろおる。

ぶっ-そ 佛祖【名】〔佛〕[一]釋迦牟尼佛と各宗の祖師と。**てうぶつをっそ**(超佛越祖)參照。[二]佛教の祖、卽ち釋迦牟尼。

佛祖の涎沫(ヨダレ)【句】佛祖の精神を理解し得ず、單に、その言句に拘泥するのみなるを罵りていふ語。(俚我妹物語「初發心の時は、色色の言句どもを借り、さまざまの事を言ひ傳ふる、これを佛祖の涎ねぶりといふ」

ぶっ-そう 物怱【名】**ぶっさう**(物騷)に同じ。東鑑「件國、又物怱之由」

ぶっそう-づら ぶっそう面【名】[一]**ぶっちやうづら**(佛頂面)に同じ。膝栗毛「ぶっそうづらして、面白うないぞ」[二]醜き顏の女を罵りていふ語。「西國の方言」物類稱呼「醜き女を譏る詞に、西國にて、ぶっそうづらといふ。東國にて、腹立つ顏を佛頂づらといふ」

ぶっ-そく 物則【名】萬物の上に行はるる、天然の法則。

ぶっ-そく 佛足【名】[一]佛の足。[二]佛の「足あと。

ぶっそく-せき 佛足石【名】釋迦牟尼の入滅の際、足跡を印したりといふ石。古來印度の各地に傳へ、支那及び我國に覆寫傳來せる中に、我國にては、大和國藥師寺にあるもの最も有名にして、栂尾(トガノオ)の明惠上人が印度より移したるものといひ、今は國寶の一たり。ぶっしゃくせき。

せんぶくりんさう(千輻輪相)參照。

佛足石の歌【句】大和國藥師寺の佛足石の後に、歌碑(國寶に指定)ありて、それに鐫れる二十一首の歌の內の、佛足石を詠ぜる十七首。萬葉假名にて、歌體は三十一音の短歌に七音の一句を添へたるもの。その中の一首「彌蘇知阿麻利、布多都乃加多知、夜蘇久佐等、會多禮留比止乃、布美志阿止止已呂、麻禮爾母阿留可毛」は、拾遺集に「みそぢ餘り二つの姿そなへたる昔の人の踏める跡ぞこれ」と常の短歌に引き直して、前書に「光明皇后、山階寺(ヤマシナデラ)にある佛跡に書き付けたまひける」とあるによれば、光明皇后の作か、山階寺(興福寺)とあるは、傳聞の誤ならんといふ。

佛足石の碑【句】大和國藥師寺の境內にありて、前條の佛足跡の歌を刻める碑。

ぶっそく-ちやうらい 佛足頂禮【名】〔佛〕佛の足にぬかづきて、頂禮すること。佛教に於ける、最も鄭重なる敬禮法なり。

ぶっそ-つうさい 佛祖通載【名】〔書〕**ぶっそれきだいつうさい**(佛祖歷代通載)の略。

ぶっそ-とうき 佛祖統記【名】〔書〕釋迦如來以後、撰者の時代までの佛祖傳授の跡を記述せるもの。支那宋の四明福泉沙門志磐の撰。五十四卷。佛祖通載と共に、佛典屈指の史籍なれど、撰者の屬せし天台宗に全力を濺ぎ、他宗を簡略にせる嫌あり。

ぶっ-そらい 物徂徠【名】〔人〕**をぎふそらい**(荻生徂徠)に同じ。

ぶっそ-れきだい-つうさい 佛祖歷代通載【名】〔書〕佛教の編年史。三十六卷。支那元の念常の編。佛祖統記と共に、佛典屈指の史籍たり。略して佛祖通載ともいふ。

ぶっ-そろへる 打揃へる【動下一他】『ぶっ(打)は接頭語』**そろふ**(揃ふ)を强めていふ語。和合人「愛嬌の顏をぶっ揃へ」

ぶつだ 佛陀【名】〔佛〕次條に同じ。講曲(東北)「神明·佛陀の冠感(ミヤウカン)に至る」

ぶっだ 佛陀(梵 Buddha)【名】〔佛〕『智者又は覺者と譯す』ほとけ。佛(ブツ)。

ぶったい 物體【名】[一]物質より成りたる形體。[二]〔理〕『英 Body』物質の若干量の集合して、一箇體をなせるもの。或質量を有し、慣性を有するを、その特性とす。例へば、小刀も鑓も共に物體にして、小刀も鑓も鋼なりといふが如く、その外形を考へず、單にいかなる性質のものなるかを考ふる場合のものは物質と名づく。

ぶっ-たい 佛體【名】佛のすがた。佛身。講曲(殺生石「草木國土悉皆成佛と聞く時は、もとより佛體具足せり」

佛體-色性(シキシヤウ)【句】〔佛〕密教の法にて、率都婆(ソトバ)が、大日如來の三摩耶形(サンマヤギヤウ)にして、從ひて四大(シダイ)所成の法なること。講曲(率都婆小町「忝くも、佛體色性の率都婆にては無きか」

佛體眞如(シンニヨ)【句】〔佛〕そのままの形にて成佛し、眞如と融合すること。法性(ホツシヤウ)眞如。講曲(殺生石「汝、元來殺生石、問ふ、石靈……、自今以後、汝を成佛せしめ、佛體眞如の善心となさん」

ぶっ-たう 沸湯【名】**にえゆ**(煮湯)に同じ。太平記「火印を結びたまひける間、氷水、忽ちに解けて、沸湯のごとくなり」

ぶつ-だう 佛道【名】〔佛〕[一]佛の說きたる道。成佛の道。佛教。徒然「佛道を勤むる心もまめやかならん」[二]『法華經序品に「恆沙菩薩、種種因緣、而求二佛道一」、同書の方便品に「是諸世尊、皆說二一乘法一、化二無量衆生一、令レ入二於佛道一」とあり』成佛(ジヨウブツ)の地位。菩提(ボダイ)。[三]『大乘義章の卷十八に「地論言、道者是因、修二行此道一能到二聖處一、名爲二聖道一」とあり』佛の地位に到達するための萬行(マンギヤウ)。因行(インギヤウ)。

ぶつ-たう 佛堂【名】佛像を安置する堂、佛舍。

ぶっだがや 佛陀伽耶(英 Buddhagaya)【名】〔地〕印度に在る地。伽耶(ガヤ)市の南、尼連禪(ネレンゼン)河の西岸に位す。釋尊の成道せし所。古來、大覺寺あり。

ぶったぎる ぶった切る【動四他】ぶったたくやうにして切る。ぶっきる。〔俚語〕

ぶったくり 打手繰【名】[一]ぶったくること。ふんだくり。〔俚語〕譬「遣らずぶったくり」[二]〔建〕延(エン)にて、卽ち直線に沿ひて測りたる長さ。「ぶったくり六尺」

ぶったくる 打手繰る【動四他】[一]他人より、金錢を無理に取り上ぐ。ふんだくる。〔俚語〕[二]物を賣りて、法外の代金を受け取る。ふんだくる。〔俚語〕

ぶったたく 打叩く【動四他】うちたたく(打叩く)の訛。

ぶったふ 佛塔【名】佛寺の塔。寺塔。

ぶったふす 打倒す【動四他】『ぶっ(打)は接頭語』**うちたふす**(打倒す)の訛。

ぶったふれる 打倒れる【動下一自】『ぶっ(打)は接頭語』**うちたふる**(打倒る)の訛。

ぶったまげる 打魂消る【動下一自】『ぶっ(打)は接頭語』**たまげる**(魂消る)を、强めていふ語。

ぶったん 拂旦【名】**ふっけう**(拂曉)に同じ。

ぶったん 佛壇【名】佛像を安置して、禮拜供養を行ふ壇。寺院內の須彌(シユミ)壇もこの一種なれど、通常は、在家にて使用するものをいふ。

ぶつ-たんじやう 佛誕生【名】ぶっしやう（佛生）に同じ。

ぶつたんじやう-ゑ 佛誕生會【名】くわんぶつゑ（灌佛會）に同じ。

ぶつだん-どこ 佛壇床【名】一尺ばかりの高さになしたる床。

ぶっ-ち 佛智【名】〔佛〕『梵 Amṛtāra-bhi-myukta-buddha（阿耨多羅三藐三菩提）の譯語』佛の圓滿なる智慧。分ちて、根本智・後得智の二智とし、或は大圓鏡智・平等性（ビャウドウ）智・妙觀察智・成所作（ジャウサ）智の四智とし、又、四智に、法界體性智を加へて、五智とす。佛慧（ヰッ）。

ぶっ-ち 佛地【名】一佛を祀りたる處。寺のある處。醒睡笑「何れの佛地にても」二〔佛〕菩薩の十地の最後の位。第九位の菩薩が、最後に煩惱（ボンナウ）・所知の二障の習氣を頓に斷じて、正覺（ガッカウ）を成就せし位。

ぶつ-ぢ 佛地【名】〔佛〕前條二に同じ。

ぶっ-ちがひ 打違【名】うちちがひ（打違）一の訛。

「（打違ふ）二の訛。

ぶっ-ちがふ 打違ふ【動四自】うちちがふ

ぶっ-ちがへる 打違へる【動下一他】うちちがふ（打違ふ）二の訛。

ぶっち-ぜんじ 佛智禪師【名】〔人〕ゑうさい（慧雲）を見よ。

ぶっ-ちめる 打締める・打〆る【動下一他】『ぶっしめる（打締める）の訛。ぶっ（打）は接頭語』一取押へ締めつく。とっちめる。和合人「爰へ、工合を直しに來るだらう。所を、待ぶせをして、ぶっ〆るがいい」二相手を意のままにす。服從せしむ。感心せしめて、譽めさす。人の心を捉ふ。八笑人「おれが後廻は、このたてばかりだから、所作より、たてでぶっちめてくれべえ」膝栗毛「あの巡禮ぶっちめようと思ったら、二階へ行きをった。忌忌（イマ）しい。……今夜、あの娘をぶっちめて見せよう」

ぶっ-ちやう 佛頂【名】〔佛〕ぶっちやうそん（佛頂尊）の略。

ぶっちやう-がほ 佛頂顏【名】ぶっちやうづら（佛頂面）に同じ。

ぶっちやう-づら 佛頂面【名】『佛頂尊の像は、威嚴ありて、長久なるべきさまなるより、譬へていふ。一說に、佛頂國師（近江國永源寺の住僧一絲の號）常に苦き顏をしてをりしに本づくと』人ずきなき顏つき。愛敬なき顏色。無人相（ブサウ）。ふくれつら。ぶっちやうがほ。ぶっそうづら。

ぶつ-ぢよ 祓除【名】神に祈りて、禍穢をはらひのぞくこと。

ぶっ-ちよく 佛勅【名】佛のおほせごと。佛の御言葉。盧舍那（ロシャナ）記「毗舍離（ビセ）城の月蓋（ガイッ）長者といふ者あり。……。釋尊勅していはく、……と敎へたまふ。長者、佛勅を蒙り、家に歸りて」釋迦如來誕生會「いかに槃特、鉢を受けよと佛勅に」

ぶっ-ちらかす 打散かす【動四他】『ぶっ（打）は接頭語』ちらかす（散かす）を强めていふ語。

ぶっちら-がみ 打散髮・振散髮【名】ちらしがみ（散髮）に同じ。

ぶっ-ちらかる 打散かる【動四自】『ぶっ（打）は接頭語』ちらかる（散かる）を强めていふ語。

ぶつつ 富津【名】〔地〕上總國君津郡にある町。要塞地帶にて、海に面し、西方に富津岬斗出す。

ぶつつ【貌】ふつつりに同じ。天の網島「黑髮、ふつつと切って」義經千本櫻「髮、ふつつと切りたまへば」

ぶつつうじ 佛通寺【名】『愚中入唐の時、佛通禪師を師とせしより、その名を慕ひて、寺號とせりといふ』安藝國豐田郡高坂村大字許山（モト）にある臨濟宗の寺。應永四年小早川春平の創立。愚中和尙の開基。國內無比の名刹にして、境內、奇岩怪石重疊し、中央に淸流あり、古來文人墨客の詠多し。

ぶつつうじ-は 佛通寺派【名】〔佛〕ぐちゆうは（愚中派）に同じ。「條に同じ。

ぶつつうじ-もんと 佛通門徒【名】〔佛〕前條に同じ。

ぶつつか【貌】一ふとく逞しきさま。肥えふとり丈夫なるさま。〔古語拾遺〕いと大きやかに、ふつつかに肥えたまへるが」源氏「竹の中に、家鴈といふ鳥の、ふつつかに鳴く」二掃きさま。ぶこつ。無調法。

ぶつつけ。〔不束〕若風俗「素人繪（トヒエ）の證據には、著物（キモノ）左前に、目鼻せはしく、帶指（オビ）細く、小指太く、不束なる事のみなり」三德川幕府にて、叱（シカ）・急度叱（キッドシカ）・手鎖（テヂウ）・過料等に處すべき宣告文の末尾に書する罪名に冠らせて用ひし語。不埒。〔不束〕

ぶつつか-もの 不束者【名】ふつつかなる人。才能足らぬ人。なめげなる人。

ぶっ-つかる 打附かる【動四自】ぶつかる（打附かる）に同じ。

ぶっ-つく【動四自】ぶつぶつと不平を鳴らす。天の網島「茶屋へ來て、產所の夜伽（ヨトギ）する事は、つひにない圖とぶつつけば」

ぶっ-つけ 打附【名】うちつけ（打附）に同じ。

ぶっ-つけ 打附【副】すぐ、そのまま。いきなり。八笑人「己（オラ）あ、あの手があれば、芝居へ出て、ぶっつけ二枚目」

ぶっつけ-がき 打附書【名】下書（ガキ）をせず、ただちに、その物に書くこと。和合人「鐵釘（カナヅチ）で、打附書の表札に、手並も知れた主（ヌシ）の和二郎」

ぶっつけ-みせ 打附店【名】『引手茶屋の案內に依らず、直接に通ふ店の義』昔、江戶吉原などの遊廓にて、揚代の二朱なる目印として、格子を細くしたる店。

ぶっ-つける 打附ける【名】【動下一他】『うちつく（打附く）の訛』ぶつける（打附ける）に同じ。

ぶつつ-ざき 富津岬【名】〔地〕上總國君津郡より東京灣に臨める岬。相模國の走水（ハシリミヅ）と、斜に相對し、その間僅かに三里。突端に海堡あり、岬脚に富津町あり。

ぶつつり【貌】一物を斷ち切り又は物の斷え切るる音、又はそのさま。ぶつり。ぶっつり。ふっつり。ふつり。絶狩劍本地「ふっつりとひねり艾（モグサ）の生灸（ナマヤイト）」二あきらむるさま。ふつ。ふっつり。ふつり。斷然。「ふっつりと思ひ切る」

ぶつつり【貌】一前條一に同じ。

ぶつつり【貌】二前條に同じ。三口の中にて、少しく呟くさま。ぶつり。浮世風呂「ぞんざい者でございますのに、ついついしかふつつりともおっしゃりません」

ぶっ-つわる 打坐る【動四自】『ぶっすわる（打坐る）の訛。ぶっ（打）は接頭語』すわる（坐る）を强めていふ語。八笑人「引立（ヒキタ）つも、打坐るも、入るものか」和合人「逃げ出す事も出來ねえから、みんな、物も言はねえで、ぶっ居（ヲ）って見てゐると」

ぶっ-つゐる 打据ゑる【動下二他】うちすう（打据う）の訛。浮世風呂「女房で候ふ、と打据ゑて置かれて」

ぶっ-てい 佛慧【名】〔佛〕ぶつゑ（佛慧）を見よ。

ぶっ-てい 拂底【名】『容器の底を拂ひても、全く物の無き義』物を拂ひ出して、殘の無くなること。底をあらはす程に乏しきこと。たねぎれ。しなぎれ。ねばらひ。

ぶっ-てき 佛敵【名】佛法の敵。法敵。平家「この重衡（シゲヒラ）の卿は、……佛敵・法敵の逆臣なれば」謠曲（善界）「佛敵・法敵となれる悲しさよ」

ぶっ-てき 物的【貌】ぶっしつてき（物質的）に同じ。

ぶってき-がふぐう-こく 物的合同國【名】〔法〕せいがふこく（政合國）に同じ。

ぶってき-じいう 物的自由【名】〔哲〕『英 Physical freedom』身體上又は物質的に自由なること。

ぶってきしんよう 物的信用【名】〔商〕物件の價値に對してのみ拂ふ信用。(人的信用に對して)

ぶつでし 佛弟子【名】佛の弟子。釋迦如來の弟子。佛門に入りたる人。太平記「佛弟子と外道(ゲダウ)とを召し寄せ」

ぶってつ 佛哲【名】〔人〕林邑國の僧。婆羅門僧正と共に我國に渡來して、林邑樂を傳へたり。

ふってん 沸點【名】〔理〕**ふってうてん**(沸騰點)に同じ。

ぶってん 佛典【名】佛教の典籍。佛書。

ぶってん 佛天【名】〔佛〕一『世人の、天に對するがごとく尊崇する義』ほとけ。佛(フツ)。源氏「ぶってんの告げあるによりて奏しはべるなり」平家「尤も佛天を崇むべし」二佛と天神と。

ぶつでん 佛殿【名】佛像を安置せる殿堂。禪宗にては、本堂又は金堂(コンダウ)とは云はず、この稱を用ふ。

ふっと【副】一物を斷ち切る音、又物の斷え切るる音。ふつつ。ふつつり。保元「左の膝を、片手切に、ふっと射切り」平家「ふっと引き切って」二塞ぎ溜めたる氣息を、急に吹き出すさま。「燈火を、ふっと吹き消す」三**ふと**(不圖)に同じ。天の網島「引くに引かれぬ義理づめに、ふっと言ひかはし」

ぶっと 佛徒【名】**ぶっけうと**(佛教徒)に同

ぶっと 佛土【名】〔佛〕**ぶっこく**(佛國)に同じ。十訓「音樂をば、……佛土・天上にも、これを先とす」「に同じ。

ぶっと 【副】**ぶっと**に同じ。

ぶっとう 沸騰【名】一湯などのわきあがること。たぎること。二〔理〕『英Boiling又Ebullition』熱せられた液體の底部に生じたる蒸氣が、大なる氣泡となりて、沸沸と上騰する現象。底部に生じたる氣泡は、液面に作用する大氣の壓力と液の重量によりて生ずる壓力とを受くるが故に、その兩壓力の和が、氣泡内の蒸氣の最大壓力(蒸氣の溫度に對する)に等しき時は、氣泡は消滅せず、されど、溫度昇りて、兩壓力の和より大なるに至る時は、氣泡は、次第に大さを增して上騰す。**ふっとうてん**(沸騰點)參照。三物事のたかまりおこること。「議論沸騰す」

ぶっとう 佛頭【名】佛のかうべ。佛頭に糞を塗る【句】『典籍便覽に「歐陽公修二五代史一、或作二敝冠一其前一。王荊公曰、佛頭上、豈可レ著レ糞乎」とあり』一善美なる書籍に、拙惡なる序文を附け加ふ。二善美なる物事の上に、汚點を附け加ふ。**ぶっとうふん**(佛頭糞)「法統。參照。

ぶっとう 佛統【名】佛法の傳統。法流。

ぶっとう 佛燈【名】佛前に供ふる燈明。

ふっとうさん 沸騰散【名】〔化〕『英Effervescent powder』重炭酸曹達二グラムと酒石酸一グラム半とを、砂糖水に投じ、その沸騰するに乘じて、飲用するもの。清涼飲料にして、緩下劑の效をも兼ぬ。

ふっとうせき 沸騰石【名】〔鑛〕**ぎょくずる**(玉髓)に同じ。

ふっとうてん 沸騰點【名】〔理〕『英Boiling point』一液體の沸騰すべき溫度。水のを百度と定むれば、酸素(液體の)は零下百八十二度、水銀は三百五十八度等、液體の種類によりて異なり。又、同一の物質にても、液面に作用する氣壓大なれば高まり、小なれば低くなり、又、砂糖水の沸騰點は、單純なる水のよりも高きがごとく、液に他物を溶解する時は高まる。沸點。**ぶんりう**(分溜)參照。二水の沸騰すべき溫度。攝氏寒暖計にては百度、列氏寒暖計にては八十度、華氏寒暖計にては二百十二度。沸點。(氷點に對して)

ぶっとうふん 佛頭糞【名】『「佛頭に糞を塗る」を見よ』一善美なる著書に拙惡なる序文を加ふること。二善美なる物事の上に、汚點を附け加ふること。「ッ」。

ぶっとく 佛德【名】佛の具ふる功德(クドク)。

ぶっとばす 打飛ばす【動四他】一打ちて投げとばす。烈しくなぐる。はりとばす。二**ぶっ**(打)は接頭語』**とばす**、飛ばすを强めていふ語。三**うりとばす**(賣飛ばす)の訛。

ぶっとばる (英Foot ball)【名】戸外遊戲の一。競技場の兩邊に決勝門(ゴール)を立て、競技者は二組に分れ、一箇の革製の大なる球を爭ひ蹴て、敵方の陣の内に入れたる方を勝とす。ふうとばる。

ぶっとばし 打通【名】ぶっとばすこと。

ぶっとばす 打通す【動四他】『ぶっ(打)は接頭語』**とばす**(通す)一七九を强めていふ語。

ぶっとばる 打通る【動四自】『ぶっ(打)は接頭語』**とばる**(通る)一を强めていふ語。

ふっとん 佛頓【接尾】メエトル法の量目の單位の一。キログラムの一千倍。我國の二百六十六貫六百六十七匁弱に當る。きろとん。

ふづとめ 不勤【名】つとめを怠ること。

ふっとり【貌】『ほっそりといふ語形に似せたる語』肥えふとりてあるさま。八笑人「太面(ヒラテ)で、ふっとりとした、色の淺白い女だからの」

ぶっなふ 物納【名】租稅などを、物品にて納むること。(金納に對して)

ぶっなふぜい 物納稅【名】租稅の、米穀・織物等の物品を以て納むるもの。(金納稅に對して)

ぶつにく 佛肉【名】釋迦牟尼の肉體。太平記「大聖世尊(タイシンジソン)滅後二千三百餘年、今、佛肉なほ留まりて、廣く天下に流布する事昔し」

ぶつにち 佛日【名】〔佛〕佛陀の力、よく衆生迷蒙の闇を照すを、日光に譬へていふ語。榮花「佛日、すでに涅槃(ネハン)の山に入りたまひなば」平家「悲しきかな、佛日はやく沒して、生死(シヤウジ)・流轉(ルテン)の徵(マヘ)冥冥たり」

ぶつによ 物如【名】〔哲〕『獨Ding an sich・獨逸の哲學者カント(Kant)の命名』

ほんたい(本體)四に同じ。

ふつぬしのかみ 經津主神【名】『ふつ(經都)はふつのみたま(布都靈)のふつに同じく、ぬしは美稱なるべしといふ』建御雷(タケミカヅチ)神と共に、高皇產靈(タカミムスビ)神の命を奉じて、大已貴(オホナムチ)神をして、國土を讓らしめ、葦原中津國(アシハラノナカツクニ)を平定したまひし神。磐筒男(イハツツノヲ)・磐筒女(イハツツノメ)の二神の子。常陸國の官幣大社香取(カトリ)神宮の祭神。

ふつのみたま 沸熱【名】沸き立ちて、熱くなること。煮えかへること。

ぶつねはん 佛涅槃【名】〔佛〕一**ぶつめつ**(佛滅)に同じ。二次條の略。

ぶつねはんき 佛涅槃忌【名】〔佛〕**ねはんき**(涅槃忌)に同じ。

ぶつのう 物能【名】〔經〕物に固有して、人の利用し得べき性質。

ふつのおほかみ 普都大神【名】**ふつぬしのかみ**(經津主神)に同じ。

ふつのみたま 布都靈・布都御魂・韴靈【名】『ふつ(布都)は、物をふつりと斷ち切る義にて、その鋭さを稱へたる語』建御雷(タケミカヅチ)神の、この國土を平定するに使用したまひし太刀。大和國の石上(イソノカミ)神宮の祭神。經津主(フツヌシ)神は、實はこの太刀の威力を崇めて、神として、齋ひ奉れるなるべしともいふ。〔古語〕「韴靈、此云二赴屠能瀰哆磨一」

ふつのみたまのおほかみ 布都御魂神【名】**いそのかみじんぐう**(石上神宮)に同じ。

ぶつばち 佛罰佛罸【名】佛の降しあつる罰。佛の冥罰。

ぶっぱなす 打放す【動四他】**ぶちはなす**(打放す)の訛。

ふつはふ 佛法【名】佛蘭西國の法律。

ぶっぱん 佛飯【名】佛に供ふる飯。佛餉。

ぶっぱらふ 打拂ふ【動四他】『ぶっ(打)は接頭語』**うちはらふ**(打拂ふ)の訛。

ぶっぴん 物品【名】一しなもの。しろもの。二〔法〕不動產以外の有體物。動產。

ぶっぴんうんそう 物品運送【名】運送の目的物が物品なる場合に於ける運送。(旅客運送に對して)

ぶっぴんぎって 物品切手【名】**しゃうひんぎって**(商品切手)に同じ。

ぶっぴん-くわいけい 物品會計【名】會計の一種。物品の出納・保管をなすもの。

ぶっぴんくわいけい-くわんり 物品會計官吏【名】物品會計を掌る官吏。

ぶっぴんくわいけい-ねんど 物品會計年度【名】物品會計のために設けたる會計年度。

ぶっぴん-けいひ 物品經費【名】國家の經費の物品を以て支出するもの。(金錢經費に對して)

ぶっぴん-しょうけん 物品證券【名】[法]『獨 Warenpapier』金錢以外の物品の給付を目的とする證券。

ぶっぴん-ぜい 物品稅【名】[法]『英 Taxes on commodity』物品を課稅の目的として賦課する租稅。

ぶっぴん-はいたつ 物品配達【名】世人の依頼を受けて、土地の遠近輕重などに應じて、相當の賃銀を受け、品物を他に送り届くる營業。

ぶっぴんひきかへ-ばらひ 物品引換拂【名】[商]『英 Cash on delivery』物品と引き換へに、代金を拂ふこと。例へば、荷爲替(にせ)などの場合。

ぶっぴん-ぼうえき 物品貿易【名】物物交換の方法に依る貿易。

ぶっぴん-ほんね 物品本位【名】[商]相場を立つるに、米一石につき、金何圓といふやうに、物品を本位とすること。(貨幣本位に對して)

ぶっぷ【貶】 氣などの斷續して發出するさま。平假名盛衰記「お腹が立つと、總身の力がふっふと湧き出で」

ぶっぷ【名】[植]こぎまつ(蝦松)に同じ。

ぶつ-ぶ 佛部【名】[佛]「金剛界の五部」を見よ。

ぶつ-ぶつ【貶】 ㊀沸騰し、又は燃燒する音の形容。ぶつぶつ。㊁羽擊(はばた)などする時の音の形容。ぱたぱた。沙石集「ふつふつと立つを見れば、鷲の雌なり」㊂ふつりに同じ。宇治「苞苴(つと)の繩を、ふつふつと押切りて」一代女「浮世にふつふつと飽きぬ」

ぶつ-ぶつ【名】 多く粒だちて生じたる物。ぶつ。

ぶつ-ぶつ【貶】 ㊀沸騰する音の形容。ぶつぶつ。㊁頻りにつぶやくさま。つぶつぶつ。ぶつくさ。和合人「ああ、あぶねえと、……、ぶつぶつ小言(こごと)を言ひながら行き過ぎる」㊂物を、短めに、無造作に切り刻むさま。㊃粒だちたるさま。ぷつぷつ。

ぷつ-ぷつ【名】ぶつぶつに同じ。

ぷつ-ぷつ【貶】ぶつぶつ㊀㊃に同じ。

ぶつぶつかうくわん-かうくわん 物物交換【名】[經]『英 Barter』じぶつかうくわん(實物交換)に同じ。

ぶつぶつかうくわん-けいざい 物物交換經濟【名】[經]じぶつけいざい(實物經濟)に同じ。

ぶつぶつ-ぎり ぶつぶつ切【名】魚類などを、五六分ほどの大さに、無造作に切り刻むこと。「文章。佛蘭西文。

ぶつぶん 佛文【名】佛語にて綴りたる經典。てら。續紀「營三修佛廟、清淨爲先」

ぶつ-べう 佛廟【名】佛像を安置せる廟所。

ふつ-べん 黻冕【名】黻(ふつ)と冕(べん)と。共に古代の支那の祭服。

ぶつ-ぽう 佛寶【名】[佛]『世の寶なるより、寶といふ』さんぼう(三寶)㊀を見よ。

ぶつ-ほけん 物保險【名】『獨 Sachversicherung』保險の一。物體に及ぼす經濟的損害の塡補を目的とするものの類。即ち火災保險・海上保險など。(人保險に對して)

ぶつ-ぽふ 佛法【名】佛の說きたる教法。佛道。平家「佛法の衰微、王法の牢籠(ろうろう)」佛法あれば世法(せほふ)あり【句】佛法即ち眞諦(しんたい)と、世法即ち俗諦(ぞくたい)とは、人間の生活の兩面にして、離るべからざるものなり。「諺語」講曲(第六天)「佛法あれば世法あり、煩惱(ぼんのう)あれば菩提(ぼだい)あり、佛あれば衆生あり」

佛法盛(さか)れば、魔盛る【句】「佛(ぶつ)盛れば、魔盛る」に同じ。「諺語」室町物語「佛法さかれば魔さかる」

佛法の燈火(ともしび)【句】[佛]ほふざう(法燈)に同じ。榮花「佛法の燈火をかかげ、人をよろこばしめたまひて」

佛法の命(いのち)【句】[佛]ほふみやく(法脈)に同じ。榮花「法(のり)の燈火を掲げ、佛法の命を繼がせたまふに」

ぶっぽふ-ざう 佛法藏【名】[佛]ほふざう(法藏)㊀に同じ。

ぶっぽふ-しゃ 佛法者【名】佛法を學修する人。

ぶっぽふ-すごろく 佛法雙六【名】天台の名目を集めて作りたる雙六。もと初學の僧に覺えさせんために作れるものといひ、插畫は無し。又この雙六を綜雙六に引直したるもの、即ち淨土雙六なりといふ。名目すごろく。

ぶっ-ぽふ-そう 佛法僧【名】㊀[佛]さんぼう(三寶)㊁に同じ。盛衰記「佛法をも弘めず、僧法をも近づけじとありければ、魔王、心解けて、左樣に佛法僧を近づけじと仰せらる」正統記「欽明天皇……十三年壬申十月に、百濟國より佛法僧を渡しけり」㊂[動]鳴禽類に屬する鳥。もと熱帶地方の產なれども、稀には、夏期、我國の深山に來り棲む。形鳩に似て、鵲よりもやや大く、頭は淡黑、羽毛は濃綠色、腹と背とは碧綠相交はり、咽は碧色、翼と尾の端とは黑く、嘴は太く短くして、末端曲り、脚と共に、赤く甚だ美麗なり。鳴く聲「ぶっぽふそう」と聞ゆ。三寶鳥。

(㊂うそふぼっぷ)

ぶつ-ぼんぎやうきやう 佛本行經【名】[書]釋尊一代の行狀を讚仰せる偈文(げぶん)。七卷。印度の賢聖の撰集。支那劉宋の代寶雲の著。單に本行經とも、佛本行讚傳ともいふ。

ぶつ-ぼんぎやうさんでん 佛本行讚傳【名】[書]前條に同じ。

ぶつ-ぼんぎやうじふきやう 佛本行集經【名】[書]釋尊一代の衆生敎化の遺跡を詳記したる本紀。六十卷。支那隋の闍那崛多(じゃなくった)の譯。單に、本行集經ともいふ。

ぶっぽん-しんじやく 佛本神迹【名】[佛]ほんぢすゐじやくせつ(本地垂迹說)を見よ。

ふつま 太馬【名】『太(ふと)馬(ま)の約』肥えふとりたる馬。「古語」萬葉「片思を馬にふつまに負(おほ)せもてこしべにやらば人かだはむかも」

ぶつ-ま 佛間【名】佛像・位牌などを安置せる室。佛所。

ぶつ-ま 佛魔【名】[佛]佛陀と惡魔と。

ぶつ-みやう 佛名【名】㊀佛の名號。㊁[佛]ぶつみやうゑ(佛名會)の略。

ぶつみやう-きやう 佛名經【名】[書]㊀支那元魏の三藏菩提流支(ぼだいるし)の譯したる佛經。具さには、佛說佛名經といふ。十二卷。佛、祇園精舍にて、大衆に對して、これを受持讀誦する者は、現當二世の利福を得べしとて、三世に亙り、一萬一千九十三の佛・菩薩の名號を說けるもの。㊁前項の十二卷本を基礎として、これに諸經の名目、辟支(びゃくし)佛・阿羅漢の名目を加へ、次ぎに懺悔文を加へ、最後に大乘蓮華寶達問答報應經門經を以て結べるもの。具さには、佛說佛名經といふ。三十卷。最後に加へたる沙門經は、支那唐代に盛んに流布し、我國平安朝時代にも、大いに行はれたれり。㊂過去莊嚴劫千佛名經・現在賢劫千佛名經・未來星宿劫千佛名經の三者を合はせたる佛經。三卷。一名、三劫三千諸佛名經・三千佛名經・集諸佛大功德山。譯者不明。三世諸佛の名號を聞きて、歡喜信樂し、持誦讀誦し、書寫し、供養せば、未來の成佛疑なき旨を說けるが故に、淨土敎の信仰に調和せるためか、佛名會に讀誦したり。㊃我國、玄鑑內供(ないぐ)以前に、佛名會の時、讀誦せし佛經。十六卷。一萬三千餘の佛名を列記したりといふ。榮花「宮の御佛名にも、例の佛名經など誦(ず)する聲もをかしきに」

ぶつみやうさん 佛名懺【名】[佛]次條に同じ。

ぶつみやうさんげ 佛名懺悔【名】[佛]次條に同じ。太平記「大極殿にして、佛名懺悔の法を修すべし」「次條に同じ。

ぶつみやうさんらい 佛名懺禮【名】[佛]

ぶつみやう-ゑ 佛名會【名】〔佛〕古、禁中にて、初は十二月十五日より十七日まで、後には十九日より二十一日までの三夜の間（時に、ただ一夜）罪障懺悔のために、誦經と稱名とを修せし法會。佛菩薩の名號を唱ふれば、罪障消滅・菩提證得の利益あるべしとの說に本づけるものにて、奈良朝時代より行はれ、後には、諸國に及びて盛行し、今も諸宗の寺院にて行はる。朝廷のは、初は清涼殿、後、弘徽殿・常寧殿・綾綺殿等にて修せられ、又、經卷は、初、佛名經㊃を用ひたれど、延喜の頃より、同㊁を用ふることとなれり。修行前、內藏（クラ）寮より名僧を囑請し、導師・樋導師・次第僧等を定めたり。佛名懺悔。佛名懺「じ」。佛名。

ふつ-めい 拂明【名】ふつげう（拂曉）に同じ。

ぶつ-めい 物名【名】物の名。名。

ぶつ-めつ 佛滅【名】㊀佛の死ぬること。釋迦如來の入滅。佛涅槃（ネハン）。（佛生（シヤウ）に對して）㊁次條の略。

ぶつめつ-にち 佛滅日【名】陰陽家にて、萬事に凶なりといふ大惡日。卽ち陰曆にて、正月・七月の四日・十日・十六日・二十二日・二十八日、二月・八月の三日・九日・十五日・二十一日・二十七日、三月・九月の二日・八日・十四日・二十日・二十六日、四月・十月の一日・七日・十三日・十九日・二十五日、五月・十一月の六日・十二日・十八日・二十四日、六月・十二月の五日・十一日・十七日・二十三日・二十九日。六曜日の一。ぶつめつ。

ぶつ-めん 佛面【名】佛像の面部。平家「證誠（シヤウ）大菩薩は、……、頂上の佛面を現じて、衆生の諸願を充（ミ）てたまへり」

ぶつめん-ちく 佛面竹【名】〔植〕**ほていちく**（布袋竹）に同じ。

ぶつ-も 佛母【名】㊀〔佛〕『大方便佛報恩經の卷六に「佛以法爲師、佛從法生。法是佛母」とあり』**ほふ（法）**㊁に同じ。㊁〔佛〕『大品般若經の卷十六に「般若波羅蜜、是諸佛母。……何以故。是般若波羅蜜出生諸佛」とあり』**はんにやはらみつ**（般若波羅蜜）に同じ。㊂〔佛〕**ぶつもそん**（佛母尊）に同じ。㊃〔人〕『佛陀の生母の義』**まやぶにん**（摩耶夫人）の異稱。

ぶつも-きやう 佛母經【名】〔書〕**ぶつもだいくじやくみやうわうきやう**（佛母大孔雀明王經）の略。

ぶつも-きやう 物茂卿【名】〔人〕『**ぶつそらい**（物徂徠）を見よ』**をぎふそらい**（荻生徂徠）に同じ。

ぶつも-しん 佛母身【名】〔佛〕次條に同じ。

ぶつも-そん 佛母尊【名】〔佛〕㊀諸佛如來の隨類の形を生ずる能生の母の德を主る尊體。佛眼佛母・准提（ジユン）佛母・孔雀佛母などあり。㊁**ぶつげんぶつもそん**（佛眼佛母尊）に同じ。

ぶつも-だいくじやくみやうわう-きやう 佛母大孔雀明王經【名】〔書〕**くじやくきやう**（孔雀經）を見よ。

ぶつ-もつ 佛物【名】佛寺の什物。佛の物。盛衰記「法師は、上下男女勸進の僧なり。さやうの佛物すかし取らんとていふにこそ」沙石集「不當のわざをして、佛物を犯す」

ぶつ-もん 佛門【名】ほとけの教門。佛道。釋門。

ぶつ-もん 物門【名】物茂卿の門人。燃犀錄「歷歷物門の高弟と呼ばるる人にも」

ぶつ-よく 物欲【名】事物に對する欲心。

ぶつゆゐけう-ぎやう 佛遺敎經【名】〔書〕釋迦牟尼佛の最後の垂訓を記したるもの。鳩摩羅什（クモラヂ）の漢譯。一卷。小乘に屬せしむべしとの說もあれど、天親菩薩の釋したる遺敎經論一卷ありては、その說に本づき、大乘部に屬せしむ。本名は佛垂般涅槃略說敎誡經（ブツスイハンネハンリヤクセツケウカイキヤウ）。單に遺敎經とのみもいふ。

ぶつらうき 佛狼機【名】**ふらんき**（佛狼機）に同じ。〔德川時代の初期の語〕

ぶつり【貌】**ぶつり**に同じ。

ぶつ-り 物理【名】㊀物體の理法。物の道理。㊁**ぶつりがく**（物理學）の略。

ぶつ-り 佛理【名】佛法の道理。正統記「正法（シヤウハフ）を以て、天下を治め、佛理に通じて、三寶を崇む」

ぶつり【貌】㊀**ぶつり**に同じ。㊁粒だちたる物の、ただ一つ生じたるさま。

ぶつり【貌】**ぶつり**に同じ。

ふ-つりあひ 不釣合【名】釣合のわるきこと。似合はぬこと。

不釣合は不緣の基【句】「釣合はぬは不緣の基」に同じ。〔諺語〕

ぶつり-がく 物理學【名】『英 Physics』運動・音・熱・光・磁氣・電氣等、物體の變化を研究して、而も、その成分の變化には、論究せざる學問。物理。舊稱、究理學。

ぶつりがくてき-へんくわ 物理學的變化【名】〔理〕『英 Physical change』物質の成分に於ては少しも變ることなく、ただその形態のみの變化すること。物理的變化。（化學的變化に對して）

ぶつりがく-へんくわ 物理學變化【名】〔理〕前條に同じ。

ぶつ-りき 佛力【名】ほとけの通力。佛の威力。道力。太平記「種種の仙術、皆、佛力に推されて、爲し得ざりしかば」

ぶつり-くわうがく 物理光學【名】〔理〕『英 Physical optic』光學の一。光の干渉・廻折・偏（カタ）・燐光・螢光等の性質を研究するもの。

ぶつり-くわがく 物理化學【名】㊀物理學と化學と。㊁『英 Physical chemistry』物理的研究方法を應用する化學。主として、エネルギイと諸物質との關係を論ず。理論化學。

ぶつり-くわん 物理觀【名】〔哲〕『英 Physicism』**しぜんせつ**（自然說）に同じ。

ぶつりしんがくてき-しやうめい 物理神學的證明【名】〔哲〕『英 Physicotheological argument』**もくてきろんてきしやうめい**（目的論的證明）に同じ。

ぶつり-せいがく 物理星學【名】〔天〕『英 Physical astronomy』**てんたいりきがく**（天體力學）に同じ。

ぶつ-りつ 佛律【名】**ぜんりつ**（禪律）㊁に同じ。

ぶつりつ-しゆう 佛立宗【名】〔佛〕**てんだいしゆう**（天台宗）㊁に同じ。

ぶつりてき-へんくわ 物理的變化【名】〔理〕**ぶつりがくてきへんくわ**（物理學的變化）の略。

ぶつりてき-ゆゐしんろん 物理的唯心論【名】〔哲〕『英 Physical idealism』自然界は、それ自身發展しつつある精神にして、その發展の最低の段階は、引力・斥力の關係より起る物質、又その最高の段階は、人間なりとなす哲學說。獨逸の哲學者シェリング（Schelling）の唱へたるもの。

ぶつり-てんもんがく 物理天文學【名】〔天〕**ぶつりせいがく**（物理星學）に同じ。

ぶつりやう 佛領【名】佛蘭西國の領有に屬すること。

ぶつり-ろん 物理論【名】〔哲〕**ぶつりくわん**（物理觀）に同じ。「じき物。

ぶつるゐ 物類【名】物の種類。種類の同

ぶつるゐ 物累【名】事物の煩累。

ぶつるゐ-しやうこ 物類稱呼【名】〔書〕我國の方言を集めて、解釋したるもの。五卷。越谷秀眞の著。安永四年刊行。

ふつろ【名】**こもぶつろ**（菰首）を見よ。

ふつ-ろん 物論【名】**ぶつぎ**（物議）に同じ。

ふつ-わ 佛和【名】佛蘭西と日本と。（主に、言語の上にいふ）

ぶつゐん 佛院【名】てら。寺院。橘南谿西遊記「茅葺の佛院見えて、撞鐘（ガツシ）の音、幽かに聞ゆ」

ふ-づゑ 文杖【名】**ふみばさみ**（文挾）に同じ。〔古語〕建武年中行事「古書奏すれば、畫（ヒ）の御座（ジ）にて御覽ず。辨官もしは藏人、ふづゑにて奏す」

ぶつゑ 佛畫【名】**ぶつぐわ**（佛畫）に同じ。

ぶつゑ 佛會【名】〔佛〕『佛・菩薩の會する處の義』**じやうど**（淨土）に同じ。

ぶつ-ゑ 佛慧【名】〔佛〕『ブッテと發音す』**ぶつち**（佛智）に同じ。淨土和讚「佛慧功德を譽めしめて」

ふで 筆【名】㊀『文手（フミテ）の略傳ならんとも、筆の字の音の轉訛なるべしともいふ』文字又は畫を書くに用ふる具。羊・狸・兎などの毛を、細き竹の管にすげたる

もの。竹の部分を軸又は束(カン)といひ、毛の部分を穂(ホ)といひ、これを作るを結(ユ)ふといひ、穂に墨汁又は顔料を含ませて書く。ふんで。毛筆。㊁書畫を書き、詩文を作ること、又その出來ばえ。筆力。文筆。㊂筆にて書くこと。筆寫。浮世風呂「小十郎・直七、筆を廢してよりこの方」

筆が立つ【句】文筆に堪能なり。文章を作ること達者なり。

筆に任す【句】筆の進むままになす。源氏「筆にまかせて書きみだりたまへるしも、見どころあり」

筆の跡【句】ひっせき(筆跡)に同じ。續古今「何となく落つる涙にまかすればそことも見えぬ筆のあとかな」謠曲「海士」「これこそ御身の母海士人(アマビト)の幽靈よ。この筆の跡を御覽じて、不審を爲さで、弔へや」

筆の文(ヤ)【句】詩歌・文章の詞の修飾。

筆の誤(アヤマリ)【句】書きそこなふこと。諺「弘法にも、筆の誤」

筆の歩(アユ)【句】文句の言ひまはし。「筆を歩ます」參照。五人女「誠を込めし筆のあゆみ、これなれば、傾城とても、憎からぬものぞかし」

筆の海【句】㊀書物(モノ)の、多くつもりてあること。もしほぐさ。「古語」新六「和歌の浦は多くの人の筆の海沖にも邊(ベ)にも藻鹽かくらし」㊁『ひっかい(筆海)』の直譯』すずり(硯)の異稱。續俳家奇人談「今朝知るや筆の海にも春の水」

筆の掟【句】ひっぱふ(筆法)に同じ。源氏「かしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆のおきて濟まぬ心もして」

筆の先【句】ふでさき(筆先)に同じ。

筆の先で飯(メシ)を食ふ【句】「筆先(ブンサキ)で飯を食ふ」に同じ。「俚語」

筆の鞘【句】ふでかさ(筆笠)に同じ。俳諧古選(芳樹)「筆の鞘燒いて待つ夜の蚊遣かな」

筆の尻【句】筆の軸の後端の部分。源氏「筆の尻くはへて思ひめぐらしたまへるさま、あく世なくめでたし」

筆の尻を取る【句】詩歌・文章などを添削して、導き教ふ。源氏「侍從こそとり直すべかめれ。また、筆の尻取る博士ぞなかるべき」

筆の荒(ビサ)【句】筆の進むに任せて書くこと。なぐさみに筆を遣ること。ふでずさび。ふでなぐさみ。月詣集「しどろなる筆のすさびを見るからに心の内のかき亂るかな」

筆の荒(スサ)【句】前條に同じ。著聞「はかなき筆のすさみなれども、繪は殘りてこそ侍らめ」

筆の立處(タチド)【句】筆を下して書くところ。筆を著けて書くこと。蜻蛉「筆のたちども知られねば」

筆の立處(タチド)【句】前條に同じ。平家「二位殿は、涙にくれて、筆の立てども覺えたまはねども」

筆の便(タヨ)【句】手紙にておとづること。五人女「賤しからん育にして、物書く事に疎く、筆のたよりを嘆き」

筆の軸【句】ふでぢく(筆軸)に同じ。

筆の柄(ツカ)【句】ふでつか(筆柄)に同じ。

筆の流(ナガ)【句】筆を運びたる趣。筆の走らせ具合。狹衣「墨つき・筆の流もあやしくなべてならずなまめかしき景色に書きながしたまへる」

筆の運(ハコ)【句】書く時の筆の動かし方。筆の先。ふでづかひ。ふでばこび。運筆。

筆の初【句】ふではじめ(筆初)に同じ。芭蕉「大津繪の筆のはじめは何佛(ナニボト)」

筆の林(ハヤシ)【句】㊀書き出づる詩文の多きを、林の木の多きに譬へていふ語。詩林。文林。歌林。謠曲「雷電」「風月の窓に月を招き、……筆の林も枝しげり」㊁文界。文壇。

筆の物【句】書畫を書きたるもの。筆蹟。若鳳翁「高尾・南禪寺東福寺に限らず、諸山の浮坊主(ウカボウズ)、代々の筆の物を竇り拂ひ」

筆は鬼に持たせよ【句】「墨は餓鬼に磨らせ、筆は鬼に持たせよ」を見よ。

筆は諸藝の上盛(ウエモリ)【句】筆道は、諸藝の中にて最も貴し。「諺語」

筆、花を生ず【句】「筆下(カヒツ)、花を生ずに同じ。

筆を入る【句】語句を加へ、又は削りて、詩歌・文章を改め直す。添削す。訂正す。

筆を歩ます【句】文句を綴る。五人女「文書きて取らせんと、さらさらと筆を歩ませ」

筆を動かす【句】書畫を書く。筆を揮(フル)ふ。一代女「練綿(ネリヌ)のうら形に、いかなる繪師か筆を動かせし、……見るにまばゆくなりて」若鳳翁「件の文をあけそむるより、さりとは笑はれず、行成流に筆を動かせ」

筆を置く【句】書くことを止む。筆をさしおく。八笑人「謂はゆる下手(ヘタ)の長噺、御見物の欠(アク)を恐れ、待たるる內が花曆(ハナゴヨミ)と、毫(フデ)を置くこと五七年」

筆を落す【句】『らくひつ(落筆)の直譯』「筆を下(オ)す」に同じ。

筆を下(オ)す【句】㊀新しき筆を、初めて使用す。㊁「筆を下(オ)す」に同じ。

筆を呵(カ)す【句】『かひつ(呵筆)の直譯』㊀凍れる筆の毛を、息を吹き掛けて溫む。㊁力めて筆を遣る。勢こめて書く。

筆を下(オ)す【句】『かひつ(下筆)の直譯』書く。筆を著く。筆を落す。字治「絹をひろげて、三人並びて筆を下さんとするに」

筆を下(オ)せば章(シャ)を成す【句】『魏志の文帝紀評に「文帝天資文藻、下レ筆成レ章、博聞强識、才藝兼該」とあるに本づく』筆を著けて書けば、自ら文章となる。「諺語」

筆を下(オ)せば篇を成す【句】『左思の贈レ妹詩に「才麗漢班、明朗楚楚、默識若レ記、下レ筆成レ篇」とあるに本づく』前條に同じ。「諺語」

筆を加ふ【句】『かひつ(加筆)の直譯』文章などに、字句を書き足す。書き加ふ。

筆を閣(オ)く【句】『かくひつ(閣筆)の直譯』「筆を置くに同じ。

筆を染む【句】『せんひつ(染筆)の直譯』筆を、墨の汁に浸す。筆に墨を含ます。東關紀行「筆を染めつつ、……、ある家の障子に書きつくる序に」

筆を揃へて【句】多くの者が、同樣に書き立つるさま。「筆を揃へて攻撃す」

筆を絕つ【句】書くことを終ふ。一篇の文章の結末とす。正統記「昔、仲尼は獲麟に筆を絕つとあれば」

筆を著(ツ)く【句】『ちゃくひつ(著筆)の直譯』「筆を下(オ)すに同じ。

筆を盡す【句】筆の運ぶ限りを書く。筆の力を極めて書く。曾我五人兄弟「丹靑、筆を盡しけり」

筆を投ず【句】㊀書くことをやめて、筆を投げ遣る。㊁文事を廢す。

筆を止(ト)む【句】筆勢を柔くす。大鏡「表の方には、樂府(ガフ)を、うるはしう眞(シン)に書き、裏には、御筆をとどめて、草(サウ)にめでたく書きて」

筆を執る【句】『しっぴつ(執筆)の直譯』筆を持ちて、文字又は文章を書き認む。源氏「筆取る道と、碁打つ事とこそ怪しう魂の程見ゆるを」今宮心中「手形は我等筆取ると、煙草盆の硯引き出し、はや書きつける提灯の藍」

筆を投捨つ【句】「筆を投ず」㊁に同じ。源氏「文字(モジ)ずくなに好ましくぞ書きたまへる。……斯うまでは思うたまへずこそありつれ、さらに筆投げ捨つべしや、とねたがりたまふ」

筆を拭ふ【句】文を書き止む。勝亥「不用の長談議、言はぬは言ふにまさらんをと、この論、ここに筆を拭ひぬ」

筆を載す【句】『禮記の曲禮篇に「史載レ筆、士載レ言」とあるに本づく』筆を執る。歷史を書く。

筆を走らす【句】『そうひつ(走筆)の直譯』續けて早く書く。勢よく筆を遣る。走書(ハシリガキ)をなす。

筆を馳す【句】前條に同じ。

筆を揮ふ【句】「筆を動かす」を強めていふ語。揮毫す。續俳家奇人談（吾山）「夕立や筆をふるひ雲の色」

筆を舞す【句】事實をまげて巧に書きしるす。筆を弄ぶ。

筆を結ぶ【句】ふ(筆)[一]を見よ。續猿蓑（呂丸）「濱荻に筆を結はせて年の暮」

一(イチ)の筆【句】かきおこし(書起)[三]に同じ。犬子集（貞德）「一の筆に載せん看やつくつくし」

ふでーあと 筆跡【名】筆の跡。ひっせき。勇哉「鳥羽の僧正の筆あとも、ひとへに戯のみにあらず」「同じ。

ふでーあらひ 筆洗【名】ひっせん(筆洗)に同じ。

ふでい 婦弟【名】妻のおとうと。

ふてい 不定【名】さだまらぬこと。不定問題)に同じ。

ふてい 不庭・弗庭【名】『左傳の隱公十一年の條に「以二王命一討二不庭一」、又、書經の周官篇に「惟周王撫二萬邦一、巡二侯甸一、西征二弗庭一、綏二厥兆民一」とあり』古、支那にて、諸侯の、朝廷に來貢せざること、又その諸侯。

ふてい 不逞【名】『逞は快き義』不平を抱き、又は驕慢不檢束なること。

ふてい 不弟・不悌【名】『かうてい(孝悌)を見よ』弟として、兄に事ふる道に外れること。兄に對して、從順ならざること。

ふてい 不貞【名】貞節を守らざること。

ふてい-が 不定芽【名】〔植〕『英 Adventitious buds』莖の頂端及び葉腋以外の部分、又は根或は葉などの如く、不定なる場所に生ずる芽。例へば、柳・榎(エノキ)等の切口のまはり、又は薩摩芋等の根に生ずる芽、子持羊齒(シモツケ)の葉裏に生ずる芽などの類。(定芽に對して)

ふてい-き 不定期【名】時期の一定せざること。期限の定まらざること。

ふてい-きかうろ 不定期航路【名】不定期に航行する航路。(定期航路に對して)

ふてい-きこうさい 不定期公債【名】〔經〕えいえんこうさい(永遠公債)に同じ。(定期公債に對して)

ふてい-きせん 不定期船【名】『英 Tramp or Tramp boat』不定期航路に就航せる船。社外船。(定期船に對して)

ふてい-きふすう 不定級數【名】〔數〕『英 Indeterminate series』初のn項の和を取るに、nは限無く增すとも、その和は、限無く增すことなく、又一定の極限に接近することもなき無限級數。例へば、1−1+1−1+……などの類。

ふてい-けい 不定形【名】[一]形の一定せぬこと、又その形。[二]〔數〕『英 Indeterminate form』代數式の比又は分數に於て、その中に含まるる文字に與ふる値によりて、不定の形となるもの。不定式。

ふてい-けいさん 不定計算【名】〔商〕『英 Account suspense』計算の確定せざる時、後日調査して、確定するまでの間のために、假に不確定のままにて行ふ計算。

ふてい-こん 不定根【名】〔植〕『英 Adventitious roots』古き根又は莖・枝の一部などより發生する根。胚の幼根とは、間接にも直接にも關係なきもの。薩摩薯の食用に供する部分の如きも、甜菜(ビート)より生ずる不定根の先端が異常に肥大せるもの、又、かの插木(サシキ)・取木(トリキ)も、莖より不定根の生ずる理を利用せるに外ならず。

ふてい-さい 不體裁【名】體裁のよからぬこと。

ふてい-し 筆石【名】〔動〕筆石類に屬する動物。

ふてい-しき 不定式【名】〔數〕ふていけい(不定形)[二]に同じ。

ふてい-しよう 不定稱【名】〔語〕『英 Interrogative』代名詞の一。人又は物、方角・場所等の定まらざるものを指していふもの。即ち人代名詞の誰、指示代名詞のどれ・どち・どこなどの類。

ふてい-しるね 筆石類【名】〔動〕脊腸動物の一。水螅水母類中、海蛇類に屬するもの。水螅茎は桿狀の軸に並列し、群體は、全體として、鋸狀の觀を呈す。今は全く絕滅し、ただ化石として出づるのみ。

ふてい-ぜきぶん 不定積分【名】〔數〕『英 Indefinite integral』函數f(x)をその微分係數とせる函數、即ちd/dx f(x)=f'(x)なる如き函數F(X)を、f(X)に對していふ語。(定積分に對して)

ふてい-はうていしき 不定方程式【名】〔數〕『英 Indeterminate equation』係數が整數より成れる方程式を、未知數の整數値にて滿足せしむることを要求する場合の方程式。

ふてい-はふ 不定法【名】〔語〕『英 Infinitive mood. 但し、その性質上、實は法(mood)の一とすべきものには非ざるを、中世以來の因襲によりて、法の名を命ずるのみ』西洋語の動詞の、人稱及び數に關係なく、ただその一般的意義を表はす場合の形態。例へば、英語のhave, 獨逸語のhaben, 佛蘭西語のavoir（何れも「持つ」の義）などの類。

ふてい-ふう 不定風【名】〔地〕『英 Variable wind』季節・方向・强弱等の一定せぬ風。一地方に起る範圍の狹き空氣の運動にて、通常暴風と稱するもの、又それほど烈しからずとも、多少暴風的性質を帶びたるものを含む。(恒風・定期風に對して)

ふてい-もんだい 不定問題【名】〔數〕『英 Indeterminate problem』一定の解答を得ること能はざる問題。幾何學にていへば、「底邊と高さとを知りて、三角形を作れ」の類。ふうもんだい(不能問題)參照。

ふてい-りう 不定流【名】[一]〔地〕方向の一定せぬ海流。[二]河川又は導水管溝の水の、各斷面における同一單位時間内の排流量同一ならざる時のもの。例へば、中途にて、分水する場合の類。(定流に對して)

ふでいれ 筆入【名】筆を入れおく器物。「筆船(フデセン)。

ふでうち 不弔【名】『左傳の襄公十三年の條に「君子以二吳爲一不弔一」とあり』[一]天より惠まれざること。不幸。不天。[二]道德にそむくこと。不仁。

ふでうち 不調【名】ととのはぬこと。まとまらぬこと。思はしからぬこと。

ふでうち 不調【名】ととのはぬこと。宜しきにかなはざること。不都合。源氏「ふでうなる娘まうけはべりて」沙石集「世間不調にて、わづかの所領、ことごとく佶却つかまつりき」

ふでうし 不調子【名】調子の惡きこと。梅暦「二人さし向ひ、酒もさえなき不調子は、どういふ譯か、わからねど」

ふでうほふ 不調法【名】[一]わざの拙きこと。物事の行き屆かぬこと。水鳥記「不調法ながら料理し、日頃の妄念を晴しけるに」[二]あやまち。過失。粗相。粗忽。平假名盛衰記「わが子をわが育つるには、少少の怪我させても、不調法があっても」[三]『飲み馴れずして、拙き意』酒・煙草などを辭退する時、卑下していふ語。

ふでうほふ-もの 不調法者【名】物事に行き屆かぬ者。役に立たぬ人。和合人「まだ、間違ひまして、お目どほりを致しません。不調法者、何とぞ御ひいきを」

ふでうれん 不調練・無調練【名】なれぬこと。ふなれ。不熟練。保元「合戰の道無調練なる上、齡七旬に及候ふ間」

ふでおき 筆置【名】穗の方を高くして、筆を横に載せかけ置く具。ふでかけ。筆架。「親」に同じ。

ふでおや 筆親【名】おほぐろおや(御歯黒親)に同じ。

ふでがき 筆柿【名】〔植〕柿の一品種。實の大さ二寸餘、頭尖りて、筆の頭の如く、濇味なくして、青き時より食ふべし。うしがき。ふでこねり。「じ。

ふでかけ 筆掛【名】ふでおき(筆置)に同じ。

ふでかさ 筆笠【名】毛を保護するために、筆の先の所に冠らする鞘。通常、竹筒を用ふ。筆の鞘。

ふでがしら 筆頭【名】[一]ふでさき(筆先)に同じ。[二]ひっとう(筆頭)に同じ。[三]舊時の相撲(スマフ)會所にて、事務を掌りし役員。現今の取締に相當す。ふでわき(筆脇)參照。

ふでかったん 不貞癇【名】ふてきかったん（不敵癇）に同じ。盛衰記「あれほどのふて癇に會うて、命を捨てん事、無益なり」

ふでがへし 筆返【名】遣棚又は短き袋棚に取り附けて、物の走り落つるを防ぐ彎曲狀の緣木。

ふでかへる 不貞返る【動四自】甚しく不貞る。無闇に不貞る。

ふでがれ 筆涸【名】筆の掠れたること。かすりふで。狹衣「筆がれに書きながされたる文字やう」

ふでき 不敵【名】㊀勢のあたりがたきこと。㊁肝太くして、物に怖れぬこと。大膽。無法。盛衰記「天性不敵の物ぐるひなりければ」と。

ふでき 不出來【名】出來ばえの惡きこと。仕務に適はざること。「と。

ふでき 武敵【名】武家の敵となること、又その者。太平記「先帝奪ひ進らせんために、當所の繪圖なんどまで持ち廻られ候ひける條、武敵の至、重科、蹙（ツミ）なし」同「勳勳武敵の身となりし間」

ふできかったん 不敵癇【名】不敵の甚しき者を罵りていふ語。不貞癇（フテヂガ）。盛衰記「法を亂るをば、惡しき者とて、不敵癇と申したり」

ふできたう 不適當【名】適當せぬこと。物事にあてはまらぬこと。

ふできにん 不適任【名】適任ならざること。

ふできぬ 不手際【名】手ぎはの惡きこと。

ふできはふ 不適法【名】適法ならざること。法令の規定に適合せざること。違法。（適法に對して）

ふできむしや 不敵武者【名】不敵なる武者。暴勇なる武者。太平記「溢者（ヲゴリモノ）の不敵武者に跳り合って、命失うて、何かせん」

ふできもの 不敵者【名】不敵なる者。無法なる人。ふてもの。出世太平記「やあ、無法とは、我を讐（カタキ）する重重の不敵者」

ふてきやつ 不敵奴【名】不敵者を罵りていふ語。八笑人「思へば、思へば、大膽なる不敵奴」

ふできれい 不適齡【名】規定の年齡に適合せざること。（適齡に對して）

ふできれいしや 不適齡者【名】不適齡なる人。（適齡者に對して）

ふでく 筆句【名】〔文〕他人の代作したる俳句。代作者の名の上に「筆」又は「フ」の字を書くを例とす。

ふでくさ 筆草【名】〔植〕㊀こうほふむぎ（弘法麥）に同じ。㊁すぎな（杉菜）に同じ。

ふでくさる 不貞腐【名】『ふてる（不貞る）を見よ』ふてはつること。やけをおこすこと。自暴自棄。

ふでげいさう 筆鷄頭【名】〔植〕のげいさう（野鷄頭）に同じ。

ふでこ 筆子【名】手習御匠の弟子。てならひご。〔德川時代の語〕

ふでごと ふて事【名】『ふてもの（ふて者）を見よ』憤りて、命令に從はぬ振舞。著聞「年頃ただ一人召使ひつるに、ふて事どもして、安からず覺えしかども」

ふでこねり 筆木練【名】〔植〕ふでがき（筆柿）に同じ。

ふでさう 筆草【名】〔植〕ふでりんだう（筆龍膽）に同じ。

ふでさき 筆先【名】㊀筆のさき。筆の先端。ひったん。㊁筆を用ひて、物を書くこと。筆のはたらき。「筆先で、帳面を誤魔化す」

ふでさん 筆算【名】筆先で飯（メシ）を食ふ【句】文筆により、生計を立つ。〔俚語〕

ふでざま 筆樣【名】筆もて書きたるさま。書きざま。書きやう。

ふでし 筆師【名】筆を造ることを業とする人。ふでゆひ。筆匠。

ふでずさび 筆荒【名】「筆の荒（スサビ）」に同じ。隣女集「いとせめて物思ふ時の筆すさびただ書く事は戀しとぞいふ」

ふでずさみ 筆荒【名】前條に同じ。

ふでずすぎ 筆濯【名】ふであらひ（筆洗）に同じ。

ふでずまつ 筆捨松【名】姿態おもしろくて、畫家も描き得ず、筆を投げ捨てし由を言ひ傳ふる松。各地にあり。例へば、武藏國金澤の筆捨山の龍見堂の下にある五勢六岡の筆捨松などの類。

ふですてやま 筆捨山【名】〔地〕㊀伊勢國岩根山の別稱。㊁相模國久良岐郡金澤村にある丘陵。前條參照。

ふですみ 筆墨【名】筆と墨と。ひっぽく。「じ。

ふでだこ 筆胝【名】ふでまめ（筆蝟）に同じ。

ふでたて 筆立【名】㊀筆を竪にさして入れおく筒狀の器。㊁書畫を書きはじむること。初筆。

ふでぢく 筆軸【名】次條に同じ。

ふでづか 筆柄【名】筆の、穗をすげる部分、卽ち手に持つ所。筆の元。ふでぢく。

ふでづか 筆塚【名】用ひふるしたる筆を、その功を思ひて、土中に埋めて、塚に築きたるもの。退筆塚。筆塚（ヒツヂヤ）。

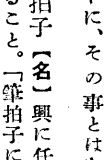
ふでづかひ 筆遣【名】㊀筆を用ひ動かす方法。ふでばこび。運筆。㊁書きたる文字又は畫のさま。ふでつき。筆意。筆勢。筆致。源氏「なげの走り書いたまへる御筆づかひ、言の葉もをかしきさまになまめきたまへる御けはひを」

ふでつき 筆附【名】前條㊁に同じ。

ふでつくぎ 筆津草【名】〔植〕つくし（土筆）に同じ。

ふでづつ 筆筒【名】筆立の筒形をなせるもの。

ふでづつみ 筆包【名】折形の一。下の圖を見よ。


（みつづつみ）

ふでつつばな 筆茅花【名】〔植〕つくし（土筆）に同じ。

ふでつっぱり 不貞張【名】不貞腐（フテクサリ）にて、意地張（イヂバリ）なること。俗曲「妹背緣結髮」「ここなふてつっぱりめと、この樣に申しまする、と打伏せば」

ふでつつむし 筆津蟲【名】こほろぎ（蟋蟀）の異稱。〔古語〕祕藏抄「ふでつむし秋も今はと淺茅生にかたおろしなる聲よわるなり。筆つむしは、蓁をいふなり」

ふでとり 筆取筆執【名】文字を書くこと、又その役。かきやく。執筆。太平記「多年奉行の數に加はりて、末席を汚す家なれば、人は、定めて、筆とりなんど侮りて、あはぬ敵ぞと思ひたまふらん」

ふでなぐさみ 筆慰【名】ふですさび（筆荒）に同じ。若風會「一輩づけの筆慰」

ふでならし 筆馴【名】筆を用ひならすこと。書くことを馴らすこと。

ふでね 不貞寢不貞寢【名】ふてくされになりて、寢てのみ居て、はたらかぬこと。「桃」に同じ。

ふでのき 筆樹【名】〔植〕のぐるみ（野胡桃）

ふでのすさび 筆の壽佐比【名】〔書〕菅（カン）茶山の假名文の隨筆。四卷。

ふでのみ 不貞飲不貞呑【名】ふてくされになりて、酒を飮むこと。

ふでのやま 筆山【名】〔地〕讃岐國にある山。山家「筆の山かきのぼりても見つるかな苔の下なる峰のけしきを」

ふでばうふう 筆防風【名】〔植〕㊀いぶきばうふう（伊吹防風）に同じ。㊁ぼうふう（防風）㊁に同じ。

ふでばこび 筆運【名】「筆の運（ハコビ）」に同じ。

ふでばじめ 筆初【名】初めて筆を執ること。書くことを始むること。蕪村「大和假名いの字を兒（ヂ）の筆はじめ」

ふでばな 筆花【名】〔植〕かきつばた（燕子花）を云ふ。〔關東の方言〕

ふでばや 筆早【名】はやがき（早書）に同じ。若風俗「筆ばやに、その事とはなく書置して」

ふでびやうし 筆拍子【名】興に任せて、文章を書きつづること。「筆拍子に乘る」

ふでふ 符牒【名】＝唐書の坂臣傳に「中官市レ物、都下謂二之宮市一、不レ持二符牒一」とあり』ふちやう（符帳）に同じ。

ふでふ 譜牒【名】事實の順序次第を立てて記錄したる文書。系統的に記されたる文書。系圖などもその一なり。

ふでふ 舞蝶【名】飛び廻る蝶。舞ひ遊ぶ蝶。朗詠「餅林舞蝶、遨翩二翻於一月之花一」

ふでふきん 筆布巾【名】書師の、筆を拭ひて、適度の水分を含ましむるに用ふる、

一尺四方ほどの布片。

ふで-ぶしやう 筆無性 【名】文章を綴ることを物うく感ずること、又その人。(筆忠實(ヂツ)に對して)

ふで-ぶてし 不貞不貞し 【形ク】不貞なるさまなり。憤り逆へるさまなり。

ふでぶと 筆太 【名】文字を、肉太に書くこと、又その書きたる文字。

ふでふ-ねだん ふちやうねだん(符牒直段) 符牒直段・符牒値段 【名】に同じ。

ふで-まき 筆巻 【名】使用後の筆を、巻きて藏めおくに用ふる、小きすだれ。

ふでまへん 普天滿錢 【名】はとめせん(鳩目錢)に同じ。

ふでまはし 不手廻し 【名】次條に同じ。

ふでまはり 不手廻り 【名】■手まはりのわろきこと。準備の行き屆かぬこと。和合人「無人(ブニン)ゆゑ、甚だ不手廻な事」■家政の整はぬこと。不如意。

ふで-まめ 筆眞 【名】筆を持つ指に生ずるまめ。ふでだこ。

ふで-まめ 筆忠實 【名】文章を綴るに根氣よくすばやきこと、又その人。(筆無性に對して)

「法峯(ホフバウ)」に同じ。

ふで-むぎ 筆麥 【名】〔植〕こうぼふむぎ(弘養記)に同じ。

ふでん 普天・溥天 【名】次條を見よ。盛普天の降雨は、一道の名望なり」

ふでん 普天の下(モト)、王土に非ざるは無し 【句】『詩經の小雅北山篇に「普天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」とあるに本づく。普天の下は、普(アマネ)き空の下にて、即ち全天下の義』國中、何れの地も、國王の領土なり。〔諺語〕

ふてん 不天 【名】『左傳に「孤不天、不レ能レ事レ君」とあり』ふてう(不弔)■に同じ。

ふてん 不腆 【名】『腆は厚き意』他人に贈る物品の謙稱。薄志。粗品。「の咯。

ふでん 武傳 【名】ぶけでんそう(武家傳奏)

ふでん-おんぷ 附點音符 【名】〔音〕『英 Dotted note』普通の音符の右側に點を添へたるもの。普通の半に比して、時間を一倍半にすべきことを示す。附點全音符・附點二分音符・附點四分音符・附點八分音符・附點十六分音符の五種あり。きすうおんぷ(奇數音符)及びさいふてんおんぷ(再附點音符)參照。

ふでんき 負電氣 【名】〔理〕『英 Negative electricity』いんでんき(陰電氣)に同じ。(正電氣に對して)

ふでん-きうしふ 附點休止符 【名】〔音〕『英 Dotted rest』普通の休止符の右側に點を添へたるもの。その時間の價値は、附點音符と同樣にして、附點休止符・附點二分休止符・附點四分休止符・附點八分休止符・附點十六分休止符の五種あり。さいふてんきうしふ(再附點休止符)參照。

ふでん(ヂン) 府典事 【名】『典事は、事を典(ツカサド)る義』明治二年、府に置かれし典事。初、正は奏任、その下に、府權典事(ヂンジ)あり、判任なりしが、同四年正・權共に判任となり、同六年共に廢せられたり。

ふでん-しぶんおんぷ 附點四分音符 【名】〔音〕附點音符の一。形は、四分音符に、一つの黑點を附したるもの、即ち♩.にして、四分音符に、その二分の一なる八分音符一箇を加へたるだけ、即ち一拍半の音長を有す。

ふでん-しぶんきうしふ 附點四分休止符 【名】〔音〕附點休止符の一。形は𝄽.にして、その時間の價値は、附點四分音符と同樣なり。

ふでん-じふろくぶんおんぷ 附點十六分音符 【名】〔音〕附點音符の一。形は、十六分音符に、一つの黑點を附したるもの、即ち♪.にして、十六音符に、その二分の一なる三十二分の音符一箇を加へたるだけ、即ち一拍の八分の三の音長を有す。

ふでん-じふろくぶんきうしふ 附點十六分休止符 【名】〔音〕附點休止符の一。形は𝄿.にして、その時間の價値は、附點十六分音符と同樣なり。

ふでん-ぜんおんぷ 附點全音符 【名】〔音〕附點音符の一。形は、全音符に、一つの黑點を附したるもの。即ち𝅝.にして、全音符に、その二分の一なる二分音符一箇を加へたるだけ、即ち六拍の音長を有す。

ふでん-ぜんきうしふ 附點全休止符 【名】〔音〕附點休止符の一。形は𝄻.にして、その時間の價値は、附點全音符と同樣なり。

ふでん-にぶんおんぷ 附點二分音符 【名】〔音〕附點音符の一。形は、二分音符に一つの黑點を附したるもの、即ち𝅗𝅥.にして、二分音符に、その二分の一なる四分音符一箇を加へたるだけ、即ち三拍の音長を有す。

ふでん-にぶんきうしふ 附點二分休止符 【名】〔音〕附點休止符の一。形は𝄼.にして、その時間の價値は、附點二分音符と同樣なり。

ふでん-はちぶんおんぷ 附點八分音符 【名】〔音〕附點音符の一。形は、八分音符に、一つの黑點を附したるもの、即ち♪.にして、八分音符に、その二分の一なる十六分音符一箇を加へたるだけ、即ち一拍の四分の三の音長を有す。

ふでん-はちぶんきうしふ 附點八分休止符 【名】〔音〕附點休止符の一。形は𝄾.にして、その時間の價値は、附點八分音符と同樣なり。

ふでめ 筆目 【名】〔美〕畫面に、顏料を塗りたる筆の痕。

ふでもの ふて者 【名】『ふてはふてる(不貞る)の連用形。一說には、ふてき(不敵)の略なりと』憤りて、命に從はぬ者。ふてきもの。(義經記)あれほどのふて者に寄り合ふべからず」

ふでや 筆屋 【名】筆を賣り、又は造る家、又その人。

ふでゆき 筆行 【名】〔美〕筆のはこび。筆勢。

ふでゆひ 筆結 【名】『筆を結(ユ)ふを見よ』ふでし(筆師)に同じ。七一職人歌合「ふでゆひ、兎(ウ)の毛は、毛のうらおもて見えぬが大事にて候ふ」

ふでりんだう 筆龍膽 【名】〔植〕龍膽科に屬する多年生の草。高さ二寸内外、葉は廣卵形にして尖り、無柄にして、密に對生し、春季、莖頂に一箇又は數箇の花梗を抽きて、碧色の筒狀花を著く。各地の原野に自生し、又、觀賞用として栽培す。はるりんだう。ふでさう。

ふでる 不貞る 【動下一自】『不貞は假借の文字』憤りて、命に從はず。恨みて、いこぢになる。太平記「そぞろに深入りに、引方の無きに、能き敵にや遭ふと、ふてて仕り候ふを」浮世風呂「出て往けといふ。片方殿は見くびってふてるの」

ふでわき 筆脇 【名】舊時の相撲(スマヒ)會所にて、筆頭を輔けて、事務を掌りし役員。現今の副取締に相當す。

ふでわけ 筆別 【名】一件毎に、區別して書きしるすこと。

ふと 太 【名】肥えふとりたる人を嘲りていふ語。ふとっちょ。〔俚語〕

ふと 人 【名】ひと(人)の轉訛。膝栗毛「ふとを馬鹿にした事(ぢ)だあ」

ふと 餡餌・麩麩・伏兎 【名】餅を油揚にしたる類の食品。〔古語〕和名「餡餌、部斗二音、亦作二麩麪一、布止。俗曰二伏兎一、油煎餅也」

ふと 浮圖・浮屠 (梵 Buddha) 【名】■ぶっだ(佛陀)に同じ。■てら。佛寺。四舉塔婆(ソトバ)。塔。

ふと 不圖 【副】『充用せる漢字は、■の意味なる「不レ圖(ハカ)」を音讀したると、疫音偶然にも、同一なるに依りて、假借せるに過ぎず』■かりそめに。たやすく。ひといきに。ちょっと。竹取「龍あらば、ふと射殺して」■思はず知らず。圖(ハカ)らずも。ひょっと。

ふと 太 【名】■ふとく大なる意。「太織(ブトリ)」「太腹(ブトバラ)」■貴き意。〔古語〕「太祝詞(フトノリト)」「太襷(フトスキ)」

ふど 府帑 【名】官府の財貨を納むるくら、又それに納めたる財貨。國帑。「じ。

ふど 土圭兒 【名】〔植〕ほど(土圭兒)に同

ふど 蚰・蟆子 【名】〔動〕ぶゆ(蚋)に同じ。

ふと-いき 太息 【名】溜めて、後に太くつく息。おほいき。といき。

ふと-いと 太絲 【名】■太き絲。多くの絲筋を合はせて、太く縒りたる絲。甲陽軍鑑「絲・太絲六十筋」■通常、十四デニイル又はそれより太き生絲。(細絲に對して)

ふ-どう 埠頭【名】はとば(波戸場)に同じ。

ふ-どう 符頭【名】〔音〕音符の、黒又は白の丸の部分。(符尾に對して)「同。

ふ-どう 不等【名】ひとしからぬこと。不

ふ-どう 不動【名】一動かざること。二身體を、すこしも動かさぬこと。三動轉せざること。外物のために精神の亂るることなきこと。四ふどうこく(不動穀)の略。五〔佛〕むどう(無動)に同じ。六〔佛〕ふどうそん(不動尊)の略。増鏡「この不動は、津の國より、生身(しやうじん)の明王、簑笠うち奉りて、さし歩みておはしたりき」七ふどうぐま(不動隈)の略。八俳優の、不動尊に扮する時に用ふる隈。九歌舞伎十八番の一。現今は、文覺上人の狂言に於ける、那智の瀧の荒行(あらぎやう)の場に出す。

不動安鎭の法【句】〔佛〕不動尊を祈念して、家宅を安鎭する法。盛衰記「將門(まさかど)調伏のために、不動安鎭の法を修(しゅ)す」

不動の金縛(かなしばり)【句】一他の身體を制縛して、自由に動く能はざらしむる呪(じゅ)。二金錢上の關係にて、人の行動を束縛する譬。

不動の倉【句】一ふどうさう(不動倉)に同じ。二物を貯藏して、不時の用に備へ、常には開かざる倉。榮華「大臣(おとど)の不動の御倉(みくら)開きて」

不動の護摩(ごま)【句】〔佛〕不動尊を本尊として、護摩を修(しゅ)すること。著聞「不動の護摩を修(しゅ)せられける時」

不動の呪(じゅ)【句】〔佛〕不動尊を念ずる時の呪文(じゅもん)。宇治「不動の呪を唱へてゐたるに」

不動の陀羅尼(だらに)【句】〔佛〕前條に同じ。源兵「不動の陀羅尼よみ、印つくりて居たらんも」

不動の法【句】〔佛〕ふどうほふ(不動法)に同じ。保元「不動の法を修(しゅ)せられける」

不動・法性(ふしやう)**の理**【句】〔佛〕眞如實相の理。鶴鷺合戰「不動法性の理を悟り」

ふ-どう 不同【名】同じからざること。ふぞろひ。平家「假令(けりやう)遲速の不同ありといふとも、後れ、先立ち、御わかれ、終になくしもや候ふべき」

ふ-どう 浮動【名】浮きて動くこと。漂ひて移り動くこと。

ぶ-どう【名】肥え太りて、形のよからぬこと。ふとっちよ。〔俚語〕

ぶ-どう 舞童【名】舞をなす童子。舞ふわらは。太平記「舞童、廻雪の袖を翻せば」

ふどう-あたま 不動頭【名】不動尊のかうべ。〔俚語〕

ふ-どういん 不同意【名】同意せぬこと。意見を異にすること。不贊成。

ふ-とういつ 不統一【名】統一せぬこと。まちまちなること。

ふとう-えふ 不等葉【名】〔植〕『英Heterophylly』同一株の植物の葉にてありながら、その生ずる部分などによりて、形狀の異なるもの。例へば、河骨(かうほね)の水中に生ずる葉と、水上に生ずる葉と、著しく形を異にし、縱の同一の枝に生ずる葉の內、上面に生ずるものと、下面に生ずるものと、その大さ著しく異なる類。

ふとう-かん 不凍港【名】『英Warm water port』寒中にても、水面の氷らぬ港。

ふとう-がう 不等號【名】〔數〕『英Sign of inequality』二つの數の間に插みて、その相等しからぬ意を示すための符號。9＞5, $a>b$ (aがbより小き時), $a<b$ (bがaより小き時), $a \neq b$ (a・b兩數の何れが大なるか不明なれども、とにかく兩數の間に差ある時)などの＜又は＞と≠との場合には、角の開きたる方に大なる數を記す。(符號に對して)

ふどう-かぶ 浮動株【名】〔商〕うきかぶ(浮株)に同じ。

ふどう-きぢゆうき 埠頭起重機【名】埠頭に設けて、繫留せる船舶に、貨物の積卸をなすに用ふる起重機。

ふどう-ぐ 不動供【名】〔佛〕不動尊の供養法。

ふどう-ぐま 不動隈【名】俳優の隈取の一。不動明王に扮する時に施すもの。青くすると、赤くするとあり。不動。

ふどう-くわいてんとう 不動廻轉燈【名】燈臺(とうだい)の燈質の一。不動燈と廻轉燈との聯成にて、一部は一定の弱き光力を持續し、他部は反復して漸次に光力を增減す。

ふどう-くわんせつ 不動關節【名】〔醫〕『獨Unbeweglicles Knochenverbindung』關節の一種。骨と骨と互に縫合し、若しくは、その間に軟骨又は纖維性物質ありて、接合して、運動する事の極めて少なきもの。(可動關節に對して)

ふどう-げさ 不動袈裟【名】不動尊の像又は陀羅尼を書ける袈裟。修驗者の首よりかけて用ふるもの。宇治「事の外に、色黑き黑ぞめの衣の短きに、不動袈裟といふ袈裟かけて」

ふどう-こう 不動講【名】〔佛〕不動尊の功德を講讃する法會。

ふどう-こうさい 浮動公債【名】〔經〕りうどうこうさい(流動公債)に同じ。

ふどう-こく 不動穀【名】奈良朝時代に、正稅(しやうぜい)の一部を動用せずして、貯へ置き、不時の用に供せし米穀。不動。

ふどう-こくさい 浮動國債【名】〔經〕りうどうこくさい(流動國債)に同じ。

ふどう-さう 不動倉【名】奈良朝時代に、不動穀を貯へおきし倉。不動の倉。(動用倉に對して)

ふどう-さん 不動産【名】〔法〕『獨Unbewegliches Vermögen』原質及び形體を變ずるにあらざれば、動かすべからざる財產。卽ち土地及びその定著物たる家屋などの類。(動產に對して)

ふどうさん-かんぢやう 不動產勘定【名】不動產の先取特權【句】〔法〕先取特權の一。不動產を目的とするもの。

ふどうさん-かんぢやう 不動產勘定【名】簿記にて、不動產を總括して設くる勘定科目。借方には不動產の購入を記入し、貸方には、不動產の賣却を記入するもの

ふどうさん-ぎんかう 不動產銀行【名】〔商〕ふどうさんていたうぎんかう(不動產抵當銀行)に同じ。

ふどうさん-じち 不動產質【名】〔法〕『英Pledge of immovable』債權の擔保として、不動產に質權を設定すること。不動產の用方に從ひ、その本質を害せざる範圍內に於て使用收益をなし、以て債權の利息と相殺せしむ。動產質と異なりて、占有を必要とせざれども、必ず登記するを要す。然らざれば、第三者に對して、その權利を主張するを得ず。(動產質に對して)

ふどうさん-しちけん 不動產質權【名】〔法〕前條に同じ。(動產質權に對して)

ふどうさん-しちけん-しや 不動產質權者【名】〔法〕不動產質權を有する者。(動產質權者に對して)

ふどうさん-じゆんびはふ 不動產準備法【名】〔經〕土地その他の不動產を準備として、兌換券を發行する方法。

ふどうさん-ていたう-ぎんかう 不動產抵當銀行【名】〔商〕不動產を抵當として、貸付をなす銀行。不動產銀行。

ふどうさん-とうき 不動產登記【名】〔法〕不動產上の所有權・地上權・永小作(えいこさく)權・地役權・先取特權・質權・抵當權・賃借權の設定・保存・得喪・移轉・變更・處分の制限又は消滅に關する事項を登記すること。登記。

ふどうさんとうき-はふ 不動產登記法【名】不動產の登記に關する法規。

ふどうさんとうき-ぼ 不動產登記簿【名】登記所に備へ、不動產登記をなす帳簿。土地登記簿と建物登記簿との二種あり。

ふどうさん-ほけん 不動產保險【名】〔商〕不動產を目的としたる損害保險。(動產保險に對して)

ふ-どうし 禪・檀鼻褌【名】ふんどし(褌)に同じ。體源抄「褌。ふどうし、はだばかま」

ふどう-しき 不等式【名】〔數〕『英Inequality』等しからざる二つの式を不等號に

て結び附けたる式。例へば、$a^2+b^2\geqq 2ab$, $a^2\geqq 520$ などの類。

ふどう-しほん 不動資本【名】〔經〕資本の一種。全然移動せざるもの、又は形體・性質等を變ぜざれば移動せざるもの。即ち土地・家屋など、これに屬す。(動資本に對して)

ふどう-しん 不動心【名】〔哲〕『英Apathy』心の、外界の事物に動かざる狀態。

ふどう-すいそう 不透水層【名】〔地〕『英Permeable stratum』水の浸透することなき地層。例へば、粘土層・粘板岩層などの類。(透水層に對して)

ふどう-ぜい 埠頭稅【名】ほとほぜい(波止場稅)に同じ。

ふどう-せんくわう-とう 不動閃光燈【名】燈臺[三]の燈質の一。不動燈と閃光燈との聯成せるもの、即ち斷えず一定の光力を持續する中に、白色又は他色の閃光を交ふるもの。

ふどうそく-うんどう 不等速運動【名】〔理〕『英Accelerated motion』速さの一定せざる運動。自然界に起る運動は、概ねこれに屬す。變速運動(等速運動に對して)

(んそうどふ)

ふどう-そん 不動尊【名】〔佛〕『不動は、梵Acalanātha(阿遮羅囊他)又Acalnoeth(阿舍囉逝吒)の譯語。無動とも譯す』諸明王中の王、五大明王の主尊と稱せられ、密教諸尊中、大日如來と相並んで、最も廣く多數の祭祀を享け、一切の鬼魅・障碍・煩惱(ボンナウ)を降服すといひ、像は怖しげなる容貌をなし、右手に降魔の劍を持ち、左手に縛(バク)の繩を握り、背には火焰を負へるさまなどに造り、なほ脇士(キョウジ)として、制吒迦(セイタカ)・矜羯羅(コンガラ)の二童子を添ふ。不動明王。大聖威怒王。不動。(巢式部日記「不動尊の生きたまへる形をも呼び出であらはしつべう」

ふどう-そん 不動尊【名】〔佛〕不動尊の脇士(キョウジ)たる制吒迦(セイタカ)・矜羯羅(コンガラ)の二童子。著嶋「夢中に、不動尊の使者、形をあらはして見えたまひけり」

ふどう-だう 不動堂【名】不動尊の像を安置せる堂。(増鏡「不動堂・北斗堂」)

ふどう-ち 不動智【名】〔佛〕外物の誘惑を斥くる、明白・正大なる智慧。

ふどう-ぢ 不動地【名】〔佛〕十地(ジフヂ)の第八。菩薩が、上求菩提(ジャウグボダイ)・下化衆生(ゲケシュジャウ)の誓願をなし、貪(トン)・瞋・痴等の惑を斷じて、萬法は無相なりと觀じ、運に任せて、動作を用ひざる位地。

ふどう-とう 不動燈【名】燈臺[三]の燈質の一。最も簡單にして、斷えず一定の燈色と光力とを持續して、一定の角度の間を照すもの。燈色によりて、不動紅光燈・不動白光燈・不動綠光燈など呼ぶ。

ふどう-なは 不動繩【名】米を盛りたる俵に、横に細繩にて締めたる後、竪に掛けて締め結ぶ、太き繩。

ふどうにふ-せい 不透入性【名】〔理〕『英Impenetrability』通有性の一。二つの物體は、同時に同處を占有すること能はざるもの。不可入性。礙竄性。

ふどう-の-おほだき 不動大瀑【名】〔地〕越後國北魚沼(キタウヲヌマ)郡妙高山中にある瀑。高さ七百五十尺、幅七間。

ふどう-の-たき 不動瀑【名】〔地〕[一]岩代國信夫(シノブ)郡庭坂にある瀑。高さ百三十尺、幅四間餘。[二]備中國阿賀郡草間村にある瀑。高さ百五十尺、幅二十五間。[三]土佐國安藝(アキ)郡下山村にある瀑。高さ凡そ二百十尺、幅四間。[四]筑前國怡土(イト)郡飯原村にある瀑。三層に分れ、上層は高さ百尺、幅二間餘、中層は高さ百尺、幅三間餘、下層は三條になりて下り、各高さ三十尺、幅一間餘。別稱、簡瀑。[五]讃岐國香川郡安原上(ヤスバラカミ)村にある瀑。高さ百三十尺、幅十二間。

ふどう-びやうし 不等拍子【名】〔音〕『英Uneven time』奇數の拍(ビヤウ)を有する拍子。(平等(ビヤウドウ)拍子に對して)

ふどう-ぶつ 不動物【名】奈良朝時代に、官裁を經るにあらざれば、動かし用ふべからざることに定めたる穀物。

ふどう-ほふ 不動法【名】〔佛〕眞言密教にて、息災・增益(ゾウヤク)・敬愛・降伏の四種の法に通じて、不動尊を本尊として修する瑜伽(ユガ)の祕法。

ふどう-まゐり 不動參【名】不動尊に參詣すること。(冥途飛脚「不動參に待ちまする」)

ふどう-みやうわう 不動明王【名】〔佛〕ふどうそん(不動尊)に同じ。

ふ-どうめい 不透明【名】透明ならぬこと。すきとほらぬこと。(透明・半透明に對して)

ふどうめい-たい 不透明體【名】〔理〕不透明なる物體。(透明體・半透明體に對して)

ふどうりやく-えんぎ 不動利益緣起【名】〔書〕繪卷物の一。鴨長明の發心集卷六、僧玄棟の三國傳記卷九等に見えたる、不動尊の利益に關する說話を描きたるもの。普通二卷本なれど、種類二三あり。詞書の內容に、小異あり。別稱、泣不動緣起。證空繪詞。

ふどう-れんせん-とう 不動連閃燈【名】燈臺[三]の燈質の一。不動燈と連閃燈との聯成せるもの、即ち一部は、一定の弱き光力を持續し、他は、一定の時間を隔てて、電光に等しき強き光を發する照光器を用ひたるもの。

ふどう-ゐん 不動院【名】[一]常陸國稻敷(イナシキ)郡江戸崎町にある天台宗の寺。醫王山東光寺と稱す。本尊は釋迦牟尼佛。文明二年、土岐治英の創立。幸譽和尙の開山。[二]安藝國安藝(アキ)郡牛田村にある眞言宗御室(オムロ)派の寺。新日山また新山と號す。本尊は不動尊。天平二年行基の開創に係ると傳ふ。[三]甲興開山は空憲。[三]上總國山武(サムブ)郡成東(ナルト)町にある眞言宗の寺。石塚山と號す。本尊は不動尊。俗に成東不動また浪切不動といふ。天平年中、行基の開創に係ると傳ふ。

ふどう-をか 不動岡【名】〔地〕武藏國北埼玉(イタマ)郡にある村。

不動岡の不動【句】前條の不動岡村なる總願寺の境內にある不動尊。關東三不動の第二に數へ、本尊の不動尊及び脇士(キョウジ)制吒迦(セイタカ)童子は、空海の作と稱す。

ふど-おび 太帶【名】白き布を折り重ねて卷けたる帶。うはおび。

ふど-おもて 太面【名】『ほそおもて(細面)といふ語あるより、單に、その反對の意を示す語』ふとりたる顏。(八笑人「太面で、ふっとりとした、色の淺白い女だからの」)

ふど-おり 太織【名】粗く太き絹にて織りたる織物。ふとり。ふときぬ。

ふどおり-じま 太織縞【名】太織の、縞織なるもの。ふとりじま。

ふどおり-つむぎ 太織紬【名】太織に織りたる紬。

ふど-かげ 太陰【名】陰[四]の、太く描ける「もの。

ふどき 風土記【名】國國の山川・風土・傳說などを記したる書物。和銅六年諸國に詔して、これを奉らしめ、これを特に古風土記ともいひ、今傳はれるものは、完存せる出雲國の外、播磨・豐後・常陸などの數箇國のと、他の古書中に、逸文として存せるものとに過ぎず。後世の編成に係るものには、日本總國風土記・參河後風土記など、多數あり。ふうどき。

ふどき-いつぶん 風土記逸文【名】〔書〕今井似閑の萬葉緯に收めたる風土記の逸文を集校せるもの。二卷。伴信友の著。

ふど-ぎぬ 太絹紬【名】ふとおり(太織)に同じ。〔古語〕「紬、フトギヌ」

ふ-どく 不德【名】德の、身に具はりてあらぬこと。否德。

ふ-どく 不得【名】[一]得ざること。得がたきこと。[二]會得(クワイトク)せざること。

ふ-どく 父德【名】父としての德行。

ふ-どく 婦德【名】婦人としての德行。

ふ-どく 武德【名】武道に關する德義。(文德に對して)太平記「天下、只、武德に歸して、公家(クゲ)ありて、何の用にか立つべきとて」

ぶどく-あんみん-き 武德安民記【名】

【書】徳川家康の事歴を、年序的に記せるもの。寫本にて、本文二十五巻、附錄五巻。木村高敦の撰。

ふ-とくい 不得意【名】■得意にあらぬこと。失意。■得手(テ)にあらぬこと。

ふとく-えうりやう 不得要領【名】要領を得てをらぬこと。主旨のわからぬこと。曖昧。「と。不義理。

ふ-とくぎ 不徳義【名】徳義にそむくこと。

ふとく-くわい 武徳會【名】明治二十八年、平安神宮の造營と同時に、武術の奨勵、武徳の涵養、國民の士氣振作を目的とし、總裁に故伏見宮貞愛(サダナル)親王を推戴して設立せる會。其さには、大日本武徳會といひ、本部を京都平安神宮の境内に置き、支部を全國各地方に置き、本部・支部共に演武場を有し、支部下の各郡・市にも支所又は分會を置きて、小演武場を設く。ぶとくきい(武徳祭)・ぶとくでん(武徳殿)參照。

ぶとく-くさ ぶと草【名】〔植〕きやうのひも(京紐)に同じ。

ぶとく-さい 武徳祭【名】武徳會にて、毎年五月四日より五日間、全國の武術家を京都平安神宮の神前に集めて執行する大演武會。

ふ-とくさく 不得策【名】得策ならぬこと。

ふ-とくしん 不得心【名】得心せぬこと。

ふ-とくじん 【名】『前條の轉義か』合點のゆかぬこと。けしからぬこと。御伽草子「鉢かづき」「あの鉢かづきめが近づきまゐらせんと思ふ心のふとくじんさよ、と憎まぬ人はなかりけり」

ぶとく-たいせいき 武徳大成記【名】【書】徳川家康の祖、親氏の參河國松平郷に移住せしより、家康の薨去に至るまでを記せるもの。寫本三十巻。林信篤の撰。

ぶとく-たいへいらく 武徳太平樂【名】わうだいほんらく(皇帝破陣樂)に同じ。

ふとぐつわ 太轡【名】紋所の一。普通の轡の紋と同様にて、綱の太きもの。

ふ-とくてい 不特定【名】特にそれを指定せぬこと。

ふとくてい-しほん 不特定資本【名】【經】費途を特定せず、各種の事業に轉用し得べき資本。即ち貨幣などの類。(特定資本に對して)

ふとくてい-にん 不特定人【名】特に、それと指定せぬ一般の人。(特定人に對して)

ふとくてい-ぶつ 不特定物【名】【法】特に、それと指定せぬ場合の物。種類・品質・數量などを示せるのみにて、具體的に、その物と明示せぬ物。(特定物に對して)

不特定物の債務【句】【法】しゆるゐさいむ(種類債務)に同じ。

ぶとく-でん 武徳殿【名】■平安城の内裏の御殿の一。殷富門内、眞言院の西にありて、騎射・競馬、或は時に、相撲(スマヒ)などを天覽ありし所。古稱、馬埒殿・馬場殿・射馬殿。■『前項の御殿の名稱に因みしもの』明治二十八年、京都市にて、平安奠都千百年祭擧行の際、平安神宮を造營して、その建築を大極殿に擬するに當り、更に武徳會の事業として、その西に設けたる演武場。

ふとくび 太頸【名】太きくびすぢ。太きうなじ。空穗「馬走り寄ると思ふほどに、ふとくびに乘せて、飛びに飛びて」

ぶとく-へんねん-しふせい 武徳編年集成【名】【書】天文十一年に徳川家康の誕生せしより、元和二年の薨去、又その法號贈位などに至る事實を記せるもの。九十三巻。木村高敦の撰。

ぶとく-もん 武徳門【名】平安城の内裏の内郭十二門の一。内裏の西、陰明門の左にありしもの。

ぶとく-らく 武徳樂【名】雅樂の一。壹越(イチコツ)調に屬す。漢の高祖の作る所と傳へ、我國にては、醍醐天皇の時、藤原忠房勅を奉じて改作せり。武徳樂。

ふ-ところ 懐【名】■物の間に圍まれて、詰まりたる所。「山のふところ」■著物と胸との間、又胸部に於ける著物の合はせ目の、外部と内部との間。前者の場合には、特に内懐(ウチフトコロ)ともいふ。■持ち合はせの金錢。懐中。「他人の懐をあてにす」■うちまく。内部。「あの人の懐にはいって見れば」■川の内がは。■親の膝下。著聞「生年七歳より、父母のふところを出でて、山林を家として」

ふところ-あひ 懐合【名】■ふところつがふ(懐都合)に同じ。〔取引所の語〕■〔商〕のみ(呑)■に同じ。〔取引所の語〕

ふところ-あそび 懐遊【名】幼兒が、抱かれたる懐にて遊ぶこと。狹衣「若君の夜の御ふところあそびの若若しきを」

ふところ-あきなひ 懐商【名】〔商〕のみ(呑)■に同じ。〔取引所の語〕

ふところ-がたな 懐刀【名】■懐中に秘めおく、小き守刀。はだがたな。■秘密の計畫に常に參與する近臣又は配下。くろまく。ふところわきざし。

ふところ-がみ 懐紙【名】はながみ。たうがみ。くわいし。源氏「この君のふところ紙にとりまぜ、おしたたみて」

ふところ-かんぢやう 懐勘定【名】懐都合(ツガフ)の計算。胸算用(ムナザン)。

ふところ-ぐあひ 懐工合【名】ふところつがふ(懐都合)に同じ。

ふところ-ご 懐子【名】■懐に抱くほどの幼き子。■懐育(ウダテ)の子。祕藏子。

ふところ-ずみ 懐住【名】親の膝下にありて育つこと。空穗「ひとりばかりは、ふところずみせさせてあらんとて」

ふところ-ぜに 懐錢【名】懐に入れて携ふる小遣錢。

ふところ-そだち 懐育【名】親の膝下のみにて育ちて、世馴れぬこと。諸國物語「ふところそだちとて、戀の道にうとく」

ふところ-つがふ 懐都合【名】所持の金錢の都合。金廻(マハリ)の具合。ふところぐあひ。ふところあひ。

ふところ-て 懐手【名】■寒き時などに、手を懐にさし入れて居ること。ぬきいれそで。袖手(シウシュ)。源氏「ふところでひき直しつつ、いとはしたなきわざかな、とわびたまへり」■自ら働かずに居ること。人まかせにして、關係せぬこと。袖手(シウシュ)

ふところ-でっぱう 懐鐵砲【名】懐中に携ふる小銃。種子ヶ島の小なるもの。短銃。近江源氏先陳實南蠻流の懐鐵砲」

ふところ-てばこ 懐手箱・懐手筥【名】懐の中に入れ得べきやうに造りたる、小形の手筥。明月記「以二紫染物一造二手筥二合一、……云二懐手筥一」

ふところ-どけい 懐時計【名】くわいちゆうどけい(懐中時計)に同じ。

ふところ-ふで 懐筆【名】矢立にさして懐中する、軸の短き筆。

ふところ-べんたう 懐辨當【名】懐中して携ふる辨當。寶蔵「ここら行きかふわび人の、人形櫛に詰め、懐辨當にをさめて」

ふところ-むすめ 懐娘【名】懐育(ウダテ)の娘。懐子なる娘。

ふところ-わきざし 懐脇差【名】■ちひさがたな(小刀)に同じ。■信任して、常に身近く召し使ふ者。ふところがたな。

ふとぐし 太刺【名】太き絲にて刺し縫ふこと、又その刺し縫ひたる物。

ふとざし-たび 太刺足袋【名】太刺にしたる足袋。一代女「太刺足袋に藁草履」

ふとじを 太棹【名】■普通のよりも、棹の太き三味線。義太夫節に用ふ。(細棹に

対して) 二陰塞の長大なるもの。【俚語】

ふとし 太し【形二】一周圍の長さ、大なり。肥えてあり。(細しに對して) 二形、大なり。(細しに對して) 三聲大なり。(細しに對して) 四心、しっかりとしてあり。萬葉「まきばしら太き心はありしかどこの吾が心しづめかねつも」今萬「魂ふとく、思量ありて」五「肝太し」の略。大膽なり。横著なり。づぶとし。世間子息形氣さてもふとい人」六たかし(高し)七に同じ。

ふとし 太く短く【句】不當の利益を貪り、それがために、生命を縮めても悔いぬ形容。(「細く長く」に對して)

ふとし 太いものに呑まる【句】強大なる者に屈服せしめらる。長いものに巻かる。【諺語】

ふとし 太きには呑まれよ、長きには巻かれよ【句】勢の強き者には逆はずして、屈從するがよし。【諺語】

ふとし 禪・嚬鼻禪【名】ふんどし(褌)に同じ。慶長記「鎧脱ぎおき、ふどしをかき」

ふとし-かす 太敷かす【動四他】ふとしく(太敷く)の敬語。【古語】萬葉「太敷かす都を置きて」

ふとし-きたつ 太敷立つ【動下二他】天下をゆたかに知ろしめすとて、柱などの太きを用ひて、嚴しく宮殿を建つ。ふとしりたつ。ふとひろしきたつ。ひろしく。ふとしく。ふとしる。ふとたかしく。しきたつ(敷立つ)參照。【古語】記「太立宮二柱於底磐之根」ソコツイハネニヤバシラフトシキタテ」祝詞「度會(ワタラヒ)の宇治の五十鈴(イスヾ)の川上に、大宮柱太敷き立て、高天(タカ)の原に千木(チギ)高知りて」

ふとし-しく 太敷く【動四他】前條に同じ。【古語】萬葉「しづめてし瑞穂の國を神(カミ)ながら太敷きまして」

ふとし-しけ 太絁【名】太き絁絲(イトヽ)にて織りたる絹布。(細絁に對して)

ふとし-しも 不圖しも【副】『しは强(ハシ)、もは感動の助詞』ふと(不圖)一に同じ。源氏「多くの年經たる日には、ふとしも見

分かざりけり」

ふとしり-たつ 太知り立つ【動下二他】萬葉「楯原(タヽ)のうねびの宮に宮柱ふとしり立てて」

ふとし-しる 太知る【動四他】ふとしく(太敷く)に同じ。【古語】記「底津石根(イハネ)に宮柱ふとしり」

ふとし-たかし-しく 太高敷く【動四他】ふとしく(太敷く)とたかしく(高敷く)とを合はせていふ語。【古語】萬葉「長柄(ナガラ)の宮にまき柱太高敷きて食(ヲ)す國を治めたまへば」

ふとし-だすき 太襷【名】『ふとし(太)は接頭語』たすき(襷)の美稱。【古語】祝詞「忌部(イムベ)の弱肩に太だすき掛けて持ちゆまはり仕へまつれる幣帛(ミテグラ)を」

ふとし-たまぐし 太玉串【名】『ふとし(太)は接頭語』たまぐし(玉串)の美稱。【古語】祝詞「大中臣(オホナカトミ)、太玉串に隱(カク)り侍りて」

ふとだまの-みこと 太玉命【名】高皇産靈(ムスビ)神の子。神代に、天照大神の天石屋(イハヤ)に隱れたまふや、高皇産靈神の命によりて、諸神を率ゐて、太玉串を作り、自らこれを捧げて、招き奉る用とし、天石屋の前にて、幣帛をささげ、又、天孫降臨の時にも從ひ奉りたる神。「同じ。【古語】

ふとし-ちから 大稅【名】しやうぜい(正稅)に對して

ふとし-つ 一【名】ひとつ(一)の轉訛。

ふとし-づくり 太作【名】太く作りたること、又その物。(細作(ホソヅクリ)に對して)

ふとし-つ-ちやう 太っちやう【名】肥え太りてあること、又その人。ふとっちよ。【京の俚語】滑稽風呂「太っちやうは、しみじみいやだ」「【東京の俚語】

ふとし-つ-ちよ 太っちよ【名】前條の訛。

ふとし-つ-ばら 太腹【名】ふとばら(太腹)三の訛。

ふとし-つら 百部【名】【植】ほどつら(百部)の轉訛。

ふとし-どき 不屆【名】一『心が法度に屆かぬ義』法を憚らずして犯すこと。法に外れたる事を爲すこと。二ふゆきとどき(不行屆)に同じ。三徳川時代に、所拂(ハラヒ)・追放等に處する旨の裁判宣告の文の末尾に、用ひし叱責の語。

不屆至極(シゴク)【句】一不屆の至なること。極めて不屆なること。二徳川時代に、死刑に處すべき旨の裁判宣告の文の末尾に、用ひし叱責の語。

ふとどき-もの 不屆者【名】不屆二の人。

ふとどのひ 不調【名】ととのはぬこと。事の都合よく取り運ばぬこと。和合人「首尾ふととのひゆゑ」

ふとに 太煮【名】一太きままにて、又は太く切りて煮ること、又その煮たる物。二海鼠(ナマコ)の兩端を切り去り、臟腑を去りて、蓆積(イモ)などを詰めて煮ること、又その料理。

ふとぬの 太布【名】太く、粗き絲にて織りたる布。一代男「太布の繰色(クリイロ)羽織」

ふとどの 文殿【名】一ふみどの(文殿)の略。【古語】源氏「ふどのあけさせたまひて」二院廳(インチヤウ)の役所の一。もと文書などを納めおきし所なれど、後には、諸國の訴訟を決斷する所となれり。雜訴衆議事。寄人(ヨリウド)などの被官あり。院の文殿。三攝政・關白の家司(ケイ)にも設置せし一局部。別當・開闔などの職員あり。

ふとのりごと 太祝詞・太詔戸事【名】『ふと(太)は接頭語』のりごと(祝詞)の美稱。【古語】記「天兒屋根命(アメノコヤネノミコト)、ふと詔戸言禱(ノト)ぎ白(マヲ)して」萬葉「中臣(ナカ)のふとのりとごといひ祓へあがふ命はたがために汝(ナ)」

ふとばし 太箸【名】新年の雜煮を食ふ時に用ふる箸。殆ど本末なく、太く削る。多くは柳材にて、足利義勝治世の時、元朝の儀式に用ひたる箸の折れしことありて、その年の秋、落馬して、死にしより、弟義政に至り、元日の箸を太く造ることとなり、遂に一般の風俗たるに至りしものといふ。ざふにばし。柿丸「太箸を祝ひそめたる子供かな」

ふとばら 太腹【名】一腹の肥えふとりたる所。腹の中部。宗鑑「まことに馬のふと腹立ちて渡る」保元「馬の太腹、彼方(アナタ)へ、つと射さるれば」二肝ふときこと、又その人。ふとっぱら。

ふとひろしきたつ 太廣敷立つ【動下二他】ふとしきたつ(太敷立つ)に同じ。【古語】延喜記「天照大神をいつき奉る。……下津磐根(イハネ)に大宮柱太廣敷き立ててしづまりましましぬ」「に同じ。【古語】

ふとひろ-しく 太廣敷く【動四他】前條に同じ。【古語】

ふとぶえ 太笛【名】かぐらぶえ(神樂笛)を見よ。東鑑「和琴・太笛等」

ふとふと 【貌】いかにも太きさま。熟語合戰「…と書きて、ふとふとと巻きたる狀を、祇園林に遣しけり」

ふとまい 太米【名】質の惡しき米。

ふとまいん (英 Ptomine)【名】【化】ふはい(腐敗)二を見よ。

ふとまち 太町【名】次條に同じ。【古語】

ふとまに 太占【名】『ふと(太)は接頭語。まには神の命のままに、事を決する義、卽ち占(ウラ)の義』神代に行はれたる占の美稱。庵卜(ヘラ)の類。【古語】記「天つ神の命(ミコト)もちて、太占にト(フ)へて詔(ノ)りたまひつらく」同「ふとまにに占(フ)へて、何れの神の心ぞと求むるに」

ふとまへ 太前【名】ひろまへ(廣前)に同じ。【古語】祝詞「天照大御神の太前に白(マヲ)さく」

ふとみてぐら 太御幣【名】『ふと(太)は接頭語』みてぐら(御幣)の美稱。【古語】記「この種種(クサ〴〵)の物は、ふと玉の命(ミコト)のふと御幣と取り持ちて」

ふとむ 太む【動下一他】太くなす。(細むに對して) まふとむ(目太む)參照。

ふとむぎ 太麥【名】【植】おほむぎ(大麥)に同じ。【古語】和名「太麥、一名、青科麥、和名、布度牟岐、一云、加知加太」

ふーとん 蒲團【名】一『漢字の宋音。馬一龍の詩に「前に取溪蒲・密密編、周遭功巧樣團圓」とあるが如く、蒲(ガ)にて圓(ヱン)く造りたる物の義』蒲(ガ)の葉にて編み、禪家の坐禪に用ふる圓座。性靈。にぐぶとん

(肉蒲團)参照。鴉鷺合戦「文字のみにして、何條不立文字とて、蒲團の上に偏執す」㊁布帛にて、綿又はパンヤなどを包み、扁形にして、坐する時又は寝ぬる時などに敷きて用ふるもの。「布團」㊂やぐ(夜具)に同じ。

ふとんがは 蒲團側・布團側【名】布帛の、蒲團の外側に用ひたるもの。

ふとんだて 蒲團楯・布團楯【名】昔、船軍の場合などに、矢玉を防ぐに用ひし蒲團の楯。

ふとんぢ 蒲團地・布團地【名】蒲團に用ふべき織地。重井筒「蒲團地も持って往(イ)け」

ふとんばり 蒲團張・布團張【名】乗物などに、蒲團を敷きつむることなるべし。俗曲「おつづら馬」「さても見事なおつづら馬よ、……、蒲團ばりして、小姓衆を乗せて」

ふとんぶせ 蒲團伏・布團伏【名】憎しと思ふ人などを押し倒して、その上より、蒲團をあまた覆ひかぶすること。ふとんむし。「に同じ。

ふとんむし 蒲團蒸・布團蒸【名】前條

ふとんや 蒲團屋・布團屋【名】夜著(ヨギ)・蒲團の類を賣る家、又その人。

ふとゝもとゆひ 太元結【名】通常のより太き元結。源氏冷泉院「兜を脱いで、太元結・蠻附・繻子鬢」

ふとゝもの 太物【名】㊀ふとき物。大なる物。㊁穀皮(カヂ)の纖維、又は木綿(モメン)の纖維などを原料としたる太絲にて織りたる、太地の布帛。(輕物(カロモ)に對して) ㊂たんもの(反物)に同じ。

ふとゝものしやう 太物商【名】反物(モノ)を商ふこと、又その人、又その家。

ふとゝものだな 太物店【名】反物(モノ)を商ふ家。ふとものみせ。

ふとゝものみせ 太物店【名】前條に同じ。

ふとゝもゝ 太股【名】股の内部のふくらみたる所。うちもも。

ふとゝもゝ 蒲桃【名】〔植〕桃金孃(テンニン)科に屬する常綠喬木。高さ二三丈。葉は狹披針形にて、深綠色を呈し、短き葉柄あり

て、對生し、春より夏にかけて、大形・白色の花を著け、聚繖花序を綴る。果實は黃色の漿果にして、味甘し。原産地は東印度、我國にては、臺灣・琉球等にて栽培す。「きやか。

ふとゝやか 太やか【貌】ふときさま。おほ

ふとゝらか 太らか【貌】前條に同じ。裝束抄「紋の練絲を、ふとらかに縒りて、二筋並べて」

ふとり 太【名】ふとりてあること、又その程度。肥大。續猿蓑(一桐)「山門に花ものもの木のふとり」

ふとり 太織【名】ふとおり(太織)の略。

ふとり 一人【名】【ひとり(一人)の轉訛。膝栗毛「ふとりで行きます」

ふとりじし 太肉【名】肉附よく、肥え太りてあること。にくぶと。肥滿。曾我五人兄弟「女郎はふとり肉」

ふとりじま 太織縞【名】ふとおりじま(太織縞)の略。膝栗毛「ふとり縞の帶」和合人「太織じまの抱卷(カヒマキ)へ」

ふとりしまり 不取締【名】取締の十分ならざること。

ふとりぜむ 太責む【動下二自】肥え太りて、はちきれるばかりになる。詰るまでに太る。一杯に太る。太りきる。平治「大の男の太り貫めたるが、怒りに怒りて」

ふとりとゝのふ 太整ふ【動四自】缺くる所なきまでに肥え太る。肥ゆ。肥滿す。樂式部日記「桶洗(ヒスヒ)のふとり整ひたる樣ぞ、さとびたりと、人ほほゑむなりし」

ふとる 太る【動四自】太くなる。肥ゆ。

ふとれみい-の-ていり プトレミイの定理【句】〔數〕『英 Ptolemy's theorem』圓に内接する四邊形に於て、兩對角線の包む矩形の面積は、二雙の對邊の包む矩形の面積の和に等しとの定理。

ふとわ 太輪【名】㊀太き輪。幅の廣き輪。(細輪に對して) ㊁紋所の一。太き線にて、輪を描けるもの。(細輪に對して)

ふとわにりふご 太輪立鼓【名】紋所の一。太輪の中に、立鼓を描けるもの。

ふとゐ 太蘭・莞【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。水澤に生じ、莖は一根より叢生し、正圓にして細長く、白き髓あり、高さ五尺餘に達し、葉は鱗狀小形。夏の末、黃綠色の小花、一旦小穗花序をなし、更に、その數箇集まりて、繖形花序をなす。秋、その葉を刈り取りて、席に編む。おほゐ。あをゐ。たうゐ。つくも。まるがま。まるすげ。ゐぐさ。

ふとゐがは 太井川【名】〔地〕下總國にある川。今の東葛飾(ヒガシカツシカ)郡なる新利根川(一名、江戸川)市川・からめき川)の舊稱なりといふ。更科「下總の國と武藏の境にてあるふとゐ川といふが」

ふとゐけた 太井桁【名】紋所の一。形は普通の井桁と同樣にて、線を太く描きたるもの。

ふとを 太緒【名】㊀太き緒。緒の太きもの。(細緒に對して) ㊁樂器の緒の、太きもの。(細緒に對して) 著聞「琵琶……ふとを・ほそを、相かなひて」 ㊂鼻緒の太きもの。(細緒に對して) 一代男「太緒の雪踏、いかつに穿きなして」

ふな 鮒【名】〔動〕『鮒(ニ)魚(ケ)の義』喉鰾類に屬する淡水産の魚。形、鯉に似て小く、たけ短く、幅廣くして、たひらかに、首小く、又、口鬚を缺き、背部は綠褐色、體側はやや黃色を帶び、腹部は白色に微黃を帶ぶ。その變種に、緋鮒及び金魚あり。

ふな 鮒の重波(ナミ)【句】鮒の肉を、小口切にして盛る刺身。

ふな 鮒の汁【句】鮒の肉を實(ミ)としたる「味噌汁。

ふな 鮒の念佛【句】小聲に物言ふ形容。

ふな 鮒の水を飲むやう【句】貧しく暮す形容。

ふな 井戸の鮒【句】世間知らずの者が、社會に出でて、忽ちに失敗する譬。假名手本忠臣藏「總體、貴樣のやうな、内にばかり居る者を、井戸の鮒ぢやといふ譬がある。……。かの鮒めが、わづか三尺か四尺の内を、天にも地にも無いやうに思うて、不斷外(カハ)を見ることが無い。ところに、かの井戸が、へに、釣瓶に附いて上(ア)ります。それを川へ放し遣ると、何が、内にばかりゐる奴ぢやによって、喜んで途を失ひ、橋杭に鼻を打って、即座にぴりぴりぴりぴりと死にます。貴樣も、丁度鮒と同じこと」

ふな 船・舟【名】ふね(船)に同じ。〔古語拾遺〕

ふな 無山毛欅・楡【名】〔植〕殼斗(カク)科に屬する落葉喬木。高さ數丈に達し、葉は欅に似て、鋸齒無く、互生し、春、小形淡綠色の單性の花を葉間に著け、雄花は、穗を成して、葉腋に下垂し、雌花は枝梢に生ず。果實は、堅果にして、刺毛を有する殼斗内にあり、熟すれば、殼斗裂開して、蕎麥のに似たる果實出づ。材は白色にして、器具・薪炭等、用途多く、種子は食用となり、又は油を搾りて、燈用に供すべし。そばのき。そばぐるみ。そばぐり。しろぶな。ほんぶな。やまぶな。

ふなあきうど 船商人【名】船に出入して、乘客に物を賣る商人。新可笑記「津に入っての船商人」

ふなあし 船足・船脚・舟足・舟脚【名】㊀船の進み行く度合。船脚(センキヤク)。船足(フナアシ)。 ㊁きっすゐ(吃水)に同じ。

ふなあしにくわぶつ 船足貨物【名】船の吃水を深からしむるために、底に積み込む貨物。そこにに。

ふなあしにくわぶつきようきふれう 船足貨物供給料【名】船足貨物を積み込む費用。そこにひ。

ふなあせ 船汗【名】にあせ(荷汗)に同じ。

ふなあそび 船遊・舟遊【名】船に乘りて遊ぶこと。空穂「こがねの船ども漕ぎつらねて、ふなあそびして」

ふなあたり 船當・舟當【名】船と船とつきあたること。船の衝突。「と。

ふなあたり 船中・舟中【名】船に醉ふこと。

ふなあまり 船餘・舟餘【名】船の、岸に著かんとする際、勢餘りて、少し退くことなるべしといふ。〔古語〕配「大君を島に

はふらばふなあまりいかへり來(コ)むぞ」

ふなあみ 船網・舟網【名】昔、船軍の時、敵の火器を防ぐために、船の樓上に掛けし網。

ふなあらそひ 船爭・船諍・舟爭・舟諍【名】船を奪ひて爭ふこと。船に就きてする爭。川中島「事のおこりは船爭」

ふなあらため 船改・舟改【名】政府の手にて、船をしらべ改むること。

ふーない 府内【名】一府の區域内。府中。二【地】江戸の内。(接頭語ご(御)を添へていへり)【江戸時代の語】三【地】明治の初年設置の縣の一。ひだ(日田)三參照。

ふない 府内【名】【地】『古、國府(コフ)の在りし地なるよりいふ』おほいた(大分)三の古稱。

ぶーない 部内【名】部のうち。管轄の範圍の内部。部屬の内。領分の内。

ふなーいうれい 船幽靈【名】水死人の靈の、海上にあらはるといふ怪物。

ふないかだ 船筏・舟筏【名】小船を幾艘も並べ、その上に、修羅板(イタ)を敷き亙しなどして、筏のごとくしたるもの。百合若大臣野守鏡「船筏を、二行に列ね」

ふないくさ 船軍・舟軍【名】一兵船の軍兵。ふなて。水軍。起「船師、フナイクサ」二船の上にて行ふ戰爭。水戰。海戰。

ふないくさ-むしやことば 船軍武者詞・舟軍武者詞【名】前條二の際に、人心を鼓舞する目的にて、物の名を潔くし、言葉を壯にしていふ言葉。幕を張りめぐらすを「走らす」敵が海中に綱を渡すを「引く」といふ類。

ふないーしやう 府内城【名】豐後國大分(オホイタ)郡大分町にありし城。もと大友氏に屬せしが、文祿二年、豐臣氏、早川長敏に賜ひ、後、早川氏亡びて慶長十二年、竹中重隆封ぜられ、重次の世に除封せられ、日根野吉明これに代りたれど、明曆二年、嗣なくして、また除封せられ、萬治元年、大給(オホギフ)忠昭封ぜられ、子孫相傳へて、明治維新に及べり。

ふないた 船板・舟板【名】一和船にて、洋船の早板に相當する板。あげいた。二船に使用したる材木。次條參照。(主に和船のにいふ)

ふないたーべい 船板塀・舟板塀【名】船板二にて造りたる塀。水に洗はれて、木理現れ、又は蟲喰の穴などありて、雅趣あり。船板塀に見越(ミエ)の松【句】妾宅の構などの形容にいふ語。

ふないーいり 船入・舟入【名】船の、岸に近く入り込みて泊ること、又その所。一日玉鉾「名物の淀鯉・水車あり、川岸の舟入眺めつづけて」

ふないり 船入【名】【地】さびえ(左比江)を『名物の淀鯉・水車あり、川岸の舟入眺めつづけて」見よ。

ふなう 鮒卵【名】大阪の網島にありて、德川時代より有名なる料理店。膝栗毛「淀川に棹さして、櫻の宮に遊び、網島の鮒卯に醉を催し」

ふーなう 浮嚢【名】うきぶくろ(浮嚢)に同じ。

ふなうた 船歌・舟歌【名】一船人の船を漕ぎながらうたふ歌。さをうた。土佐「舟子・楫取は、ふなうた歌ひて」二小唄の一。木遣(キヤ)・石引(コビキ)などと同類にて、船舶の航漕に關する意を舒べたる、長篇の一種の口說節(クドキ)。物盡(モノヅク)景事(ケイジ)・道行或は簡單なる說話の體を成す。

ふなうつし 船移【名】船の積荷を、他の船に積み換ふること。

ふなうつしーめんじやう 船移免狀【名】『英 Transhipment permit』稅關より船移を許可する時、その證として、下付する免狀。特に外國船及び外航内國船に下付す。積換(カヘ)免狀。

ふなおくり 船送・舟送【名】船に乘せて送ること。ふなまはし。

ふなおろし 船卸・舟卸【名】一新に造りたる船を、始めて、水上に浮ぶること。進水。二船の積荷をおろすこと。

ぶーなか 不中【名】中の好からざること。惡しき間柄。岸姫松譬鑑「不中を直す彼が媒介(ナカウド)、宿怨は消して聟・舅」

ふなーかがみ 船鑑【名】德川時代に於ける、船名錄の如きもの。即ち七十五大名と長崎奉行との船印・紋章を記せるもの。

ふながかり 船繋・舟繋【名】船の港に泊ること、又その所。ふなとどめ。ふなどまり。

ふながく 船樂・舟樂【名】船中にて奏する音樂。【古語】十訓「船樂の時、笛を河淵におとし入れて、え取らざりければ」

ふながげ 船影・舟影【名】船の遠く見ゆる形。船の影。ふなすがた。船影(センエイ)。謠曲(俊寬)「次第は遠ざかる沖つ波の……、船影も、人影も、消えて」

ふながざり 船飾・舟飾【名】一船を、旗・武器・塗料などにて飾ること、又その飾。二ふなよそひ(船裝)に同じ。【古語】萬葉「八十國(クニ)は難波につどひふなかざりあがせむ日ろを見も人もがな」太鼓「春風や嚴待受くる船かざり」「頭」に同じ。

ふながしら 船頭【名】ふなかたがしら(船方)に同じ。

ふなかた 船方・舟方【名】ふなのり。せんどう。ふなこ。水手。

ふなかた 船形【名】【地】安房國安房郡ある町。館山(タテヤマ)灣に臨み、那古(ナゴ)町に接す。

ふながた 船形【名】船のごとき形狀。

ふながたーくわんおん 船形觀音【名】『音は、觀の字の韻に引かれてノンと發音す』安房國安房郡船方町の大福寺の本尊なる十一面觀世音。寺は慈覺大師の開基にして、松方山門普院と號し、懸崖の中腹を穿ちて、堂を建てたるによりて、又、崖(ガケ)觀音の稱あり。

ふながたーやま 船形山【名】【地】『山姿、船の形に似たるよりいふ』陸前・羽前の兩國に跨れる休火山。奥羽脊梁山脈に屬し、高さ五六一〇尺。一名、船嶺(ガクネ)。

ふながは 船川【名】【地】羽後國船川港町なる港。

ふながは-みなと 船川港【名】【地】羽後國南秋田郡にある町。男鹿(オガ)半島の南。國内第一の良港ありて、船舶の出入多し。

ふながは-わたし 船側渡【名】【商】せんぷくわたし(船腹渡)に同じ。

ふながひ 船貝・舟貝【名】【動】あまをぶね(蜑小舟)二に同じ。夫木「漕ぐ人も渚に寄する船貝は吹きくる風や繋ぐなるらん」

ふなかんさつ 船鑑札・舟鑑札【名】せんかんさつ(船鑑札)に同じ。

ふなき 船木【名】【地】『神功皇后の三韓征伐の時、御船の材木を伐り出だしし所』長門國厚狹(サ)郡にある村。郡役所の所在地。鐵道山陽本線の一驛。硯櫃の製造及び褐炭の產出にて名あり。

ふなき 船木・舟木【名】船を造る料の材木。船材。萬葉「とぶさたて足柄山に船木きり木にきりゆきつあたら船材(フナキ)を」

ふなーきほひ 船競・舟競【名】ふなくらべ(船競)に同じ。【古語】萬葉「船並(ナ)めて朝川渡り船きほひ夕河渡る」

ふなーきほふ 船競ふ・舟競ふ【動四自】船ぎほひをなす。船を漕ぎ競ふ。【古語】萬葉「ふなぎほふ堀江の河のみなぎはに來居つつ鳴くは都鳥かも」

ふなぎみ 船君・舟君【名】船客中の主領。【古語】土佐「ふな君、せちみす」

ふなぎーやま 船木山【名】【地】美濃國本巢(モト)郡席田(ムシロダ)村大字上保(カミホ)にある山。周回十二三町の小丘に過ぎざれども、古は紅葉の名所として知られたり。藤川記「五月雨のもみぢを染むるためしあらば舟木の山はいかがこがれん」

ふなぎり 船切【名】饂飩・蕎麥切などの未だ茹でざるを、槽(フナ)に並べ盛りたるもの。同じ。

ふなぐ 船具・舟具【名】せんぐ(船具)に同じ。

ふなぐさ 撫草【名】【植】ぶな(撫)に同じ。

ふなーくさし ふな臭し【形一】きなくさし(きな臭し)に同じ。【陸奥國津輕の方言】

ふなくひーむし 船食蟲【名】【動】舟虱(シラミ)類に屬する軟體動物。體は細長くして、蠕形動物の如き外觀をなし、その前端に、二枚の介殼あり。海中に在る船舶、その他の木材に食ひ入りて、穴を穿つ。

ふなーぐら 船倉【名】一船を藏めおく家。【船藏・船庫】二せんさう(船艙)に同じ。

ふなくらべ 船競・舟競【名】船を漕ぎて、競争すること。ふなぎほひ。松遺「ふねならべ朝川渡りふなくらべ夕川渡り」

ふなぐり 船繰【名】或航路の船の不足を補はんとて、繰り合はする手段。

ふなぐわいしや 船會社【名】船舶業を營む會社。

ふなくわじ 船火事・舟火事【名】船中にて起りたる火災。日本新永代蔵「北國にて、舟火事に遭ひ」

ふなげんくわ 船喧嘩・舟喧嘩【名】船乘(ノリ)の間に起りたる喧嘩。

ふなこ 船子・舟子【名】船に乗りて、これを漕ぐ人人。かこ。水手。舟子(シウ)。源氏「ふなこどもの、あらあらしき聲にて」

ふなご 鮒子【名】鮒の子。小鮒。鮒。字鏡「鮒、不奈古」新六「したみ落す水口はやくほす池にとまる鮒子の數ぞ知られぬ」

ふなごくわう 船御光・舟後光【名】〔佛〕後光の、船を竪にせる如き形なるもの。

(うわくごなふ)

ふなごころ 船心・舟心【名】一船に乘りて行く心持。船の中に在る心持。芭蕉「遠淺や夏の日の出の舟ごころ」二船に酔ひたる心持。船酔の氣味。醒睡笑「ふな心があると云うて吐逆する」

ふなこし 船越【名】〔地〕羽後國南秋田郡にある町。男鹿(ヲガ)半島の東南隅にあり。

ふなこしおび 船越帶【名】『旗本の士船越某の創意にて織りたるよりの稱といふ。一説に、船格子帶の轉訛なりと』明治維新前に、一時流行せし一種の男帶。綦盤縞の博多織に、獨鈷の模様を配けるもの。

ふなこぢり 船鐺・舟鐺【名】反(ソ)りて、船底の形したる鐺。百合若大臣野守鏡「木瓜(モクカ)鍔の太刀作(クリヅ)、九州濠(サカ)の大反(ソリ)、烏帽子たたきの船鐺」

ふなこぼれ 船こぼれ・舟こぼれ【名】『俚言集覽に、柳亭高屋氏曰く「船こぼれなるべし」とあり』主人の供をして、遊廓に至ること。〔江戸の遊里の話〕吉原常常草「年たくるまで、色里を見さりければ、心うくおぼえて、或時、ふなこぼれして、徒(カチ)よりまかでけり」註に「この里の詞にして、主の供して、ここを見し人、ふなこぼれといふなり」

ふなごみ 船込・舟込【名】多くの船の入り込み泊れる處。八笑人「兩國の洲(ス)か、橋間(マ)の船込の中へ附けてゐて」

ふなごむし 船子蟲・舟子蟲【名】〔動〕淡水に産し、魚の腮に寄生する、一種の蟲。

ふなごや 船小屋・舟小屋【名】船・船具などを納めておく小屋。

ふなさか 船坂・舟坂【名】〔地】一播磨國赤穗郡にある村。備前國との國境にして、中國街道に當る。舊稱、安室(ヤスムロ)庄。二次條の略。平家「播磨と備前の境、船坂といふ處にて」「を見よ。

ふなさかやま 船坂峠【名】〔地〕次條赤穗郡と備前國和氣(ワケ)郡とに跨れる山。高さ五五一尺。赤穗郡有年(アリトシ)村及び上郡(カミゴホリ)町より和氣郡三石(ミツシ)村に通ずる山路ありて、船坂峠といひ、又、峠の南方に、鐵道山陽線の隧道あり。兒島高徳の事蹟を以て名高し。太閤記「風おはぬ船坂山は年月も同じ所ぞ泊なりける」

ふなざむらひ 鮒侍【名】世間見ずの侍を罵りいふ語。「井戸の鮒」參照。

ふなざを 船棹・舟棹【名】船にてさす棹。船の棹。會丹集「蘆の葉の散りにし日より難波江に通ふふなざをさして見えつつ」

ふなざを 鮒竿【名】鮒を釣るに用ふる釣竿。

ふなし 船師・舟師【名】ふなき(船長)に同じ。續紀「使ト鎌束便爲二船師一」

ふなし 斑無【名】斑紋の無きこと、又その物。

ふなしうづら 斑無鶉・鷆【名】〔動〕鶉の一品種。羽毛に斑紋の無きもの。

ふなしじたく 船支度・舟支度【名】船にて一泊する支度。出帆の用意。芭蕉「旅がらす二百十日も船支度」

ふなしどき 【名】〔動〕『吸盤によりて、船底にも附著するより、船脚磨の義にていふか』こばんざめ(小判鮫)に同じ。

ふなしはい 船支配・舟支配【名】船の出入を監理すること。船の事を取締ること。

ふなじめり 船濕・舟濕【名】船に乘りて、身體の、水氣を感ずること。其角「身にしむや宵曉の舟じめり」

ふなしやうぞく 船裝束・舟裝束【名】船人の身のよそほひ。船頭の姿。

ふなじるし 船印・舟印【名】目じるしのために、船に建つる旗・吹流など。

ふなしろ 船代・舟代【名】伊勢大神宮にて、樋代(ヒツシ)を奉安する具。天磐船(アマノイハフネ)の形を存すといふ。

ふなしろまつり 船代祭・舟代祭【名】船代の材料を伐り採る時、その木の本に祭物を供へ、祭文を讀みなどして行ふ祭。

ふなすがた 船姿・舟姿【名】ふなかげ(船影)に同じ。

船姿三里、帆姿九里【句】船の形は三里沖まで、帆の形は九里沖まで認むるを得。〔諺語〕

ふなずし 鮒鮨【名】鮒を用ひて製せる鮨。延喜式「太宰府(鮒鮨一百七十八斤五缶)」一代女「猫が、今出す鮒鮨引いた」

ふなすべり 船辷・船滑・舟辷・舟滑【名】うおおたあしゆうごに同じ。「と。水居(スヰキヨ)。

ふなずまひ 船住・舟住【名】船に住むこと。

ふなすゑ 船居・舟居【名】船を碇泊せしめおく所。ふなせ。ふなだまり。錨地。〔古語〕舩詞「船居(スヱ)無きによりて、播磨國より船乘して」

ふなせ 船瀬・舟瀬【名】『船の瀦の義とも、前條の語の約ともいふ』前條に同じ。〔古語〕萬葉「名寸隅(ナスミ)の船瀬ゆ見ゆる淡路島松帆(マツホ)の浦に」

ふなぜうえう 船逍遙・舟逍遙【名】船に乘りて逍遙すること。ふなゆさん。ふなあそび。〔古語〕重之集「難波にて舟ぜうえうして、岸の藤の花を折りて、やかたに插して」

ふなせくぐくてん 船瀬功徳田【名】雜色田(サフシキデン)の一。船瀬を築設修補する料に充てて寄せたるもの。

ふなぞこ 船底・舟底【名】一船のそこ。船底(フナゾコ)。十卷ふなぞこより、頭をもたげて」二器物の底の、弓形に反(ソ)りて、船の底に似たるもの。

ふなぞこげた 船底下駄・舟底下駄【名】臺の下面の、反(ソ)りて、船底の形したる下駄。

ふなぞこてんじやう 船底天井・舟底天井【名】〔建〕反(ソ)りて、船底の形したる天井。

ふなぞこまくら 船底枕・舟底枕【名】底板を船底の如くに、反(ソ)らせて造れる箱枕。

ふなぞこまげ 船底髷・舟底髷【名】きんぎよまげ(金魚髷)に同じ。

ふなぞなへ 船備・舟備【名】船にて、戰の備をなすこと。軍船(イクサ)の備立。

ふなぞろへ 船揃・舟揃【名】多くの船を整へ揃ふること。盛衰記「渡部(ワタナベ)・神崎(カンザキ)にて、船揃をしける時」

ふなたい 舳帶・山毛欅帶・椈帶【名】〔地〕植物帶の一。本州の北半部、北海道の過半西南部に於ける平地並びに四國、九州及び本州南半部に於ける山嶽地方、これに屬し、樅の外、七葉樹(カヘ)・栗・樺(カバ)・楓(カヘデ)・胡桃(クルミ)・杉・扁柏(ヒバ)・樅(モミ)・榧(カヤ)等の落葉闊葉樹を生ず。溫帶林。

ふなたいく 船大工・舟大工【名】船を造る大工。船匠。

ふなたいしやう 船大將・舟大將【名】ふなぎやう(船奉行)に同じ。

ふなたいしやうしゆう 船大將衆・舟大將衆【名】ふなてがしら(船手頭)に同じ。

ふなたうぐ 船道具・舟道具【名】ふなぐ(船具)に同じ。

ふなたけだば 船竹把・舟竹把【名】昔、船軍の時、矢玉を防ぐに用ひし物。割竹を簀の如くに編み、これを厚さ四寸許、幅は見合せよき程に疊みて、外より内方に靡かせ、垣立(カキタチ)にからみつけしもの。

ふなたち 船立・舟立【名】ふなで(船出)に同じ。〔古語〕紀「竽船、フナダチシテ」

ふなたて 船楯・舟楯 【名】昔、船軍に、船桁又は垣立(カキタテ)に仕掛けし楯。大將船は、掠板に搖革(ユリカハ)を附けたるを用ひ、その他、鎖楯・網楯・幕楯・槍楯・持楯・疊楯・底楯などありたり。

ふなだな 船棚・舟棚 【名】㊀船の左右の側面の板。數段をなし、船底部より、順次に、根楯(ネダテ)・中楯(ナカダテ)・上楯(ウハダテ)の名あり。根楯は加敷(カシキ)ともいひ、根楯と上楯との間の、多くの段より成れる場合には、大繼(オホツギ)と呼ぶ。ふながは。ふなのべ。ふなばら。ふなべり。「船楯・舟楯」和名抄、楯、不奈太那。大船旁板也」㊁船の兩舷に、板を棚の如く渡し、舟子の踏みわたりて、棹をさす所。せがい。萬葉「なごのあまの釣する船は今こそはふなだな打ちてあへて漕ぎ出め」

ふなたび 船旅・舟旅 【名】船に乘りて旅すること。ふねの旅。

ふなだま 船靈・船玉・舟靈・舟玉 【名】㊀航路を守護するものとして、船中に祀りおく神。專ら住吉の神の和魂(ニギミタマ)を祀る。續紀「幸賴二船靈一、平安到レ國」謠曲(紀伊國)「紀伊の國は音無川の水上(カミ)に立せたまふは船玉山(フナヅマヤマ)、船玉大二社大明神」㊁つつ(筒)(ヲ)に同じ。

ふなだまがみ 船靈神・船玉神・舟靈神・舟玉神 【名】船靈㊀たる神。ふなだま。國姓爺「住吉と申すは、船路を護りの御神にて、……船玉神とも申すなり」

ふなだままつり 船靈祭・船玉祭・舟靈祭・舟玉祭 【名】船靈を祭りて、航路の安全を祈ること。

ふなだまみやうり 船靈冥利・船玉冥利・舟靈冥利・舟玉冥利 【名】船靈の、船乘に對する加護。不假名盛衰記「義經が乘船の船頭は、松右衞門と事きはまる。……船玉冥利再び丸額になって喝食(カッシキ)する法もあれ、恨も殘らぬ、悔みもせぬ」

ふなだまり 船溜・舟溜 【名】港の一部の、船の休息せる場所。ふなせ。錨地。

ふなだより 船便・舟便 【名】船に依るたより。一代男「大阪へ の船だよりも廻(マハ)り遠く」

ふなぢ 船路・舟路 【名】船の行き通ふ路。航路。源平「船路のわざとて、黑みやつれたるも」

ふなぢづもり 船路積・舟路積 【名】昔、船の進行中、線香・時計・磁石などにて、陸地の山嶽などを目あてにして、船の走る道程と居所の方位とを測り知りし術。

ふなぢのきみ 船路君 【名】〔人〕みなもとみちなり(源道濟)の異稱。

ふなちん 船賃・舟賃 【名】船を雇ふ時、又船に乘る時に拂ふ貸錢。近江源氏先陣館「急ぎ船を著けよ。望次第に船賃やらう」

ふなつ 船津・舟津 【名】船の發著する處。ふなつき。みなと。津。萬葉「秋風に河浪立ちぬしまらくは八十(ヤソ)の船津にみ船とどめよ」

ふなつ 船津 【名】〔地〕飛驒國吉城(キノキ)郡にある町。高原川の左岸。越中街道に沿ふ。附近に鑛山あり。

ふなづ 船出・舟出 【動下二自】船出(フナデ)す。船に乘りて出で立つ。「古語」和泉式部集「おのれただ滿ち來る汐もありけるを思ふ人とぞわれはふなづる」

ふなつき 船著・舟著 【名】船の著きて泊る所。ふながかり。ふなば。はとば。みなと。山家霧深きこがのわたりのわたしもり岸のふなつき思ひ定めよ」若鳳會舟つきを賣りめぐりて」「同じ。

ふなつきば 船著場・舟著場 【名】前條に同じ。

ふなつく 【動四自】 ふなふなとす。ひよろひよろとす。膝栗毛「七軒戻(シヂケンモドリ)かして腰がふなつきをる」

ふなつ-じんじや 船津神社 【名】越前國今立(イマダテ)郡船津村に鎭坐せる縣社。祭神は孝元天皇の皇子四道將軍の一人大彦(オホビコ)命。なほ猿田彦大神・素盞嗚(スサノヲ)尊・孝元天皇・金山彦命を配祀す。

ふなつづみ 船裏・舟裏 【名】錢を紙に包みて、佛前に供ふるもの。

ふなつば 船鍔 【名】『英 Hawse-shoer 又 Covering board』木船にて、最上甲板の兩側にありて、外板を下にし、肋骨の上端を覆ふ材。

ふなつ-はちらうべゑ 船津八郎兵衞 【名】〔人〕槍術家。豐臣秀賴の槍術師範渡邊内藏助(クラノスケ)糺の門人。秀賴に仕へ、後、松平信綱に仕ふ。船津流(一名、内藏助流)槍術の祖。

ふなづみ 船積・舟積 【名】㊀船に、荷物を積み込むこと。せんせき。㊁ふなもり(船盛)に同じ。

ふなづみ-あんないじやう 船積案内狀 【名】〔商〕つみにあんない(積荷案内)に同じ。

ふなづみ-うけとりしよう 船積受取證 【名】〔商〕つみにうけとりしよう(積荷受取證)に同じ。

ふなづみ-おくりじやう 船積送狀 【名】〔商〕『英 Shipping invoice』海洋を隔てて積送する貨物に對して發する送狀。

ふなづみ-かう 船積港 【名】〔商〕につみかう(荷積港)に同じ。

ふなづみ-きかん 船積期間 【名】〔商〕せきかん(船積期間)に同じ。

ふなづみ-くわぶつ 船積貨物 【名】〔商〕船に積み込みて送る貨物。ふなに。

ふなづみくわぶつ-うけとりしよ 船積貨物受取書 【名】〔商〕つみにうけとりしよ(積荷受取證)に同じ。

ふなづみ-さしづしよ 船積差圖書 【名】〔商〕『英 Shipping order』海運業者が、荷主より運送の委託を受けたる時、その船の事務員に對し、その船荷の積込を命ずるために、艀船(ハシケ)の船頭に託して送る指令書。この指令書と引き合はせて、その船荷を受け取りたる時、その船の船長又はその代理人は、積荷受取證を艀船の船頭に託し、陸上の海運業者は、艀船の船頭よりこれを受け取りたる上、船荷證券を發行して、荷主に交付す。積荷受取證は、船積指圖書の一部に印刷しおき、必要に應じて、切り離し得るやうにす。かはおくりしよ(川送書)參照。

ふなづみ-しよう 船積證 【名】〔商〕次條ふなづみ-しようしよ 船積證書 【名】〔商〕「の略。

ふなて-がしら 船手頭・舟手頭 【名】徳川幕府の職制の一。幕府の用船を保管せしもの。若年寄の管下。定員五人又は六人。各、水主同心、これに附屬す。初は、定員中、二人づつ、毎年交替して、四國・九州の沿岸を巡視せしことあり、又、定員中、向非(ムカヒ)氏のみは世襲し、待遇も最もすぐれたり。文久二年、軍艦奉行の附屬となる。船(フナ)大將參。船奉行。船手。

ふなて-ぐみ 船手組・舟手組 【名】徳川幕府の職制の一。幕府の用船を督し、運輸のことを掌りし組參。

ふなて-しゆう 船手衆・舟手衆 【名】ふなぎやう(船奉行)㊀に同じ。

ふなにしようけん(船荷證券) に同じ。

ふなづみ-つうちしよ 船積通知書 【名】〔商〕つみにあんない(積荷案内)に同じ。

ふなづみ-とりあつかひにん 船積取扱人 【名】回漕の周旋を業とする人。廻漕問屋。

ふなづみひ 船積費 【名】船積を爲すに要する費用。

ふなづみめんじやう 船積免狀 【名】〔商〕『英 Shipping Permit』稅關より、外國船又は外航内國船に對して、下付する、貨物船積の許可狀。

ふなつ-りう 船津流 【名】ふなつはちらうべゑ(船津八郎兵衞)を見よ。

ふなづる 船鶴 【名】〔植〕さぎそう(鷺耳樒)に同じ。「古語」

ふなて 船手・舟手 【名】㊀ふなぢ(船路)に同じ。「古語」曜齋集「野も山も雪降りぬれば跡絶えてふなてに殘る冬のかよひぢ」㊁船の事を取り扱ふ者。船を支配する役人。八笑人「已(オノレ)も、船手の人足だから、左次(サジ)さんと一所に出かけよう」㊂ふなてがしら(船手頭)の略。

ふなて-がしら 船手頭・舟手頭 【句】船手の頭。

ふなて-で 船出・舟出 【名】船の、岸を離れて、沖へ出づること。ふなだち。出帆。發船。萬葉「家人のいはへにあらむ平けくふなでしはてねと親にまをさね」

ふなてぶぎやう 船手奉行・舟手奉行【名】ふなぶぎやう(船奉行)【一】に同じ。

ふなどうろう 船燈籠・舟燈籠【名】【一】昔、船軍に用ひし廻(クワイ)燈籠。即ち鐵行燈(カンテン)に似て、火口を開閉するやうにし、閉ぢ塞げば、火光外へ洩れぬもの。【二】船の形に造りたる燈籠。

ふなどけい 船時計・舟時計【名】船にて用ふる磁石。即ち二十四方位を逆に刻み、北を船首に向けて据ゑ置き、船の進む方向を示す。

ふなどこ 船床・舟床・舟箪笥【名】和船の間所(コマ)の一。艫床(コトド)・舵床(カヂドコ)・小間(コマ)・五尺(サク)・猫簷(ネコ)などあり。とこ。和名抄「舟箪、布奈度古」三二職人歌合「櫻川花にゆるさぬふなどこをおしてはいかが渡る春風」

ふなどごしよ 船戸御所・舟戸御所【名】ふしみぐの(伏見殿)を見よ。

ふなどとめ 船止・舟止【名】ふながかり(船繋)に同じ。新千載「沖つ浪立ちわかるとも音に聞くながゐの浦に船止すな」

ふなどのかみ 布那斗神・岐神【名】くなどのかみ(久那斗神)に同じ。記「岐神、此云二布那斗能加微一」

ふなどひや 船問屋・舟問屋【名】船の荷物又は乗客を取り扱ふ家。廻漕問屋。

ふなどまり 船止・船泊・舟止・舟泊【名】ふながかり(船繋)に同じ。

ふなどんや 船問屋・舟問屋【名】ふなどひや(船問屋)に同じ。

ふなどめ 船留・船止・舟留・舟止【名】【一】船出を許さぬこと。若鳳曾手負も、國中を船留して、穿鑿あって擊たれける」【二】〔動〕ふなしざきに同じ。

ふなども 船艫・舟艫【名】とも(艫)に同じ。〔古語〕萬葉「住吉(スミエ)の吾が大御神舟(ブネ)のへにうしはき座(マ)し舟どもに御(ミ)立たし座(マ)して」

ふなのは 船縄・舟縄【名】船をつなぐ縄。もやひなは。

ふなのなます 鮒膾【名】鮒にてつくりたる膾。

ふなのなみ 船並・舟並【名】船を、その腹と腹とを合はせて、何艘も並ぶること。

ふなに 船荷・舟荷【名】船にて運送する荷物。船積(ツミ)貨物。和名「艤、布奈迦」

ふなにうけとりしよ 船荷受取書【名】〔商〕つみにうけとりしよう(積荷受取證)に同じ。

ふなにかう 船荷港【名】〔商〕つみにかう(積荷港)に同じ。

ふなにしようけん 船荷證券【名】〔法〕『英 Bill of lading (B/L)』船主・船長又はその他の船主代理人が、傭船者又は荷送人の請求により發行・交付する、物品運送契約の有價證券。船舶の名稱、運送品の種類、荷送人の氏名・商號、船積港・陸揚港などの事項を記載し、これと引換に、到著港において、積荷を引き渡す。船荷證書。船積證書。船積證券)參照。むきずふなにしようけん(無疵船荷證券)參照。「前條に同じ。

ふなにしようしよ 船荷證書【名】〔法〕ふなにしようけん(船荷證券)に同じ。

ふなにそんすう 船荷噸數【名】〔商〕『英 Burden』船舶に積載し得る貨物の總噸數。

ふなにび 船荷日【名】〔商〕つみにび(積荷日)に同じ。

ふなぬし 船主・舟主【名】船の持主(モチヌシ)。ふなをさ。船主(センシュ)。高野日記「艤もかいも我等はとらで法(ノリ)の道ただふなぬしを頼みてぞ行く」

ふなぬすびと 船盜人・舟盜人【名】かいぶなのあぶら(櫓油・山毛欅油・椶油【名】櫓の果實より搾り取りて製したる油。食用又は燈用等に供す。

ふなのき 櫓木・椶木・山毛欅【名】〔植〕ぶな(橅)に同じ。

ふなのこ 鮒子【名】池又は川に埋もれたる岩石・杭などに附著する殻皮狀の淡水海綿の體内にある、無數の小粒、實は、その物の生殖器なり。

ふなのこたちあひ 船立合・舟立合【名】式能に演ずる祝言の相舞(アヒマヒ)。舟につきての祝賀の意を諸ひ、二人或は三人立ち合ひて舞ふもの。春日神社の祭に行ふ。

ふなのこへ 船邊・舟邊【名】ふなだな(船棚)【二】に同じ。【古語】記「船枻、此云二浮那能倍一」

ふなのへ 船舳・舟舳【名】船の舳。へさき。【古語】萬葉「諸の大御神たち船舳(フナ)に道引きまをし」

ふなのへ 船上【名】〔地〕次條の略。太平記「船上の皇居に境を建てられ、天子自ら金輪(コリン)の法を行はせたまふ」

ふなのへせん 船上山【名】〔地〕せんじやうせん(船上山)に同じ。

ふなのり 船乘・舟乘【名】船に乘ること、又それを業とする人。船頭。乘船(ジョウセン)。萬葉「ももしきの大宮人のにぎたづに船乘しけむ年の知らなく」

ふなのりさうば 船乘相場・舟乘相場【名】〔商〕ふなわたしだいか(船渡代價)に同じ。

ふなば 船場・舟場【名】船の出入する處。ふなつき。はとば。埠頭。和名人「船場に至り、皆貨、渡舟(フナワタシ)に飛び乘る」

ふなばうき 船箒・舟箒【名】〔植〕かはらよもぎ(川原艾)を云ふ。〔安藝國の方言〕

ふなばし 船橋・舟橋【名】【一】船を多く並べ繋ぎ、その上に板を渡して、橋となせるもの。うきばし。萬葉「かみつけぬ佐野(サヌ)の船橋とり放し親は避くれど我(ア)はさかるがへ」【二】謠曲の一。熊野の山伏、陸奥に行かんとて、上野國佐野に來りしに、里人らしき男女の、架橋建立の勸進に入れと說き、前項に揭げたる萬葉集の歌に附會せる男女間の說話を語りて、橋の由緒を明かにせるもの。

ふなばし 船橋【名】〔地〕【一】下總國東葛飾(ツヒガシカツ)郡にある町。鐵道總武線の一驛。又、京成電車により、東京と相通ず。附近塚田村に、船橋無線電信所あり。【二】姓氏の一。清原氏の嫡統、宣賢の玄孫秀賢を祖とす。子孫、世世明經博士に任じ、明治維新後、子爵を授けらる。

ふなばしご 船梯子・舟梯子【名】船の乘下(オリ)に便するために設けたる梯子。

ふなばしや 船橋屋【名】江戸深川佐賀町にあり七菓子屋。和合人「袋戸を明けて、いや奇妙、船橋屋、ちと宗體(シウタイ)は違ふがと、一つしてやり、やれやれ、いつ取ったのだか、有平(アルヘ)が熟(ク)えきってゐらあ」江戸名物狂詩選「船橋屋煉羊羹 本家久佳深川岸、菓子羊羹天下横、纔有二同名同店在一、船橋文字自然明」

ふなはせ 鮒はせ【名】鮒の跳りあがるを、弓にて射ること。著聞「鮒はせをしけるに」〔緣〕に同じ。

ふなばた 船端・舟端・舷【名】ふべり(船端を刻む【句】「劍(ケン)を落して、船ふなばたを刻むに同じ。〔諺語〕

ふなはて 船泊・舟泊【名】船の泊つること。船の到り著きて泊ること。ふなどまり。ふながかり。〔古語〕萬葉「いづくにか船泊すらむ安禮(ケ)の崎漕ぎたみ行きし棚なし小舟」もぎ(河原蕎)に同じ。

ふなばはぎ 船腹 ふなば萩【名】【一】船の腹部。舷側。記「年のはに船並(ナラ)めてふなばら乾さず」【二】せんぶく(船腹)【二】に同じ。

ふなばら 【名】〔植〕【一】ふなばらさう(百吉草)に同じ。〔白薇・百吉草〕【二】すずきいと(鈴柴胡)に同じ。

ふなばらかりきり 船腹借切【名】〔商〕船腹(フナバラ)の全體を借り切ること。全部傭船の契約。

ふなばらさう 百吉草・白薇【名】〔植〕藘藦(イケマ)科に屬する多年生の草。高さ二尺内外、莖も葉も草橘(クサタチバナ)に似て、やや大きく、且つ白毛を有し、葉は對生す。夏、五瓣暗紫色の花、穗狀をなして開き、後、二寸ほどの莢を結ぶ。昔は、馬の藥用として用ひたり。くろべんけい。くるなびやくびゃく。ろくをんさう。つるわたてっぱうさう。ふなばら。

ふなばらさうくわ 白薇科【名】〔植〕ががいもくわ(藘藦科)に同じ。

ふなばらわたし 船腹渡【名】〔商〕せんぷくわたし(船腹渡)に同じ。

ふなばらわたしおくりじやう 船腹渡送狀【名】〔商〕『英 Free alongside invoice』船腹渡の契約成立したる時、貨物の價格等の諸事項を記載し、普通の送狀に添へて、受取人に渡す送狀。

ふなばり 船梁・舟梁【名】和船の内に横に亙して、その船の形を維持し、棚板を互に支持すること、全く家屋の梁と同様なる木。海船にては、その横木を、上下二重に設け、その上梁(カウリ)にありて現れたるを梱床(コンドコ)といひ、下にありて隠れたるを船梁といふ。膝栗毛「小提燈(カヲチン)をともして、船ばりにぶら下げ」

ふなび 船日・舟日【名】船出によき日。港にて、船の著く日。雙生隅田川「今日は三月十五日、上總浦の船日なれど」

ふなひき 船引・船曳・舟引・舟曳【名】㊀岸に沿ひて歩きつつ、船を綱にて引き行くこと、又その人。俳諧新選(烏石)「舟引の尻こそばがる尾花かな」太平記「舟曳の舟へ来ていふ夜寒かな」㊁次條の略。

ふなびき-あみ 船引網・船曳網・舟引網・舟曳網【名】船の上より使用する引網。種類多く、引寄網と引廻網とに大別す。ふなびき。

ふなび-と 船人・舟人【名】㊀船に乗れる人。㊁かこ。水夫。船頭。萬葉「風早み三保の浦回(ウラ)を漕ぐ船のふなびと騒ぐ波立つらしも」

ふなびん 船便・舟便【名】次條に同じ。

ふなびんぎ 船便宜・舟便宜【名】船の便宜。船の都合。ふなびん。新永代蔵「定め方なき冬日和の船便宜、心元なし」

ふなびらき 船開・舟開【名】ふなで(船出)に同じ。あさびらき(朝開)参照。

ふーなふ 不納【名】納付せざること。

ふなぶぎやう 船奉行・舟奉行【名】㊀武家時代に、船頭・水手等を指揮して、舟船の事を總轄せし職。ふながたがしら。ふなてしゅう。ふなてぶぎやう。平家「舟奉行の乗りたる船なりけり」㊁ふなてがしら(船手頭)に同じ。

ふなふ-けっそんがく 不納欠損額【名】[法]法定の事由によりて、國庫の收納すべき金額又は歳額の中、不足となれる額。

ふなふ-ふな【貌】疲れて、力抜けたるさま。しょげかへりたるさま。ふならふなら。くなくな。女夫草「放ち置く池にふなふな浮き上り(ミいふ句に)子鯛は羽根の弱き水鳥」

ふなべ 船邊・舟邊【名】船に程近き處。船の近邊。船のあたり。藻鹽草「ふなべに」に同じ。

ふなべた 船端・舟端【名】ふなばた(船端)に同じ。

ふなへーのーあたひ 鯽魚戸直【名】〔人〕奮家。本名詳かならず。孝徳天皇の朝の人。白雉四年、勅を奉じて、佛・菩薩の像を書きたりと傳ふ。

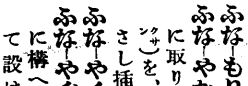
ふなーべんけい 船辨慶【名】謡曲の一。源頼朝・義經不和になり、義經は辨慶の勧により、靜に別れて、攝津國大物(ダイモツ)浦より出船す。然るに、西海に亡びし平家の怨靈現れて、船を沈めんとす。辨慶法力にて、その怨靈を祈り退くる由を作れるもの。

ふなべり 船縁・舟縁・舷【名】ふなばた(船端)に同じ。膝栗毛「小便……船縁へちよちよこなって、ひよげらんせ」

ふなーぼこ 船鉾【名】京都の祇園祭に引き出す、船形のほこだし。

ふなーぼさ 船菩薩・舟菩薩【名】昔、肥前國長崎に、支那より來船せる舟人の祭りし、船舶の神。ぼさまつり(菩薩祭)参照。

ふなーぼぞ 船柄・舟柄【名】下ばの弧形なる長柄をいふ。柱の兩面へ取り附けたる横木などを連結せしむるに用ふ。「る幕。


(ぞほなふ)

ふなまく 船幕【名】船にて張

ふなまち 船待・舟待【名】船を待つこと。船の出入を待つこと。五人女「濱庇の幽かなる所に船待をして、思思の旅用意」

ふなまど 船窓・船窻・舷【名】船べりに設けたる窓。蓬窓。船窓(センサウ)。

ふなまどひ 船惑・舟惑【名】船路にて迷ふこと。〔古語〕是則集「いづ方か泊なるらん山風の拂ふ山路に船まどひして」

ふなーまはし 船廻・舟廻【名】船にて、荷物などを送り届くること。廻漕。

ふなーまんぢゆう 船饅頭・舟饅頭【名】碇泊せる船に通ひ來る淫賣婦。

ふなみ 舟見【名】〔地〕越中國下新川(シモニカハ)郡にある町。北陸本街道に沿ふ。泊(トマリ)より二里餘。

ふなーみち 船路・舟路【名】ふなぢ(船路)に同じ。源氏「ふなみちのしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿」

ふなむし 船蟲・海蛆【名】〔動〕甲殻類中、等脚類に屬する節足動物。海岸の岩上に群棲し、草鞋蟲(ワラヂムシ)に似て、長さ一二寸、色青黒くして、光澤あり。五對の脚の外、第二對と第三對との顎脚も、歩行の用をなし、走ること極めて早し。

ぶなん 無難【名】さはりなきこと。恙なきこと。無事。

ふなもち 船持・舟持【名】船を所有せること、又その人。船主。

ふなもよひ 船催・舟催【名】ふなよそひ(船裝)に同じ。〔古語〕孝範集「曉のふなもよひする蜑の子のかひといふを鹿と聞くらん」

ふなもり 船守・舟守【名】船の番をすること、又その人。「の盛方の一。

ふなーもり 船盛・舟盛【名】伊勢海老(エビ)に取り附けて造りたる屋形。十返舎一九(ジックサ)、あるる者、夜の間とて、ふなやかたに「雑税。さし挿めりければ」

ふなやく 船役・舟役【名】船に賦課する

ふなやぐら 船矢倉・舟矢倉【名】船の上に構へたる矢倉。大船のは、全部に亙りて設け、總(フサ)矢倉といひ、小船のは、艫(トモ)にのみ設け、艫矢倉といふ。

ふなやたい 船屋臺・舟屋臺【名】祭禮の時、船の上に設けたる踊屋臺(ヲドリダイ)。千紅萬紫「山王祭に船屋臺あり、鐵砲洲より出でしといふ」

ふなやど 船宿・舟宿【名】㊀遊船又は釣船などを所有し、人の求に應じ、賃貸などする家。遊船宿。㊁徳川時代に、淺草山谷堀(ボリ)などに在りて、船にて、吉原遊廓に通ふ遊客の送迎を業とせし家。

ふなやど-あづけ 船宿預【名】宿預の一。船宿に預けて、逃脱を防ぐもの。

ふなや-やどり 船宿・舟宿【名】船を著けて泊ること。船繋(カケヲ)して宿ること。空穂「きみわたりはつかに今日ぞみつの濱見つつは過ぎじふなやどりせん」

ふなやまひ 船病・舟病・苦船【名】ふなよひ(船酔)に同じ。伊呂波字類「苦船、フナヤマヒ」

ふなやもひ 船病・舟病・苦船【名】前條に同じ。〔古語〕和名「苦船・布奈夜毛非」

ふなやり 船槍・舟槍【名】昔、船軍の時に、敵を引き寄せ、又は突き、或は船を寄するに用ひし物。形に、月輪(ガツリン)・片鎌・十文字の種類ありたり。

ふなゆ 船湯・舟湯・湆・滓【名】あか(湆)に同じ。和名「湆、布奈由」

ふなゆさん 船遊山・舟遊山【名】ふなあそび(船遊)に同じ。三代男「隅田川原の船遊山」

ふなーよす 船寄す・舟寄す【動下二自】船を寄す。〔古語〕壬二集「秋は來ぬ紅葉の御舟ふなよせよ棚機つめの天の川をさ」

ふなーよせ 船寄・舟寄【名】船を寄すること、又その所。夫木「ふなよせの岸の上なるかど屋より怪しや妹が見えかくれする」

ふなーよそひ 船裝・舟裝・艤【名】出船の用意。ふなもよひ。ふねかざり。艤裝。月詣集「日より待つ浮世の岸のわたしもり今ぞ御法(ノリ)のふなよそひする」

ふなーよどめ 船淀・舟淀【名】船の進行を滯らしむること。〔古語〕未本「渡守ふなよどめすな棚機の年に逢ふ夜はただ今宵のみ」

ふなよばひ 船呼・舟呼【名】船を招くとて呼ばはる聲。盛衰記「難波の里に飛ぶ蚤、蘆屋の沖の舟よばひ」五人女「堅田の舟よばひも、若しやは京よりの追手かと、心玉も沈みて」

ふなら-ふなら【貌】ふなふなに同じ。今國姓爺「何故遅きと氣遣ふ處へ、ふならふならと歸る犬獅子」

ぶ-なり 不形【名】容態の宜しからざること。格好の悪しきこと。不格好。甲陽軍鑑「跛(ナリ)で、片目にて、色黒くぶなりにて」鬼貫「戀知らぬ女の粽(チマキ)不形なり」

ふ-なれ 不馴・不慣【名】馴れざること。慣熟せざること。

ふなわた 船綿・舟綿【名】ふなわたぼうし（船綿帽子）の略。

ふなわたし 船渡【名】一船にて、荷物又は往来の人を、對岸に渡すこと、又往来の人を渡す場處。わたし。わたり。わたしば。【舟渡】風雅「四方の海荒かりし浪もしづまりて、船わたしする貢物絶えずなりにければ」丹波與作「馬つぎ・ふなわたし等にて」二【商】『英Free on board』賣買したる商品を、出發地の港にある船の中まで送り届くることによりて、その受渡を結了する方法。三【商】『英Free on board』商品の代價を、その船積結了までの諸入費をも加算して定むること、即ち船積結了までの諸入費を、賣手にて負擔すること、又その代價。普通、F・O・Bを地名の前に記して、その意を表はす。

ふなわたしうけおひ 船渡受負【名】船渡の事を受け負ふこと、又その人。

ふなわたしうけおひにん 船渡請負人【名】船渡の事を請け負ふ人。

ふなわたしだいか 船渡代價【名】【商】本船に積み込むまでに要する費用を加算したる、商品の代價。船乘(ふなのり)相場。

ふなわたーぼうし 船綿帽子【名】綿帽子の一種。甚だ大形なるもの。てぼそ。ふなわた。ほわた。古今綿。まるわたぼうし（丸綿帽子）參照。

ふなわたり 船渡・舟渡【名】船にて、對岸に渡ること、又その所。わたり。わたし。【古語】源氏「あまたの人目をよぎて、ひとり漕ぎ出でたまはんふなわたりの程も」

ふなーね 船居・舟居【名】船を泊め置くこと。後葉集「引く水もけふ棚機にかしてけるふなねするとて」

ふなね 船井【名】【地】丹波國七郡の一。郡役所を園部(そのべ)町に置く。

ふなーのり 船乘・舟乘【名】『ふなのり』（醉ふ）三を見よ』船に醉ふこと。ふなやまひ。船暈(ふなよひ)。【古語】土佐「かのふなのひの淡路の島のおほいこ、都近くなりぬといふを喜びて」

ふなをか 船岡【名】【地】次條に同じ。六帖「船岡に花摘む人の摘みはててさして行くらん方やいづくぞ」

ふなをかーやま 船岡山【名】【地】『形、船に似たるよりいふ』山城國愛宕(おたぎ)郡大宮村にある丘陵。京都市の西北、紫野の西邊。高さ十餘丈、眺望よし。古來雪見の名所にして、圓融天皇の時、子(ね)の日の遊を行ひしこと、古今集等に見え、保元の亂後には、源爲義の諸子、此處に斬られ、又、南北朝以後、屢ば戰爭の巷となれり。

ふなをさ 船長・舟長【名】船子(ふなこ)の頭。せんちゃう。ふなし。

ふ-に 不二【名】彼と此と、内容上より同一なること。一如。ふにほふもん（不二法門）參照。鷄鷺合戰「衣(きぬ)は鼠色にして、…、黒白不二、鷄鷺一味の心を顯すかと覺えたり」

ふ-に 膚膩【名】皮膚のあぶら、又、脂著きたる皮膚。謠曲（安達原）「膿血(うみち)忽ち融潰し、臭穢(しゅうえ)は滿ちて膨脹し、膚膩、ことごとく爛壞(らんえ)せり」

ぶに 分【名】禀分。天惠。

ぶにあひ 不似合【名】似合はしからぬこと。相應せぬこと。

ふにーえうもん 不二要門【名】【佛】ごふふにもん（十不二門）に同じ。八犬傳「恩愛別離の悲も、不二要門の意樂に換へんや」

ふにく 腐肉【名】くさりたる肉。敗肉。

ふにくーちゆうどく 腐肉中毒【名】【醫】腐肉を食したるための中毒症。

ふ-にふ 不入【名】その内へ入り込まぬこと。立ち入るべからぬこと。三河物語「敵・味方不入の處」

ふにーほふもん 不二法門【名】【佛】表面上相容れざるがごとき兩極の處に、内面上より、一如・平等の理、即ち不二の理を觀じ、一心の歸回により、近くこれを實驗・體得すること。ごふふにもん（十不二門）參照。盛衰記「諸佛内證の不二法門あるべしとて」

ふ-にん 不妊・不妊【名】姙娠せぬこと。

ふ-にん 補任【名】一職に補し、官に任ずること。二ふにんじやう（補任狀）の略。

ふにんじやう 補任の下文(くだりぶみ)【句】ふにんじやう（補任狀）を見よ。「地に赴くこと。

ふ-にん 赴任【名】任務のために、遠隔の地に赴くこと。

ぶ-にん 無人【名】人數の少きこと。人手の少きこと。和合人「ぶ人ゆゑ、甚だ不手まはりな事」

ぶ-にん 夫人【名】ふじん（夫人）四に同じ。（佛教に關係ある人にいふ）「摩耶(まや)夫人」「韋提希(いだけ)夫人」

ぶにん 舞人【名】まひびと（舞人）に同じ。

ふ-にんか 不認可【名】認可せぬこと。

ぶ-にんさう 無人相【名】愛敬なき顔つき。ぶっちゃうづら。

ふにん-しやう 不姙症・不妊症【名】結婚後、姙娠せぬ病。原因は、大部分、男女生殖器の痲痺性疾患による。

ふ-にんじやう 不人情【名】人情にかなはぬこと。人情にはづれたること。

ふにん-じやう 補任狀【名】武家時代に、將軍又は諸侯が、その部下の者を、地頭・莊司・鄉司・名主・代官等、莊園又は領地に關係ある諸職に補任する時に、その旨を記して與へし文書。將軍より發するを、補任の下文といひ、諸侯より發するを、補任狀又は補任といへり。

ふにんしよ-こうし 不任所公使【名】公使の職を帶びて、駐在國の定まらぬもの。

ふにんしよ-たいし 不任所大使【名】大使の職を帶びて、駐在國の定まらめもの。

ふにん-ちやう 補任帳【名】古、諸司にて、官位を任授する者の官位姓名・貫屬・年紀等を記載せし帳簿。ふにんぶみ。

ふにん-ぶみ 補任文【名】前條に同じ。

ぶ-にんまへ 無人前【名】一人前にあらざること。甲陽軍鑑「ぶなりにて、しかも無人前にて、百貫の知行、過ぎたると思召し下さるまじく候」

ふにん-みぢゆくしよ 補任御敎書【名】評定衆以上の重職に補任する時の御敎書。

ふ-によ 不如意【名】一心のままにならぬこと。ふがって。二生活のゆたかならぬこと。貧しきこと。

ふ-によ-むし 不如無子【句】【佛】『無量壽經の卷下に「父母敎誨、瞋目怒誓、言令不利、遮戻反逆、譬如二怨家一、不如無子」とあるに本づく】惡子を有するは、全く子無きにも如かざること。盛衰記「無量壽經に、不如無子といへり」

ふ-ぬけ 腑抜【名】『腑が抜く』を見よ』まぬけ。ばか。【俚語】

ふね 船・舟【名】一人又は物を載せて、水上を渡す具。製作種種にして、大なるは軍艦・汽船の類より、小きは、ボオト・田舟の類に至るまで、一樣ならず。二水又は酒などを盛る、箱の如き器。【槽】禁經抄「御船一桶二、内侍候二御垢一」三くわん（棺）に同じ。四紋所の一。船一に象(かた)りたるもの。

ふね 船【句】一船、水底に附きて、動かず。二尻を据ゑて、容易に去らず。腰が坐る。【俚語】曾根崎心中「今宵も、明日(あす)も、明後日(あさて)も、揚詰(あげづめ)の大大盡(だいじん)、お船がすわった」

ふね 船に刻(ふなざみ)みて、劍を求む【句】「劍を落して、船を刻むに同じ。【諺語】

ふね 船にきだ附く【句】前條に同じ。【諺語】琴後集「株(かぶ)を守り、舟にきだ附くる輩、かれに泥み、ここに引かれて」

ふね 船に懲りて、膾を忌む【句】「黒犬に噛まれて、灰汁(あく)の垂涎(かえん)に怖ぢる」に同じ。【諺語】

ふね 船に乘る【句】槽にて、醪(もろみ)を壓搾す。

ふね 船の足【句】ふなあし（船脚）に同じ。

ふね 船の樂(がく)【句】ふながく（船樂）に同じ。源氏「唐(から)めいたる船造らせ、……うたづかさの人召して、船の樂せらる」

ふね 船の路【句】船の通ひ行く路。ふなみち。ふなぢ。謠曲（竹生島）「のどかに通ふ船の道」

ふね 船、山に上(のぼ)る【句】「船頭多くして、船、山に上る」を見よ。

ふね 船を漕ぐ【句】『艪を扱ふさまに見なしていふ』居睡をなし、時時、身體の重心を失ひて、倒れかかる體。漕ぐ。

船を好む者は溺る【句】『越絶書に「夫好レ船者溺、好レ騎者墮。君子各以レ所レ好爲レ禍」とあり』人は、好みてなす物事に於て、禍を招くこと多き譬。善く游ぐ者は溺る。【諺語】

船を差す【句】棹を差して、船を進め遣る。ふねさし(船差)參照。

船を沈め、釜を破る【句】『史記の項羽本紀に「項羽乃悉引レ兵而渡レ河、皆沈レ船、破二釜甑一、燒二廬舍一、令レ持二三日之糧一以示二士卒必死一無二還心一」とあるに本づく』死を決して、戰に臨む。背水の陣を布く。

ふねあらため【船改】四(ヨ)の船【句】古、大使・副使・判官・主典の四人の遣唐使の分乘せし、四艘の船。萬葉「四つの船(フネ)早還り來(コ)としらがづく朕(ア)が裳の裾に鎭(シヅ)ひて待たむ」

ふねあらためじょ【船改所】【名】明治八年北海道の諸港に置かれ、北海道より、他の地方に向ひて出港する船舶に課する出港稅を取り扱ひし役所。同二十年廢せり。

ふねあらためぼくいんしゆう【船改墨印衆】【名】かはふねあらためやく(川船改役)の舊稱。

ふーねい【才】不佞【名】才氣の無きこと。不才。

ふーねい【不佞】【代】第一人稱の謙稱。われ。おのれ。不才。「よ。

ふねい【普寧】【名】〔人〕ごうあん(元庵)を見よ。

ふーねう【富饒】【名】富みて賑はしきこと。ゆたか。

ぶーねう【豐饒】【名】ほうぜう(豐饒)に同じ。本朝三國誌「治まれる我が君の惠ある世の民安樂、五穀ぶねう、萬萬歲」

ふねーかぶ【船株】【名】汽船會社の株。

ふねーぎらひ【船嫌・舟嫌】【名】船に乘ることを嫌ふこと、又その性質の人。

ふねーさし【船差・舟差】【名】『「船を差す」を見よ』船を棹にて漕ぎやる人。せんどう。「古語」拾遺「御船さし、色色の狩襖(カリソ)にて、八人づつさまざまなり」

ふねーすずみ【船涼・舟涼】【名】船にて涼むこと。俳諧新選(百萬)「茹蛸(ユデダコ)の砧たのもし舟すずみ」

ふねーなり【船形・舟形】【名】船のかたち。ふながた。續猿蓑(東潮)「船なりの雲しばらくや星の影」

ふねーのつかさ【船主】【名】大寶令の制にて、太宰府に置かれ、舟楫を修理することを掌りし職。定員一人。

ふねーのりあひーはっと【船乘合法度・舟乘合法度】【名】船の衝突したる場合に關する昔の法律。

ふねのりーはじめ【船乘初・舟乘初】【名】每年正月二日に、その年の船の乘初を祝する式。船人は、船靈祭(フナダママツリ)をなし、船匠は、釿始(ヨキハジメ)の壽をなす。

ふねーぶね【船船・舟舟】【名】多くの船。春日(カスガ)「舟舟の小松に雪の殘りけり」

ふねーへん【舟偏】【名】漢字の偏の一。船・艦・舳・艫などの左にある舟の字。

ふねーまど【船窓・船牕・舟窓・舟牕・舷】【名】ふなまど(船窓)に同じ。「に同じ。

ふねーみち【船路・舟路】【名】ふなみち(船路)に同じ。

ぶーねん【無念・不念】【名】心附かずして起りたること。不注意。醒「念(ネ)の過ぐるは無念」きのふはけふの物語「談合人の無念か」

ふねんけつ【不粘結】【名】石炭を燒きて、コオクスとする時、木炭末の如く粉狀をなすこと。無煙炭のコオクスの如き、これなり。(粘結に對して)「(船裝)に同じ。

ふねーよそひ【船裝・舟裝・艤】【名】ふなよそひ

ふねわけーせん【船別錢・舟別錢】【名】昔、船を上・中・下の等級に分ちて課せし船役。

ふーのう【不能】【名】一能の無きこと。不才。二ふかのう(不可能)に同じ。

ふーのう【不能問題】【句】〔數〕ふのうもんだい(不能問題)に同じ。

ふーのうくわい【府農會】【名】農會の一。府の區域内に於ける郡農會及び市農會を以て組織するもの。「條下を見よ。

ふーのうちどり【府の内取】【句】ふ(府)の〔植〕紅色藻類に屬する海藻。海岸の石に附著して生じ、管狀にして長さ二三寸、岐あり、表面粘滑、淡水に遭へば、暫菜(ス)色に變ず。通常販賣せるは、一旦乾燥せしめたる上、水に洒し、煮沸して、粘性を帶ぶるに至れるを、簀の上に擴げ、再び濾き乾して、紙のごとくにして貯へたるもの。煮て、婦人の髮洗、又は張物の糊とし、又、未だ濾かざるものは食ふべし。

ふーのり【布海苔・布苔・海蘿・鹿角菜】【名】〔植〕ひじき(鹿尾菜)に同じ。

ふのりーかづら【布海苔葛】【名】〔植〕さねかづら(實葛)を云ふ。「土佐國の方言」

ふのりーのし【布海苔熨斗】【名】布海苔又は沖津海苔などを煮て、梔(クチナシ)にて色を著け、琉球表などの上に流して乾し、截りて、熨斗となしたるもの。

ふは【不破】【名】〔地】一美濃國十五郡の一。郡役所を垂井(タルヰ)町に置く。二ふはのせき(不破關)の略。

ふは【貌】一輕く柔かに動き、又は輕やかに返る舞ふ狀。ふはり。ひらり。博多小女郎浪枕「著流上著(キナガシガケ)、ふはと著せ」最明寺殿百人上臈「馬に、……ふはと乘り」二うかに同じ。狂言「鬮取」「總じて、人は、乘せらるるといへども、譽められるは嬉しいものぢや。そこで、某がふはと乘って」

ふーば【駙馬】【名】一乘輿に用ふる副馬。二『支那漢の武帝の時、駙馬都尉の官を置きしが、魏・晉の代より、天子の女壻たる者は、必ずこの官に拜する習となりしよりいふ』天子又はその他の貴人の女壻。

ぶーば【舞馬】【名】次條を見よ。

ふはい【腐敗】【名】一食物などのくさること。二〔化〕『英Putrefaction』蛋白質のごとく窒素を含める有機物が、微生物によりて醱酵を起し、その際、惡臭を發すること。又その際、往往、プトマインと稱する、アルカロイド類似の劇毒物を生ずることあり。三精神の墮落すること。

ふ-はい 蕪廢【名】土地の荒れすたるること。荒蕪。廢蕪。

ふばい 分陪・分倍・分楳・分梅【名】〔地〕武藏國北多摩郡西府(ニシ)村にある地。その多摩川に沿へる所を、分陪河原といふ。太平記「その勢、……分陪に著きければ」

ふばい-がはら 分陪河原・分倍河原【名】〔地〕前條を見よ。

ふはい-きん 腐敗菌【名】『獨 Fäulnis-bakterien』物を腐敗せしむる細菌。飲食物の腐敗して、臭氣ある瓦斯、卽ちアンモニヤ・シヤン・硫化水素などを發生するも、これ等、細菌の作用に因る。

ふはう 訃報【名】**ふいん**(訃音)に同じ。

ふばう 誣妄【名】**ふまう**(誣罔)に同じ。

ふばう 誣謗【名】根なしごとを言ひてそしること。

ぶ-ばう 毋望【名】希望せざるに、思ひがけなく到ること。「毋望の福」

ふはう-じゆんぢ 缶寶順治【名】手替(ガヘ)の古錢の一。順治通寶の寶の字が「寶」となれるもの。

ふはう-らう 符寶郎【名】**しゆれい**(主鈴)の唐名。

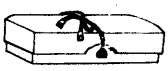
ふは-かずゑもん 不破數右衞門【名】〔人〕**ふはまさたね**(不破正種)に同じ。

ふ-はく 布帛【名】もめんと、きぬと。

ふ-はく 浮薄【名】**けいはく**(輕薄)に同じ。

ふ-はく 膚薄【名】**ふせん**(膚淺)に同じ。

ふばこ 文箱・文筥【名】『ふみばこ(文箱)の略』書狀を入れて運び屆くるに用ふる箱。ふみばこ。狀箱。〔古語〕源兵「願文どもを、大きなる沈(ジン)のふばこにふんじこめて」二十四孝「はっと領承、文箱携へ、顯尻差して急ぎ行く」


(こばこ)

ふばさみ 文挾【名】**ふみばさみ**(文狹)の略。〔古語〕竹取「一人の男、ふばさみに文をはさみて申す」

ふ-はつ 不發【名】彈丸の、製造不完全等のために、發射しても、破裂せぬこと。

ふ-はつ 桴筏【名】いかだ。

ふ-ばつ 不抜【名】ぬきとり難きこと。移動しがたきこと。「堅忍不抜」

ふはつ-だん 不發彈【名】製造不完全等のために、發射しても、破裂せぬ彈丸。

ふはの 不破野【名】〔地〕美濃國不破郡にある野。この國三大野の一。別稱、青野原(ガハラ)。**みの**(美濃)參照。

ふはの-せき 不破關【名】古の三關の一。美濃國不破郡松尾村字藤川の岸に設け、東山道の要衝に當りしもの。壬申の亂後の設置に係るもののごとく、延曆八年廢してより、荒蕪に歸し、その東方の原野は、今なほ、關ケ原の名を留む。月漁ふるさとに見し面影もやどりけりふはの關屋の板間もる月」

ふはのなかやま 不破中山【名】〔地〕美濃國不破郡今須(イマス)村と關ケ原との間の峠なる伊勢(イセ)峠の中世の稱。古くは、單に、不破山とも呼び、萬葉集に和村美(ワビ)嶺とあるも、これなりといふ。藤葉集「秋はなほ月にや人のとまるらん關屋は荒れし不破の中山」

ふ-はふ 不法【名】法にはづれたること。道にはづれたること。無法。「じ。

ふはふ 普法【名】〔地〕**ふふつ**(普佛)に同じ。

ふはふ-かうね 不法行爲【名】〔法〕『獨 Unerlaubte Handlung』故意又は過失によりて、他人の權利を侵害して、損害を被らしめたる行爲。**みんじほん**(民事犯)參照。

ふはふかうね-のうりよく 不法行爲能力【名】〔法〕行爲能力の一。不法行爲の責任を辨識する能力。

ふはふ-かんきん 不法監禁【名】〔法〕自己に、その權利なきに拘らず、他を制縛し、又は建築物内に監禁すること。

ふはふかんきん-ざい 不法監禁罪【名】〔法〕不法監禁をなしたるに因りて成立する犯罪。監禁罪。

ふはふ-けいやく 不法契約【名】〔法〕『英 Immoral contract』法律上禁止せる條件又は行爲に依る契約。例へば、春毒賣買の契約の類にて、法律上無効なりとす。

ふはふ-せんき 普法戰記【名】〔書〕普佛戰爭を記せるもの。八卷。支那清の王紫詮の著。

ふはふ-たいほ 不法逮捕【名】〔法〕自己に、その權利なきに拘らず、他を逮捕すること。

ふはふ-たいほざい 不法逮捕罪【名】〔法〕不法逮捕をなしたるに因りて成立する犯罪。

ふはふ-てうけん 不法條件【名】〔法〕條件の一。その事項の不法なるもの。

ふはふ-てんくわん 不法轉官【名】〔法〕文官分限令に、官吏はその意に反して、同等官以下に轉官せらるることなしとの保障あるにも拘らず、その意に反して、轉官せしむること。

ふはふは【貌】㊀落ちつかぬさま。今川大草紙「夏などは、ふはふはとして、人前に出で合ふ事あるべからず」㊁輕く又はふくらかに柔かなるさま。今宮心出「玉子をまるるしるしに、左の脈が、ふはふはと打ちまする」

ふはふは-たまごふはふは玉子【名】鷄卵を、ふはふはと、柔く固まらぬやうに煮たる食品。吸物などとす。

ふはふ-もの 不法者【名】不法なる人。不法なる行をなす人。無法者。不埒者。脅迫詐僞、若しくは恐喝により、又は未成年者の智慮淺薄、若しくは、人の心神耗弱に乘じて、財産上不法の利益を得、若しくは、他人をして、これを得しむること。

ふはふり-とく-ざい 不法利得罪【名】〔法〕不法利得に因りて成立する犯罪。

ふは-まさたね 不破正種【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。數右衞門と稱す。本姓は岡野。不破家に養はる。長矩に仕へて馬廻たり。元祿十六年死を賜はる。年三十四。

ふはん 普汎【名】**ふへん**(普遍)に同じ。

ふ-はん 布帆【名】布にて作りたる帆。

ぶ-ばん 分判【名】**いちぶばんきん**(一分判金)を云ふ。〔京都・大阪の語〕「同じ。

ぶばん-きん 分判金【名】**ぶきん**(分金)に同じ。

ふ-はんじやう 不繁昌【名】繁昌せぬこと。八笑人「當所不繁昌の……もとゐなるべし」

ふはんてき-へいかうせつ【名】〔哲〕次條に同じ。

ふはんてき-へいかうろん 普汎的並行論【名】〔哲〕『英 Universal parallelism』一切の物質過程と一切の心意過程とは、相並行して、その間に、伴生の關係ありとなす說。普汎平行說。

ふはや-がした【句】ふはりと柔かなる物の下。〔古語〕記「あや垣のふはやが下にむしぶすまにこやが下に栲(タク)ぶすまやぐが下に」

ふはや-ま 不破山【名】〔地〕**ふはのなかやま**(不破中山)を見よ。萬葉「眞木立つ不破山越えて狛劍(コマツルギ)和豐(ワブ)が原の行宮(カリミヤ)に天降(モ)りいまして」

ふはらひ 不拂【名】支拂はぬこと。

ふはり【貌】㊀落ちつかぬさま。㊁輕く又はふくらかに柔かなるさま。

ふ-ばる 武張る【動四自】武勇なる樣子をなす。八笑人「彌五郎だけは、思入(イヒ)武強(タケ)って拵(コシラ)へよう」

ふ-び 不備【名】㊀備はりてあらぬこと。完備せぬこと。㊁**ふい**つ(不乙)に同じ。

ぶ-び 武備【名】いくさの準備。軍備。兵備。

ぶ-びき 歩引・分引【名】歩合(ブアヒ)を減ずること。幾分の割引。(歩增(ブマ)に對して)歩引の位(クラヰ)【句】銀の品位の、極めて劣等なること。一貫目を、九百九十九匁にて買ひ上ぐるを一歩引といひ、なほ、二歩引・三歩引等あれど、五歩引を越ゆるはなし。〔德川時代の語〕

ふ-ひきあひ 不引合【名】引合はぬこと。

ふ-ひきうけ 不引受【名】〔商〕手形の支拂人が、その手形に缺點あるため、又は自己の惡意に依りて、支拂の引受をなさざること。

ふひきうけ-てがた 不引受手形【名】〔商〕**ふわたりてがた**(不渡手形)に同じ。

ふ-ひつえう 不必要【名】必要ならぬこと。不用。

ふ-びと 史【名】『文人(ふびと)の略』一事を記す官職。記錄を掌る役。〔古語〕紀「國史、クニノフビト」二上古の姓(かばね)の一。この姓を有せしは、多くは歸化人の、事を記す官職に在りし者なり。天武天皇の御代の制定に係る八色の姓には、この稱無し。天平寶字九年、皇室の外戚なる藤原不比等(ふひと)の諱に觸るとて、毘登(ひと)と改稱せしが、寶龜元年舊稱に復せり。

ぶ-ひとがら 不人柄【名】人柄ならぬこと。下品。八笑人「どうして、そんな不人柄な事を知るものか」

ふびと-べ 史部【名】應神天皇の時、歸化せし王仁(わに)と阿知使主(あちのおみ)との族人の、文筆に從事せしもの。ふむひとべ。西(かわち)の史(ふびと)【句】『河内國は、大和國の西方に當るより、次條の語に對して、西の字を用ふ』歸化人王仁(わに)の子孫たる史部(ふびと)。河内國に住したり。東(やまと)の史(ふびと)【句】『東の字を用ふるにつきては、前條參照』歸化人阿知使主(あちのおみ)の子孫たる史部(ふびと)。大和國に住したり。

ふ-びん 不便【名】一便(べん)なきこと。都合わろきこと。〔古語〕然(さ)かかる雨にのぼりはべらば、足形(あだち)つきて、いとふびんに、きたなげになりはべりなん」二あはれむべきこと。いとほしと思ふこと。かはいさう。「不憫」著聞「宇治左府、隨身公春を不便に思し召したること」不便を掛く【句】**ふびんがる**(不便がる)に同じ。五人女「又もなき歎、見し人、不便をかけざるはなし」

ふ-びん 不敏【名】敏捷ならぬこと。(自己を謙遜していふ)

ふ-ひんかう 不品行【名】品行のよからぬこと。ふみもち。

ふびん-がる 不便がる・不憫がる【動四自】いとほしと思ふ。あはれむ。一代男「長八といへる男を不便がり」

ふ-ひやう 歩兵【名】一身分低くして、騎せず、乘ぜずして、戰ふつはもの。歩兵(ぶ)。平家「このともがらは、皆、歩兵にこそ侍りぬれ」二ふ(歩)に同じ。「の略。

ふ-ひやう 不評【名】**ふひやうばん**(不評判)

ふ-ひやう 浮秤【名】『英 Hydrometer』比重計の一。液體の中に浮べて、その比重を測定するもの。

ふ-びやう 風病【名】かぜ。風邪。感冒。ふうびやう。**ふうびやう**(風病)參照。〔古語〕源氏「ふびやう重きにたへかねて、極熱(ごくねつ)の草藥(さうやく)を服(ふく)して」きのふはけふの物語「再再風病が出るほどに」「略。

ふ-びやう 腹病【名】**ふくびやう**(腹病)の

ぶ-びやうし 不評子・無拍子【名】無器用なる拍子。胸算用「口三味線の無拍子に、頭(つむ)を振りまはして」「こと。

ふ-びやうどう 不平等【名】平等ならぬ

ふびやうどう-くわ 不平等花【名】〔植〕『英 Asymmetric flower』いかなる方向に縱斷すとも、對稱面を有せざる花。例へば、金魚草の花、これなり。(平等花に對して)

ふびやうどう-くわんけい 不平等關係【名】平等又は對等ならざる關係。(平等關係に對して)

ふひやうばん 不評判【名】評判のよからぬこと。不評。「らぬこと。

ふひやう 浮氷・浮冰【名】〔地〕『英 Floe』高緯度の地方にありて、海水一面に氷結せるもの。

ふ-ふ 封符【名】機密を保つために、封緘して下す符。百練抄「宰府可レ賜二封符一者」

ぶ-ふ 武夫【名】もののふ。武士。武人。

ぶ-ふ 武府【名】〔地〕『武藏國の國府(こふ)』の異稱。〔古語〕藏玉集「五。吹喜月。ほととぎす初音の後も吹喜月なほあかなくにをち歸り鳴け」

ふ-ふき-まじり 吹雪交【名】風の、吹雪(ふぶき)を伴なふこと。根岡志具佐後寫「次第に夜陰の空寒く、雪吹まじりに吹く風は」

ふ-ふぎやう 賦奉行【名】**くばりわけぶぎやう**(賦別奉行)に同じ。

ぶぶきやう 武部卿【名】武部省の長官。續紀「從三位藤原朝臣乙麻呂爲二武部卿一」

ふぶき-ゆき 吹雪雪【名】紋所の一。櫻の花瓣の如き形を、輻射狀に六箇並べ、その外邊の接合點へ、同じ花瓣の一部を添へたるもの。

ふ-ふく 俯伏・俛伏【名】一畏れ入りて、頭を下げ、うつむくこと。二**しんいふく**(深樫)に同じ。中右記「深樫(謂二之俛伏一)」

ふ-ふく 不服【名】一服從せぬこと。二不滿足に思ふこと。不平。不滿。不服申立(ふくもうしたて)【句】〔法〕行政官廳の處分又は司法裁判所の裁判に對して、不服ある場合に、その旨を、當該官廳・當該裁判所、又は上級官廳・上級裁判所に陳述する手續。

ふ-ふく 【動四自】一吹きに吹く。烈しく吹く。蜻蛉「雨風、いみじく降り吹くに」源氏「風、烈しう吹きふぶきて」二風、雪まじりに、烈しく吹く。六百番歌合「にほはずばふぶく空とぞ思はまし花散り迷ふ志賀の山越」

ぶ-ぶしやう 武部省【名】**ひやうぶしやう**(兵部省)を、天平寶字二年八月、一時改めて呼びし稱。

ふ-ふつ 普佛【名】〔地〕普魯西(プロシア)と佛蘭西(フランス)と。「普佛戰爭」

ふ-ふどり 布穀鳥【名】〔動〕**くわくこう**(郭公)に同じとも、**つつどり**(筒鳥)に同じとも いふ。或は又**ふくどり**(鵠鸐)に同じきか。〔古語〕和名「布穀鳥、布布止利」

ふ-ふまる 含まる【動四自】**ふくまる**(含まる)に同じ。〔古語〕萬葉「あと思(も)へかあじくま山の樒葉(しきみば)のふふまる時に風吹かずかも」

ふ-ふむ 含む【動四自】**ふくむ**(含む)に同じ。〔古語〕萬葉「春日野に咲きたる萩は片つ枝は未だふふめり言(こと)な絕えそね」

ふ-ふむ 含む【動四他】**ふくむ**(含む)に同じ。〔古語〕紀「衛之、フフミモチタマヒテ」

ふ-ふん 【感】あなどる氣味にて笑ふ聲。ふん。ふ。和合人「和二郎も、ふふんと笑ひながら」

ふ-ふん 風聞【名】**ふうぶん**(風聞)に同じ。運歩色葉集「風聞、フブン」

ふ-ふん 不文【名】一文書に書きあらはさぬこと。不成文。二文事に通じてをらぬこと。文字を知らぬこと。ふもんじ。醒睡笑「一向不文なる者、平家を聞かんと行き」「たるその一つ。

ぶ-ぶん 部分【名】物事を幾つかに分ちたる一つ一つ。

ぶぶん-かいせん-しゆぎ 部分改選主義【名】〔法〕總選擧に關し、議員の任期中、その一部分づつを數回に改選して、その全員に及ぶ主義。市町村會議員の選擧のごときは、その一例なり。(全部改選主義に對して)

ふぶん-くわんしふ 不文慣習【名】慣習㊀の、文書によりて、集錄せられぬもの。

ふぶん-けんぽふ 不文憲法【名】〔法〕文書を以て發布することなき憲法。(成文憲法に對して)

ふぶん-しよく 部分蝕・部分食【名】〔天〕ぶんしよく(分食)に同じ。

ふぶんてき-ざいさんぜい 部分的財産稅【名】〔法〕さくべつざいさんぜい(特別財産稅)に同じ。

ふぶん-にっしよく 部分日蝕・部分日食【名】〔天〕部分餌なる日餌。

ふぶん-はふ 不文法【名】〔法〕ふせいぶんはふ(不成文法)に同じ。(成文法に對して)

ふぶん-はふりつ 不文法律【名】〔法〕前條に同じ。(成文法律に對して)

ふぶん-ひきうけ 部分引受【名】〔商〕手形金額の、一部分のみの引受。

ふぶん-ひん 部分品【名】相合して、一箇の完全なる機械などを構成する、各部分の品。

ふぶん-ぼく 部分木【名】ぶぶんりん(部分林)に同じ。

ふぶん-よさん 部分豫算【名】〔法〕各部分を別別に編製したる豫算。例へば、歲入と歲出とを、各別箇のものとし、又は各省ごとに、その豫算を區分しなどして調製する類。(總豫算に對して)

ふぶん-りつ 不文律【名】〔法〕ふぶんほふ(不文法)に同じ。(成文律に對して)

ふぶん-りっぱふ 不文律法【名】〔法〕前條に同じ。(成文律法に對して)

ふぶん-りん 部分林【名】借地林の一。個人又は法人が、私費にて、官地に造林し、成木の後、その收益を官民に分收する方法のもの。その例、歐洲には少けれど、我國には、古來存し、現今は、多く國有林に行はれ、官民收益の比率は、大抵、官二民八又は官三・民七なり。

ふぶんりん-だいちやう 部分林臺帳【名】明治三十九年十一月以前、部分林に關する事項を登錄するために、大林區署に備へつけたる帳簿。

ふへい 浮萍【名】㊀うきくさ。㊁住所の一定せぬことの譬。「稱。

ふへい 賦兵【名】ちようへい(徵兵)の舊

ふへい 不平【名】㊀『莊子の列禦寇篇に「以二不平一平二其平一也不レ平」とあり』心の平穩ならぬこと。喜怒哀樂等、種種の感情を發すること。㊁滿足せぬこと。不滿。不服。「不平を抱く」「つ。不平を鳴(ラ)す【句】不平を言ひ立

ふへい 貢米【名】米を、俵などに入れて貢ふこと。

貢米の歎(ン)【句】『孔子家語の致思篇に「子路嘗曰、昔者、由也事二二親一之時、常食二藜藿之實一、爲レ親負二米百里之外一、とあるに本づく』孝養を盡さんとするも、既に父母なきかなしみ。

ふへいか 不平家【名】不平の心を抱ける人。不平を訴ふる人。

ふへいきん 不平均【名】平均せぬこと。

ふへいたう 不平黨【名】不平家たちの團體。

ふへいれん 不平連【名】不平なる人人。

ふへう 譜表【名】〔音〕『英 Stave』西洋樂譜にて、平行せる横線に、音符を排置し、その位置の高低によりて、音の高低を示すやうにせるもの。横線の數は、古は、三條・四條等より、多きは、數十條に及ぶものもありしが、現今は普通五條にて、五線と呼び、なほ必要なる場合には、その上又は下に、短き横線を附加することとし、その短線を、加線又は附加線といふ。**れんがふへう**(連合譜表)・**そうふへう**(總譜表)參照。

ふへう 浮標【名】河海の水面に於ける一定の場所、例へば、暗礁・洲(ス)又沈下物の所在などを示すために、その上に浮べおく目標。「浮。

ふへう 浮漂【名】浮びただよふこと。漂

表面にあらはれぬこと。

ふへうげん-ちえきけん 不表現地役權【名】〔法〕地役權の一。その行使が、外部的設備によりて表現せられざるもの。例へば、通路の開設せられざる通行權、地下の水道によりて、水を通ずる權利などの類。(表現地役權に對して)

ふへう-しよくぶつ 浮漂植物【名】〔植〕池沼などの水中に浮標する植物。例へば、猩藻(ショウモ)・絲藻(イトモ)などの類。

ふへう-すゐらい 浮漂水雷【名】〔兵〕『英 Buoyant mine』視發水雷の一。海底水雷を使用しがたき深海の場合に、水面下任意の深度に布設するもの。(海底水雷に對して)

ふへき 斧劈【名】〔美〕文人畫の皴(シュ)の一。斧にて劈(ヘキ)きたる痕跡のごとき狀に描く。大斧劈・小斧劈の別なり。

ふへつ 賦別【名】くばりわくること。

ふへつ 部別【名】部類によりて區別すること。ぶわけ。「ること。

ふへつ 侮蔑【名】侮(アナ)り蔑(シナイザ)にすること。ぶべつ。

ふへつぴん 不別嬪【名】別嬪ならざること、又その人。醜婦。

ふへつ-ぶぎやう 賦別奉行【名】鎌倉室町兩時代の職制の一。吏民の訴狀を受けて、年月日を記し、自ら名を署して、引付方・恩賞方・安堵方等に分配して處分せしむる事を掌りしもの。賦別(フベツ)奉行。諸亭賦別奉行。

ふへん 不偏【名】かたよらぬこと。偏せず不偏不黨【句】何れに對しても、仲間とならず、公平・中立の地位に立つこと。無偏・無黨。「ぬこと。

ふへん 不變【名】變らぬこと。變化せぬこと。保元「たとひ不返の流罪(ルザ)に行はるとも」

ふへん 不返【名】返さぬこと。返戻せぬこと。

ふへん 普遍【名】㊀一般に行きわたること。あまねきこと。㊁〔哲〕『羅 Universalia』一群の對象のすべてに、遍く通じて存すること。箇箇の事物の、一の概念に統一せらるる關係。普遍性。普況。

ふべん 不便【名】たよりあしきこと。便利ならぬこと。不便利。

ふべん 不辨【名】物事の、思ふがままにならぬこと。足らぬがちなること。貧しきこと。甲陽軍鑑「御臺所入これなくして、事不辨にましますに」きのふはけふの物語「おちご樣、御里が、不辨さに、晴がましき時は、何もかも借物ぢや」「こと。

ふべん 武邊【名】武道に關係してある武邊を立つ【句】武道を發揮す。武道の名折(ナヲ)とならぬやうにす。我妻「町人といへども、武邊を立て、辻切・喧嘩、處處にあり」

ふべん 武弁【名】『弁は冠の義』㊀『魏志の陳思王植傳に「辭二遠遊一、戴二武弁一、解二朱組一、佩二青紱一」とあり』武官の用ふる冠(カン)。㊁さむらひ。武士。

ふへん-がいねん 普遍概念【名】〔哲〕ふうがいねん(普通概念)に同じ。

ふへんかう 不變更【名】變更せぬこと。

ふへんかう-しゆぎ 不變更主義【名】〔法〕科刑權は、任意に變更すべからず、となす主義。

ふへん-きかん 不變期間【名】〔法〕『獨 Notfrist』訟訴行爲をなすべき法定の期間にして、變更し得べからざるもの。即ち故障又は上訴の期間、除權判決に對する不服申立、及び仲裁判斷取消の訴を起すべき期間をいひ、この期間内に、訴訟行爲をなさざる時は、失權の效果を生ずるものとし、ただ、天災・事變等によりて、期間を遵守すること能はざりし場合に限りて、原狀回復を許さる。

ふへんじ 不返事【名】いやいやながらの返事。なまへんじ。重井筒「病人といひ、兄の命(イ)、異議も言はれず、不返事に、もぢもぢしてぞ上りける」

ふへんしんによ 不變眞如【名】〔佛〕眞如の、寂靜(ジヤクジヤウ)にして不變なる相。

ふへんしや 不辨者【名】不辨なる人。貧者。ふべんもの。醒睡笑「ある侍の指物(サシモノ)に、ふべんものと書きたり。……私の心持、隱もなきふべんしやと、述懷の旨を書

きて候」

ぶへんしや 武邊者【名】■武道に關係する人。ぶへんもの。■一郡・一城を領するほどの侍大將。

ふへんしゆぎ 普遍主義【名】〔哲〕**ふへんろん**(普遍論)■に同じ。(個人主義に對して)

ふへんしよく 不變色【名】變色せぬこと。色のかはらざること。

ふへんせい 普遍性【名】〔哲〕**ふへん**(普遍)■に同じ。

ぶへんだて 武邊立【名】『武邊を立つ』を見よ』武邊を發揮すること。武道の名折(ナヲ)とならぬやうにすること。

ふへんてきくわいらくせつ 普遍的快樂說【名】〔哲〕**こうしゆうてきくわいらくせつ**(公衆的快樂說)に同じ。(分量的快樂說に對して)

ぶへんばなし 武邊話【名】己の戰場における功名・手柄を誇り語ること。轉じ狹間潛(ハザマ)の武邊話」「者」に同じ。

ふべんしや 不辨者【名】**ふべんもの**(不辨者)に同じ。武家義理物語「世にかくれなき武邊者、大平(ヒラ)丹藏といへる男」

ふべんもの 不辨者【名】**ふべんしや**(武邊者)に同じ。

ふべんり 不便利【名】**ふべん**(不便)に同じ。

ふへんろん 普遍論【名】〔哲〕『英 Universalism』■一般に、特殊よりも普遍を、箇體よりも全體を重んずる立脚地。眞の實在を、永遠にして、普遍なるものとし、箇體として顯現する現象的實在は、第二次的實在にして、單に、この普遍なるものの、一時的に結合する限に於て存在するに過ぎずとなす。(箇體論に對して)■(個人論に對して)

ぶまる 夫丸【名】夫(ブ)。人夫。運少色葉集「夫丸、ブマル」

ふみ 文【名】『文の字の音「ふん」の轉訛なるべしといふ』一かきもの。文書。書籍。紀「經典、フミ」二てがみ。書狀。土佐守(カミ)の館(タチ)より呼びに、ふみ持て來れり」三學問。文學。漢學。【古語】拾穗「ふみの道」源氏「ふみの師」四詩。漢詩。**さくもん**(作文)參照。【古語】垂「小野殿に人人集まりて、あそびし、文つくりけるに」源氏「探韻賜はりて、ふみ作りたまふ」五紋所の一。文(フ)一の形に象(カタド)りたるもの。開文(ヒラキ)と呼ぶもあれど、多くは結文(ムスビ)にて、「玉章(タマヅサ)」、「丸(ガン)に文」、「文車(フミグルマ)」、「戀文(コヒブミ)」などの種類あり。

ふみ 文の箱【句】**ふばこ**(文箱)に同じ。「文の箱は、多くは、右に附く」

ふみ 文は遣りたし、書く手は持たず【句】無筆者の嘆きていふ語。【諺語】

ふみ 文を遣るにも書く手を持たず【句】前條に同じ。【諺語】

ふみ 書【名】**ふみのつかさ**(書司)の略。「尚書(カウシヨ)」「典書(テンジヨ)」

ふみ 書の博士(セカ)【句】古、皇子御誕生の後、御湯殿の儀式ある時、一人づつ進み出でて、讀書の事を奉仕せし、紀傳・明經(ミヤウギヤウ)などの博士。讀書の博士。榮花「御書の博士には藏人辨(クラウドベン)廣業(ヒロナリ)、高欄のもとに立ちて、史記の第一の卷を讀む」

ふみ 書讀む博士(セカ)【句】前條に同じ。紫式部日記「書讀む博士、藏人辨(クラウドベン)廣業(ヒロナリ)、高欄のもとに立ちて、史記の一卷を讀む」

ふみ 蹈踏【名】『商』定期取引にて、賣買せる物件が、豫想に反し、その取引値段より下落又は騰貴したる時、その損失を少からしむるため、受渡期限に先だちて、轉賣又は買戻をなすこと。これを爲すを、踏む又は蹈退(フミノ)くといふ。

ふみ-あざる 踏求食る・踏求食る【動四自】**ふみもとむ**(蹈求む)に同じ。

ふみ-あたす 蹈仇す・踏仇す【動四他】強く蹈む。蹈みちらす。【古語】萬葉「天雲(アマグモ)をほろに蹈みあたし鳴る神も今日に益(マ)りてかしこけめやも」

ふみ-あはせ 文合【名】物合の一。多人數左右に分れ、その作を番はせ、判者の批判を請ひて、優劣を爭ふこと。

ふみ-あはせ 蹈合・踏合【名】**ゆきぶれ**(行觸)一に同じ。

ふみ-あひ 蹈合・踏合【名】前條に同じ。

ふみ-あらす 蹈荒す・踏荒す【動四他】蹈みてあらす。蹈みて亂す。ふみちらす。

ふみ-いし 蹈石・踏石【名】履脫(ハキヌ)の處に据ゑおく石。

ふみ-いた 蹈板・踏板【名】一路に架け渡して蹈み行く板。二牛車(ギツシヤ)の前後の口に、横に敷きわたしたる板。しきいた。きへいた。今昔「醉ひぬれば、蹈板に物突き散らして」

ふみ-いる 蹈入る・踏入る【動四自】**ふみこむ**(蹈込む)一に同じ。

ふみ-いる 蹈入る・踏入る【動下二他】強く蹈みて、足を突き入らしむ。宇治「足を、砂子に、塵のなからばかりふみ入れて」

ふみ-うす 蹈臼・踏臼【名】**からうす**(唐臼)に同じ。

ふみ-おこす 蹈起す・踏起す【動四他】一蹈み分けゆきて、驚かし起(オコ)たす。ふみたつ。萬葉「朝獵(アサリ)にし踐(フ)み起しタ獵に鳥ふみ立て」二再び興り榮えしむ。室町千疊敷「中頃絕えたる足利の家、蹈み起す、掘り起す」

ふみ-おとし 履落・蹈落【名】【文】**しゆつる**

ふみ-かき 文書【名】ふみを書くこと、又これを書く人、又その書きざま。榮華「よからぬふみかきをして」紫式部日記「文かきにもあれ歌などのをかしからんは」

ふみ-かく 蹈缺く・踏缺く【動四他】蹈みつけて、缺く。ふみわる。

ふみ-かく 蹈掛く・踏掛く【動下二他】蹈みて、足を掛く。蹈む。膝栗毛「この野郎め、合羽籠(カツパカゴ)へ、土足を蹈み掛けやあがって、太(フト)え事をぬかしやがる」

ふみかけ-もんちりめん 蹈掛紋縮緬・踏掛紋縮緬【名】經(タテ)に生絲(キイト)、緯(ヨコ)に玉蹈を用ひて、小き模樣を織り出だしたる、輕目の紋縮緬。女の帶上(オビアゲ)、繻絆の袖地などに用ふ。

ふみ-かたむ 蹈固む・踏堅む・蹈固む・踏堅む【動下二他】蹈みて固くす。祝詞「內外(ウチト)の御門(ミカド)の柱を、上(ツ)つ石根(イハネ)に踏み堅め」

ふみ-かね 蹈金・踏金【名】雪駄の裏金(カネ)、即ち、その裏面の後方に附ける金具。

ふみ-かはし 文交【名】**えんしよあはせ**(艷書合)に同じ。【古語】續世繼「男女のふみかはしにも」

ふみ-かぶり 蹈被・踏被【名】ふみかぶること、又そのために招く不利益。薩摩「皆の手前のふみかぶり、無念をこらへて、お爲(タメ)になり」

ふみ-かぶる 蹈被る・踏被る【動四他】われと不利益なる行爲をなす。天の網島「鑰(カギ)と頭巾、ついふみかぶる容もあり」

ふみ-かへし 蹈返し・踏返し【名】**くつぬぎ**(香脫)に同じ。膝栗毛「あの女の面(ツラ)あ見たか。眞中(マンカン)が へこんで、何の事はねえ、踏返の馬蹄石といふもんだ」

ふみ-かへす 蹈返す・踏返す【動四他】步む時、過ちて、履物をくつがへす。八笑人「狼狽(ウロタ)へて駈け出す拍子に、香脫の下駄を踏みかへし、足を痛め」

ふみ-かよはし 文通【名】ふみを通はすこと。手紙のやりとり。文通(ツウ)。【古語】落葉「今やうは、ことに文かよはしもせでうつなり」

ふみ-がら 文柄【名】ふみの書きぶり。盛衰記「文柄、尋常なるべし」「同じ。

ふみ-がら 文殼【名】**ふみほご**(文反故)に同じ。

ふみ-がらす 踏枯す・蹈枯す【動四他】蹈みにじりて枯れしむ。萬葉「道のべの草を冬野に履みからしわれ立ち待つと妹に告げこそ」

ふみ-ぎ 蹈木・踏木【名】機(ハタ)の一部。絲統(イトスヂ)又は通絲(ツウシ)を上下せしむる用をなす棒又は板。竹を用ひたるを、蹈竹(フミダケ)といふ。

ふみ-ぎり 蹈切・踏切【名】一相撲(スマヒ)にて、蹈み切ること。二鐵道線路の、人道と交叉せる處。

ふみきり-ばん 蹈切番・踏切番【名】鐵道の踏切に居て、汽車・電車の通過の際、人道の往來を一時制止することを掌る役。

ふみ-きる 踏切る・踏切る【動四他】一相撲(スマヒ)にて、踏切をなす。二蹈みて切る。「下駄の緒を蹈み切る」

ふみ-くむ 蹈含む・踏含む【動四他】指貫(サシヌキ)・袴などを、中に押し込むやうなる形に蹈む。垂「指貫の、なから蹈みくくまれて」御伽草子「鉢かづき」「紅(クレナヰ)の袴蹈みくくみ」

ふみ-くは 蹈鍬・踏鍬【名】關東地方にて、畑を片端よりすき返すために、後退しつつ用ふる、鋤に似たる鍬。江州鋤のごとく、鐵(カナ)と柄とは、百四十度內外の斜角なをす。

ふみ-くら 蹈競・踏競【名】蹈みあふこと。ふみっくら。ふみこくら。

ふみ-ぐら 文庫・文藏【名】書籍を藏めおく庫。ぶんこ。榮華「これは、ふみぐらならん」

ふみ-ぐるま 文車【名】一ふぐるま(文車)に同じ。二紋所の一。一箇の小き丸を中心とし、五箇の結文(ムスビ)を、車の輻(ヤ)のやうに、放射狀に描けるもの。

ふみ-ぐるま 蹈車・踏車【名】水車の一種。羽根を柄杓(ヒシヤク)の形に造り、蹈みて、車の廻轉するにつれ、水は柄杓によりて汲み上げらるるやうにせるもの。溜溝にも排水にも使用す。

(まるぐみふ)

ふみ-こかす 蹈轉す・踏轉す【動四他】蹈みてこかす。蹈みて倒れしむ。ふみたふす。心中萬年草「燭臺蹈みこかし、やれ、暗いは、火を燈せ」

ふみ-こくら 蹈競・踏競【名】**ふみくら**(蹈

くらはこの腰骨の砕くるまで」

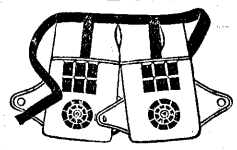
ふみ-こくる 踏轉る・踏轉る【動四他】踏みにじる。踏みあらす。ふんごくる。

ふみ-こしばり 文腰張【名】文反故(ふみ)を腰張にせるもの。若風俗里ばなれし草庵に入りて、内を見れば、若衆の文腰張」

ふみ-こす 踏越す・踏越す【動四自】踏みてまたぎ越ゆ。ふみこゆ。

ふみ-ことば 文言葉【名】ふみの言葉。手紙の用語。枕「ふみことばなめき人こそいとど憎けれ」

ふみ-こみ 踏込・踏込【名】家の入口の、履物を脱ぎおく場所。浮世風呂「踏込に、下駄が重なりあって」



(てだいはみこみふ)

ふみ-こむ 踏込む・踏込む【動四自】㊀踏みたるために落ち込む。ふんごむ。㊁勢よく歩みて、他人の家の奥に入る。ふみいる。ふんごむ。源氏烏帽子折「踏み込んで、一討に遊ばせ」

ふみ-こむ 踏込む・踏込む【動下二他】踏みて、落ち込ました。

ふみ-こゆ 踏越ゆ・踏越ゆ【動下二他】ふみこす(踏越す)に同じ。萬葉「足引の八峰(やつを)踏み越え」

ふみ-こらす 踏凝す・踏凝す【動四他】踏みて、凝り固まらしむ。枕詞「内外(うちと)の御門(みかど)の柱を、上(かみ)つ石根(いはね)に踏み堅め、下(しも)つ石根に踏み凝し」

ふみ-ころす 踏殺す・踏殺す【動四他】踏みて殺す。狂言文山だち「踏み殺されて死んだ」

ふみ-さがす 踏捜す・疏捜す【動四他】ふみ込めて踏む。強く踏む。【古語】

ふみ-さぐる 踏疏む・踏疏む【動四他】力を(書)の條下を見よ。

ふみ-よむ-はかせ 書讀む博士【句】ふみ

挟)に同じ。今昔「名符(なふだ)を書きて、文差にさして、怠状を具して」

ふみ-しかる 踏みしかる・踏みしかる【動四自】ふみはだかる。曾我「四天王を作り揃じたる様にて、踏みしかりてぞ立ちたりける」

ふみ-しだく 踏みしだく・踏みしだく【動四他】押しつぶすやうに強く踏む。枕「指貫(さしぬき)を、長う踏みしだきて」源氏「水の流を踏みしだく駒の足音」

ふみ-しづむ 踏鎮む・踏鎮む【動下二他】踏みかためて、しづかに保つ。甲陽軍鑑「この合戦は、信玄公大かた負けたまふやうにあれども、芝居を踏みしづめたまへば、村上、終に敗北して」「かと踏む。

ふみ-しむ 踏締む・踏締む【動下二他】しふみ-すぐ 踏過ぐ・踏過ぐ【動上二自】立ち寄らずに過ぎゆく。素通(すどほり)す。とほりすぐ。源氏「盗人などいふひたぶる心ある者も、思遣の寂しければにや、この宮をば、不用のものに踏み過ぎて、寄り来ざりければ」

ふみ-そらす 踏反らす・踏反らす【動四他】身を後方に反らせて、足を前方に延ばす。ふんぞる。著聞「死に入りて、足を踏みそらしければ」百合若大臣野守鏡「鐙の鳩胸、兄弟が眉間先に踏反らし」

ふみ-た 札・簡【名】『文板(ふみいた)の略』ふだ(札)に同じ。【古語】和名「簡札、不美太」

ふみ-だい 踏臺・踏臺【名】㊀背丈の届かぬ高き處に、手を届かするために乗る臺。あしつぎ。ひざつぎ。ふみつぎ。㊁目的の達するまで、一時利用する物事。こしかけ。「見よ。

ふみ-たけ 踏竹・踏竹【名】ふみぎ(踏木)をいふみしてたけぶ。【古語】記「いつの男建(ふみたけび)、踏み建(たけ)びて」

ふみ-たぶ 踏哮ぶ・踏哮ぶ【動四自】足ぶみしてたけぶ。【古語】記「いつの男建(ふみたけび)、踏み建(たけ)びて」

ふみ-だす 踏出す・踏出す【動四自】㊀足を進めて踏む。歩み出す。發足(ほつそく)す。和介人「斯うして、一日でも旅へ踏み出し

ふみ-たつ 踏立つ・踏立つ【動下二他】㊀踏みたる足の音にて、鳥などを驚かし起(た)たしむ。ふみおこす。萬葉「夕朧(かすみ)に鳥ふみたて」同「夕狩に千鳥(ちどり)ふみたて」㊁しかと立つやうに、強く踏む。空穂「吸息(いき)を踏み立てて、御屏風の上(かみ)より覗けば」宇治「足を強く踏み立てければ」「同じ。

ふみ-たて 踏立・踏立【名】ふだて(踏立)にせおく棚。ふだな。書棚(しょだな)。書物棚。和訓雑「書廚、フミダナ」「こと。

ふみ-たな 文棚・書棚【名】書籍などを載

ふみ-たふし 踏倒し・踏倒【名】ふみたふす

ふみ-たふす 踏倒す・踏倒す【動四他】㊀踏みて、倒れしむ。ふみこかす。㊁借財を返さずして、済ます。

ふみ-たまづさ 文玉章【名】『ふみ(文)とたまづさ(玉章)と同義の語を重ねたる語』ふみ(文)㊂に同じ。娥歌加留多「御所の女中に、文玉章を通じ」

ふみ-たまる 踏溜る・踏溜る【動四自】立ち上りたる時の足元、安定す。雲根誌「験臂仇討「用意の刀、杖となし、立ち上れども、踏み溜らず、どうと轉びつ、這ひまはり」

ふみ-だん 踏段・踏段【名】階(はし)を順次に踏みて上りゆく段。階段。

ふみ-たる 踏垂る・踏垂る【動下二他】垂れさがるやうなる狀態に、袴などを穿つ。婚礼「紅の袴、長やかに踏み垂れて」

ふみ-ちらす 踏散す・踏散す【動四他】踏みて散らす。ふみあらす。新六「から衣裾野にほふ藤袴ふみちらしたる鹿の跡かな」

ふみ-づか 文塚【名】詩文の草稿などを埋めて建てたる塚。

ふみ-づかひ 文使【名】手紙を持ち行きて届くる使者。ふだづかひ。新六「結び目のたがふも知らず文づかひ外に見せずといふがはかなさ」「㊁に同じ。

ふみ-つぎ 踏継・踏繼【名】ふみだい(踏臺)に同じ。【古語】和名「筆、布美天」

ふみ-つく 踏附く・踏附く【動下二他】㊀踏みて、跡の附くやうにす。貫之集「あらす田を打ち返すとも濱千鳥なほふみつけて跡は留めよ」㊁ふむ(踏む)㊀を強めていふ語。ふんづける。㊂侮りたる仕向(しむ)をして、面目を失はしむ。甲陽軍鑑「家に舊功の諸侍をも踏み附くれば」

ふみ-つくら 踏競・踏競【名】ふみくら(踏競)の音便。

ふみ-つくり 文作【名】『ふみ(文)㊃を見よ』詩を作ること、又その人。作文(さくもん)。詩作。【古語】源氏「ふみつくり・讀經などやうのすさび業」

ふみ-づくゑ 文机【名】書籍を載するに用ふる机。ふづくゑ。しょづくゑ。つくゑ。【古語】和名「書案、不美都久惠」

ふみ-つけ 踏附・踏附【名】㊀踏みつくること。強く踏むこと。松風村雨東磐「身は奥山に散る紅葉、踏附にする男鹿」㊁輕んじ侮ること。重衡子「夫ある身を踏附にする不義者」

ふみ-づし 文廚子・文廚子【名】㊀書籍を載せおくに用ふる廚子。ふみだな。㊁書籍を讀みても、その意義を解せざる人。雲州消息「雖レ讀二書籍一、不レ得二其心一、則有二文廚子之嘲一」

ふみ-つぶす 踏潰す・踏潰す【動四他】㊀踏みて、つぶれしむ。甲陽軍鑑「義元公の、信長をふみつぶしなさるべきとて、尾州へ發向あり」㊁名譽を傷く。面白なからしむ。

ふみ-つよる 踏強る・踏強る【動四他】踏みて、足に力を込む。強く踏みしむ。宇治「踏みつよりて立てりければ」

ふみ-づら 文面【名】ぶんめん(文面)に同じ。五人女「數數書きくどきて遣されけるほどに、茂右衛門、文づらより哀深くなりて」「て踏む所。

ふみ-づら 踏面・踏面【名】階段の、足にふみ-て 筆【名】『文手の義』ふで(筆)に同じ。【古語】和名「筆、布美天」

やそ ふんねたなは ゐんな

ふん 蹈踏【接頭】『蹈(ミ)の音便』動詞に添ひて、語調を強むるに用ふる語。「ふん縛(シバ)る」「ふんだくる」

ふん 分【助數】㊀重さの補助單位。匁の十分の一。厘の十倍。ふんめ。㊁角度の補助單位。度の六十分の一。㊂時の補助單位。時間の六十分の一。秒の六十倍。

ぶん 文【名】㊀あや。もやう。かざり。裝飾。〔諸曲・松山鏡〕「花といはんとすれば、蜀人文を洗ふ錦」㊁言語を、文字にて綴り表はせるもの。ふみ。文章。㊂〔語〕『英 sentence』單語を正しく排列して、完結せる思想を表はせるもの。單文・複文・重文の三種に分つ。各條を見よ。文章。(單語・句に對して) ㊃智德の教。學問。學藝。(武に對して) ㊄みやびやか。文雅優美。 ㊅**ぶんぐわん**(文官)の略。(武官に對して) 大寶令「五衞府軍團及諸帶レ仗者爲レ武……自餘並爲レ文」

ぶん 文の舞(マヒ)【句】劍・鉾などの武器を執らずして舞ふ舞樂の曲。ぶんぶ。(「武(ブ)の舞」に對して)

ぶん 文は八代の衰を起す【句】『蘇軾の潮州韓文公廟碑に「文起二八代之衰一、而道濟二天下之溺一」とあり』支那唐の韓愈が、後漢以後、魏・晉・六朝の文氣の衰弱を振起して、前漢以前の正しきに歸らしめたる事實。

ぶん 文を賣る【句】文章を作りて、生活の資に充つ。「作る。

ぶん 文を屬(ショク)す【句】文を綴る。文章を文は人なり【句】「文體は人格なり」に同じ。〔諺語〕

ぶん 文を左にし、武を右にす【句】『史記の平津侯傳に「守成尙レ文、遭遇右レ武」とあり』次條を見よ。〔諺語〕平治「天下を保ち、國土を治むる謀は、文を左にし、武を右にすと見えたり」

ぶん 文を右にし、武を左にす【句】『潘炎の君臣相遇樂賦に「或右レ文而左レ武、或先レ吁而後唱」とあり』武道によりて「文を左にし、武を右にす」ともいへり。前條を見よ。〔諺語〕

ぶん 分【名】㊀わりつけ。わりまへ。「三日分」『十人分』㊁『天より割りつけられたる意』みぶん。分限。分際。正統記「かの泰時、相續ぎて、德政を先とし、法式を堅くす。己が分をはかるのみならず、親族並にあらゆる武士までもいましめて」㊂事件・行爲・狀態等を限定して指す語。「餘ったら返す分(ブン)」「この分では、心配も無ささうだ」 ㊃形式。樣子。狀態。きのふはけふの物語「一人づつまづ髮を探りてみれば、尼にてあり。さては、一番に出でたるよと思ひければ、二番目の者も、三番目・四番目も、皆、その分にて」江戸生艶氣樺焼「素直(ホンサウ)に身受しては、色男でないと、駈落の分で、繻子(シュス)を買(カ)し」 ㊄**ぶんこう**(分國)の略。分分に風は吹く【句】「分相應の風が吹く」に同じ。〔諺語〕

ぶん 聞【名】古、論奏・奏彈は擬近奏(ギキンソウ)に、御裁可ありて、奏文の年月日の次に、親署したまひて「聞」の字。「ぶん流す」『ぶん』【接頭】ぶち(打)の訛。「ぶん流す」『ぶん』【接尾】人倫又は職業上の假の位置・關係を示す語。一代女「御隱居とかや、仲居(ナカ)分にして、御寢間近く夜の道具の上下(ロウシウ)ばかりに召抱へられたし」若風俗「心根のふびんさに、そのまま醫者分になって、巾著さぐりながら」

ぶん 【貌】㊀臭氣又は香氣を感ずるさま。㊁腹立つさま。

ぶんあん 文案【名】手紙その他の文書の下書(シタガキ)。文章の草案。

ぶんあん 文安【名】後花園天皇の御代の年號(紀元二一〇四年—二一〇九年)。

ぶんい 忿志【名】怒り恨むること。怒ること。憤ること。

ぶんい 文意【名】文章の意味。文義。

ぶんいう 文友【名】文學上の友。

ぶんいかいしやく 文意解釋【名】〔法〕法令を解釋する方法の一。主として、その(論理解釋に對して)

ぶんいく 芬郁【名】香の盛んなること。馥郁。

ぶんいん 分陰【名】『晉書の陶侃傳に「大禹聖人、乃惜二寸陰一、況於二衆人一當惜二分陰一」とあり』わづか一分ほどの、すこしばかりの時刻。

ぶんうん 紛紜【名】『紜は、紛の字の韻に引かれて、ヌンと發音することあり』事のもつれ。ごたごた。「る狀。

ぶんうん 氛氳【貌】雲氣などの盛んなさま。

ぶんうん 文運【名】學問の氣運。奎運。

ぶんえい 墳塋【名】はか。墓場。墓所。塋域。

ぶんえい 文永【名】龜山天皇の御代の年號(紀元一九二四年—一九三五年)。

文永の役【句】文永十一年支那元の兵一萬五千、筑前國博多を侵しし時の戰役。少貳景資・竹崎季長等防戰し、十月二十日の大風雨に、元艦大半漂沒し、溺死者一萬餘に及び、餘賊皆遁れ、我兵追擊して、二百二十餘人を虜にし、賊船一艘を奪へり。

ぶんえきのう 分益農【名】地主と小作人との間に契約を設け、利益を所定の歩合によりて、兩者に分配する農業組織。通常、現物によりて分配すれども、又、代價を以てすることあり。

ぶんえきのうはふ 分益農法【名】〔經〕分益農の組織に依る方法。

ぶんえきろうと 分液漏斗【名】〔理〕『英 separating funnel』比重を異にし、且つ混和せざる液を分つに用ふる漏斗。活栓を有す。「平地と。

ぶんえん 墳衍【名】五地の一。丘陵と

ぶんえん 噴烟噴煙【名】烟の噴き出づること、又その煙。

ぶんおう 文應【名】『應は、文の字の韻に引かれて、ノウと發音す』龜山天皇の御代の年號(紀元一九二〇年—一九二一年)。

ぶんおんぷ 分音符【名】〔音〕全音符の音を二等分・四等分・八等分などしたる四分音符・八分音符などの總稱。

ぶんか 文家【名】文章の道に携はる人。文章家。

ぶんが 文雅【名】㊀文學などの風雅なる道。㊁みやびやか。しとやか。風雅。優美。

ぶんがい 憤慨【名】いきどほりなげくこと。

ぶんかい 文界【名】**ぶんだん**(文壇)に同じ。

ぶんかい 分界【名】境界を分つこと、又、分ちたる境界。きかひ。

ぶんかい 分開【名】わかれひらくこと。

ぶんかい 分解【名】㊀事理又は形體を、こまかに分ち解くこと。分析。㊁〔哲〕**かいほう**(解剖)㊂に同じ。㊂〔化〕『英 decomposition』一種の物質より、數種の新しき物質を生ずる化學的變化。例へば、木材を燒きて、炭を製する場合に、木材は、少くとも、烟と炭との二物質となり、酒の釀造に於て、米が炭酸と酒精とに分るる類。又、鐵を造る時、鐵鑛と骸炭とを混じて强熱すれば、鐵及び炭酸氣等を生じ、又、石鹼の製造に於て、脂肪を苛性加里と煮れば、石鹼及びグリスリンに變ずるが如く、二種又は二種以上の物質が相作用して、二種もしくは二種以上の新物質を生ずるを、復分解といふ。解離も、分解の一種なれども、他の分解のごとく、原因去れば、舊狀に復することなき點に於て、同一ならず。(化合に對して) ㊃〔哲〕『英 Partition』論理上、一の概念を、その內容的方面より分析して、その屬性を解剖すること。例へば、「人」を「合理的」と「動物」との二に分つ類。解剖。

ぶんかいご 分解語【名】〔語〕**ぶんせきご**(分析語)に同じ。

ぶんかいてきけうじゆはふ 分解的教授法【名】或原理を含む事實を擧へ、教師自らの說明により、或は問答法によりて、その事實を分解して、箇箇のものとなし、生徒をして、その中に含める原理を發見せしむること。(總合的教授法に對

ふみばこ 文箱・文筥【名】㊀書籍を納れおく箱、又書籍を納れて負ふ箱。ふむばこ。〔書箱〕和名「笈、不美波古。負レ書箱みかをも 蜂の甘に飛ひ入り」

ふみはる 蹈張る・踏張る【動四自】足をひろげて、強く踏む。ふんばる。ふみはだかる。著聞「池へ引き入れんとしけ引の山踏みまどふ人もありけり」

ふみまよふ 蹈迷ふ・踏迷ふ【動四自】踏み入りて迷ふ。ふみまどふ。後撰「白樫の雪も消えにし足引の山路を誰かふみま

ふみならす 蹈均す・踏均す【動四他】踏みて、平にす。紀「蹈跙、此云二布彌那羅須一」萬葉「大宮人の踏均し通ひし道は」

して)

ぶんかい-ねつ 分解熱【名】〔化〕物質の分解の際に放出し、又は吸收する熱量。

ぶんかい-はう 分解砲【名】〔兵〕取扱を容易にするため、砲身を二部又は三部に分解し、使用の際に結合するやうに造れる大砲。攻城砲又は山砲等に用ふ。

ふん-かう 紛更【名】擾き亂して變ふること。

ふん-かう 紛淆【名】入り亂れ雜り合ふ

ぶん-かう 分校【名】或學校が、その生徒の一部を、別に收容するために分設したる學校。ほんかう(本校)[一]參照。

ぶん-かう 聞香【名】香(カ)を聞くこと。香を嗅ぎて、判別すること。

ぶん-かう【貌】詳かならず。丹波奧作「御乳(チ)の人は、大高(オホカ)に御菓子、さまざま、ぶんかうに盛り入れ」

ぶん-がう 文豪【名】秀でたる文學者。文

ぶんかう-だう 文耕堂【名】〔人〕まつだわきち(松田和吉)の號。

ぶんかう-ちやう 分校長【名】分校の事務を掌理し、所屬の職員を統督する職。

ぶん-かく 文格【名】文章の格律。

ぶん-かく 分格【名】『英 Panel』土木にて、構桁を、垂直材又は斜材によりて、分割したる部分。

ぶん-がく 文學【名】[一]『論語の先進篇に「文學子遊子夏」、史記の秦始皇本紀に「召文學方術士甚衆」とあり』學問。學藝。文(ブン)。(武藝に對して)[二]支那漢代の諸州府學の博士を攻め呼びたる稱。唐代にも、この稱を襲用せしことあり。大寶令の制にて、有品親王(内親王は除く)の家に置きて、經を講授せし職。[四]德川時代の諸藩の儒員。[三]『英 Literature』吾人の思惡感情を言語文章によりて、表彰せる作物。詩歌・小說・戲曲は勿論、經典・哲學書、又は思想・感情を多く交へたる歷史の類、皆、これに屬す。[六]『英 Literature』吾人の思想・感情を言語文章によりて表彰し、人類の感情に訴ふるを主とせる作物。卽ち詩歌・小說・戲曲。美文學。純文學。**なんぶんがく**(軟文學)參照。[七]『英 Literature』自然科學及び政治・法律・經濟等に關する學問以外の諸種の學問、卽ち純文學の解釋・評論・史的研究等の外、宗教・哲學・言語學・史學・社會學・修辭學等を包括す。

ぶん-がく 分額【名】總額を、幾つかに分割せるもの。「文人。

ぶん-がく-か 文學家【名】文學者。文士。

ぶん-がく-かい 文學界【名】[一]ぶんだん(文壇)に同じ。[二]明治二十六年一月より、北村透谷・星野天知・戶川秋骨・平田禿木・馬場孤蝶等の文士が編輯・發行せる文學雜誌。同二十八年廢刊。

ぶん-がく-がいろん 文學概論【名】文學の定義・分類等、全般に亙る概要を研究する學問、又それを記述せる書物。

ぶん-がく-きやう 文學狂【名】文學に熱中する人。

ぶん-がく-ざっし 文學雜誌【名】文學に關する雜誌。

ぶん-がく-し 文學史【名】『英 History of litorature』文學の史的發達の跡を論述せるもの。

ぶん-がくし 文學士【名】學士の一。大學の文學部、又は舊文科大學を卒業したる人の稱ふるを得るもの。

ぶん-がく-しや 文學者【名】文學に長じたる人。

ぶん-がく-じゆんび 分額準備【名】〔經〕兌換紙幣を發行する時、その發行總額の一部を正貨に、他の一部を有價證券に引き換へて、準備をなすこと。

ぶん-がく-だう 文學道【名】きてんだう(紀傳道)を見よ。

ぶん-がく-てき-および-びじゆつてき-よさくぶつ-ほごばんこくぎうめいじむき 文學的及美術的著作保護萬國同盟事務局【名】文學的及び美術的著作物保護萬國同盟創設に關する條約(我國も、明治三十二年七月十三日、これに加入せり)に基き、瑞西(スヰス)聯邦國中央政府に附屬し、同政府監督の下に、文學的及び美術的著作物の保護に關する事務を處理する萬國事務局。

ぶん-がく-はかせ 文學博士【名】次條に同じ。

ぶん-がく-はくし 文學博士【名】博士の一。文學[七]の藏奧を究めたる者に授與せらるるもの。ぶんがくはかせ。

ぶん-がく-はくしくわい 文學博士會【名】博士會の一。文學博士を以て組織するもの。

ぶん-がく-ぶ 文學部【名】綜合大學の一部。文學[七]の理論・應用を敎授する所。

ぶん-がく-ぶちやう 分學部長【名】綜合大學の文學部の學務を統理する職。

ぶん-がく-ろん 文學論【名】文學[六]に關する議論。

ぶん-がけ 蹈懸踏懸【名】脛巾(ハバキ)の類。江次第「射手(位服・蹈懸)」

ぶん-かつ 分割【名】分れ割(サ)くること、又、分ち割くこと。割合。

分割の論過(クワン)【句】〔哲〕「英 Fallacy of division』論理上、前提にて、集合的意義に使用せる語を、斷案中に、分割して、各箇的意義に解釋するによりて生ずる論過。例へば、「三角形のすべての角は二直角なり。A・B・Cは、三角形のすべての角なり。故に、A・B・Cも、二直角なり」といふ推論に於て、「すべて」を前には集合的に、後には各箇的に用ひたる類。分離の論過。

ぶん-かつ 分轄【名】區分して管轄すること。

ぶん-かふ 吻合(バンガチ)【名】『吻(バンガチ)の上下相合ふがごとくに合ふ義』事の、互に相叶ふこと。符合。

ぶん-かふ 文夾【名】『漢字の音讀』ふみばさみ(文挾)に同じ。下學集「文夾、ブンカウ・フミバサミ」

ぶん-かふ 文匣・文挾【名】文書雜品などを納るる箱。文庫。

文挾の箱【句】前條に同じ。梵舞日記「乍二兩册一文挾之箱入進上」

ぶん-がふ 分合【名】或一つの物を分割し、又は幾つかの物を、一つに合はすること。「町村の廢置・分合」

「同じ。

ぶん-がく-はかせ 文學博士【名】次條に

ぶん-がく-はくし 文學博士【名】博士の一。文學[七]の藏奧を究めたる者に授與せらるるもの。ぶんがくはかせ。

ぶん-がく-はくしくわい 文學博士會【名】博士會の一。文學博士を以て組織するもの。

ぶん-がく-ぶ 文學部【名】綜合大學の一部。文學[七]の理論・應用を敎授する所。

ぶん-がく-ぶちやう 分學部長【名】綜合大學の文學部の學務を統理する職。

ぶん-がく-ろん 文學論【名】文學[六]に關する議論。

ぶん-がけ 蹈懸踏懸【名】脛巾(ハバキ)の類。江次第「射手(位服・蹈懸)」

ぶん-かつ 分割【名】分れ割(サ)くること、又、分ち割くこと。割合。

分割の論過(クワン)【句】〔哲〕「英 Fallacy of division』論理上、前提にて、集合的意義に使用せる語を、斷案中に、分割して、各箇的意義に解釋するによりて生ずる論過。例へば、「三角形のすべての角は二直角なり。A・B・Cは、三角形のすべての角なり。故に、A・B・Cも、二直角なり」といふ推論に於て、「すべて」を前には集合的に、後には各箇的に用ひたる類。分離の論過。

ぶん-かつ 分轄【名】區分して管轄すること。

ぶん-かふ 吻合(バンガチ)【名】『吻(バンガチ)の上下相合ふがごとくに合ふ義』事の、互に相叶ふこと。符合。

ぶん-かふ 文夾【名】『漢字の音讀』ふみばさみ(文挾)に同じ。下學集「文夾、ブンカウ・フミバサミ」

ぶん-かふ 文匣・文挾【名】文書雜品などを納るる箱。文庫。

文挾の箱【句】前條に同じ。梵舞日記「乍二兩册一文挾之箱入進上」

ぶん-がふ 分合【名】或一つの物を分割し、又は幾つかの物を、一つに合はすること。「町村の廢置・分合」

ふん-がん 玢岩【名】〔地〕『英 Porphyrite』火成岩の一。斜長石・角閃石・輝石を主合分とし、時には、石英を含有することあり。何れも、斑晶となりて、暗色の石基中に散在す。その成分の發達の狀態により、閃綠玢岩・輝綠玢岩・石英玢岩などの別あり。小紋(シモ)岩。

ぶん-かん 分監【名】或監獄が、その囚人の一部を、別に收容するために設けたる監獄。ほんかん(本監)參照。

ぶん-かんたい 分艦隊【名】〔兵〕一の艦隊を、二分もしくは三分しての稱。ぶんけんかんたい(分遣艦隊)參照。

ぶん-かん-ちやう 分監長【名】分監の長官。分監の事務を掌理す。奏任とす。

ぶん-がら 文柄【名】書狀の文句。手紙のいひまはし。置土產「新屋(シンヤ)の金太夫が書翰、さまざま持たれたるぶんがら、お定りの奧の手」

ふん-き 噴氣【名】瓦斯を噴き出だすこと、又、噴き出づる瓦斯。

ふん-き 奮起【名】ふるひ起つこと、又、ふるひ起すこと。

ふん-き 焚毀【名】火をかけて焚(ヤ)きはらふこと、又、火にかかりて焚くこと。

ふん-ぎ 紛議【名】もつれたる議論。爭論。紛論。「同じ。

ふん-ぎ 扮戲【名】きやうげん(狂言)[一]に同じ。

ふん-き 文氣【名】文章の氣力。

ぶん-き 文龜【名】後柏原天皇の御代の年號(紀元二一六一年—二一六四年)。

ぶん-ぎ 文義【名】文章の意義。

ぶん-ぎ 分岐【名】幾つかの方向にわかるること、又、幾すぢかにわれたる路。

ふん-きう 紛糾【名】[一]絲の亂れもつるること。「紛糾を解く」[二]事物の亂れもつるること。「山川紛糾」『文書紛糾』

ぶん-きう 文久【名】[一]孝明天皇の御代の年號(紀元二五二一年—二五二三年)。[二]ぶんきうえいはうせん(文久永寶錢)の略。

ぶんきう-えいはう 文久永寶【名】ぶんきうえいはうせん(文久永寶錢)の略。

ぶんきうえいはう-しもんせん 文久永寶四文錢【名】次條に同じ。

ぶんきうえいはう-せん 文久永寶錢【名】德川時代の通貨の一。文久三年より慶應三年まで鑄造せし青銅錢。圓形にして、中央に方形の孔あり、表面に「文久永寶」の四字、裏面に波紋あり。一枚四文の通用なりしが、明治維新の際は、十六文、明治四年以後、一厘五毛の法貨として、今に及べり。文久錢。一厘半錢。文久銅錢。文久永寶四文錢。文久四文錢。文久當四錢。文久。

ぶんきう-しもんせん 文久四文錢【名】

ぶんきう-せん 文久錢【名】ぶんきうえいはうせん(文久永寶錢)の略。

ぶんきう-たうしせん 文久當四錢【名】前條に同じ。

ぶんきう-つうはう 文久通寶【名】ぶんきうえいはうせん(文久永寶錢)に同じ。

ぶんきう-どうせん 文久銅錢【名】前條に同じ。

ふんきかう 噴氣坑【名】〔地〕ふんきこうに同じ。

ふんきぎ 分岐器【名】『英 Branch box』電路の重要なる分岐點、及び太き電線を接續するに用ふる箱狀の金物。これを箱狀にせるは、接續點を保護せんがためにして、中に絕緣物を充塡することあり。

ふんきこう 噴氣孔【名】〔地〕火山活動の餘勢として、水蒸氣又は他の瓦斯を噴出する孔。例へば、阿蘇山の湯谷(ユノタニ)は水蒸氣を噴出し、箱根の大涌谷(オホワキダニ)は硫氣を噴出し、摩津國有馬の鳥地獄は、炭酸氣を噴出する類。

ぶんぎこう 文義公【名】〔人〕ふぢはらふひと(藤原不比等)の諡。

ふんきさうち 噴氣裝置【名】〔兵〕砲を發射したる後、尾栓が開放を始めて、全く開放し終るまで、尾栓室内に高壓の空氣、又は水を吹き入れて、砲腔内に殘れる瓦斯及び火藥の滓を、砲口より排除する裝置。專ら口徑の中等以上の砲に設備す。

ふんぎし 扮戲子【名】俳優の類の人。

ぶんぎし 分岐子【名】『英 Branch terminal』電路の分岐點を、電氣的に接續するに用ふる金物。

ぶんぎてん 分岐點【名】二つ又はそれ以上の方向に分るる所。わかれめ。

ぶん-きん 文金【名】■ぶんじきん(文字金)の略。■ぶんきんしまだ(文金島田)の略。■ぶんきんふう(文金風)に同じ。

ぶん-きん 分金【名】『英 Parting』金と銀との混合物より、金を分離收取すること。「略。

ぶん-ぎん 文銀【名】ぶんじぎん(文字銀)の略。

ぶん-ぎん 分銀【名】『英 Cupellation』銀と鉛との合金、卽ち貴鉛より、銀を分離收取すること。「(文字金銀)に同じ。

ぶん-きんぎん 文金銀【名】ぶんじきんぎんに同じ。

ぶんきん-しまだ 文金島田【名】『男子の結髮の文金風に倣ひたるよりいふ』たつまつしまだ(辰松島田)に同じ。

ぶんきん-たかしまだ 文金高島田【名】■前條に同じ。■女の髮の結ひ方の一。前項の現代的に變化したるもの。根を高くしたれば、自ら高尙優美にして、上品なり。多くは良家の淑女間に行はる。ぶんきんたかまげ。

(文金高島田)

ぶんきん-たかまげ 文金高髷【名】前條に同じ。

ぶんきん-はふ 分金法【名】分金を行ふ方法。「方法。

ぶんぎん-はふ 分銀法【名】分銀を行ふ方法。「じ。

ぶん-きよ 分居【名】べっきよ(別居)に同じ。

ぶん-ぎよ 文魚【名】鱗に美しき模樣ある魚。

ぶんきよう-ねん 文恭院【名】〔人〕德川家齊(イヘナリ)の諡。

ぶん-きよく 分局【名】本局より分けて設けたる局。支局。

ぶん-きよく 分極【名】〔理〕『英 Polarization』電池内或は電解器に於て、極板面より發生したる水素の一部が、極板に附著して、漸次電流の流通を害するに至る時に、輪道を閉ぢて、反對の方向の電流の生ずる現象。分極作用。ちくてん(蓄電)參照。「前條に同じ。

ぶんきよく-さよう 分極作用【名】〔理〕

ぶんきよく-せい 文曲星【名】〔天〕七星の一。その第四位に位するもの。

ふん-ぎり 蹈切・踏切【名】あきらめ。おもひきり。決斷。

ふん-ぎる 蹈切る・踏切る【動四他】『蹈(ふ)切るの音便』強ひて行ふ。無理に爲す。決行す。

ぶん-ぐ 文具【名】■『漢書の晁錯傳に「其敝、徒文具、亡二伽隱之實一」とあり』うはべのみの、よく見ゆること。■ぶんぼうぐ(文房具)に同じ。「店。

ぶんぐ-てん 文具店【名】文具■を賣る

ふん-ぐは 蹈鍬・踏鍬【名】足にて蹈み込み、引き起して、土をかへす用ひ方の鍬。

ぶん-くん 文勳【名】學問又は政務に關する勳功。(武勳に對して)

ぶんくん 文君【名】〔人〕たくぶんくん(卓文君)を見よ。

ぶん-くわ 焚火【名】火をもやすこと、又、もやしたる火。

ふん-くわ 粉華【名】■白粉(オシロイ)を附けて美しきこと。■飾りたててはなやかなること。

ふん-くわ 噴火【名】■火を噴き出すこと。■火山が、熔岩・水蒸氣・火山灰などを噴き出すこと。「る炭火。

ぶん-くわ 文火【名】とろび。熾んならざる炭火。

ぶん-くわ 文科【名】■作文の科目。■文學■に關する學科。文學の學科。

ぶん-くわ 文華【名】■あや。かざり。■文明の立派さ。

ぶん-くわ 文化【名】■學問・敎化の道開けて、世の進むこと。文明・開化。■『獨 Kultur』社會一般の外面的進歩のみならず、人類の內面、卽ち智力・能力・趣味等の發展にも重きを置きたる生活の進歩。ぶんめい(文明)■參照。

ぶん-くわ 分化【名】■わかれて化成すること。■〔哲〕『英 Differentiation』同質的なる物事が異質的となり、同種の事物が異種となる分岐的發展。例へば、生物體の各細胞が、生理的の協力・分勞に適するやうに變化しゆく類。

ぶん-くわ 分火【名】〔兵〕戰鬪射擊にて、目標を分割し、各小隊若しくは各中隊に割り當てて、射擊すること。

ぶん-くわ 分科【名】■科目を分つこと、又、分たる科目。■〔哲〕ぶんしやく(分釋)に同じ。

ぶん-くわ 分課【名】受持を分つこと、「又、分れたる課目。

ぶんくわ 文化【名】光格天皇の御代の年號(紀元二四六四年—二四七七年)。

ぶん-くわい 文會【名】同志の者の寄りつどひて、文章・詩歌を作りあふこと。

ぶん-ぐわい 分外【名】分限のほか。身分以上なること。分不相應。過分。

ぶん-くわい-ざつき 文會雜記【名】〔書〕主として、文學上、又、時に、時政に關する見聞・談話を筆錄せるもの。六卷。湯淺常山の著。別に附錄一卷あり。

ぶんくわう-き 分光器【名】〔理〕『英 Spectrometer 又 Spectroscope』光のスペクトルを仔細に檢するための器械。周圍に目盛(メモリ)を施せる圓板の中央に、プリズムを置き、その周圍に、先端に細隙、後端に凸レンズある圓筒あり、その細隙より入り來れる光線は、レンズによりて、平行光線となり、プリズムによりて、屈折し分散するを、圓筒と同一水面上にある望遠鏡にて、擴大して檢す。分光鏡。

ぶんくわう-きやう 分光鏡【名】〔理〕前條に同じ。

ふんくわう-じ 芬皇寺【名】朝鮮慶尙北道慶州の南にある寺。新羅善德王三年の創立。石造の塔あり、もと九層なりしが、

文祿の役に毀たれて、三層を殘せり。

ぶんくわう-しゃしん 分光寫眞【名】『英Spectrogram』寫眞分光器を用ひて得たる寫眞。

ぶんくわう-ぶんせき 分光分析【名】〔化〕**すぺくとるぶんせき**（スペクトル分析）に同じ。

ふんくわ-きやうさう 焚火競爭【名】同質・同量の石炭を以て、火力を起し、最高度の蒸氣力を發生せしむる遲速の競爭。

ぶん-くわく 分劃・分畫【名】分ち仕切ること。分割し、區劃すること、又、分割せる區劃。

ぶんくわく-き 分劃器【名】〔農〕下種・移植等の際、種・苗の位置を一定にするに用ふる器具。卽ち間繩（カンジヤウ）・升定規（マスヂギ）・田植定規などの類。

ぶんくわく-ぎ 分畫儀【名】〔兵〕『英Protor』要塞・砲臺等に備へ、目標の位置及び距離を測定するに用ふる器具。

ぶんくわくわがく 文化科學【名】〔哲〕『獨Kulturwissenschaft』單に、一回生起する事件の記載を目的とする學。文化現象を、個性的認識を目的とする歷史的方法を以て研究する科學。史的現象又は文化現象に關する智識の特色にして、その記載に際しての諸材料の取捨・選擇の標準は、その事件の全體に對して有する價値に存するとせらる。獨逸西南學派の創稱に係り、精神科學を自然科學と相對せしめたる、從來の分類法を誤れりとし、この文化科學を以て、自然科學と相對せしめんとす。

ふんくわ-こう 噴火口【名】火山の噴火「する口。

ふんくわ-ざん 噴火山【名】〔地〕**くわざん**（火山）に同じ。

ぶんくわ-し 文化史【名】『獨Kulturgeschichte』**ぶんめいし**（文明史）に同じ。

ぶんくわ-しうれい-しふ 文華秀麗集【名】〔書〕嵯峨・淳和の二天皇、その他、歷代の諸臣等二十六人の詩百四十八篇を、遊覽宴集・餞別等に分類して集めたるもの。三卷。弘仁九年仲雄王・菅原清公・滋野（ノ）貞主・桑原腹赤等の、嵯峨天皇の勅を奉じて撰修せるもの。我國最古の詩集。群書類從に收む。

ふんくわ-しつ 焚火室【名】『英Stokehold』船舶內に於ける、汽罐を据ゑつけたる室。普通、船舶の中央部に於ける船艙內に設けられ、汽機室の前方に位す。汽罐室。

ぶんくわ-せいくわつ 文化生活【名】『獨Kultus Leben』文化[1]の目的に適合する生活。

ふんくわ-せき 糞化石【名】『英Coprolite』前時代の動物の糞の化石。肥料の製造の供する目的にて採掘することあり。糞石。

ぶんくわ-だいがく 分科大學【名】大學院と共に、帝國大學を構成して、學術技藝の理論及び應用を敎授する所。法科大學・醫科大學・工科大學・文科大學・理科大學・農科大學の六種に分つ。

ぶんくわだいがく 文科大學【名】帝國大學の文學部の舊稱。

ぶんくわだいがくちやう 分科大學長【名】各分科大學の敎授の中より補し、帝國大學總長の監督の下に、その分科大學の學務を統理せし職。法科大學長・醫科大學長・工科大學長・文科大學長・理科大學長及び農科大學長あり。現制の法學部長・醫學部長・工學部長・文學部長・理學部長・農學部長に該當す。

ぶんくわだいがくちやう 文科大學長【名】分科大學長の一。現制の文學部長に該當す。

ぶんくわ-でん 文華殿【名】支那の宮闕の皇極門內の東にありて、天子の齋居・經筵・大臣召見等の所たりし一殿。明（ミン）初の創設なり。

ぶんくわ-くわん 文官【名】軍事以外の政治に携はる官人。（武官に對して）

ぶん-くわん 分管【名】區分して、管理又は管轄すること。

ぶんくわん-かうとうしけん 文官高等試驗【名】〔法〕大正七年四月以後に於ける行政科の高等試驗の舊稱。卽ち奏任文官に任用すべき資格の有無を檢する文官試驗。（文官普通試驗に對して）

ぶんくわんかうとうしけん-ねんき 文官高等試驗委員【名】明治二十七年に定めたる文官試驗委員の一。各官廳の高等官の中より、內閣總理大臣の奏請により命ぜられ、內閣總理大臣の監督の下に、文官高等試驗及び奏任文官任用銓衡に關する事務、並びに、文官普通試驗の科目に關する事務を管掌せしもの。大正七年、高等試驗委員と改稱す。

ぶんくわん-かうとうちやうかいねんき 文官高等懲戒委員【名】委員長と共に、文官高等懲戒委員會を組織する委員。行政裁判所長官・勅任行政裁判所評定官・勅任判事、及びその他の勅任文官の中より、內閣總理大臣の奏請によりて、六人を任ず。なほ委員中、事故ある時、又は闕員ある場合に、代理せしむるため、備豫委員六人を任ず。（文官普通懲戒委員に對して）

ぶんくわんかうとうちやうかいねんくわい 文官高等懲戒委員會【名】懲戒委員會の一。高等文官・文官試補及び高等官待遇者の懲戒事件を審査議決するもの。委員長一人と、委員六人とより成る。（文官普通懲戒委員會に對して）

ぶんくわんかうとうちやうかいねんちやう 文官高等懲戒委員長【名】文官高等懲戒委員會の委員長。機密顧問官の中より、內閣總理大臣の奏請によりて任ず。

ぶんくわん-けうくわん 文官敎官【名】**けうくわん**（敎官）[2]を見よ。

ぶんくわん-しけん 文官試驗【名】大正七年以前、文官に任用するに適するや否やを檢定したる試驗。文官高等試驗と文官普通試驗との二種に分ちたり。

ぶんくわん-しけんきよく 文官試驗局【名】明治二十七年まで、內閣總理大臣の管轄の下に、長官・試驗委員・書記官・屬の職員ありて、文官高等試驗を施行し、文官の試驗に關する一切の事務を掌りし所。

ぶんくわん-しけんきよく-しけんねんくわい 文官試驗局試驗委員會【名】文官の懲戒事件を審査・議決する委員會。文官高等懲戒委員會と文官普通懲戒委員會とあり。

ぶんくわん-にんよう-れい 文官任用令【名】親任官及び別に任用の規定ある者以外の一般の文官を任用するにつきて、その資格・條件を定めたる法令。明治二十六年の公布。同三十二年改正せられ、現行のは、大正二年全部の改正を經たるもの。

ぶんくわん-ふつうしけん 文官普通試驗【名】大正七年四月以後に於ける行政科の普通試驗の舊稱。卽ち判任文官に任用

すべき資格の有無を檢する文官試驗。(文官高等試驗に對して)

ぶんくわんふつうしけんねんねん 文官普通試驗委員【名】明治二十七年に定めたる文官試驗委員の一。各官廳に置き、その長官の監督の下に、文官普通試驗及び判任文官任用の銓衡に關する事務を管掌せしもの。大正七年、普通試驗委員と改稱せり。(文官高等試驗委員に對して)

ぶんくわん-ふつうちようかいねんねん 文官普通懲戒委員【名】文官普通懲戒委員會を組織する委員。文官普通懲戒委員會を置く官廳の高等官の中より、本屬長官これを命じ、內閣にては、賞勳局・法制局及び內閣所屬の高等官の中より任命す。(文官高等懲戒委員に對して)

ぶんくわんふつうちようかいねんねん-くわい 文官普通懲戒委員會【名】文官懲戒委員會の一。判任文官・判任官見習及び判任待遇者の懲戒事件を審査・議決するもの。(文官高等懲戒委員會に對して)

ぶんくわんふつうちようかいねんねん-ちやう 文官普通懲戒委員長【名】文官普通懲戒委員會の委員長。文官普通懲戒委員會を置く官廳の長官を以て充て、內閣にては法制局長官、樞密院にては書記官長、各省にては次官を以て充つ。

ぶんくわん-ぶんげんれい 文官分限令【名】親任官及び公使・祕書官、その他、特別任用の規定ある者以外の一般の文官に就きて、その免官・退官・轉官及び休職の事由を定めたる法令。明治三十二年勅令を以て公布。

ぶんくわん-みならひ 文官見習【名】判任文官に任用せらるべき資格を有して、官廳の事務の練習を命ぜられたる、判任官待遇の職員。

ふんくわわん 噴火灣【名】〔地〕『沿岸に火山あるによりていふ』**いぶりわん**(鰺振灣)に同じ。

ぶん-けい 分家【名】〔法〕家族が、その家より分離して、別に一家を創立すること、又その分離して、創立したる家。別家。

ふん-けい 刎刑【名】**ざんけい**(斬刑)に同じ。〔東遷〕『今日北條殿、於二六條河原一刎二群黨十八人首一。凡如レ此犯人者、不レ可レ渡二使廳一直可レ處二刎刑一之由』「首。」

ふん-けい 刎頸【名】くびをきること。斬刎頸の交(マジ)【句】『史記の廉頗藺相如傳に「廉頗祖レ負レ荊、至二門謝一罪曰、鄙賤之人、不レ知二將軍寬之至一此、卒相與驩爲二刎頸之交一とあり』首を斬られても、情交をかへざるほどの、親密なる交際。「と。

ぶん-けい 文慶【名】年號の文祿と、慶長。

ぶん-げい 文藝【名】㊀學問・技藝。藝文。㊁『英 literary art』思想化したる美的現象を表現せるもの、卽ち詩歌・文章・繪畫・彫刻などの類。藝術。㊂詩歌・小說・戲曲。文學。

ぶんげい-くらぶ 文藝倶樂部【名】明治二十八年二月、博文館より發刊し、大正初年まで續きし、小說の雜誌。

ぶんげい-ふくこう 文藝復興【名】『英 Revival of learning 又 Renaissance』伊太利國にて、中世期の末より、近世に亙りて起りたる學術・技藝の復興。西曆十四五世紀の頃、煩瑣哲學漸く衰へ、敎會の敎權より獨立せる、或は新しきものを求めんとする思潮の湧起により、人心の、出世間的・超自然的なる中世的文化を捨て、世間的・自然的にして、人間の諸能力を圓滿に發達せしめ、現世に於て、樂しき生活を營まんとする、希臘思想に向へるに因る現象。歐洲諸國に傳播し、獨逸佛蘭西・英吉利などは、最もその影響を蒙れりるねっさんす。

ぶんげい-るゐさん 文藝類纂【名】〔書〕我國の文字・文章、その他文藝上の事物を集錄し、その沿革を敍したるもの。八卷。神原芳野の著。

ぶん-けう 文敎【名】文事を以て、人を敎化すること、又その敎化。文命。

ぶん-けうぢやう 分敎場・分敎塲【名】一部の生徒のため、或は特殊の敎授を施すために、分設したる敎塲。

ぶんけう-をんこ 文敎溫故【名】〔書〕文學・學校・經籍・訓話・讀法・文字・文章・詩賦・和歌・印版の十項につき、更に七十餘の細目を立てて論述せるもの。二卷。山崎美成の著。

ぶん-げき 奮擊【名】力の限を出だして、敵を擊つこと。

ぶん-げき 奮激【名】心の、烈しく奮ひ立つこと。

ぶん-げき 憤激【名】いきどほりて、氣の立つこと。憤りはげむこと。

ぶんげき 文鷁【名】『司馬相如の子虛賦に「浮二文鷁一、揚二桂枻一」とあり。文彩ある鷁首の義』**げきしゆ**(鷁首)に同じ。「じ。

ぶん-けつ 文傑【名】**ぶんがう**(文豪)に同じ。

ぶん-げつ 分蘗【名】實生(ミバエ)の苗の發育して、漸次その周圍に、新蘗を生ずること。かぶはり。

ぶんげつ-ざうりんはふ 分蘗造林法【名】『獨 Ausschlagpflanzung』樹の根もとより生じたる蘗(ヒコバエ)を分け取りて移植し、又は、これに土を掛けて、根を生ぜしめたる後、切り離して移植して、仕立つる造林法。但し造林上、重要なるものにあらず。

ぶん-げふ 分業【名】㊀分擔して、業を行ふこと。㊁〔經〕『英 Division of labour』簡簡の勞力に從事し、相合して、生產事業を形成すること。技術的分業・職業的分業・場所的分業の三種に分つ。

ぶん-けん 分見・分間【名】山野の位置・高低・距離等の測量。「分見繪圖」

ぶん-けん 分絹【名】昔、中世以後、田畑の廣さ、收穫の高に應じて分ち定めし、調(テウ)の絹布。**ぶんせん**(文錢)・**ぶんまい**(分米)參照。

ぶん-けん 文獻【名】『文は書籍、獻は賢人の義』古代の文物制度を徵すべき材料。「文獻、足らず」

ぶん-けん 分權【名】權力を、各機關に分配すること。(集權に對して)「地方分權」

ぶん-けん 分遣【名】わけてつかはすこと。派遣。「じ。

ぶん-けん 見【名】**けんぶん**(見聞)に同じ。

ぶん-げん 分限【名】㊀かぎり。ほど。分際。㊁身のほど。身分。ぶげん。分際。**ぶげん**(分限)參照。㊂ありさま。樣子。太平記「國の風俗、人の分限をぞ窺ひ見られける」同「敵の分限の推量りて」㊃〔法〕人が、法令に定めたる要件を充實したるによりて獲得せる地位。例へば、日本臣民たる分限、官吏たる分限など。

分限無し【句】土地、極めて狹し。平家「園城(オンジヤウ)は分限なきによりて、南都へ赴かしめたまふ間」

ぶんけん-がく 文獻學【名】『英 Philology』民族の言語と文學とに徵して、その文化の性質を闡明する學問。我國の國學の如きも、その一なり。

ぶんげん-かた 分限方【名】德川幕府の表右筆の事務の內、諸家の分限を記帳する事を掌りし分課。

ぶんけん-かんたい 分遣艦隊【名】〔兵〕一の艦隊より、特に數艘を抜きて、他方面に派出するもの。**ぶんかんたい**(分艦隊)參照。

ぶんげん-つうかう 文獻通考【名】〔書〕支那歷代の法制・經濟・文獻等の沿革・興廢を記したるもの。三百四十八卷。支那元の馬端臨の撰。杜氏通典に因り、その八門を析ちて十九門とし、更に經籍・帝系・封建・象緯・物異の五門を增し、合はせて二十四門とし、通典に記す所を承けて、南宋の寧宗皇帝に至る。宋史各志の闕を補ふに足る。「う」易經」を見よ。

ぶんげん-でん 文言傳【名】〔書〕**えききやう**

ぶんげん-れい 分限令【名】㊀分限を規定したる法令。㊁陸・海軍將校の分限を規定したる勅令。將校及び同相當官は、依願免官、又は日本人たる分限を失ひ、又は重罪の刑、刹官の宣告などによりて、失官の處分を受けざる限は、終身その官を保有し、その制服を著用し、その官に對する禮遇を享くるものと規定す。その位置は、現役・豫備・後備・退役の四種に分つ。**ぶんくわんぶんげんれい**(文官分限令)參照。

ぶん-こ 分戶【名】**ぶんけ**(分家)に同じ。

ぶん-こ 文庫【名】㊀書籍を入れおくく

ら。ふみぐら。書庫。㊁鎌倉時代に、引付評定の事切(ことぎれ)の文書などを置きし所。㊂紙・筆など、又はその他の雑品を入れおく手箱。㊃『英 Library』文學的叢書の表題に附くる語。「帝國文庫」「國民文庫」㊄ぶんこむすび(文庫結)の略。

ぶん-ご 文語【名】㊀『論衡に「聖賢之材鴻。故其文語、與ㇾ俗不ㇾ通」とあり』文章と言語と。㊁『英 Written language』詩歌・文章の上にのみ用ふる語。文章語。(口語に對して)

ぶんご 豊後【名】〔地〕『ぶご(豊後)の音便』㊀西海道十二國の一。大分(オホキ)市と西國東(ニシクニサキ)・東國東・速見(ハヤミ)・大分・北海部(キタアマベ)・南海部・大野・直入(ナホリ)・玖珠(クス)・日田の十郡とに分れ、全國、大分縣の管轄に屬す。㊁〔人〕みやこぶんごのじょう(宮古路豊後掾)の略。㊂ぶんごぶし(豊後節)の略。八笑人「横町の文字燒(ヤキ)といふ豊後の師匠に、ひどくのろけて」

ふん-とう 紛紅【名】㊀種種の紅き色の入りみだるること。㊁花の散りみだること。落紅。

ふん-とう 紛訌【名】『訌は亂るる義』內部のごたごた。うちわもめ。

ぶんご-とう 文功【名】ぶんくん(文勳)に同じ。(武功に對して)

ぶんこうぢやう 分工場・分工塲【名】分設したる工場。

ぶんご-うめ 豊後梅・鶴頂梅・鷺梅【名】〔植〕梅の變種。幹は二三丈、花は淡紅・重瓣にして大きく、實も殊に大きく、直徑二寸餘に達し、鹽漬又は砂糖漬などとして食す。もと豊後國大分郡の產。織留「庭に、豊後梅の花落頃(ノガロ)なるに」

ぶんご-おもて 豊後表【名】しちたう(七島藺)を見よ。

ぶんご-かさ 豊後笠【名】豊後國より產する、一種の厚紙。

ぶんご-かたり 豊後語【名】豊後節を語る人。

ぶんこ-がみ 文庫紙【名】ぶんこし(文庫紙)に同じ。

ぶんこ-こく 分國【名】㊀分ちて領する國。領分の國。太平記「我が分國越後・上野・駿河・播磨などに」

雪女五枚羽子板「凡そ名ある諸大名、……面面、分國に引籠らず」㊁公卿・院宮・攝關家などにて、數箇國を指定して、所領となし、朝廷に、各國司の補任を請ひて、國務を知らしむることあり。その國。ぶん。

ぶんこく-し 分國史【名】一國づつ別別に記したる歷史。

「(文庫結)を見よ。

ぶんこ-くづし 文庫崩【名】ぶんこむすびふみ-ごくる 踏んごくる【動四他】ふみごくる(踏みこくる)の音便。

ぶんご-ざさ 豊後篠・拾原草【名】〔植〕禾本科に屬する多年生常綠の植物。苦竹(クダ)屬の一種。稈は細くして短く、高さ三尺內外、節は凸隆し、通常五枝を出だし、各枝一葉を著く。葉は卵形又は長楕圓形にして尖れり。暖地の山野に自生す。稈は笊籠・筆管・簀等の料に供す。おかめざさ。かぐらざさ。たうはざさ。

ぶんご-さんりう 豊後三流【名】ぶんごぶし(豊後節)㊁を見よ。

ぶんこ-し 文庫紙【名】反物・帛紗・襟地などを包むに用ふる、一種の厚紙。數枚の紙を糊にて貼り合はせ、表面に美麗なる彩色模樣を印刷せるもの。京都の呉服商某の用ひはじめしもの。

ぶんご-しぼり 豊後絞【名】豊後國より產する絞染。三代男「豊後絞の浴衣(ユカタ)」

ぶんご-しやうるり 豊後淨瑠璃【名】ぶんごぶし(豊後節)に同じ。

ぶんご-すゐだう 豊後水道【名】〔地〕瀨戶內海の外洋に通ずる三口の一。四國と九州との間にある水道。伊豫國の佐田岬と豊後國佐賀關(サガノセキ)とは、その北口を成し(即ち佐賀關海峽)、伊豫國高茂(タカモ)岬と豊後國鶴見岬とは、南口を成す。豊豫海峽。

ぶんご-だけ 豊後竹【名】〔植〕うんもんちく「(雲紋竹)に同じ。

ふん-こつ 粉骨【名】『骨を粉(コ)にする義』骨を折りて働くこと。粉骨・碎身(サイシン)【句】前條に同じ。

ぶんこ-はりばこ 文庫針箱【名】文庫㊂の如き箱に、懸子(カケゴ)を附け、それに針山などを入れたる針箱。

ぶんご-ぶし 豊後富士【名】〔地〕ゆふだけ(由布嶽)の異稱。

ぶんご-ぶし 豊後節【名】㊀淨瑠璃の流派の一。宮古路(ミヤコヂ)豊後掾の語り出だせるもの。妖艷なる情事を諷ひしより、一時は、風俗取締の上より禁ぜられ、松本節と改稱せしことあり。ぶんご。㊁前項の本流及びこれより出でたる常盤津(トキハヅ)・富本・清元・富士松・新內・薗八(ソノハチ)・繁太夫(シゲタユ)等の總稱。常盤津・富本・清元の三流、一時鼎立の姿をなして行はれしより、特に豊後三流の名あり。何れも妖艷悽絕、ややもすれば、淫靡ならんとする傾向あり。ぶんご。

ぶんご-ふどき 豊後風土記【名】〔書〕古風土記の一。豊後國の事を記せるもの。今その六郡の記事を存す。一卷。

ぶんごみ 踏籠・踏込・踏籠・踏込【名】㊀ふんごみばかま(踏籠袴)の略。奉花五大力「踏籠・羽織を取り、尻をはしよる」㊁次條の略。

ぶんごみはいだて 踏籠脛楯・踏込脛楯・踏籠脛楯・踏込脛楯【名】ふみこみはいだて(踏込脛楯)の音便。

ふんごみばかま 踏籠袴・踏込袴・踏籠袴・踏込袴【名】裾の緣の狹き、一種の袴。紐を著けて、下部を括れば、裁著(タツツケ)となるやうに仕立てたるもあり。のばかま。ふんごみ。

ふん-ごむ 蹈籠む・蹈込む・踏籠む・踏込む【動四他】ふみこむ(蹈込む)の音便。和合人「もがきまはる程、泥の中へ、づぶづぶ踏込(フミコ)むから、上る事は出來ず」

ぶんこ-むすび 文庫結【名】女の帶の結び方の一。その左右に出づる部分を長くし、猫じやらしの如くに垂るる氣味にしたるを、文庫崩(クヅシ)とも、だらりともいひ、今も京都の舞妓(マヒコ)の間に行はる。ぶんこ。

ふん-こん 忿恨【名】忿(イカ)り恨むこと。

ぶんこん-ざうりんはふ 分根造林法【名】『獨 Wurzelpflanzung』樹の根を分ちて、床地又は畑作の間に移植し、苗木に仕立つる造林法。

ぶんご-わん 豊後灣【名】〔地〕べっぷわん(別府灣)に同じ。

ふん-ざ 分座【名】居どころを分くること。

ふん-さい 粉碎【名】極めてこまかくだくこと。『の才。筆材。

ぶん-さい 文才【名】文學上の才能。文筆

ぶん-さい 文采・文彩【名】あや。もやう。いろどり。光彩。彩文。

ふん-さい 分歲【名】『康熙字典に「風土記、除夜祭ㇾ先、竢ㇾ事長幼聚飲、祝頌而散、謂之分歲」とあり』古、支那にて、除夜に、一家相集まりて、先祖を祭り、共に宴飲して祝せしこと。

ぶん-さい 文材【名】文章の材料。

ぶん-ざい 分財【名】財を分つこと。財產を分くること。

「に同じ。

ぶん-ざい 分際【名】ぶんげん(分限)㊀㊁

ふんさい-き 粉碎機【名】『英 Crusher 又 Pulverizing machine』鑛石その他の固形物を碎きて、大塊を小塊に、小塊を細粒に、又は細粒を粉狀になす機械。

ふん-さう 紛諍・紛爭【名】事のもつれて爭ふこと。もめごと。ごたごた。「こと。

ふん-さう 粉裝【名】いでたちよそほふこと。

ふん-さう 忿爭【名】忿(イカ)り爭ふこと。

ふん-さう 粉粧【名】白粉(オシロイ)をつけてよそほふこと。

ぶん-さう 文藻【名】㊀あや。もやう。㊁文學の才。才藻。

ぶん-さう 分爭【名】分離して、相爭ふこと。

ふんざう-え 糞掃衣【名】〔佛〕『梵 Pāṃsu-kūla. 華美を避け、破衣を拾納して作れること、糞を拭ひし穢物と同じきよりいふ。行事鈔の卷下に「糞掃衣、制著意、此乃世人所棄、無二復住用一義同二糞掃一、又「納衣者、四分云、捨二檀越施衣一、著二糞掃衣一」とあり』のふげさ(納袈裟)に同じ。

ぶん-さうおう 分相應【名】身分にふさはしきこと。分相應の風が吹く【句】人は、各、その身の程に相應して、世渡の道の立つものなり。〔諺語〕

ぶんさう-き 分相器【名】『英 Phase splitter』單相式交流より不完全なる二相式交流を得る裝置。

ぶんざう-まめ ぶんざう豆【名】〔植〕ゑんどう(豌豆)に同じ。

ぶん-さく 紛錯【名】ふんざつ(紛雜)に同じ。

ぶん-さつ 焚殺【名】焚(や)き殺すこと。「燒殺。

ふんざつ 紛雜【名】入りみだるること。ごたごた。もつれ。紛錯。

ぶんさつ 分冊【名】一部の書を、幾冊かに分つこと。

ぶんざつこく 分雜穀【名】德川時代に、田畑の廣さ、收穫の高に應じ、租として、分ち定めたる雜穀。ぶんまい(文米)參照。

ぶん-さん 分散【名】㊀ちりぢりに分ち又は分るること。離散。㊁負債を償ひ得ずして、身代の全部を分ちて辨濟すること。しんだいかぎり。破產。梅暦「金は殘らずお前(ン)が卷き上げ、世間は、分散ひろぐと、言ひ立て」㊂〔理〕『英 Dispersion』光線がプリズムを通過する時、その屈折率に應じて屈折し、各方向を異にして進む現象。例へば、日光の、プリズムを通過する時、七色に分散する類。

ぶんさん 文山【名】〔人〕ぶんてんしゃう(文天祥)の號。

ぶん-さんかい 文散階【名】㊀支那唐代の制度にて、文官の位階。㊁我國、正一位の唐名。拾芥抄「正一位、文散階、武官階」

ぶんざん-しふ 文山集【名】〔書〕支那宋の文天祥の詩文集。二十一卷。

ぶん-し 糞爲【名】犬、猫などの、大便排泄の方法。「糞爲の惡い猫」

ふんし 憤死【名】憤りて死ぬること。憤慨して死ぬること。「ること。

ふん-し 刎死【名】自ら刎(ハ)ねて死ぬ

ふん-じ 分時【名】時の分(ブン)の間。一分の間の時。一分間。

ぶん-じ 文詞【名】綴りて、文章となる言葉。文辭。「助と。

ぶん-し 文史【名】古の圖書寮の頭(かみ)と

ぶん-し 文思【名】㊀『文心雕龍に「陶二鈞文思一貴在二虛靜一」とあり』文章につきての思想。㊁『書經の堯典に「欽明文思安安」とあり』文章と意思と。「匠。

ふん-し 文師【名】文事の師。學問の師

ぶん-し 文詩【名】文章と詩と。詩文。

ぶん-し 文士【名】㊀學問によりて、官に仕へ、社會の上流に立つ人。(武士に對して)正統記「子孫は、今に文士にてぞ傳はれる」㊁『英 Literary man』文筆にたづさはる人。文人。

ぶん-し 分子【名】㊀〔理〕『英 Molecul』ぶんしせつ(分子說)を見よ。㊁一團隊を形成する各個人。㊂〔數〕『英 Numerator』ぶんすう(分數)を見よ。

ぶん-し 分詞【名】〔語〕『英 Participle 意義の上よりは、動詞と連絡を保ちながら、形式上に於ては、全く分離せる詞の義』動詞より出でて、形容詞の如くに用ふる單語。主に西洋各國の語法上に用ふる名稱にて、我國の動詞の連體形に當る。多くは現在分詞・過去分詞の二種あれども、羅甸語・梵語などにては、現在分詞と未來分詞とあり。例へば、英語の loving、獨逸語 liebend は現在分詞、英語の love'd、獨逸詞の geliebt は過去分詞なる類。

ぶん-し 文子【名】〔書〕老子の說を敷衍せるもの。二卷。十二篇に分る。一名、通玄眞經。著者詳かならざれども、唐以前の作にして、これを註せるもの、唐の徐靈府の通玄眞經註十二卷、宋の杜道堅の文子纘義十二卷あり。

ぶん-し 蚊子、蟣牛に上(ホ)る【句】〔佛〕『五燈會元の藥山の章に「某甲在二石頭一如二蚊子上二蟣牛一」とあり』動かし、變じ、又は喙(クチバシ)を容るることの不可能なる譬。蚊(カ)、蟣牛を咬む。〔諺語〕

ぶん-し 分至【名】春分・秋分の二分と、夏至(ゲ)・冬至の二至との總稱。

ぶん-じ 文次【名】麴の製造に於て、麴室の床上に、蒸米の推積したるを突き崩すに用ふる器具。又、醬油の釀造に於て、搥栫(ツイガキ)に代用する器具。

ぶん-じ 文辭【名】ぶんし(文詞)に同じ。

ぶん-じ 文字【名】もんじ(文字)に同じ。

文字の飲(イン)【句】『韓愈の醉贈二張秘書一の詩に「長安衆富兒、盤饌羅二羶葷一、不レ解二文字飲一、惟能醉二紅裙一」とあり』詩を賦し、文を談じて、酒を飲むこと。

ぶんじ 文事【名】文藝に關したる事がら。(武事に對して)

文事ある者は、必ず武備あり【句】『史記の孔子世家に「孔子攝二相事一曰、臣聞、有二文事一者、必有二武備一、有二武事一者、必有二文備一」、又、穀梁傳の定公十年の條には「雖レ有二文事一、必有二武備一」、同書の襄公二十五年の條にも「古者雖レ有二文事一、必有二武備一」とあり』政治に心を用ふる者は、必ず同時に、武備を忘らず。治に居て、亂を忘れず。〔諺語〕

ぶんじ 文二【名】ゑた(穢多)を云ふ。〔越後國の方言〕

ぶんじ-いちぶばんきん 文字一分判金。文字一步判金【名】『背に「文」の字の極印あるよりいふ』げんぶんいちぶばんきん(元文一分判金)に同じ。

ぶんじ-いんりょく 分子引力【名】〔理〕『英 Molecular attraction』ぶんしりょく(分子力)に同じ。

ぶんじ-しう 文繡【名】『繡は、五色の具備せる義』衣裳の模樣と色あひと。「じ。

ぶんじ-しう 分袖【名】ぶんぺい(分袂)に同

ぶんじ-しえんげき 文士演劇【名】演劇改良の目的にて、文士のみづから舞臺に上りて、劇を演ずるもの。壯士芝居におくれて流行し初めたり。文士劇。

ぶんじ-きん 文字金【名】『背に「文」の字の極印あるよりいふ』げんぶんきん(元文金)に同じ。

ぶんじ-ぎん 文字銀【名】『背に「文」の字の極印あるよりいふ』げんぶんぎん(元文銀)に同じ。

ぶんじ-きんぎん 文字金銀【名】『背に「文」の字の極印あるよりいふ』げんぶんきんぎん(元文金銀)に同じ。

ぶんじ-けいせん 分至經線【名】〔天〕『英 Colure』二分經線と二至經線との併稱。

ぶんじ-げき 文士劇【名】ぶんしえんげき(文士演劇)に同じ。

ぶんじ-こばんきん 文字小判金【名】『背に「文」の字の極印あるよりいふ』げんぶんこばんきん(元文小判金)に同じ。

ぶんじ-こむ 封込む【動下二他】ふうじこむ(封込む)【動】に同じ。〔古語〕源氏「かの社に集めたる願文どもを、大きなる沈(ジン)の文箱(ブンバコ)にふんじこめて奉りたり」

ぶんじ-しき 分子式【名】〔化〕『英 Molecular formula』物質の一分子量を表はす化學式。その成分たる各元素の符號を列記し、その一元素にして、幾つかの原子量を含める時は、その數を、符號の右下に附記して示す。例へば、O_2は、酸素の一分子量が、その二原子量より成るを示し、H_2Oは、水の一分子量が、水素二原子量と酸素一原子量とより成るを示す類。

ぶんじ-じしゃく 分子磁石【名】〔理〕『英 Molecular magnet』磁石を構成する物質の各分子も、亦一箇の小磁石なりとて、假に名づけて呼ぶもの。次條參照。

ぶんじ-じしゃく-せつ 分子磁石說【名】〔理〕『英 Molecular theory of magnet』磁石は、いかに細分しても、各部分何れも磁石なるよりして、磁氣は物質の分子的性質ならんと考へ、分子の各個は、不變の永久磁石にして、磁界の作用にて、各分子の方向に變動を生じ、その並び方にて、全體としての磁性を現すといふ假說。磁石分子說。

ぶんじ-じゅう 分時銃【名】海軍の葬喪の禮の一。分時砲の禮を受けざる准士官以上の軍人の柩を、本艦船より出だす時、一分時乃至五分時を隔てて、小銃を三回齊發するもの。

ぶんしせつ 分子說 【名】〔理〕『英 Molecular hypothesis』物質は、分子の集合より成るといふ假說。分子は物理的方法にては、もはや分割すること能はざる極微のものにして、絕えず運動し、然も分子力と稱する一種の力を働かし合ふことによりて、相集まりて、物質を形成し、又その力の大小の差によりて、固態・液態・氣態の區別を生ずと說く。**げんしせつ**(原子說)參照。

ぶんじせん 文字錢 【名】『文は、寬文の略』寬文八年より天和三年まで、江戸龜井戸にて鑄造せし寬永銅錢。背孔の上に「文」の字の極印あり。徑八分、量目一匁。京都方廣寺の大佛の像を毀ちて鑄たるもの。大佛錢。文錢。

ぶんしち 文七 【名】一『大阪の俠客雁金文七の人形に、始めて用ひしより名づく』芝居にて用ふる人形の首の一種。二芝居の太刀打の名目の一。三**ぶんしちぶし**(文七節)の略。四**ぶんしちもとゆひ**(文七元結)を見よ。五元結を造る職業、又その人。其角「文七に踏まるな庭の蝸牛(カタツムリ)」 六〔動〕小き鯉。〔東國の方言〕

ぶんしちぶし 文七節 【名】小唄の一。雁金(カリガネ)文七の事を唄ひしもの。文七。

ぶんしちもとゆひ 文七元結 【名】『世事百談に「文七といふは、元結をこしらふる杉原紙の印の名なり」とありて、元は抄紙者の名なりといふ。昔は、その紙を用ひしに因るならん』紙撚(コヨリ)を長く撚りて、水に浸し、車にて撚を掛けて、水をしごきて製したる元結、現時も行はる。黑と白との二種あり。又、白き文七元結の太きものを奴(ヤッコ)元結といひて、もとは藝妓などが、意氣なるものとして、根掛(ネガケ)に用ひ、今は普通の女も用ふ。みづひきもとゆひ。しごきもとゆひ。文七。

ぶんしちりゆう 分子重 【名】〔化〕『くわがふちゆう(化合重)を見よ』**ぶんしりやう**(分子量)に同じ。

ぶんし-しつ 紛失 【名】物のまぎれ失すること。

ぶんし-しつ 紛失 【名】前條に同じ。

ぶんしつ 文質 【名】文と質と。はてと、じみと。かざりと、なかみと。

文質三統(トウ) 【句】『論語の爲政篇に「子曰、殷因於夏禮、所損益可知也。周因於殷禮、所損益可知也」とありて、集解に「馬融云、所因謂三綱五常、所損益謂文質三統」と見ゆ』支那の夏・殷・周三代の政事。

文質彬彬(ヒンヒン) 【句】『論語の雍也篇に「質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子」とあるに本づく』物の入りみだれて、而もよく平均し、即ち文と質と適度に相まじはる形容。

ぶんしつ-かいかふ 紛失開閣 【名】問注所(モンチュウジョ)の執事の異稱。

ぶんしつ-かた 紛失方 【名】**もんちゆうじよ**(問注所)に同じ。細川家書札抄 紛失方、問注所也」

ぶんし-ねつ 分子熱 【名】〔理〕『英 Molecular heat』物質の分子量に、その比熱を乘じたる量。

ぶんじ-はう 分時砲 【名】海軍の葬喪の禮の一。禮砲又は答砲を受くべき諸官の葬儀に、一分時乃至五分時を隔てて、砲を發するもの。**ふんじゆう**(分時銃)參照。

ふん-じばる ふん縛る 【動四他】『ふんは接頭語』しばる。〔俚語〕

ぶんじ-ひしよきよく 文事祕書局 【名】明治二十三年より同四十一年まで、宮中に置かれ、文事祕書官長・文事祕書官・屬の職員ありて、內廷の文書の事を管掌せし局。

ぶんじ-ひしよくわん 文事祕書官 【名】文事祕書局の職員の一。文事祕書官長の指揮を承けて、文書を掌理せし奏任官。

ぶんじひしよくわん-ちやう 文事祕書官長 【名】文事祕書局の長官。聖旨を奉じて、文事に關する內廷の文章を管掌せし勅任官。

ぶんし-しふ 文集 【名】文章を集めたる書。

ぶんじ-しふ 文集 【名】一前條の轉。〔古語〕二〔書〕**はくしもんじふ**(白氏文集)の略。枕「文(ブン)は文集・文選(モンセン)」

文集の屏風 【句】白氏文集の中の語句を記したる屏風。榮花「漢書の御屏風、文集の御屏風どもなど、しあつめたまふなれば」

ふん-じん 奮進 【名】ふるひ進むこと。

ふん-じん 奮迅 【名】勢はげしくふるひ立つこと。「獅子奮迅の勢」

ぶんしん 文臣 【名】文事を以て仕ふる臣。文官。(武官に對して)

文臣錢を愛せず、武官死を惜しまざれば、天下平かなり 【句】『宋史の岳飛傳に「或問二岳飛一、天下何時太平。答曰、文臣不レ愛レ錢、武官不レ惜レ死。則天下平矣」とあり』文臣は清廉にして、治に勵み、武臣は國家のために、命を惜しまざれば、天平は、泰平なる筈なり。〔諺語〕

ぶんしん 文身 【名】**いれずみ**(入墨)に同じ。

ぶんしん 分身 【名】〔佛〕一一つの佛が、人間界に、處處有緣(ウエン)の衆生(シュジョウ)を敎化(ケウ)せんがために、方便力を以て、身を十方に分ちて、成佛(ジョウブツ)の相を現ずること。譬喩「西王母一まことは、われこそ西王母の分身よ」二一つの身體の、二つ以上に分るること。太平記「高重……十分に分身して、萬卒に同じく相當りければ、義貞の兵、高重が在所を見定めず」三子を產むこと。分娩。

分身の佛 【句】〔佛〕前條一に同じ。

ぶん-じん 文人 【名】一文雅の事に携はる人。詩歌書畫などの道に心を寄する人。文士。公事根源「文人ども、題をたまはり、詩を作りて」二**もんじやうしやう**(文章生)を見よ。

文人相輕んず 【句】『典論に「文人相輕、自古而然」、文心雕龍に「班固・傅毅、文在二伯仲一。而固陵二毅詞一、筆不レ能二自休一。及二陳思論一才亦排二弘璋一。故魏文稱二文人相輕一、非二虛談一也」とあり』文人は、互に自ら高しとして、他を侮る癖あり。〔諺語〕

ぶんじん-ぢやく 文人墨客 【名】【句】文人と墨客と。詩文・書畫などの道に携はる人。

ぶんじん 聞人 【名】『孔子家語の始誅篇に「少正卯、魯之聞人也」とあり』名高き人。名士。

ぶんじん-ぐわ 文人畫 【名】專門の畫家ならぬ、讀書研學・詩文等に携はる人人のゑがく畫。彩色を主とせず、專ら筆意を貴び、風韻多き疎畫にして、支那明・清時代に、これらの人人にして、南宗(ナンシュウ)畫をよくする者輩出し、兩者互に混同せらるるに至れり。

ぶんじん-しやくわい 文人社會 【名】文人の社會。文人の仲間。文界。詞林。

ぶんじん-てうりよう 文心雕龍 【名】〔書〕『雕龍は、龍を雕刻したるがごとく、文彩に富みて巧みなる義』文體・修辭を精細に論じたるもの。上篇二十五篇、下篇二十四篇、外に序志一篇より成る。支那梁の劉勰の著。

ふん-しや 社 【名】「粉榆の社」に同じ。〔吉記、崇德院御竹社、每事未レ定〕

ぶん-しや 分舍 【名】本舍より分設したる舍。支舍。

ぶん-しや 分社 【名】本社より分設したる「社。支社。

ぶん-しやう 分掌 【名】手わけしてつかさどること。

ふん-しやう 氛祥 【名】天にあらはるるかざり。一思想を、文字に書きあらはしたるもの。二さんぶん(散文)に同じ。四〔語〕**ぶん**(文)三に同じ。

ぶん-しやう 文章 【名】一あや。もやう。文章の四體 【句】支那の文章の四つの風體。即ち散文・四六文・韵語・時文。

文章は一小技、道に於て未だ爲さず 【句】『杜甫の詩に「文章一小技、於レ道未レ爲レ尊」とあり』文章は、一の末技に過ぎざるものにて、人道上、尊しとするに足らず。〔諺語〕

文章は經國の大業 【句】『典論に「文章、經國之大業、不朽之盛事。年壽有レ時而盡、榮樂止二於其身一。二者必至之常期、未若二文章之無一レ窮」とあり』文章は國家を經綸する一大事にして、極めて重要なるものなり。〔諺語〕

文章は命達(メイタツ)を憎む【句】『杜甫の天永懐二李白一の詩に「涼風起二天末一、君子意如何、鴻雁幾時到、江湖秋水多、文章憎二命達一、魑魅喜二人過一、應下共二冤魂一語、投レ詩贈中汨羅上とあり』文章の作家は、不遇なる者多し。〔諺語〕

ぶんしやう 文相【名】もんぶだいじん(文部大臣)の異稱。

ぶんしやう 文昌【名】ぶんしやうせい(文昌星)の略。

ぶんしやう 文正【名】後土御門天皇の御代の年號(紀元二一二六年—二一二七年)。

ぶんじやう 文情【名】文章のあぢはひ。「文致。

ぶんじやう 分譲【名】分けて譲ること。分割して譲與すること。

ぶんしやう-いっくわん 文章一貫【名】〔書〕支那の文章を、精細に論じたるもの。二卷。明の高琦等の著。

ぶんしやう-か 文章家【名】文章をよくする人。文士。操觚家。文家。

ぶんしやう-きはん 文章軌範【名】〔書〕支那の漢・晉・唐・宋の文凡そ六十九篇を、科擧に應ずる者のために集めたるもの。七卷。宋末の謝枋得の撰。

ぶんしやう-ご 文章語【名】ぶんご(文語)に同じ。

ぶんしやうせい 文昌星【名】〔天〕北斗七星中の最も先頭にあるもの。先頭にあるために、古、支那にては、科第をこの星に祈る習慣ありたり。文昌。文星。魁。

ぶんしやう-せいそう 文章正宗【名】〔書〕左傳・國語以下、唐・宋までの詩文を、辭命・議論・敍事・詩賦の四類に分ちて集めたるもの。二十卷。目錄一卷。宋の眞德秀の編著。

ぶんしやう-せんかく 文章撰格【名】〔書〕國文に關する種種の句格を分析評說せるもの。二卷。橘守部の著。

ぶんじやう-ち 分譲地【名】希望者に、一定の價格を以て、分譲すべしと定めたる土地、又、分譲したる土地。

ぶんしやう-ていくん 文昌帝君【名】支那にて、文昌星を人格化し、文學を司ると信ずるもの。

ぶんしやう-の-さうし 文正草子【名】〔書〕御伽草子の一。常陸國鹿島大宮司の雜色(ざふしき)に文正と呼ぶ者なり、燧燒より出世して、大福長者となり、鹿島明神に祈りて得たる二人の娘の、姉は皇子の妃となり、妹は帝の女御となりて時めくに至りし筋に作れるもの。

ぶんしやう-はかせ 文章博士【名】もんやうはかせ(文章博士)を見よ。

ぶんしやう-へん 文章篇【名】〔語〕文典の中にて、文章論(二)を記せる部分。

ぶんしやう-べんたい 文章辨體【名】〔書〕宋の眞德秀の文章正宗に本づき作れるもの。五十卷、別に外集五卷。明の吳訥の編著。

ぶんじやう-らん ぶんじやう蘭【名】〔植〕くさぼたん(草牡丹)に同じ。

ぶんしやう-ろん 文章論【名】(一)文章上の論說。(二)〔語〕『英 Syntax』文章法に關する論說。

ぶんしやう-ゐん 文章院【名】嵯峨天皇の弘仁中、文章博士菅原清公の創立して、文章・紀傳の生徒を敎授せし學校。

ぶんしやく 分釋【名】〔哲〕『英 Division』論理上、一の概念を外延的方面より、更に特殊なる概念に分析すること、卽ち定義にて、敍述の題目・範圍を定めたるものの外延的分量を減少して、順次にその一一を說明し、以て全部の意義を明かにすること。その分析の數に從ひて、二分釋・三分釋など呼び、分釋終りたる後、說明に移る。分科。

ぶんじやく 文弱【名】文事に耽りて、尙武の氣風の失すること。(武强に對して)

ぶんじやく 文籍【名】ぶんせき(文籍)に同じ。 增補下染集「文籍、ブンジャク」

ぶんしゆ 分手【名】ぶんべい(分袂)に同じ。

ぶんしゆ 分銖【名】ししゆ(錙銖)に同じ。

ぶんしゆ 分守【名】衙衙の職分をわかち守ること。「者。

ぶんじゆ 文儒【名】文學に秀でたる儒

ふんじゆく 粉熟【名】ふずく(粉熟)を見よ。

ぶんしゆく 分宿【名】分れて宿泊すること。

ふんしゆつ 噴出【名】火水などの、高く噴き出づること。

ぶんしゆつ 分出【名】(一)分れ出づること。(二)〔哲〕りうしゆつ(流出)に同じ。

ふんしゆつ-がん 噴出岩【名】〔地〕『英 Eruptive rocks 又 Effusive rocks』(一)くわざんがん(火山岩)に同じ。(二)ほうはつがん(迸發岩)に同じ。「する口。

ふんしゆつ-こう 噴出口【名】物を噴出

ぶんしゆつ-せつ 分出說【名】〔哲〕りうしゆつせつ(流出說)に同じ。

ふんしよ 焚書【名】(一)書籍を燒き棄つること。(二)支那秦の始皇帝が、民間藏する所の書は、醫藥・卜筮種樹等政敎に關係なきものの外は、すべて官に差出さしめて燒き棄てしこと。

ぶんしよ 文書【名】かきもの。ふみ。もんじよ。もんぞ。「地。

ぶんしよ 分所【名】領分の內にある土

ぶんしよ 分署【名】(一)本署より分設したる役所。支署。(二)けいさつぶんしよ(警察分署)の略。

ぶんしよ-あん 文書案【名】文書の草案。

ぶんしよ-きき 文書毀棄【名】〔法〕公務所の用に供する文書・圖畫、又は權利義務に關する、他人の私有の文書・圖畫を毀棄すること。

ぶんしよきき-ざい 文書毀棄罪【名】〔法〕文書毀棄を行ひしによりて成立する罪。公文書毀棄罪と私文書毀棄罪とに分つ。

ぶんしよ-ぎさう 文書僞造【名】〔法〕行使の目的を以て、御璽・國璽もしくは御名を用ふべき文書、公務所又は公務員の作るべき文書・圖畫、他人の權利義務又は事實證明に關する文書・圖畫を僞造し、又、公務員に對し、虛僞の申立をなして、權利義務に關する公正證書の原本・免狀・鑑札又は旅券に不實の記載をなさしめ、又、公務員が、その職務に關し、行使の目的を以て、虛僞の文書・圖畫を作り、或は又、醫師が、公務所に提出すべき診斷書・檢案書又は死亡證書に、虛僞の記載をなすこと。

ぶんしよぎさう-ざい 文書僞造罪【名】〔法〕文書僞造を行ひたるによりて成立する罪。公文書僞造罪と私文書僞造罪とに分つ。

ぶんしよ-きよく 文書局【名】(一)明治四年工部省に置き、同六年文部省に置き、文書・報告・飜譯等の事を掌りし局。工部省にては同九年、文部省にては設置の年に廢せられたり。(二)明治十六年太政官に置き、文書の記錄・編纂並びに圖書の類別・保存・出入等の事務を掌りし所。同十八年に廢せり。

ふんしよく 粉飾【名】(一)白粉(おしろい)を塗りて飾ること。化粧。(二)うはべを飾りつくろふこと。

ふんしよく 扮飾【名】身なりをよそほひ飾ること。身づくろひ。化粧。

ぶんしよく 文飾【名】(一)『禮記の玉藻篇に「犬羊之裘不レ褎、不二文飾一也」とあり』質朴ならぬこと。あや。(二)文章・字句の上につきてのかざり。「こと。

ぶんしよく 分職【名】職務を分擔することを。

ふんしよく 分蝕・分食【名】〔天〕『英 Partial eclipse』一部分のみ蝕する日蝕又は月蝕。金環蝕も、この一種なれども、別に名目を立つ。部分蝕。(皆既蝕に對して)

ぶんしよく-せい 分職制【名】〔法〕各官廳の職務・權限を、事務の性質によりて定むる制度。(分地制に對して)

ぶんしよ-し 文書司【名】明治三年よりその翌年にかけて、外務省に置き、飜譯・通辯・外交書翰・記錄・編輯の事務を掌りし所。

ぶんしよ-しんり 文書審理【名】〔法〕しよめんしんり(書面審理)に同じ。「官。

ぶんしよ-ちやう 分署長【名】分署の長

ぶんしよ-へんざう 文書變造【名】〔法〕御璽・國璽を押捺し、若しくは御名を署したる詔書、その他の文書、公務所もしくは公務員の捺印又は署名したる文書・圖畫を變造するか、又は公務員が、その職務に關して、行使の目的を以て、文書・圖畫を變

造すること。

ふんしよへんざうざい 文書變造罪【名】〔法〕文書變造を行ひたるによりて成立する罪。

ぶんしらう 文四郎【名】〔動〕小き鯉。〔東國の方言〕和合人「鯉丈と附けし己が名も、鯉とは讀めど、はね返り、文しらうと（素人）のくはせ者」

ぶんしりやう 分子量〔理〕『英 Molecular weight 又 Molar weight』酸素より三十二倍（水素より殆ど二倍）輕き假定的氣體を標準とせる、同溫・同壓の下に於ける等容積の他の物質の重量の比。從ひて酸素の分子量は三二にして、水素のは二（精密にいへば二・〇一五）なり。卽ち一物質の分子量は、その氣體としての重量を、同一の狀況に於ける同容の酸素の重量と比較すれば、知り得るなり。例へば、酸素より二・二二倍重き氣體ありとせば、その分子量は七・一〇なるべきが如き、これなり。

ぶんしりよく 分子力【名】〔理〕『英 Molecular force』分子の運動のエネルギイ。卽ち各分子間に存在すと假定したる、萬有引力に似たる、一種の引力。通常分ちて、凝集力附著力の二とす。

ふんす 扮す【動佐變自】いでたつ。身づくろひす。變裝す。扮裝す。

ふんず 封す【動佐變他】ふうず（封ず）〔一〕の音便。〔古語〕麩紫の紙をふんじて、房（ふさ）長き藤に附けたるも」源氏「願文どもを、大きなる沈（ぢん）の文箱（ふばこ）にふんじこめて」

ぶんすう 分數【名】〔數〕『英 Fraction』小數と同じ性質にて、その記し方を異にする數。卽ち整數を他の整數にて除したる結果を、橫線の下に除數を記し、その上に、被除數を記してあらはしたるもの。例へば、2を3にて除したるを$\frac{2}{3}$と記し、bをaにて除したるを$\frac{b}{a}$と記す類。その2・bを分子といひ、3・aを分母といひ、又、これを讀みて「三分の二」「a分のb」といふ。

ぶんすうけいすう 分數係數【名】〔數〕『英 Fractional coefficient 又 Fractional cofactor』分數より成る係數。例へば、$\frac{2}{3}xy$に於ける$\frac{2}{3}$などの類。

ぶんすうしき 分數式【名】〔數〕『英 Fractional expression』文字の分母を含める有理式、卽ち整式にあらざる有理式。例へば$\frac{1}{a-1}$などの類。

ぶんすうしすう 分數指數【名】〔數〕『英 Fractional exponent 又 Fractional index』分數より成る指數。例へば$3^{\frac{2}{3}}$・$5^{\frac{1}{2}}$・$a^{\frac{3}{5}}$に於ける$2\frac{1}{2}$などの類。

ぶんすうしはうていしき 分數方程式【名】〔數〕『英 Fractional equation』分母に未知數のある分數式を含む方程式。例へば、$\frac{1}{a-1}-\frac{2}{a^2-1}=1$などの類。

ふんずく 粉熟・粉粥【名】ふずく（粉熟）に同じ。伊呂波字類「粉熟、フンズク（以レ米爲レ之）。粉熟・粉餡（已以同）」

ふんすゐ 噴水【名】水を噴き出だすこと、又その水。

ぶんすゐかい 分水界【名】〔地〕ぶんすゐせん（分水線）に同じ。

ふんすゐき 噴水器【名】水を高く噴きあがらしむる裝置の器。「次條を見よ。

ぶんすゐさんみやく 分水山脈【名】〔地〕『英 Water shed』河川の灌域を兩側に區劃する假線。山が分水線を形成する時は、分水山脈又は分水嶺といふ。分水界。分水嶺。

ぶんすゐはふ 分水法【名】はうすゐほふ（放水法）に同じ。

ぶんすゐれい 分水嶺【名】〔地〕ぶんすゐせん（分水線）を見よ。

ぶんせい 文勢【名】文章の語勢。

ぶんせい 文星【名】■〔天〕ぶんしやうせい（文昌星）の略 ■『しやうせい（將星）』を見よ』文壇の傑士。文豪。

文星暗し【句】『書言故事』に「言二人下第而歸一曰二無レ怪文星暗一」唐大中間、天官奏云、文星暗、科場當レ有レ事。後經二三科覆試一後落、考官皆罰レ俸」とあり』科擧に落第して歸る。〔諺語〕

ぶんせい 文成【名】〔人〕次條を見よ。

文成が僞【句】支那齊の李少翁といふ奸人、鬼神の方に通ぜりと稱して、武帝に寵せられ、文成將軍となりしが、後、その僞なること發覺して誅せられし故事。「蚊の鳴きごゑ。「蚊聲雷の如し」

ぶんせい 蚊聲【名】蚊の羽ばたきの音。

ぶんせい 分性【名】〔理〕かぶんせい（可分性）に同じ。

ぶんせい 文政【名】■ぶんち（文治）に同じ。

ぶんせい 文政【名】仁孝天皇の御代の年號（紀元二四七八年―二四八九年）。

文政の三藏【句】〔人〕間宮林藏・近藤重藏・本山行藏の三人。

ぶんせい 蚊蚋・蚊蛎【名】【動】『蚋も蚊にて、說文に、秦・晉にては蚋といひ、楚にては蚊といふといへり』か（蚊）に同じ。蚊蚋、山を負ふ【句】『莊子』の應帝王篇と秋水篇との語に本づく』微力なる者の、過分の任務を負ふ譬。ぶんぷ蚊負參照。〔諺語〕

ぶんせいいちぶきん 文政一分金【名】ぶんせいいちぶぶんきん（文政一分判金）の略。次條の略。

ぶんせいいちぶぶんきん 文政一分判金【名】德川時代の金貨の一。文政二年より同十一年まで鑄造・發行し、天保十三年七月まで通用せし一分判金。縱六分、橫三分五厘。草字一分判金。草文一分判金。文政一分判。文政一分金。

ぶんせいいっしゆきん 文政一朱金【名】德川時代の金貨の一。文政七年七月より天保二年九月まで鑄造・發行し、天保二年十月まで通用せし一朱金。縱四分弱、橫三分五厘。

ぶんせいいっしゆぎん 文政一朱銀【名】德川時代の金貨の一。文政十二年七月より天保八年まで鑄造・發行し、天保十三年七月まで通用せし一朱銀。縱五分五厘、橫三分。古一朱銀。分銅一朱銀。十六一朱銀。

ぶんせいきん 文政金【名】文政小判金と文政一分判金との總稱。

ぶんせいぎん 文政銀【名】文成一朱銀・新文字丁銀・新文字豆板銀及び文政南鐐の總稱。

ぶんせいきんぎん 文政金銀【名】文政金と文政銀との總稱。「略。

ぶんせいこばん 文政小判【名】次條の

ぶんせいこばんきん 文政小判金【名】德川時代の金貨の一。文政二年より同十一年まで鑄造・發行し、天保十三年七月まで通用せし小判金。縱二寸一分弱、橫一寸一分五厘と縱二寸五厘弱、橫一寸五厘弱との二種あり。草字小判金。草文小判金。草文小判。文政小判。草文小判。

ぶんせいし 分生子【名】〔植〕『羅 Conidia』菌類の胞子の一種。菌絲の末端の縊れ切れて生ずるもの。

ぶんせいなんれうぎん 文政南鐐銀【名】德川時代の通貨の一。文政七年より天保元年まで鑄造・發行し、天保十三年七月まで通用せし二朱銀。縱七分五厘、橫四分五厘。文政二朱銀。小南鐐。

ぶんせいにしゆきん 文政二朱銀【名】前條に同じ。「條の略。

ぶんせいにぶきん 文政二分金【名】次

ぶんせいにぶぶんきん 文政二分判金【名】眞字二分判金と草字二分判金との併稱。「一。

ぶんせいわ 文政和【名】手替錢（てがへせん）の

ふんせう 焚燒【名】火にやくこと。燒灼。燒焚。

ふんぜう 紛擾【名】もつれみだるること。さわぎ。ごたごた。

ぶんせうゐん 文昭院【名】〔人〕さくがはいへのぶ（德川家宣）の諡。

ふんせき 糞石【名】〔地〕ふんくわせき（糞化石）に同じ。

ぶんせき【名】たいこもち（太鼓持）■に同じ。〔慶安頃の大阪の話〕色道大鑑「ぶんせき。同じく太鼓持の事なり。慶安の頃、大阪邊にて言ひ習はせし名目なり。太鼓

は、もと客を賞する故に、同席せず、席を分けて候する心にて、分席と書くといへど、信用し難きことなり。或人いはく、「汝太鼓のぶんせきとして、過言は無用」といひ習はせし詞なりともいふ」

ぶん-せき 文籍【名】かきもの。もんじゃく。書籍。文書。

ぶん-せき 文石【名】㊀文(ア)ある石。㊁〔鑛〕めなう(瑪瑙)に同じ。

ぶん-せき 分析【名】㊀『通鑑』の梁太祖紀に「帝命二冠彦卿一分析」とありて、胡三省の註に「分析者、使二彦卿置一對分二疏辨一析、梁現致一死之由一」と見ゆ』紛雑なる物事を、一一辨別して、明かにすること。分解。㊁〔哲〕『英 Analysis』論理上、概念を、その構成要素に分解すること。解剖。(綜合に對して)㊂〔化〕『英 Analysis』或物質を、それを組み立てたる各元素に分離還元せしめ、或は、併せて、その各元素の量の比を知ること。定性分析・定量分析の二に分つ。(合成に對して)

ぶんせき-くわうせん 分析光線【名】〔理〕すべくとらむに同じ。

ぶんせき-くわがく 分析化學【名】〔化〕『英 Analytical chemistry』化學の一分科。化合物を分析する方法を研究するもの。

ぶんせき-ご 分析語【名】〔語〕『英 Analytical language』表出法の分析的なる言語。近代に降るに從ひて、この表出法を取る傾向ありて、文句を構成する各單語の、その意義以外に、格・人稱・時・數法などの相關的・第二次的意義をも示し、古代語に於て一語にて表出せしを、二語以上を用ひて表はすに至りたる類。分解語。(綜合語に對して)

ぶんせき-たんてい 分析斷定【名】〔哲〕『英 Analytical judgment』その賓位概念が、主位概念を分析したる結果として生ずる場合の斷定。例へば、「物體は延長を有す」の類にて、「物體」といふ概念の內包中には、「延長」といふ概念必然的に包含せらるる類。說明斷定。分析判斷。(綜合斷定に對して)

ぶんせき-はふ 分析法【名】〔哲〕分析㊁の方法。(綜合法に對して)

ぶんせき-はんだん 分析判斷【名】〔哲〕ぶんせきだんてい(分析斷定)に同じ。

ぶん-せつ 噴雪【名】浪の白く立つさまを雪に譬へていふ語。

ぶんせつ-てき 分節的【貌】〔語〕『英 Articulate』いうせつてき(有節的)に同じ。

ぶん-せふ 蚊睫【名】蚊のまつげ。

蚊睫の蟲【句】『列子の湯問篇に「江浦之間生二麼蟲一、其名曰二焦螟一。群飛而集二於蚊睫一、弗二相觸一也。栖宿去來、蚊歩覺也」とあるに本づく』蚊の睫(ガ)の間に棲むといふ、想像上の蟲。焦螟。

ふん-せん 奮戰【名】ふるひたたかふこと。奮鬪。

ふん-ぜん 憤然・忿然【貌】心中にて怒るさま。

ぶん-せん 文選【名】㊀一人又は一類の文章中より、すぐれたるものを選び集めたる書。㊁活版印刷物の活字を拾ふことと、又それを職とする人。活字ひろひ。

ぶん-せん 文錢【名】㊀ぶんじせん(文字錢)に同じ。㊁紋所の一。文字錢に象(カタ)れるもの。

ぶん-せん 分錢【名】中世以後、分米(ブンマイ)・分銀(ブンギン)・分絹(ブンケン)などを、錢貨に換算して納めしこと。

ぶんせん-とう 文選工【名】活版所にて、文選に從事する職工。

ぶんせん-ちゆう 分線柱【名】はいせんちゆう(配線柱)に同じ。

ぶんぜん-でんち ブンゼン電池【名】〔理〕『英 Bunsen's cell』稀硫酸(食鹽水を以て代用するを得)と筒狀の亞鉛板とを入れたる磁器の內に、更に强硝酸を盛り、炭素棒を立てたる素燒の陶器を入れ、炭素棒を陽極、亞鉛板を陰極としたる電池。獨逸の化學者ブンゼンの發明に係る。動電力强大なれども、毒性の酸化窒素を放つ不利あり。

ぶんぜん-とう ブンゼン燈【名】〔理〕『英 Bunsen's lamp 又 Bunsen burner』瓦斯管の下端に、開閉自由なる孔を備へたる、一種の瓦斯燈。その孔より、適宜の空氣を混じて燃燒せしむる時は、發烟せず、光輝薄きに拘らず、强き熱を得るが故に、化學操作上、その他に加熱用に供す。獨逸の化學者ブンゼンの發明に係り、瓦斯七輪・瓦斯ストオブ等は、本器の變形應用に屬す。

ぶんせん-ばこ 文選箱・文選筥【名】文選工が活字を拾ひ集めて入るるに用ふる、縱五寸二分、橫二寸六分ほどの淺き箱。

ぶんせん-わう 文宣王【名】〔人〕『唐代以前、すでに、左傳に、魯の哀公、孔子を誄して「哀哉尼公」といへる由見え、漢の平帝は、追諡して「褒成宣尼公」といへり。宣尼は、字を尊び稱して、諡のごとくせしなるべしといふ。又、王は、宣の字の韻に引かれてナウと發音す』こうし(孔子)の諡。(支那唐の玄宗帝の開元二十七年の追諡にして、宋の眞宗の咸平十三年には、更に玄聖文宣王と諡し、後、至聖文宣王と改め、元の成宗の大德十一年には、大成至聖文宣王とせり)平家「君、君たらずといへども、臣にて臣たらずばあるべからず……と、文宣王のたまひけるに違はず」

ぶんそ 分疏【名】㊀箇條わけにのぶること。㊁いひわけ。辯解。

ぶんそう 文宗【名】文章上の一派の祖。文學の宗師。文豪。

ふんぞく 匈族【名】ふん(匈)に同じ。

ぶんそく 文則【名】㊀文章を組織するに就きての法則。文法。㊁〔書〕支那の古文を評し、又、文章の句法・風體を論じたるもの。二卷。宋の陳騤の著。

ふんぞべる 蹈んぞべる・踏んぞべる【動四自】あふのきて、だらしなく臥す。浮世風呂「大の字に蹈んぞべって」

ぶんそん 分損【名】〔法〕たんざくかいそんたんぽ(單獨海損擔保)の俗稱。

ぶんそん-ふたんぽ 分損不擔保【名】〔商〕たんざくかいそんふたんぽ(單獨海損不擔保)に同じ。

ふんぞり-かへる 蹈反返る・踏反返る【動四自】灸條を强めていふ語。和合人「ざまを見な。ふんぞりけへって、ふさぶさしい寢相(ネガホ)だあ」

ぶん-ぞる 蹈反る・踏反る【動四自】『蹈(ブン)反(ソ)るの音便』足を蹈み出すやうにして、身を反(ソ)らす。續膝栗毛「そこにふんぞってゐさせるお客かのえ」と。

ふん-た 紛拏【名】入りみだれて戰ふこと。

ふんだ 札【名】ふだ(札)を見よ。

ふん-たい 粉黛【名】㊀白粉(オシロイ)と黛(マユズミ)と。粉白・黛黑。㊁おつくり。化粧。㊂『白居易の長恨歌に「六宮粉黛無三顏色一」とあり』美女。美人。

ぶん-たい 文體【名】文章の體裁。文章の言ひあらはし方。

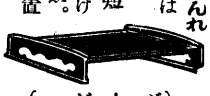
文體は人格なり【句】『佛 Le style est l'homme. 佛蘭西の文士ビュッフォン(Buffon)の語』文體は畢竟、筆者の人格の反映なり。〔諺語〕

ぶんたい 分隊【名】〔兵〕陸軍にては、小隊の四分の一。海軍にては、艦隊の小隊の一部。右翼より、順次に、番號を附けて呼ぶ。

ぶんたい 分體【名】〔生〕ぶんれつ(分裂)㊁に同じ。

ぶんだい 文題【名】文章又は漢詩の題。

ぶんだい 文臺【名】書籍・短冊などを載するに用ふる、たけ低き小机。ふづくゑ。源氏「文臺のもとに寄りつつ置くほどのけしきは」


(いだんぶ)

ぶんたい-せいいしよく 分體生殖【名】〔生〕ぶんたい(分體)に同じ。

ぶんたい-じゆうぢん 分隊縱陣【名】〔兵〕じゆうぢん(縱陣)を見よ。「揮官。

ぶんたい-ちやう 分隊長【名】分隊の指

ぶんたい-はふ 分體法【名】〔生〕ぶんたい(分體)に同じ。

ぶんたい-はんしよく 分體蕃殖 【名】〔生〕前條に同じ。

ぶんたい-めいべん 文體明辨 【名】〔書〕支那の文章を集め載せて、その體裁・組織を類別・説明したるもの。八十四卷。明の徐師曾の撰。明(ミン)の吳訥の文章辨體を、更に增益したるもの。

ぶんだい-ゆり ぶんだい百合 【名】〔植〕かたくり(片栗)㊀に同じ。

ぶんたう 奮討 【名】『蜀志の先主本紀に「忠義奮討」とあり』奮ひ立ちて攻め討つこと。

ぶんたう 文刀 【名】古、文臣の、官等に從ひて、勅授帶劍の宣許を蒙りて帶せし劍。儀刀。

ぶんだう 文道 【名】文事にかかはれる道。學問の道。(武道に對して) 正統記「紀納言・善相公等の名儒ありしかば、文道の盛なりし事も、上古に及べりき」

ぶんたく 【貌】**ぶんだん**に同じ。續膝栗毛「ふんだくに、喰扶持(クヒブチ)貰うて、樂隱居ちや」

ぶんたくる 【動四他】『ぶんは接頭語』うばひ取る。ひったくる。

ぶんたつ 聞達 【名】その名の世に聞えて、立身すること。ほまれ。ひやうばん。著聞。榮達。

ぶんだつ 分立つ 【動四自】別に立て設く。區別を立てて構ふ。卯月の潤色「お龜夫婦を引取って、分立って商(アキナヒ)させ」

ぶんだみ 粉溜・鈒溜 【名】溜潰(アヒシ)の一。金粉又は銀粉にて塗り潰すこと。

ぶんだみ-ばけ 粉溜刷毛・鈒溜刷毛 【名】蒔繪にて、粉溜に用ふる筆。

ぶんたん 粉炭 【名】切込炭(キリコ)の中の、小なるもの。

ふん-だん 【貌】『ふんだんだるま(不斷達磨)を見よ』常にゆたかにて、少しも缺乏を感ぜぬさま。ふんだく。浮世風呂「御富貴でござゐまして、おあてがひから、何から、萬事がふんだんでございます」膝栗毛「飯も、ふんだんに喰ったらう」

ぶん-たん 文旦 【名】〔植〕うちむらさき(内紫)㊁に同じ。

ぶん-たん 分擔 【名】手わけをして、負擔すること。

ぶん-だん 文壇 【名】文學の社會。文學界。藝林。文場。文界。文林。文苑。騷壇。詞壇。詞場。

ぶん-だん 文談 【名】㊀**ぶんわ**(文話)に同じ。㊁手紙にての相談。

ぶん-だん 分段 【名】㊀くぎり。きれ。段落。㊁〔佛〕「分段生死(ブンダンシヤウジ)」に同じ。(變易(ヘンヤク)に對して) 著聞「死しての悲……分段の習、戀りはてぬ」 盛衰記「分段無常の境は、百年の內に、涅槃(ネハン)の雲に隱れなんとす」 ㊂〔佛〕**ぶんだんしん**(分段身)の略。盛衰記「捨てがたきは、血肉の身なり。惜まんと欲せば、分段の膚なり」 ㊃〔佛〕分段同居(ドウゴ)の世界。即ち娑婆世界の類。平家「いたましきかな、分段の荒き波、玉體を沈め奉る」

分段の三道 【句】〔佛〕迷界の三道、即ち惑・業(ゴフ)・苦の三道。

分段輪廻(リンエ) 【句】〔佛〕『廻は、輪の字の韻に引かれて、ネと發音す』分段の衆生(シユジヤウ)が、六道に生死(シヤウジ)・輪廻することを。盛衰記「分段輪廻の境に生れたる者、誰か、死滅の恨をまぬかれたる」

ぶんたん-がく 分擔額 【名】分擔する額。分擔のたか。

ふんたん-き 焚炭機 【名】汽罐に、自働的に石炭を送入して燃燒せしむる裝置。

ぶんたん-し 分段死 【名】〔佛〕**ぶんだんしやうじ**(分段生死)の略。

ぶんたん-しき 分擔式 【名】〔商〕組合商品の記入法の一。損益を組合員各自にて分擔するやうに記入するもの。

ぶんだん-しん 分段身 【名】〔佛〕分段生死(シヤウジ)の身、即ち凡夫の身。分段。

ぶんだん-しやうじ 分段生死 【名】『佛勝鬘寶窟の中卷の末に「分段生死者、謂二色形區別、壽則長短一也」とあり』上は天人より、下は地獄の有情(ウジヤウ)に至るまで、六道に輪廻(リンエ)する身は、各、その業因(ゴフイン)に隨ひて、壽命に分分段段の差別あり、形體にも果報にも、分分段段の差別あること。(變易生死(ヘンヤクシヤウジ)に對して)

ふんだん-だるま 不斷達磨 【名】『嬉遊笑覽の卷六下に「小兒の戲言に、一(ヒ)に二(フ)にふんだるは「る」は「む」の訛なり)だるまが、赤い頭巾かぶりふんまいた(「ふん」は「すん」の訛なり)といへり。……嘉多言(オホゴト)に「不斷といふべきを、ふんだんなどいふことといかがといへり。この音便は、小兒のみにあらず、今も、物の多くあるを、ふんだんといへり」とあり。達磨の形に造りたる起上小法師(オキアガリコボウシ)。よものあか「蘆の一葉(ヒトハ)の猶牙(キバ)に乘りて、九年面壁の居つづけとは、汝が尻のくされ緣か、金がふんだんだるまなるか、からから喝」

ぶんだん-どうご 分段同居 【名】〔佛〕因緣各相同じからず、從ひて、應報も各自相異なる者どもの、共に居ること、即ち六道の內の狀態。**ほんしやうどうご**(凡聖同居土)參照。太平記「垂跡(スヰジヤク)和光の月、明かに、分段同居の闇を照し」の略。

ふんだり 分陀利・芬陀利 【名】〔佛〕次條**ふんだりーげ**の略。

ふんだりーげ 分陀利華・芬陀利華(梵Puṇḍarīka) 【名】〔佛〕㊀開敷(カイフ)せる白色の蓮華。花瓣、八方に各一葉を出だし、最外より最內に至るまで、葉葉相抱き、約百葉あり、徑一尺餘、最外は極めて白く、內に向ひて、漸次微黃色を帶び、最も內に在る瓣は、蕊の色に近く、多く阿耨達池(アノクタツチ)に出で、馥郁たる妙香を發すとて、最上善人に譬へられ、又、妙法蓮華經の蓮華も、これを指すといふ。「八葉(ハチエフ)の蓮華」㊁參照。 猿蓑公戰「華嚴(ケゴン)・法華(ホケ)の芬陀利華は、白色の蓮華なるが故なり」

ぶんだん-しやうじ 念佛者の美稱。

ぶん-ち 文致 【名】㊀文のおもむき。文章の趣致。文情。㊁『漢書の景帝紀に「詔曰、諸獄疑、若雖三文致一於法一而於二人心一不レ厭者、輒讞レ之」とあり』法文により、罪に致すこと。「いふ龍。あま龍。

ぶん-ち 文墀 【名】黃色にして、角なしと。

ぶん-ち 分地 【名】土地を、子弟などに分ち與ふること、又その土地。分土。

ぶん-ち 分知 【名】知行を分つこと。又、分割したる知行所。「およぶこと。

ぶん-ち 聞知 【名】きゝしること。聞きと。

ぶん-ち 文治 【名】文道を以て治むること。法政により、政務を管理すること。

ぶんち 文治 【名】後鳥羽天皇の御代の年號(紀元一八四五年—一八四九年)。

ぶん-ちう 【名】おろかもの。うつけもの。〔德川時代の俚語〕

ぶん-ぢし 分地子 【名】昔、中世以後、田畑の廣さ及び、收穫の高に應じて分ち定めし地子。

ぶん-ち-せい 分地制 【名】官廳の職務・權限を、土地の行政區域により定むる制度。(分職制に對して)

ぶんち-は 文治派 【名】文治を主義とする流派。(武斷派に對して) 「の俗事。

ふん-ぢん 紛塵 【名】煩しき世間の事。世

ぶん-ちん 文鎭・文沈 【名】書物(カモツ)などの風に飛ばぬやうに、抑(オサ)に載する物。金屬又は石にて造り、形は一定せず。かみおさへ。けいさん。書鎭。鎭紙。異尺。

ぶん-ぢん 文陣 【名】㊀『文學を以て、互に競爭するを、戰陣に譬へていふ』**ぶんだん**(文壇)に同じ。㊁論文の布置構成。

ぶん-ちやう 【名】〔植〕**たうぎぼうし**(唐擬寶珠)に同じ。

ぶん-ちやう 蚊帳 【名】かや(蚊屋)に同じ。

ぶん-ぢやう 文場・文塲 【名】㊀**ぶんだん**(文壇)に同じ。著聞「文場ごとに、嚢に抄物を入れて隨身しけるを」㊁官吏登用試驗の場處。詞場。

ぶん-ぢやう 文杖 【名】ふみばさみ(文挾)に同じ。雜武年中行事「宣命、見參を召すなり。內辨、文杖を持ちて」

ぶんちやうらん ぶんちやう蘭 【名】〔植〕**たうぎぼうし**(唐擬寶珠)に同じ。

ぶん-ちやう 文中 【名】文章のうち。文句のなか。

ぶんちやう 文中 【名】長慶天皇の御代の年號(紀元二〇三二年—二〇三四年)。

ぶんちゆう-こう 文忠公【名】〔人〕㊀ふぢはらふひと(藤原不比等)の諡。㊁支那宋の歐陽修の諡。

ぶんちゆうこう-ぜんしふ 文忠公全集【名】〔書〕支那宋の歐陽修の詩文集。宋の四必大の編。居士集五十卷、外集二十五卷、易童子問三卷、外制集八卷、内制集八卷、表奏書啓四六集七卷、奏議集十八卷、雜著十九卷、集古錄十卷、書簡十卷を收む。

ぶんちゆう-し 文中子【名】〔書〕支那隋の王通の學說を、その子福郊等の編纂せるもの。十卷。一名、中說。

ぶんちやうめい 文徵明【名】〔人〕支那明の書畫の大家。長州の人。名は璧。又、別に衡山居士と號す。嘉靖の初、翰林院侍詔に徵山居士と號す。嘉靖の初、翰林院侍詔に徵じ、後、致仕して、鄉に歸り、詩文・書畫を事とす。成化六年卒す。年九十。

ぶん-つう 文通【名】手紙のやりとり。おとづれ。書信。

ぶん-づかまへる ふん捉まへる【動下一他】『ふんは接頭語』力をこめてつかまふ。ひっとらへる。

ぶん-づかまる ふん捉まる【動四自】『ふんは接頭語』ふんづかまへらる。ひっとらへらる。

ぶん-づき 七月【名】ふみづき(文月)の音便。㊇「七月(シチグワツ)七日は曇」

ぶん-づくゑ 文机【名】ふみづくゑ(文机)の音便。字鏡集「案、フンヅクエ」

ぶん-つけ 分附【名】次條の略。

ぶんつけびやくしやう 分附百姓【名】德川時代に、祖父又は親の代に、二男・三男又は孫などが田畑を讓られ、その後、檢地の入りたる時、檢地帳に、總領の名を肩書に、誰分(ノウ)として、當主の名誰と記されたるもの。その二男・三男・孫などが、分家して、一戶を構ふるに至れば、本百姓として取り扱はる。ぶんづけ。

ぶん-づける 踏附ける・踏附ける【動下一他】ふみつく(踏附く)の訛。

ぶん-づまり 糞詰【名】大便のとどこほりて通ぜぬこと。便祕。〔俚語〕

ぶん-つゑ 文杖【名】ふみばさみ(文挾)に同じ。

ぶん-て 筆【名】『ふむて(筆)を見よ』ふで(筆)㊀に同じ。〔古語〕 遲歩色葉集「分直、フンデ、筆」

ぶん-てい 噴嚏【名】くさめ(嚏)に同じ。

ぶん-てい 文體【名】文章の書きぶり。文體(ブンタイ)。心中又は氷の朔日「封〆切って見たれども、文體見たらば、氣も落ちて、いよいよ心が引かれうず」

ぶんてい-こう 文貞公【名】〔人〕ふぢはらもろかた(藤原師賢)の諡。

ぶん-てう 文鳥【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。大さ雀ほどにて、頭上と腰と尾とは黑く、その他、上面は一體に灰蒼色に、頰に大形の白點あり。下面は灰色にして、淡紅を帶び、嘴は太くして、圓錐狀に近く、紅にして、末端白し。今は總身純白にして、嘴の紅なるもの、白毛に黑斑あるものの等の種類あり。原産地は、爪哇(ジヤワ)なり。

ぶんてう 文鳥【名】〔人〕たにぶんてう(谷文晁)を見よ。

ぶんてう-ぎり 文鳥桐【名】紋所の一。五七桐の如くにて、花は四九、葉の上端を一文字に切りたるもの。

ぶんてう-は 文鳥派【名】繪畫の流派の一。谷文晁を祖とするもの。

ぶん-てつ 分鐵【名】中世以後、田畑の廣さ及び收穫の高に應じ、調(テウ)として分ち定めたる鐵。ぶんまい(分米)參照。

ぶんてん 墳典【名】〔書〕㊀三墳と五典と。㊁『南史の丘亙源傳に「屋漏、恐濕二墳典一」とあり』古書。古典。俳諧水晶簾「既に墳典を集め、又、群英を集めければ」

ぶんてん 文展【名】もんぶしやうびじゆつてんらんくわい(文部省美術展覽會)の略。〔俚語〕

ぶんてん 文典【名】文法を說明せる「書。

ぶんてん 分店【名】でみせ。。支店

ぶんてん 分點【名】〔天〕『英Equinoctial points』赤道と黃道との交叉點。卽ち太陽の赤道を通過する時の、天球上に於ける點。北に向ひて通過する時の點を春分點といひ、南に向ひて通過する時の點を秋分點といひ、共に晝夜平分の時なり。

ぶんてん-げつ 分點月【名】〔天〕『英Tropical month』月の、春分點を出立し、天球上を一周して、再び春分點に歸るまでの時間。平均二十七日七時四十三分五秒弱にして、春分點は、每年恆星の間を約五十秒づつ西方へ移動するため、恆星月よりも、七秒弱だけ短し。

ぶんてんしやう 文天祥【名】〔人〕支那宋末の忠臣。吉州盧陵の人。字は宋瑞、又の字は履善。文山と號す。元兵の頻りに諸州を陷れ、國步日に艱難となるや、勤王の詔を捧げて、兵を起し、至元十五年、敗れて、敵に捕へられ、獄中に正氣歌を作りて屈せず、十九年に至りて刑せらる。年四十七。忠烈と謚す。

ぶんでん-そしき 焚田組織【名】『獨Brandwirtschaft』原野又は矮林を焚き、その灰を肥料となして、直ちに作物を播種し、收穫の後は、再び草木の自生に委する、最も簡單なる農業組織。

ぶんてんねん 分點年【名】〔天〕くわいきねん(回歸年)に同じ。

ぶんてんぶき 文恬武熙・文恬武嬉【句】『文武共に恬熙なる襃』世の中の太平・無事なること。

ぶんてやう 筆樣【名】ふでつき(筆附)に同じ。徒然「縉も、文字も、かたくなるふんで樣して書きたるが」

ぶんと 【名】ほんとの轉。〔俚語〕

ぶんど 《露Fund》【助數】露國の重量の單位。佛國の〇・四一キログラム、我國の百〇九匁三分弱に當る。

ぶんど 糞土【名】㊀腐りたる土。㊁『國語に「玉帛酒食猶二糞土一」とあり』賤劣なる物事の譬。「を見よ。

糞土と爲(ナ)る【句】「身、糞土と爲る」

糞土の言【句】『左傳の襄公十四年の條に「其言糞土也」とあるに本づく』道にそむきたる、いやしむべき言葉。

糞土の牆【句】㊀糞土にて造れる土塀。㊁『論語の公冶長篇に「宰予晝寢。子曰、朽木不レ可レ雕也、糞土之牆、不レ可レ杇也」とあるに本づく』懶惰にして、教育の効なき人の譬。

ぶんど 墳土【名】〔農〕ひど(肥土)に同じ。

ぶんど 忿怒・憤怒【名】いかること。立腹。ふんぬ。

ぶんど 間賭【名】みきき。聞見。見聞。

ぶんど 分土【名】ぶんち(分地)に同じ。

ぶんとう 噴騰【名】噴水・石油井などのふきあがること。

ぶんとう 奮鬪【名】㊀力の限りたたかふこと。奮戰。㊁力の限り生存競爭の困難を排して進むこと。「奮鬪生活」

ぶんどう 分銅【名】㊀天秤(テンビン)の錘(おもり)。法馬。㊁分銅㊀の形に鑄造して貯へおき、不時の用に備へし金銀塊。豐臣秀吉が、黃金のもの若干を作りて、大阪城に貯へしに始まり、德川時代には、大判一千枚に充つるごとに、一箇を鑄造せりといふ。㊂紋所の一。分銅㊁の古の形、卽ち圓筒形にて、兩側に深きくびれありしものの橫斷面に擬せしもの、「三(ミツ)分銅」・「四(ヨツ)分銅」・「五(イツ)分銅」・「子持分銅」・「花分銅」などの種類あり。

(三)うどんふ

ぶんどう 文豆【名】〔植〕㊀やへなり(八重生)に同じ。㊁ゑんどう(豌豆)に同じ。

ぶんどうあづき 文豆小豆【名】〔植〕㊀やへなり(八重生)を云ふ。〔尾張國の方言〕㊁はたさげ(畑豆)を云ふ。〔美濃國の方言〕

ぶんどうぜい 分頭稅【名】じんとうぜい(人頭稅)に同じ。

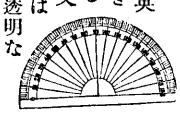
ぶんどう-つば 分銅鐔【名】衞府(ヱフ)の太刀の鐔。

ぶんどうはふ 分銅法【名】〔理〕金・銀等を含む粗銅より、金銀などを抽出して、純銅を得る方法。電解など、種種の方法あり。

ぶんどう-びし 分銅菱【名】模樣の一。分銅を菱形に便化し、これを四方連續の模樣としたるもの。

ぶんとう-まめ 文豆豆 【名】〔植〕ぶんとう(文豆)Ⅱに同じ。

ぶんどき 分度器 【名】『英 Protractor』半圓形の薄き板の周圍に、度を刻める物。圓上に角度を盛り、又は圓上の弧(コ)の大さ、又は角度を讀み取るに用ふ。透明なる水平にて造れるもの、最も便利なり。


(きどんふ)

ぶん-さく 文徳 【名】文道の徳。(武徳に對して)

ふん-どし 褌・犢鼻褌 【名】『ふみさほし(蹈通)の音便』男子の陰部を蔽ふ布。越中褌・帽額(カウガク)褌・割(ワリ)褌・西洋褌などの種類あり。ふどし。ふどうし。おへこ。したおび。たづな。ぬづな。はだ。はだのおび。はだまき。

褌一貫 【句】「裸八貫、褌一貫」を見よ。

褌を締めて掛かる 【句】決心を固めて事に當る。八笑人「これ、卒公(コウ)、しっかりと、褌を締めてかからっしよ」

人の褌で義理を缺く 【句】他人の物又は力を利用して、我が事を辨じたる上に、他人に對する義理をも果さず。〔諺語〕

人の褌で、相撲(スマフ)を取る 【句】『相撲を取るには、褌は缺くべからざるものなるに、それをさへ、人のを借りて用ふる義』他人の物又は力を利用して、我が事を辨ず。人の太刀で功名する。〔諺語〕

ふんどし-かつぎ 褌擔・犢鼻褌擔 【名】Ⅰ『關取の褌を肩にして從ひ行くよりいふ』最下級の相撲取(スマフ)。まはしもち。Ⅱその部下の、下級に屬する者。

ふんどし-なし 褌無・犢鼻褌無 【名】褌を施してあらぬこと。若鳳俗「張貫(スマヌ)の虎、又はふんどしなしの赤鬼」

ふんどし-なんば 褌南蠻・犢鼻褌南蠻 【名】船具の南蠻の一。

ふんどし-ばり 褌張・犢鼻褌張 【名】和船の外艫(ヲモ)の一部。

ふん-どん 分銅 【名】『ふんごう(分銅)』の訛。

ふん-どり 分捕 【名】Ⅰふんどること、又ふんどりたる物。Ⅱ〔法〕交戰中、軍隊・軍艦が國家の責任に於て、敵國の財産を取得すること。Ⅲ〔法〕陸戰にて、軍隊が國家の責任に於て、敵國の財産を取得すること。

分捕高名(カウミヤウ) 【句】昔、戰場にて、敵の首に添へて、その身に著けたる肯刀などを分捕り來りしこと。

ふんどり-ひん 分捕品 【名】Ⅰ分捕りたる物。ふんどりもの。Ⅱ〔法〕**せんりひん**(戰利品)に同じ。

ふんどり-もの 分捕物 【名】前條に同じ。

ふん-どる 分捕る 【動四他】Ⅰ戰場にて、敵の物を奪ふ。Ⅱ他人の物を强ひて取る。

ふんな 文和 【名】**ぶんわ**(文和)を見よ。

ふんない 分内 【名】そこよりここまでと定まれる場所。保元「内裏は高松殿なりしかば、分内狹くて、便宜惡しかりなん」義經記「これほど分内も狹き所にて、しかも、幼き人とたはぶれ、何事ぞ」

ふんながし 打流 【名】打流(ナガ)すこと。打流したること。

ふん-ながす 打流す 【動四他】『ぶん(打)は接頭語』Ⅰ**ながす**(流す)Ⅱを强めていふ語。Ⅱつづけさまに事を爲す。Ⅲぶちながす(打流す)の音便。「に同じ。

ふんなぐり ぶんなぐり 打擲 【名】〔植〕**ぶな**(橅)

ふん-なぐる 打擲る 【動四他】『打(ブ)擲(チヤク)るの訛』拳にてたたきうつ。打擲(ダチヤク)す。うつ。はりとばす。

ふん-なげる 打投げる 【動下一他】『ぶん(打)は接頭語』**なげつく**(投附く)に同じ。

ふん-にん 分任 【名】事物の一部分づつを擔任すること。分擔。「任する官吏。

ふんにん-くわん 分任官 【名】職務を分掌する【名】各省大臣の命令によりて設けられ、出納官吏の事務の一を分掌する官吏。

ふんにん-すうたふくわんり 分任出納官吏

ふん-ぬ 忿怒・憤怒 【名】**ふんど**(忿怒)に同じ。太平記「大勢(セイ)・忿怒の惡眼(ガン)を開きて」

ふん-ぬき 蹈貫・踏貫 【名】**ふみぬき**(蹈貫)の音便。

ふん-ぬぐ 蹈脱ぐ・踏脱ぐ 【動四他】**ふみぬぐ**(蹈脱ぐ)の音便。謡曲(花月)「履(ハ)いたる足駄をふん脱いで、大口のそばを、高く取り」謡曲(烏帽子折)「鐵屐(シヤキ)をふん脱ぎ捨て」

ふんぬ-くわうじん 忿怒荒神 【名】忿怒の相を示現せる荒神。「よ。

ふん-ぬん 紛紜 【名】**ふんうん**(紛紜)を見

ふん-ね 分衂 【名】**ふんえ**(分衂)を見よ。

ふんねう 糞尿 【名】糞と尿と。大小便。ふんばり。

ふんのう 文應 【名】**ぶんおう**(文應)を見よ。

ふん-の-かみ 尚書 【名】書司(ショカサ)Ⅱの長官。「(圖書寮)の音便。

ふん-の-つかさ 圖書寮 【名】Ⅰ**ふみのつかさ**(書司)の音便。〔古語〕源氏「書司召し出でて、櫃中納言、和琴(ワゴン)賜はりたまふ」Ⅱ『宮中の大和琴は、書司の女房の司りし所なるよりいふ』**やまとごと**(大和琴)の異稱。歌儀品目「大和琴……フンノツカサ」

ふん-の-はかせ 書博士 【名】**しよはかせ**(書博士)に同じ。「下を見よ。

ふん-の-まひ 文の舞 【句】**ぶん**(文)の條

ふん-のめす 打轉す 【動四他】**ぶちのめす**(打轉す)の訛。

ふん-のる 蹈乘る・踏乘る 【名】『蹈(ブ)乘るの音便』足に力を入れて乘る。追善集十郎俳諧「海草を拾ふ小舟にふん乘って」

ふん-ぱ 分派 【名】大もとより、枝の如く分れ出づること。分岐。えだは。

ふん-ばい 分賣 【名】分割して、その一部づつ賣ること。

ふん-ばい 分配 【名】Ⅰわけくばること。配分。Ⅱ〔經〕『英 Distribution』貨物生産上の利益を、報酬として、生産の要素たる自然・資本・勞力の三者に分ち與ふること。自然に與ふるものは地代、勞力に與ふるものは給料、資本に與ふるものは利潤、これなり。

分配の法則 【句】〔數〕『英 The rule of distribution』代數學に於ける基礎法則の一。二數以上の數の和に、一數を乘じたる積は、初の數の各に、別別に、後の一數を乘じたる積の和に等しといふもの。

ふんばい-がはら 分陪河原 【名】〔地〕**ぶばいかはら**(分陪河原)に同じ。

ふんばい-ぜい 分配稅 【名】〔經〕豫め稅率を定むることなく、徵收すべき總額を各納稅人に分配して賦課する租稅。配賦稅。分賦稅。(定率稅に對して)

ふん-ばう 芬芳 【名】よき香氣。かんばし

ふん-ばう 文房 【名】書を讀む室。書齋。

ふん-ばう 分房 【名】いくつもに分ちたる室。「じ。

ふんばう 聞望 【名】**めいばう**(名望)に同

ふんばう 蚊蟌蚊虻 【名】Ⅰ蚊(カ)と蟌(ア)と。Ⅱ小人(セウジン)の譬。

ふんばう 蚊蟌、牛羊を走らす 【句】『說苑の說叢篇に「蠛蠓剖梁柱、蚊蟌走牛羊」とあり』小弱なる者が强大なる者を動かす譬。〔諺語〕

蚊蟌の勞 【句】『莊子の天下篇に「由二天地之道一、觀二惠施之能一、其猶二一蚊一蟲之勞者一也」とあり』他を益するに足らぬ、些細なる技能の譬。

ふんぽう 文保 【名】花園天皇の御代の年號(紀元一九七七年—一九七九年)。

ふんぼう-ぐ 文房具 【名】文房にて用ふる具、卽ち筆硯・墨・紙などの類。文具。

ふんぼう-じ 文保寺 【名】丹波國多紀郡味間(アヂマ)村にある寺。本尊は正觀音。景行天皇の御代、法道仙人の創立。

ふんぼう-せい 分房制 【名】監獄の制度の一。晝夜共に、一箇の監房に、一人の囚人を拘禁するもの。

ふん-はかせ 文博士 【名】**ふみのはかせ**(文博士)に同じ。「粉。

ふん-ぱく 粉白 【名】おしろい。鉛白。白粉白黛黑(タイコク) 【句】**ふんたい**(粉黛)Ⅲに同じ。

粉白黛綠(ヨクリョク)【句】前條に同じ。

ふん-ぱく 文莫【名】『論語の述而篇に「文莫二吾猶ヒ人也」とあるに本づく。一説に、文莫は文模の省字、勉強の義にて、「文莫、吾猶ヒ人也」と訓すべきなりと』勉強して、人なみに學ぶこと。一説に、無智なること。ぶんまく。

ぶん-ぱく 分箔【名】鑛兒を、その生長に應じ、分離して、適當なる席を與ふるため、鑛座の面積を廣くること。

ふん-ばこ 文箱・文筥【名】ふみばこ(文箱)の音便。

ふん-ばさみ 文挟【名】ふみばさみ(文挟)の音便。

ふん-ばたかる 蹈跨る・踏跨る【動四自】ふみまたがる(蹈跨る)の音便。準假名盛衰記「凄じう見られんと、蹈んばだかったるその有様」

ふん-ばつ 奮發【名】㊀心を奮ひ起すこと。發憤。㊁思ひきって買ふこと。〔俚語〕

ふん-ぱつ 憤發【名】㊀いきどほりの、辭色にあらはるること。㊁前條㊀に同じ。

ふん-ばづす 蹈外す・踏外す【動四他】ふみはづす(蹈外す)の音便。浮世風呂「ちよいと蹈んばづすと、直(すぐ)に横ぞっぽうだ」

ぶん-ばう 分派堡【名】〔兵〕要塞の防禦主線の中に設くる、最も重要なる堡壘。遠近の戰闘に適應するやうに配置し、強大なる抵抗力を具ふるやう設備す。

ぶん-ぱふ 文法【名】㊀文章の法則。修辭上の法。㊁〔語〕『英Grammar』解音言語・文字などの性質・成立・用法・變遷及び文章上の言語の相互の關係などを說く學問。文典。㊂〔漢書の酷吏傳に「司馬安之文法」とありて、註に「以二文法一傷二害人一也」と見ゆ』法律。法規。ぶんまう(文網)參照。

文法の吏【句】『漢書の元帝紀に「宣帝所レ用多二文法吏一、以二刑名一繩レ下」とあり』法規に通達せる官吏。文吏。

ぶんぱふ-がく 文法學【名】文法㊂に就きて考究する學問。

ふん-ばん 粉盤・鈖盤【名】蒔繪の製作にて、金銀粉を蒔くに用ふる器。形樣樣にて、重箱(ヂウバコ)にせるも、小抽斗(コビキ)の如くなるもあり。

ふん-ぱん 噴飯【名】可笑しさに堪へず笑ふこと。ふきだすこと。「じ。

ぶん-ばん 分番【名】ばんじやう(番上)に同じ。

ぶん-ぱん 文範【名】文章の模範。

ふん-ばり 糞尿【名】糞と尿(ユバリ)と。大便と小便と。ふんねう。

ふん-ばり 蹈張・踏張【名】『ふりはりの音便か』㊀ふんばること。ふりはり。㊁女を、種種の賤しき渡世をなし來れるにつきて罵りていふ語。膝栗毛「仲居ども、困り果て、……さあ、踏張めら、十の字たあ、何のこった。ぬかせ、ぬかせ」㊂〔建〕ひらき(開)に同じ。㊃刀劍の身の彈力。關(セキ)の邊を押し試みて、その强弱を檢す。

ふん-ばる 蹈張る・踏張る【動四自】㊀ふみはる(蹈張る)の訛。「鐙蹈ん張り、突っ立ちあがり」㊁一途に言ひ張り、又は力をこめて、すこしも讓歩せず。

ふん-ぴ 紛披【名】㊀物のちらばりて、ばらばらになること。㊁花の亂れ吹けること。

ふん-ぴ 紛飛【名】入りみだれて飛ぶこと。

ぶん-ぴ 分比【名】次條を見よ。

分比の理【句】〔數〕『英 Dividendio』$a:b::c:d$ が比例をなすとき、即ち $a:b=c:d$ なるとき、$a-b:b=c-d:d$ なること。除比の理。

ぶん-ぴ 分泌【名】㊀液汁のしみ出づること。㊁〔醫〕『獨Sekret』化學的作用によりて、腺と稱する管より、血液中にも淋巴中にも存せざる物質を含み、或作用を營まんとする、特有の液を製造・浸出する機能。皮脂腺・唾液腺・消化腺等の如く、その分泌物を、皮膚又は粘膜の面に浸出するを、外分泌といひ、分泌物を血液の中に出だすを、內分泌といふ。「胃液の分泌」

ぶんぴ-えき 分泌液【名】〔醫〕『獨Sekret』腺の分泌物なる液。即ち、乳汁・唾液・胃液などの類。

ふん-びしぐ 蹈拉ぐ・踏拉ぐ【動四他】ふみひしぐ(蹈拉ぐ)の音便。浮世風呂「三絃(サンセン)を一挺買ってやったら、それをも踏んびしいて」

ぶんぴ-しんけい 分泌神經【名】〔醫〕『獨Sekretorische Nerven』腺細胞を刺戟して、興奮せしめ、その分泌を誘起・催進する神經。腺の種類の異なるに從ひて、同一ならず。

ふん-びつ 文櫃【名】ふむびつ(文櫃)を見よ。

ぶん-ぴつ 文筆【名】文章をつづること。正續記「文筆諸藝を好みたまふ事」

ぶん-ぴつ 分筆【名】一筆づつ分けて書くこと。ふでわけ。「分泌液。

ぶんぴ-ぶつ 分泌物【名】分泌する物質。

ふん-ぴ 吩咐【名】㊀噴くこと。吐くこと。㊁言ひつくること。いひふくむること。

ぶん-ぶ 文武【名】㊀文と武と。文學と武事と。㊁〔人〕支那周の文王と武王と。

ぶん-ぶ 文舞【名】「文(ブン)の舞」に同じ。

ぶんぶ【感】ぶんぶんに同じ。蜀山人「世の中にかほどうるさきものはなしぶんぶと云うてよるも寢られず」「つけ。分配。

ぶん-ぷ 分賦【名】ふりわくること。わり分ち布く。わかれわかれに排置すること。ちらばりて在ること。

ぶん-ぷ 分布【名】分れ布(シ)くこと、又、

ぶん-ぷ 分付【名】分配して付與すること。わりわたすこと。わりつくること。

ぶん-ぷ 蚊負【名】『蚊蚋(ゼイ)、山を負ふ』を見よ』任務の過重なることの譬。

ぶんぷ-がく 分布學【名】〔生〕生物の分布に就きて考究する學科。

ふん-ぷく 芬馥【名】ふんいく(馥郁)に同じ。

ぶんぶく-ちやがま 文福茶釜【名】㊀上野國館林(タテバヤシ)の茂林寺の僧守鶴の持ちたりといふ茶釜。俗說に、守鶴は、狸の化身にして、遂に和尚に、その本質を見あらはされて、愧ぢて去りきといひ、又この茶釜、一度水をさせば、數日間ぶくぶくぶんぶくと沸き遲りたりといふ。㊁〔動〕海贅(ナマコ)類に屬する棘皮動物。殼は薄くして、心臟形をなし、長さ約一寸五分、幅一寸二三分、高さ一寸に滿たず。諸體軸の發達一樣ならずして、體狀左右相稱に類し、棘短くして、前端の腹面に、口を開く。

ぶんぶく-ぶんぶく 【擬】前條㊀を見よ。和合人「爐へ掛けた茶釜の湯を、年中ぶんぶくぶんぶくと煮立たして置くところから、これを館林(タテバヤシ)の茂林寺に擬し、この家を文福庵と名づけ」

ぶんぶ-くわん 文武官【名】文官と武官と。正續記「文武天皇は、……。唐國の禮を移して、宮家を作り、文武官の色までも定められき」

ぶんぶ-くわん 文武館【名】しふせいくわん(集成館)㊀を見よ。

ぶんぶ-しやう 文部省【名】もんぶしやう(文部省)㊀を見よ。

ぶんぷ-ぜい 分賦稅【名】〔經〕ぶんぱいぜい(分配稅)に同じ。

ぶん-ぶつ 文物【名】文明の表現なる禮樂・典章の類。人文の發達に關する事物。

ぶんぶにたう-まんごくどほし 萬石通【名】〔書〕明誠堂喜三二の作れる黃表紙。

ふん-ぷん 芬芬【貌】かをりのはげしきさま。

ふん-ぷん 紛紛【貌】㊀物事の入り亂れたる狀。㊁盛んなる狀。紛紛然。

ふん-ぷん 霧雰【貌】雪のさかんに降るさま。

ぶん-ぷん 分分【名】㊀各自の身分に相應せること。太平記「心を同じうして戰はば、などか分分の敵に合ひて死せざるべきに、一人も、敵に太刀を打ちつけたる者なくして」㊁銘銘。各自。

分分の風が吹く【句】「分相應の風が吹く」に同じ。

ぶん-ぷん 【擬】㊀勢烈しく風を切る時發する聲。ぶんぷ。

ぶん-ぷん 【貌】㊀臭氣のはげしきさま。〔芬芬〕㊁言葉もかはさぬほどに腹立つさま。ぷりぷり。

ぶん-ぷんざん 文文山【名】〔人〕ぶんてんしやう(文天祥)に同じ。

ぶん-ぷん-ぜん 【紛】に同じ。

ふん-ぷん-ぜん 紛紛然【貌】ふんぷん(紛

ふんべい 粉米【名】㊀ほくまい(白米)に同じ。㊁こごめ(小米)に同じ。㊂じふにしやう(十二章)(米粉)に同じ。見よ。

ふんべい 分袂【名】『袂(たもと)を分つ』を見よ』人と別るること。分手。分袖。

ふんべう 文廟【名】㊀『支那明の永樂八年、先師廟を改稱せるもの』孔子を祀れる廟。孔廟。聖廟。(武廟に對して)㊁[人]ぶんせうゐん(文照院)の尊稱。

ふんべう 分秒【名】㊀分と秒と。㊁極めて僅かなる時間。「分秒を爭ふ」

ふんべき 粉壁【名】漆喰塗(しっくひぬり)の壁。しらかべ。

ふんべしよる 蹈んべし折る・踏んべし折る【動四他】蹈みてへし折る。蹈みつけて折る。ふみをる。

ふんべち 分別【名】次條㊀㊁に同じ。

ふんべつ 分別【名】㊀わきまへ考ふること。さとり。かんがへ。辨別。胸算用「何につけても銀儲して、心まかせの慰すべし。かかる人は跡の滅らぬ分別しての樂み深し」㊁[佛]『梵Vibhāgya(毘婆闍)の譯語』諸の事理を思量し、識別すること。吾人は、無我、無法の上に、妄りに、我法を分別するによりて、種種の惑を生ずと說く。むぶんべつ(無分別)參照。㊂かつをぶし(鰹節)を云ふ。『僧侶の隱語』

分別過ぐれば愚に返る【句】物事に就きて考へめぐらすこと、その度を過ぐれば、却りて惑を生じて、宜しきを得ず。〔諺語〕

分別の上の分別【句】分別をなしたる上に、更に分別すること。〔諺語〕

分別の分(ぶん)が百貫する【句】分別といふことは、極めて大切なることなり。〔諺語〕

ふんべつ 分別【名】種類を分つこと。分類。區別。正統記「代と世とは、常の義、差別なし。然れども、凡の承運とまことの纖體とを分別せんがために書きわけたり」

分別の利益【句】〔法〕ほしようにん(保證人)㊁を見よ。

ふんべつがほ 分別顏【名】分別ありげなる顏つき。

ふんべつくさし 分別臭し【形ク】分別あるを誇れるさまなり。思案臭し。

ふんべつけっしやう 分別結晶【名】〔化〕『英 Fractional crystallization』溶解度の異なる數種の固體を含める溶液を、その溫度を降すか、或は蒸發せしめて、溶解度の小なる物質より、順次に結晶せしめて、除き去る方法によりて、各物質を分離すること。

ふんべつざかり 分別盛【名】成人して、十分に事理をわきまふる年頃。

ふんべつしよりう 分別蒸溜・分別蒸餾【名】〔化〕ぶんりう(分溜)に同じ。

ふんべつち 分別智【名】〔佛〕じごくち(後得智)に同じ。(無分別智に對して)

ふんべつどころ 分別所【名】思案の場所。考事をする場所。風俗文選「甲斐の名將の分別所に定め、山といふ隱語を殘し」

ふんべつぶくろ 分別袋【名】㊀分別を納め入れてありといふ袋。㊁前項の袋を開きて、分別を出す義』有る限りの分別を使ふこと。

ふんべつらし 分別らし【形シク】分別ありげなり。心に期する所あるに似たり。胸算用「船を艫より逆下りにせし時、分別らしき人目をさまして」

ふんべつろくわ 分別濾過【名】ろくわふ(爐過法)に同じ。

ふんべん 糞便【名】くそ。大便。

ふんべん 分娩【名】『分は分身の義、娩は子を生む義』子を生むこと。分身。出產。「と。

ふんぺん 分辨【名】わかちを附くること。

ふんぼ 墳墓【名】はか(墓)に同じ。

墳墓の地【句】㊀墳墓を設くる地。墓地。㊁わが祖先の墳墓ある土地。ふるさと。太平記「これは、父祖代代の墳墓の地なれば、爰にて、兵どもに防矢射させて」

ふんぼ 文簿【名】ちやうぼ(帳簿)㊀に同じ。三代實錄「檢文簿」

ふんぼ 分母【名】〔數〕『英 Denominator』ぶんすう(分數)を見よ。「じ。

ふんぽ 分舖・分舗【名】してん(支店)に同

ふんぽう 分封【名】㊀王者が、諸侯に、封土を分ち與ふること。㊁蜜蜂の、蜂蜜王、春に至りて盛んに產卵し、働蜂、よくこれを育成し、五月初旬より六月下旬にかけて、蜂數大に增加する時、舊蜂王の配下に屬する一群の蜂は分離し、新巢を營みて、これに移ること。

ふんぼく 粉墨【名】㊀白粉(おしろい)と墨と。㊁相違の甚しき物と物との譬。㊂白粉(おしろい)と眉墨(まゆずみ)と。

ふんぼく 文墨【名】㊀文筆。翰墨。㊁詩文・書畫などに關する事。

ふんぼさう 蚊母草【名】葉の中に血蟲あり、その蟲化して、蚊となるといふ草。

ふんぼだう 墳墓堂【名】墳墓のある地に建てたる堂舍。墓所堂。東鑑「墳墓堂等炎上之時、無再興之例之由」

ふんぼてう 蚊母鳥【名】〔動〕かすひどり(蚊吸鳥)に同じ。

ふんぼん 粉本【名】㊀『先づ胡粉にて、下繪を書くよりいふ』畫のしたがき。模本。㊁詩歌・文章の手本。

ふんぼん 分本【名】一部の書を、數册に綴ぢ分けたるもの。分册にせる書籍。(合本に對して)

ふんまい 分米【名】中世以後、各田畑につき、面積・地質及び收穫に應じて定めし納租米。德川時代には、石盛(こくもり)を參酌して、決定する例なりき。ぶんけん(分絹)・ぶんざっこく(分雜穀)・ぶんせん(分錢)・ぶんでつ(分鐵)・ぶんもみ(分粗)及びぶんぢし(分地子)參照。

ふんまう 文網・文罔【名】『ぶんばふ(文法)㊂を見よ』法網。法禁。

ふんまき 粉蒔・鈐蒔【名】蒔繪の製作にて、漆を以て畫きたる上に、細粗適宜の金銀粉を抹布すること。

ふんまき-づつ 粉蒔筒・鈐蒔筒【名】蒔繪の製作にて、金銀粉を抹布する器具。通常、羽の軸を用ひて軸となし、一端に、紗その他の絹布を張り、他端より粉を入れて、適宜に散布するやうに作る。「じ。

ふんまく 文莫【名】ぶんばく(文莫)に同じ。

ふんまける 【動下一他】ぶちまける【俚語】柳營上(ぼ)の句で曇る下(ぞ)の句ぶんまける」續膝栗毛「飯は、お鉢へ、そのままでぶんまけてしまへ」に同じ。

ふんまたがる 蹈跨る・踏跨る【動四自】ふみまたがる(蹈跨る)の音便。

ふんまつ 粉末【名】こな。こ。細末。

ふんまはし 文廻・筆規【名】『打廻(うちまは)の訛』㊀圓形をえがくに用ふる具。端に針の附ける直き竹を幹とし、幹より岐れたる支(えだ)に、筆を取り附け、その幹を一定の點に立てて回せば、圓形を畫き得るもの、即ち、コンパスと同樣なる物。八笑人「まはらぬ筆を、ぶん廻しへはめて、きりりとひん廻し」㊁まはりぶたい(廻舞臺)に同じ。和合人「どういふきっかけで、本舞臺(ほんぶたい)が、ぶんまはしになったのだ」

ふんまへる 蹈んまへる・踏んまへる【動下一他】ふまふ(蹈まふ)の訛。

ふんまん 忿懣・憤懣【名】『憤はもだゆる義にて、その音、正しくはもん』いきどほりて煩悶すること。ふんもん。

ふんみつ 分蜜【名】白下(しろざ)糖より、糖蜜を分離すること。

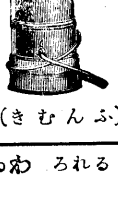
ふんみやう 分明【名】ぶんめい(分明)に同じ。著聞「腹ふくれていきどほろしきとて、物言はるるも、ふんみやうならざりけるが」

ふんみやう 分明【名】前條に同じ。

ふんみやく 分脈【名】わかれたるすぢ。

ふんみやく 文脈【名】文章のすぢみち。文に現はれたる思想推移の關係。文理。

ふんむき 噴霧器【名】〔農〕作物の病菌・害蟲を豫防・驅除するために、その目的に効能ある藥劑の溶液を、細霧狀に灑注・散布するに用ふる器械。



(きむんふ)

ふんめ 分目【助數】ぶん(分)[一]に同じ。一代女「銀一匁の内、一匁五分目」

ふんめい 文名【名】文章に秀でたる評判。「文名、江湖に布く」

ふんめい 文命【名】『書經の大禹謨篇に「文命敷二四海一」とあり』ぶんけう(文敎)に同じ。

ふんめい 文明【名】[一]あやありて、うるはしく鮮明なること。[二]『書經の舜典篇に「濬哲文明」とあり』文徳の輝けること。[三]『英 Civilization』世の中のひらくること。社會の生活狀態の、便利に進歩し、野蠻狀態より遠ざかること。開化。開明。

ぶんくわ(文化) [二]參照。

ぶんめい 分明【名】分りて明かなること。ふんみやう。ぶんみやう。

ぶんめい 文明【名】後土御門天皇の御代の年號(紀元二一二九年—二一四六年)。

ぶんめい-いっとうき 文明一統記【名】『書』足利將軍義尙の所望により、爲政者の心懸につきて述べたるもの。一卷。一條兼良の著。

ぶんめい-けう 文明敎【名】創唱者の人格を中心として、文明の世界に行はるる宗敎。即ち佛敎、基督敎の類。

ぶんめいし 文明史【名】『英 History of civilization』普通の歷史が、國家即ち政治的社會を中心とし、又、多くは外面の現象を記述するのみなるに對して、人類社會一般の成立・發達・變遷を精神方面より觀察し、その外部にあらはれて、人文を經緯する政治・經濟・宗敎・文藝、その他の文物を、內面的生活の發現せるものとして解釋するもの。人文史。開化史。文化史。

ぶんめん 文面【名】文章、殊に手紙の文章に書きつけてある趣意。ふみづら。

ぶんもみ 分籾【名】中世以後、田畑の廣さ及び收穫の高に應じ、租として、分ち定めし籾。ぶんまい(分米)參照。

ふんもん 賁門【名】[醫]『羅 Cardia』胃の上方に開口して、食道の下端に連なる所。身體の正中線の左側に位し、約第六・第七の兩肋軟骨の高さに相當す。

ふんもん 憤懣・憤懣【名】ふんまん(忿懣)を見よ。

ふんもんぶ 賁門部【名】[醫]胃の、賁門の直下の部分。

ふんや 文屋【名】ふみや(文屋)[一]の音便。

ふんや 糞屋【名】かはや。便所。雪隱。後架。下學集「糞屋、フンヤ」

ふんや 分野【名】[一]古、支那の天文學にて、境域內の諸國を、天の二十八宿に配當し、その各國を主る星宿を定めしもの。例へば、角・亢・氐は兗州の分野、房・心は豫州の分野、尾・箕等の出現ある前兆の場合には、その分野の國に異變あるの前兆とせり。但し、その區劃は、時代によりて一樣ならず。[二]ぶんげん。境涯。まはりあはせ。方丈「鳥と魚との分野を見よ」

ぶんや 文野【名】文化の進めること、然らざると。文明と野蠻と。

ぶんや 文彌【名】[一][人]をかもごぶんや(岡本文彌)を見よ。[二]ぶんやぶし(文彌節)の略。[三]『その聲、文彌節を語るが如しとていふ』房中にて謹なき女。[江戸の語]

ふんやづかさ-の-かみ 大學頭【名】ふむやつかさのかみ(大學頭)を見よ。

ふんやの-あさやす 文屋朝康【名】[人]

ふむやのあさやす(文屋朝康)を見よ。

ふんやの-つかさ 文屋司・大學寮【名】ふむやのつかさ(文屋司)を見よ。

ふんやの-やすひで 文屋康秀【名】[人]

ふむやのやすひで(文屋康秀)を見よ。

ぶんやぶし 文彌節【名】淨琉璃節の一。元祿年中、京都の岡本文彌の唄ひはじめしもの。延寶中より難波に行はれ、漸次諸方に擴まるに至り、後、三都共に全く絕えたれど、佐渡國には流傳せりといふ。哀婉の調に富む。ぶんや。

ふんやわらは 文屋童・舁生【名】ふむやわらは(文屋童)を見よ。

ふんゆ 粉楡【名】[一][植]楡(にれ)の一種。樹皮白色なるもの。白楡(しらにれ)。[二]『漢書の郊祀志に「高祖禱二豐枌楡社一」とあり、顏師古の註に「鄭氏曰、枌楡、鄉名也。師古曰、以二此樹一爲二社神一、因立レ名焉」と見え、又、張衡の西京賦に「豐伊不レ懷レ歸二于枌楡一」とあり』ふるさと。鄉國。

枌楡の居 [句]『枌楡は、白楡ともいひ、古樂府に「天上何所レ有、歷歷種二白楡一」、杜甫の詩に「種レ杏仙家近二白楡一」とあり、天上又は仙人の居にある木なりといふによりていふ』太上天皇の御所。仙洞御所。保元「太上天皇の尊號を蒙つて、枌楡の居を占めき」

枌楡の社 [句][一]支那にて、枌楡を神聖視して設けたる社(やしろ)。枌社。本朝續文粹「展以二齋席一、枉二華轅於枌楡之社一」[二]太上天皇を祀れる社(やしろ)。枌社。

ふんゆう 奮涌・奮湧【名】ふんよう(奮涌)に同じ。

ふんゆう 奮勇【名】いさみたつこと。

ぶんゆう 文雄【名】文學にすぐれたること、又その人。文豪。「わけまへ。

ぶんよ 分與【名】わかちあたふること。

ふんよう 奮涌・奮湧【名】塵の如くさかんに聚まりて、湧き出づること。

ぶんよ-かいけふ 豐豫海峽【名】[地]ぶんごすおだう(豐後水道)に同じ。

ぶんらい 蚊雷【名】多くの蚊の鳴聲。

ぶんらう 分勞【名】各自別箇の勞力に服して、一の生產を完成すること。分業。

ぶんらく 文樂【名】次條の略。

ぶんらく-ざ 文樂座【名】大阪市東區御靈(ごりやう)社の境內にある、人形芝居の劇場。百餘年前淡路國の人植村文樂軒(本姓は柾木)の高津(かうづ)橋の邊に設けしに始まり、中絕の後、島の內清水(しみづ)町に再興し、更に末吉橋筋・四橋(よつばし)濱博勞町稻荷境內等に轉轉し、明治五年松島に移り、同十二年松竹合名會社の經營に歸せり。博勞町に移りし元治中は語手(かたて)・彈手(ひきて)共に、最も名手の輩出を見たり。

ぶんらん 紛亂【名】亂れもつるること。

ぶんらん 紊亂【名】みだるること。みだすこと。びんらん。「射政紊亂す」

ぶんり 文吏【名】文法の吏。文官。法治の吏。正統記「官を任ずるには、文吏を求めえらびて、功臣をさしおく」

ぶんり 文理【名】[一]すぢ・もやう。あや。[二]ぶんみやく(文脈)に同じ。

ぶんり 分里【名】わけざと(分里)の漢字の音讀。一代女「分里の數女(ひめ)」

ぶんり 分理【名】『鄭氏家範に「子孫受二長上呵責一、不レ論二是非一、但當二俯首默受一、毋レ得二分理一」とあり』理を分ちて辯解すること。いひわけ。辯疏。分疏。

ぶんり 分離【名】[一]わかれ離るること。わかち離すこと。[二]『英 Separation』飾にて、物體の大小を分ち、鹽・砂糖等の溶解せる液を蒸發せしめて、その鹽・砂糖を沈澱せしむる等、すべて、物體を分離・分類する方法。[三]『李白の詩に「列將成出祕、英寮惜二分離一」とあり』くわり(別離)に同じ。

分離の論過 [句]『哲』「分割(かつ)の論過」に同じ。

ぶんり 分利【名】[醫][一]『獨 Krisis』急性の傳染病にて、高熱の漸次下降して、恢復に向ふこと。[二]病の、恢復に向ふこと。

ふんりう 粉瘤【名】[醫]『羅 Atheroma』直接皮下又は眞皮中に發生する、一種の閉塞囊腫。概ね丁年以後に發生し、殊に男子に多くして、好んで、被髮部・顏面・陰囊・包皮等に發す。

ぶんりう 分流【名】[一]大河より分れ流るる水。えだながれ。支流。[二]枝わかれ。分派。[三]『理』『英 Shunt』電流などを、二線以上に分れしむること。

ぶんりう 分溜・分餾【名】[化]『英 Fractional distillation』沸騰點の異なる數種の物體の混合物を熱して、別別に溜出せしむること。沸騰點の低き物より次第に分離すること勿論にて、石油の原油を精製し、又、酒精を水より分離する等、皆、この法に依る。蒸溜分析法。分別蒸溜。

ぶんりう-き 分流器【名】『英 Shunt』電路の一部に並べて插入し、これに電流を分流せしめて、本電路の補助通路となるべき器。

ぶんり-かいしやく 文理解釋【名】〔法〕
ぶんりかいしやく(文意解釋)に同じ。

ぶんり-き 分離器【名】『英Separator』分離㊀を行ふに用ふる器。含水蒸氣の水を排するに用ふる蒸水分離器など、その一なり。

ぶんり-けいすう-はふ 分離係數法【名】〔數〕『英Method of determinel coefficient』或文字の降羃又は昇羃に列べたる二つの代數式を乘除するに、その係數のみを書きてなす方法。

ぶんり-たう 分離島・分離嶋【名】〔地〕『英Separated island』**りくたう**(陸島)に同じ。

ぶんり-つ 分立【名】『立の字の音、正しくは**りふ**』㊀別別に立つこと。㊁適適に設置せること。

ふん-りん 分厘・分釐【名】㊀一分と一厘と。㊁極めて僅なる尺度、又は日方、又は錢高。柳橋「分厘も引くな引くなと小西(コヒ)下知」

分厘も引(セ)無し【句】些少なりとも、値引(ネビ)せず。少しも懸値(カケネ)なし。

(んりんぶ)

ぶん-りん 文林【名】㊀**ぶんゑん**(文苑)に同じ。㊁次條に同じ。

ぶん-りん 文琳・文林【名】『林檎の實を文琳郎果ともいふより名づく』點茶用の茶入の一種。色と形との、林檎の實に似たるもの。唐物にて、茄子に次ぎて貴ばる。その口の捻返(ネヂカヘ)の部を、兩方よりそぎたるを、兩そぎとて、上品とし、片方よりそぎたるは、片そぎとて、下品とす。

ぶんりん-らう 文林郎【名】㊀支那唐代の從九品上の雅稱。㊁少初位上の唐名。

ぶんりやう 分量【名】㊀天より分ち授けられたる器量。天分。天賦。博多小女郎浪枕「犬は土邊て物喰へど、炬燵(コタ)な猫の眞似せぬは、身の分量を知つたるゆゑ」㊁區分の度。ほどあひ。かさ。

ぶん-りやう 分領【名】**りやうぶん**(領分)に同じ。庭訓往來「諸代相傳之分領、一所懸命之地」

ぶんりやうてきくわいらくせつ 分量的快樂說【名】〔哲〕『英Quantitive hedonism』快樂に、分量上の差別を認めたる快樂說。(普遍的快樂說に對して)

ぶん-りやく 文略【名】文句をはぶくこと。

ふんりやく 文曆【名】四條天皇の御代の年號(紀元一八九四—一八九五年)。

ぶんり-やくだう 分離藥筒【名】〔兵〕『英Separate cartridge』彈藥を砲に裝塡する時、及び運搬取扱の際、彈丸と藥筒とを別別に裝塡するやうに造れる藥筒。

ぶん-りよく 分力【名】〔理〕『英Component force』一つの力を、二つ以上の異なる方向の力の集まりたるものと考ふる時の、これらの二つ以上の力。一つの力につきて、その分力を求むるを、力の分解といふ。(合力に對して)

ふん-るゐ 分類【名】㊀種類に依りて分つこと。類分。類別。㊁『英Classification』研究上の手續として、集め得たる事物を、分析抽象・比較等の方法に依り、その大同小異の點につきて、數種に分ち、普遍の名を命じて、記憶に便すること。

ぶんるゐ-がく 分類學【名】〔生〕『英Systematic』多數の動植物を比較して、異を分ち、類を合はせて、系統を立つる學科。

ふん-れい 奮勵【名】ふるひたちてはげむこと。「奮勵努力」

ぶん-れい 文例【名】文章の書きかたの**ぶん-れい** 分靈【名】神社の祭神を勸請(クワンジヤウ)して、他所に社を設くること、又その祭神。「分ちならぶること。

ぶん-れつ 分列【名】分れならぶこと、又**ぶん-れつ** 分裂【名】㊀分れ裂くること、又、分ち裂くこと。㊁〔生〕『英Schizogony』生物の一個體が、無性的に分れて增殖すること。單細胞の生物に行はる。分體。

ぶんれつ-しき 分列式【名】觀兵式にて、軍隊の隊形を分列し、歩兵隊・工兵隊・野戰砲兵隊・騎兵隊・輜重兵隊の順序にて、天皇又はその他の觀閱者の前方を通過しつつ、敬禮を行ふこと。(閱兵式に對して)

ぶんれつ-せいしよく 分裂生殖【名】〔生〕**ぶんれつ**(分裂)㊁に同じ。

ぶんれつ-そしき 分裂組織【名】〔植〕『英Meristem』細胞分裂を行ふ組織。植物體の生長點を構成する組織など、その一例なり。(永久組織に對して)

ぶんれつ-はふ 分裂法【名】〔生〕**ぶんれつ**(分裂)㊁に同じ。「前條に同じ。

ぶんれつ-はんしよく 分裂蕃殖【名】〔生〕**ぶんろく** 文祿【名】後陽成天皇の御代の年號(紀元二二五二年—二二五五年)。

文祿慶長の役【句】次條を見よ。

文祿の役【句】文祿元年、豐臣秀吉の、兵を發して、朝鮮を討たしめし事。諸軍到る所に勝を制し、京城に入りしが、明軍の來援によりて、海軍は効果を收むる能はず、同二年、明の提議により、和を講ず。翌、慶長元年八月、明帥の使者、我國に渡來したれど、和成らずして、二年二月、再び兵を發せしが、三年七月秀吉薨じ、事半ばにして止む。併せて、文祿・慶長の役といふ。

文祿の檢地【句】**たいかふけんち**(太閤檢地)に同じ。

ぶんろく-こばん 文祿小判【名】**むさしみぶんこばんきん**(武藏豐判小判金)に同じ。

ぶんろく-つうはう 文祿通寶【名】次條の略。

ぶんろく-つうはうせん 文祿通寶錢【名】文祿元年に鑄造せし銀錢及び銅錢。銅錢は徑七分九厘、量目一匁一分。

ぶん-わ 文話【名】文章の作方・批評などにつきての說話。

ぶん-わ 文和【名】『和は、文の字の韻に引かれて、ナと發音す』後光嚴院の御代の年號(紀元二〇一二年—二〇一六年)。

ぶんわう 文王【名】〔人〕『王は、文の字の韻に引かれて、ナウと發音す』支那周の王。父を季歷といふ。季歷の歿後、立ちて、西伯となりしが、諸侯多くその德に歸し、仰いで、受命の君となすもの四十餘國、都を岐山の麓より豐邑(今の甘肅省鄠縣豐水の沿岸)に遷す。年九十八にして卒するや、子の發、卽位し、西伯を追尊して、文王と稱せり。發は卽ち武王にして、世に併稱して、文武といふ。

文王の靈囿(レイウ)【句】支那周の文王の設けし園囿。太平記「神泉苑と申すは、大內初めて成りし時、周の文王の靈囿に擬へて、方八町に築かれたりし園囿なり」

ぶん-ゐ(勳位)【名】〔參照〕

ぶん-ゐ 文位【名】普通の位階。本位。

ふんゐき 雰圍氣【名】㊀〔天〕『英Atmosphere』**たいき**(大氣)㊀に同じ。㊁個人の周圍の狀況。環境。空氣。

ぶん-ゐき 分域【名】區域を分つこと。さかひ。わかち。區劃。

ぶん-ゐん 分院【名】病院の、患者收容などのために、別に分設せる所。

ぶん-ゐん 分韻【名】〔文〕㊀二人以上相會して、詩を作るに際し、韻筒又は書籍などによりて、韻字を各人に分ち、その韻によりて作ること。(次韻・和韻などに對して)㊁『英Meter』詩句の中に於ける綴音の律動的配列によりて生ずる句歩の數量的の關係。

ぶん-ゑ 分衛【名】〔佛〕『梵Pindapāta.』の譯語。衛は、分の字の韻に引かれて、ネと發音す』僧尼の、行きて、食を乞ふこと。乞食。「いかること。

ぶん-ゑん 忿怨・憤怨【名】恨をふくみて同じ。

ぶん-ゑん 文苑【名】㊀**ぶんだん**(文壇)に同じ。㊁文章・詩歌を集めたるもの。文林。詞林。

ぶんゑん-えいくわ 文苑英華【名】〔書〕支那南北朝の梁以後唐代に至る、有名なる詩文を蒐錄せるもの。一千卷。宋の李昉・蘇易簡等、勅を奉じて撰す。

ぶんゑん-かく 文淵閣【名】支那明・清時代に於ける宮中の藏書の閣。領閣事以下の職員ありて、大學士・翰林等諸官を兼補せり。

ぶんゑんかく-しよもく 文淵閣書目【名】〔書〕文淵閣所藏の書籍の目錄。四卷。撰子奇の編。

ぶんえんかく-だいがくし 文淵閣大學士【名】文淵閣の職員たる大學士。明の永樂中、親信の官をして、この閣に入直し、顧問に備はらしめしより、終に閣臣の一たるに至れり。

ぶんえん-ざっさん 文苑雜纂【名】〔書〕慶安四年より元祿十三年までの宮中の詩歌の會、及び幕府の連歌の會、その他、公家・武家の吟詠などを集めたるもの。二十卷。德川光圀の著。

ふめい 不明【名】一明白ならざること。二おろかなること。三視力を失ひたること。盲目。

ぶめい 武名【名】一武術上の名譽。二武家の名目。太平記「諸國の御家人の稱號は、賴朝卿の時よりありて、すでに年久しき武名なるを」

ぶめい 武命【名】武家より下る命令。太平記「南都炎上の事は、王命と申し、武命といひ、君に隨ふ法遁れがたうして」

ふめい-すう 不名數【名】〔數〕『英 Abstract number』單位の名稱を帶びざる、普通の數。(名數に對して)

ふめいよ 不名譽【名】名譽ならぬこと。不面目。

ふめいれう 不明瞭【名】明瞭ならぬこと。

ふめく【動四自】『めくは接尾語』蟲など、羽ばたきして飛ぶ。ぶんぶんと羽ばたきす。〔古語〕宇治拾遺「腰を括られて、外へはえ行(イ)かで、ふめき飛びまはりけるを」

ふめつ 不滅【名】一滅亡せぬこと。二〔佛〕「不生(フシヤウ)・不滅」を見よ。

ふめん 浮免【名】さんてん(散田)に同じ。

ふめんぼく 不面目【名】面目を失ふこと。むめんもく。

ぶも 父母【名】ふぼ(父母)に同じ。

ぶもおんぢゆうぎやう 父母恩重經【名】〔書〕父母の恩、殊に慈母の恩を說きたる佛經。一卷。僞經なりとの說あれども、支那唐以前既に存せしもののごとく、古來流布きはめて大なり。

ふーもく 浮木【名】一ふぼく(浮木)に同じ。二「盲龜(キウ)の浮木」を見よ。

ふーもじ ふ文字【名】〔動〕『もじ(文字)は接尾語』ふな(鮒)を云ふ。「女の語」

ふーもだし 絆【名】ほだし(絆)に同じ。〔古語〕萬葉「馬にこそふもだし懸くもの牛にこそ鼻繩はくれ」

ふーもつ 負物【名】おひもの(負物)二に同じ。運歩色葉集「負物、フモツ」

ふもつ-にん 負物人【名】負物ある人。負物をなしたる人。

ふーもと 麓【名】『蹈元(モトヰ)の略。榮は山林の下なる處の義なる和字』山のすそ。山麓(ロク)。

ふもとでら 麓寺【名】山の麓に在る寺。山もとの寺。「のあたり。

ふもとめぐり 麓周【名】麓のまはり。麓。

ふもの-ずき 不物好【名】物好ならぬこと。これぞと取り立てて言ふべき趣味の無きこと。鳳來六六部集「放屁論後篇」「夢食ふ蟲も好好(スキスキ)と、生れ附いたる不物好、わる魂(カタマリ)にかたまって、緣の下の力持、むだ骨だらけのその中に」

ふーもん 不問【名】尋ね問はぬこと。きゝただされぬこと。すておくこと。

ふーもん 普門【名】〔佛〕一諸法一切を具して、普遍・圓融すること。一の法門の中に、宇宙萬有を攝受すること。普法。二〔佛〕佛・菩薩の、神通の力を以て、無量の門を開き、種種の身を示現し、一切衆生(シユジヤウ)を導き入れて圓通せしむること。

ふもん 普門【名】〔人〕高僧。臨濟宗南禪寺派の開祖。名は大明。信濃國保科(ホシナ)の人。母と共に越後國に赴き、正國寺なる叔父叔圓により得度し、上野國世良田(セラダ)の長樂寺に至りて、榮朝に謁し、又、京都の東福寺に至りて、圓爾に參謁し、後、入宋し、歷遊十二年にして歸朝し、越後・攝津等の諸寺に住し、弘安四年、東福寺の住持となる。龜山上皇の帶信を得、離宮を改めて、禪院とせらるるに至る。南禪寺これなり。正應四年寂す。壽八十。嘉元の間、諡を佛心禪師と賜はり、元亨三年、大明國師を加賜せらる。「將門。

ぶーもん 武門【名】武士の家がら。武家。

ぶーもん 部門【名】部類に分ちたる種屬。

ふーもんじ 不文字【名】ふぶん(不文)二に同じ。〔德川時代の語〕醒睡笑「一圓不文字なる侍」同「京の案內者も、一圓不文字にありければ」

ふもん-ぼん 普門品【名】〔書〕法華經二十八品中の第二十五品。觀音菩薩の普門圓通の德を說きしもの。具さには、觀世音菩薩普門品といふ。觀音品。

くわんおんぎやう 觀音經)參照。保元「年來(ゴロ)觀音を憑み進(マヰ)らせて、每日、普門品三十三卷」天の網島「一夏(ゲ)に一部夏書(ゲガ)せし大慈大悲の普門品」「語」

ふーや 文屋【名】ふみや(文屋)二の略。〔古文屋の博士【句】大學寮(ダイガクレウ)の博士。業式部日記「ふやのはかせ、さかしだち、さいらぎゐたり」

ふやう 巫陽【名】かんなぎ。みこ。

ふーやう 扶養【名】一たすけやしなふこと。二〔法〕生活の資を缺き、又は教育を受くる資產なき者に對して、生活の資を給し、或は引き取り、又は教育を受けしむること。「義務」に同じ。

ふやう 扶養の義務【句】〔法〕ふやうぎむ(扶養義務)に同じ。

ふーやう 趺陽【名】漢方の醫術にて、足の裏の一部の稱。和合人「足の趺陽の脈が確かでござった故、療治致して見ましたが、案の如く蘇生致したて」

ぶやう 撫養【名】いつくしみやしなふこと。「異稱。

ぶやう 武陽【名】〔地〕むさし(武藏)一の

ふやう-ぎむ 扶養義務【名】〔法〕或家族又は親族が、その資產又は勞務に依りて生活する能はざる場合、又はその資產に依りて、教育を受くる能はざる場合に、これを引き取りて養ひ、若しくは、その生活の資を給し、又は、これをして、教育を受けしむべき、法律上の義務。

ふやうぎむ-しや 扶養義務者【名】〔法〕扶養義務を負ふ人。

ふやう-けんり 扶養權利【名】〔法〕扶養を受くべき法律上の權利。

ふやうけんり-しや 扶養權利者【名】〔法〕扶養權利を有する人。

ふやうじやう 不養生【名】養生をよくせぬこと。不攝生。醫者の不養生」

ふやうれう 扶養料【名】扶養に必要なる料金。

ふふていふやうれう(法定扶養料)參照。

ふやかす【動四他】ふやくるやうにす。

ふやく【動下二自】『ふゆ(殖ゆ)より派生したる語』水にひたりて膨る。

ぶやく 武役【名】一武家の用途に充つるための賦課。武家役。二武士としての役に立つこと。一人前の武士たる價値。

ぶやく 賦役【名】大寶令の制にて、租稅の一部と勞役とを含める、國民の義務。

ぶやく 夫役【名】古、民の、徵發せられて、公用の力役に服せしめられしこと。大寶令の制度に於ける賦役と同樣にて、これに應じがたき者は、代りに、一定の金穀を輸納せしめしこと、庸(ヨウ)と同樣なり。あらしこ。えだち。

ふえき(夫役)**やく**ぶ(役夫)參照。榮花「御堂(ミダウ)の夫役、……我も、我もと、競ひ仕うまつる」

ふやしやう 不夜城【名】一『三齊略記に「不夜城在二陽邏東南一。蓋古有日夜出、此城以二不夜一名、異レ之也」とある故事』古、支那の東萊郡にありて、夜間日出でたりとの、傳說ある城邑。二夜間も晝の如く明るき市街、即ち積雪の上を月光照し、又は繁華にて、燈燭の光輝きわたれる土地などの譬。

ふやう-ぢむ 扶養義務【名】〔法〕或家族又は親族が、その資產又は勞務に依りて生活する能はざる場合、又はその資產に依りて、教育を受くる能はざる場合に、これを引き取りて養ひ、若しくは、その生活の資を給し、又は、これをして、教育を受けしむべき、法律上の義務。

ふやう-しや 扶養者【名】〔法〕扶養義務を負ふ人。

ふやう-けんり 扶養權利【名】〔法〕扶養を受くべき法律上の權利。

ふやうけんり-しや 扶養權利者【名】〔法〕扶養權利を有する人。

ふやうじやう 不養生【名】養生をよくせぬこと。不攝生。醫者の不養生」

ふやうれう 扶養料【名】扶養に必要なる料金。

ふふていふやうれう(法定扶養料)參照。

ふやかす【動四他】ふやくるやうにす。

ふやく【動下二自】『ふゆ(殖ゆ)より派生したる語』水にひたりて膨る。

ぶやく 武役【名】一武家の用途に充つるための賦課。武家役。二武士としての役に立つこと。一人前の武士たる價値。

ぶやく 賦役【名】大寶令の制にて、租稅の一部と勞役とを含める、國民の義務。

ぶやく 夫役【名】古、民の、徵發せられて、公用の力役に服せしめられしこと。大寶令の制度に於ける賦役と同樣にて、これに應じがたき者は、代りに、一定の金穀を輸納せしめしこと、庸(ヨウ)と同樣なり。あらしこ。えだち。

ふえき(夫役)**やく**ぶ(役夫)參照。榮花「御堂(ミダウ)の夫役、……我も、我もと、競ひ仕うまつる」

ふやしやう 不夜城【名】一『三齊略記に「不夜城在二陽邏東南一。蓋古有日夜出、此城以二不夜一名、異レ之也」とある故事』古、支那の東萊郡にありて、夜間日出でたりとの、傳說ある城邑。二夜間も晝の如く明るき市街、即ち積雪の上を月光照し、又は繁華にて、燈燭の光輝きわたれる土地などの譬。

ふやす 殖す【動四他】殖ゆるやうにす。

ぶや-ぞくだん 武野俗談【名】〔書〕『ぶやしよくだん(武野燭談)を見よ』江戸各地の人物・事件に關する俗談。凡て、四千餘項を筆記せるもの。一卷。馬場文耕の著。具に

は、當世武野俗談といふ。

ふやーのーはかせ 文屋の博士【句】ふや(文屋)の條下を見よ。

ふやーふや【貌】ただよひ浮ぶさま。ふはぶやまぶし 夫山伏【名】身分低き山伏。取るに足らぬ山伏。太平記「我等は夫山伏にて候ふ間、叶ひ候ふまじ」

ふゆ 冬【名】『ひゆ(冷ゆ)と、語源相同じかるべしといふ』四季の内にて、最も寒き季節。秋の後、春の前なる三箇月。古來、我國及び支那にては、立冬より土用まで、現今、我國にては、普通十二・一・二の三箇月、西洋にては、冬至より春分まで。冬季。嚴冬。

ふゆーあみがさ 冬編笠【名】冬季に用ふる編笠。

ふゆーあらし 冬嵐【名】冬季に吹く嵐。冬の暴風。

ふゆーいちご 冬苺・寒苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する常綠の小灌木。莖はやや蔓狀を呈して、地に匍匐し、先端上向す。葉は圓狀心臟形にして、掌狀に淺裂し、長き葉柄を具へ、互生す。葉腋に白色の五瓣花を著け、木苺(キイチゴ)のに似たる實を結び、冬に至れば、熟して、紅色となり、味甘し。山野に自生す。かんいちご。きんいちご。つちいちご。つるいちご。ときしらず。

ふゆーう 富裕【名】とみてゆたかなること。富有。

ふゆう 武勇【名】猛く勇ましきこと。ぶ武勇の藝【句】ぶげい(武藝)に同じ。正統記「吏途の方にも習はず、武勇の藝にも拂はらぬ事なれば」

ふゆうず(英 Fuso)【名】てんきかようへん(電氣可熔片)に同じ。

ふゆうずーばん フユウズ盤(英 Fuse-board)【名】單式交換機を使用する交換局にて、加入者の電話線が、電燈・電力線と混觸したる場合に、強電流に對し、局内の電線と機械とを保護するために、多數のフユウズを集合して裝置せる機械。

ふゆうずーわいや(英 Fuse wire)【名】【理】ふゆうずに同じ。

ふゆうーだて 武勇立【名】武勇を誇りて振舞ふこと。日本永代藏「鞘谷(サヤヤ)・武勇達、年中、我儘を振舞ひける」

ふゆうづうーぶつ 不融通物【名】【法】私權の目的物として、讓渡又は取引等所有權の移轉することあるべからざる物。例へば、公共物又は禁制物などの類。(融通物に對して)

ふゆーうめ 冬梅【名】冬咲の梅。仙傳抄「十二月、ふゆうめ」續猿蓑(十芳)「冬梅の一つ二つや鳥の聲」

ふゆーおび 冬帶【名】婦人の冬季に用ふる帶。冬の帶。

ふゆーかは 冬川【名】冬季の川。續猿蓑「惟然「冬川や木の葉は黒き岩の間(ヒ)」

ふゆーかひ 冬飼【名】冬季に飼養すること、又その飼養したるもの。曾丹集「冬がひの手馴の駒も放ちなん岡邊の小笹生えぬとならば」

ふゆーがまへ 冬構【名】冬越(コシ)の用意。夫木「神無月まだ冬がまへせぬものをとりあへぬまで荒るる空かな」五人女「里は、冬がまへして、……北窓を塞ぎ」

ふゆーがみなり 冬神鳴【名】冬季の雷鳴。

ほつがみなり(初神鳴)參照。日本永代藏「怪我(ケガ)の冬神鳴」

ふゆーがり 冬刈【名】冬に入りて刈ること。冬季に稻を刈ること。

ふゆーがる 冬枯る【動下二自】冬枯になる。冬枯のさまになる。

ふゆーがれ 冬枯【名】㊀冬になりて、植物の葉の枯れ落つること。徒然「冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ」㊁冬になりて、商店の客足の減ずること。㊂冬になりて、淋しくなりたる眺。

ふゆがれーどき 冬枯時【名】冬枯の季節。

ふゆーき 冬木【名】㊀冬の木立。冬枯の木。夫木「奥山のならひとなれるあなしけの雪より先に冬木こりつむ」㊁ときはぎ(常磐木)に同じ。

ふゆーき 冬葱【名】〔植〕葱(ネギ)の一種。冬の頃を好季節として食ふもの。「古語」和名「冬葱、不由岐」

ふゆーぎ 冬著【名】冬著るもの。ふゆもの。

ふゆーぎく 冬菊【名】〔植〕かんぎく(寒菊)に同じ。

ふゆきさどき 不行屆【名】ゆきとどかぬこと。注意のゆきわたらぬこと。

ふゆーぎぬ 冬衣【名】ふゆぎ(冬著)に同じ。

ふゆぎぬーのーかみ 冬衣神【名】八島士奴美(シスミ)の神の御子。ふきねのみこと。

ふゆーきりまい 冬切米【名】德川幕府にて、切米を春・夏・冬の三季に分ちて給したるものの中、冬季の分。全額の二分の一にして、十月に支給す。

ふゆきりまいーはりがみ 冬切米張紙【名】冬切米の直段を定めて公示せし張紙。

ふゆーくさ 冬草【名】【名】冬の草。路通「へばりつく冬草の戸や蕎雜炊(スヰザフ)」

ふゆくさーの 冬草の【枕】冬草は枯るるものなるより、かる(離る)にかけていふ。古今「わが待たぬ人は來れども冬草のかれにし人は音づれもせぬ」

ふゆーくひな 冬秧雞【名】〔動〕くひな(秧雞)に同じ。

ふゆーぐみ 冬茱萸【名】〔植〕あきぐみ(秋茱萸)に同じ。

冬の室(ムロ)、夏の風【句】淨飯(ジョウボン)王が、悉多(シッタ)太子のために營みたる、四季に適したる殿。榮花「かの須達(シュダツ)長者の祇園精舍(ギヲンシヤウジヤ)造りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬のむろ、夏の風、各、ことことなり」に同じ。

ふゆ【動他】ふる(振る)に同じ。一說に、語源上、冬・冷(ヒ)ゆなどと共通の語にて、氷の如く光る義ならんと。「古語」記「品陀(ホム)の日の御子(ミコ)大雀(オホサヽキ)大雀佩かせる太刀本卷(マキ)末ふゆ」「はる。

ふゆ 殖ゆ【動下二自】多くなる。增し加ふ。

ぶゆ 蠑螈・蚖【名】〔動〕雙翅類に屬する昆蟲。種類多し。體長一分に滿たず、色は黑乃至灰黑、觸角短く、翅は薄くして、紅色を呈し、胸部隆起し、脛節は白色、雄は複眼大なり。夏季、山野に多く、雌はよく人畜を螫して、血を吸ふ。卵は塊狀をなし、幼蟲は水中に棲み、圓筒形にして、老熟すれば、繭を作りて、蛹(サナギ)となり、後、一週間にして、羽化す。ぶと。ぶよ。

ふゆーあふぎ 冬扇【名】ひあふぎ(檜扇)㊀に同じ。(夏扇に對して)

ふゆーあふひ 冬葵【名】〔植〕錦葵(ゼニアヲヒ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。錦葵に似て、花は直徑三四分、淡白色を呈し、紫暈を有す。葉は食用とす。

ふゆーいらご 冬苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。錦葵に似て、花は直徑三四分、淡白色を呈し、紫暈を有す。葉は食用とす。

ふゆーいらご 冬苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する常綠の小灌木。莖はやや蔓狀を呈して、地に匍匐し、先端上向す。葉は圓狀心臟形にして、掌狀に淺裂し、長き葉柄を具へ、互生す。葉腋に白色の五瓣

ふゆーいらご 冬苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する常綠の小灌木。莖はやや蔓狀を呈して、地に匍匐し、先端上向す。葉は圓狀心臟形にして、掌狀に淺裂し、長き葉柄を具へ、互生す。葉腋に白色の五瓣

ふゆくわい 不愉快【名】愉快ならざること。不快。

ふゆ-げ 冬毛【名】冬になりて、鳥獣に生ずる、柔き毛。和名抄「毳毛、布由介」「と。

ふゆ-ごし 冬越【名】冬期を經過すること。

ふゆ-こだち 冬木立【名】冬の木立。ふゆき。猿蓑「凡兆」「砂除(ヨケ)や蜑のかたへの冬木立」

ふゆ-ごぼり 冬氷冬氷【名】冬季の氷。

ふゆ-ごもり 冬籠【名】冬の寒き間、家又は巣などにこもりゐること。壬二「降る雪の春に知られて咲く花に冬ごもりする谷の鶯」勅撰「北に三疊の奥まりたる處、…冬ごもりによろし」

ふゆ-ごもり 冬籠【枕】冬籠したる物の、やがて、春になりてはり出づるより、**はる**に掛けていふ。萬葉「冬籠春開(サ)く花を手折りもち千遍(ヒタ)の限戀ひ渡るかも」

ふゆ-ごもる 冬籠る【動四自】冬ごもりを爲す。「古語」睡信集「雪深み古里寒きみよしのの奥には誰か冬ごもるらん」

ふゆ-ざくら 冬櫻【名】「植」櫻の一品種。花と葉とは彼岸櫻に似、冬季に開花し、幹低く小くして、盆栽に適す。

ふゆざんせう 冬山椒・竹葉椒・狗花椒【名】「植」芸香(ウンカウ)科に屬する常綠木。高さ一丈餘に達し、枝に刺多く、葉は奇數の羽狀複葉にして、葉柄・葉軸共に翅を有し、花は雌雄異株、小形にして淡紅色を呈し、味辛くして、微臭ある實を結ぶ。山地に自生す。ときはざんせう。

ふゆ-さる 冬さる【動四自】冬到る。冬になる。(已然形に助辭のばの添ひたる形以外に用例なし)新後撰「冬されば嵐を寒み山川の淺き瀬よりぞまづこほりける」

ふゆ-ざれ 冬ざれ【名】『前條の語の已然形を名詞のごとく誤用したる語』冬の荒れさびたる時。源平布引瀧「冬ざれのいとひもなく大儀大儀」

ふゆ-じたく 冬仕度【名】冬季の著用に適する衣服の準備。冬を迎ふる支度。(夏仕度に對して)

ふゆ-しのぶ 冬葱【名】「植」たちしのぶ(立葱)に同じ。

「柴。

ふゆ-しば 冬柴【名】冬季の柴。冬焚く

ふゆ-ずまひ 冬住【名】冬の住居。芭蕉「京に倦みてこの木がらしや冬ずまひ」

ふゆ-そ 不輸租【名】租稅を、官に輸納せざること。

ふゆそ-でん 不輸租田【名】古、租を官に納めしめずして、全然領主の所得たりし田地。即ち神田・寺田・戒本田・放生(ハウジヤウ)田・公廨(クガイ)田・御巫(ミカンナギ)田・采女(ウネメ)田・射田・學校田・勸學田・勅使田などの類。不稅田。(輸租田・輸地子田に對して)

ふゆ-ぞら 冬空【名】冬の空。冬季の空模樣。冬天。

ふゆた 冬田【名】冬の田。冬季まで稻の苅り殘れる田。冬の荒れたる田。曉臺「冬田刈る夕暮人の一人かな」

ふゆ-たて 冬建【名】次條の略。

ふゆたて-もの 冬建物【名】帳合米(チヤウアヒマイ)にて、毎年十月十七日より十二月二十四日までと、翌年一月四日より四月八日までとの期間になす賣買・取引の目的に用ふる標準米。

ふゆ-つ-かた 冬方【名】冬の頃。

ふゆ-づた 冬蔦【名】「植」きづた(木蔦)に同じ。

ふゆ-つばき 冬椿【名】冬になりて咲く椿の花。俳諧古通方由「葉がくれに賢き花や冬椿」

ふゆ-どし 冬年【名】舊年の冬。去年の暮。一代玄「冬年、二三日頃煩うて死んだが」「し。

ふゆ-な 冬菜【名】「植」たうな(唐菜)に同じ。

ふゆな-うり 冬菜賣【名】冬菜を賣りあるく人。芭蕉「さし籠る裡の友や冬菜賣」

ふゆ-には 冬庭【名】冬のには。芭蕉「冬庭や月も絲なる蟲の吟」

ふゆ-ぬ 冬野【名】ふゆの(冬野)に同じ。萬葉「道の邊の草を冬野(フユヌ)に履み干(ホ)し吾立ち待つと妹に告げこそ」「古語」

ふゆ-ねぎ 冬葱【名】「植」ふゆき(冬葱)に同じ。

ふゆ-の 冬野【名】冬の野。冬枯の野。ふゆぬ。拾玉「朝まだきまだ霜消えぬ淺茅原冬野の草は末ぞ悲しき」

ふゆ-の-はなわらび 冬花蕨【名】「植」はなわらび(花蕨)に同じ。

ふゆ-の-ひ 冬日【名】「書」松尾芭蕉が、貞享元年秋、江戸を出發し、伊勢・大和・山城・近江・美濃を遊歷の上、尾張に出でて、山本荷兮・加藤重五・岡田野水・坪井杜國・正平と行ひし連句を集めたるもの。翌二年、京都の井筒屋より發行。俳諧七部集の一。一名、尾張五歌仙。

ふゆ-ば 冬場・冬塲【名】冬季の間。(夏場に對して)「(夏帽子に對して)

ふゆ-ばう 冬帽【名】冬季に被る帽子。

ふゆ-ばおり 冬羽織【名】冬著る羽織。袷又は綿入に仕立つ。

ふゆ-ひなた 冬日向【名】冬の日なた。續猿蓑「コ谷「山陰や猿が尻掻く冬日向」

ふゆ-びより 冬日和【名】冬の空あひ。冬季の天氣。新永代藏「定めがたき冬日和の舟便宜(フナビンギ)、心もとなし」

ふゆ-ぼたん 冬牡丹【名】㊀「植」牡丹の一種。冬、花を開くもの。寒(カン)牡丹。芭蕉「冬牡丹千鳥や雪のほとときす」㊁ひばち(火鉢)の異稱。㊂『ぼたん(牡丹)㊂を見よ』冬季、冷性(ヒエセウ)の藥餌として食ふ猪の肉。柳樽「冷症(ヒエシヤウ)で二十日ほど食ふ冬牡丹」

ふゆ-まめ 冬豆【名】「植」そらまめ(空豆)を云ふ。「相模國の方言」

ふゆみみ-ぐさ ふゆみみ草【名】「植」きぎ(萩)の異稱。

ふゆ-めく 冬めく【動四自】冬のさまに見ゆ。冬らしくあり。源氏「烈しう吹き出づる風の氣色、まだ冬めきて、いと寒げに」

ふゆ-もの 冬物【名】冬季用の衣服、又それに用ふる布帛。

ふゆ-もも 冬桃【名】「植」桃の一品種。冬季、花を開く。かんもも。しももも。

ふゆ-やすみ 冬休【名】㊀冬、仕事を休むこと。萬葉集「み山には雪こそ早く積るらしみほの地人冬やすみする」㊁ごうきぎう(冬期休業)に同じ。

ふゆ-やま 冬山【名】冬季の山。冬枯の淋しき山。順集「冬山の雪間に殘るあはれ木の上にぞくゆるかくすつみなく」

ふゆ-よ 冬夜【名】冬の夜。冬の日のよる。許六「行燈(アンドン)で水菜摘へる冬夜かな」

ふゆ-わらび 冬蕨【名】「植」はなわらび(花蕨)に同じ。

ふよ 冬【名】ふゆ(冬)の轉訛。

ふよ 不豫・不預【名】『豫は悅ぶ義。預は豫と同字』㊀心におもしろからぬこと。不愉快。㊁天皇の御病氣。御不例。太平記「持明院法皇・本院・新院・春宮……、本院は、…北白河の邊より、俄かに御不預の事ありとて」

ふよ 扶餘【名】㊀支那漢代に、今の滿洲盛京省の北部農安地方にありし民族。朝鮮の高句麗(コウクリ)國も、その一派の建設に係り、百濟の王室も、この民族の出にして、支那にては、前後兩漢の代には、概ねこれに服屬し、晉初、鮮卑の慕容部に滅されたり。㊁「地」朝鮮忠清南道にある百濟の舊都。

ふよ 付與【名】あたへ授くること。

ふよ 賦與【名】くばりあたふること。

ぶよ 蟆子・蚋【名】「動」ぶゆ(蠛子)の轉訛。蟆子の一時(イツセ)【句】「蜉蝣(カゲロフ)の一期(イチゴ)に同じ。「諺語」

ふよう 不用【名】㊀用なきこと。いらぬこと。不要。源氏「生きいでたりとも、あやしきふようの人なり」㊁たよりわろきこと。むだ。だめ。「古語」落窪「石山の人、ののしりて歸りおはしぬ。ふようなめりとて、出でたまはずなりぬ」㊂『不用心の義。不覺悟を不覺といふ類なるべし』ぶしつけ。不都合。亂暴。不埒。保元「あまりに不用に候ひしかば、幼少より西國の方へ追ひ下して候ふが」盛衰記「雅堅(マサカタ)は、させる武勇(ブユウ)の家に非ず、天性不用の人にて、面白き事に思はれければ」「じ。

ふよう 附庸【名】ふようこく(附庸國)に同じ。

ふよう 婦容【名】㊀女子の容貌・風采。㊁妻の容貌・風采。

乃至一丈ほどに達し、葉は掌状に浅く三裂又は五裂し、花は秋開き、大形・五瓣にして、紅色・白色等の美しき色を呈し、葉花共に概形は木槿(ゲモク)に近く、觀賞用とし、又、樹皮より纖維を採りて、蓑の製造用に供す。原産地は支那。きはちすばな。もくふよう。

(ふよう 三)

芙蓉の顔(ガン)【句】芙蓉(三)の花の如く美しき顔かたち。花の顔。玉溪前曉秋「芙蓉のかんばせ、たをやめの、あたりまばゆき、その粧」

芙蓉の皆(ミナ)【句】芙蓉(三)の花の如く美しき眼差(マナザシ)。盛衰記「桃李の粧(ヨソホ)、芙蓉の眸(マナザシ)、いと氣高くして」

ぶよう【名】[動]ぶよ(蟆子)に同じ。

ぶよう 舞踊【名】をどり。だんす。舞蹈。

ぶよう 武勇【名】ぶゆう(武勇)に同じ。平家「われ、右筆の身にあらず、武勇の家に生れて」

ぶよう 無用【名】(一)ふよう(不用)(一)に同じ。(二)事の叶はぬこと。

ふーよういん 不用意【名】(一)心を用ひぬこと。氣を附けぬこと。(二)支度しておかぬこと。準備を怠ること。油斷。

ぶーよういん 不用意・無用意【名】前條(二)に同じ。

ふようかん-はふ 不容間法【名】[哲]次條に同じ。

ふようかんねーりつ 不容間位律【名】[哲]ほいちゆうりつ(排中律)に同じ。

ふよう-きくわん 不用器官【名】[動]生物體中、用をなさぬ器官。例へば、人類の蟲樣垂・尾骶骨、男子の乳房などの類。

ふよう-こ 芙蓉湖【名】[地]のじりこ(野尻湖)に同じ。

ふよう-こく 附庸國【名】『附庸は、大國の諸侯に隷屬して、その保護を受けるもの』の意。小國。

ふよう-しし 芙蓉詩祖【名】肥前國長崎の詩人高暘谷(姓は渡邊、本姓は高階(タカシナ)、故に修して、高といふ)の、その地に開きし詩社。

ふよう-じん 不用仁【名】不都合なる人。不埒なる人。盛衰記「野山を走り、田畠を損じ、馬牛を打ち張り、日に餘りたる不用心なりければ」

ぶよう-じん 不用心・無用心【名】(一)用心のゆきとどかぬこと。用心のわろきこと。國姓爺後日合戰「不用心の命知らず」(二)盜賊などに侵入せらるる恐あること。

ふよう-せい 不溶性【名】溶解せぬ性質。

ぶよーうち ぶよ打【名】紐の、和かに組み作りてあること、又その紐。

ふようちゆうーりつ 不容中律【名】[哲]ふようかんねりつ(不容間位律)に同じ。

ふよう-て 芙蓉手【名】陶器の猪口(チョコ)の造り方の一。

ふよう 舞踊病【名】[醫]ふたうびやう(舞蹈病)に同じ。

ふようーびやう 芙蓉峰【名】[地]『蓮の花の形に似てうるはしき義。**ふよう**(芙蓉)(一)參照』(一)支那の衡山にある峰の一。(なほ芙蓉を名としたる山、支那には八十餘ありといふ)(二)ふじさん(富士山)の異稱。

ふよう-らん 芙蓉蘭・牛嬭菜【名】[植]きぢらん(鬼女蘭)に同じ。

ふよく 扶翼【名】たすくること。たすけ。扶助。

ふよく-どうじ 扶翼童子【名】[佛]俗綱・三綱等の隨侍に供する童子。

ふよーげゆじやう 不與解由狀【名】王朝時代に、內外諸司の任期終りて交替する時、前任者が、その期間內に、官物の缺負、未納を辨濟する能はざりしがために、解由狀を與ふる能はざる旨を記し、新・舊兩司共に署名して、新任者より、前任者に交付せし文書。前任者これを太政官に差し出せば、辨官外題して、期解由使(ゲユシ)に下し、その是非を期判せしめ、大臣より奏聞の上、法規に照して、罪を科したり。不與せぬさま。柔かくてしまりなきさま。

ふーよほろ 夫丁【名】うんきやく(運脚)に同じ。

ぶら【名】(一)ぶらりと垂れてあること。浮世風呂「腑骨(カイホネ)をぼきいりと朴折(クヂ)くと、足が二本ぶらになったっけが」(二)楊弓(ヤウキウ)の的の下に垂れたる錘(リヨモ)。瓢箪形なるを普通とす。(三)ぶらぢやうちん(ぶら提燈)の略。八笑人「ええ、提灯か。四十八文のぶらがいい」和合人「この提灯の火を移すべい。おや、これは、誰中のぶらだが」

ぶら【貌】力も無く垂れ下がるさま。ぶらぶら。

ぶらあぐ(英 Prague)【名】[地]チエッコスロバキヤ國の首府。

ふらあーでんち フラア電池(英 Fuller cell)【名】[理]硝子製の、高さ五寸、幅各三寸三分ほどの方形の瓶に、素燒製の圓壺形の瓶を入れ、外瓶中には、陰極板として炭素板、減極物として一定量の重クロム酸加里(又は重クロム酸曹達と硫酸との混合物)を入れ、清水を加へ、內瓶には、陽極板として、混汞したる亞鉛錐を入れ、水銀と清水とを加へ、使用に際しては、硫酸一滴を加ふる一次電池。起電力高く、內部の抵抗少く、加ふるに、減極力大にして、成極作用なきため、一般に強度の電力を要する場合に使用す。

ぶらあまん 婆羅門【名】[佛]ばらもん(婆羅門)に同じ。

ぶらい(英 Fry)【名】西洋料理の一。魚介を油にて揚げたるもの。我國の天麩羅に類すれど、製法は、材料の肉を、適宜の大さに切り、鷄卵を溶きたる液を塗り、パン粉をまぶして、牛又は豚の脂を煮沸せしめたるフライ鍋にて揚ぐ。

ぶーらい 無賴【名】(一)史記の高祖紀に「始大人常以臣無賴、不ㇾ能治產業、不ㇾ如ニ仲力一。今某之業所ㇾ就、孰ニ與仲多一」とあり』放埒にして、賴り話すべからざること。

ぶらいーぱん 揚燒鍋(英 Fry pan)【名】前條に同じ。

ぶらいーもの 無賴者【名】

ぶらいかん(無賴漢)に用ひらう【名】[植]じふろくささげ(十六豇豆)を云ふ。[信濃國・上野國・九州の方言]

ふーらう 父老【名】年老いたる男子。老人。

ふーらう 不老【名】いつまでも年寄らぬ不老の藥【句】服用すれば、不老となるを得といふ藥。鶉衣「不老の藥は賣り切れるぞよ」

(ぺないらふ)

ぶらーぶら【名】ちろりに同じ。

ぶらーぶら【貌】(一)搖れ動きておちつかぬさま。ぶらぶら。(二)目的も無く遊びあるき、又は爲す事もなく、日を送るさま。ぶらっちやら。(三)病氣の一進一退するさま。

ぶらぶら 病【名】ぶらやまひ(ぶら病)に同じ。

ぶらぶらーやまひ ぶら病【名】[醫]ぶらぶら病に同じ。

ぶらぶらーゆ ぶらぶら湯【名】[醫]ぶらぶら病の人を入るる湯。

ぶらぶらーわづらひ ぶらぶら煩【名】[醫]ぶらぶら病に同じ。

ぶらぶらーをんな ぶらぶら女【名】[醫]ぶらぶら病の女。

ぶらぶらーをんなやまひ ぶらぶら女病【名】[醫]ぶらぶら病に同じ。

ぶらぶらーをんなわづらひ ぶらぶら女煩【名】[醫]ぶらぶら病に同じ。

ぶらぶらーやまひ ぶらぶら病【名】[醫]ぶらぶら病に同じ

ぶら-ぶら【貌】前條に同じ。

ぶらぶら-あるき ぶらぶら歩【名】ぶらぶらと歩くこと。あても無く徐徐と歩くこと。そぞろあるき。散歩。

ぶらぶら-ねぶり ぶらぶら眠【名】疲れて知らず識らずねむくなること。太功記「いらざるこの場の長詮義、お客人が、さぞぶらぶらねぶり、身もほっと退屈」

ぶらぶら-やまひ ぶらぶら病【名】久しく癒えず、且つさほど重りもせざる病氣。

ぶらま（英 Brahma）【名】【動】鶏の一品種。東印度原産の、肉用のもの。鶏冠は三片より成り、耳朶は、鮮紅にして薄く長く、翼は小くして強く、尾も短く、脚は黄色にして、脚羽密生し、體毛の豐圓なる樣、交趾種に似たれども、少しく縦縞ありて、幾分締りて見ゆ。骨小く、肉に富み、體の大き割に、産卵多く、卵殻赤黄色を呈す。暗色ブラマ・淡色ブラマの二種あり。

ぶ-らん 不亂【名】みださぬこと。みだれぬこと。「一心不亂」

ふ-らん 浮嵐【名】山にたなびく、靄の如き氣。嵐翠。

ふ-らん 腐爛【名】くさりてただるること。

ふらん 法（佛 Franc）【助數】佛蘭西・白耳義（ベルギー）・瑞西（スイス）の貨幣の單位。サンチイムの十倍、我國の三十九錢弱。

ぶらん【名】**ぶらんでえ**の略。〔俚語〕

ぶらん【貌】**ぶらり**に同じ。

ぶらん（英 Plan）【名】一設計。計劃。計略。

ぶらんき 佛狼機【名】『十字軍の頃より、東方諸國民が、Franksの名を、一般の歐洲人に適用せしに本づく。**ふらんく**參照』一よおろっぱ人。歐洲人。二おほづつ。大砲。

ふらんき 孵卵器【名】鶏卵・鰹卵・魚卵等を、人工的に孵化せしむる裝置。

ふらんく（英 Franks）【名】某曾紀元の早期に於て、歐羅巴のライン河沿岸地方に植民せし、一派の獨逸種民族。西曆第五・六世紀の間に王國を建設し、第八世紀の末、埃太利）・佛蘭西の三國に分れたり。

ぶらんくさん（英 Planksin）【名】〔生〕海洋又は淡水の表面に近く浮游する、微かなる生物の總稱。動物なるは、原生動物又節足動物に屬するもの多く、植物たるは、諸種の藻類に屬するもの多く、何れも體制簡單なり。浮游生物。

ぶらんけっと 毛布（英 Blanket）【名】けっと（毛布）に同じ。

ぶらんこ 鞦韆【名】釣り下げたる二條の綱の下端に横木を渡し、その横木に身を載せて、前後に揺り動かす裝置、又その遊戯。ゆさはり。ぶらこ。

ぶらんこ-けむし 鞦韆毛蟲【名】〔動〕舞蝶の幼蟲。初め黒色なれども、生長するにつれて、漸次褐色に變じ、長さ二寸内外に達す。時時絲を吐きて、樹枝より垂下し、風によりて、他の樹枝に移る性あり。林檎・梨・櫻・梅等の葉を食害す。

ぶらんこ-わうじやう 鞦韆往生【名】くびれて死ぬること。くびくくり。〔俚語〕

ふらんさうば 法相場・法相場【名】英國の貨幣一ポンドに對する、佛蘭西の貨幣の爲替相場。兩國間の法規上の協定は、一ポンドに對して二十五フラン二二。

ぶらんさん【名】職業無くして、ぶらぶらと徒に遊び居ること、又その人。ぶらんさらん。〔東京の俚語〕

ぶらんさらん【名】前條に同じ。〔俚語〕

ぶらんしえっと（佛 Planchette）【名】手を載すれば、潜在意識の働によりて、自働書記の運働を起す裝置。

ふらんしすは フランシス派【名】〔哲〕同じ。

ふらんす 佛蘭西・法朗西（英 France）【名】〔地〕『フランク（Frank）種族の邦國の義』歐羅巴の西南部に位する共和國。首府を巴里（Paris）と稱す。

ふらんす-かくめい 佛蘭西革命【名】西となれり。佛蘭西大革命。

ふらんすご 佛蘭西語【名】佛蘭西の大部は勿論、瑞西（スイス）・白耳義（ベルギー）の一部等に行はるる言語。印歐語族中、羅典語系に屬する語の一。佛語（フッ）。

ふらんす-じん 佛蘭西人【名】佛蘭西國の人。佛人。

ふらんす-だいかくめい 佛蘭西大革命【名】**ふらんすかくめい**（佛蘭西革命）に同じ。

ふらんす-ちりめん 佛蘭西縮緬【名】『專ら佛蘭西國等への輸出品として織るより名づく』經（タテ）・緯（ヨコ）共に、極めて細き生絲（キイト）を用ひて織りたる、皺（シボ）の小き縮緬。地薄し。

ふらんす-ぶん 佛蘭西文【名】佛蘭西語の文章。佛文。

ふらんちえすこ-は フランチエスコ派（英 Franciscans）【名】〔基〕羅馬教の一派。西曆第十三世紀の初に、伊太利人フランチエスコ（Francesco）の創立せし教團。托鉢と灰色の僧衣とを特色とし、昔日の勢力なけれども、今も羅馬教の中堅たりといふ。我國にては、北海道は、その傳導區域に屬す。

ぶらんでえ（英 Brandy）【名】洋酒の一種。葡萄酒などを蒸溜して製する、アルコオル分の强きもの。酒精分、通常百分の四〇乃至五〇。白葡萄酒より製したるを上質とし、佛國コニヤック（Cognac）地方の產を最上と稱す。ぶらん。

ぶらんでえ-えんぜつ ブランデエ演說【名】『故伊藤博文の、議會にて演說するに當り、ブランデエの氣を藉ること多かりしより出でし語』酒氣を帶びてなす演說。〔俚語〕

ぶらんねる 細絨（英 Flannel）【名】綿花・羊毛及びその混合原料を紡ぎて製したる絲にて、粗く織り、柔軟にして、彈力に富みたる、薄き織物。多くは平織又は斜紋織にして、白・縞・無地（ジ）などあり、單衣・襯衣（シャツ）などに用ふ。綿（メン）ネルに對して、

ぶら-めく【動四自】ぶらぶらとす。ぶらつく。宇武子句「そことなく手にも取られず掛けすてぬ（さいふ句にな）ほぶらめくや夜のかづらぎ」

ぶらめぐぷた-の-ていり ブラメグプタの定理（英 Brahmegupta's theorem）【句】【數】圓に内接する四邊形の兩對角線が、互に垂直なる時は、その交點を過ぎて、一邊に垂直なる直線は、その對邊を二等分すといふ定理。

ぶらり【貌】一長く垂れて搖れ動くさま。ぶらり。ぶらり。二人の、不意に去り、又は來るさま。氣まぐれに訪づるる狀。飄然。

ぶらり【貌】一前條一に同じ。俳諧新選嚊山「折り懸けし藤やぶらりと捻ぢながら」二目的もなく遊びあるき、又は爲す事もなく日を送るさま。木端「世の中を何の絲瓜（ヘチマ）と思へどもぶらりとしては暮されもせず」

ぶらり【貌】**ふらり**一に同じ。

ぶらり-しやらり【貌】衣服を著飾りて、なす事もなくうろつき歩くさま。ぴらしやら。ぶらっちやら。ぶらりひよろり 膝栗毛「ぶらりしやらりと出かけ」

ぶらり-ひよろり【貌】前條に同じ。俗曲（お夏狂亂）「手綱取る手の不沙汰げに、ぶらりひよろりと來りける」

ぶらり-ぶらり【貌】**ふらふら一**に同じ。

ぶらり-ぶらり【貌】**ぶらぶら**に同じ。

ぶらり-ぶらり【貌】**ぶらぶら**に同じ。

ぶらる 降らる【句】**ふる**（降る）の條下を見よ。

ふり 瓜【名】〔植〕**うり**（瓜）一に同じ。〔古語〕枕「美しきもの。ふりに書きたるちごの顏」

ふり 振り【名】**ふりそで**の略。

ふりす 降らす【動四他】降らしむ。降るの敬語。〔古語〕紀「唐國（カラ）のきの〳〵に立ちきわたる松ふぐり」

ふりす 振らす【動四他】**ふる**（振る）の敬語。〔古語〕紀「唐國（カラ）のきの〳〵に立ち

ふらんほおふえる-せん フラウンホオフエル線（英 Fraunhofer's line）【名】〔理〕『西曆一八一四年、獨逸の物理學者フラウンホオフエル（J. von Fraunhofer）

ふらんき 孵卵器【名】鶏卵・鰹卵・魚卵等を、人工的に孵化せしむる裝置。

ふらんく（英 Franks）【名】某曾紀元の早期に於て、歐羅巴のライン河沿岸地方に植民せし、一派の獨逸種民族。西曆第五・六世紀の間に王國を建設し、第八世紀の

ぶらんこ 鞦韆【名】釣り下げたる二條の綱の下端に横木を渡し、その横木に身を載せて、前後に揺り動かす裝置、又その遊戯。ゆさはり。ぶらこ。

ぶらんこ-けむし 鞦韆毛蟲【名】〔動〕舞蝶の幼蟲。初め黒色なれども、生長するにつれて、漸次褐色に變じ、長さ二寸内外に達す。時時絲を吐きて、樹枝より垂下し、風によりて、他の樹枝に移る性あり。林檎・梨・櫻・梅等の葉を食害す。

ぶらんこ-わうじやう 鞦韆往生【名】くびれて死ぬること。くびくくり。〔俚語〕

ふらんさうば 法相場・法相場【名】英國の貨幣一ポンドに對する、佛蘭西の貨幣の爲替相場。兩國間の法規上の協定は、一ポンドに對して二十五フラン二二。

ぶらんさん【名】職業無くして、ぶらぶらと徒に遊び居ること、又その人。ぶらんさらん。〔東京の俚語〕

ぶらんさらん【名】前條に同じ。〔俚語〕

ぶらんしえっと（佛 Planchette）【名】手を載すれば、潜在意識の働によりて、自働書記の運働を起す裝置。

ふらんしすは フランシス派【名】〔哲〕同じ。

ふらんす 佛蘭西・法朗西（英 France）【名】〔地〕『フランク（Frank）種族の邦國の義』歐羅巴の西南部に位する共和國。首府を巴里（Paris）と稱す。

ふらんす-かくめい 佛蘭西革命【名】西

ふらんす-ご 佛蘭西語【名】佛蘭西の大部は勿論、瑞西（スイス）・白耳義（ベルギー）の一部等に行はるる言語。印歐語族中、羅典語系に屬する語の一。佛語（フッ）。

ふらんす-じん 佛蘭西人【名】佛蘭西國の人。佛人。

ふらんす-だいかくめい 佛蘭西大革命【名】**ふらんすかくめい**（佛蘭西革命）に同じ。

ふらんす-ちりめん 佛蘭西縮緬【名】『專ら佛蘭西國等への輸出品として織るより名づく』經（タテ）・緯（ヨコ）共に、極めて細き生絲（キイト）を用ひて織りたる、皺（シボ）の小き縮緬。地薄し。

ふらんす-ぶん 佛蘭西文【名】佛蘭西語の文章。佛文。

ふらんちえすこ-は フランチエスコ派（英 Franciscans）【名】〔基〕羅馬教の一派。西曆第十三世紀の初に、伊太利人フランチエスコ（Francesco）の創立せし教團。托鉢と灰色の僧衣とを特色とし、昔日の勢力なけれども、今も羅馬教の中堅たりといふ。我國にては、北海道は、その傳導區域に屬す。

ぶらんでえ（英 Brandy）【名】洋酒の一種。葡萄酒などを蒸溜して製する、アルコオル分の强きもの。酒精分、通常百分の四〇乃至五〇。白葡萄酒より製したるを上質とし、佛國コニヤック（Cognac）地方の產を最上と稱す。ぶらん。

ぶらんでえ-えんぜつ ブランデエ演說【名】『故伊藤博文の、議會にて演說するに當り、ブランデエの氣を藉ること多かりしより出でし語』酒氣を帶びてなす演說。〔俚語〕

ぶらんねる 細絨（英 Flannel）【名】綿花・羊毛及びその混合原料を紡ぎて製したる絲にて、粗く織り、柔軟にして、彈力に富みたる、薄き織物。多くは平織又は斜紋織にして、白・縞・無地（ジ）などあり、單衣・襯衣（シャツ）などに用ふ。綿（メン）ネルに對して、

ぶら-めく【動四自】ぶらぶらとす。ぶらつく。宇武子句「そことなく手にも取られず掛けすてぬ（さいふ句にな）ほぶらめくや夜のかづらぎ」

ぶらめぐぷた-の-ていり ブラメグプタの定理（英 Brahmegupta's theorem）【句】【數】圓に内接する四邊形の兩對角線が、互に垂直なる時は、その交點を過ぎて、一邊に垂直なる直線は、その對邊を二等分すといふ定理。

ぶらり【貌】一長く垂れて搖れ動くさま。ぶらり。ぶらり。二人の、不意に去り、又は來るさま。氣まぐれに訪づるる狀。飄然。

ぶらり【貌】一前條一に同じ。俳諧新選嚊山「折り懸けし藤やぶらりと捻ぢながら」二目的もなく遊びあるき、又は爲す事もなく日を送るさま。木端「世の中を何の絲瓜（ヘチマ）と思へどもぶらりとしては暮されもせず」

ぶらり【貌】**ふらり**一に同じ。

ぶらり-しやらり【貌】衣服を著飾りて、なす事もなくうろつき歩くさま。ぴらしやら。ぶらっちやら。ぶらりひよろり 膝栗毛「ぶらりしやらりと出かけ」

ぶらり-ひよろり【貌】前條に同じ。俗曲（お夏狂亂）「手綱取る手の不沙汰げに、ぶらりひよろりと來りける」

ぶらり-ぶらり【貌】**ふらふら一**に同じ。

ぶらり-ぶらり【貌】**ぶらぶら**に同じ。

ぶらり-ぶらり【貌】**ぶらぶら**に同じ。

ぶらる 降らる【句】**ふる**（降る）の條下を見よ。

ふり 瓜【名】〔植〕**うり**（瓜）一に同じ。〔古語〕枕「美しきもの。ふりに書きたるちごの額」

ふり 振り【名】**ふりそで**の略。

ふりす 降らす【動四他】降らしむ。降るの敬語。〔古語〕紀「唐國（カラ）のきの〳〵に立ち

ふりす 振らす【動四他】**ふる**（振る）の敬語。【句】目的を達せんとせば、まづその手段を講ぜざるべからず。食を願はば、器

物(モツ)。〔諺語〕大簑「いかでかは、ちご・みどり子のやうなる心おはする殿の、世の政したまはんとて、粟田殿に渡りにしぞかし。ふりを乞はば器物を設けよと申すこと、まことにある事なり」

ふり 風・振【名】一物又は動作のすがた。なりふり。ありさま。風(フウ)。甲陽軍鑑「段段悪しき家中ぶりとなるは」二倣りて、然するがごとく見せかくること。風(フウ)。三習慣のために一定せるすがた。しつけ。ならひ。風(フウ)。

人の風(フウ)見て、我が風(フウ)直せ【句】人の所作又は身なりの如何に鑑みて、我が所作又は身なりを改めよ。〔諺語〕梅暦「誰に目ふ、他(ヒト)の風俗(フウ)見て、我が風體(フウ)直せと」

ふり 振【名】一ふりうごくこと。ふること。二しんし(振子)に同じ。三ふりうり(振賣)の略。四袂の袖附(ソデツケ)の下の縫ひ合はせてあらぬ部分。小兒又は女の袂に限り、男のは人形に仕立つ。五ふりそて(振袖)一の略。新版歌祭文「振の肌著に玉の汗」六ふりそて(振袖)二に同じ。夕霧阿波鳴渡「片町のふりを内へ呼び入れ、師走(シハス)に廣めがあったぞ」七ゆがむこと、又、ゆがみてある程度。傾斜。嬉遊笑覧「つっくり立った御影石……建ては建てたが、ちっくり笠にふりが有る……これから狂(ヒヒ)の無いやうに、とめを合はす」八音樂に伴ひて演ずる舞踊の姿態動作。所作(サシ)。妹背山女庭訓「智様が見たくば、早う諷(ウタ)や。馬子の歌なら面白からう。次手(ツイ)に、ふりも、立って仕(シ)や」九遊女の谷の、馴染にもあらず、前よりの約束もなく、突然來るもの。大悲千錄本「女郎は、……ふりの客の勘定でも取るやうに」十褌(フンドシ)又は腰巻を著用せぬこと。

ふり 振の袖【句】**ふりそて**(振袖)一に同じ。於染久松色読販「絞りかねたる振の袖」

ふり 振の袂【句】前條に同じ。新版歌祭文「幽禪の振の袂に北しぐれ」

ふり 振を附く【句】振附(フリツケ)をなす。八笑人「與兵衛が踊っては、たまらねえが、その振は、わたしがいいやうに附けてあげやすから、何でも詞をよく覚えなせえ」

ふり 降【名】雨などの降ること、又その程度。俳諧古選(立圃)「八專の降をな似せそ花の雨」

ふり 不理【名】道理ならざること。道理に合はざること。理に外れたること。令義解(公式令)「謂、官司判斷、雖レ得二其理一、而訴人不レ服、以爲二不理一」

ふり 不離【名】離れざること。相離れざる深き關係あること。「不即不離」

ふり 不利【名】一利得なきこと。不利益。二勝利を得ぬこと。「なき利益。

ふり 浮利【名】浮きて恃みがたくはかなきこと。

ふり 富利【名】財貨に富むこと。とみ。

ふり 膚理【名】皮膚のあや。きめ。

ふり 振【接頭】動詞に添へて、その意義を強むるに用ふる語。「振仰ぐ」「振返る」「振向く」「ふりさけ見る」

ふり 振【助數】刀劍の數。口(コウ)。盛衰記「金造(カナヅクリ)の太刀一振、引物に賜(タ)び」

ぶり 【名】鰤縄(ブリナワ)などに附けたる、小き木切。

ぶり 鰤・海鰱【名】【動】硬鱗類に屬する魚。體長三尺以上に達し、側偏なれども肥大、鱗細かく薄く、頭大きくして、口尖り、背は蒼黒色にしてやや黄ばみ、腹は白く、體側には、上顎より軀幹の三分の一の處まで、黄色の線あり。七八寸なるを、わかなごといひ、一層大なるを鼻はま白といひ、なほ大なるを、わらさといふなど、年齢によりて、各地、種種の名稱あり。我國、西北海に多く産す。

(り ぶ)

ぶり 部理【名】部分の處理。

ぶり 振【接尾】經過又分量の程あひを示す語。續膝栗毛「蕨餅を、二盆喰って、一盆ぶりしか錢をやらねえぢやあねえか」

ぶりあおぎ 《英 Burbot》【名】**ぶりやあざ**を見よ。

ふりーあおる 降上る【動四他】降りたる雨・雪など殘る。俗曲、北州「はや八朔の白無垢の雪白妙(シロタヘ)に降り上り」

ふりーあかす 降明かす【動四自】降りて、夜の明くるまで續く。曉まで降りとほす。

ふりーあぐ 振上ぐ【動下二他】一手を頭上に高くさしあぐ。四方赤良「早蕨が握りこぶしを振りあげて山の横面はる風ぞ吹く」二神輿を、舁きて振り動かしつつ上ぐ。盛衰記「糺斷堤遅の上は、神輿を本山延暦寺に振り上げ奉り、訴へ申さんに」三振り動かして高く樽ふ。ふりかざす。平治「松明(マツ)振り擧げて近づけば」

ふりーあひ 振合【名】他の人の例と照らしあはすること、又その照らしあはせたる程度。

ふりーあふ 振合ふ【動四他】一袖などを互に振る。鷺「袖振りあふも他生(タシヤウ)の緣」二共共に事を爲す。

ふりーあふのく 振仰く【名】『ふり(振)は接頭語』**あふのく**(仰く)を強めていふ語。根南志倶佐「船ばたより打眺むれば、かの男もふりあふのきしを」

ぶりーあみ 鰤網・海鰱網【名】鰤を捕るに用ふる網。通常大敷網(オホアミ)などを用ひ、稀に刺網(サシアミ)を使用す。

ふりーいづ 降出づ【動下二自】雨・雪など、降りはじむ。ふりづ。

ふりーいづ 振出づ【動下二自】一ふり捨てて出發す。「古語」更科「その日しも京をふり出でて行かんも、いと物ぐるほしく」二聲高く鳴き出づ。ふりづ。**ふりたつ**(振立つ)三參照。「古語」源氏「鈴蟲の振り出でたるなど」

ふりーいづ 振出づ【動下二他】紅を水に振り出だして染む。ふりづ。大和「鹿の音(ネ)はいくらばかりの紅ぞ振り出づるからに山の染むらん」

ふりーいる 振入る【動下二他】『ふる(振る)四を見よ』神輿などを舁きて、振り動かしつつ入り込む。ふりこむ。盛衰記「春日(カスガ)の神木をかざり、洛中へ振り入れ奉り」

ふーりう 風流【名】一美しく飾り立つること。作物(サクモツ)などをして、觀覽せしむること。「古語」續世繼「百臺の御あかしを、一度に程なく供ふるふりう思し召しよりて」建武年中行事「女房の布施とも……色色に結びたる花どもに附けて、ふりうなどあるなり」二『下學集に「風流。(註)風情義也。日本俗呼二拍子(ヒヤウシ)物一曰二風流一」とあり』**はやしもの**(囃物)に同じ。百練抄「近日京中兒女、備二風流一、調二鼓笛一、參二紫野社一。世號二之夜須禮一」狂言柑子俵「これに、幸、ふりうの假面(メン)がある」三延年舞の一種。興福寺延年舞式「風流」四能(ノウ)の狂言方の演ずる一種の曲。狂言と能との中間に位せるがごとき、單純なる祝賀の演伎。十數番もしくは二十數番ありて、徳川時代には、禁裏、幕府、西本願寺、春日神社に限りて演じ、翁と三番叟との中間、又は翁の中途に於て行へり。

ふりーうづむ 降埋む【動四他】降り積りて埋む。降りて積り覆ふ。風雅「降りうづむ雪に日數は杉の庵垂氷(ヒヤウ)ぞ繁き山かげの軒」

ふりーまつり 風流祭【名】昔、筑後國にて、陰暦八月より九月にかけて、在在所所の村村にて、新稻の懸稻(カケイネ)を奉りて、産土神(ウブスナ)を祭り、五穀の豊熟を祝し、御代の長久を祈りしこと。

ふりーもの 風流者【名】祭禮の時に作る花毬など、種種のみやびたる作物(サクモツ)。

ふりーうり 瓜賣【名】瓜(ウリ)を賣ること、又その人。**ふり**(瓜)參照。新六百敷や内藏(クラ)のつかさのふり賣にわれ劣らじと集ふらなむ」

ふりーうり 振賣【名】品物を荷ひて、聲高く賣りあるくこと、又その人。ぼてふり。行商。振商賣(フリシヤウ)。

ぶりーうり 鰤賣・海鰱賣【名】鰤を賣ること、又その人。俳諧新選二扇「鰤賣の姫も見たく上りけん」同じ。

ふりえき 不利益【名】**ふり**(不利)一に同じ。

ふりーおく 降置く【動四自】雨など降りて、木の葉などの上にたまる。古今「神無月しぐれふりおける楢の葉の名に負ふ宮の古言(フルコト)ぞこれ」

ふりおこす 振起す【動四他】㊀ふりたつ（振立つ）に同じ。萬葉「ますらをの弓末（ゆずゑ）ふりおこし射つる矢をのち見む人は語りつぐがね」㊁勢を出す。ふるひおこす。さかんにす。萬葉「ますらをの心ふりおこし足引の山坂越えて」

ふりおつ 降落つ【動上二自】降りて落つ。字鏡「實、阿女布利於豆」源氏「涙、……ふりおつれば」

ふりおとす 振落す【動四他】㊀振りて落す。振ひて落す。ふるひおとす。㊁ふるひおとす（篩落す）㊂に同じ。

ふりおほふ 降覆ふ・降蔽ふ【動四他】雨・雪降りて、一面におほふ。萬葉「秋山に霜降りおほひ木の葉散り年は行くとも我忘れめや」同「吉隱（よなばり）の野木（ぬき）に降りおほふ白雪の著（しる）しくも戀ひむ吾かも」

ふりがあてたい フリガアテ隊【名】ほへいふりがあてたい（歩兵フリガアテ隊）に同じ。

ふりかう 不履行【名】履行せぬこと。

ふりかかり 振掛【名】沖中にて、逆潮に逢ひて、船の進まざる時、暫く船をかけて、潮あひを待つこと、又は俄かに風雨に逢ひし際、その靜まるを待つこと。

ふりかかる 降懸る【動四自】㊀降りて注ぎ懸る。かかる。降り注ぐ。風雅「蘆の葉に雨降りかかる暗き夜の入江の船に都をぞ思ふ」㊁受くるやうになる。及ぶ。「身にふりかかる災難」

ふりかく 振掛く【動下二他】㊀手を振るやうにして注ぎかく。散らし注ぐ。ふりまく。「鹽を振り掛く」『水を振り掛く』㊁頤頭よりかぶり垂らす。振りかぶるやうにす。平治「青を免（ゆる）がで、手に提（さ）げ、亂髪を面（おもて）を振り掛け」

ふりかくす 降隱す【動四他】降り積りて覆ひ隱す。降り埋みて隱す。續古今「春來てはかすみぞ埋む白雪のふり隱してし峰の松原」

ふりかざす 振翳す【動四他】刀などを振り上げて、頭の上にかざす。上段の構をなす。ふりあぐ。

ふりかさなる 降重る【動四自】降りて積もり重なる。續古今「梅がえに降り重なれる白雪を八重咲く花と思ひけるかな」

ふりかさぬ 降重ぬ【動下二他】降りて積み重ぬ。新勅撰「難波潟葦間の氷消（こ）ぬが上に雪ふりかさぬ面白の身や」

ふりかた 振方【名】處分する方法。もち扱ひ方。「身のふりかたに困る」

ふりかたぐ 振擔ぐ【動下二他】振り上げて擔ぐ。肩の方へ振り上ぐ。著聞「男の、肩脫ぎて、たつき振りかたげて、大木を切りたるあり」

ふりがたし 舊難し【形ク】昔のままに變らず。いつも珍しく見ゆ。相變らずなつかしく感ぜらる。ふりず。【古語】源氏「よそのおぼえも心にくく、わが心地もなほふりがたく」榮花「いみじう若う清げに見えさせたまふ。なほふりがたき御かたちなりかし」

ふりがな 振假名【名】漢字の傍（かたはら）、右傍に小く添へ記して、その字の音訓を示す假名。すけがな。傍訓。

ふりがなしんぶん 振假名新聞【名】こしんぶん（小新聞）に同じ。

ふりがねし 振矩師【名】鑛山にて、測量を掌る者。【德川時代の語】

ふりがねじゅつ 振矩術【名】鑛山に於ける測量の技術。【德川時代の語】

ふりかはる 降變る【動四自】降る狀態が變る。俳諧新選「沙月」「降りかはり寒さも變る雨雪かな」

ふりかふ 降變ふ【動下二他】降りかかりて、趣を變へしむ。無名抄「時雨にはつれなくもれて松の色をふりかへてけりけさの初雪」

ふりかふ 振替ふ【動下二他】物の向（む）きを變ふ。左を右に、又表を裏に、或は取組・番組などの人を取り替ふ。千兩曆「おれと取ったら、骨身が碎けて、重ねて土俵踏むことはならぬぞよ。どうぞ頭取衆を賴んで振替へて貰うてなりと、取らぬ方が勝ぢやあろ」八笑人「この狂言を振替へて、眼公（がん）にさせると」

ふりかぶる 振冠る【動四自】頭上高く振り上ぐ。

ふりかぶろ 振禿【名】かぶろ（禿）㊀に同じ。薩摩歌「白頭（しらが）の振禿」

ふりかへ 振替【名】㊀方向を替ふること。㊁〔商〕金錢の出入はなく、一の勘定科目と他の勘定科目とを交換するのみなる取引の仕譯。㊂ふりかへちよきん（振替貯金）の略。

ふりかへ-かんぢやう 振替勘定【名】簿記にて、或勘定を、他の勘定に變更すること。

ふりかへ-くちざ 振替口座【名】ふりかへちよきんくちざ（振替貯金口座）の略。

ふりかへ-こうざ 振替口座【名】前條に同じ。「やみかへし。

ふりかへし 振返【名】ふりかへすこと。

ふりかへす 振返す【動四自】傷病などが、一旦なほりかかりて、また元にかへる。やみかへす。

ふりかへ-ちよきん 振替貯金【名】郵便貯金の手續に依りて、現金二十圓を基本預金として、郵便局に預け置けば、郵便爲替貯金管理所にては、人別に受拂をなすべき加入者名義の口座（ざ）番號を設け、もし加入者同志にて受拂をなす時か、送金の場合かならば、附近の郵便局にて、先方の口座番號に當てて拂ひ込み、その郵便局は、管理所に通知して、加入者の預金となし、支拂の場合ならば、管理所は、請求に應じて、その金額を兩者の間に振替へ、又、加入者が加入せぬ者に送金する場合ならば、管理所は、その口座より、預金を支拂ひて、受取人に證書を授け、指定郵便局より受け取らしむること。ふりかへ。

ふりかへ-ちよきん-くちざ 振替貯金口座【名】次條に同じ。

ふりかへ-ちよきん-こうざ 振替貯金口座【名】振替貯金の加入者の名義を載せたる口座。振替口座。振替貯金口座（ざ）。

ふりかへ-でんぴやう 振替傳票【名】『英 Transfer slip』勘定科目の振替又は科目の振替に、現金の收支伴なふ場合に使用する傳票。通常、黑色の罫線を用ふ。

ふりかへ-ようし 振替用紙【名】振替貯金の送金の際に使用する、一定の形式に印刷せる用紙。

ふりかへる 振返る【動四自】後方にふり向く。かへりみる。和合人「油つぎの男、また驚き、振り返ると、醬油樽ほどの面の化物と、鼻を突きあはせ」

ふりかみ 振髮【名】たてがみ（鬣）に同じ。【古語】字鏡集「鬃、フリガミ・アゲツキ」

ぶりき 鉄力・鐵葉（蘭 Blik）【名】鐵の薄き板に、錫の鍍金を施せるもの。錫の剝落せぬ間は、錆びざると、外觀の美なるとのために、廣く使用せらる。ぶりつき。

ぶりき-ざいく 鉄力細工・鐵葉細工【名】ブリキにて細工すること、又その細工したる物。

ぶりき-しよく 鉄力職・鐵葉職【名】ブリキ細工を職業とすること、又その人。

ぶりき-づめ 鉄力詰・鐵葉詰【名】食品を、ブリキ製の器に詰むること、又その詰めたる食品。

ぶりき-や 鉄力屋・鐵葉屋【名】ブリキ細工をなす人、又その家。

ぶりき-やね 鉄力屋根・鐵葉屋根【名】ブリキにて葺きたる屋根。

ふりきらす 降霧らす【動四自】降りてくもる。【古語】

ぶりぎり 鰤切・海鰱切【名】『もと鰤を料理する方法なるよりいふとぞ』魚の料理法の一。おろして、薄身を去り、先づ横に切りて、次ぎに縱に切るもの。

ふりきる 振切る【動四他】捕へられたるを、力を用ひて放す。ふりちぎる。ふりはなす。ふりはなつ。ふりはらふ。ふりほどく。ふりもぎる。

ふりく 降來【動加變自】降りて來（く）。降りて來（き）る。ふりきたる。萬葉「三諸（みもろ）の神奈備山ゆとの陰（かげ）り雨は落（ふ）り來ぬ」

ふりくつ 不理窟【名】道理にかなはぬこと。理窟に合はぬこと。不道理。

ふり-くらす 降暮らす【動四自】日の暮るるまで降りつづく。源氏「つれづれと降りくらしてしめやかなる宵の雨に」

ふり-くる 降暮る【動下二自】降るうちに、日暮る。降ると共に日暮る。若風俗「春も時雨の定なや、俄かに降り暮れて」

ふりげえと (英 Frigate)【名】帆船の、西暦第十八世紀より第十九世紀の初にかけて、最も多く行はれし型。帆裝の樣式は、一定せざりしかど、裝帆の面積廣く、速力も操縦も輕快なるを特色とし、これに砲を備へたるものは、今日の輕巡洋艦の起原をなせり。

ふり-こ 振子【名】しんし(振子)に同じ。

ぶり-こ ぶり子【名】からざを(殻竿)を云ふ。〔肥後國の方言〕

ぶり-こ【名】〔動〕はたはた(雷魚)を見よ。

ふり-こす 振越す【動四他】後部に垂れたる髪を、前の方へ掻き上ぐ。かきこす。金葉「朝寢髪誰が手枕にたわ附けてけさはかたみに振り越して見る」「に同じ。

ふり-ごと 振事【名】しよさごと(所作事)【三】

ふりこ-どけい 振子時計【名】『英 Pendulum clock』振子を器械に連結して、その等時性を利用したる時計。

ふり-こぼる 降氷る・降凍る【動四自】霜・雪など降りて、水こぼる。竹取「霜月しはすの降りこぼり、みな月の照りはたたくにもさはらず來けり」

ふりこみ-うけわたし 振込受渡【名】〔商〕賣買の物件と代金とを、受渡の期日に、取引所に差し出すこと。〔取引所の語〕

ふり-こむ 降込む【動四自】雨・雪などが降りて、家の中まで入る。

ふり-こむ 降籠む【動下二他】雨・雪などが降りて、人の外出をとどむ。蜻蛉「雪に降りこめられて」

ふり-こむ 振込む【動四他】【一】振りかけて、入れ加ふ。生寫朝顏話「手早に、懐中の藥を振り込み、蓋をしめ」【二】ふりいる(振入る)に同じ。【三】掛矢にて、杭を地中に打ち込む。

ふり-さく 振放く【動下二他】遠ざかり隔つ。遠方より振り向く。〔古語〕萬葉「振り仰(さ)けて三日月見れば一目見し人の眉引(まよび)思ほゆるかも」源氏「故郷のかたみぞかしと天の原ふりさけ月を見しぞ悲しき」

ふり-さぐ 振下ぐ【動下二他】うち振りてさげおろす。謡曲(淡路)「ふりさげし鉾の滴(しづく)、露凝りて、一島となりしを」

ふりさけ-あふぐ 振放仰ぐ【動四他】『次條を見よ』遠方より仰ぎ見る。〔古語〕新續古今「かすが山ふりさけ仰ぐ言の葉の昔の跡をなほたのみつつ」

ふりさけ-みる 振放見る【動上一他】『みさく(見放く)を見よ』遠方より見る。〔古語〕萬葉「あまの原ふりさけ見れば夜ぞふけにける」

ふり-しきる 降頻る【動四自】しきりに降る。降りに降る。

ふり-しく 降敷く【動四自】降りて、一面に散らばる。降りて覆ひ敷く。古今「秋は來ぬ紅葉は宿にふりしきぬ道踏み分けて訪ふ人はなし」源氏「雪霰降りしく頃は」

ふり-しく 降頻く【動四自】ふりしきる(降頻る)に同じ。〔古語〕萬葉「久方の雨は零(ふ)り敷き思ふ子が宿に今宵はあかして行かむ」

ふり-しほ 振鹽・撒鹽【名】魚類などを漬くるに、鹽をそのまま振り掛くること。(立鹽(たてじほ))に對して

ふりしほづけ 振鹽漬・撒鹽漬【名】撒鹽にて漬くること、又その漬けたる魚類。

ふり-しぼる 振絞る【動四他】『ふり(振)は接頭語』しぼる(絞る)を強めていふ語。八犬傳「疾く蒐(か)け出して生け捕れと聲ふり絞りて、下知すれば」

ふり-しまひ 降仕舞【名】降りつづきたる雨・雪などの終となること。俳諧古選船錄(梅布)「初雪や恥かしさうに降仕舞」

ふり-しむ 降染む【動下二他】降りて染むやうになす。降りて濡れ染(し)ます。風雅「夏淺き綠の木立庭遠み雨降りしむる日ぐらしの宿」

ふり-しん 振新【名】ふりそでしんざう(振袖新造)の略。繁千話「二人の振新も、二階へ、下卑ばうをしに行き」

ふり-じやう 不理狀【名】大寶令の制にて、訴人が官司の裁斷に不服にして、上訴せんと欲する時、その請によりて、判文の外に更に與へて、上訴を許しし書狀。

ふり-しやうぎ 振將棋【名】將棋の一種。金もしくは歩(ふ)四枚を取り置きて、他の駒を雙方に均しく分ち、その四枚を張りて、逆立したるを二十、直立したるを十、横立したるを五、然らざるを一として、總數を計算し、その數だけの駒を、敵手より取りあぐる競技。

ふり-しやうばい 振商賣【名】ふりうり(振賣)に同じ。

ふり-しやなぐる 振しやなぐる【動四他】振り動かして、しやなぐる。伊達娘戀緋鹿子「その甲斐も無き簑笠を、……振りしやなぐれば、中より一通(つう)、お七へ吉三郎」

ふり-しやり【貶】債を含みてすねたるさま。ぶりぶり。犬子集「ふりしやりとする絹の振袖(さいふ句に)腹立ちてくねるも戀のうき恨」

ふり-す 舊す【動佐變自】ふるくなる。ふる。〔古語〕源氏「心もて草のやどりをいとへどもなほ鈴蟲の聲ぞふりせぬ」

ふり-ず 舊りず【句】ふる(舊る)の條下を見よ。

ふり-すう 振据う【動下二他】神輿を舁きて、振り動かし、或場處に据う。神輿振をしたる後に或場所に据う。盛衰記「神輿を、建禮門の前に振り居奉り」

ふり-すさぶ 降荒ぶ【動四自】降りて、ますます烈しくなる。〔古語〕玉葉「信樂(ぎ)の外山(と)の霰降りすさび荒れゆく頃の雲の色かな」

ふり-すすぐ 振濯ぐ【動四他】振りて濯ぐ。振り動かしつつ洗ひ淨む。記「ぬなともゆらに天(あ)の眞名井(まなゐ)に振り滌(すす)ぎて」

ふり-すつ 振捨つ【動下二他】【一】ふりはらひて捨て去る。見捨つ。續世繼「さめざめと泣きたまひて、御手して、涙を振り捨てつつおはしける」【二】神輿を舁きて、振り動かし、終に捨て去る。增鏡「一とせの御輿ふりの時、情なく防がせたまひしかば、衆徒、おのれを恨みて、陣のほとりにふりすて侍りしかば、空しく牛馬の蹄にかかりし事は」

ふり-ずむ (英 Prism)【名】〔理〕平行ならざる二平面にて、透明體を限れるもの。通常、フリント硝子にて、三角柱狀に作りて、三稜鏡又は三稜玻璃ともいひ、分光器として用ふ。次條參照。

ニコルのプリズム (英 Nicol's prism)【句】〔理〕無色・透明なる方解石を以て造りたる、二箇のプリズムを、カナダバルサム (Canada balsam) と稱する一種の樹脂により接合せしめて造りたる柱狀體。偏光を生ぜしめ、又は或光が偏光なりや否やを檢するに用ふ。西暦一八二八年、英人ニコル (W. Nicol) の發明に係る。

ふり-そそぐ 降注ぐ【動四自】注ぐが如くに降り懸る。降りかかる。降る。

ふり-そで 振袖【名】【一】長くして、腋を縫ひつけぬ袖。昔は男・女ともに、元服前に用ひ、今は若き女子、多くは晴著として著用す。ふりのそで。ふりのたもと。【二】次條の略。丹波與作「枕の御伽(おとぎ)が御用ならば、振袖なりと、詰(つ)なりと」

ふりそで-くわじ 振袖火事【名】明暦三年正月十八日、江戸本郷丸山の本妙寺より起りて、江戸全市を燒きたる火事。同寺にて、妙齡の女の死體の棺に掛けたる振袖を燒き捨てたる火より發すと傳ふ。一名、丸山火事。

ふりそで-しんざう 振袖新造【名】江戸吉原の遊廓にて、禿(かむろ)の、十三四歳に達し、新造となりたるもの。ふりそで。ふりしん。(留袖(とめそで)新造・番頭新造に對して)繁千話「名代(みやうだい)の振袖新造來る。それより、廻方(まはりかた)の勤使三度に及びしかば、空髪(からかみ)は、ふしやうぶしやうに來り」

ふり-そぼつ 降濡つ【動四自】雨降りて、濡れそぼつ。古今「明けぬとて歸る道には

きたれて雨も涙も降りそぼちつつ」

ぶりーだいにん 部理代人【名】[法]ぶりだいりにん(部理代理人)の略。(總理代人に對して)[舊民法の語]

ぶりーだいり 部理代理【名】[法]事件の一部分の代理。(總理代理に對して)[舊民法の語]

ぶりだいりーにん 部理代理人【名】[法]部理代理の委任を受けたる人。部理代人。(總理代理人に對して)[舊民法の語]

ぶりーだけ 振竹【名】芝居にて、黒幕淺黄幕の類を舞臺の前面に垂るる時、かりに引き掛け置き、紐にて振り動かせば、直ちに、その幕の落つるやうに仕掛けたる竹。

ぶりーだし 振出【名】一振りて、物を出すこと。二振りて、中に入れたる物を、その小き穴より出すやうにせる器物。三ふりだしぐすり(振出藥)の略。四『英 Issue 又 Drawing』有價證券、殊に爲替又は手形を發行して送ること。五雙六(ロク)にて、采を振り始むる場所。六『道中雙六の振出に譬へていふ』世わたりの初。一生の生活の出發點。七芝居の大道具の一。梅の木・松の木など、大柱に仕掛ありて、人の上ること。枝を廻るやうに造り、樂屋の方にて、枝より舞臺の方へ振り出す。

ぶりだしーいうびんきよくしよ 振出郵便局所【名】その郵便爲替を振り出したる郵便局所。振出郵便局。

ぶりだしーきよく 振出局【名】ふりだしいうびんきよく(振出郵便局)の略。

ぶりだしーぐすり 振出藥【名】細末にしたる藥劑を、小き袋に入れたるまま、熱湯に浸し、振り動かして、その藥の氣を、湯の中に滲出せしむるもの。ふりだし。泡劑(ハウザイ)。膠漆毛湯生湯(ケシセイトウ)といふ振出藥の名ぢやはいな」「り出したる地。

ぶりだしーち 振出地【名】その手形を振りだしてかた 振出手形【名】よきんてかた(預金手形)に同じ。

ふりだしてがたーかんぢやう 振出手形勘定【名】[商]しほりひてかたかんぢやう(支拂手形勘定)に同じ。

ふりだしーにん 振出人【名】手形を振り「出す人。

ふりーだす 振出す【動四他】一振りて、中より出でしむ。俳諧新選・春來「葉柳にふり出されけり蟬の聲」二勢よく、舞臺に出し現はす。八笑人「ひとりではどうも淋しさうだから、「千草も冬枯れて」からは、奴(ヤッ)をふり出して、所作だてとやらかすがよからう」三振ることを始む。四振出藥又は茶などを、熱湯に入れて、滲出せしむ。五有價證券、殊に爲替又は手形を發行す。

ふりーだす 降出す【動四自】雨など、降りはじむ。續猿蓑(支考)「賭(カ)にして降出されけり櫻がり」

ふりーたつ 振立つ【動下二他】一うち振りて高くす。ふりおこす。萬葉「大船にかしふり立てて濱清きまりふの浦に宿りかせまし」親詞「耳振り立てて聞くものと、馬牽き立てて」二茶を振り出して立つ。生寫朝顏話「駒澤が戻り次第に振り立てて、われらが先へ服(フク)加減」三力をこめて、聲又は音を擧き渡らしむ。雲萍「おのが作れる文(フミ)を、聲のかぎり立てて誦(ヨ)する聲、こま鈴をふり立つるに劣らず」古今「夏山に戀しき人や入りにけん聲ふり立てて鳴くほととぎす」

振立てて聞く【句】「耳振立てて聞く」を見よ。和合人「振り立てて、一つ聞しめせと申すう。ぐわらぐわら、ぐわらぐわら。ははははは、これは馬鹿とみの祓(ハラ)」

ぶりたにや (英 Britain)【名】[地]『ブリトン(Briton)人の國の義』いぎりす(英吉利)の古名。

ぶりたにやーきん ブリタニヤ金(英 Britannia metal)【名】銅又は銅と蒼鉛を含める錫とアンチモニとより成れる、帶青白色の硬き合金。純粹の錫よりも、化學的作用に對する抵抗力大にして、茶器・匙・小函、その他食器の製作に用ふ。

ふりーちぎる 振散切る【動四他】ふりきる(振切る)に同じ。丹波與作「すないやいや、ほてつばらめとふりちぎる」

ふりーちん 振ちん【名】ふりまち(振仇)に同じ。[俚語]

ふりーつ 府立【名】『立の字の音、正しくはりふ』府にて設立すること、又その設立したるもの。(縣立・市立・郡立・村立などに對して)「府立病院」「府立醫學校」

ふりーつ 不律【名】『不律の二字の反切は、筆(フデ)なるによりていふ』ふで(筆)一に同じ。

ふりーづ 降出【動下二自】ふりいづ(降出づ)の略。後鑒「梅の花散るてふなべに春雨のふりてつつ鳴く鶯の聲」

ふりーづ 振出【動下二自】ふりいづ(振出づ)二の略。次條參照。[古語]

ふりーづ 振出【動下二他】ふりいづ(振出づ)の略。[古語]古今「思ひ出づる常磐(トキハ)の山のほととぎすから紅のふりてぞ鳴く」

「同じ。

ぶりっき 鉄力・鐵葉【名】ぶりき(鉄力)に同じ。

ぶりっきーざいく 鉄力細工・鐵葉細工【名】ぶりきざいく(鉄力細工)に同じ。

ぶりっきーしよく 鉄力職・鐵葉職【名】ぶりきしよく(鉄力職)に同じ。

ぶりっきーづめ 鉄力詰・鐵葉詰【名】ぶりきづめ(鉄力詰)に同じ。

ぶりっきーや 鉄力屋・鐵葉屋【名】ぶりきや(鉄力屋)に同じ。

ぶりっきーやね 鉄力屋根・鐵葉屋根【名】ぶりきやね(鉄力屋根)に同じ。

ふりーつく 振附く【動下二他】『つく(附く)は接尾語』ふる(振る)[ラ]を强めていふ語。當世虎の巻「きり山は、瀬川を請(ウ)け出して、わが物としてくどけども、詐病(サビョウ)の床(トコ)にふりつけられ」

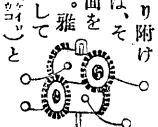
ふりーつけ 振附【名】芝居などにて、振事の身振を工夫して、これを演ずる者に教ふること、又その人。芝居にては、囃子方(カタ)に屬す。

ふりーつけーし 振附師【名】振附をする人。歌舞伎劇發達の初には、振(フリ)は、すべて俳優自身の工夫に成りしに、後藤間(ゴトウマ)・花柳(ハナヤギ)などの、專門の家業たるに至れり。ふりつけ。

ぶりっぢ (英 Bridge)【名】『橋の義』一軍艦又は汽船の甲板上の展望に便なる高處に設けたる、橋のごとき形の場處。軍艦のは艦橋ともいひ、汽船のは船橋ともいふ。二停車場にて、旅客の線路を橫切るために高く構へたる、橋のごとき形の場處。陸橋。三閫の金冠を支持し固定せしむるための裝置。

ふりーつづく 降續く【動四自】降りて、長き間つづく。幾日も止まず降る。鵜鷺合戰「折しも秋雨降りつづいて、河づらは海水を湛へ」

ふりーつづみ 振鼓・搖鼓・鼗【名】一振りて鳴らすつづみ。小き鼓に、木の柄を貫き、その鼓の胴の兩傍に、先端に球の附きたる絲を取り附けの球、革の面を打ちて鳴る。雅樂の樂器としては、鶏婁鼓(カロウ)と合はせて、一人にて奏する定にて、胸に鶏婁鼓を懸け、右手に、その桴(バチ)を持ち、左手に、この鼓を持つ。たうこ。和名「鼗鼓、周禮註云、鼗鼓、徒刀反、字亦作ㇾ鼗、不利豆豆美。如ㇾ鼓而小、持二其柄一搖ㇾ之、則旁耳還擊之」榮花「上(ウヘ)、いと若うおはしませば、ふりつづみなどして」二前項の樂器と同形に小く作りたる玩具。でんでんたいこの類。



(一) みづつりふ

ふりーつづら 降積む【動四自】ふりつもる(降積る)に同じ。源氏「降りつむ雪にうちながめつつ明し暮し」

ふりーつむ 振詰む【動下二他】ふりぬく(振拔く)二に同じ。澁世風呂「はじめは振り詰めた女郎も、到頭眞實に惚れてくるはさ」

ふりーづんばい 振飄石【名】づんばい(飄石)に同じ。

ふりーづんばい 振積む【動四自】ふりつもる(降積る)に同じ。

ふりーつのる 降募る【動四自】いよいよ增りて降る。ますます多く降る。

ふりーづはい 振飄石【名】ふりづんばい(振飄石)に同じ。

岡つつじ妹が眞袖にあやまたれつつ」

ふり-さく 降遂ぐ【動下二自】雨雪など、降り終る。俳諧新選「瓜流「降りとげぬ雨をかこつや内花見」

ふり-さばく 振飛ばす【動四他】振りつつ擲ぐ。はふりつく。

ぶりさん-じん ブリトン人（英 Britons）【名】一古代の英吉利本島に住せし、ケルト族の一派なる人種。二いぎりすじん（英吉利人）に同じ。

ふり-なは 振繩【名】繩の所所に、鳥の羽などを插み、その兩端を一人づつ持ち、底魚（ソコウヲ）の群を追ひて、網の中に驅り入る物。鯛網などに副用す。

ふり-なまこ 振海鼠【名】海鼠の料理法の一。薄く小口切にして、重箱に移し、搖り動かして、十分に粘液を去りたる上、皿に盛り分け、二杯酢を掛くるもの。

ふり-ぬく 振抜く【動四他】一飽くまで、振る。振りとほす。二遊女が、嫖客を、つづけざまに無愛想にもてなす。始終振る。ふりつむ。三ふりはなす（振放す）に同じ。字當「その手にさげたる相撲（スマヒ）をば、投げければ、振り抜きて、二三段ばかり投げられて」「同じ。

ふり-の-かみ 振髪【名】ふりがみ（振髪）に同じ。字當「その手にさげたる相撲（スマヒ）をば、投げければ、振り抜きて、二三段ばかり投げられて」

ふり-は 舊葉【名】舊りたる葉。古くなりたる葉。ふるば。かれば。千五百番歌合「冴えくらし夜な夜な過ぐる霰かな柊のふり葉に音を殘して」「後國の方言」

ふり-はい 【名】からざを（殼竿）を云ふ。

「おとづれし山の木の葉はふりはてて時雨を殘す峰の松風」

ふり-はつ 舊果つ【動下二自】舊ること果つ。極まるまで舊る。ふるび終る。續後撰「ふりはつる我が身六十（ムソヂ）の神無月袖はいつよりしぐれそめけん」

ふり-はなす 振放す【動四他】ふりきる（振切る）に同じ。八笑人「卒八（ソツパチ）は、欄干へ抱きつき、足を振り放さんと、互に爭ひ、はてしなく」「じ。

ふり-はなつ 振放つ【動四他】前條に同じ。

ふり-はなる 振離る【動下二自】振り捨てて離る。源氏「うち解けぬ朝ぼらけに出でたまふ御樣のをかしきにも、なほ、ふり離れなん事は思し返さる」「に同じ。

ふり-はば 振幅【名】〔理〕しんぷく（振幅）

ふり-はふ 振延ふ【動下二他】他人のために、殊更に爲す。わざわざ訪ふ。源氏「たまさかにて、かやうに振りはへたまへることこそ」更科「涙さへふりはへつつぞ思ひやる嵐吹くらん冬の山里」

ふり-はふ 振延ふ【動下二他】ゆたかに振り動かす。ながながと延ばして振る。古今「春日野の若葉摘みにや白妙（シロタヘ）の袖振りはへて人の行くらん」

ふり-はへ 振延へ【副】わざわざ。ことさらに。さはへ。さはへて。ふりはへて。「古語」源氏「人にも、久しう音づれたまはざりけるをおぼしいでて、ふりはへ遣したりければ」同「御とぶらひに、ふりはへ物したまふ人もあり」

ふ-りふ 府立【名】ふりつ（府立）を見よ

ふりふ-ふく 降亂く【動四自】吹きぶりになる。雨降り、風吹く。「古語」蜻蛉「雨風、いみじうふりふぶく」

ふりふ-もんじ 不立文字【名】〔佛〕釋迦の教の本旨は、以心傳心によりて、衆生（シュジャウ）を導き、轉迷開悟せしむるにありて、間接に文字言句によりてするは、その眞面目にあらずといふ、禪宗の教。

不立文字の宗（シュ）【句】〔佛〕ぜんしゅう（禪宗）に同じ。

ふりふり 【貌】舞ひつつ落ち來るさま。ふらふら。ひらひら。今昔「足を離れて、網の上に踊りければ、ふりふりと落つるほどに」

ぶり-ぶり 振振【名】一年のはじめに、小供の玩ぶおもちや。木にて造りたる槌のごとき物に、種種彩色したる繪をかき、紐をつけて打ち振り、又は室内の飾物ともなせるもの。二ぶりぶりぎっちゃう（振振毬杖）に同じ。三圓物（エンブツ）に類せる、一種の的。徑三四寸にて、一筋の綱を兩の乳（チ）より通して串に下ぐ。

（一）りぶりぶ

ぶり-ぶり 【貌】一彈力性ある物に、手を觸れたる時の感じ。ぶりぶり。二ぶるぶるに同じ。日本振袖始「あら怖（コワ）や、……ぶりぶり慄ひ出でてるを」

ぶり-ぶり 【貌】一前條一に同じ。二憤を

ふり-ぼし 振干【名】〔植〕ぜんまい（薇）の異名。

ふり-まがふ 降紛ふ【動四自】入り亂れて降る。まぎり降りて、分ち難きさまにあり。續千載「神無月時雨と共に降りまがふ木の葉も冬のはじめなりけり」

ふり-まがふ 降紛ふ【動下二他】降りて紛れさす。降りて見分け難くなす。新千載「鈴の音はよそにも著（キ）しはし鷹の白斑（シラフ）に雪は降り紛へども」

ふり-まく 振撒く【動四他】一振り掛けて撒く。撒き掛く。二周圍の人人に、愛想よく分ち呈す。「傘をふりまく」「世辭をふりまく」「愛嬌をふりまく」

ふり-まぐは 振馬鍬【名】馬鍬の一種。小形にして、短き齒杆、前後に錯出し、使用するには、横柄を握りて、左右に振り廻し、塊を碎きつつ、土を掻き均すもの。

ふり-まさる 降增る【動四自】降ること增し加はる。いよいよ多く降る。ますます降る。後拾遺「見しよりも荒れぞしにける石上（イソノカミ）秋は時雨の降りまさりつつ」

ふり-まさる 舊增る【動四自】いよいよ老い行く。ますます舊り行く。新千載「徒に我が身の影ぞふりまさる仕へし秋を月に戀ふとて」

ふり-まず-ろっく （英 Plymouth rock）【名】【動】鷄の一品種。米國產にて、體肥大・強健、單冠にして、耳朶赤く、尾羽長く、脛は黄色にして、後部に羽毛を有し、羽毛は横斑を普通とし、近年、白色もしくは黑色

「こってる」 中央。中心。三街道の驛と驛との道程の等分に分るる所。膝栗毛「此所（ココ）は、江戸へも六十里、京都へも六十里にて、ふり分の所なれば、中の町（マチ）といへる由」

ふりわけ-がみ 振分髪【名】古、兒童の、髪の末を、肩まで、ほどの長さに切り、頂より左右に振り分けて垂らしたるもの。かみふり。ふりわけ。はなちものかみ。はなちがみ。はなりのかみ。はなり。うなゐはなり。伊勢「くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずして誰か撫づべき」

ふりわけ-すがた 振分姿【名】振分髪の姿。義經千本櫻「あなたへ引けば、こなたへ

ふる 振る【動四他】一あなた・こなたへ動かす。ゆらゆらと動かす。ふるふ。二持ちたる手先をあなた・こなたへ動かしながら、放してころがす。「采（サイ）を振る」

ふる 觸る【動四自】次條一に同じ。「古語」萬葉「落ちたぎち流るる水の岩にふりよどめるよどに月のかげ見ゆ」

ふる 觸る【動下二自】『ふる（振）と、語源同じ。即ち搖れ動きてさはる義』一さはる。あたる。接觸す。二樣子を感ず。出あふ。關係す。「目に觸る」「物にふれ、事につけ」三その作用を受けて、害を蒙る。「雷に觸れて死ぬ」「怒に觸る」「法律に觸る」四正しき方向をはづる。「すこし東の方にふる」五「氣が觸る」の略。六英 Touch』言ひ及ぶ。論及す。

ふる 觸る【動下二他】廣く告げ知らす。

ふる-いけ 古池【名】年月を經て古くなりたる池。ふるびたる池。筑波問答「過ぎにし春の頃かとよ、ふる池の亂草をはらひて、蛙樂を愛する事ありき」

ふるいち 古市【名】〔地〕一伊勢國宇治山田市にある町。古より妓樓多し。驛旅漫錄「古市も、今は伊勢音頭大に衰へて、大阪歌或は江戸のめりやす、潮來（イタコ）節に似て非なるものを唄ふ」二大和國添上（カフツケ）郡東市村の大字。奈良市の南郊。古の八島鄕の首邑。元和五年より明治四年まで、伊勢國津藩主藤堂氏の陣屋の在りし處。三河內國南河內郡にある町。河南鐵道の停車

ふる-いぬ 古犬【名】年老いたる犬。一茶「古犬や蚯蚓(ミミズ)の唄に感じがほ」

ふる-いと 古絲【名】ふるびたる絲。用ひふるしたる絲。奥州安達原「露命を繋ぐ古絲に、皮も破れし三味線の」

ふる-いへ 古家【名】建築後久しく經たる家。ふるや。俳諧新選(宋屋「古家に昔主づかん飛螢(ホタル)かな」和合人「天井で鮒をかくから、うはばみに違(ガ)へねえ。隨分古家にはあることだよ」

ふるう 古宇【名】〔地〕後志(シリベシ)國十七郡の一。後志支廳の所管たり。

ふる-うた 古歌【名】古きうた。昔の人の詠みたる歌。古歌(カ)。〔古語〕土佐「ふる歌に、數は足らでぞ歸るべらなるといふことを思ひいでて」枕「ふる歌を、ゆるらかにうち詠み出だして」

ふる-え 古江【名】古き江。年經て荒廢せる江。〔古語〕新六「水錆(ミサビ)ゐる古江の蛙草蔭に人もすさめぬ音こそなかるれ」

ふる-え 古枝【名】古きえだ。前年の枝。〔古語〕勅撰集「秋萩のふるえに咲ける色見ればもとの心は忘れざりけり」

ふるえ-ぐさ 古枝草【名】〔植〕はぎ(萩)の異稱。〔古語〕藏玉集「古枝草。萩。宮城野や露も色ある古枝草こしの秋も花は咲きけり」

ふる-おきな 古翁【名】古きおきな。世の中に經驗のある翁。〔古語〕和名「耆宿、日本私記云、布流於岐奈」

ふる-かがみ 古鏡【名】古くよりある鏡。

ふり-むく 振向く【動下二他】㊀ふりむかしむ。㊁他の方面に振りかへて、役に立たしむ。方面を變へて用ふ。

ぷりむりん (英 Primulin)【名】黄色の染料。染後顯色法を施すときは、赤色又は黄金色などを得、また木綿に染色したる後に、稀薄なる漂白粉溶液に浸せば、橙黄色となる。

ふ-りん 不倫【名】人倫にはづれたること。倫理に違へること。道ならぬこと。

ふりんぐ-ましいん (英 Fulling machine)【名】毛織物の縮絨(シュクジュウ)の工程に用ふる機械の一。一組又は二組以上の木製のロ

へる。みむく。

ふり-むく 振向く【動下二他】㊀ふりむかしむ。㊁他の方面に振りかへて、役に立たしむ。方面を變へて用ふ。

ぷりむりん (英 Primulin)【名】黄色の染料。染後顯色法を施すときは、赤色又は黄金色などを得、また木綿に染色したる後に、稀薄なる漂白粉溶液に浸せば、橙黄色となる。

ふ-りん 不倫【名】人倫にはづれたること。倫理に違へること。道ならぬこと。

ふりんぐ-ましいん (英 Fulling machine)【名】毛織物の縮絨(シュクジュウ)の工程に用ふる機械の一。一組又は二織以上の木製のロ

がしは。芭蕉「霞聞くやこの身はもとの古袖」

ふる-がたな 古刀【名】古くよりある刀。用ひ古したる刀。古刀(コトウ)。「同じ。

ぶるかぬす (羅 Vulcanus)【名】ばるかんに同じ。

ふる-かね 古金・古鐵【名】廢物となりたる金物又その破片。(賣買する時にいふ)

ふるかね-かひ 古金買・古鐵買【名】古鐵を買ひ集むる職業の人。聖遊廓「古金買の日ぎきにも、太夫買とは見えたりし」

ふるかね-しやうにん 古金商人・古鐵商人【名】古鐵を賣買する商人。

ふるかね-や 古金屋・古鐵屋【名】古鐵を商ふ家、又その人。

ふる-かは 古川・古河【名】古き川。新六「ふる川や崩るる岸の下早にいとどわたみの深き淵かな」

古川に水絶えず【句】由來久しき者は、衰へたる後にても、なほ全くは滅びざる譬。〔諺語〕鳳來六六部集(里のをだ卷)「昔の風儀殘り、古川に水絶えず、たとひ菩薩の影向(ヤウガウ)あり、天人が天降(アモ)つても、負けぬが、この地の女郎なり」

ふるかは 古川【名】〔地〕㊀飛驒國吉城(キッシキ)郡にある町。荒城(アラ)川と宮川との會流點。越中街道に當り、高山市の西北三里半。塒島城址あり。㊁陸前國志田郡にある町。陸羽街道に沿ふ。古川城址あり。商業盛なり。

ふる-かは 布留川・古川【名】〔地〕大和國布留山の北を流れ、丹波市町を過ぎて、

芳三郎。江戸の人。五世鶴屋南北の門に入り、勝諺藏といひ、後二世、河竹新七の名を襲ひ、天保の末年、立作者(タテサク)となる。最も世話物を巧にす。明治二十六年歿す。年七十八。

ふる-かふ 古甲【名】ふるか(古甲)に同じ。

ふる-かぶ 古株・故株【名】多年古め來れる安全なる位置。故參の地位。ふるがほ。

ふる-がふし 古盒子【名】ふるき盒子。用ひふるしたる盒子。芭蕉「これやこの煤に染らぬ古盒子」

ふる-がほ 古顏・故顏【名】その社會に久しく居る人。ふるかぶなる人。故參。

ふる-かんたちべ 古上達部【名】老い朽ちたる上達部。世に古されたる上達部。字治「左京のかみなりける古上達部」

ふる-から 古幹・舊幹【名】古き莖。前年のから。萬葉「吾がやどの穗蓼古幹(フルガラ)摘み生ふし實に成るまでに君をし待たむ」

ふるから-をの 古枯小野【名】かれの(枯野)に同じかるべしといふ。〔古語〕古今「石(イハ)の上(カミ)ふるからをののもとがしは元の心は忘られなくに」

ぶるがりや 勃牙利(英 Bulgaria 又 Bigarya)【名】〔地〕バルカン半島中の一王國。首府をソフィヤ(Sofia)といふ。

ぶるがりや-きん 勃牙利菌(羅 Bacillus bulgaricus)【名】ブルガリヤ地方にて食用とするヨオグルト中に發見せられたる乳酸菌。長さ六乃至七μ、幅〇、五乃至一μ。往往連鎖狀に連なる桿狀菌なり。

ふる-ぎ 故衣【名】「る市場。

ふるぎ-いち 古著市【名】古著を賣買すること。古著を賣買する市場。

ふるぎ-かひ 古著買【名】古著を買ふこと、又、古著を買ひ集むるを業とする人。本朝二十不孝「馬士(マカタ)古著買、味噌漉賣をば招き」

ふる-きず 古疵・古傷・古創【名】㊀久しく經たる疵あと。㊁嘗て感染したる瘡毒。㊂嘗て犯したる罪惡。

ふる-ぎつね 古狐【名】㊀年老いたる狐。老狐。㊁年功を積みたる遊女。㊂老猾にして、他を瞞著するに巧みなる人。ふるだぬき。〔俚語〕

ふる-ぎぬ 古衣【名】ふるぎ(古著)に同じ。〔古語〕落葉「見供のふるぎぬやある、著せたまへ」

ふる-ぎみ 古君【名】年老いたる傾城。俳諧古選附錄(柳志)「古君の昆布結びけり年の暮」「その人。ふるてや。

ふるぎ-や 古著屋【名】古著を商ふ家、又

ふる-ぎれ 古切【名】古くなりたるきれ。用ひふるしたるきれ。

ふるく 古く舊く【副】古き昔より。久しき以前より。〔古語〕拾遺「筑紫へまかりける時に、かま山のもとに宿りて侍りけるに、道づらに侍りける木に、ふるく書きつけて侍りける」

ふる-くさ 古草【名】去年の草。かれくさ。〔古語〕萬代「龜山の上の古くさ燒くならしおほの方に煙立つ見ゆ」

ふる-くさし 古臭し【形Ⅰ】ふるびて興

よからぬこと。不善。㊁ふりやうじ(不良兒)の略。

ふり-やう 負量【名】〔數〕『英 Negative quantity』減ぜらるべき數量、即ち負號を帶びたる量。(正量に對して)「じ。

ふり-やう 浮梁【名】うきはし(浮橋)に同

ふり-やうけん 不量見【名】ふれうけん(不料簡)に同じ。

ふり-やう-じ 不良兒【名】不良性の兒童。不良少年又は不良少女。「領使」を見よ。

ふり-やう-し 部領使【名】ことりづかひ(部領使)を見よ。

ふり-やう-じん 不良人【名】よからぬ人。不良性の人。わるもの。

ふり-やう-せい 不良性【名】竊盜・誘拐な

降ること止む。降り終る。

ふり-ゆく 舊行く【動四自】次第に年月を經(フ)。古びて行く。老い行く。續千載「我が身世にふりゆく年を重ねきて幾春聞きつらぐひすの聲」

ふりよ 俘虜【名】㊀とりこ。捕虜。㊁〔兵〕戰鬪員又は交戰國の元首・國務大臣、軍國重要の職務を執る者、及び商船の乘員などの、敵の權内に入りたるもの。

ふりよ 不慮【名】思ひがけざること。思ひまうけざること。不意。字治「かくなるべしといふ人のならで、不慮にこと人なりたるをば」曾我「彼の童を女と見なし、何者か候はんと存じて、不慮に囚はれて

ふりよく 不力・無力【名】財力の無きこと。生活に事缺きたること。貧乏。無力(ムリョク)。むりき。貧力(ヒンリキ)。狂言「簑かづき」「身代不力しをれば、女房にさへ見捨てらるる」正章千句「憂所には人氣(ヒトケ)稀なるこそいふ句に主殿(トノモ)の不力せられし折からに」

ぶ-りよく 武力【名】㊀武勇なる力。㊁軍隊の力。兵力。

ふりよ-しうよう-じよ 俘虜收容所【名】陸軍大臣の監督の下に、陸軍の管轄に屬する俘虜の收容、及び取締上の事項を掌る所。職員に所長・所員・下士判任官等あり、所在地又は最寄の衞戍司令官の管理に屬す。

味無し。珍しからず。ふるめかし。陳腐なり。ふるし。

ふるぐつ 古靴・古沓 【名】ふるき靴。用ひふるしたる靴。芭蕉「古沓や花の旅出の捨ひばき」

ふるくひ 古杙・古杭 【名】古くなりたる杙。以前に立てたる杙。「種。

ふるけんさき 古剣先 【名】剣先船の一

ふるごしよ 古御所 【名】古くなりたる御所。建築後、多くの年を経たる御所。俳諧新選（赤羽）「古御所の軒掃き下す落花かな」

ふるごたち 古御達 【名】年老いたるごたち。「古語」源氏「使ふ人、ふるごたちなど」

ふるごてん 古御殿 【名】ふるき御殿。建築後、多くの年を経たる御殿。俳諧新選員錦「紅梅や町家に移く古御殿」

ふるごと 古事・故事 【名】昔ありし事がら。昔ばなし。故事（コジ）。源氏「あはれなるふることども、唐（カラ）のも、日本（ヤマト）のも、書きけがしつつ」

ふるごと 古琴 【名】ふるき琴。用ひふるしたる琴。源氏「商人（アキビト）の中にてだにこそ、ふる琴聞きはやす人は侍りけれ」

ふるごと 古言 【名】いにしへの言葉。ふるきいひつたへ。「古語」古今「神無月しぐれふりおける楢の葉の名に負ふ宮のふるごとぞこれ」

ふるごめ 古米 【名】古くなりたる米。前年に收穫したる米。陳米（チンマイ）。古米（コマイ）。

ふるごもち 古子持 【名】老女の、子持なるもの。「古語」榮花「ふるごもちなどは、髪のすそ細う、色あをびれなどしたればこそ、心ぐるしけれ」

ふるごよみ 古暦 【名】ふるき暦。過ぎ去りたる年の暦。若鳳翁「古暦の引裂紙にてつい結び捨て」「し。

ふるごろも 古衣 【名】ふるぎ（古著）に同

ふるごろも 古衣 【枕】古衣は、洗ひ張りなどして擣つものなるより、うつ（打つ）及び又打（ウチ）の約と同音なる地名まつち（眞乳）にかけていふ。萬葉「ふるごろもうつてし人は秋風の立ちくる時に物思（モ）ふものぞ」同「あまざかる鄙邊（ヒナベ）にまかる古衣まつちの山ゆ歸りこぬかも」

ふるごゑ 古聲 【名】前にも、度度聞きたる聲。昔のままの聲。萬葉「さつき待つ山ほととぎすうちはぶき今も鳴かなむ去年の古ごゑ」玉「氷解く春の山風吹きぬらし岩根をとむる瀧の古ごゑ」

ふるざいけんさき 古在劍先 【名】劍先船の一種。

ふるざうし 古草子 【名】むかしの書物。大鏡「ふるざうしにあるを見れば、程經たる心地しはべるに」

ふるざけ 古酒 【名】こしゅ（古酒）に同じ。犬筑波「天の原ふる酒飲めと責められて（いふ句に）大盃を好む山伏」

ふるさと 古里・故郷 【名】㊀古、物事のありたりし土地。由緒ある土地。舊跡。「古語」萬葉「君により言（コト）のしげきを古郷の飛鳥の里に御廐（ミマヤ）に行く」同「古郷の飛鳥はあれど青丹（ニヨ）よし奈良の飛鳥を見らくしよしも」㊁我が生れ、又は嘗て住みたる土地。郷里。郷土。家山。萬葉「燕來る時になりぬと雁がねはふるさと思（モ）ひつつ雲がくれ鳴く」古今「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香（カ）ににほひける」

ふるさとびと 古里人・故郷人 【名】わが故郷に住まへる人。源氏「珍しとふるさと人も待ちぞ見ん花の錦を著て歸る君」

ふるざれいろ 古晒色 【名】古くなりて褪めたる色。ふるぼけいろ。曾我「女の著たりつる古晒色、次第に薄くなりて」

ふるし 古し・故し・舊し 【形ク】㊀多く年經てあり。年久し。昔なり。萬葉「古の人にわれあれやささ波のふるき都を見れば悲しき」枕「ふるき進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり」㊁ふるびてあり。新しからず。珍しからず。陳腐なり。ふるくさし。ふるめかし。一代女「我我は、何者と見えますといふ。人間と見ゆると申す。それは古い、商賣はといふ。」㊂年老いたり。老實なり。老巧なり。源氏「ふるき女ばらなどは」堀鶯「若き人なれども、檢非違使（ケンビヰシ）の別當、白き物附くる事やあるなど、ふるき人うちさざめきけるとかや」

ふるい 古い 【形】ふるし（古し）㊁を云ふ。〔甲斐國の方言〕

ふるしき 風呂敷 【名】『ろの音の、直上なるふの母韻に化せられて、るとなりたるもの』ふろしき（風呂敷）㊁の轉訛。

ふるしやん・せい ブルシャン青 【名】〔化〕『英Prussian blue』黃色血鹵の溶液に、硫酸第一鐵及び漂白粉の溶液を加へて得る、青色の顏料。べるりん青。べれんす。

ふるじあ (英Bourgeois) 【名】ブルジョアジイに屬する人人。（ぶろれてえるに對して）

ふるじよあじい (佛Bourgeoisie) 【名】『もと、紳士と農民との間に位する階級の義。佛蘭西革命以前は、第一階級なる王侯の下に、第二階級の僧侶・貴族、第三階級の平民ありしが、ネッケエル(J. Necker)宰相となりて、僧侶・貴族・平民の三部より成る三民會を召集するに及び、平民の勢力漸次增大して、その間より有產者續出し、この語の意義も、亦、漸次變化するに至りしなり』勞働者・貧民などの上に立ち、多少の財產を有して、餘裕ある生活をなす階級。有產階級。中產階級。ぶる。（ぶろれたりやに對して）

ふるしようもん 古證文 【名】古き證文。古くなりたる證券。故券。古證文の出後（クダシオ）【句】事後になりて、間にあはず。既に時機を失へり。「し。〔諺語〕

ふるじろ 古城 【名】こじやう（古城）に同

ふるす 古巢 【名】㊀ふるき巢。去年宿りたる巢。風雅「かたがたに鳴きて別れしむら鳥の古巢にだにも歸りやはする」㊁もと、身を置きたりし處。芭蕉「古巢だあはれなるべき隣かな」

ふるす 舊す 【動四他】㊀古くなす。珍しからぬやうになす。古今「去年（コゾ）の夏聞きふるしてしほととぎすそれかあらぬか聲の變らぬ」㊁うとみて捨つ。忘る。「古語」古今「秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ」同「人ふるす里をいとひて來（コ）しかども奈良の都もうき名なりけり」

ふるすらう 古受領 【名】ふるき受領。もとの國守。「古語」源氏「都に歸りて、ふるずらうの沈めるたぐひにて」「同じ。

ふるせざ 古瀬戸 【名】こせど（古瀬戸）に同じ。

ふるた 古田 【名】古くなりたる田。古びたる田。相模集「年多くかへし來ぬれど荒れぬるはわが中山のふる田なりけり」

ふるだう 古堂・舊堂 【名】ふるき堂。古びたる堂。盛衰記「一間・四面に造りたる舊堂」

ふるだうぐ 古道具 【名】古き道具。古びたる調度。ふるて。古物（コブツ）。

ふるだうぐや 古道具屋 【名】古道具を商ふ家、又その人。古物商（コブツシヤウ）。

ふるたおりべのしやう 古田織部正 【名】〔人〕次條に同じ。

ふるたしげなり 古田重然 【名】〔人〕織部流茶道の祖。重定の子。初字は左助。印齋と號す。千（セン）宗易の弟子。七哲の一人。初、中川秀成に隷し、後、豐臣秀吉に仕へ、又、石田三成に通じ、關ヶ原の役、徳川家康に屬し、功によりて、一萬石を領し、累加して五萬石に至り、又、天下茶道の模範に任ぜられしが、大阪夏の陣に西軍に通じ、元和元年死を賜はる。年七十三。（實然、又、重勝・重能・重就に作る）

ふるだたみ 古疊【名】古き疊。ふるびたる疊。太祇「元日の居心や世に古疊」

ふるだぬき 古狸【名】㊀年老いたるたぬき。俳諧新選(其丸)「ふる狸工夫して見ん花火かな」㊁ふるぎつね(古狐)㊂に同じ。「俚語」和合人「とんだ茶釜をたぎらせて、斧をもてなす古狸あれば、鐵漿(おはぐろ)を落して、楊枝店、牙尖らして、人を喰ふ狼あり」

ふるたまのーかみ 振魂神【名】大綿津見(おほわだつみ)の神の御子。

ふるーち 古血【名】㊀くろち(黒血)に同じ。㊁日數經て、色の變りたる血。「に同じ。

ふるーちん 振ちん【名】ふりちん(振ちん)に同じ。

ふるーちやう 古帳【名】古き帳簿。日本永代藏「古帳を枕にして、横に寢て」

ふるーづか 古塚【名】古き塚。古の人を埋めたる墓。古墳。

ふるーづきん 古頭巾【名】古き頭巾。ふるびたる頭巾。俳諧新選(春來)「古頭巾烏帽子に捻ぢん花の春」

ふるっせる (佛 Brussels)【名】〔地〕ぶらっせるに同じ。

ふるーつづら 古葛籠【名】古きつづら。ふるびたるつづら。無村「出がはりや春さめざめと古つづら」

ふるつば 古鍔・古鐔【名】古き鍔。用ひふるしたる鍔。一代男「七所の大脇差、…古鍔小く、柄(つか)長く」

ふるつはもの 古兵【名】年老いたる武士。老練なるはつもの。古武者(ふるむしや)。陳(ぢん)武者。盛衰記「熊谷は古兵なりければ」

ふるーっぽける (古悦ける)の訛。

ふるーづま 古妻【名】以前より連れ添ひ、又は、嘗て連れ添ひしことある妻。ふるめ。風俗文選「遍照が簑を絞りしも、ふるづまをなほ忘れざるなり」

ふるて 古手【名】㊀にぎて(和幣)を見よ』ふるぎ(古著)に同じ。㊂ふるだうぐ。ふるもの。㊃永らく、或職業に從事し來れる人。風(ふう)。和合人「酒や肴の中に唐がらしなどと、古手な趣向か。なんにしろ、油斷がならねえ」

ふるてーうり 古手賣【名】古手(㊀㊁)を賣ること、又それを業とする人。崇徳院之道「十五日立つや陸月(みなづき)の古手賣」

ふるてーかひ 古手買【名】古手(㊀㊁)を買ふこと、又それを業とする人。冥途飛脚「古手買節季候(せつきこ)に化けて」「に同じ。

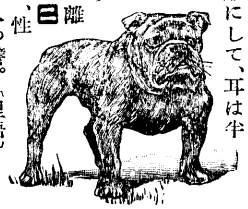
ふるてや 古手屋【名】ふるぎや(古著屋)

ふるーでら 古寺【名】古き寺。年久しく經て、荒れたる寺。古寺(こじ)。玉葉「年を經て苔にうもるる古寺の軒に秋ある蔦の色かな」

ぶるてりや (英 Bull-terrier)【名】〔動〕犬の一品種。痩形にして、耳は直立し、毛短く、顏細く、鼻尖る。英國にては、鼠を捕へしめて、娯樂とす。

ふるとし 舊年【名】㊀過ぎ去りし年。きよねん。昨年。舊年(きうねん)。「古語」輔親集「ふるとしに咲きはじめにし梅が香も昨になりてぞほひ增しける」㊁來るべき新年に對する、暮れゆく年、又、立たん春に對する年内。「古語」古今「ふるとしに春立ちける日詠める」

ぶるどっぐ (英 Bulldog)【名】㊀〔動〕犬の一品種。小形にして、耳は半ば直立し、四肢短けれど、筋肉頗る逞しく、容貌醜く、闘犬にして、一旦怒り咬めば、容易に離ることなし。㊁容貌醜惡にして、性質荒荒しげなる人の譬。〔俚語〕



(ぶるどっぐ)(㊀)

ふるとね・がは 古利根川【名】〔地〕武藏國にある川。北埼玉(きたさきたま)郡の東北方、原道村大字佐波より起り、東南流して、栗橋の西南一里餘の所にて、菖蒲(あやめ)用水等を併せ、南埼玉・北葛飾(きたかつしか)兩郡の境界に沿ひて、幸手(さつて)・杉戸・粕壁・吉川等を過ぎて、東京府に入り、綾瀬川を合はせ、下流は中川となりて、東京灣に入る。もと大利根の分流。上流は埋まりて、下流は隅田川・江戸川等と相通じ、運輸の便に富む。長さ二十里。

ふるとね 古利根【名】ふるとね・がはに同じ。

ふるどの-みや 古殿宮【名】伊勢太神宮の、二十年ごとに、新に神殿を造り替へて遷座し奉りたる時、古殿を暫く存置して、衆人の參拜を許しもの。勝寶感神聖武太神(しやうほうかんじんしやうむおほかみ)……古との宮・高の宮・土の宮、その外、末社」

ふるーとり 佳【名】漢字の旁(つくり)の一。「雉」・「唯」・「雛」・「雀」・「隻」などの字の有する「隹」の字。

ふるな 富樓那(梵 Purna)【名】〔人〕釋迦の十大弟子の内にて、說法第一に推されし人。生地・父母・種姓等、詳かならず。盛衰記「末世の富樓那、辯士の舍利弗(しやりほつ)と覺えたり」

ふるなーそんじや 富樓那尊者 富樓那尊者【名】〔人〕ふるな(富樓那)の尊稱。增鏡「今の世には、富樓那尊者のごとくいはるる者なれば」

ふるーなのり 古名告【名】古き名告。古く知られたる名告。盛衰記「人づてはいなや何せんほととぎすそのふるなのり去年(こぞ)も聞きてき」

ふるーにふだう 古入道【名】年寄りたる入道。老いたる入道。盛衰記「出家・遁世の古人道に至るまで、馳せ參りければ」

ふるによらば 古女房【名】年老いたる女房。年久しく仕へて、經驗を積める女房。「古語」榮花「ふるによらばうの、故宮(こぐう)の御時よりさぶらふ召使」

ふるーぬのこ 古布子【名】古き布子。ふるびたる布子。俳諧新選「瓜流「卯の花の雪や朝氣の古布子」

ふるーね 古根【名】古き根。宿根。拾遺「君訪はで幾代經ぬらん色變へぬ竹の古根の生ひかはるまで」

ふるーねこ 古猫【名】㊀年老いたる猫。和合人「そうりや、古猫のわざだは」㊁年功を積みたる蟇妓。〔俚語〕

ふるのーみたまのーじんじや 布留御魂神社【名】次條に同じ。延喜式「大和國山邊郡石上坐布留御魂神社」

ふるのーやしろ 布留社【名】いそのかみじんぐう(石上神宮)に同じ。齋宮女御集「皆人のそむきはてにし世の中にふるの社の身をいかにせん」

ふるーば 古葉【名】古き葉。前年の葉。かれば。曉野(長虹)「はらはらと清水に松の古葉かな」

ふるばう-ゑことば 不留房繪詞【名】〔美〕はらひどんゑまき(祓頓等畫卷)に同じ。

ふるばくち 古博打【名】老巧なる博奕打。字通「ふるばくちの子」

ふるばくちうち 古博打打【名】前條に同じ。狂言「茶壺」「日本一の大のふるばくちうちの子」

ふるばしら 古柱【名】古きはしら。續七部集「暮の月横に貫ひくる古ばしら」

ふるはた 古畑・古畠【名】年經て荒れたる畑。ふるはたけ。新古今「古畑のそばのたつきにぬる鳩の友呼ぶ聲のすごき夕ぐれ」

ふるはたけ 古畑・古畠【名】前條に同じ。

ふるはらまき 古腹卷【名】古き腹卷。ふるびたる腹卷。講曲「鉢木」「横縫のちぎれたる古腹卷に、錆刀、鷹揚(ようやう)に横たへ」

ふるひ 震【名】㊀ふるふこと。ゆらゆらと動くこと。ふる〳〵。震動。動搖。㊁わななくこと。をののくこと。ふる〳〵。

戦慄。㊁振(ふり)の変ずること、又、癘。ふるひやまひ。

ふるひ 篩【名】『ふるふ(振ふ)の居名詞』圓形又は方形等の框の底に、金属絹・竹・馬尾などの網を張り、物を入れて振へば、細かなる物、網目より漏れ落ちて、自然に除き去らるる器。網目の大なるを、特に、籾篩(もみふるひ)と呼ぶ。

ふるび 古【名】ふるびてあること、又そのもの。

ふるひ-あがる 震上る【動四自】畏れわななきて、縮みあがる。ふるへあがる。

ふるひ-おとす 振落す【動四他】振ひて落す。振り動かして落す。ふりおとす。

ふるひ-おとす 篩落す【動四他】㊀篩にて振り動かして落す。篩に掛けて落す。㊁数多くある人又は物の中より、良からぬを取り除く。淘汰す。ふりおとす。

ふるひ-ぎぬ 篩絹【名】篩の底に張る生絹(すずし)。

ふるひ-くに 古比丘尼【名】年老いたる比丘尼。きのふはふの物語ふる比丘尼の商の抜けたるばかりにて」

ふるひ-ごゑ 震聲【名】わななきながら発する聲。わななきごゑ。ふるへごゑ。

ふるひ-しば 振芝・篩芝【名】土を振ひ落して、根をばらばらになしたる芝、堤防などの斜面を保護するに用ふ。

ふるひ-じやり 篩砂利【名】篩にかけてよなげたる砂利。

ふるひ-たつ 奮起つ【動四自】精神をきかんにす。ふりおこす。奮起(ふんき)す。

ふるひ-つく 顫附く【動四自】㊀寒さのためにわななく。㊁愛情又は憤怒の情制しがたくして、縋りつき、又はむしやぶりつく。浮世風呂「鐙甲の櫛……、山の恰好から、何から、今風で、もう、もう、ふるひつく様だった」㊂わらはやみになる。瘧(わらは)を患ふ。

ふるびと 古人・舊人【名】㊀昔の人。「古語」萬葉「妹等(いもら)がりいまきの峯にしみ立てるつままつの木は古人見けむ」㊁老いたる人。ふるもの。老人。「古語」源氏「ふる人は、涙とどめあへず」㊂久しき以前より仕へ、又は知りあへる人。昔なじみ。故舊。「古語」古今「かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞ濡れぬる」紫式部日記「少将の御もとといふは、信濃守祐光が妹婿のふる人なり」

ふるひと-おほえ-の-わうじ 古人大兄皇子【名】「人」次條に同じ。

ふるひと-の-わうじ 古人皇子【名】「人」舒明天皇の皇子。天智天皇の庶兄。母は夫人法提郎媛(ホテヒノイラツメ)。又の御名は、古人大兄皇子。皇極天皇の時、蘇我入鹿誅せられ、天皇位を輕(カル)皇子に譲りたまはんとするや、輕皇子固辭して受けず、この皇子に譲りしを、避けて、吉野に入り、出家せしが、大化元年叛を謀りて、誅に伏す。世に吉野太子と稱す。

ふるびな 古雛【名】古き雛人形。昔よりある雛人形。蕪村「古雛や昔の人の袖几帳」

ふるひ-やまひ 震病【名】おこり(瘧)に同じ。字鏡集「冷、フルヒヤマヒ」

ふるひ-よす 振寄す【動下二他】容器を振り動かして、その中の物の寄り集まるやうにす。其角「白魚を振ひ寄せたる四手(よつで)かな」

ふるひら 古平【名】「地」㊀後志(しりべし)國十七郡の一。後志支廳の所管たり。㊁後志國古平郡にある町。岩内(いはない)の北にある小都會。

ふるひ-わななく 震戦く【動四自】震ひてわななとす。ふるひをののく。戦慄す。「掉戦、フルヒワナナク」

ふるひをけ 古火桶【名】ふるき火桶。ふるびたる火桶。蕪村「割れぬべき年もありしを古火桶」

ふるひ-をののく 震戦く【動四自】ふるひわななく(震戦く)に同じ。紀「手脚戦慄、テアシフルヒヲノノキ」

ふるふ 振ふ・奮ふ【動四自】㊀盛んになる。興る。おこり立つ。勢づく。㊁目ざましき擧動又は物いひをなす。「ふるふてる」『結末、頗る振へり』

ふるふ 震ふ・顫ふ【動四自】㊀ゆれ動く。ゆらめく。ふるふ。ゆる。震動す。㊁わななく。をののく。戦慄す。身ぶるひす。ふるへる。「慄ふ」紫式部日記「三人、ふるふふるふ、足もそらにて参りたれば」字鏡「ふるふ聲をささげて讀みあぐ」㊂瘧(わらは)發す。ふるひつく。ふるへる。

ふるふ 振ふ・奮ふ【動四他】㊀ゆり動かす。ゆらめかす。ふるふ。ゆる。㊁動かし用ふ。「揮ふ」「筆をふるふ」「刀をふるふ」㊂さかんに發揮す。逞しくす。「暴威を振ふ」「精神を振ふ」㊃残らず差し出す。底をはたく。紫花「我が寶ふるひてん」一代女「内證ふるうて、百貫目の身代の中より、數銀十貫目、入用銀十五貫目」

ふるふ 篩ふ【動四他】『前條の語の轉義』㊀篩をゆり動かして、物をえり分く。價値の有ると無きとをえり分く。

ふるふ 古ぶ・舊ぶ【動上二自】ふるくなる。ふるめく。ふる。源氏「心はせなどのふるびたる方こそあれ」

ふるふた 古蓋・古盌【名】古きふた。ふるびたるふた。落窪「昔の、ふるぶたの鏡の箱はありや」「る筆。

ふるふで 古筆・故筆【名】用ひふるしたる筆。

ふるふる 【貌】㊀震ひわななくさま。㊁身のわななくばかり嫌悪するさま。

ふるふるし 古古し・舊舊し【形二】極めてふるし。枕「いとさだ過ぎ、ふるふるしき人の、髪なども、……散りぼひて」

ふるふる-もの ぶるぶる者【名】ぶるぶると震ひて、こはがること。戦慄すること。春花五大力「から御侍様に取拉かれましては、ぶるぶる者でござりまする」

ふるへ 震【名】ふるひ(震)㊀㊁に同じ。八笑人「胸の動悸が靜まりましたら、大きにふるへも止(とま)りました」

ふるへ 古家【名】ふるいへ(古家)の略。古家の里【句】ふるさと(古里)㊁に同じ。萬葉「吾が背子が古家(ふるへ)の里の明日香には千鳥鳴くなり君待ちかねて」

ふるへ-あがる 震上る【動四自】ふるひあがる(震上る)に同じ。和合人「息は絶えてなき故、張吉はふるへ上り」

ふるへ-ごゑ 震聲【名】ふるひごゑ(震聲)に同じ。和合人「油注(あぶらつぎ)の男、震聲にて、糞う、今に見ろ、狸汁にして喰って仕舞ふぞ」「同じ。

ふるへ-ふで 震筆【名】ふるひふで(震筆)に同じ。

ふるへる 震へる【動下一自】ふるふ(震ふ)㊀㊁に同じ。「俚語」

ふるべる 古べる・舊べる【動下一他】ふるびてあるやうに見えしむ。古くなすべくやうにす。櫻陰比事「新しきをふるべるためか」「六条」歌のふるほぐども」

ふるほぐ 古反故【名】ふるほご(古反故)に同じ。

ふるほご 古反故【名】ふるほぐ(古反故)「骨。古傘の骨。

ふるぼね 古骨【名】古くなりたる傘のふるぼね-かひ 古骨買【名】古骨を買ひ入ることと、又それを業とする商人。ふるかさかひ。「古本(ふるほん)。

ふるぼん 古本【名】讀みふるしたる本。

ふるぼんや 古本屋【名】古本を商ふ家、又その人。「じ。

ふるま 緬甸【名】「地」ばるま(緬甸)に同じ。

ふるまつ 古松【名】古き松。年月を經たる松。老松。夫木「われはかり友とぞ頼む小倉山同じ麓のみよのふる松」

ふるまひ 振舞【名】㊀おこなひ。しさま。擧動。行狀。㊁不思議なりし振舞なり」㊂飲食物を供してもてなすこと、又その飲食物。ちそう。饗應。俳諧古選附錄雲裡坊「五十年振舞喰うて暮れにけり」

ふるまひ-ざけ 振舞酒【名】ふるまふ酒。接待に飲ましむる酒。

ふるまひ-なす 振舞爲す【動四自】ふるまふ(振舞ふ)に同じ。源氏「いとやはらかにふるまひなしたまへるにほひなど」

ふるまひ-みづ 振舞水【名】夏季、往來の人に飲ましむるために、桶などに入れて、家の前に出しおく飲水。施行(せぎやう)みづ。接待みづ。萬載狂歌集「出しておく振舞水の心ざし暑き日なれば汲みてこそ飲め」

ふるまひ-れうり 振舞料理【名】ふるまふ料理。饗應に用ふる料理。甲陽軍鑑「振舞料理よき惡しきの詮索」

ふるまふ 振舞ふ【動四自】行ふ。はたらく。源氏「人よりは、心やすくなれなれしくふるまひたり」曾我「不思議の事を振舞ひたまふ神成かな」

ふるまふ 振舞ふ【動四他】もてなす。馳走す。饗應す。續膝栗毛「まづくとも、麥飯でもふるまって進ぜませうかのえ」

ふるみ 古身・古刀【名】昔鍛へ作りたる刀身。古刀(ことう)。(新身(あらみ)に對して)長町女腹切「堅い親仁(おやぢ)の輕口も、刀屋とてや、古身なり」

ふるみ 古み【名】ふるき狀態。風俗文選(俳諧發願文)「今、吾、俳諧の結緣は、狂言綺語のふるみに落し」

ふるみち 古道【名】古きみち。昔の道路。古道(こだう)。舊道。後拾遺「嵯峨の山みゆき絕えにし芹川の千代のふるみち跡はありけり」

ふるみや 古宮【名】㊀古き宮殿。建築後、多くの年月を經たる神社。犬筑波「御あかしの油や皆になりぬらん(といふ句に)鼠さへ今棲まぬ古宮」㊁老いたる親王。世にふるされたる宮。源氏「世にかずまへられたまはぬふる宮」

ふるみやこ 古都【名】古き都。もとの都。舊都。夫木「あともなき昔がたりのふる都殘る難波はうらさびにけり」

ふるむしや 古武者【名】ふるつはもの(古兵)に同じ。

ふるんける (獨 Furunkel)【名】(醫)ちやう(疔)に同じ。

ふるめ 古妻【名】ふるづま(古妻)に同じ。盛衰記「花の山高き梢と聞きしかど蟹が子かとよふるめ拾ふは」醒睡笑「わかめ得て古めを內に置くならば二妻狂(ふたなび)と人やいはまし」

ふるめ 古布【名】古き海藻。前條參照。

ふるめかし 古めかし【形二】ふるめきてあり。珍しからず。ふるくさし。源氏「ひなび、ふるめかしう」

ふるめき-ごころ 古めき心【名】古めきたる心。ふるめかしき心。源氏「かやうに世づきたまふことは、え心にくからぬことなりと、古めき心には思ひはべりしを」

ふるめき-びと 古人【名】古めきたる人。古風の人。源氏「世になきふるめき人にて」

ふるめく 古めく【動四自】古く見ゆ。珍しからず。ふるぶ。落窪「黒塗の箱の……ふるめきまどひて、ところどころ剝げたるを」源氏「瓶子取る人も、きたなげなならず、さる方にふるめきて、よしよししうもてなしたまへり」

ふるもの 古物【名】用ひふるしたる物。ふるて。古物(こぶつ)。

ふるもの 古者【名】ふるびと(古人)に同じ。源氏「夜の間(ま)のほど知らぬ命のたのむべきにも侍らぬを、さらば、ただかかるふるもの世に侍りけりとばかりしろしめされはべらなん」

ふるもの-あつかひ 古物扱【名】古物を取り扱ふこと。古くよりの物を取り出して、今更のやうに取り扱ふこと。源氏「何人を、又尋ね出でたまへるならん、むつかしきふるものあつかひかな」

ふるもの-がたり 古物語【名】今は昔となりたる物語。むかしばなし。源氏「おぼえなき御ふる物語聞きしより」

ふるもの-みせ 古物店【名】古物を商ふ家。古道具屋。芭蕉「琴箱や古物みせの背戸の菊」

ふるや 古屋【名】ふるいへ(古家)に同じ。風雅「あやめをば葺き添ふれども五月雨のふるやの軒は洩るにぞありける」

ふるやかた 古屋形・古館【名】古きやかた。蜻蛉「橘のかはたれ時や古やかた」

ふるや-せき 古谷石【名】紀伊國西牟婁(にしむろ)郡二川村古屋谷に產する、一種の石。珪質石灰岩にして、黑色を呈す。磨きて、床の置物とし、又盆栽の添石とす。

ふるやなぎ 古柳【名】多く年を經たる柳。老柳。新古今「みよしのの大川のべの古柳蔭こそ見えね春めきにけり」續猿蓑(歌仙)「近道を教へ力や古やなぎ」

ふるやま 布留山【名】[地]大和國山邊(やべ)郡丹波市町にある山。麓に石上(いそのかみ)神社あり。萬葉「いその上布留の山なる杉むらの思ひすぐべき君にあらなくに」

ふるゆかた 古浴衣【名】古き浴衣。著ふるしたる浴衣。浮世風呂「てんつるてんの古ゆかたも」

ふるゆき 古雪【名】古き雪。舊年より殘れる雪。拾遺「去年(こぞ)のふる雪の、遲く疾く消えける程を」

ふるよもぎ 古蓬【名】冬を經て、まだ若芽の生ぜぬ蓬。新古今「あら小田のこぞのふる跡古蓬今は春べとひこばえにけり」

ふるわん 古椀【名】古き椀。用ひ古したる椀。椀の古物。

ふるわん-かひ 古椀買【名】古椀を買ひ入るること、又それを業とする人。

ふるゐ 古井【名】ふるゐど(古井戸)に同じ。萬葉「我が戀は古井におろすつるべ繩の絕えぬと見えてくるぞ久しき」

ふるゐ 不類【名】『晉書の元帝紀に「抗三明威以幡二不類一」とあり』不善。不仁。

ふるゐ 負類【名】ふさい(負債)に同じ。古寫本庭訓往來「負類證本」(註に「負類證文、古き負目(おひめ)の日記などなり」、明曆本註に「負累證文とは、公方私隱れもなき文なり」)

ぶゐるね 部類【名】部わけの種類。

ぶゐるね-げんえふわかしふ 部類現葉和歌集【名】[書]せんざいくるゐだいわかしふ(撰玉類題和歌集)に同じ。

ふるゐ-ど 古井戸【名】古き井戸。年經て荒廢せる井戸。ふるゐ。蕪村「古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし」

ぶるゐ-わけ 部類分【名】部類によりて、區別すること。ぶわけ。

ふるゐなな 古女【名】古き女。老いたる女。源氏「見たまひ馴れたる人とては、かの山里のふる女ばらなり」

ふれ 觸【名】㊀政府より、人民に廣く告げわたすこと、又その文書。布令。布達。狂言(仁王)「上の山へ、天から、貴い仁王がお降(くだ)りなされた。何事もよう叶ふと、ふれを廻してやらう程に」㊁まへぎやうじ(前行事)に同じ。

ふれ-あそび ふれ遊【名】立ち添ひ遊ぶことも、かなたこなたに遊ぶこととも、又たはぶれあそび(戲遊)の誤ともいひ、又ふれ(觸廻る)に同じ。和合人「諸方觸れあるきましたせるか、憚ながら、足の裏が大分痛みます」

ふれ-あるく 觸歩行く【動四自】ふれまはる(觸廻る)に同じ。

ぶれい-こう 無禮講【名】貴賤上下の差別なく、一座になりて、酒宴など催すこと。隨意講。(愚勸講に對して)太平記「能く能くその心を窺ひ見んために、無禮講といふ事をぞ始められける」一代男「或時は裸相撲、生絹(すずし)の腰絹をさせて、白はだへ、き黑き所も見すかして、不禮講」

ぶれい-もの 無禮者【名】無禮なる人。

ふ-れう 不了【名】㊀終りとならざること。

ふれうけん 不料簡・不了簡【名】よこしまなる料簡。よからぬ考。ふこころえ。不量見。「擲(なげう)ち切ったのを小指に入れる不料簡」八笑人「不了簡な事だ」「じ。

ふれえ(英Pulley)【名】せみ(蟬)[二]に同じ。

ふれえき 制動機(英Brake)【名】せいどうき(制動機)に同じ。

ふれおくる 觸送る【動四他】告げ知らせ遣る。太平記「四國におはするに觸れ送って、その勢(イキホヒ)を呼び越し」

ふれおとす 觸落す【動四他】過ちて、その者に限りて、告げ知らせず。鶏鶴合戦「御兩所へはさばかり申し入れて候ふを、使者觸れおとし申し候」

ふれがき 觸書【名】廣く告げ知らする文書。俗曲「初戀千種の濡事」「此方へよこせともぎ取って、えへん、初戀千種濡(ハツコヒスヂ)など、えへ、何の事ぢや、淨るりの觸書だ」

ふれがしら 觸頭【名】徳川時代に、寺院社家を、前者は、その宗内より、後者は、最寄の神社中より特定して、寺社奉行乃至地頭の發令、その他の事故あるごとに、遺漏なく取り次ぎて傳へ、又、寺社よりの訴訟を取り次ぎて申し出づる任務を負はしめしもの。「衆(シユウ)」。

ふれくち 觸口【名】注進の事に從ふ走れ込みたること。

ふれこみ 觸込【名】觸れ込むこと。

ふれこむ 觸込む【動四他】豫め告げ知らせ置く。前觸をなす。

ふれした 觸下【名】觸頭に屬して、ふれを受け取る人。

ふれじょう 觸狀【名】廣く告げ知らする書狀。觸れ廻す文書。ふれぶみ。廻狀。

西曆五一二九年、第二回スパイエル(Spyer)の國會にて、舊教派諸侯の後援により新教派の諸侯を威厭せんと試みしより、新教派の諸侯及び自由市の熟議の末、國會の決議に對して、連署せる抗議書を提出せしに本づく』しんけう(新教)に同じ。

ふろてまへ 風爐手前【名】茶湯(ヂャ)にて、四月の初より十月の終までの間、風爐にて點茶する手前。ろびらき(爐開)・ろふさぎ(爐塞)參照。

飛行機のにいふ)

ふろまいど(英Bromide)【名】[一][化]『ふろむ(臭雜誤)を見よ』臭素と鹽基との化合物。[二]ふろまいどしゃしん(ブロマイド寫眞)の略。

ふろまいどし ブロマイド紙(英Bromide Paper)【名】臭化銀乳劑製の印畫紙。感光性著しく強く、又、燒附(ヤキツケ)の後、鍍金(メッキ)によらず、現像によりて、畫を製す。他種の印畫紙と同樣に、原板と接觸

ふろりん(英Florin)【名】[一]英國の銀貨の一。二シリングに當る。[二]埃太利(スヰス)・和蘭(オランダ)等の貨幣の一。我國の八十一錢前後に當る。ぐるでん。

ふろれたりあ(佛Prolétariat)【名】ふろれたりやに同じ。

ふろれたりああと(英Proletariat)【名】ふろれたりやあとに同じ。

ふろれたりや(佛Prolétariat)【名】職工・勞働者等、財産なく、最下層に位する階

ぶろ(ろ)の一。監臨の官吏が、部下の賄賂を受けても、法を枉げずして、處斷したるもの。(枉法贓に對して)

ふわく 不惑【名】[一]まどはぬこと。[二]『論語の爲政篇に「四十而不惑」とあるに本づく』年齡四十歳の異稱。

ふわけ 腑分【名】かいぼう(解剖)に同じ。[徳川時代の語]「じ。

ぶわけ 部分【名】ぶるわけ(部類分)に同じ。

ふわたり 不渡【名】[一]受け取るべきも

(ろ ふ)

相撲(スマヒ)興行の前日に當りて、市中を呼びらし歩く太鼓。昔は、興行場不完全にて、雨天には、臨時に休業せざるべからざりしため、興行の前日ごとに、觸太鼓と共に、翌日の興行及び取組などを告げ歩かしめたり。「猛く威力あること。

ぶれつ 武烈【名】猛くいさましきこと。

ぶれつてんわう 武烈天皇【名】[人]第二十五代の天皇。御名は小泊瀬稚鷦鷯(ヲハツセワカサヽギ)。仁賢天皇の皇長子。御母は春日大娘(カスガノオホイラツメ)。皇女。在位八年(紀元一一五九年—一一六六年)。卽位の八年崩ず。壽五十七とも、又、五十八ともいふ。

ふれてれなし 降照無【名】晴雨にかかはらぬこと。小町踊「川音はふれてれなしの晴雨かな」

ふれながし 觸流【名】ふれながすこと。

ふれながす 觸流す【動四他】ふれわたす(觸渡す)に同じ。諸藝太平記「獄中を、殘なく、一一次第に觸れ流せば」

ふればう 觸坊主【名】觸れ知らする役を勤むる坊主。和合人「ぼくぼく來る道心者は、木魚講の觸坊主」

ふれーばふ 觸ればふ【動四自】觸る。さはる。接近す。ふらばふ。「古語」源氏「少しもよづきてあらせんと思はん女子持たらば、同じくかの人のあたりにこそはふればはせまほしけれ」同「香のかをりにふればひたまへる御けはひにや」

ふれふ 不獵【名】[一]狩獵に、獲物の少きこと。[二]漁業に、獲物の少きこと。しけ。「同じ。

ふれぶみ 觸文【名】ふれじゃう(觸狀)に同じ。

ふれまはる 觸廻る【動四自】廣く告げ知らする。ふれぶみ。廻狀。

ふれーまへ 觸前【名】言ひふらす口まへ。「ふれまへは大層だが」「やむに同じ。

ふれみあむ(英Premium)【名】[商]ふれみ

ふれみんぐのきそく フレミングの規則【句】[理]『英Fleming's law』電流の方向と磁力線と導線の運動の方向との三者の關係を規定せるもの。右手の規則として、導線が磁力線を切る時、導線中に生ずる感應電流の方向に關する規則と、左手の規則として、電流を荷ふ導線の、磁力線の存する處にて起る運動の方向を示すものとあり。前者は、右手の拇指、食指及び中指を互に直角をなすやうに向け、食指を磁力線の方向とし、拇指の方向に導線を運動せしむる時、導線に生ずる感應電流は中指の示す方向をなすといふもの。又、後者は、左手の拇指、食指及び中指を互に直角をなすやうに向け、食指を磁力線の方向、中指を電力の方向とする時は、これを荷ふ導線は、拇指の方向に運動する力を受くといふもの。

ふれみやむ(英Premium)【名】[商]『原語は、保險料・打歩(ウチブ)等種種の意義をも有す』株式又は社債を額面以上にて引き受くる場合の、その超過金額。會社の事業有望なる時、又は社債の利廻(マハリ)有利なる場合に起る現象にして、會社は、その事業有望にして、多くの應募者ありと見込む場合には、プレミヤムの最小額を指定して、株式を賣り出すことあり。而して、プレミヤムは、第一回の株式拂込と同時に拂ひ込ましむるを要し、又、法定準備金が資本の四分の一に達するまでは、法定準

ふれんぞくーりやう 不連續量【名】[數]『英Discontinuous quantity』一單位より少き量にては、增しも減じもするを得ざる量。例へば、人數など。

ふれんどーは 普連土派(英Society of Friends)【名】[基]くええかあしゆう(クエカア宗)に同じ。

ふれーわたし 觸渡【名】ふれわたすこと、又ふれわたしたること、又その事柄。ふれながし。布告。

ふれーわたす 觸渡す【動四他】廣く行き渡るやうに告げ知らす。ふれながす。

ふれをりがみ 觸折紙【名】『當時は、折紙に書せしよりいふ』ふれじゃう(觸狀)に同じ。「足利時代の語」

ふーろ 風爐【名】茶湯(ヂャ)にて、席上に据ゑ、釜を掛けて、湯を沸すに用ふる爐。銅・鐵・陶・磁等にて、鉢形に製し、緣の一方を缺きて、風を通ぜしむ。古は、四季の別なく用ひたれど、中世以降、圍爐裏の行はれてより、多くは、四月より九月までのものとなれり。ちゃぶろ。茶爐。三職人歌合「火鉢寶、風爐火鉢ぐわとう釜桶水こぼしよき商とならの土かな」和合人「夏は風爐ではござりやせんか。ええ、それやあ、流儀・流儀で、風爐も使ひやすが、今日は爐さ」「じ。

ふーろちゃ(風爐茶)【句】風爐の茶湯(ヂャユ)【句】前條に同じ。

ふゐり 歩詣【名】ふゐり(歩行)に同じ。保元

ふゐね 怖畏【名】ゐふ(畏怖)に同じ。「關白殿、さておはしまさば、御身に於ては、何の御怖畏かあるべきに」「榮花

ふゐね 部位【名】全體の一部としての位

ぶゐね 無爲【名】㊀する事の無きこと。働かずに、日を送ること。むゐ(有爲)に對して)㊁自然に任せて、人爲をつとめぬこと。むゐ。㊂變事の無きこと。無事。平穩。むゐ。東鑑「世上屬二無爲一之後」無爲の化【句】治者の德に化せられて、諸種の施設無くても、能く天下の治まること。

ぶゐね 武威【名】猛く勇ましきこと。猛き勢。威武。

ふゐねしようけうしゆう 普爲乘敎宗【名】[佛]ほつさうしゆう(法相宗)に同じ。

ふゐふゐけう 回回敎【名】まほめつとけう(麥哈默敎)に同じ。

ふゐゐん 府尹【名】㊀支那にて、府を治むる長官。㊁朝鮮の各府に置かれ、その行政事務を處理する地方官。㊂ふちじ(府知事)の雅稱。

ぶゐゐん 部員【名】部の名稱ある部局の職員。部長をも含めていふ場合と、部長以外を指す場合とあり。

ぶゐゐい 武衛【名】『支那にて、魏の文帝の時、始めて、武衛將軍を置き、唐書に武衛上將軍の名見えしによりていふ』ひやうゑ(兵衛)の唐名。

ぶゐゐいいちらうざゑもん 武衛市郎左衛門【名】[人]武衛流砲術の祖。名は義樹。但馬國高野の人。砲術を好み、七流に通ず。元祿九年歿す。

ぶゐゐいかうね 武衛校尉【名】ひやうゑのじやう(兵衛尉)の唐名。

ぶゐゐいちやうし 武衛長史【名】兵衛尉(ヒヤウヱノジヨウ)の唐名。

ぶゐゐいりう 武衛流【名】ぶゐゐいちらうざゑもん(武衛市郎左衛門)を見よ。

ぶゐゐいろくじ 武衛錄事【名】兵衛府の志(サク)の唐名。

ふゐつ 鉄鉞斧鉞【名】『禮記の王制篇に「諸侯賜二弓矢一然後鉄征、賜二鉞鉞一然後殺」、左傳の昭公四年の條に「將レ鑿二慶封一、貢二之斧鉞一」とあり』をのと、まさかりと。古、支那にて、人を刑するに用ひ、出征の將軍は、天子より賜はりて、生殺の權を任せられし義を示したり。太平記「身、鉄鉞の罪に當ることを恐る」

ふゐん 赴援【名】現處に至りて援(タス)くること。たすけにゆくこと。「と。

ふゐん 扶援【名】側より力を添ふること。

ぶゐんりよ 無遠慮【名】遠慮せぬこと。

ふをう 婦翁【名】嫁の父。妻の父。岳父。

ふをとこ 夫男【名】人足の男。人夫。盛衰記「夫男を召し留めて」

ふをとこ 不男・無男【名】容貌の醜き男。無氣量(ブキリヤウ)なる男。和合人「かうしやべるのを、醜で聞くと、だまってゐる奴(ヤツ)は、みんな不男のやうだ」

ふをん 不穩【名】おだやかならぬこと。

ふをんたう 不穩當【名】穩當ならぬこと。「無氣量なる女。

ふをんな 不女・無女【名】容貌の醜き女。

ふをんぶんしよ 不穩文書【名】おだやかならぬ文書、即ち國體を危險ならしむるが如き文書。

ふゐ 附【字源】平假名ゐは、漢字「反」(漢音ヘン)の略體に出でたるならん。「邊」(訓へ)の之繞(シンニユウ)を取りたるなるべしとも、「へ」(漢音フツ、呉音ホチ)より出でたるべしとも、「ノ」(漢音ヘツ、呉音ホチ)・「へ」二字の合字なるべしとも、「返」(漢音ヘン)の略體なるべしとも、又、「部」(訓へ)の旁の一部なるβの草體より出でしなるべしともいひ、何れとも定めがたく、變體平假名ゑは「遍」(漢呉音共にヘン)の草體、ゑは「篇」(漢呉音共にヘン)の草體、ゑは「偏」(漢呉音ヘン)の草體、ゑは「邊」の草體、ゑは「倍」(漢音ハイ)の草體、ゑは「蔽」(漢音ヘイ)の草體、ゑは「幣」(漢呉音共にヘイ)の草體より出で、ゑは「舩」(訓へ)か「辨」(呉音ベン)かの草體より出でしなるべしといふ。片假名へは「部」の旁の略體、又、萬葉假名としては、清音には、前記「反」・「邊」・「返」・「部」・「遍」・「篇」・「偏」・「倍」・「蔽」・「幣」・「弊」・「舩」・「閉」・「蔽」・「蔽」・「幣」・「弊」・「陛」・「平」・「俾」・「鞞」・「音」・「倍」・「陪」・「拜」・「俳」・「杯」・「沛」・「珮」・「杯」・「背」・「覇」・「弁」等、字音に據れるもの、又、「戸」・「重」・「方」・「經」・「瓮」・「甕」・「甑」・「蹤」・「綜」・「畔」・「隔」・「上」・「家」等、訓を取りたるものあり。濁音には、「倍」・「辨」・「便」・「謎」・「聲」・「別」・「毎」等を用ひ、又、清音の「弊」・「陪」・「部」・「邊」等を濁音の に用ひたる例もあり。而して、字音を取りて、清音の萬葉假名に用ひたる諸字の、支那の原音に於て、何れも、頭首にpを帶びたるは、への古音がpeなりし傍證とするに足るものなり。

本書にては、へとしに掲げた

音pと母音eとの結

附きて發するものにして、その發音の位置・方法及びへとの關係に就きては、はの條下に記ける所を見よ。㊁長音は、へえ・べえ・ぺえと書くとへ！・べ！・ぺ！と書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。㊂一語の中の第二音以下に在るへと助辭へとは、エと發音す。前者の例は、いへ(家)・かへす(歸す)・はらへ(祓)をイエ・カエス・ハラエと發音する類。これ、はが一語の中の第二音以下に於てワと發音せらるると同一の理由によりて、一旦エ(we)と變じたるものの、更にゑがエと發音せらるると同一の理由によりて、エとなりたるなり。㊃一語の中にて、へ・べ・ぺの直下にいの續く時は、通例、相合して、へ・べ・ぺの長音となる。例「へば、へいはく(幣帛)・べい(可い)・さんぺい(散兵)をヘーハク・ベエ・サンペエと發音する類。㊄一語の中にて、へ・べ・ぺの直後にうは又はふの續く時は、相合して、拗長音ヒョオ・ビョオ・ピョオとなる類。

ふろ 風呂【名】㊀ふろれたりやの略。(ぶるに對して)㊁ふろだくしよんの略。[俚語]㊂ふろぢいの略。㊃ふろぐらむの略。

ふろ (英Prostitute の略)【名】女郎。娼妓。

ふろ【助數】ふろせんとの略。ぴい。[俚語]

ふろーあがり 風呂上【名】ゆあがり(湯上)に同じ。續猿蓑 史邦「鶯や野は塀越の風呂あがり」

ふろーしき 風呂敷【名】㊀昔、風呂に入る時、脫ぎたる衣類を包みおき、風呂よりあがりたる時、その上に直りて、衣類を著け、足のしめりを拭ふに用ひし布。一代女「風呂敷の上に直れば、……揚場(アガリバ)の女、近寄りて」㊁『形、前項の物に似たるより云ふ』物を包むに用ふる、方形の布帛。絹

ふろーかげん 風呂加減【名】風呂の湯加減。油斷「お惡ながら入れてこそ見れ(ミレ)

ふろさき・まど 風爐先窓・風爐先窻【名】風呂敷に同じ。

ふろーたき 風呂焚【名】風呂の火を焚くこと、又その人。さんすけ。醒睡笑「風呂たきの我が身は煤になりはてて人の垢のみおとすものかは」

ふろだくしよん (英Production)【名】製作すること、又、製作したる物。(主として、映畫のにいふ)

ふろせんと (獨Prozent の訛)【助數】ぱあせんとに同じ。

ふろだい 風呂代【名】ゆせん(湯錢)に同じ。

ぶをう 無用【名】㊀用ゐざること。用ゐる必要なきこと。㊁用ゐる能はざること。㊂用ゐるを禁ずること。

ぶをうもの 無用者【名】用ゐる能はざる人。

ぶをうもの 無用物【名】用ゐる能はざる物。

ぶをうもの 無用者【名】用ゐる能はざる人。

ぶをうもの 無用物【名】用ゐる能はざる物。

ぶをうもの 無用者【名】用ゐる能はざる人。

ぶをうもの 無用物【名】用ゐる能はざる物。

ぶをうもの 無用者【名】用ゐる能はざる人。

ぶをうもの 無用物【名】用ゐる能はざる物。

ぶをうもの 無用者【名】用ゐる能はざる人。

ぶをうもの 無用物【名】用ゐる能はざる物。